弥生土器編年の遍歴

柳　田　康　雄

Ⅰ．はじめに

筆者は、大学卒業時まで福岡県朝倉地方に居住した。大学は國學院大學文学部に進学したことから４年間は東京都内で過ごしたことになるが、帰省する際には途中下車して近畿地方など各地の発掘現場や資料館でお世話になった。

弥生土器編年は、卒論挿図の「甕棺の型式的変遷」にはじまる（図１）（柳田 1966・2018b）。これは、北部九州の弥生甕棺を当時縄文期とされていた夜臼式から弥生終末とされていた西新町式までを系統的にⅠ期からⅨ期に分類したものである。Ⅰ期が夜臼式、Ⅱ期が板付Ⅰ式、Ⅲ期が板付Ⅱ式、Ⅳ期が城ノ越式、Ⅴ期が須玖Ⅰ式、Ⅵ期が須玖Ⅱ式、Ⅶ期が後期初頭、Ⅷ期が後期前半、Ⅸ期が弥生終末とした。これを公表することはできなかったが、２年後の 1968 年の森貞次郎の伯玄式（前期後半）・金海式（前期末）・城ノ越式（中期初頭）・汲田式（中期前半）・須玖式（中期中頃）・立岩式（中期後半）・桜馬場式（後期初頭）・三津式（後期中頃）・日佐原式（後期末）、1972・1973 年小田富士雄の「入門講座・弥生土器・九州」、1979 年橋口達也の「甕棺の編年的研究」などその後の多数の甕棺編年をみて明らかなように、当時の限定された考古資料で今日の弥生早期から古墳早期まで、細部の時期区分を除いて今日まで通用する網羅した弥生甕棺編

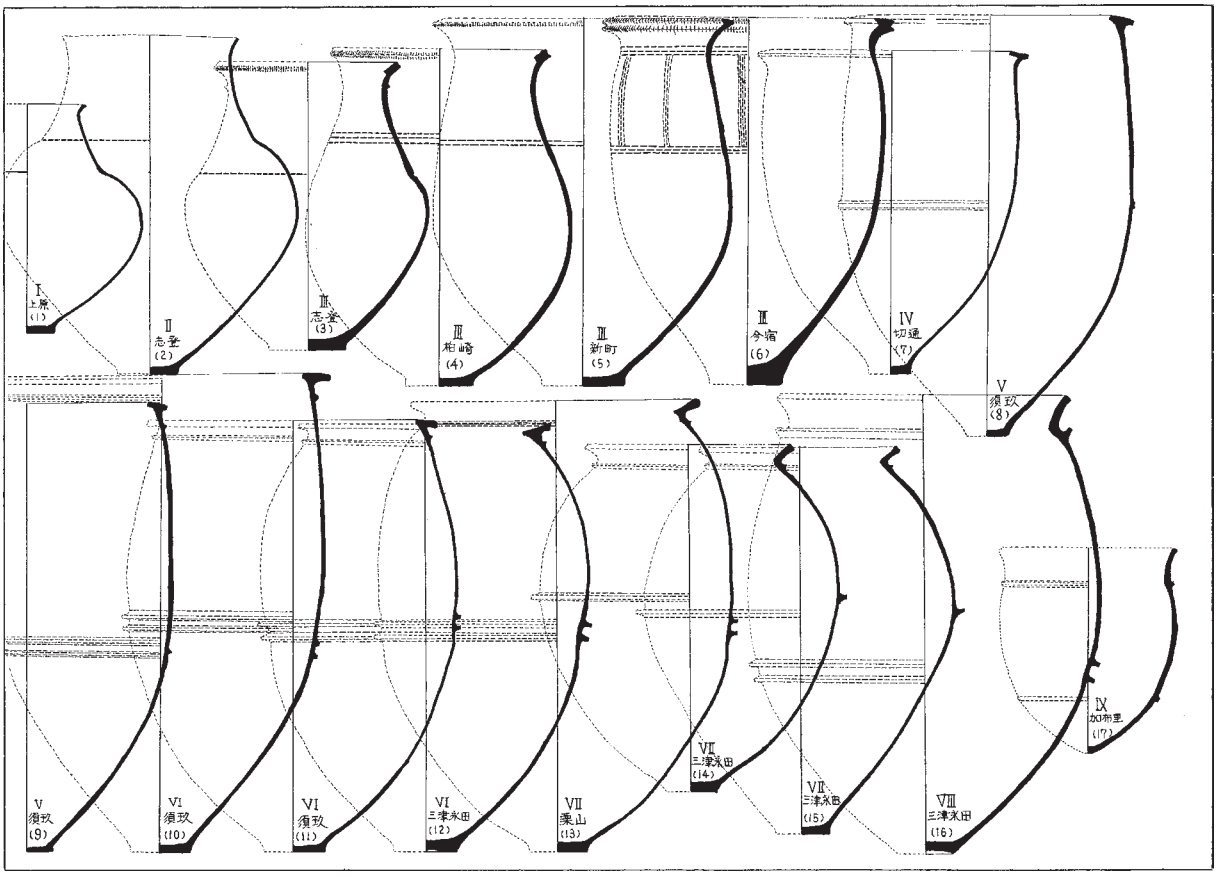


図１　甕棺の型式的変遷図［柳田 1966・2018 b］

年は筆者以外に存在しないといっても過言ではない。

橋口編年は発表後広く支持されているが、弥生前期後半（板付Ⅱ式）からの編年であること、イト国以外の北部九州では後期後半の大型甕棺が存在しないこと、新資料も増加し金海式は前期末ではなく中期初頭であることなどから再三批判している（柳田 1987a・1995・1997・2000・2002a・2002c・2003・2012・2013・2014）。

卒論の甕棺編年は、「ナ国の甕棺編年」に反映させている（柳田 2003）。

そこでここでは、筆者の弥生土器編年の遍歴を紹介して、今日の列島内と朝鮮半島南部を含めた東西の併行関係を述べることにする（表２）。

Ⅱ．弥生土器編年

（１）弥生時代のはじまり

福岡県糸島市に所在する三雲・井原遺跡群は、1974年度から福岡県が本格的に発掘調査を開始した。1980年からその調査報告書の刊行を開始し、その概要を公表した。三雲・井原遺跡群の王墓からは当該期には貴重な国際的な出土品だけではなく、集落からも国際的装身具や列島内からの外来系土器が出土している。王墓から出土する大型・中型前漢鏡やガラス璧などは当該期の楽浪郡には存在しない。三雲南小路王墓１号棺に前漢初期の彩画鏡、前漢中期の雷文鏡、前漢後期の異体字銘帯鏡が合計 35 面副葬され、同一墳丘内の２号棺には伝世マメツした星雲文鏡１面を含む小型異体字銘帯鏡 22 面以上が副葬され、１・２号棺合計 57 面以上の前漢鏡が副葬されていたことになる（柳田 1985・2002a・2013）。これらの前漢中期以前の前漢鏡には明瞭なマメツ痕跡が観察できるものがあり年代を限定できないものも存在するが、大多数の前漢後期異体字銘帯鏡にはマメツ痕跡がなく限定された短期間に入手できたことが明らかである。異体字銘帯鏡の中には同范鏡が存在し、その分有関係も判明している（柳田 1985・2017a）。

弥生時代のはじまりについては、『甘木市史』の原始編を担当した際に、母校の朝倉高校に収蔵されている馬田上原遺跡において採集された完形品の有柄式磨製石剣２本が夜臼式土器を伴っていることを確認したことに始まる。「原始」編では有柄式磨製石剣を型式分類し（柳田 1982b・2009a・2013・2014a）（表１）、玄界灘沿岸に流入しているのは中国戦国時代の有節柄式銅剣を模倣した有節柄式磨製石剣以後であるとした（柳田 1982b）。有節柄式銅剣が遼寧省や朝鮮半島に分布するのは戦国晩期とされていたこと、朝倉市中寒水遺跡で発見された有節柄式銅剣が中国式銅剣そのものではなく遼寧省から朝鮮半島で模倣された銅剣であることを初めて提唱できたことなどから弥生時代のはじまりを紀元前３世紀頃とし

表１　磨製石剣型式分類表

大分類	中分類	小分類	細分類	分類記号	実　例
A　有茎式	無段式（Ⅰ）	有樋式（ａ）		AⅠa	大坪里
		無樋式（ｂ）		AⅠb	鳳陵里・千尋藻
	両抉式（Ⅱ）	無段式（ａ）		AⅡa	良長里
		有段短茎式（ｂ）		AⅡb	牛山里・菜畑
B　有柄式	有段柄式（Ⅰ）	有樋式（ａ）		BⅠa	顔子洞９号
		無樋式（ｂ）		BⅠb	顔子洞１号
		退化式（ｃ）		BⅠc	東部里・梅白
	有節柄式（Ⅱ）	有樋式（ａ）		BⅡa	玉石里
		無樋式（ｂ）	有段広身式（1）	BⅡb1	欣岩里
			有段細身式（2）	BⅡb2	南田里・垣生
			無段細身式（3）	BⅡb3	上紫浦里・金幕
	無段柄式（Ⅲ）	通有式（ａ）		BⅢa	松菊里・加志々
		棒状柄式（ｂ）		BⅢb	黄石里７号
		誇張式（ｃ）		BⅢc	茂溪里・太田原丘

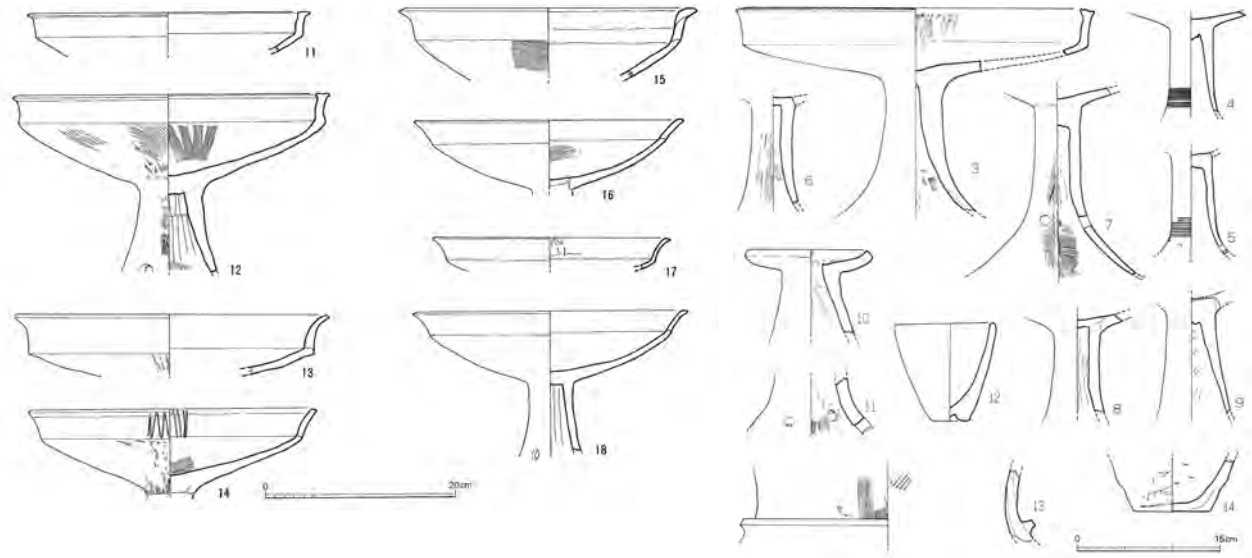


図２　三雲・井原遺跡の瀬戸内以東の外来系高坏等（1/8）［柳田 1981、柳田・小池編 1982］

ていた（柳田 1982b）。その後も中国有節柄式銅剣と朝鮮有柄式磨製石剣の型式分類を補強して（柳田 2009a・2014a）、現在では弥生時代を 500 年遡らせる説などが横行しているが、有節柄式銅剣の中国での出現が前 500 年前後であること、遼寧省や朝鮮半島にそれが及ぶのが戦国晩期であること、古式遼寧式銅剣を模倣した有柄式磨製石剣は玄界灘沿岸に流入していないことなどから弥生時代のはじまり、すなわち弥生早期を紀元前 400 年頃からとしている（柳田 2004a・2004b・2009a・2014a・2014b）（表２）。

弥生前期については、指標とされている板付遺跡の行政発掘調査報告書が長年刊行されなかったことから、板付Ⅰ式・板付Ⅱ式土器の共伴関係が曖昧であり、周辺遺跡の出土土器との間で編年に齟齬をきたしていた。典型的な板付Ⅰ式土器（山崎 1980）とされていた彩文小型壺は、事実として比恵遺跡など周辺遺跡では板付Ⅱ式の新段階であり、板付遺跡には良好な板付Ⅰ式土器の形式がそろわないことから様式が成立せず、むしろ糸島地方に弥生前期古段階資料が豊富であることを指摘した（柳田 2016・2018d）。

（２）弥生中期土器編年

弥生中期全般の土器編年は現在のところ公表していないが、中期のはじまりと中期末の土器編年と年代は甕棺編年と関係することから再三論じている（柳田 1981・1982a・1982b・1983・1987b・1995・2000・2002a・2002c・2012a・2012b・2013・2014a・2014b）。弥生中期

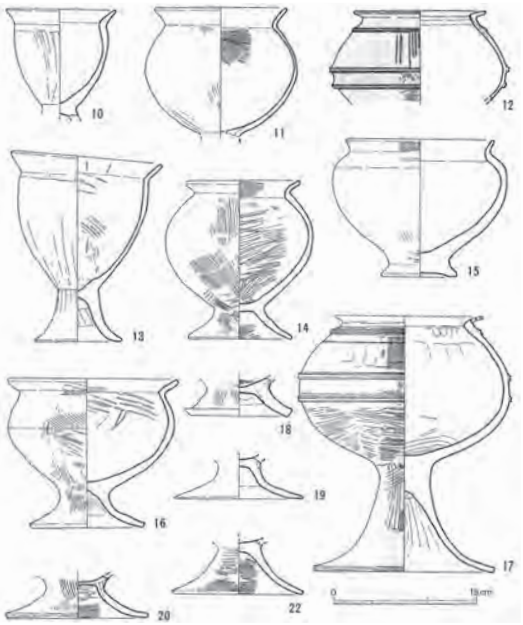


図３　三雲・井原遺跡番上地区の脚台付土器（1/8）
［柳田・小池編 1982］

のはじまりは、森貞次郎（1968）の甕棺編年前後から初期青銅武器が前期末甕棺に伴うことが一般的な考えであったが、拙稿では中期初頭とするように提唱した（柳田 1981 ～）。以後初期青銅武器を副葬する金海式甕棺を前期末・中期初頭と曖昧な表現をする研究者も存在するが、いまだに前期末とする研究者が存在する（後藤 2015・武末 2020）。

中期末は三雲南小路王墓の発掘調査以後、多量の副葬品を伴う甕棺が中期末であること、１号棺副葬の最新の異体字銘帯鏡が前漢末であること、最新の異体字銘帯鏡はイト国王の死後に金銅四葉座金具やガラス璧などの葬具と共に前漢から下賜されたと考えることから、中期末

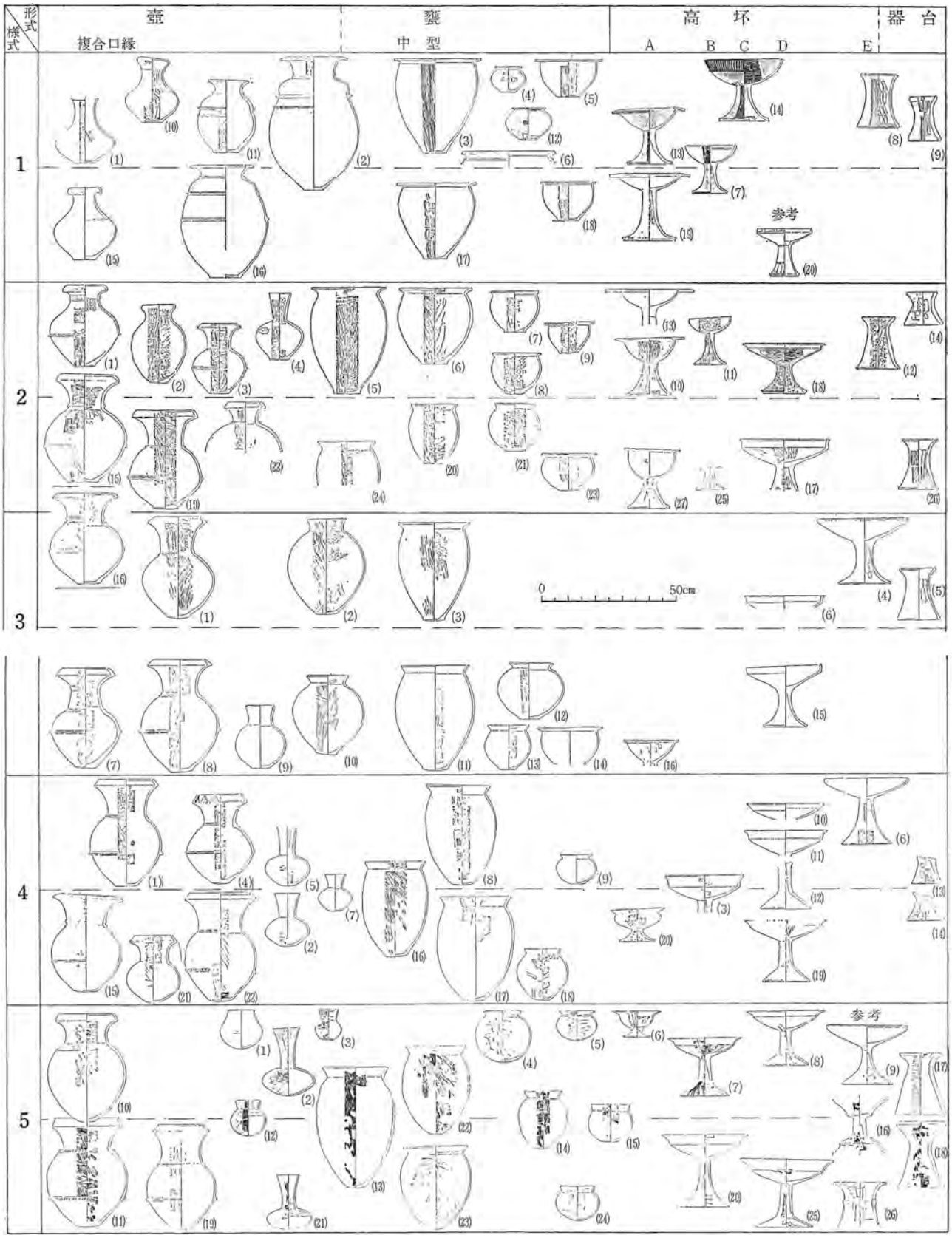


図４　北部九州の弥生後期土器編年［柳田 1987 a］

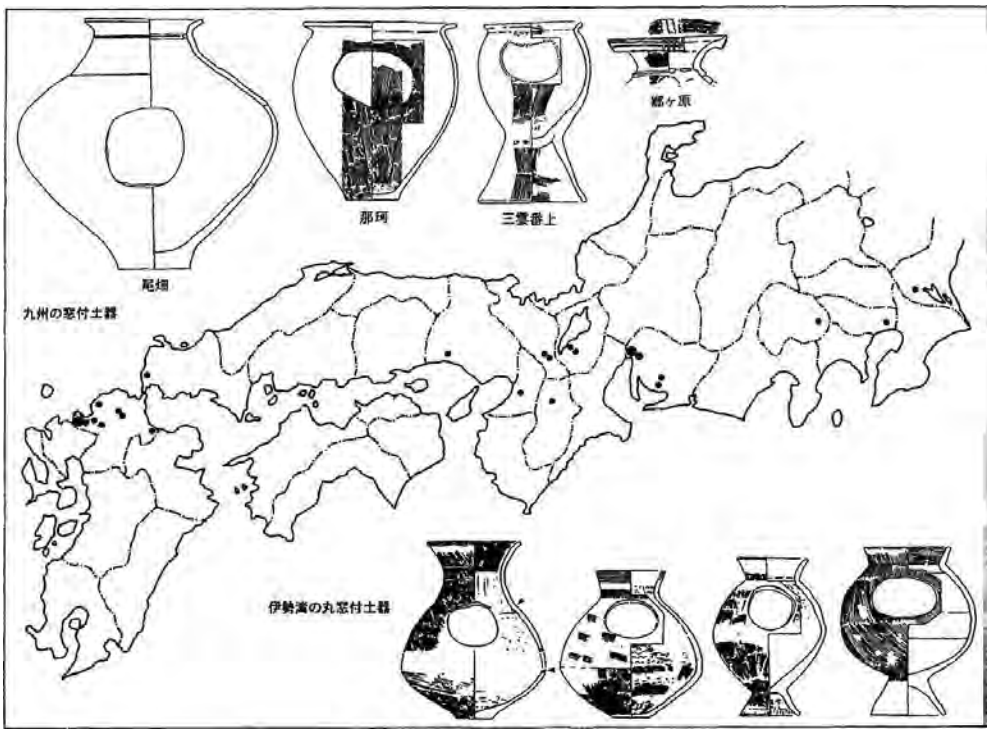


図５　窓付土器分布図［柳田 2002a］

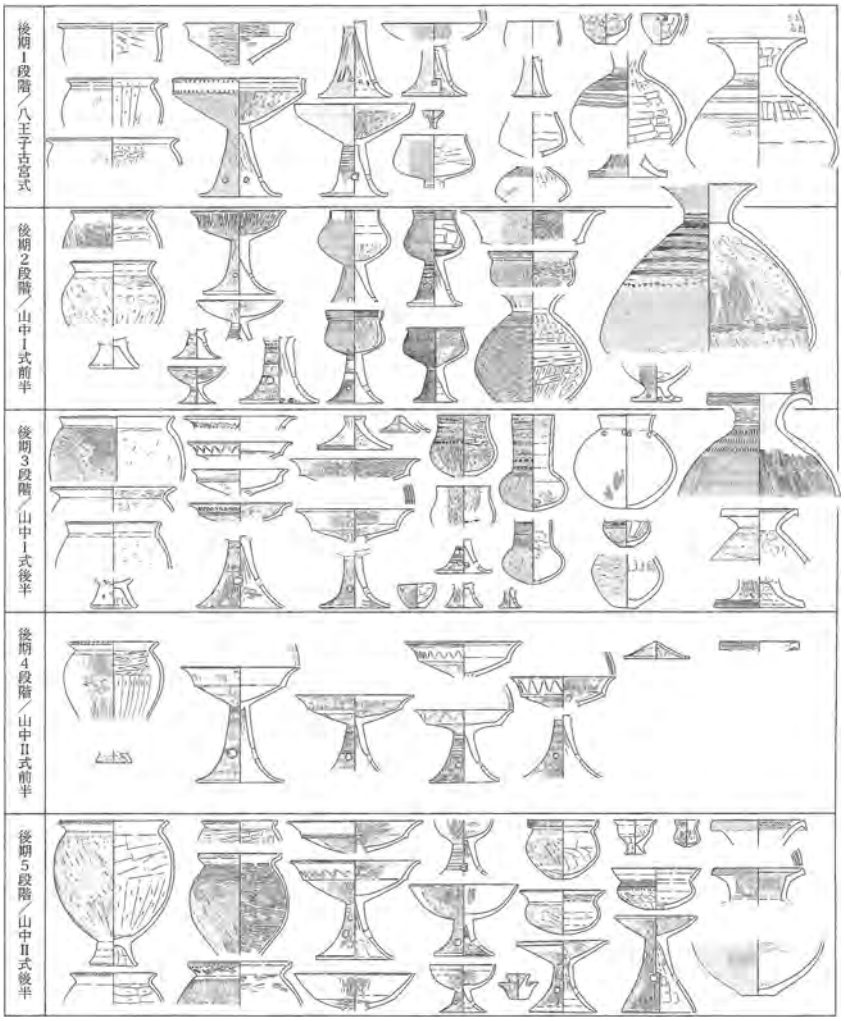


図６　朝日遺跡の弥生後期土器編年（1/15）［赤塚編 2009］

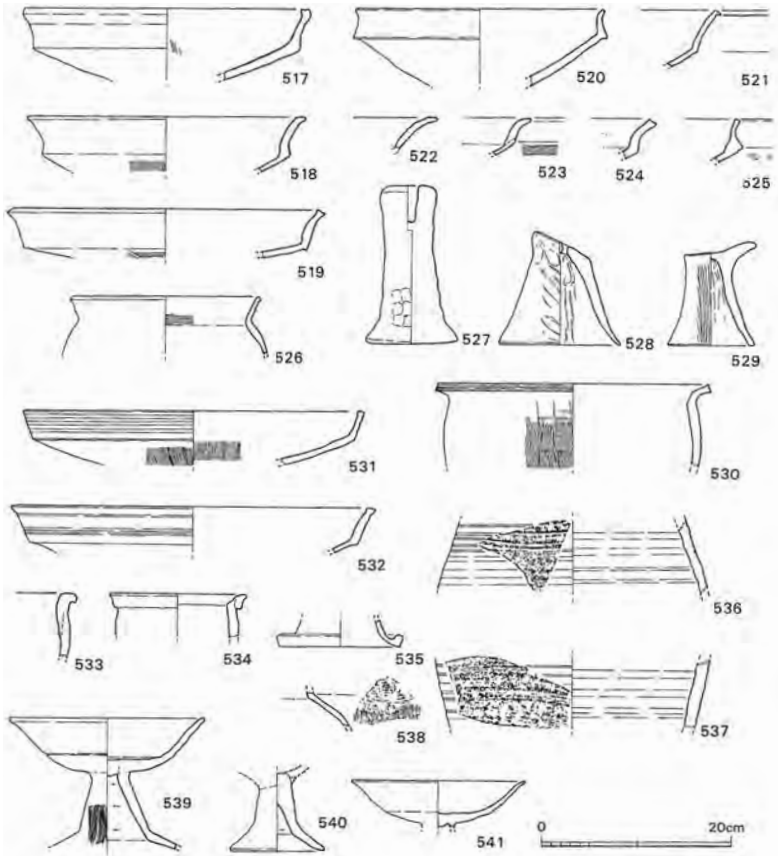


図７　御床松原遺跡外来系土器等（1/8）［井上編 1983］

が前漢末にあたる前１世紀末と考えるようになった。それまでは『農耕文化の生成』で唱えられたように、中国文物が北部九州の甕棺墓に副葬されるのは中国の年代に 100 年プラスするのが一般的であった。三雲南小路王墓に副葬されている前漢鏡は、前漢後半の 33 面の異体字銘帯鏡には一切マメツがなく、伝世の痕跡がないことも根拠にしている（柳田 1985・2002a・2002b・2002c・2003・2012・2013・2014a）ので、高倉洋彰（1978）や橋口達也（1979）のように単に中国での漢鏡編年を根拠にした編年とは一線を画する。

（３）弥生後期土器編年

弥生後期土器編年は、森貞次郎によって 1955 年に３区分、1966 年に高三潴式・下大隈式・西新式とされていた。これらは採集された土器資料であることから、三雲・井原遺跡群の発掘調査を担当した筆者は、ここで得られた一括性に富んだ資料を選定して様式設定を論じた（図４）（柳田 1987a）。弥生後期前半には中期後半の須玖系の丹塗土器が継承されるが、後期中頃になると外来土器の影響を受けて高坏を主として変革される（図２）。弥生終末とされていた西新（町）式は、三雲・井原遺跡群の調査結果近畿地方の庄内・布留式と共伴する事実を確認したことから、これらを古墳早期の土師器として区別した（柳田 1982a・1989・1991・1994）。ところが、未だに高三潴式・下大隈式・西新式を使用する研究者が絶えない実態がある（武末 2020）。

Ⅲ．弥生土器編年と列島の併行関係

三雲・井原遺跡群からは、列島内各地の土器も集中して出土している。特に三雲番上地区などの土器群では、漢式土器や半島系土器以外に伊勢湾沿岸以西の土器が集中して出土している。それは窓付台付甕・高坏・凹線文系土器などである。これらのうち高坏は北部九州の高坏に変革をもたらし、弥生後期中頃以後主流を占めるようになる（柳田 1982a・1987a・1995・1997・2002a）。これらの多くの外来系土器が糸島市御床松原遺跡からも多数発見され（図７）（井上編 1983）、東西間の交流窓口であることが判明した（柳田 2021a・2021b）。

筆者は北部九州と伊勢湾沿岸地域との関係を 2002 年に述べたことがある（図５）。これはイト国を中心とする地域に分布する窓付土器と伊勢湾沿岸の円窓付土器が類似することから、両地域の「密接な関係」を述べたが、いまだに無視されている（柳田 2002a）。『日本土器事典』（1996 雄山閣）の「東海地方の弥生土器」を見ると、「山中式土器」は「尾張地方における弥生時代後期前葉」に位置付けられている（安達 1996）。山中式土器の中には、北部九州の後期後半土器の高坏・長頸壺など類似する形式が多く、特に高坏は前型式の八王子古宮式段階からイト国に流入している（柳田 2002a）。『日本土器事典』段階の山中式土器には、北部九州では後期初頭の丹塗蓋付短頸壺も含まれていることから古く位置付けられた可能性があるが、丹彩であることが前型式の高蔵式土器と区別されたのだろう。

2009 年の愛知県『朝日遺跡Ⅷ』の報告書では、弥生

中期の高蔵式と後期２段階山中式Ⅰ式の間に後期１段階として八王子古宮式が挿入されている（赤塚編 2009）。この段階から丹彩土器が出現し、ワイングラス形高坏が加わっている。東海地域でのワイングラス形高坏の出現の経緯を承知していないが、北部九州の丹塗高坏には椀形を呈するものも存在する。いずれにしろ、東海地方の弥生中期と後期の区分は、再考の必要がある。

北部九州と東海地方との弥生土器の併行関係を表にしたのは、管見であるが永井宏幸と久住猛雄であろう（永井 2013・久住 2015）。久住は、北部九州の後期初頭・後期前葉と濃尾（東海西部）の八王子古宮式を併行させていることから、自前の編年を擁護しつつ地域の主張を尊重していることになる。

朝日遺跡弥生土器編年（赤塚編 2009）で貝田町式２期土器に須玖式系高坏が流入し、高蔵式１期になると太めの短脚であることから、拙稿（1987）の後期前半期併行であり、甕も同様である。したがって、朝日遺跡編年の弥生時代後期の編年（八王子古宮式・山中式）は、1987 年の柳田編年の弥生後期２期新段階以後に併行することになる（柳田 2021a・2021b）。山中式に存在する高坏・長頸壺・台付甕などはイト国では、弥生後期後半に位置付けられる（柳田 1987）。椀形高坏は、糸島市上鑵子遺跡溝で後期後半土器と共伴している（上野編 1977）。ここでは台付甕も共伴していることから、伊勢湾沿岸だけではなく台付甕が存在する地域との併行関係も推測できるようになる。台付甕は、イト国内の三雲・井原遺跡群（図３）や御床松原遺跡で多数出土しており（柳田 2021b）、北部九州において少ない形式だけに時期と交流関係が重要になる。御床松原遺跡では、12 号住居跡から多数の古墳早期土器と共伴して台付甕と長頸壺が出土している（図８）。長頸壺は三雲・井原遺跡群の銅鏡・鉄剣・玉類を副葬する寺口墳丘墓祭祀溝から外来系高坏多数と台付鉢など北部九州の弥生終末の土器編年で指標とする大型壺・甕など多数の器種と共伴している（小池編 1983、柳田 1987）。すなわち、東海地域編年（赤塚編 2009、久住 2015）と拙稿編年（1987a・1987b・2021a・2021b）では 50 ～ 100 年の齟齬がある。東海地域と北部九州の併行関係を青銅器で述べたことがある。北部九州の巴形銅器と有鉤銅釧は後期初頭に出現するが、東海地域ではなんと中期後半に位置付けられているのである（柳田 2012a・2012b・2014b）。

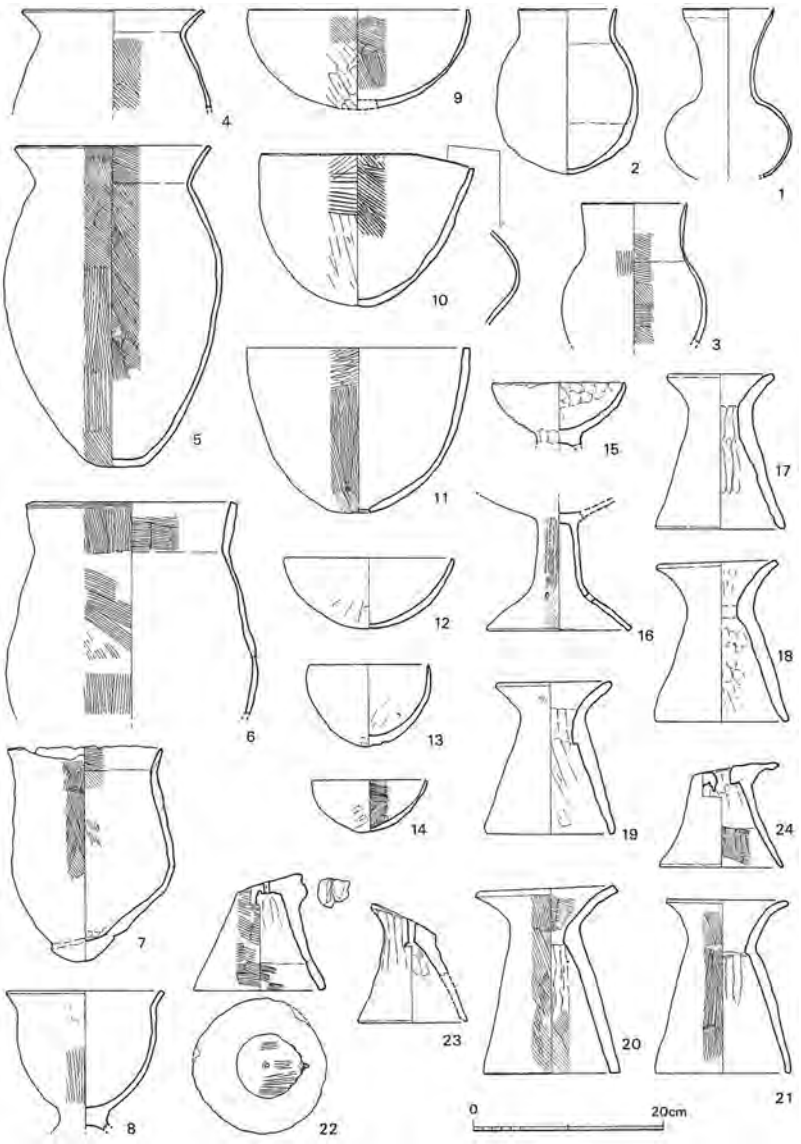


図８　御床松原遺跡 12 号住居跡土器（1/8）［井上編 1983］

須玖式土器由来の赤彩土器は、北陸・中部山岳（長野県）地方にも波及している（図９）（設楽 2013）。設楽博己は、イト国の三雲・井原遺跡群八反田地区土器と栗林１式土器（蓋付無頸壺・注口壺・高坏）を同一図面に掲載しているが、八反田丹塗磨研土器（蓋付無頸壺・高坏）は須玖Ⅱ式新段階（中期末）であり、長野県松原遺

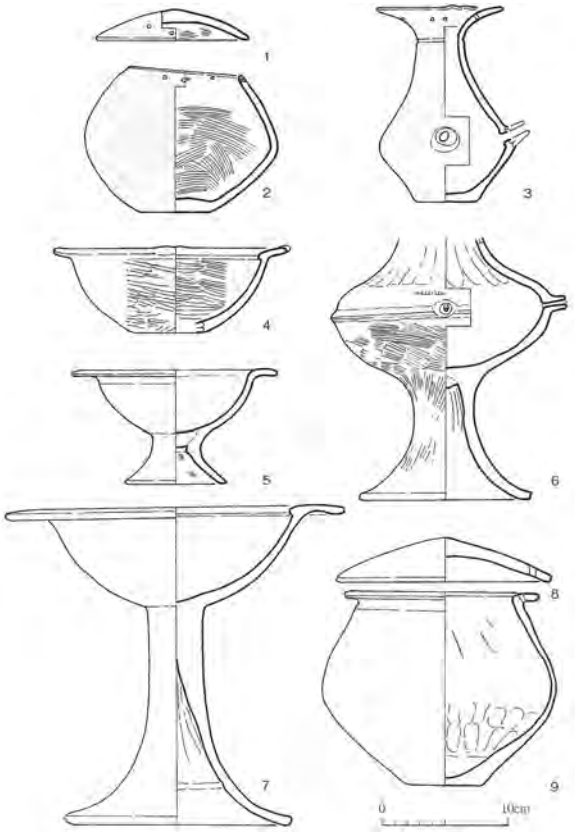


図９　東西の赤彩土器（1/6）［設楽 2013］

跡赤彩土器とは型式差が大きい。同一図面にある吉野ヶ里の脚付き注口壺はイト国由来の後期初頭以後の丹塗土器であり、松原遺跡の注口壺の脚が退化していることから、中期末より相当時期が下ることになる。このことは設楽も予見されている（設楽 2013）。栗林式土器は、『日本土器事典』（笹沢 1996）段階では弥生中期後半でⅠ・Ⅱ式に細分され、設楽が参考にした石川日出志は１～３式に細別している（石川 2002）が、設楽が指摘するように起源は須玖Ⅱ式であるが、時期は下る。

以上のように、列島の南北両沿岸地域に須玖Ⅱ式丹塗土器が波及していることが明らかであり、型式的に退化していることから北部九州とは時期を同列に並べることはできない。

北部九州の弥生文化、特に銅鏡を含む青銅器などの東漸（東伝）は、玄界灘沿岸に王権が出現した中期末以後であり、神庭荒神谷遺跡の銅矛・銅剣・銅鐸の共伴（柳田 2006・2007a・2007b・2009a・2009b・2009d・2010a・2010b・2011b・2011c・2012・2013・2014a・2014b）と常松幹雄（2013）が例示する「弥生土器の東漸」で明らかである。ところが、拙稿で繰り返しているように（柳田 1994・1995・1997・2002a・2002c）弥生時代を近畿中心史観のⅠ期からⅤ期で表示すると前記した土器編年の併行関係の齟齬を具現化することになる（常松 2015）。

近年拙稿で論じている方形板石硯や銅鏡・青銅器などから中期末以後の東伝が時系列で証明できる（柳田 2017a・2017b・2017c・2018a・2019a・2019b・2020a・2020b・2021a・2021b）。

Ⅳ．おわりに

コロナ禍に加え体調不良が重なり大雑把な論説となったが、列島各地の主張が論じられているなかで近年の漢代板石硯の模倣品が漢代と同時期に玄界灘沿岸でも使用されていることが判明したことにより、銅鏡を含む青銅器では伝世することもあり時期が特定できないものもあったが、消耗品の方形板石硯が玄界灘沿岸と瀬戸内以東では 180 ～ 100 年以上の差が存在することが明らかになり（柳田 2017b・2017c・2018a・2018c・2019a・2019b・2020a・2020b・2021a・2021b）、筆者のこれまでに主張してきた弥生時代の年代観が証明できたものと考える。

【参考文献】

赤塚次郎編　2009『朝日遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 154 集

安達厚三　1996「山中式土器」『日本土器事典』　雄山閣出版

井上裕弘編　1983「御床松原遺跡」『志摩町文化財調査報告書』第３集

石川日出志　2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100

上野精志編　1977「上鑵子遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第５集

小田富士雄　1972・1973「入門講座・弥生土器・九州１～６」『考古学ジャーナル』76 ～ 84

蒲原宏行　2013「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』　雄山閣

久住猛雄　2015「「奴国の時代」暦年代論」『開館 25 周年記念特別展　新・奴国展』　福岡市博物館

小池史哲編　1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第 65 集

後藤直　2015「奴国の時代の対外交渉」『開館 25 周年記念特別展　新・奴国展』　福岡市博物館

笹沢浩　1996「栗林式土器」『日本土器事典』　雄山閣出版

設楽博己　2013「東日本の弥生時代社会」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』　雄山閣

高倉洋彰　1978「大形甕棺の編年について」『九州歴史資料館研

表２　北部九州の青銅器からみた土器編年と年代

中国	年代	韓　国	時代	時期	玄界灘沿岸	北部九州編年	遠賀川以東	瀬戸内中部	近畿編年	東海中部	中部高地
春 770- 秋 453-			縄	晩	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代
戦	400ー	可楽里式 欣岩里式	文	期	黒川式	黒川式		津島	滋賀里Ⅳ式		
国	300ー	無文土器時代 先松菊里 松菊里式		早期	夜臼式 1 2	夜臼式 1 2		沢田	船橋式		氷Ⅰ
221ー				前期	板付Ⅰ式 1 2				長原式		
秦		水石里式	弥		板付Ⅱ式 1 2	板付Ⅱ式 1 2 3	板付Ⅱ式 1 2 3	Ⅰ 1 2 3 4	第Ⅰ様式 1 2 3 4	貝殻山式	氷Ⅱ
202ー	200ー									西志賀式	
前			生	中期	板付Ⅲ式 1 2	城ノ越式	下城式	Ⅱ 1 2	第Ⅱ様式 1 2	朝日式	中期前半
漢	100ー	勒島式			須玖Ⅰ式 1 2	須玖Ⅰ式 1 2	須玖Ⅰ式 1 2	Ⅲ 1 2 3	第Ⅲ様式 1 2	貝田町式	
8ー	B.C.		時		須玖Ⅱ式 1 2	須玖Ⅱ式 1 2	須玖Ⅱ式 1 2		第Ⅳ様式 1 2 3 4	高蔵式	古 栗林 中 新
新	A.D.	原		後期	高三潴式 1 2 3	高三潴式 1 2 3	1 2 3 4 5	Ⅳ 1 2 3			
25ー			代								
後	100ー	三						Ⅴ 1 2 3 4 5	第Ⅴ様式 1 2 3 4	八王子古宮式 山中式	吉田
漢		国			下大隈式 4 5	下大隈式 4 5			第Ⅵ様式		古 箱清水 新
	200ー	時									
220ー		代	古	早期	西新式 Ⅰa Ⅰb	西新式 Ⅰa Ⅰb	西新式 Ⅰa Ⅰb	才町 1 2	庄内式 1 2	廻間	
三国			墳		Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa				
265ー				前期					布留式 0 1 2 3 4 5		
西晋 281ー 316ー	300ー	三国時代	時		Ⅱb Ⅱc	Ⅱb Ⅱc	Ⅱb Ⅱc	下田所			
五胡 東晋	400ー		代		Ⅲa	Ⅲa	Ⅲa				

注：北部九州とは玄界灘沿岸以外の福岡・佐賀県と壱岐・対馬をさす。

究論集』４

武末純一 2020「弥生時代日韓交渉を巡るいくつかの問題」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―』

常松幹雄 2013「弥生土器の東漸」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』 雄山閣

常松幹雄 2015「青銅器の生産と流通」『開館 25 周年記念特別展　新・奴国展』 福岡市博物館

橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI　福岡県教育委員会

寺沢薫 2010『青銅器のマツリと政治社会』 吉川弘文館

永井宏幸 2013「円窓付土器からみた地域間交流」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』 雄山閣

森貞次郎 1955「各地域の弥生式土器―北九州―」『日本考古学講座』４

森貞次郎 1966「弥生文化の発展と地域性―九州―」『日本考古学』Ⅲ

森貞次郎 1968「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』 金関丈夫古稀記念委員会

柳田康雄 1966「九州における弥生式甕棺葬の研究」國學院大學文学部卒業論文

柳田康雄編 1980「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』58

柳田康雄 1981「三雲遺跡Ⅱ柿木地区小結」『福岡県文化財調査報告書』60

柳田康雄・小池史哲編 1982「三雲遺跡Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』63

柳田康雄 1982 a「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

柳田康雄 1982 b「原始」『甘木市史』 甘木市

柳田康雄 1983「伊都国の考古学―対外交渉のはじまり―」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』 吉川弘文館

柳田康雄 1985「三雲遺跡　南小路地区編」『福岡県文化財調査報告書』69

柳田康雄 1987 a「高三潴式と西新町式土器」『弥生文化の研究　４弥生土器Ⅱ』 雄山閣

柳田康雄 1987 b「北部九州の国産青銅器と共伴関係」『古文化談叢』17

柳田康雄 1989「朝鮮半島における日本系遺物」『九州における古墳文化と朝鮮半島』 学生社

柳田康雄 1991「土師器の編年―九州―」『古墳時代の研究』６雄山閣出版

柳田康雄 1994「墓からみた後期社会」『シンポジュウム東アジ

アと九州』 日本考古学協会　編
柳田康雄 1995「弥生の諸形式とその時代への疑問」『東アジアの古代文化』85
柳田康雄 1997「二世紀の北部九州」『東アジアの古代文化』92
柳田康雄 2000「平原遺跡」『前原市文化財調査報告書』70
柳田康雄 2000『伊都国を掘る』大和書房
柳田康雄 2002 a『九州弥生文化の研究』 学生社
柳田康雄 2002 b「磨滅鏡と踏返し鏡」『九州歴史資料館研究論集』27
柳田康雄 2002 c「九州から見た併行関係と実年代論」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会研究発表資料集』
柳田康雄編 2003「伯玄社遺跡」『春日市文化財調査報告書』35
柳田康雄 2004 a「日本･朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29
柳田康雄 2004 b「北部九州からみた弥生時代の実年代」『弥生時代の実年代』 学生社
柳田康雄 2006「中国地方の青銅武器」『喜谷美宣先生古稀記念論集』
柳田康雄 2007 a「銅剣鋳型と製品」『考古学雑誌』91-1
柳田康雄 2007 b「卑弥呼を共立したクニグニ」『季刊考古学』100　雄山閣
柳田康雄 2008 a「銅戈の型式分類と生産･流通」『古代学研究』180
柳田康雄 2008 b「弥生時代の手工業生産と王権」『國學院雑誌』109-11
柳田康雄 2009 a「中国式銅剣と磨製石剣」『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』40
柳田康雄 2009 b「青銅器とガラス製品の生産と流通」『講座日本の考古学』5　弥生時代（上）
柳田康雄 2009 c「弥生時代青銅器土製鋳型研究序論」『國學院雑誌』110-6
柳田康雄 2009 d「武器形青銅器の型式学的研究」『月刊考古学ジャーナル』590　ニューサイエンス社
柳田康雄・平島博文 2009「福岡県筑前町東小田峯遺跡出土銅矛土製鋳型」『古代学研究』183
柳田康雄 2010 a「弥生王権の東漸」『日本基層文化論叢　椙山林継先生古稀記念論集』 雄山閣
柳田康雄 2010 b「日本出土青銅製把頭飾と銅剣」『坪井清足先生卒寿記念論集』
柳田康雄 2011 a「佐賀県中原遺跡青銅器鋳型の実態」『古文化談叢』65（3）
柳田康雄 2011 b「青銅器とガラスの生産と流通」『講座日本の考古学5弥生時代上』 青木書店
柳田康雄 2011 c「朝鮮半島における銅戈の鋳造技術」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』5
柳田康雄 2011 d「北部九州製青銅製把頭飾の蝋型鋳造」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』5
柳田康雄編著 2012 a『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』 雄山閣
柳田康雄 2012 b「東日本の青銅器鋳造技術の系譜」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』6
柳田康雄 2013「弥生時代王権論」『弥生時代政治社会構造論』 雄山閣
柳田康雄編著 2013『弥生時代政治社会構造論』 雄山閣
柳田康雄 2014 a『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』 雄山閣
柳田康雄 2014 b「弥生青銅器製作技術からみた東西の併行関係」『2014　アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』
柳田康雄 2015 a「1・2世紀の摩滅鏡・踏み返し鏡・仿製鏡」『古文化談叢』74
柳田康雄 2015 b「板付Ⅲ式土器と城ノ越Ⅲ式土器」『平成 27 年度九州考古学会総会研究発表資料集』
柳田康雄 2016「板付Ⅰ式土器の実態」『平成 28 年度九州考古学会総会研究発表資料集』
柳田康雄 2017 a「福岡県春日市須玖タカウタ遺跡の青銅器鋳造技術」『古文化談叢』79
柳田康雄 2017 b「福岡県筑前町東小田中原遺跡の石硯」『纒向学研究』5 桜井市纒向学研究センター
柳田康雄 2017 c「卑弥呼以前の伊都国の外交」『桜井市纒向学研究センター東京フォーラム「卑弥呼」発見親魏倭王卑弥呼に制詔す―卑弥呼の外交―』 奈良県桜井市
柳田康雄 2017 d「福岡県春日市須玖タカウタ遺跡の青銅器鋳造技術」『古文化談叢』79
柳田康雄 2018 a「伊都国の外交」『第4回伊都国フォーラム三雲・井原遺跡国史跡指定記念シンポジュウム　伊都国人と文字』 糸島市教育委員会
柳田康雄 2018 b「弥生時代初期の時期区分と初期青銅器」『纒向学研究』6　桜井市纒向学研究センター
柳田康雄 2018 c「弥生時代の長方形板石硯」『國學院大學研究開発推進機構　第 44 回日本文化を知る講座「倭・日本における漢字文化の受容と国家形成」』
柳田康雄 2018 d「福岡県今川遺跡の土器の時期区分と無文土器の併行関係」『平成 30 年度九州考古学会総会研究発表資料集』
柳田康雄 2019 a「板石硯･研石の観察と研究」『第1回板石硯･研石研究会』
柳田康雄 2019 b「倭国における方形板石硯と研石の出現と製作技術」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』
柳田康雄 2020 a「筑前町の方形板石硯･研石･石鏨･石鋸」『筑前町文化財調査報告書』
柳田康雄 2020 b「倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術」『纒向学研究』8 桜井市纒向学研究センター
柳田康雄 2021 a「御床松原遺跡の方形板石硯・研石と白色付着物」『第3回板石硯・研石研究会』於：志摩歴史資料館
柳田康雄 2021 b「御床松原遺跡の方形板石硯・外来土器・白色付土器」『令和3年度九州考古学会総会口頭研究発表』九州考古学会
山崎純男 1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

大和の水差形土器考察

松　本　洋　明

Ⅰ．はじめに

本稿で扱う水差形土器（以降水差と呼ぶ）とは、胴部肩に把手を成形する弥生時代中期の直口壷のことで、大和とは奈良県内出土の水差を指す。近畿地方を中心に出土例があり弥生時代中期後半に盛行する。井戸や土坑、溝、方形周溝墓など供献として完形品の事例が多い。大正～昭和初期にかけて片耳付壷形土器、把手土器、注口形土器と呼ばれ、『大和唐古弥生式遺跡の研究』で小林行雄氏が半環状把手をもつ直口壷を水差に形式分類した。『弥生土器集成資料編』では「把手を持ち口縁部抉り部分を親指押さえで土器を傾け液体を注ぐ土器」として特徴を説く。佐原真氏は、『日本の美術 No12 弥生土器』において器高 20 ㎝前後で容量が１～２ℓのものと器高 15 ㎝以下で容量 0.5 ℓ未満の水差を小型に区別し、水壷、酒壷の可能性、液体の入替えなど万能性を説き、ヒョウタン模倣土器を起源に水差が大和と中・南河内から始まることを指摘する。森田克之氏は、『弥生土器の様式と編年』で摂津地域（以後地域を省略）の瓢形土器を「摂津型水差」と呼び、第Ⅰ様式～第Ⅲ様式に見られる口縁部に抉りをもつ直口壷を水差で分類し、把手付水差を「畿内型水差」と呼び区別した。『考古資料大観１』「近畿地方の土器」では、若林邦彦氏が近畿の弥生中期土器の変遷において播磨を含む畿内北部にかけて摂津型水差の存在を示し、抉り口縁の直口壷と把手付直口壷の関係に着目している。一方、大和に関する研究では、藤田三郎氏他による『奈良県の弥生土器集成』において水差の変遷と他地域から搬入した事例を大和の弥生土器様式にまとめ、川部浩司氏は『大和弥生文化の特質』において様式変遷を通じて土器の形質を評価する。桑原久男氏の「畿内弥生土器の推移と画期」では、弥生中期土器を櫛描文系器種と非櫛描文系器種に分類し水差を櫛描文系の器種に含め、無文化を強める第四様式の水差には器面調整や形態の違いから系統的変化を示唆している。改めて大和の水差を表１－１・２報告事例（以後事例と呼ぶ）に集め、図１－１・２変遷図を用いて、水差の様相を考察したい。

Ⅱ．事例

水差の調査報告は、大和第Ⅲ－１・２様式の水差が 15 例、櫛描文が盛行する過程で凹線文が出現し始める大和第Ⅲ－３・４様式の水差が 51 例、無文化する大和第Ⅳ－１・２様式の水差は 58 例、後期初頭の大和第Ⅴ－１・２様式の水差は 10 例ある。搬入土器を含め事例は、大和第Ⅲ－３・４様式～大和第Ⅳ－１・２様式にかけて多く、大和第Ⅲ－１・２様式は少ない。遺跡では、平等坊・岩室 17 例、唐古・鍵 52 例、芝 22 例、坪井・大福 15 例など盆地中央部の遺跡で報告事例が多い。事例の半数程が完形品（把手・脚部欠損を含む）で、祭祀行為・供献に用いた水差と思われる。大和第Ⅲ・Ⅳ様式の土坑・井戸から水差の完形品が出土した事例は 32 例、溝・大溝（環濠）・自然流路は 17 例、方形周溝墓は５例ある。出土状態は、土坑・井戸から単独出土、複数の完形品が共伴、他の器種との供伴がある。水差が登場する以前の大和第Ⅱ様式には直口壷や細頸壷が完形品で出土するなど、これらの事例は水場での祭祀行為と思われる。河内では方形周溝墓の供献事例が多くあり、大和では下ッ道 JC・三ノ坪、同・桧木、芝３次、土橋、宮滝６次調査で方形周溝墓から水差の完形品が出土している。供献には、底部や胴部下半に穿孔を施す土器が多く土器の再使用を妨げる行為と思われ、水差は把手の反対側にあたる水差前面の底部縁角に摩耗痕を伴うものが多い。日常的に使われた水差を祭祀や墓前の供献に持ち込んでいたと思われる。

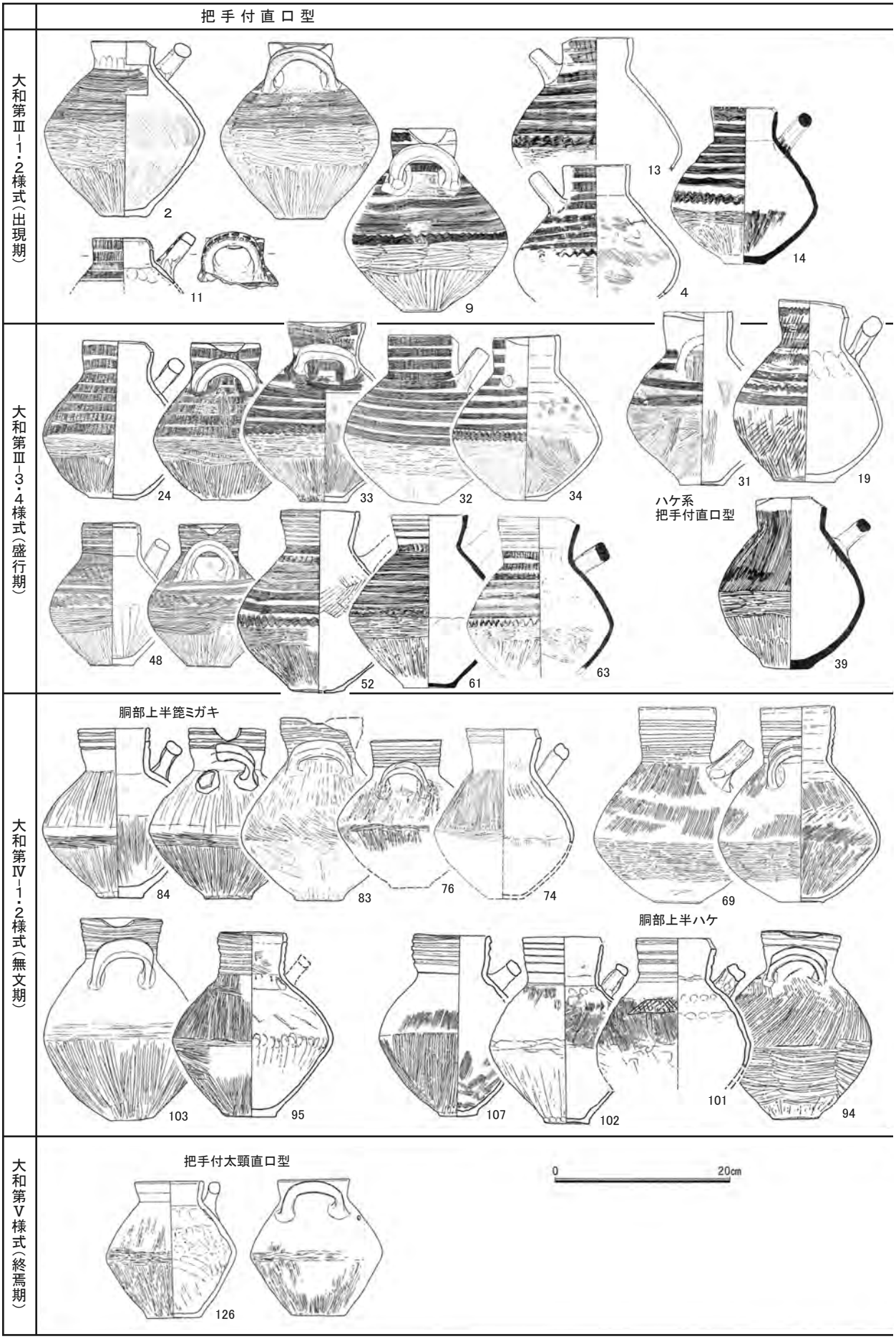

把手付直口型
大和第Ⅲ-1・2様式（出現期）
大和第Ⅲ-3・4様式（盛行期）
大和第Ⅳ-1・2様式（無文期）
大和第Ⅴ様式（終焉期）
2
11
9
13
4
14
24
33
32
34
31
19
ハケ系
把手付直口型
48
52
61
63
39
胴部上半篦ミガキ
84
83
76
74
69
胴部上半ハケ
103
95
107
102
101
94
把手付太頸直口型
126
0
20cm

図１－１　変遷図①

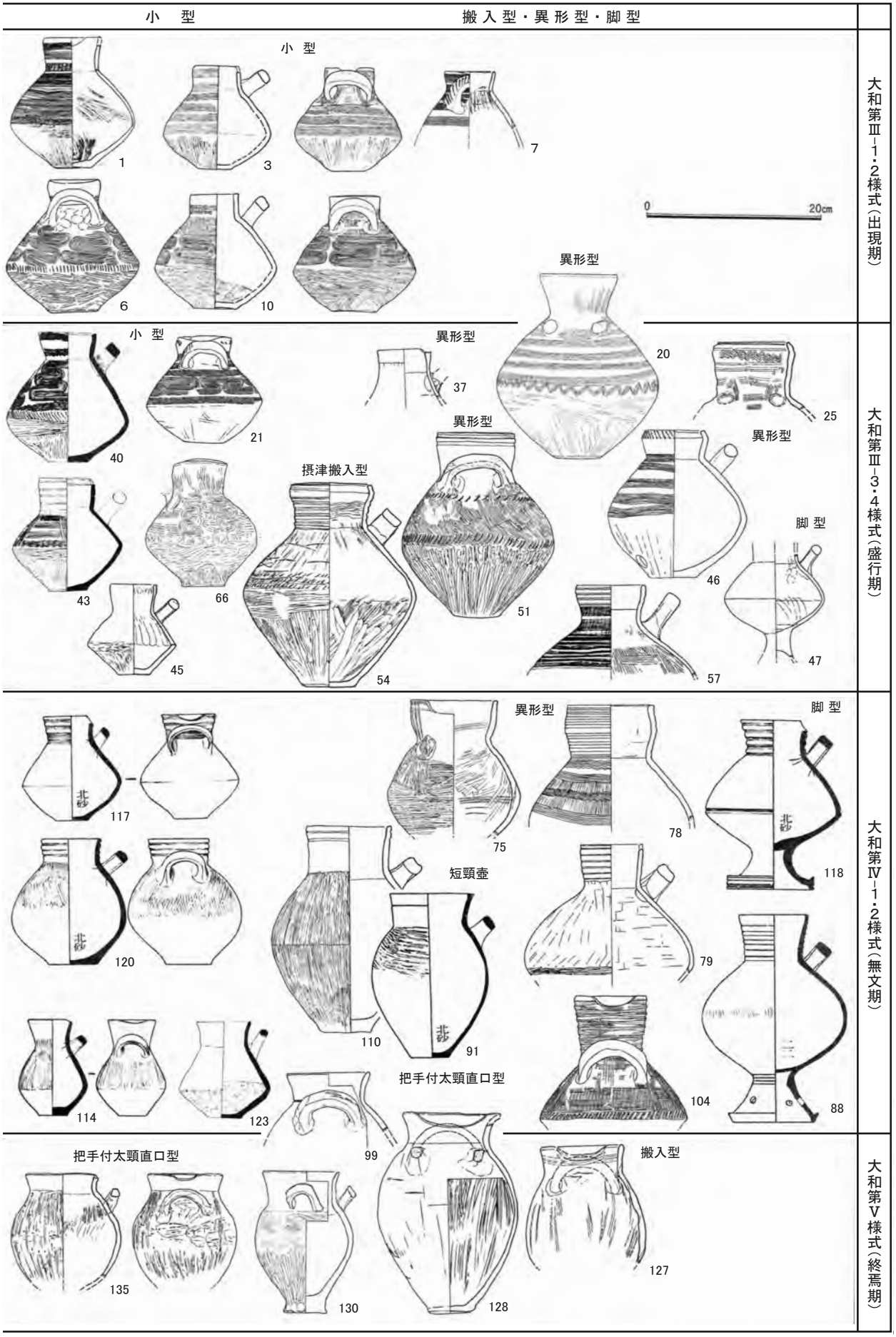

小　型
搬入型・異形型・脚型
大和第Ⅲ-1・2様式（出現期）
大和第Ⅲ-3・4様式（盛行期）
大和第Ⅳ-1・2様式（無文期）
大和第Ⅴ様式（終焉期）
小 型
異形型
0
20cm
1
3
7
6
10
小 型
異形型
20
37
25
40
21
異形型
異形型
摂津搬入型
脚 型
43
66
51
46
45
54
57
47
異形型
脚 型
117
75
78
118
短頸壺
120
79
110
91
104
88
114
123
把手付太頸直口型
99
把手付太頸直口型
搬入型
135
130
128
127

図１－２　変遷図②

表１－１　報告事例①

番号 No	遺　跡	遺 構	時期 大和様式	器高 cm	型分	形質（文様・調整）				把手	脚高 cm	完形	文献：図面番号
						形質表	口頸	胴上半	胴下半	成形・施文			
1	唐古・鍵 20 次	SX101 下層	Ⅲ－１	15.3	小型	③⑦	波直簾／抉	簾直４波（暗）	縦ミガキ→横ミガキ				文献 18：第 29 図－ 21
2	〃	SX103	Ⅲ－１	20.3	把手付直口	②	無文／抉	直 5（暗）	横ミガキ→縦ミガキ	先付・櫛止		○	文献 18：第 43 図
3	唐古・鍵 67 次	SR101	Ⅲ－１	11.8	小型	②	直２→抉	直４	縦ミガキ	後付櫛引・櫛痕		○	文献１：第 65 図 633
4	平等坊・岩室 8 次	大溝 06	Ⅲ－２		把手付直口	①⑦	簾２	簾６波（暗）	横ミガキ	後付・櫛痕			文献６：第 130 図－ 660
5	平等坊・岩室 31 次	ＳＥ 01	Ⅲ－２		把手付直口	②⑦	直～	直６波	横ミガキ	先付櫛引・櫛止			文献 10：第 34 図－ 127
6	下ツ道 JC 三ノ坪	BST07 方周墓	Ⅲ－２	15.5	小型	⑤	抉→直	縦流	扇状ミガキ	先付・櫛止		○	文献 11：PL410 － 3
7	唐古・鍵 20 次	SX101 上層	Ⅲ－２		小型	③	簾２→抉	簾２直～		後付・櫛痕			文献 18：第 37 図－ 31
8	〃	〃	Ⅲ－２		把手付直口	①⑦	抉→簾	簾７波（暗）	縦ミガキ→横ミガキ	先付・櫛止			文献 18：第 37 図－ 32
9	〃	〃	Ⅲ－２	21.1	把手付直口	③⑦	抉→波直	簾直５波（暗）	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕		○	文献 18：第 37 図－ 33
10	唐古・鍵 61 次	SK142	Ⅲ－２	13.3	小型	⑤	簾／抉無	簾横流	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕		○	文献１：図版 24 － 5
11	多 22 次	SD1101	Ⅲ－２		把手付直口		抉→簾２	簾３～		先付・櫛止			文献 29：第２図－ 12
12	芝 18 次	SE46 下層	Ⅲ－２	19.5	把手付直口	③⑦	波	簾直６波（縦暗）					文献 32：図 41 － 507
13	〃	SE46 上層	Ⅲ－２		把手付直口	③⑦	抉→簾２（暗）	簾直４波（暗）	ミガキ	先付　櫛止			文献 32：図 48 － 686
14	坪井・大福 1・2 次	SK2017	Ⅲ－２	18.0	把手付直口	②⑦	抉→波直	直５波	縦ミガキ→横ミガキ	先付櫛引・櫛止		○	文献 35：図 41 － 82
15	〃	〃	Ⅲ－２		把手付直口	③⑦	簾直／抉	簾直４波	ミガキ	有			文献 35：図 41 － 83
16	平等坊・岩室 8 次	大溝 01	Ⅲ－３	13.6	小型	①	抉→刻簾２	簾２/ ミガキ	ミガキ	先付		○	文献６：第 93 図－ 6
17	〃	井戸 404	Ⅲ－３		把手付直口	③⑦	欠損／簾～	簾直６波（暗）	縦ミガキ→横ミガキ	有			文献６：第 170 図－ 1182
18	平等坊・岩室 22 次	SD04	Ⅲ－３		把手付直口		簾２/ 抉無	簾３～		有			文献７：図 11 － 25
19	平等坊・岩室 31 次	SK10	Ⅲ－３	20.7	ハケ系直口	④	波直→抉	ハケ／直波直波直	ハケ	後付櫛引・櫛痕		○	文献 10：第 26 図－ 43
20	下ツ道 JC 桧木	西 ST01	Ⅲ－３	23.0	異形型		無文／抉無	直６波	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕			文献 11：PL404 － 3
21	〃	〃	Ⅲ－３	12.5	小型	⑤	抉→直	簾３横流簾	ミガキ	先付・櫛止		○	文献 11：PL404 － 2
22	唐古・鍵 1 次	南方部	Ⅲ－３	17.8	把手付直口	①⑦	簾２→抉	簾５波	縦ミガキ	後付・櫛痕		○	文献 14：第三十図 336
23	唐古・鍵 19 次	SK114	Ⅲ－３	21.0	把手付直口	③⑦	抉→波直２	簾２直４波	縦ミガキ→横ミガキ	先付櫛引・櫛止		○	文献 17：図版 38 － 3
24	唐古・鍵 26 次	SD2103	Ⅲ－３	18.1	把手付直口	①	簾２→抉	簾６	縦ミガキ→横ミガキ	後付櫛引・櫛痕		○	文献 20：第 15 図－ 5
25	唐古・鍵 33 次	SK124	Ⅲ－３		異形型		凹波直／抉無	直２～		後付・櫛痕			文献 21：第 21 図－ 4
26	唐古・鍵 37 次	SK2130 第 13 層	Ⅲ－３	20.0	生駒西麓型		抉→列２	簾５（暗）	扇ミガキ	後付・櫛痕		○	文献１：第 69 図 224
27	〃	SK2130 第 13 層	Ⅲ－３		生駒西麓型		欠損	簾５（暗）	扇ミガキ→縦ミガキ	後付・櫛痕		○	文献１：第 69 図 225
28	〃	SK2130 第 10 層	Ⅲ－３	9.7	異形型		列直／抉無	簾横流	横ミガキ	先付・櫛止		○	文献 25：土器文様 021
29	〃	SK2130 第 10 層	Ⅲ－３	12.4	小型	③	直２簾	簾３	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕		○	文献 26：弥生土器 056
30	唐古・鍵 116 次	SK105	Ⅲ－３	12.0	脚型	①	簾２（暗）/ 抉無	簾５（暗）	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕	欠	○	文献 24：図 11 － 5
31	芝 3 次	SD07	Ⅲ－３	20.0	ハケ系直口	②⑧	抉→凹	ハケ／直４	斜ハケ	先付・櫛止		○	文献 31：第 15 図－ 4
32	〃	SD08	Ⅲ－３	19.0	把手付直口	③	抉→簾３	簾２直５	縦ミガキ→横ミガキ	先付・櫛止			文献 31：図 12 － 6
33	〃	〃	Ⅲ－３	20.6	把手付直口	③⑦	抉→波簾	簾直５波	縦ミガキ→横ミガキ	後付櫛引・櫛痕			文献 31：第 12 図－ 7
34	〃	〃	Ⅲ－３	19.0	把手付直口	③⑦	抉→簾直２	直５波	縦ミガキ→横ミガキ	先付・櫛止			文献 31：第 12 図－ 8
35	芝 18 次	SE46 下層	Ⅲ－３		把手付直口	③	簾３	簾直～					文献 32：図 41 － 506
36	〃	SE46 上層	Ⅲ－３		生駒西麓型		列５						文献 32：図 48 － 685
37	〃	SX64 下層	Ⅲ－３		異形型		無文／抉	無文					文献 32：図 51 － 751
38	芝 21 次	SD01	Ⅲ－３	18.5	把手付直口	③	抉→波簾２	簾２直４簾	縦ミガキ→横ミガキ	先付・櫛止		○	文献１：第 135 表 1381
39	坪井・大福 1・2 次	SK2066	Ⅲ－３	19.8	ハケ系直口	⑩	無文／抉	無文／ 縦ハケ	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献 35：第 39 図－ 38
40	〃	SE2006	Ⅲ－３	15.0	小型	⑤	波２/ 抉無	横流波列	縦ミガキ→横ミガキ	先付・櫛止		○	文献 35：第 42 図－ 108
41	〃	〃	Ⅲ－３	17.2	把手付直口	①⑦	簾２（暗）/ 抉	簾６波（暗）	縦ミガキ→横ミガキ	後付櫛引・櫛痕		○	文献 35：第 42 図－ 109
42	〃	〃	Ⅲ－３	20.4	把手付直口	③⑦	波簾２→抉	簾直５波	縦ミガキ	後付　櫛痕			文献 35：第 42 図－ 110
43	〃	SK1012	Ⅲ－３	13.0	小型	④⑦⑧	凹４→抉	波直２波（縦暗）	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献 35：第 46 図－ 170
44	〃	〃	Ⅲ－３	12.7	小型	⑨	無文／抉無	無文	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献 35：第 46 図－ 169
45	土橋	YST05 供献	Ⅲ－３	10.4	小型	⑨	無文／抉無	無文	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献１：第 160 表 1622
46	宮瀧 6 次	方形周溝墓	Ⅲ－３	17.0	異形型		列／抉無	直５	縦ミガキ	有		○	文献１：第 206 表 2041
47	下ツ道 JC 知恩寺	SE-01	Ⅲ－４		脚型		欠損	無文		有	有		文献 11：ＰＬ 400 － 9
48	〃	〃	Ⅲ－４	16.5	把手付直口	④⑦⑧	凹７→抉	直２波直２波	縦ミガキ→横ミガキ	凹後／先付・櫛止		○	文献 11：ＰＬ 400 － 10
49	唐古・鍵 1 次	北砂	Ⅲ－４	20.7	生駒西麓型		列４→抉	直４（簾４か）		後付・櫛痕		○	文献 14：第三十図 335
50	〃	北砂	Ⅲ－４		把手付直口	②⑦	欠損	直６波		先付櫛引・櫛止			文献 14：第三十図 337
51	唐古・鍵 22 次	SK105 第４層	Ⅲ－４	21.4	異形型		凹２/ 抉無	ハケ／列列	縦ミガキ	凹線後／先付		○	文献１：第 77 図 725
52	〃	〃	Ⅲ－４	20.7	把手付直口	③⑦⑧	凹７/ 抉無	簾２直４波	縦ミガキ→横ミガキ	凹後		○	文献１：第 77 図 726
53	唐古・鍵 23 次	SK137 大１層	Ⅲ－４	5.4	ミニ型		無文／抉	列３（ミガキ）	ミガキ	後付・櫛痕		○	文献 26：特殊土器 006
54	唐古・鍵 37 次	SK2106 第２層	Ⅲ－４	23.5	摂津搬入型		凹７/ 抉無	無文／列３	縦ミガキ→横ミガキ	凹線後／先付		○	文献１：第 70 図 236
55	〃	SK2106 第２層	Ⅲ－４	21.2	生駒西麓型		列４	列簾４（暗／縦暗）	扇ミガキ	後付・櫛痕	欠	○	文献 26：搬入土器 016
56	芝 18 次	SK625 上層	Ⅲ－４		把手付直口		凹７						文献 32：図 52 － 792
57	〃	SD15	Ⅲ－４		異形型		凹４簾／抉無	簾９～（暗）		後付・櫛痕			文献 32：図 55 － 844
58	〃	SD603 上層	Ⅲ－４		異形型		波凹５	直～					文献 32：図 78 － 1393
59	〃	SD602 上層	Ⅲ－４		把手付直口	③		直簾直２～		後付・櫛痕			文献 32：図 64 － 1077
60	芝 20 次	LSD01	Ⅲ－４		把手付直口	②⑦⑧	凹／欠損	直５波	縦ミガキ→横ミガキ	有			文献１：第 143 図 1451
61	坪井大福 1・2 次	SE2006	Ⅲ－４	19.8	把手付直口	③⑦⑧	凹４/ 抉無	簾直５波	縦ミガキ→横ミガキ	有			文献 35：図 42 － 111
62	〃	SD1030	Ⅲ－４		把手付直口			簾５（暗）	横ミガキ	有			文献 35：図 50 － 215
63	〃	SD1002A/B	Ⅲ－４		把手付直口	③⑦⑧	凹５簾／抉	簾２直４波	縦ミガキ→横ミガキ	有			文献 35：図 57 － 309
64	一町	タメンダイ	Ⅲ－４	21.0	生駒西麓型		列３（暗）	簾列波簾波簾（暗）	横ミガキ／高台木葉透	後付櫛痕	4.0	○	文献 37：第 68 図 213
65	平等坊・岩室 8 次	井戸 410	Ⅲ－３・４		小型		簾	直３　（縦暗）	横ミガキ	後付・櫛痕			文献６：第 179 図 1315
66	〃	溝 603	Ⅲ－３・４	14.5	小型		抉	直２扇→縦流	縦ハケ→横ミガキ	後付・櫛痕		○	文献６：第 205 図－ 1720
67	一町２次タメンダイ		Ⅲ		把手付直口			直５波		後付・櫛痕			文献 37：第十三図１

凡例

把手付直口：把手付直口型。　**ハケ系直口**：ハケ系把手付直口型。　**ミニ型**：ミニチュア型。　**把手付太頸**：把手付太頸直口型。　**生駒西麓型**：生駒西麓型の水差。
抉→波簾：抉り成形の後、波状文＋簾状文。　**凹７→抉り**：７条の凹線の後、口縁端部に抉り。　**列直／抉無**：列点文＋直線文を施文し抉り無し。　**列３（暗）**：３条の列点文に暗文。
簾直４波（暗）：簾状文＋４条の直線文＋最下段に波状文と暗文。　**簾３横流簾**：３条の簾状文＋横型流水文＋簾状文。　**ハケ／直４**：ハケ調整に４条の直線文。　**直２～**：２条直線文＋他不明。
先付・櫛止：施文の前に把手接合、櫛描文は把手部で施文を止める。　**後付櫛引・櫛痕**：施文の後に把手接合、接合部に櫛描を施し、把手部付近に櫛描文の痕跡あり。

表１－２　報告事例②

番号 No	遺　跡	遺　構	時期 大和様式	器高 cm	型分	形質（文様・調整）				把手	脚高 cm	完形	文献：図面番号
						形質表	口頸	胴上半	胴下半	成形・施文			
68	平常左京五条二坊	SK24	Ⅳ－１		把手付直口		無文						文献２：図 85 － 205
69	長寺７次	SE18	Ⅳ－１	22.5	把手付直口	⑨⑫	凹 6/ 抉無	ハケ / 無文	横ミガキ	凹線文後		○	文献４：図７－４
70	平等坊・岩室８次	大溝 03	Ⅳ－１		生駒西麓型		列 4	簾～					文献６：第 102 図 175
71	〃	〃	Ⅳ－１		小型	⑨	凹 4	無文					文献６：第 104 図 205
72	〃	井戸 410	Ⅳ－１		把手付直口	⑨⑫	凹 6/ 抉無	ハケ / 無文		凹線文後			文献６：第 179 図 1316
73	平等坊・岩室 31 次	SD05	Ⅳ－１		把手付直口	⑨⑪	凹 / 欠損	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後			文献 10：第 27 図 54
74	唐古・鍵 22 次	SK101	Ⅳ－１		把手付直口	⑨⑪	凹 2 →抉	縦ミガキ / 無文	縦？→横ミガキ	凹線文後			文献１：第 80 図 749
75	〃	〃	Ⅳ－１		異形型		抉→ミガキ	縦ミガキ / 無文	横ミガキ	有			文献１：第 80 図 750
76	唐古・鍵 33 次	SK120	Ⅳ－１		把手付直口	⑨⑫	凹 4 / 抉無	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ⇒横ミガキ	凹線文後			文献 21：第 24 図―８
77	常楽寺５次	ＳＫ 104	Ⅳ－１		把手付直口	⑨	凹 4 →抉	無文		凹線文後			文献 30：図４－４
78	芝 18 次	SD602	Ⅳ－１		異形型		凹 9	波直波直～					文献 32：図 70 － 1212
79	〃	SK726	Ⅳ－１		異形型		凹 6 →抉	縦ナデ / 無文	縦？→横ミガキ	凹線文後			文献 32：図 77 － 1363
80	芝 32 次	溝２方周墓	Ⅳ－１		把手付直口	⑪	欠損	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ				文献 38：図 14 － 13
81	〃	〃	Ⅳ－１	16.5	把手付直口	⑨⑪	凹 4 →抉	縦ミガキ / 無文	縦？→横ミガキ	凹線文後			文献 38：図 14 － 15
82	〃	〃	Ⅳ－１		把手付直口	⑪	欠損	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	有			文献 38：図 14 － 14
83	〃	〃	Ⅳ－１	20.8	把手付直口	⑨⑪	抉→凹 5	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ	凹線文後			文献 38：図 14 － 16
84	坪井・大福７・８次	SD02	Ⅳ－１	19.4	把手付直口	⑨⑪	凹 3 →抉	ミガキ→把手	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後		○	文献１：図 11 － 11
85	長寺７次	SE21	Ⅳ－２	18.5	把手付直口	⑨⑪	凹 7 →抉ミガ	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹後 / ミガキ		○	文献４：図９－３
86	平等坊・岩室 25 次	大溝 ESD03	Ⅳ－２		生駒西麓型		列 10/ 抉無	列 7 ～		後付・櫛痕			文献８：図 17 － 115
87	唐古・鍵１次	22 号竪穴	Ⅳ－２	18.4	異形型		凹 2 →抉	縦ハケ / 無文		凹線文後		○	文献 14：第三十図 451
88	〃	〃	Ⅳ－２	23.9	脚型	⑨	凹 7/ 抉無	無文	脚部凹 4/ 脚部穿孔	凹線文後	5.0	○	文献 14：第三十図 450
89	〃	北砂	Ⅳ－２	22.0	脚型	①⑧	凹 7 →抉	簾５列		成形せず	有	○	文献 14：第三十図 353
90	〃	〃	Ⅳ－２	17.5	太頸直口		抉			有		○	文献 14：第三十五図 452
91	〃	〃	Ⅳ－２	19.0	短頸壺		沈線１条 / 抉無	タタキ		有		○	文献 14：第三十五図 453
92	唐古・鍵３次	Pit106	Ⅳ－２	21.0	把手付直口	⑨⑪	凹 4 →抉	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後		○	文献 15：図版 12 写真１
93	〃	〃	Ⅳ－２	16.5	把手付直口	⑩	無文 / 抉無	無文	縦ナデ→ケズリ	有		○	文献 15：図版 12 写真２
94	唐古・鍵 13 次	SD02	Ⅳ－２	21.5	把手付直口	⑨⑫	凹 2 →抉	斜ハケ / 無文	縦ケズリ→横ミガキ	凹線文後		○	文献 16：第 87 図 823
95	〃	〃	Ⅳ－２	21.0	把手付直口	⑨⑪	凹 7 →抉	縦ミガキ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後			文献 16：第 87 図 824
96	唐古・鍵 19 次	SD204	Ⅳ－２		把手付直口			直波 2（暗）	横ミガキ	先付			文献 17：第 33 図 15
97	〃	〃	Ⅳ－２		把手付直口	⑨⑫	凹 7	ハケ / 無文					文献 17：第 33 図 16
98	唐古・鍵 61 次	SD101B/102B	Ⅳ－２	23.0	生駒西麓型		列 3 ～欠損	列簾 4	縦ミガキ→横ミガキ	後付・櫛痕	4.8	○	文献 22：第 18 図 12
99	唐古・鍵 65 次	SD123 第１層	Ⅳ－２	9.2	太頸直口		凹 / 抉無	無文		凹線文後			文献 23：第 162 図 P1085
100	唐古・鍵 93 次	SD2101 第１層	Ⅳ－２	15.2	小型	⑨	凹 7/ 抉無	無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後		○	文献 23：第 439 図 P3119
101	清水風１次	SD01	Ⅳ－２		把手付直口	⑨⑫	凹 4 →抉	ハケ / 家鹿線刻		凹線文後			文献 12：第 25 図 27
102	〃	〃	Ⅳ－２	21.5	把手付直口	⑨	凹 6 →抉	無文	縦ケズリ	凹線文後		○	文献 12：第 25 図 28
103	清水風２次	SR102 第５下層	Ⅳ－２	23.0	把手付直口	⑨	凹 5 →抉	無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後		○	文献１：第 124 図 1272
104	〃	〃	Ⅳ－２		異形型		凹 8 →抉	簾列簾列（暗 / 縦暗）		後付・櫛痕			文献１：第 124 図 1273
105	伴堂東１・２次	SK2088	Ⅳ－２	16.1	把手付直口	⑩	無文 / 抉無	無文	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献 13：図 129 － 17
106	〃	SK2090	Ⅳ－２				無文	無文		欠損			文献 13：図 130 － 17
107	八尾九原１次	SK201	Ⅳ－２	21.0	把手付直口	⑨⑫	凹 4 / 抉無	ハケ / 無文	縦ミガキ	凹線文後			文献１：第 125 図 1285
108	〃	〃	Ⅳ－２		生駒西麓型		欠損	列簾２		欠損			文献１：図 48 － 140
109	〃	SK212	Ⅳ－２		脚型		欠損	無文	脚部凹 4	有	有		文献１：第 125 図 1286
110	坪井・大福７・８次	SK01	Ⅳ－２	24.0	短頸壺		凹 2 →抉	縦ハケ / 無文	タタキ→縦ハケ	有		○	文献 39：図７－２
111	西曽我１次	SK02	Ⅳ－２	15.3	小型	⑨	凹 4 →抉	縦ハケ / 無文	縦ミガキ→横ミガキ	凹線文後		○	文献１：第 163 図 1645
112	廿日山	Ｃトレ	Ⅳ		小型		凹 3/ 抉無	無文		凹線文後			文献３：第 11 図３
113	平等坊・岩室１次	大西	Ⅳ		把手付直口		凹 / 抉無	無文		凹線文後			文献５：第十九図
114	唐古・鍵１次		Ⅳ	11.0	小型		ハケ / 抉	縦ハケ / 無文		有		○	文献 14：第三十図 338
115	〃	北砂	Ⅳ	22.0	把手付直口		凹 6 →抉	斜ハケ / 無文		凹線文後		○	文献 14：第三十五図 445
116	〃		Ⅳ	18.6	把手付直口		凹 6 →抉	無文		凹線文後		○	文献 14：第三十五図 446
117	〃	北砂	Ⅳ	11.8	小型		凹 4 →抉	無文		凹線文後		○	文献 14：第三十図 339
118	〃	〃	Ⅳ	19.6	脚型		凹 5 →抉	無文	脚付 / 脚端部に凹線	凹線文後	5.0	○	文献 14：第三十五図 447
119	〃		Ⅳ	13.2	小型		凹 3/ 抉無	無文		凹線文後		○	文献 14：第三十五図 448
120	〃	北砂	Ⅳ	14.2	小型		凹 3/ 抉無	ハケ / 無文		凹線文後		○	文献 14：第三十五図 449
121	唐古・鍵 16 次	ＳＤ 101	Ⅳ	24.0	把手付直口		凹 4/ 抉無	タタキ / 無文	タタキ→縦ミガキ	凹線文後			文献 17：図版 11 － 3
122	多６次	多神社所蔵	Ⅳ		把手付直口		凹 5 →抉						文献 28：図 13 － 190
123	坪井・大福１・２次	SE1009	Ⅳ	11.0	小型		無文 / 抉無	無文	縦ミガキ	有		○	文献 35：図 43 － 130
124	〃		Ⅳ	22.5	把手付直口		凹 6/ 抉	無文		凹線文後		○	文献 43：第九図 41
125	薩摩１・２・４次	SK17	Ⅳ		把手付直口		凹 5 →抉	縦ミガキ / 無文					文献 41：図 57 － 112
126	平等坊・岩室 28 次	NR02	Ⅴ－１	15.8	太頸直口		抉無	縦ミガキ	縦ミガキ→横ミガキ	有		○	文献９：第 15 図 52
127	唐古・鍵 19 次	SD204	Ⅴ－１		搬入型		抉	削→縦ミガキ		欠損			文献 17：第 27 図 11
128	唐古・鍵 75 次	SD101B 第６層	Ⅴ－１	23.4	太頸直口		抉	無文		欠損		○	文献 23：第 278 図 P2008
129	一町		Ⅴ－１	15.0	太頸直口		凹 2 →抉			有		○	文献 44：PL46 － 188
130	平等坊・岩室８次	土坑 822	Ⅴ－２	16.5	太頸直口		抉無	ハケ	縦ミガキ	有			文献６：図 234 － 2337
131	〃	土坑 823	Ⅴ－２		太頸直口		ハケ / 抉無	縦ミガキ	縦ミガキ	欠損			文献６：図 236 － 2351
132	多 22 次	ＳＤ 1102	Ⅴ－２		太頸直口		沈線１条	無文		有			文献 29：写真４－６
133	芝 21・22 次	溝 61	Ⅴ－２	18.4	太頸直口		沈線１条 / 抉	ハケ	縦ミガキ	有			文献１：第 144 図 1462
134	唐古・鍵 20 次	SK104 短頸	Ⅴ		短頸壺		端部肥厚	板ナデ	縦ミガキ	小把手			文献 18：第 49 図 23
135	唐古・鍵 61 次	SD101B/102B	Ⅴ		太頸直口		抉	削→縦ミガキ	縦ケズリ	有			文献 22：第 19 図 33

凡例　**凹線文後**：凹線文施文後に把手接合。　**縦ミガキ / 無文**：縦ミガキ調整で施文無し。　**縦ミガキ→横ミガキ**：縦ミガキの後胴部中位に横ミガキ。　**削→縦ミガキ**：ケズリ調整後ミガキ。
凹 6/ 抉無：6 条凹線で抉り無し。　**凹 4 →抉**：4 条凹線施文後に抉り。　**簾列簾列（暗 / 縦暗）**：簾状文＋列点文＋簾状文＋列点文に暗文＋縦型暗文。

Ⅲ．変遷と型分

本稿は、水差の展開を『奈良県の弥生土器集成』による大和様式を基準とし、図１変遷図は出現期（大和第Ⅲ－１・２様式）、盛行期（大和第Ⅲ－３・４様式）、無文期（大和第Ⅳ－１・２様式）、終焉期（大和第Ⅴ－１・２様式）の４期に大別している。表１報告事例「時期」は、出土した他の器種との共伴関係から大和様式細別様式で分類している。水差の変遷と特徴は次のとおりである。

【出現期】 大和第Ⅲ－１・２様式の水差を指す。大和第Ⅲ－１様式の水差は事例が少ない。状態は、口頸部の立ち上がりが盛行期に比べて短く、口頸部に施文する櫛描文も２条程度。口縁部の幅もやや細口。把手は、頸から頸下にかけて接合し、把手の先端が口縁部と同じ高さあるいは以上の高さに成形する。

【盛行期】 大和第Ⅲ－３・４様式の水差を指す。状態は、口頸部が出現期に比べやや長頸で発達し、口頸部の櫛描文も３～４条に及ぶ。把手は頸下に接合し、把手の先端は口縁部より低く成形する。大和第Ⅲ－４様式の水差は、口頸部に数条の凹線文を施し櫛描文と併用するものが見られる。

【無文期】 大和第Ⅳ－１・２様式の水差を指す。状態は、口頸部に凹線文を施し櫛描文は衰退し無文が通例となる。

【終焉期】 大和第Ⅴ－１・２様式の水差を指す。事例は少ない。状態は、立ち上がりが短く幅の広い口頸部と縦長の胴部をもつ水差が目立ち、把手を小さく成形するものがある。算盤玉状の胴部に直口状の形態をもつ盛行期・無文期（大和第Ⅲ・Ⅳ様式）の水差とは形態、形質が異なる。

水差の変遷には、図１に示すように把手付直口型を標準な水差とし、大和では異形な水差と区別した。標準な水差は、形状に変化を伴うが算盤玉状の胴部に把手付直口壷を基本とし、口頸部から胴部上半にかけて櫛描文、胴部下半は箆ミガキを施した大和では一般的な形態と形質をもつ水差を指す。一方、異形な水差とは、口頸部や胴部の形状が大和の一般的な水差に比べ特異で事例も単一的な水差である。水差は、他の壷形とは違い器高22㎝以下のものが多く、広口壷や直口壷などと比べやや小振りで、水差特有の大きさがある。以上から水差形を次のように型分する。直口状の口頸部と算盤玉状の胴部をもち器高16～24㎝の水差を「把手付直口型」、同様で器高15㎝台以下を「小型」とし、形態は異質だが器高５㎝ほどの水差を「ミニチュア型」とする。把手付直口型と小型は、基本的に胴部にミガキ仕上げを伴い広口壷や細頸壷など大和第Ⅲ様式の櫛描文系器種と形態や形質が同様である。また水差の器面仕上げにミガキでなくハケ調整を施す標準な水差があり「ハケ系把手付直口型」に区別する。大和の櫛描文系器種は、ハケ調整をナデ消して施文するのが通例だが一部にハケ調整を下地に櫛描文を施す広口長頸壷や直口壷があり、同様な水差と考える。一方、口縁部先端を袋状に成形するもの、極端に長い口頸部のもの、細頸のもの、胴部が扁平なものなど特異な形態の水差があり、他地域の影響と思われ「異形型」とする。大和では生駒西麓型土器の搬入が目立ち他地域から流入した水差を「搬入型」とし、地域が明瞭なものは地域名で型分する（変遷図には一部を除き都合で搬入型は図示せず）。水差には、高坏同様に脚部を伴うものがあり「脚型」とする。小型は、大和第Ⅲ－１・２様式から大和第Ⅳ様式まで展開する。ミニチュア型は、大和第Ⅲ－４様式（表１－１：No53）に１例ある。脚型は、大和第Ⅲ－３・４様式にかけて４例、大和第Ⅳ様式に５例あるが生駒西麓型の水差を含み、大和では脚型の事例は少ない。一方、大和第Ⅴ様式の水差は、直口で幅広の口頸部と縦長の胴部を形態にもつ水差が目立つ。同時期に展開する短頸壷に類似した形態と形質をもち、大和第Ⅲ・Ⅳ様式に展開した把手付直口型とは形態・形質が異なるため「把手付太頸直口型」に区別する。

Ⅳ．形質

大和第Ⅲ・Ⅳ様式の壷（櫛描文系器種）における成形、施文、調整の工程は次のとおりで、口縁端部に横ナデを施し形態の成形を完了する。口頸部の凹線文は、この時の横ナデに合わせて施文する。櫛描文は、成形完了後に櫛具を用いて施文する。施文部にあたる頸胴部にかけて成形の過程で施していたハケ調整痕をナデ消して器面を無地に調整し施文する。胴部下半のヘラミガキは櫛描文の施文後に行い、暗文はこの過程で施す。第Ⅳ様式の特徴とされる凹線文は成形の工程で施すが、櫛描文は成形

後に櫛具を用いて施文するため凹線文とは工程に違いがある。施文部位も櫛描文は口縁部から頸胴部にかけて幅広く施文するが、凹線文は横ナデが及ぶ範囲に限られる。大和第Ⅳ様式の櫛描文衰退は、凹線文の発達によるものでなく、櫛描文を施す工程の簡略が無文化につながったと考える。水差は、成形、施文、調整の一連の工程に加え、口縁端部の「抉り」と「把手」接合を伴うため櫛描文を施文する前後の工程に他の器種とは違う手順がある。こうした水差の特徴や変化を形質から検討すると、表２は、把手付直口型・小型・脚型の水差について文様の状況を表した事例数である。比較が 10 例に満たない点や単一遺跡に限定した事例でもなく、表現性には乏しいが検討資料としたい。大和第Ⅳ様式は、櫛描文を施す水差が極端に少なく表２形質表「⑨頸部凹線文＋胴部無文」の水差が目立ち無文期の水差の様相がうかがえる。

【櫛描文様】　水差に施す櫛描文の状態を表２から見ると、「①簾状文のみ施文」を施す水差は大和第Ⅲ－２様式には出現し、同Ⅲ－３様式に事例が増える。簾状文を特徴とする生駒西麓型（搬入型）の事例は（表１－１）、大和第Ⅲ－３様式に３例、同－４様式に３例あり、生駒西麓型の土器が出現するのもこの時期である。「②直線文のみ施文」を施す水差は、大和第Ⅲ－１様式から見られ同Ⅲ－４様式まで展開する。一方、口頸部や頸部など局部的に簾状文を伴い胴部は直線文を施す「③簾状文と直線文を併用」の水差は大和第Ⅲ－１様式から見られ、同－２・３・４様式に目立ち、簾状文と直線文を併用する水差しは多い。また波状文を胴部文様の最下段に施す「⑦文様の最下段に波状文」の事例も目立つ。大和では、他の器種でも最下段に波状文を施す壷が見られる。「⑤流水文を伴う」は、櫛具を連続的に操作して描く縦型・横型流水文を採用し、直線文や簾状文と併用して施文する。流水文を施す水差は少ないが、大和第Ⅲ－２・３様式に事例があり小型の水差に見られる。一方、広口壷や細頸壷、直口壷に見られる「⑥斜格子文を伴う」は、大和の水差に事例がなく、他地域でも（滋賀県服部遺跡、淡路島竹山遺跡に類例）極少で皆無に等しい。生駒西麓型でも細頸壷に斜格子を施文するが、斜格子文を施す水差の報告例はない。同様に円形浮文を施す水差（他地域では淡路島竹山遺跡に類例）も見られない。大和第Ⅲ様式の水差は、簾状文及び直線文を主文とし、波状文を文様の最下に施文するのが一般的な様相と思われる。

表２　形質表

項　目	第Ⅲ様式				第Ⅳ様式	
	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅲ-4	Ⅳ-1	Ⅳ-2
①：簾状文のみ施文		2	5	2		
②：直線文のみ施文	2	2	1	2		
③：簾状文と直線文を併用	1	5	9	4		
④：直線文と波状文を併用			2	1		1
⑤：流水文を伴う		2	2			
⑥：斜格子文を伴う						
⑦：文様の最下段に波状文	1	8	8	6		
⑧：頸部凹線文＋胴部櫛描文			2	5		
⑨：頸部凹線文＋胴部無文					10	12
⑩：無　文（口頸胴部）			3			2
⑪：胴上半を篦ミガキ					7	3
⑫：胴上半をハケ			1		3	4

【凹線文】　水差の凹線文は大和第Ⅲ－３様式から現れ、大和第Ⅲ－４様式には口頸部に多条施文する「⑧頸部凹線文＋胴部櫛描文」の水差が増える。しかし大和第Ⅳ様式になると口頸部に凹線文、胴部の櫛描文が衰退した「⑨頸部凹線文＋胴部無文」の水差が状態化し、大和第Ⅲ様式とは形質が一変する。大和第Ⅳ様式になると短頸壷や有段口縁壷が主体的になり、甕は大和第Ⅲ様式に盛行した大和型甕や折衷型甕が激減又は消滅し、口縁部を横ナデ手法で成形するくノ字口縁甕が体制的となる。また台付無頸壷、脚付鉢、器台が登場し新たな器種構成が展開する。水差の無文化は、こうした大和第Ⅳ様式に登場する新しい器種の動きに強い影響を受けたと考えられ、櫛描文系器種から無文の器種へ変容する。

【胴部下半の篦ミガキ】　大和第Ⅲ様式の櫛描文系器種にみる篦ミガキは、櫛描文を施文した直後に底部から胴部中位にかけて縦篦ミガキ、櫛描文直下の胴部中位に横篦ミガキを施す（以後縦・横篦ミガキと呼ぶ）。この胴部下半の縦・横篦ミガキ調整は、大和第Ⅰ様式のミガキ調整が素因で、大和第Ⅱ様式の壷や鉢は櫛描文を施した後に口縁部から底部まで器面全体に篦ミガキを行い、胴部下半の篦ミガキは横篦ミガキまたは斜篦ミガキで仕上げる。大和第Ⅲ様式になると篦ミガキは胴部下半にのみとなり、縦・横篦ミガキを施す簡潔な手法へ展開し、櫛描文を施す胴部上半には暗文を伴う場合がある。大和第Ⅲ様式の出現期や盛行期の水差の胴部下半に縦・横篦ミガキが普遍的なのは、そうした櫛描文系器種の特徴を備えているからである。しかし、大和第Ⅳ様式の無文期になると、胴部下半を縦ケズリした後に横篦ミガキ仕上げするもの、ハケ調整後に縦ケズリするもの、縦ハケのみ施

すものなど多様となり櫛描文系器種に統一的な縦・横篦ミガキが衰退する。

【胴部上半の篦ミガキとハケ】 無文が常態化すると、水差の胴部上半に施す器面調整にも変化が現れる。表２を参照すると「⑪胴部上半を篦ミガキ」する水差と縦ハケや斜めハケで仕上げる「⑫胴部上半をハケ」の水差があり、大和第Ⅳ－１様式には胴部上半の篦ミガキが目立ち、大和第Ⅳ－２様式の水差には胴部上半をハケ仕上げする水差が目立つ。胴部上半の縦篦ミガキは、弥生後期から古墳前期にかけて壷に定着する手法で、大和第Ⅳ様式の水差がその先駆けとなる。一方、ハケ仕上げする水差が大和第Ⅳ様式を通して増えていく状態は、大和第Ⅳ様式に盛行する有段口縁壷や短頸壷など非櫛描文系器種の影響を受けたと考えられ、清水風遺跡から出土したハケ調整を素地に絵画を施した水差（図１－１：No101）はその特徴が現れたものといえる。大和第Ⅳ様式の無文期の水差は、櫛描文系器種の特徴を備えた大和第Ⅲ様式の盛行期の水差とは形質が様変わりし、変遷において系譜が異なる水差といえる。

【把手】 把手の接合は、大きく３種手法が看取できる。一種は、器壁に丸い穴を２孔穿ち粘土紐を挿入して内面から指圧しながら把手を接合する「穿孔手法」。二種は、器壁を破らないよう把手を器面に密着させて接合する「密着手法」で、破損すると器壁内面を残し器壁表面がめくれ上がる。三種は、把手を器面に接着するが、破損すると器面が原形のまま残る「貼付手法」がある。３種手法の内、穿孔手法が広く採用されるが、大和第Ⅲ－１・２様式の出現期には密着手法も存在する。穿孔手法は、大和第Ⅱ様式の無頸壷口縁に施される２孔一対の穿孔が系譜と考えられ、大和第Ⅲ様式に無頸壷が増加し大和第Ⅲ－３様式には多孔の丸透かしを施す台付鉢が現れるなど、穿孔技法がかなり普及したと推測する。

一方、把手を成形する工程にも特徴がある。把手は、形態成形を完了した後、櫛描文を施す前に把手を接合する「先付」と施文した後に把手を接合する「後付」がある。先付の特徴は、櫛描文を施す際に把手部分だけ施文できず「櫛止」になる。後付は、把手が接合されている部分に櫛描文の跡「櫛痕」を伴う。また大和第Ⅲ様式には、把手の接合に際して器壁外面の接着部分を粘土で補強する。この補強を櫛具で施文調整する「櫛引」を伴うものがある。この把手先付と把手後付は、表３のとおり大和第Ⅲ様式には両者が存立し水差には異なる手法が共に展開するが、大和第Ⅳ様式の水差は櫛描文が衰退することで把手の接合に櫛描文との前後関係がなくなり、手順の違いもなくなる。

表３　把手の接合

項　目			第Ⅲ様式				第Ⅳ様式	
			Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅲ-4	Ⅳ-1	Ⅳ-2
口縁抉り	櫛描	A類：抉先・把手先		5	5			
		B類：抉先・把手後付		1	1			
		C類：抉後・把手後付	1	1	3		1	
		抉無		2	4			
	凹線	抉先			1		1	
		抉後					4	9
		抉無				3	2	5
把手	櫛描	把手先付	1	6	7	3		
		把手後付	1	4	8	1		

【抉り】 口縁部に施される抉りと把手の成形を含め手順を表３把手の接合にまとめると、櫛描文を施す前に口縁部を抉り把手を先付する「A類」、同じく口縁部を抉り施文後に把手を後付する「B類」、櫛描文の後に口縁部の抉りと把手を後付する「C類」の３手法があり、表３の例数から大和第Ⅲ－１・２様式の水差は、櫛描文を施す前に抉りを成形し把手先付するものと、把手後付も見られることから出現期はA類とB類が共存し、大和第Ⅲ－３様式には施文後に抉りを成形するC類も手法に加わり、大和第Ⅲ－３・４様式の盛行期の水差は、把手を接合する手順が３種の手法によって存立していたようだ。これを生駒西麓型の水差と比較すると、同水差は注口状の口縁部と把手側の口縁端部を抉状に変形させて口頸部を成形し、把手は簾状文の「後付」を典型とするB類で統一している。規範強度の高い土器である生駒西麓型の水差は、大和第Ⅳ様式においても依然としてB類を保ち櫛描文系器種の伝道とでもいうべく土器作りを大和第Ⅳ様式の末まで展開させる。一方、大和第Ⅳ様式の無文期になると、穿孔手法が主体的となり把手の接合手順に違いがなくなる。口縁端部に施す「抉り」は、凹線文の前に抉りを施す「抉先」、凹線文の後に抉りを施す「抉後」の水差があり、大和第Ⅳ様式の無文期の水差には抉後が目立つ。また抉りを施さない「抉無」も目立つ。

【終焉期の特徴】 大和第Ⅴ様式に主体をなす把手付太頸直口型の水差は、同時期に展開する短頸壷と形態、形質が類似する。器面仕上げにケズリを伴うもの、篦ミガキを施すもの、ハケに胴部下半を篦ミガキ調整で仕上げる

など手法は一様でなく、把手も縮小したものがある。把手は貼付手法を伴い剥落するものが多い。それまでの水差とは形態、形質が異る特徴をもつ。把手付太頸直口型の出現は大和第Ⅳ様式に出現する短頸壷に把手を付けた水差（図１－２：No91・110）があり、唐古・鍵遺跡 65 次調査では大和第Ⅳ－２様式の水差（図１－２：No99）を伴う。大和第Ⅳ様式に系譜が求められる。把手付直口型の水差は、大和第Ⅳ様式末に衰退し、短頸壷に系譜を持つ把手付太頸直口型の水差が大和第Ⅴ様式に展開する。

Ⅴ．おわりに

【変遷】 大和第Ⅲ様式から大和第Ⅴ様式にかけて展開した水差は、櫛描文系器種として展開する大和第Ⅲ様式（出現期～盛行期）、櫛描文系器種から無文の土器へ展開する大和第Ⅳ様式（無文期）、短頸壷から派生した水差を伴う大和第Ⅴ様式（終焉期）にわたり、変遷に従って形態や形質の変化が明瞭に現れる器種である。

【系譜】 摂津・播磨では直口壷の口縁端部に抉りを施す摂津型水差が中期前半に展開するが、大和には事例がなく本稿では検討の対象にしていない。把手付直口型の水差が登場するのは大和第Ⅲ－１様式（中期前半）で、水差が出現する前段階の大和第Ⅱ－３様式には把手付の鉢、細頸壷も登場し、系譜的には細頸壷を改良した器種と考える。

【変容】 把手付直口型の水差が畿内一帯で増加するのは大和第Ⅲ－３・４様式と並行（摂津・河内：第Ⅳ様式前半）する時期で、生駒西麓型の水差もこの時期から認められる。中期後半の初めには、水差が畿内中心部（大和、河内、淀川流域）から西摂津、播磨、山城へと広まり畿内一帯で展開する。ところが大和第Ⅳ様式（摂津・河内：第Ⅳ様式後半）には、凹線文を施す無文の土器が普及し、そうした潮流が大和第Ⅲ―３様式に並行する中期後半の初めには播磨、西摂津から広まり、摂津、河内、山城を介して大和へ波及する。櫛描文系器種である大和第Ⅲ様式（出現期・盛行期）の水差は、こうした潮流の影響によって大和第Ⅳ様式には無文の器種へ変容する。その兆候として大和第Ⅲ－４様式には、無文で口頸部に凹線文を施す西摂津の搬入品（図１－２：No54）、或いは胴部に列点文のみを施す西摂津の特徴をもつ水差（図１－２：No51）が観取され、脚型の水差（図１－２：No88・118）も播磨、西摂津からの搬入又は強い影響によるものである。なお、本稿は異形型の水差を設定している。これは他地域からの搬入、模倣品と考えられ、この事例も大和第Ⅲ－３様式～大和第Ⅳ様式に見られる。

【終焉】 弥生後期初頭にあたる大和第Ⅴ様式は、大和第Ⅳ様式の短頸壷から派生した把手付太頸直口型の水差を伴う。出現期より続いた穿孔手法の把手が断絶、把手付太頸直口型の水差は貼付手法で成形した貧弱な把手が施され水差としては衰退の流れを汲む。弥生後期（大和第Ⅵ様式）に展開する長頸壷や短頸壷へ変化する過渡期的様相と考える。

【様相】 水差は、大和第Ⅲ様式の初め（中期前半）～大和第Ⅴ様式（後期初頭）にかけて存続し、破片を含め多くの事例から近畿では愛好された器種と考える。技法では、把手の成形に手法の違いを伴うが、成形後に櫛描文とヘラミガキ仕上げする点は大和では櫛描文系器種に共通する作風で、大和第Ⅲ様式の水差は櫛描文系器種の手法的規範を強く保持している。ところが大和第Ⅳ様式の水差には、そうした特徴が失われる。例えば生駒西麓型の土器が大和第Ⅳ様式に至っても櫛描文系器種の特徴を強く保ち簾状文とヘラミガキ仕上げを丁寧に施しているのに対し、大和は凹線文を施した新たな作風と接することで形質が変容し櫛描文系器種の特徴が失われる。桑原久男氏が「畿内弥生土器の推移と画期」において示唆したように、櫛描文系器種として展開した水差が無文化の影響により櫛描文系器種の特徴を喪失し、多様な調整仕上げをもつ器種へと様変わりしたのである。このことから、大和第Ⅳ様式には櫛描文系器種が衰退し、非櫛描文系器種の台頭が指摘できる。

【文献（表１）】

1　大和弥生文化の会 2003『奈良県の弥生土器集成　本文編・資料編』

2　奈良県立橿原考古学研究所 2006「平城京左京五条二坊十五・十六坪」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十八冊』

3　平群町教育委員会 1987『平群町廿日山（初香山）遺跡昭和 61 年度発掘調査概報』

4　天理市教育委員会 1993「長寺遺跡（７・８次）『天理市埋蔵文化財調査概報（平成４年度・国庫補助調査）』
5　奈良県 1919「山辺郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」『奈良県史跡名勝地調査会報告書第六回』
6　天理市教育委員会 2021「平等坊・岩室遺跡第８次調査報告書」『天理市埋蔵文化財調査報告集』
7　天理市教育委員会 2005「平等坊･岩室遺跡（第 22 次）」『天理市埋蔵文化財調査概報平成 14・15 年度』
8　天理市教育委員会 2010「平等坊･岩室遺跡（第 25 －２次）」『天理市埋蔵文化財調査概報平成 17 年度』
9　天理市教育委員会 2011「平等坊･岩室遺跡（第 28 次）」『天理市埋蔵文化財調査概報平成 18 年度』
10　天理市教育委員会 2017「平成 21 年度平等坊･岩室遺跡（第 31 次）」『天理市埋蔵文化財調査概報平成 21 ～ 23 年度』
11　奈良県立橿原考古学研究所 2020「京奈和自動車道郡山下ツ道ジャンクション建設に伴う遺跡調査報告書」『奈良県文化財調査報告書第 179 集』
12　奈良県立橿原考古学研究所 1989「清水風遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1986 年度』
13　奈良県立橿原考古学研究所 2002「伴堂東遺跡（第１・２次）」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第八十冊』
14　京都帝国大学 1941「大和唐古弥生式遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊』
15　田原本町教育委員会 1978『昭和 52 年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』
16　田原本町教育委員会 1983「昭和 57 年度唐古・鍵遺跡第 13・14・15 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要１』
17　田原本町教育委員会 1984「昭和 58 年度唐古・鍵遺跡第 16・18・19 次発掘調査概報　黒田大塚古墳第１次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要２』
18　田原本町教育委員会 1986「昭和 59 年度唐古・鍵遺跡第 20 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要３』
19　田原本町教育委員会 1986「昭和 60 年度唐古・鍵遺跡第 22・24・25 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要４』
20　田原本町教育委員会 1987「昭和 61 年度唐古・鍵遺跡第 26 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要７』
21　田原本町教育委員会 1989「昭和 62・63 年度唐古・鍵遺跡第 32・33 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 11』
22　田原本町教育委員会 1997「平成８年度唐古・鍵遺跡第 61 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 16』
23　田原本町教育委員会 2009「唐古・鍵遺跡１　範囲確認調査　遺構・主要遺物編」『田原本町文化財調査報告書第５集』
24　田原本町教育委員会 2018「唐古･鍵遺跡第 116 次調査」『田原本町文化財調査年報（2015 年度）25』
25　田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ－土器編１（絵画・記号・文様）－』
26　田原本町教育委員会 2016『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅱ－土器編２（弥生・搬入・特殊）－』
27　田原本町教育委員会 2019『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅳ－補遺編－』
28　奈良県立橿原考古学研究所 1984「多遺跡第６次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1983 年度』
29　田原本町教育委員会 2012「多遺跡第 22 次発掘調査遺物整理事業」『田原本町文化財調査年報（2010 年度）20』
30　田原本町教育委員会 2006「11. 常楽寺推定地第５次調査」『田原本町文化財調査年報（2005 年度）15』
31　桜井市教育委員会 1986『芝遺跡寺ノ前地区発掘調査概報』
32　奈良県立橿原考古学研究所　2005「芝遺跡（18 次）」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十一冊』
33　桜井市教育員会 1996「芝遺跡第 20 次発掘調査報告」『桜井市平成７年度国庫補助による発掘調査報告書　桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 17 集』
34　奈良県立橿原考古学研究所 1998「桜井市芝遺跡第 21 次・22 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第三分冊）1997 年度』
35　奈良県立橿原考古学研究所 2000「坪井・大福遺跡（１・２次）」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第七十五冊』
36　奈良県立橿原考古学研究所 1976「宮瀧遺跡（第６次）」『奈良県遺跡調査概報 1975 年度』
37　奈良県　1938「高市郡新澤村大字一石器時代遺跡調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査会第拾回報告』
38　桜井市文化財協会 2016「芝遺跡第 32 次発掘調査報告書」『桜井市内埋蔵文化財 2003 年度発掘調査報告書５』
39　橿原市教育委員会 1987「昭和 61 年度曽我遺跡・坪井遺跡（クレ橋地区）発掘調査概報」『橿原市埋蔵文化財調査概要４』
40　奈良県立橿原考古学研究所 2013「一町西遺跡Ⅱ（第２次）」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第一一二冊』
41　奈良県立橿原考古学研究所「薩摩遺跡Ⅰ（第１・２・４次）」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第一一六冊』
42　奈良県　1918「高橋委員報告」『奈良県史跡名勝地調査会報告書第５回』
43　東京考古学会 1933「弥生式土器集成図稿畿内之部其二」『考古学４－８』
44　日本考古学協会 1968「畿内地方」『弥生式土器集成本編』

唐古・鍵遺跡に運ばれてきた土器（予察）

－弥生時代後期から古墳時代前期を中心に－

藤　田　三　郎

Ⅰ．はじめに

唐古・鍵遺跡は、これまでの調査成果から弥生時代を通して近畿地方の中核的な集落であったと考えられている。その要素のひとつとして、搬入土器があげられるであろう。唐古・鍵遺跡では、弥生時代全期間を通して各地からの搬入土器やそれら系統の土器が出土している。特に弥生時代中期は、旧国単位ほどの範囲で地域色ある土器づくりが顕著におこなわれており、把握しやすい。その中でも土器胎土に角閃石を多く含み、黒褐色を呈する生駒山西麓産の土器は特に判別しやすいため、多くの研究が進められてきている[1)]。唐古・鍵遺跡では、このような隣接する河内地域（生駒山西麓産の土器を含む）からの土器が多く出土する一方、量的には隣接地域より少ないが200㎞以上の遠隔地、吉備地域や伊勢湾岸地域の土器も出土している。この遠隔地の土器は他の拠点集落でもみられるが、その量は散発的であり、唐古・鍵遺跡には及ばない。このような東方と西方の両地域に拡がりをみせるのが唐古・鍵遺跡の特徴といえよう[2)]。その動向を時期的にみると、弥生時代中期前半までは伊勢湾岸地域を含む東方地域の、中期後半には瀬戸内地域の西方地域の搬入土器が多い。しかし、弥生時代後期以降の状況については、画一的な土器づくりのため、搬入土器の把握状況や研究も進展しておらず、漠然としているのが実状であろう。

このようなことから、本稿では唐古・鍵遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての搬入土器及びその系統土器についての傾向を把握し、唐古・鍵遺跡を含めた大和地域の動向を把握することを目的とする。しかしながら、唐古・鍵遺跡の出土土器が膨大であり、それらの統計的処理がおこなわれていないので、これまで報告書等で示された図面・写真で検討することとする。また、後述するように鉱物的観察の課題もあることから、主に形態的な特徴を中心にみることとし、おおよその傾向を示そうとするものである。

これらの土器の所属時期や土器の時期的な変遷については『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』[3)]、古式土師器については『矢部遺跡』で示された編年[4)]に沿って述べる。

Ⅱ．唐古・鍵遺跡における遺構の状況と搬入土器

（1）後期初頭（大和第Ⅴ様式）

唐古・鍵遺跡における後期初頭は、その直前の大和第Ⅳ-2様式における洪水砂が集落全般にみられ、その災害からの復興の時期としてとらえることができる。この洪水砂は、第1次調査の北方砂層[5)]に代表されるもので、北西側の環濠などを埋没させた[6)]。そして、これら環濠の再掘削がおこなわれたのが、大和第Ⅴ様式の時期である。また、この時期は各地区において、井戸も多く掘削されている。このような状況のため、この時期の遺構には、土器が一括廃棄された良好な環濠や井戸がある。その中で、概要報告などで図面・写真等で示されているものをあげると、井戸では第20次調査SK-104（西地区）、第51次調査SK-104、環濠では第13次調査SD-02〔102〕・SD-05〔105〕（西地区）、区画溝では第61次調査SD-101・102等がある。

基本的には在地の土器が主体を占め、わずかながら散見するのが瀬戸内系や近江系の甕、生駒山西麓産の壷などである。その中で注目されるのが、第51次調査SK-104から出土した吉備産と思われる大形器台（図1－3）である。この遺構では、これ以外にも瀬戸内系の台付壷や台付鉢（図1－1・2）も出土している。この大形器

台は唐古･鍵遺跡でも例をみないもので、これと大きさ･胎土・文様構成で類似する大形広口壷[7]が第19次調査の環濠（SD-204）で出土している。これら２点は出土地点が異なるが、ほぼ同時期・同一地域から搬入された一組として十分に想定され、中期末から後期初頭における吉備地域からの象徴的な土器としてとらえられる。このほか、第13次調査SD-05〔105〕や第20次調査SK-104などでも瀬戸内系甕が出土しており、当該時期の遺構であれば、このような瀬戸内系の甕、あるいはその影響を受けた甕は散見する。これらに対し、近江産（系）の甕は、第20次調査SK-104や第61次調査SD-101・102で出土しているが、少ない。

このように見てくると、弥生時代後期初頭（大和第Ⅴ様式）は、瀬戸内地域（図１－１～５）から搬入土器が一定量存在する。この瀬戸内地域からの搬入土器は、それ以前の中期後半からの傾向と同様であり、継続的な関係が続いていたと考えられる[8]。しかし、後期前半以降は、この地域の土器はほとんどみられなくなり、出土するようになるのは布留0式以降になる。また、生駒山西麓産の土器（図１－６・７）も一定量確保されるし、近江産（系）甕（図１－９・10）も散見し、これらも前時代からの傾向が引き続き継続されていたと考えられよう。

（２）後期前半（大和第Ⅵ-1・2様式）

この時期の遺構としては、土坑や井戸、環濠がある。集落の全域は広く遺構が分布している。井戸などでは、多量の土器が供献されるものがある。代表的なものとして、南地区の第３次調査のPit-05〔105〕や第33次調査の井戸SK-125やSK-133がある。長頸壷を主体とし、その他、甕や高坏、鉢などもわずかに含む構成である。井戸供献という特殊な状況のものであるが、これら土器群には搬入土器はほとんど含まれない。この井戸供献という状況で比較するならば、例えば、北地区の第37次調査のSK-2130では生駒山西麓産の水差し形土器（大和第Ⅲ-3様式）、SK-2104では摂津産の水差し形土器（大和第Ⅲ-3様式）が含まれているものもあり、意識的に搬入土器を包蔵させる行為がそこには読み取れ[9]、後期前半のこの段階とは明らかに異なるのである。また、他の遺構においてもこの時期の搬入土器はほとんど見いだせないのである。

このようなことから、弥生時代後期前半（大和第Ⅵ-1・2様式）は遺構や土器量は全期間を通じても希薄でないにも関わらず、唐古・鍵遺跡での搬入土器は低調である。この時期は、長頸壷を多量に生産し、井戸等に供献する行為が集落内で盛んにおこなっているが、従来からの傾向である供献土器に搬入土器が含まれることはほとんどない。これら供献土器には記号が付けられることが多く、唐古・鍵遺跡の特徴ともいえる行為[10]となっている。このような記号を付す長頸壷を主体とする土器は、大和・河内を中心とした近畿地方中央部に濃密に分布しており、この時期を象徴的に表す形となっている。この象徴的な長頸壷と記号という共通する要素でまとまる近畿中央部の地域的一体感をここに見出すことができる。

（３）後期後半（大和第Ⅵ-3様式）

この時期も前段階から引き続き、土坑・井戸・環濠など同様な遺構が広く分布している。井戸も引き続き多く掘削され、多量の土器が供献されている。また、環濠では多量の土器投棄をもってそれを埋没させているのもこの時期の特徴である。井戸では、第1次調査45号竪穴、第14次調査SK-106などがある。また、環濠では第13次調査SD-04〔104〕・第23次調査SD-1101・第33次調査SD-109・第34次調査SD-102・第40次調査SD-101・第47次調査SD-2101・第61次調査SD-1109などがあり、集落各所で多量の土器投棄がおこなわれた。これら土器には完形土器も多く含まれており、これまで見られた環濠での土器廃棄とは大きく異なっており、環濠を埋める儀礼的なことも想定する必要があろう。

さて、この時期は既に述べたように多量の土器が存在する。この時期の土器総量（体積的）は、感覚的になるが集落の継続期間を通じて最も多い可能性がある。土器はそれ以前に比較して、小形化・薄手化しているから個体数としてはさらに多く見込めるであろう。このような状況の中､これら土器群に搬入土器が散見するのである。

前述、第1次調査第45号竪穴では伊勢湾岸系と推定できる土器（図１-22～24）が出土している。１つは胴部上半に櫛描き文を施文する広口壷で井戸供献土器である。この他、大和では見られなかった台付甕も上層から出土している。また、第14次調査SK-106では、供献さ

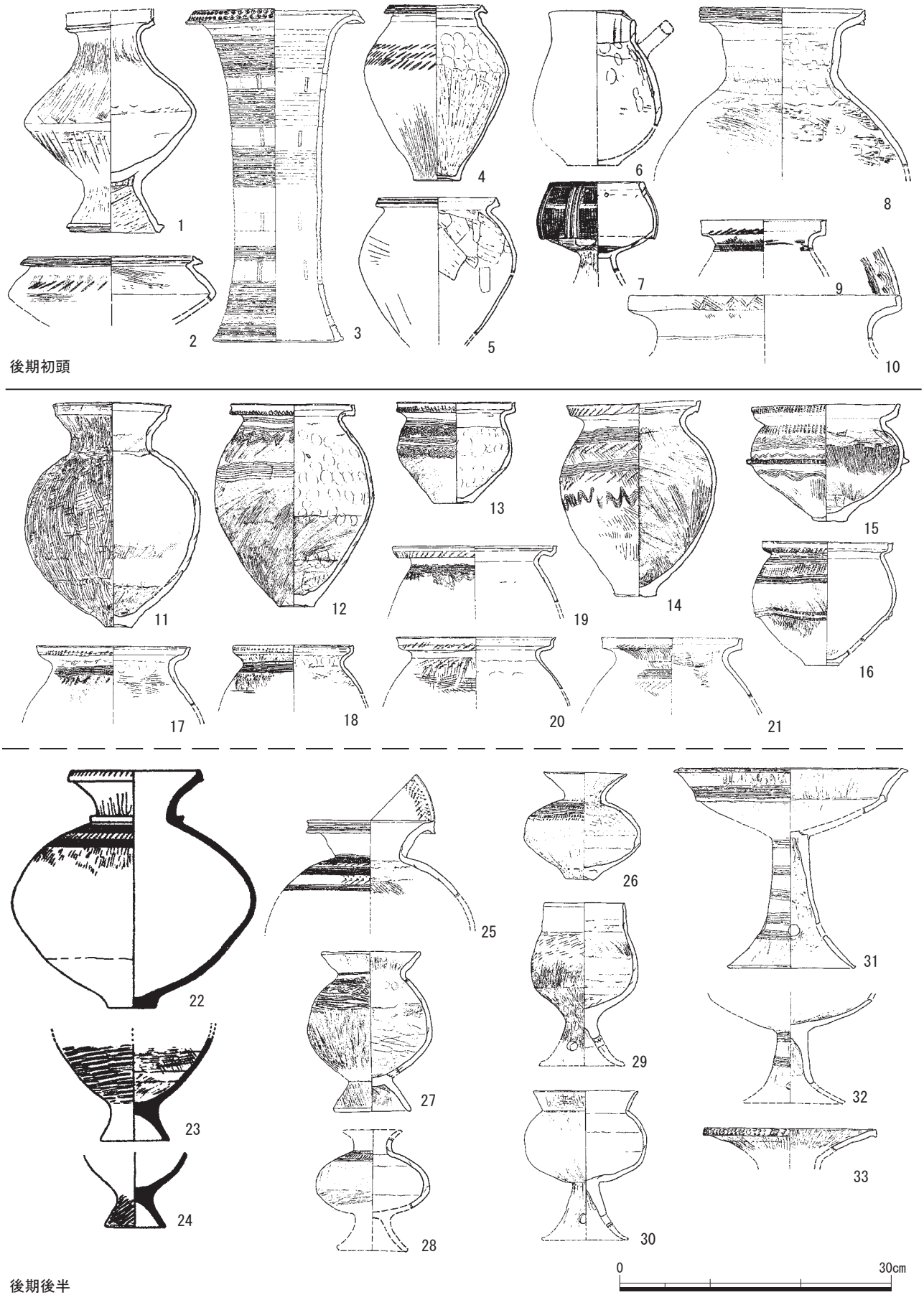


図１　唐古・鍵遺跡出土の搬入（系）土器１（後期初頭・後期後半）

れた完形土器群の中に近江産（系）の壷・甕・鉢（図１-11 ～ 13）が各１点ずつ含まれていた。第 33 次調査の井戸 SK-114 では完形の壷４点の供献があり、そのうちの１点が第１次調査第 45 号竪穴にみられた広口壷同様、胴部上半に櫛描文を施す伊勢湾岸系の壷であった[11]。このように見てくると、井戸の供献土器に搬入土器・系統土器が含まれるような状況が見出せ、前述した中期段階と同様であり、これはその前時期である後期前半のあり方とは異なる。

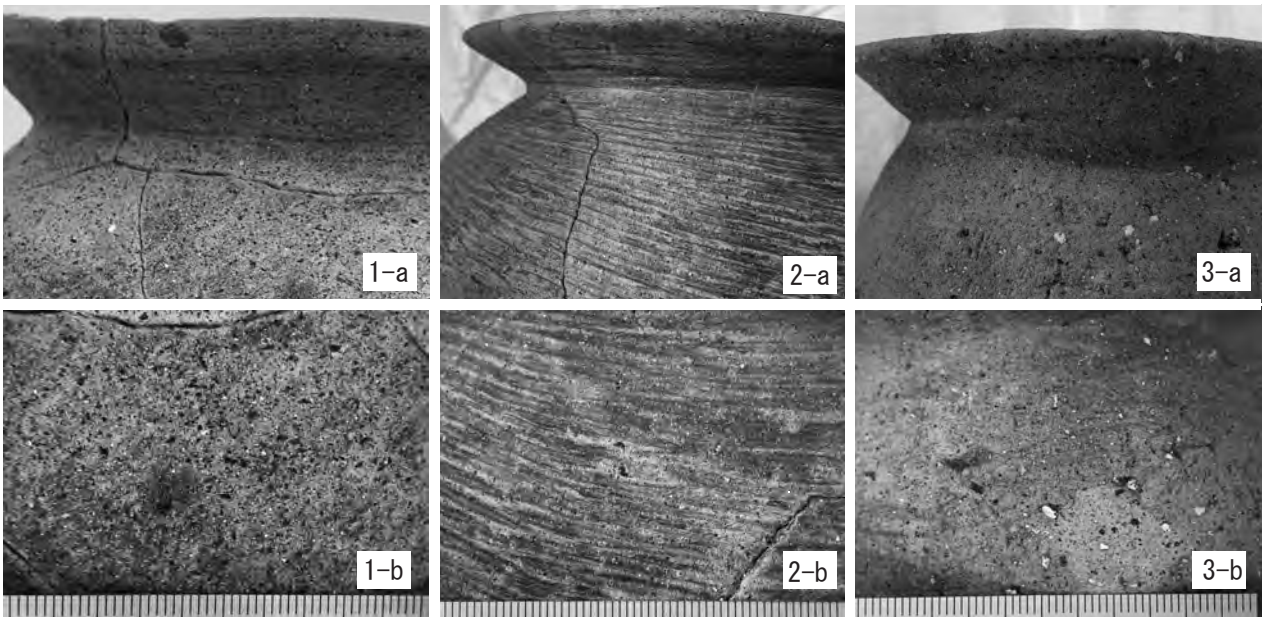
このような搬入土器の傾向は、環濠においても同様である。一連の環濠である第 33 次調査 SD-109 や第 61 次調査 SD-1109 では、埋没過程で多量の土器投棄があり、その中に近江系の甕や鉢、伊勢湾岸系の壷や高坏（図１-16 ～ 19・27 ～ 29・31）がみられた。

このように見てくると、弥生時代後期後半（大和第Ⅵ-3 様式）の搬入土器の状況は、近江から伊勢湾岸地域の東海系の土器が多くみられるのが特徴である。そして、搬入土器の器種は、壷や甕、鉢、高坏などあらゆる器種に及んでいる。また、ここでは図示はしなかったが、特殊な形態を呈する手焙形土器についても受口口縁を有するなど近江系の影響下で成立したと推定され、この手焙形土器もこの時期以降、広く近畿地方に分布することになり、そのもつ意味も大きいと考えられる。一方、瀬戸内系と思われる土器は希薄であることから、この時期はかなり、東方地域との関連性が強くなったと考えられよう。

（４）後期末～古墳時代初頭（大和第Ⅵ-4 様式～庄内式）

大和第Ⅵ-4 様式は、纒向遺跡の東田北構（北部）下層や唐古・鍵遺跡の第 34 次調査の SD-101 を基準に設定したものであるが、唐古・鍵遺跡のこの遺構では、伝統的五様式甕が主体を占め、わずかながら庄内甕の破片が含まれる状況であり、庄内甕の有無が大きな判断基準になってしまい、遺構によってはその判定が困難なものが多い状況にある。このようなあり方は、唐古・鍵遺跡の他の遺構や纒向遺跡を除く大和の大半の遺跡が同じであり、現状では庄内式の中に大枠として包括しておくのが妥当かと思われる。このようなことを踏まえ、唐古・鍵遺跡の遺構をみると、井戸はわずかで前段階から引き続き環濠へ土器投棄がみられる。このような時期の特定できる遺構は、集落内で局部的な分布となる。しかしながら、遺跡全体を覆う上部の遺物包含層は、大和第Ⅵ-3 ～第Ⅵ-4 様式の土器で形成されており、これら土器は前述したように時期の特定が困難であることから、土器総量としてはある程度見積もる必要があろう。

さて、井戸では第 40 次調査 SK-101 があり、壷９点が供献されていた。この井戸の上部では、角閃石を含み、黒褐色を呈す大和形庄内甕（図２-46）が出土している。本稿では、このような胎土を示す一群の土器を「奈良盆地東南部産」と推定している。奥田尚氏は、纒向遺跡付近の砂礫の特徴を示し、角閃石の含む土器の存在を指摘している[12]。鉱物的見識のない筆者にはそれら鉱物の



1-a・b：生駒山西麓産河内形庄内甕、2-a・b：奈良盆地東南部産大和形庄内甕、3-a・b：奈良盆地東南部産弥生形甕

写真１　唐古・鍵遺跡第 40 次調査 SD-101 出土甕

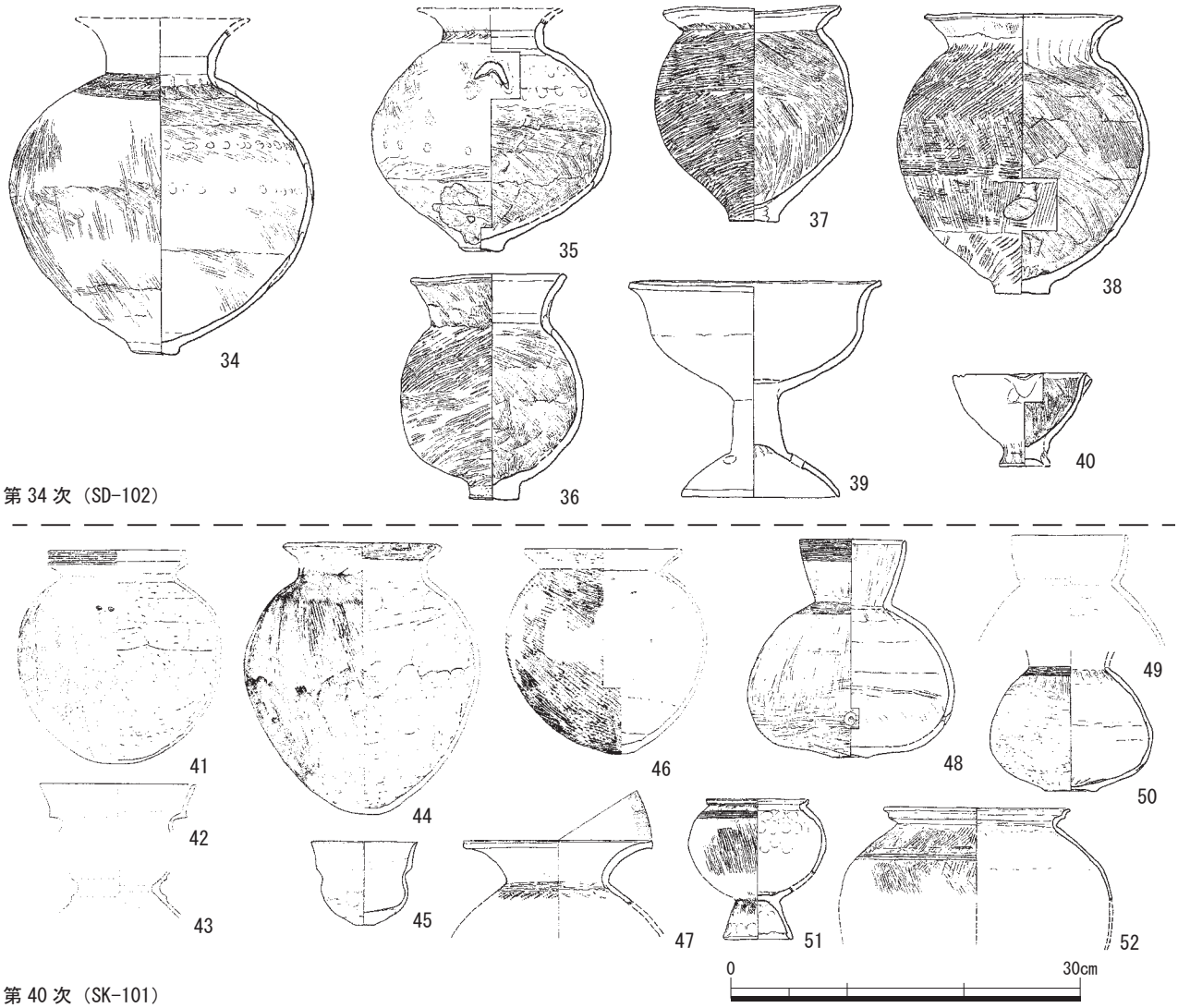


図２　唐古・鍵遺跡出土の搬入（系）土器２（後期末～古墳時代初頭）

表１　唐古・鍵遺跡出土搬入（系）土器一覧表

	次数	遺構	搬入元等	時期	文献		次数	遺構	搬入元等	時期	文献		次数	遺構	搬入元等	時期	文献
1	51	SK-104	瀬戸内系	V -1	1	19	69	SD-1109	近江	VI -3 ?	9	37	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2
2	51	SK-104	瀬戸内系	V -1	1	20	69	SD-1108	近江	VI -3	9	38	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2
3	51	SK-104	吉備	V -1	1	21	99	SD-8101	近江	VI -3	10	39	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2
4	40	SD-102B	瀬戸内系	IV -2	1	22	1	第 45 号竪穴	伊勢湾岸系	VI -3	11	40	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2
5	20	SK-104	瀬戸内系	V -2	3	23	1	第 45 号竪穴	伊勢湾岸系	VI -3	11	41	90	SD-101	吉備	布留 0	13
6	19	SD-204	生駒山西麓	V -1	4	24	1	第 45 号竪穴	伊勢湾岸系	VI -3	11	42	90	SD-101	山陰系	布留 0	13
7	19	SD-204	生駒山西麓	V -1	4	25	69	SK-1112	伊勢湾岸	VI -3	9	43	90	SD-101	山陰系	布留 0	13
8	77	SD-4108	紀伊	V -1	1	26	69	SK-1112	伊勢湾岸系	VI -3	9	44	48	SK-1104	讃岐	布留 1	13
9	20	SK-104	近江	V -2	3	27	33	SD-109	伊勢湾岸	VI -4	12	45	94	SD-101	越前	庄内	14
10	61	SD-102B	近江	IV -2	5	28	33	SD-109	伊勢湾岸系	VI -4	12	46	40	SK-101	奈良盆地東南部	庄内	13
11	14	SK-106	近江系	VI -3	6	29	69	SD-1109	伊勢湾岸	VI -3	9	47	79	SK-108	伊勢湾岸	庄内	9
12	14	SK-106	近江	VI -3	6	30	65	SD-101W	伊勢湾岸系	VI -3	9	48	79	SK-109	伊勢湾岸	庄内	9
13	14	SK-106	近江	VI -3	6	31	69	SD-1109	伊勢湾岸	VI -3･4	9	49	90	SD-101	伊勢湾岸	布留 0	13
14	24	SD-107	近江	VI -3	7	32	69	SD-1101B	伊勢湾岸系	VI -3･4 ?	9	50	69	SD-1102B	伊勢湾岸	VI -3･4	9
15	23	SD-1101	近江	VI -3	8	33	69	SD-1109	近江	VI -4 ?	9	51	98	SK-106	伊勢湾岸	布留	9
16	69	SD-1109	近江	VI -4 ?	9	34	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2	52	69	SD-1109	伊勢湾岸	布留	9
17	69	SD-1109	近江	VI -4 ?	9	35	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2						
18	69	SD-1109	近江	VI -4 ?	9	36	34	SD-102	奈良盆地東南部	VI -4	2						

詳細について判別することは困難であるので、一般的な纒向遺跡出土の土器を基準に土器の表面的観察で比較してそれと同種と思われるものを「奈良盆地東南部産」の土器としておきたい。唐古・鍵遺跡出土の奈良盆地東南部産と推定している土器は、胎土に角閃石を含み色調が黒褐色を呈していることから、生駒山西麓産の土器との判別が困難なものもある。弥生時代中期の生駒山西麓産の土器であれば､胴部下膨れの形態･簾状文多用の壷･鉢、ミガキ調整をおこなう甕などその特徴から判別可能であるが､弥生時代後期以降においては土器が近似しており、判断するのは難しい。しかし、唐古・鍵遺跡出土の両者の胎土に含まれる鉱物等を比較するならば、生駒山西麓産では角閃石の粒度が細かく、胎土に多く含んでいるのに対し、奈良盆地東南部産は角をもつ２～３㎜ほどの粒度の角閃石であり、胎土に含まれる量は前者に比較して少ない。また、長石なども同等の大形のものを含んでいる（写真１・右)。また、埋没環境が悪く酸化等している土器では､胎土自身（生地）の問題と考えられるが、生駒山西麓産の土器表面は粉末状になるものが多い。以上のような特徴が見出せるが、胎土に含有される砂粒は土器の成形･調整段階で胎土内に沈み込むことからして、判断の難しいものも多い（写真１・中)。

しかしながら、他の唐古・鍵産の土器との比較、その量の多さ（前時代までの生駒山西麓産土器の搬入量との比較)、当該地域間の距離からして奈良盆地東南部産として推定できると判断している。

このようなことから、角閃石を含み、黒褐色を呈する奈良盆地東南部産と推定できる土器を抽出するならば、第34次調査の環濠SD-102などにおいて多く見出すことができる。この環濠では､多量の土器投棄がおこなわれ、１割以上を超える土器がそれであった｡それらの器種は、壷･甕･高坏･鉢（図２-34～40)･手焙形土器（SD-103)で構成されている。また、注目されるのは、この奈良盆地東南部産の土器には他地域の影響を受けたものが存在することである。広口壷の胴部上半に櫛描き文様を施文する伊勢湾岸系のもの（図２-34)、受口口縁を有する近江系甕、河内形庄内甕を模した大和形庄内甕（図２-46)がある。このようなことから、これら地域とは唐古・鍵遺跡に留まらず、奈良盆地東南部地域が前時代から引き続き強い関係性の中にあったといえよう。

これに対し、上記以外の地域からの搬入土器はそれほど目立たない。このことから唐古・鍵遺跡の多量の奈良盆地東南部産の土器は、古墳時代初頭の唐古・鍵遺跡での遺構が希薄な状況の中、纒向遺跡を含めた奈良盆地東南部地域との人の移動を含む密接な関係ができていたことを示していると考えられる。ただし、この奈良盆地東南部産の土器は、唐古・鍵遺跡に限らず唐古・鍵遺跡の周辺遺跡でも出土[13]しており、今後、奈良盆地内での各遺跡への広がりと出土比率が課題となろう。

（５）古墳時代前期（布留０・１式）

古墳時代前期は、前段階より遺構数が格段に増加し、集落各所に分布する。井戸や環濠などがあり、環濠では前述の埋没した大環濠を再掘削しているのである。これら遺構において、各地域の搬入土器がみられる。井戸では、第11次調査SK-11〔SK-111〕や第38次調査のSK-101で山陰系の鉢や甕、第48次調査のSK-1104では讃岐系の壷（図２-44)、第79次調査のSK-109では伊勢湾岸系の壷（図２-48）が供献土器として出土。このように井戸の供献土器に搬入土器が含まれる状況は、前段階から傾向を引き継いでいるのである。また、第40次・第47次調査の一連の環濠SD-101･SD-2101では山陰(系)･吉備・河内・紀伊・近江（系)・伊勢湾岸（系)、奈良盆地東南部の各種土器が含まれていた。このような環濠にみられる搬入土器の状況は、第24・69・90次調査の環濠においてもみられる状況で、集落全域に及んでいる[14]。

このように見てくると、古墳時代前期における搬入土器の状況は地域数も増え、かなり闊達といえる。搬入元となった地域は、前時代に比較して周辺地域を含む広範な地域となる。

Ⅲ．まとめ

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての唐古・鍵遺跡での搬入土器の傾向をみてきた。資料的な制約がある中、おおまかであるが、本遺跡での搬入（系）土器の傾向を示せたのではないかと考えている。本遺跡での搬入(系)土器の特徴は､前時代から一変して古墳時代前期(布留０・１式）に広範な地域の搬入土器がみられ、各器種に及んでいることである[15]。その量は、前段階よりは

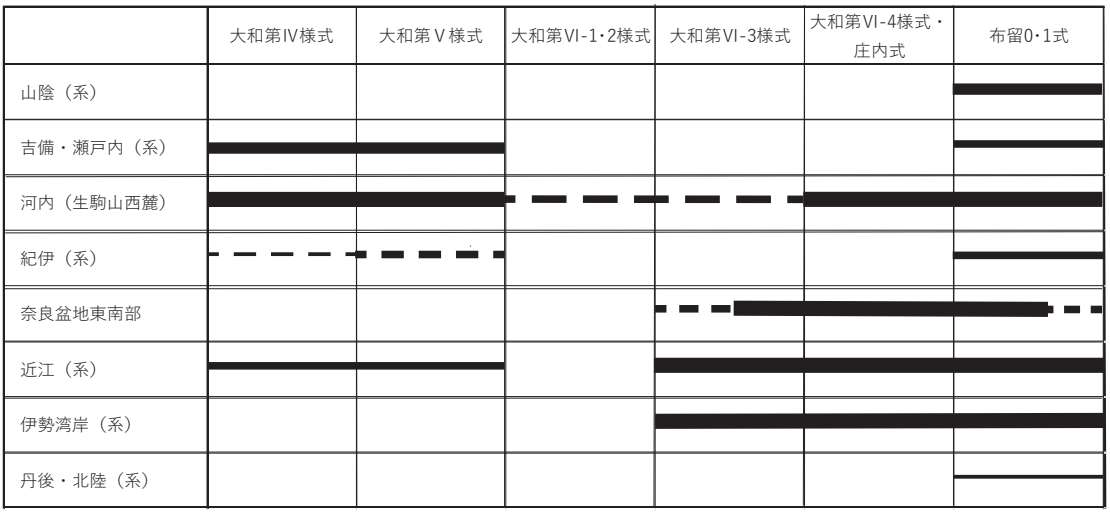


図３　唐古・鍵遺跡における各地域からの搬入（系）土器の変遷図

多いように思われるが、纒向遺跡には到底及ばない。ただし、この地域的な広がりは纒向遺跡と同様であることが重要である。纒向遺跡の搬入土器については、これまでに石野博信・関川尚功[16]、寺澤薫[17]諸氏による分析があるが、橋本輝彦氏は巻野内家ツラ地区の分析を通して東海地域からの搬入土器が主体を占めているという傾向を総括している[18]。このような傾向は、唐古・鍵遺跡では、その前段階である大和第Ⅵ-3様式に始まっていた点を重要視する必要があろう。また、山陰や吉備を含めた瀬戸内の西方地域からの流入について、纒向遺跡へのルートを想定するならば、大和川を遡上するルートが一般的であり、唐古･鍵遺跡はそのルート上にあたる。言い換えれば､唐古･鍵遺跡を経由して纒向遺跡へと入っていくことになり、唐古・鍵遺跡は前衛的な位置に当たる。この時期の唐古・鍵遺跡にみる搬入土器の状況はそのことを物語っているといえよう。ただし、前述したとおり、統計的処理をおこなったものでないため、在地土器との比率の問題があるが、纒向遺跡の搬入土器の比率状況とは大きく開きがあると思われる。また、このような唐古・鍵遺跡にみられる搬入土器の傾向は、当時代の大和地域の諸遺跡でもある程度みられることであり、唐古・鍵遺跡を特別に位置づけることはできない。しかしながら、纒向遺跡とは同じ初瀬川の上・下流域で、わずか４㎞の近距離である点は重要である。唐古･鍵遺跡は、布留期には集落を拡大させており、纒向遺跡の前衛的な位置を占めたと推定でき、搬入土器はその一端を示していると考えられよう。

このように唐古・鍵遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期までの搬入土器の状況は、各時代の隣接地域や遠隔地域とのつながりを見る上で重要な動静を示したといえる。そして、唐古・鍵遺跡を通して奈良盆地という地域が、時代ごとに他地域の関係をどのように変遷させていったのかをみることができた。弥生時代後期初頭までの西方地域と連携、後期前半の没交渉あるいは内向的・閉鎖的な集落状況[19]、その後の後期後半の近江・伊勢湾岸の東方地域との繋がり、古墳時代初頭の奈良盆地東南部としての一体感、古墳時代前期の広範な地域連携という大きな流れがそこに読み取れるのである（図３）。すなわち、王権が誕生するまでの奈良盆地東南部の情勢の縮図を唐古・鍵遺跡の搬入土器が示していると推定するのである。

【註記】

１）秋山浩三　2017「「河内系」土器について」『弥生時代のモノとムラ』　新泉社
２）唐古･鍵考古学ミュージアム編　2018『唐古･鍵考古学ミュージアム常設展示図録』図１-37　田原本町教育委員会
３）藤田三郎・松本洋明　1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
４）寺澤薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
５）小林行雄・末永雅雄・藤岡謙次郎　1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究室
６）田原本町教育委員会編　1983「唐古・鍵遺跡第13次調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要１』
田原本町教育委員会編　1984「唐古･鍵遺跡第19次調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要２』

7）田原本町教育委員会編 1984「唐古・鍵遺跡第 19 次調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要２』の第 32 図

8）川上洋一 2003「第 4 節 搬入土器 1. 奈良県以西地域の搬入土器」『奈良県の弥生土器集成 本文編』大和弥生文化の会

9）搬入土器の井戸供献という行為の意義については、改めて考察する。

大和弥生文化の会編 2003「本文編」『奈良県の弥生土器集成』第 69 図 -224･225、第 70 図 -236 3 大和弥生文化の会

10）藤田三郎 1982「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ

11）田原本町教育委員会 1989「昭和 62･63 年度 唐古・鍵遺跡第 32･33 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 11』の図版 30-1

12）奥田尚 2013「土器の砂礫構成と土器の生産地推定－纒向遺跡周辺とその搬入品を中心にして－」『纒向学研究』第 1 号桜井市纒向学研究センター

13）藤田三郎 2015「佐味遺跡採集の遺物」『田原本町文化財調査年報 23』田原本町教育委員会 第 5 図 -34 など

14）唐古･鍵考古学ミュージアム編 2018『唐古･鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol. 24 古墳時代黎明』図８－２ 田原本町教育委員会

田原本町教育委員会 2016「第Ⅱ部 考古資料目録 ２．搬入土器」『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅱ －土器編２（弥生・搬入・特殊）-』の 030 搬入土器（瀬戸内地方）～ 053 搬入土器（伊勢湾岸地方）

15）搬入土器の類型については、都出比呂志（1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店）、秋山浩三（2017『弥生時代のモノとムラ』新泉社）諸氏ら多くの論考があり、唐古・鍵遺跡の搬入土器についても類型化が必要と考えるが、今回抽出した搬入土器・あるいはその系統の土器は、判別できた極一部であるという認識をしている。言い換えれば、各地域特有の形態を有する器種、黒褐色系や灰褐色系などの識別しやすい胎土に偏っている傾向があり、これら諸特徴まで至らない器種、唐古・鍵在地以外の胎土のもの（摂津・山城地域など）も多く取り残された状況にあることは間違いない。このため、各器種が揃っているもの以外の判断は、今後の課題としておく。

16）石野博信・関川尚功 1976「第２章 畿内地方の古式土師器 ３．土器の移動に関する問題」『纒向』桜井市教育委員会

17）寺澤薫・堀大介 2002「第６章 出土遺物の分析報告 第１節 出土土器の統計的報告」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財報告書 第 89 集 奈良県立橿原考古学研究所

18）橋本輝彦 2021「纒向遺跡巻野内家ツラ地区における土器様相」『纒向学研究』第９号 桜井市纒向学研究センター

19）秋山浩三氏による河内湖東岸部遺跡群や河内平野部の生駒山西麓産の解析では、弥生時代後期においては生駒山西麓産の土器比率が高いことが示されており、逆の見方をすれば、当該地での搬入土器は少ないということになる。このような河内の状況は、大和地域とも連動しているとみなすことが可能ではと考える。

秋山浩三 2006「弥生拠点集落における土器搬入の実態」『研究調査報告』（財）大阪府文化財センター

大和地域の環濠集落は、弥生時代後期に至っても環濠を維持しており、搬入土器にみるこのような傾向はそれを物語っているとみなすこともできる。しかし、中期・後期初頭段階では環濠を維持しながらも搬入土器はある程度みられるので、環濠の有無だけでは判断できず、他の要素もみていく必要がある。

【挿図出典】

1．大和弥生文化の会編 2003「本文編」『奈良県の弥生土器集成』大和弥生文化の会

2．大和弥生文化の会編 2003「資料編」『奈良県の弥生土器集成』大和弥生文化の会

3．田原本町教育委員会 1986「昭和 59 年度 唐古・鍵遺跡第 20 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要３』

4．田原本町教育委員会 1984「昭和 58 年度 唐古・鍵遺跡第 16･18･19 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要２』

5．田原本町教育委員会 1997「平成８年度 唐古・鍵遺跡第 61 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 16』

6．田原本町教育委員会 1983「昭和 57 年度 唐古・鍵遺跡第 13･14･15 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要１』

7．田原本町教育委員会 1986「昭和 60 年度 唐古・鍵遺跡第 22･24･25 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要４』

8．田原本町教育委員会 1987「唐古・鍵遺跡第 21･23 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要６』

9．藤田三郎 2009「第Ⅳ章 特殊遺物 第３節 搬入土器」『田原本町文化財調査報告書 第５集 唐古・鍵遺跡Ⅰ特殊遺物・考察編』田原本町教育委員会

10. 田原本町教育委員会 2006「唐古･鍵遺跡第 99 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 14 2004 年度』

11. 小林行雄・末永雅雄・藤岡謙次郎 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究室

12. 田原本町教育委員会 1989「昭和 62･63 年度 唐古・鍵遺跡第 32･33 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 11』

13. 清水琢哉 2015「古墳時代前期の唐古・鍵遺跡」『古墳出現期土器研究』第３号 古墳出現期土器研究会

14. 田原本町教育委員会 2004「唐古・鍵遺跡第 94 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 13 2003 年度』

※ 図表記以外の本文中に記載した土器については、紙幅の都合上、各調査概報・田原本町文化財調査年報・唐古・鍵考古学ミュージアム図録等を参照されたい。

纒向遺跡出土の人頭形土製品

大　野　　薫

Ⅰ．纒向遺跡の「土偶」

弥生時代後期～古墳時代をメインとする纒向遺跡だが、わずかながら縄文時代の遺物も出土している。本稿は、縄文時代の「土偶」と報告されている人頭形の土製品をとりあげ､その時期や系統を再検討するものである。

本稿で取り上げる人頭形土製品について、まず報告書（石野・関川 1976）から関連する部分を引用しよう。

「土偶頭部（図 183、図版 211） 辻地区太田北微高地の奈良時代河道（５G9Z 区粗砂層２）から出土した。後述する銅鐸片と同じ流路の下流にあたる。

大きさは、顔面で上下 5.6 ㎝･左右５㎝あり、頭長 3.7 ㎝である。

顔面には、眉・目・耳・鼻・口を写実的に表現している。眉と鼻は粘土帯を貼りつけ、鼻孔もあらわす。目は細い工具によるひっかきだけで、口は凹面をつくる。耳は、粘土を指でつまみ出して薄くし、耳たぶには１孔をあけている。

鼻の左右に各２条の凹線がある。これは髭とみるよりは、入墨を表現したものとみた方がよいかもしれない。

頸がつくであろう部分には、頭部側に上径 1.6 ㎝・下径 0.6 ㎝・深さ 2.4 ㎝の孔があけられていて、孔面は平滑に整形されている。

眉と鼻を粘土帯で表現し、頭部を立体的につくる土偶は、縄文時代中期以降にみられ、後期にはより普遍的につくられているようである。近畿地方でもっとも多量の土偶が出土している奈良県橿原遺跡では、扁平な土偶とともに目・鼻をつくる立体的な土偶もみられる。入墨の表現をもつ土偶も、縄文時代にはよく知られているところである。

頭部への穿孔は、橿原遺跡の土偶に多い口から腹部へ貫通する孔とは異なり、同遺跡の一土偶にみられる肩部を中空につくり、頭部に孔がつづく手法と共通するのかもしれない。

従って、本土偶の時期は縄文時代後、晩期と考えられる。」（石野・関川『纒向』本文編 373 ～ 374 頁）

「土偶」が出土した奈良時代河道とは別物だが、縄文時代後期の河道も報告されている。「辻旧河道地帯の４

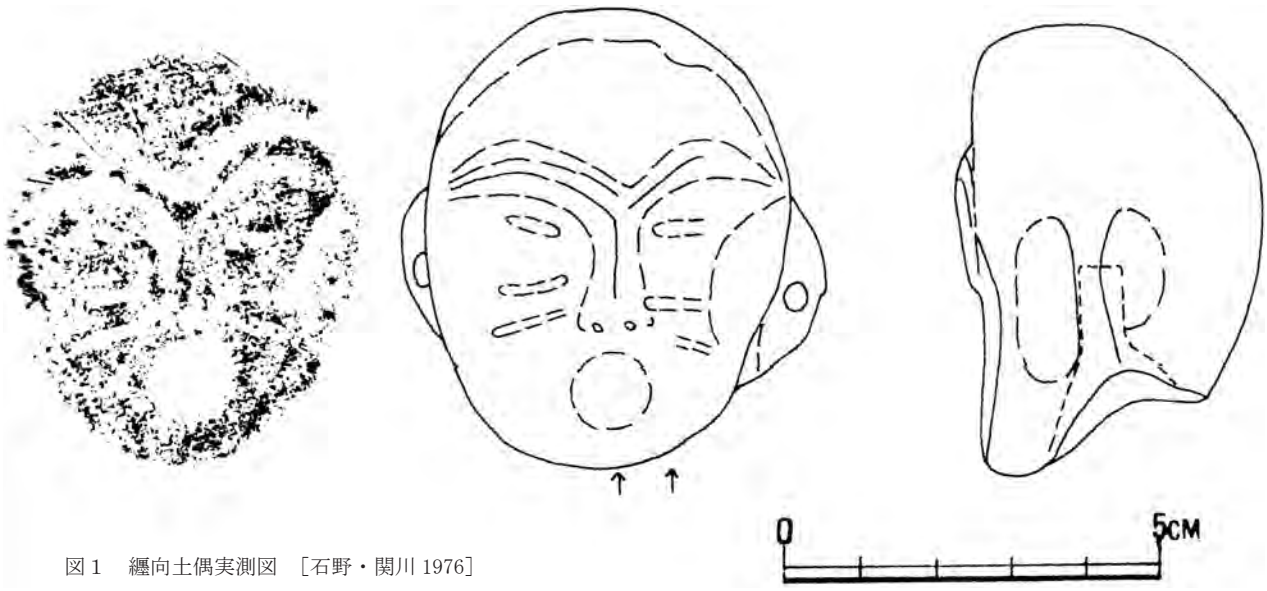


図１　纒向土偶実測図 ［石野・関川 1976］

FT ライントレンチ中央部（４F14・15U 区）において、古墳時代前期河道と土壙群の基盤層の下層に白色粗砂層の堆積がみられた。白色粗砂層は南北 10 ｍ余にわたって南から北へ傾斜して堆積し、層内は白色で“汚れ”はない。この中から少量の磨滅した宮滝式土器片を採集した。河道と言うよりは、縄文時代後期における地盤形成にかかわる堆積かもしれない。（改行）この他、太田北微高地を貫流する奈良時代河道内から縄文時代後・晩期と考えられる土偶頭部が１点検出されている。」（『纒向』本文編 108 頁）。

綜括では土偶に触れるところはないが、「縄文時代晩期と弥生時代前期の遺物は、従来の採集品も含めて全く検出されていない。」とある（『纒向』本文編 580 頁）。

Ⅱ．纒向土偶の観察

本例は半球形を呈する人頭形の土製品である。

頸部以下はまったく失われていて、頭部のみが遺存する。頭部は上下長が 6.0 ㎝、左右 5.0 ㎝（両耳を含めると 5.6 ㎝）、厚さ（前後長）4.0 ㎝で、中実である。正面観は下側が若干尖り気味の倒卵形を呈している。子細に観察すると、この頭部は、半球形の頭部に板状の顔面を貼付けて形成したもののようである。その痕跡は右顎あたりのごく一部にしか見いだせないが、顔面の胎土には金雲母が目立つが、頭部の胎土には金雲母がほとんど含まれないのである。

眉は細い粘土隆帯を連弧状に貼付けて作る。右眉端部が一部剥離している。鼻は連弧状眉の中央から下に伸びる。高さは２～３㎜で控えめだが、幅は 10㎜以上ある。径１㎜ほどの円形の刺突で鼻孔を表現している。眼は、眉の下、鼻の横に、横方向のごく軽い短沈線で表現する。右眼の周囲は白っぽい色調を呈するが、偶然の所産か否か判然としない。眼の下、鼻下端の横の両頬に、各２本の短沈線を施文する。「イレズミ」と考えられよう。口は径 10㎜ほどの円形で、ごく浅いくぼみである。耳は頭部側面の中央よりやや下がった位置に、頭部から粘土をつまみ出して作っているようだ。そのうえで、顔面側から後頭部側にむけて径３～４㎜ほどの貫通孔を入れている。耳が頭部からつまみ出して作ったものであるためか、耳孔は耳の背後の後頭部の一部をえぐっている。頭頂部・後頭部には特段の施文や貼付は認められない。

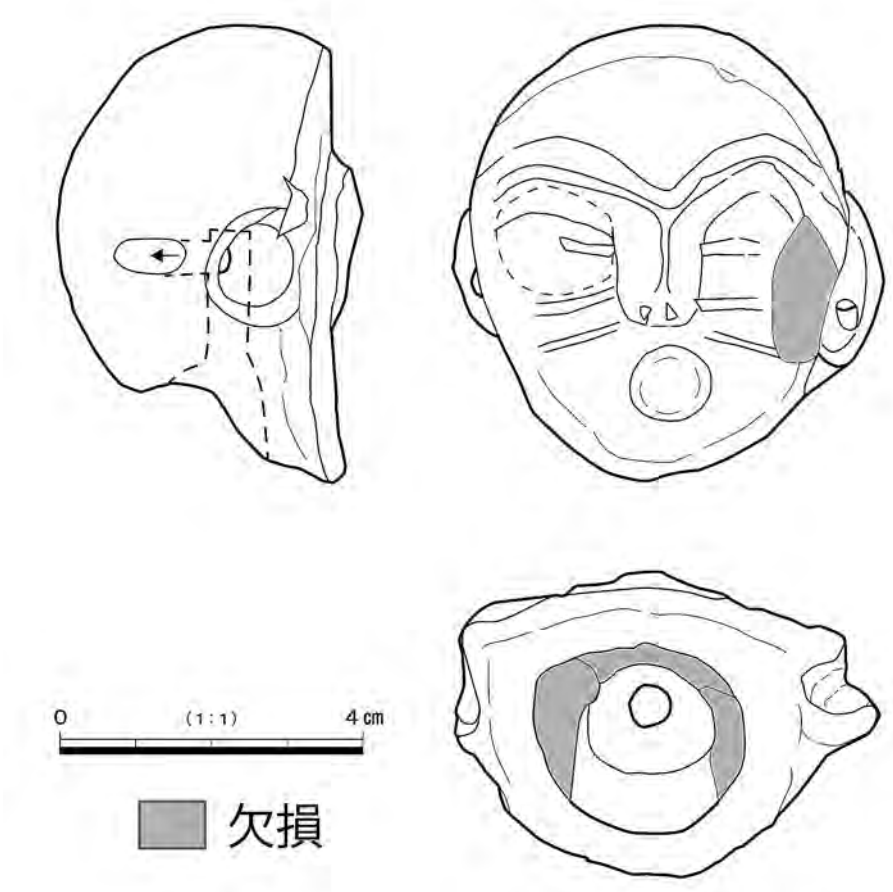


図２　纒向遺跡人頭形土製品実測図（大野）

頸部自体は失われているが、頸部側から上方の頭部側にむかって入れられた深い円孔が残されている。円孔は全体で深さ 20 ～ 30㎜あるが、頭部側 17㎜は径５㎜の円形を呈し、それ以下は頸部にむかって広がっている。これは頭部と胴部をつなぐための丸棒状のものの痕跡かと思われる。上方の径５㎜の部分は丸棒がむき出しの状態であり、下方の広がった部分は頸部をつくる粘土痕跡の一部かと思われる。

なお、後頭部外面下端に「マ

キムク MT5G9Z 粗砂２　－７　80」の注記がある。

Ⅲ．西日本縄文土偶概説

近畿地方では、三重県粥見井尻遺跡、滋賀県相谷熊原遺跡において、縄文時代草創期に全国に先駆けて土偶が出現し、早期においても押型文土器に伴って、三重県大鼻遺跡、大阪府神並遺跡で土偶の出土がある。これら草創期・早期土偶は手足の表現を欠いた胴体像で、頭部も小さな突起状に作っており、顔面表現はない。前期の確実な土偶は、西日本では今のところ認められておらず、中期に属する八点の土偶も、滋賀県域に北陸・東海系の土偶が搬入される程度で、近畿地方の大部分の地域では前期～中期においては土偶が製作されることはなかったと考えられるのである。

写真１　纒向遺跡人頭形土製品
（大野撮影）

近畿地方で再び土偶が製作されるようになるのは後期に入ってからである。後期以降の近畿地方の土偶は大きく二種類あり、ひとつは人の形を表し頭部や手足を有する「人形土偶」であり、いま一種は頭部や手足を省略した「分銅形土偶」である。この二種の土偶は後期初頭中津式期には確実に存在しており、出土例は現時点では決して多くはないが、後期以降の土偶に繋がっていくのである。

初期の人形土偶の系譜は後期前葉でいったん途切れ、後期中葉に東海地方で成立した今朝平タイプ土偶が西に波及することによって、新たな人形土偶が各地で出現する。三重県天白遺跡の 75 点を筆頭に、奈良県八条北遺跡、和歌山県鳥居遺跡、兵庫県佃遺跡など、近畿地方以西に散漫に分布しているが、この今朝平タイプ土偶も顔表現を欠くことが特徴とされている。このように近畿地方の土偶は、草創期以降、後期中葉まで、一部の搬入品を除いて一貫して顔表現を欠いているのである。

晩期には奈良県橿原遺跡の 196 点、大阪府馬場川遺跡の 67 点など、土偶を大量に出土する遺跡が顕著になる。九州では、熊本県下で後晩期あわせて 400 点以上の数の土偶が知られている。とはいえ後期以降の土偶の分布は、九州熊本地方や近畿中央部に分布の濃密な地域があるものの、全般的に散漫なものであり、四国地方のように土偶が著しく少ない地域もある（大野 2020）。

Ⅳ．近畿地方の人頭形土製品

このように近畿地方の土偶を通覧してくると、「纒向土偶」を縄文土偶の流れのなかで、あるいはそれに続くものとして位置づけることは困難であると考えられよう。ここでは、纒向土偶と比較しうる人頭形土製品を近畿地方およびその周辺で探してみよう。

大阪府東奈良遺跡

この人頭形土製品は頭部のみが遺存している。頭部は中実で、高さ約６㎝を測る大型品である。顔面には眼・眉・鼻・耳・口が写実的に表現されているが、鼻の隆起から左耳・左頭部にかけての部分を欠失している。眼と口は抉り込むことによって、眉・鼻・耳は粘土を貼り付けることによって表現する。耳は粘土隆帯を渦巻状に貼

り付けているが、隆帯上の２カ所に切り込みがある。頭頂部から後頭部にかけて大きな粘土隆帯をトサカ状に貼り付けている。頸は太く長い。頸には彩色は認められないが、顎より上には赤色顔料を塗布している。集落をとりまく環濠内から出土しており、弥生時代前期新段階の土器と共伴する（濱野 1995）。

大阪府目垣遺跡

目垣遺跡第 97-1 次調査の弥生第Ⅱ様式期の大型土坑から出土した。人面付土器の人面部分と考えられ、瓢形の壺形土器の口縁部に人頭をつけたものである。人頭部は中空で、眉・鼻・耳は隆帯を貼り付け、眼・口は横長三角形に切り抜いて作っている。耳には穿孔がある。額の上から両側頭部にかけて庇状に粘土が貼り付けてある（濱野 1999）。

京都府雲宮遺跡

この人頭形土製品は中実の頭部のみが遺存している。頭部の高さが約８㎝の大型品で、口の表現を欠くものの、全体として写実的な顔面表現を有している。頭頂部から後頭部にかけて粘土の剝離した痕跡があり、トサカ状の隆帯があったものと考えられる。縄文時代晩期末の流路内から出土しており、船橋式土器・長原式土器・浮線網状文土器が出土するとされる（中島 1991）。

京都府温江遺跡

温江遺跡第６次調査の弥生時代前期集落を取り囲む環濠内から出土した。頭部のみが遺存している。頭部は立体的かつ写実的なつくりで、眼と口は横長の沈線で表現する。印象だけの見方だが、眼を閉じているようにもみえる。眉・鼻・耳は粘土を貼り付けて形づくる。眉は連

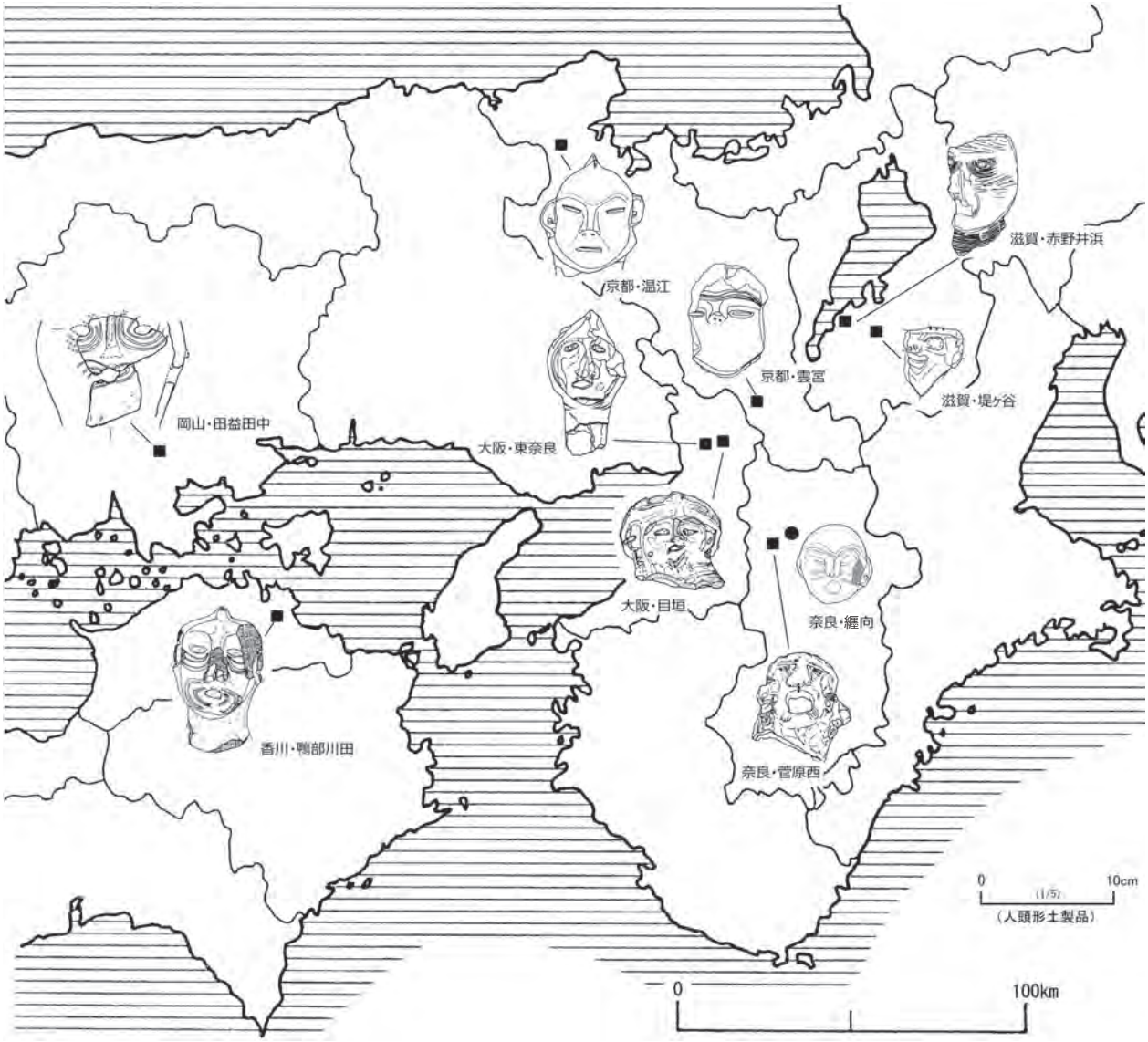


図３　近畿地方およびその周辺の人頭形土製品

弧状で、鼻とつながっている。しっかりした鼻には鼻孔も表現されている。両耳には貫通孔がある。頭頂部から後頭部にかけてトサカ状の隆帯がある。後頭部のトサカ状隆帯の下部には、横位の粘土隆帯が貼り付けられており、隆帯上に横方向の沈線が入れられ、かつ横位粘土隆帯を上下に貫通する穿孔がある。髪を束ねた表現かとみられている（岩松・肥後 2010）。

滋賀県赤野井浜遺跡

土偶形容器の顔面部とされるもの。体部から顔面部がやや前方に突き出す。眉および鼻は粘土隆帯貼り付けによってつくり、眼および口は棒状工具による刺突でくぼませている。目の下側に「櫛描文」による弧線を入れる。口の周りにも弧線文がある（木戸・中村 2009）。

滋賀県堤ヶ谷遺跡

土偶形容器の顔面部とされるもの。顔面部分のみが遺存している。目は刺突によりくぼませ、鼻は粘土を貼り付けている。目の上の頭部部分、および耳裏に小さな刻み目を施文している（中村 2012）。

奈良県菅原西遺跡

報告書によると「人形土製品は、頭部のみ残る。中空であり、顔面、後頭部には、まつ毛、頭髪などを表現した線刻がある。まつ毛は下方向にのみ表現されており、閉じた目を表している。眉と鼻は隆起している。口は大きく開いており、両頬部分には貫通する穿孔が１ヶ所ずつ認められる。頭部は閉じて丸く作られており、頭頂部には横方向の隆帯が認められる。頭部の特徴や、口を開けた表現については、大阪府茨木市の目垣遺跡出土の人面付き土器の類例が近いと考えられる。胎土は、生駒山西麓産のものである。」。自然流路 SR133 出土。縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が伴う（前澤 2012）。

香川県鴨部川田遺跡

中実の頭部およびやや長い頸部が遺存している。現存長 11.0cm、顔面はほぼ平坦で、長さ 8.5cm、幅 6.6cm を測る。顔面から後頭部までの厚さ 7.0cm。頸部径 4.5cm を測る。顔面は写実的な表現で、両目・口は長楕円形に刳り抜いて表現する。鼻には鼻孔がある。両耳を失っているが、各２カ所の穿孔痕跡が認められる。両目の下には各２条の、口の周りにも２条の弧状沈線がめぐる。弥生時代前期新段階のものとされる（森下 2002）。

岡山県田益田中遺跡

土偶形容器と考えられるもの。上端・下端とも失っており、眼から口にかけての部分が遺存している。顔面部分での容器の直径は 10cm 程度であろう。眼および口は穿孔で作り、それぞれの周囲に２～３本の弧状沈線が施文されている。鼻は粘土隆帯を貼り付けて作る。弥生時代前期中葉の４区河道 11 出土（伊藤 1999）。

Ⅴ.「纒向土偶」の位置づけ

近畿地方およびその周辺の人頭形土製品を瞥見してくると、弥生時代前期を中心とする時期に、点々と人頭形土製品が出土していることがわかる。

その特徴を縄文時代土偶と比較すると、①土偶よりも一回り、あるいは二回りほど大きい、②顔面表現に消極的な土偶に比べて、写実的な顔面表現を有する、③頭頂部にトサカ状隆帯を有するものがある、④顔面にイレズミとみられる線刻を施文するものが多い、⑤頭部のみが出土し、胴部以下の出土が知られていない、などの点を指摘できよう。

「纒向土偶」もこれらの特徴のうち、③の頭頂部のトサカ状隆帯は有さないものの、①、②、④、⑤の特徴については備えているものとしてよかろう。以上の点から、「纒向土偶」は弥生時代前期の人頭形土製品と判断できるのである。ただし、纒向遺跡の人頭形土製品は他の例に比べると若干小型に作られている。それは偶然の所産か、あるいは何らかの意味を有しているのか、今後とも検討していきたい。

未解決の問題も多いが、土偶とは異なる新たな人頭表現の誕生と理解するなら、それは弥生文化の伝播に伴って、生じたものと考えるのが良かろう。人頭形土製品の出土遺跡が各地の拠点的集落と重なる点とも整合的である。

あとがき

纒向学研究センターが設立 10 周年を迎えられるとのこと、心からお喜び申し上げます。

寺沢所長から記念論集への投稿のお誘いをいただきましたが、纒向学研究センターが研究のメインとされている時代のことは筆者には手に負えませんが、かねてより

筆者にとって宿題になっていた「纒向土偶」のことでお許しをいただきました。纒向遺跡からは著名な日本最古の木製仮面が出土しており、設楽博己氏の近著『顔の考古学　異形の精神史』（吉川弘文館 2021 年）でも冒頭にとりあげられているところですが、それに比べると「纒向土偶」は露出度が著しく低く（埋蔵文化財センターには展示してありますが）、残念に思っていたところです。短文ではありますが、今回、弥生時代前期の人頭形土製品の一例として紹介させていただくことができ、感謝いたします。

なお、資料の熟覧ならびに実測にあたり、奈良県立橿原考古学研究所、同研究所勝川若菜氏、桜井市教育委員会文化財課橋本輝彦氏、同課森暢郎氏にお世話になりました。トレスは久保洋子氏を煩わせました。各氏に厚く御礼申し上げます。また寺沢薫氏にはかねてよりご指導賜っており、深く感謝いたします。

【引用・参考文献】

石野博信・関川尚功 1976『纒向』 桜井市教育委員会

伊藤晃 1999『田益田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 140　岡山県教育委員会

岩松保・肥後弘幸 2010「温江遺跡第６次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告書』第 139 冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

大野薫 2020「西日本の土偶研究」『考古学ジャーナル』№.745 ニュー・サイエンス社

木戸雅寿・中村健二 2009『赤野井浜遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

中島皆夫 1991「左京第 235 次（7ANLRB-2 地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度　財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

中村健二 2012「滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について」『紀要』25　財団法人滋賀県文化財保護協会

濱野俊一 1995「東奈良遺跡出土の弥生時代前期の土偶」『MUSA 博物館学芸員課程年報』第９号　追手門学院大学文学部博物館研究室

濱野俊一 1999『平成 9･10 年度発掘調査事業報告 付．目垣遺跡（第 97-1 次・98-1 次）発掘調査略報』 茨木市教育委員会

前澤郁浩 2012『柿の内東遺跡 1 次、菅原西遺跡 1 次、川西根成柿遺跡 1 次、発掘調査報告書』大和高田市埋蔵文化財調査報告書第 10 集　大和高田市教育委員会

森下友子 2002『鴨部・川田遺跡Ⅲ』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 10 冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・国土交通省四国地方整備局

近畿地方における黥面の消長

設　楽　博　己

Ⅰ．はじめに

考古学の伊藤純は、中国の黥刑の記事から記紀の黥面を墨刑とみた。そして、黥面埴輪を鼻上翼形と顔面環状形の近畿型とハの字形の関東型に分類したうえで、男性と武人に多いことが、軍事にかかわる氏族にかたよるという記紀の黥面の性格と矛盾しないと論じた（伊藤 1984）。

古代史の吉田晶は、『魏志』倭人伝の「黥面文身」の記述を読み解き、倭人伝の「男子みな大小となく黥面文身す」という記事から、男性の文身を部族同盟の軍事的な必要とみる説を 1985 年に（吉田 1985）、そして 1995 年には戦士の標識とする説を展開した（吉田 1995）。

筆者はそれらをはじめとする先学に導かれ、３世紀を中心に日本列島の広い範囲にみられる黥面絵画を分析した（設楽 1990）。論文を出してから 30 年以上たつが、論旨の大枠はかわっていない。それでも研究を続けていると、それまでには気づかなかった点やあらたな疑問が不思議と出てくるものである。

本稿では、京都府向日市森本遺跡の人面付土器を中心として周辺の資料をまじえながら、縄文時代にさかのぼり古墳時代にいたるまでの近畿地方の黥面表現の消長を論じ、あらたな視点から３世紀の黥面絵画と４～６世紀の黥面埴輪の意義をさぐってみたい。

Ⅱ．黥面絵画とイレズミの実在検証

筆者は、３世紀の黥面絵画、ひいては縄文時代の黥面土偶は実際のイレズミを表現したとの立場に立つのだが、『古事記』と『日本書紀』（記紀）と黥面埴輪にもとづいてその根拠を示す。これは繰り返して論じているので（設楽 2001 など）詳細はそれらに譲り、要点だけを述べる。

記紀には全部で６ヶ所、「黥面」と「文身」という入墨の記述がある。それらは、①神武天皇（初代：架空）を除くと、景行天皇（第 12 代：４世紀前半）から雄略天皇（第 21 代：５世紀後半）までの記述であり、②黥面は近畿地方の男性に限られ、文身は東国で男女がともにしており、③政府転覆未遂など物騒な事件にかかわり、④近畿地方は隼人系の人びとの、東国は蝦夷の習俗で、⑤馬曳など動物にかかわる身分の低い部民が黥面をするが、身分の高いものはしていない、⑥安曇目など目とかかわるといった特徴をもつ。

黥面埴輪は、①４～６世紀に製作され、②線刻には近畿型と関東型の二者がありほぼ男性に限られ、③盾持人や武人が多く、④力士や琴弾など芸能にかかわる埴輪は熊襲－隼人系と考えられ、⑤馬曳の埴輪に認められる一方、身分の高い人物にはみられない、⑥目尻や目のまわりなどに線刻がほどこされる、といった特徴がある。

両者の特徴の一致は、何を示しているのだろうか。記紀の編者は埴輪のことを知っていたが、人柱にかえて人物埴輪をつくっただの生きた馬が一夜にして土の馬にかわったといった程度の認識だから、黥面埴輪の特徴をとらえて記述をしたとは思えないし、記紀に書かれることを意識して埴輪がつくられたことはあり得ない。意図せずに一致した性格の二つの資料は信憑性を保証しあっているので、黥面埴輪の線刻がイレズミであるのは間違いない。

近畿型の黥面埴輪の目の縁に描く噴水のような線刻（図２－47）[1)] は、弥生時代終末の３世紀の土器に描かれた黥面絵画（36）と同じだ。また、頬にハの字の線刻を左右対称に描く関東型黥面埴輪は、３世紀の黥面絵画様式を引き継いでいる。弥生時代の顔面線刻絵画は彩色習俗の表現だという意見もあるが、それが古墳時代に痛

みを伴う習俗に変化したのは、その逆はあり得てもおよそ理解しがたい。したがって、３世紀の黥面絵画もイレズミを表現したとみてよい。

弥生時代の顔面線刻のモチーフを、さらにさかのぼっていくと（42 → 30 → 14)、縄文時代晩期終末の東海地方から関東地方にひろがる黥面土偶のモチーフ（３）に型式学的につながっていく。したがって、３世紀の黥面絵画をイレズミと認めた論法からすれば、系譜的につながる縄文時代晩期終末の黥面土偶も、実際のイレズミをある程度忠実に表現していた可能性がある。

以下、この論証と可能性に依拠して論を進めていく。

Ⅲ．縄文時代晩期～弥生時代中期の黥面資料

近畿地方を中心に岡山県域と四国地方を含めた縄文時代晩期から弥生時代中期までの黥面の資料[2)]を瞥見する。

（１）縄文時代晩期

黥面土偶　滋賀県守山市播磨田（はりまだ）城遺跡（６）から２点と同市赤野井浜（あかのいはま）遺跡から１点、黥面土偶が出土している。いずれも額に横方向の線刻がある、愛知県田原市伊川津貝塚例（５）などと共通型式の黥面土偶である。報告では縄文時代晩期とされており、類例から晩期終末の大洞Ａ式－馬見塚式に併行する時期とみてよい。

顔に線刻のある土偶　奈良県桜井市纒向（まきむく）遺跡から、顔に線刻のある土偶が出土している（７)。後頭部が半球状の、近畿地方によくあるタイプの後・晩期の土偶である。左右の頬に２条の線刻を加える。黥面土偶の定義は、縄文時代晩期後半に定型化して複雑化した顔の線刻がある土偶であり、纒向遺跡の土偶の顔の線刻は定型化していないので、黥面土偶の範疇からははずれる。

（２）弥生時代前期

黥面土偶　香川県さぬき市鴨部（かべ）川田（かわた）遺跡から、黥面土偶が出土している（15)。東海地方から中部高地地方の後頭部結髪土偶の影響を受けた土偶であり、頭頂部に特徴的な隆起をもつ。目の下と口のわきに２条の弧線を加えるが、いずれも中部高地地方以東の黥面土偶や土偶形容器（９）の装飾と関係が深い。

人面付土器　岡山県岡山市田益田（たますたなか）中遺跡から黥面線刻のある人面付土器が出土している（14)。カーブからすると瓢形土器の上半部の可能性がある。目と口はくり抜かれる。目頭から目の下に３条の弧線を加える。もっとも目に近い線は目を囲むようだが、一部欠損しているので､確実ではない。左右の口元に２条の弧線を加える。口元の弧線は、東北地方の縄文時代後･晩期の土偶（１）に起源があり、東海地方から関東地方の弥生時代中期の人面付土器に引き継がれた線刻（19･23）と関係が深い。

人頭形土製品　岡山県総社市上原（かんばら）遺跡から、薄手の人頭形土製品が出土している（16)。丸い頭頂部に隆起帯をもつ。目から下を欠失しているが、目はくり抜かれている。目の上に３条の弧線を加える。

（３）弥生時代中期

土偶形容器　赤野井浜遺跡から土偶形容器が出土している（11)。顔の左半分から右目の一部と頸にかけて残存している。線刻は、目頭から目の下にかけて弧状の線が３～４本、目尻に横方向に３本引かれている。頸に多条の線刻を加えている。弥生時代中期前半であろう。

人面付土器　京都府向日市森本遺跡と大阪府八尾市亀井遺跡から人面付土器が出土している。

森本遺跡の人面付土器（28）は壺形土器の胴部に人面を装飾するが、鼻から下は欠失している。目はくり抜かれている。目の輪郭に沿って上下に弧状の線刻を加える。

亀井遺跡の人面付土器（29）は水差形土器であり、口縁の直下の胴上部に指頭で目と鼻をくぼませて表現し、目のまわりに涙滴形の、鼻のまん中には口縁部にまで一筋の線刻を加える。中期後半の第Ⅳ様式である。

Ⅳ．森本遺跡の人面付土器の線刻をめぐって

（１）森本遺跡出土人面付土器の時期

森本遺跡の人面付土器は非黥面とされてきた。この土器の特徴と時期に触れたのち、黥面であることの理由を述べる。

壺形土器の胴部のもっとも張った部分に人面を造形している。眉と鼻は粘土を貼りつけてつくり、目をくり抜く。口は欠失していてわからない。

目の上下に､目の輪郭に沿って１条の沈線が施される。

目頭と目尻は線が途切れており、目を取り巻くものではない。

表面はハケメ調整されていて、文様はない。

この土器は、弥生時代後期の水路の底部から発掘された。畿内第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の土器が数多く含まれる層からの出土であり、黥面の類例から、土器の時期を弥生時代中期後半、第Ⅳ様式とみなす。

（２）森本型黥面絵画の提唱

森本遺跡例と同時期の亀井遺跡例は、目の上下に１条の沈線を加えるか、一筋の線で目を囲む。東日本に視野を広げると、弥生時代中期後半に一筋の線で目を囲む黥面があることに気づく。長野県安曇野市町田遺跡（26）、長野県松本市百瀬遺跡（27）の人面付土器であるが、町田遺跡例は目頭で線が途切れていて、目尻も途切れれば、森本遺跡例と同じ表現になる。関東地方でも千葉県市原市三嶋台遺跡の人面付土器（25）は、目のまわりに弧線を入れるか目のまわりをくぼませるかしている[3)]。

このような目を１条の沈線で囲む、あるいは目の上下に１条の沈線を加えた黥面絵画は広域に認められるので、「森本型黥面絵画」としておく。

より古い時期の資料をみてみよう。弥生時代前期の田益田中遺跡例は、目を囲む一筋の線刻を基礎にしてその下に２本の線を加えて三重にしている。一方、上原遺跡例は目を囲まずに、目の上に３本の線を加える。弥生時代中期前半の福井県福井市糞置遺跡の人面付土器（22）はまだ複雑な線で描いているが、中期後半の森本型黥面絵画になると複雑な目のまわりの線刻が一重線になるという推移をたどることができる。

いずれにしても、弥生時代中期後半に黥面の省略化や単純化が進んだ結果である。それはイレズミの衰退を物語るものかもしれないが、弥生時代中期後半まで近畿地方を含む比較的広い範囲で黥面の表現が存続していたことは認めてよい。

森本遺跡例は黒澤浩のいう人面付土器Ｂ（黒沢 1997）であり、これまで非黥面とされてきた。これらの資料に対するあらたな見方として問題提起しておきたい。

この線刻を二重まぶたや目袋の表現などではなく黥面と認める理由はほかにもあるが、それは次の章で述べる。

（３）黥面の衰退の理由

弥生時代中期後半に黥面の表現が衰退していく理由は何だろうか。それを考えるには、非黥面の人物造形がいつからみられるのか探らなくてはならない。

島根県松江市西川津遺跡（13）や京都府与謝野町温江遺跡（12）から弥生時代前期の人頭土製品や土偶が出土しているが、これらは非黥面である。非黥面は、弥生時代中期初頭の大阪府茨木市目垣遺跡の人頭形土製品(24)から中期の分銅形土製品（31）や後期の岡山県岡山市百間川兼基遺跡の人物土製品（39）、神奈川県横浜市上台遺跡のいわゆる顔壺（34）にまで継承されている。

西川津遺跡と温江遺跡は遠賀川文化の遺跡であり、土製品の頭の隆起は鳥に扮した装飾とみられる。当時の大陸に黥面の風習はないので、非黥面の人頭土製品は大陸の影響を受けて成立した可能性を考えたい。

縄文系の黥面の風習は、大陸文化の影響によって衰退していったのではないだろうか。

Ⅴ．近畿地方弥生時代後期の黥面絵画不在論再考

（１）不在論批判を受けて

愛知県安城市亀塚遺跡例（36）に代表される３世紀を中心とした黥面絵画は、備讃地方と濃尾地方に濃密に分布する（35・40・41）。複雑な線刻による類似した様式の黥面絵画として「備讃濃尾型黥面絵画」と呼んでおく。

筆者は備讃濃尾型黥面絵画を集成して、近畿地方に一切認められないことを述べた。これに対して、北島大輔は京都府京都市水垂遺跡の弥生時代後期の壺に描かれた例を提示した（北島 2013）。櫛描文であり、あごと頬の線刻から備讃濃尾型黥面絵画を模倣しているのは明らかである（38）。しかし、備讃濃尾地方の画一的な例とは隔たっている。

そこであらためて近畿地方の弥生時代後期の人物絵画に目を通すと、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡の人物はいずれも非黥面である。一方、大阪府茨木市溝咋遺跡例(37)は非黥面とされていたが、黥面の可能性がないとは言えない。

溝咋遺跡例の線刻は目のまわりのイレズミを描いたのであり、目が省略されたか左目のみ１本線で描いた森本

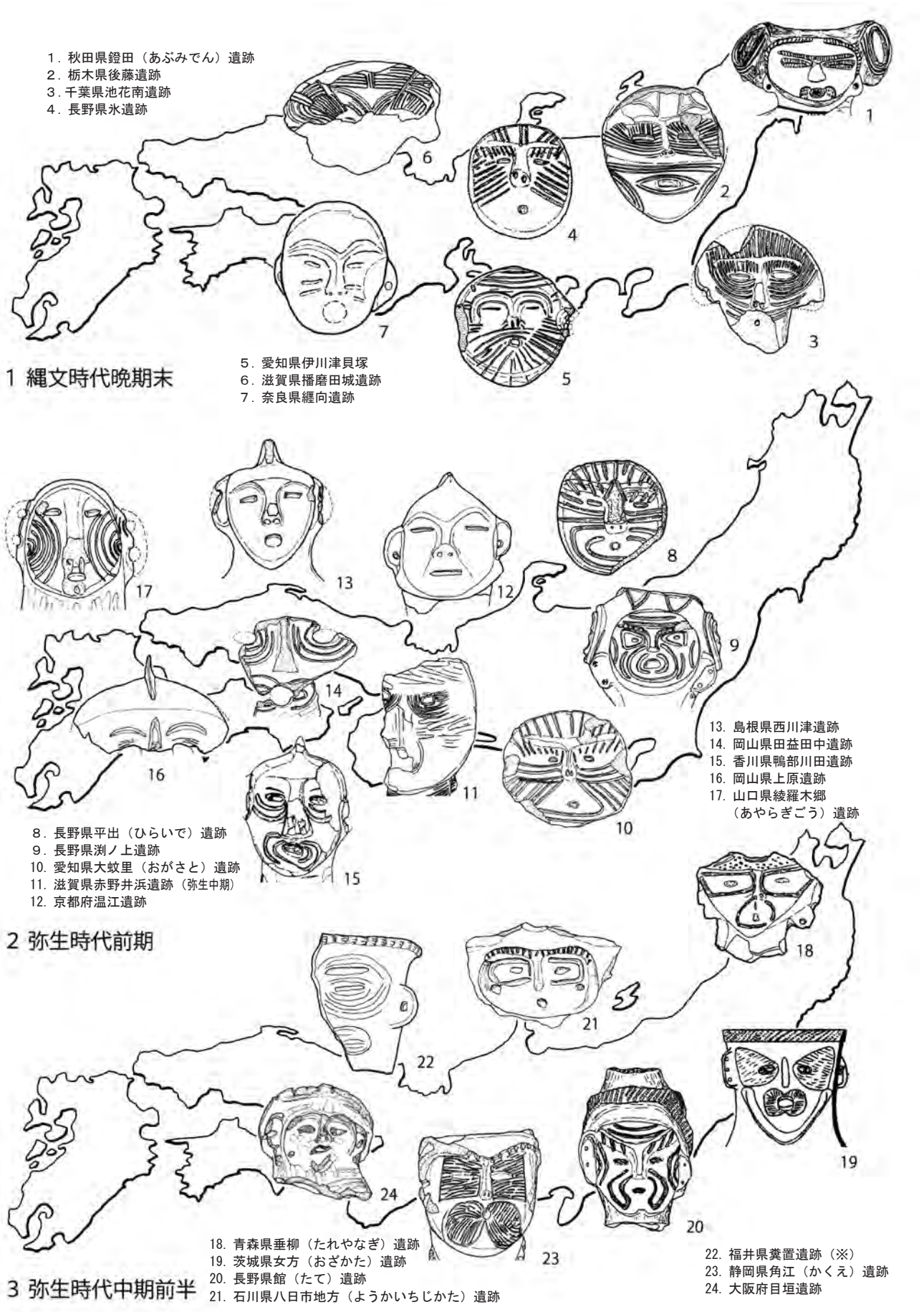
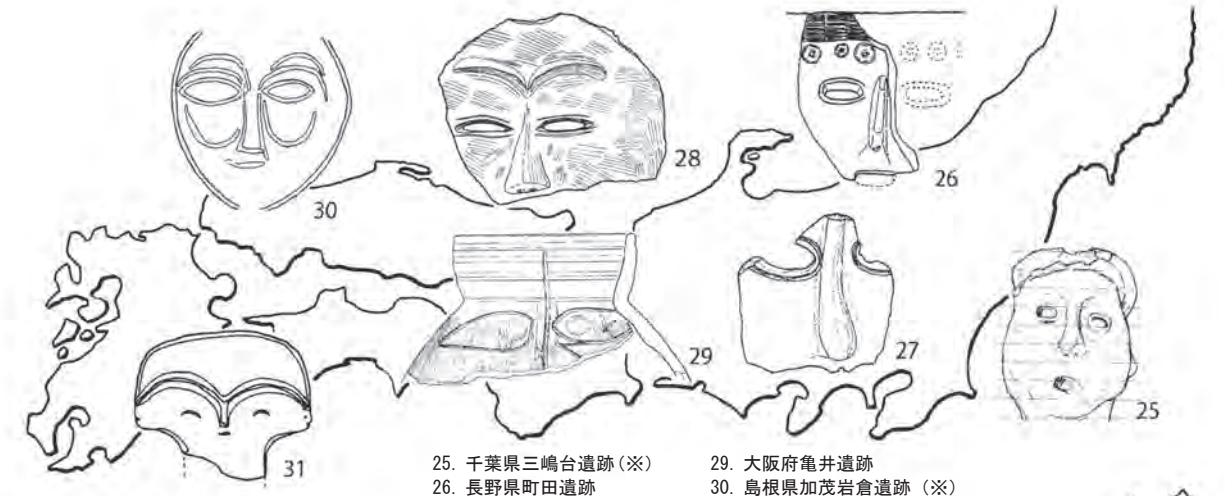
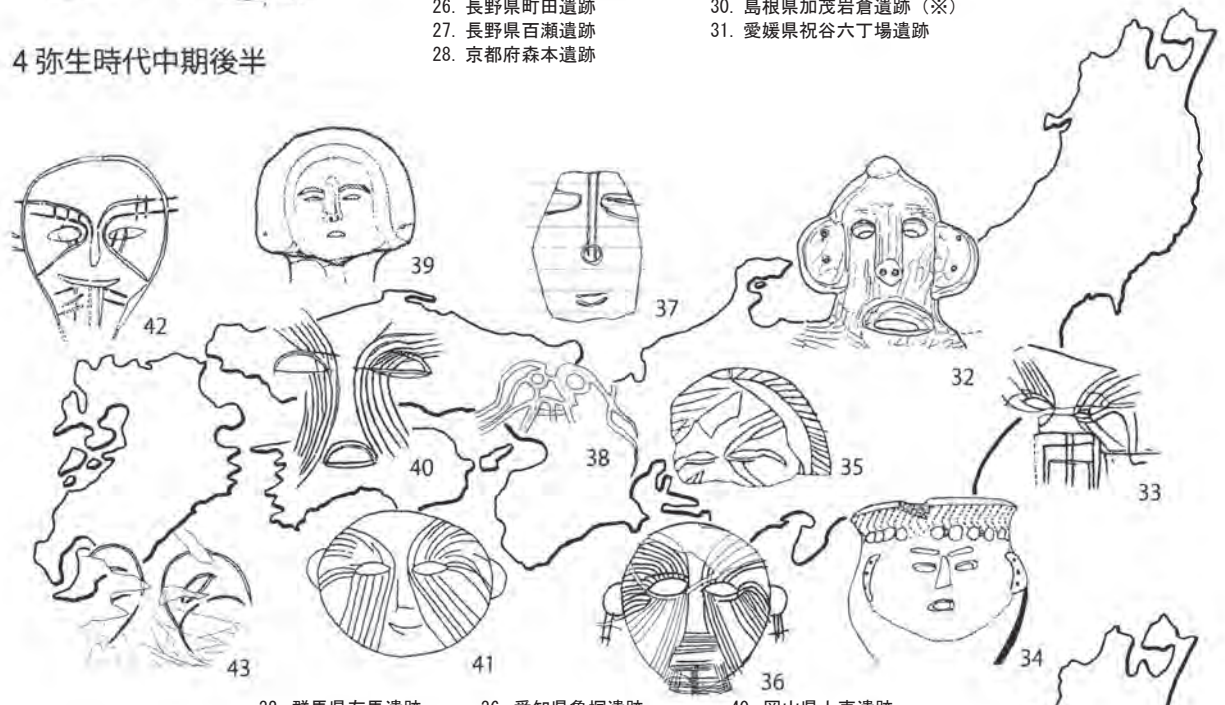


図１　黥面と非黥面の分布（１）縮尺不同



4 弥生時代中期後半

25. 千葉県三嶋台遺跡（※）
26. 長野県町田遺跡
27. 長野県百瀬遺跡
28. 京都府森本遺跡
29. 大阪府亀井遺跡
30. 島根県加茂岩倉遺跡（※）
31. 愛媛県祝谷六丁場遺跡



5 弥生時代後期

32. 群馬県有馬遺跡
33. 千葉県大崎台遺跡
34. 神奈川県上台遺跡
35. 愛知県廻間遺跡
36. 愛知県亀塚遺跡
37. 大阪府溝咋遺跡（※）
38. 京都府水垂遺跡
39. 岡山県百間川兼基遺跡
40. 岡山県上東遺跡
41. 香川県仙遊遺跡
42. 福岡県上鑵子遺跡
43. 宮崎県下郷遺跡

6 古墳時代

44. 群馬県下郷天神塚古墳
45. 群馬県塚廻り 1 号墳
46. 京都府時塚 1 号墳（※）
47. 大阪府長原 45 号墳
48. 奈良県四条 1 号墳（※）
49. 奈良県荒蒔古墳（※）
50. 宮崎県百足塚（新田原 58 号）古墳

図２　黥面と非黥面の分布（２）縮尺不同

型黥面絵画とみなす余地がある。その理由は、他の人物絵画の目はこれほど大きく表現されておらず、形も目を取り巻く線刻に近いからである。また、鼻筋の二本の縦線は亀井遺跡例の鼻筋の線とおなじくイレズミの可能性がある。

（2）３世紀の近畿地方の位相

森本型黥面絵画の要素は、備讃濃尾型黥面絵画にも受けつがれている。

備讃濃尾型黥面絵画のうち、愛知県一宮市廻間遺跡例（35）と亀塚遺跡例（36）は目の下に１条の弧線を描く。その線は目尻から発する線につながっているので、目袋の表現などではない。千葉県佐倉市大崎台遺跡例（33）はそれと同時に目を囲んでいるので、森本型黥面が同居していることは明確である。

備讃濃尾型黥面絵画の祖形は福岡県糸島市上鑵子遺跡例（42）であるが、森本型を母体として複雑化した黥面といってよい。それはまた、森本型の線刻を黥と認めるもう一つの理由である。

備讃濃尾型黥面絵画でもっとも古いのは岡山県倉敷市上東遺跡例（40）で２世紀ないし３世紀だから、溝咋遺跡例よりもおそらく新しい。備讃濃尾型という複雑な黥面が、黥面の衰退していった近畿地方をはさんだ地方に画一的に分布する理由をあらためて推測してみたい。

（3）備讃濃尾型黥面成立の理由

部族同盟としてのイレズミ　冒頭で述べたように、吉田晶は倭人の文身を部族同盟の印と見なし、戦士の仲間入りの通過儀礼とした。この点が、備讃濃尾型黥面の成立と意義を考える手がかりになる。

倭人伝には、文身は諸国で差があると記している。そこに黥面は出てこない。佐原真は、文身は記述する一方で黥面を書いていないのは、黥面は諸国で同じだからだったとした（佐原 2003）。

３世紀の吉備地方と濃尾地方で共通する考古資料は、弧帯文である。黥面とともに描かれた絵画は弧帯文やそれと関係のあるバチ状文である。これらは近畿地方にもあるが、それでも両地方とくらべれば数は圧倒的に少ない。

黥面絵画や弧帯文という文様は、吉備地方と濃尾地方の連携を示す。この時期の濃尾地方の黥面絵画には耳飾りを装着した例がいくつかあるので、黥面絵画から推測されるイレズミは、すくなくとも３世紀の濃尾地方では身分の低いものの習俗でなかったであろう。

乱の激化と通過儀礼　あらゆる災難は、社会の統制を強める。この法則にしたがえば、黥面の複雑化に二つの画期があったことが注意される。一つは黥面土偶の縄文時代晩期終末であり、もう一つが備讃濃尾型黥面絵画の３世紀である。これは縄文時代から弥生時代へ、弥生時代から古墳時代へという二つの激動の時代に生じた現象といってよい。

黥面土偶が広まった地域の縄文時代晩期終末は、遺跡の数が減少し規模が縮小する時期である。その理由は諸説あるが、気候寒冷化が有力な仮説である。いずれにしても社会が衰退していく時期であり、その時期に関東地方に東海系の複雑な抜歯が広まった。通過儀礼を厳しくすることで社会を統制した結果であろう。通過儀礼のイレズミを複雑に表現した黥面土偶も、それと対にして理解するのが妥当である。

一方、３世紀は２世紀末の倭国乱を経て卑弥呼が共立されるが、邪馬台国と狗奴国が争うなど、社会的な緊張状態がおさまらなかった。文身が戦士の表象であり、部族同盟の印とする吉田説により、それを黥面に適用すれば、備讃濃尾型黥面は備讃地方と濃尾地方の部族同士の軍事的な連帯の結果成立したとみなすことができる。

VI. 黥面埴輪の由来

（1）近畿型黥面埴輪をめぐって

奈良県桜井市茅原大墓古墳から出土した盾持人埴輪の顔のあごに、弧帯文とはしご状の二重の輪郭線が描かれている。輪郭線は、近畿型黥面埴輪の特徴である。

５世紀になると黥面埴輪は近畿地方を中心に数を増す。５世紀後半の京都府亀岡市時塚１号墳の盾持人埴輪（46）と大阪府大阪市長原 45 号墳の武人埴輪（47）、奈良県橿原市四条１号墳の黥面埴輪（48）をもとにして、黥面埴輪の黥面の特徴をみてみよう。

時塚１号墳例は、目の上下に多条の線刻を加え、目尻からＶ字状の多条の線刻を発している。長原 45 号墳例は、やはり目尻から多条の線を噴水のように発し、その

末端は顔面環状線につながる。鼻上翼の菱形の線刻は、独立している。これらの黥面埴輪の目尻の線刻のパターンは、四条１号墳例も受けついでいる。

（２）近畿型黥面埴輪の系譜

筆者は宮崎県新富町百足塚古墳（新田原（にゅうたばる）58 号墳）の黥面埴輪をとりあげて、近畿地方で３世紀に黥面は衰退するが、５世紀に黥面埴輪として再びみられるのは、これらの黥面埴輪は南九州地方から番上した熊襲－隼人系人物をかたどったからではないかと考えた。宮崎県宮崎市下郷遺跡の弥生時代後期の黥面絵画土器（43）のように、弥生時代後期に目を囲んだ黥面が存在している地域であることも、黥面埴輪が成立する基盤として重視したのである（設楽 2021）。

しかし、長原 45 号墳例の目尻の線刻は、亀塚遺跡例など備讃濃尾型黥面絵画の目尻の線刻に由来する。時塚１号墳例の目の上下の線刻は、森本型黥面である。（48）の目の上の線刻は眉のようだが、下の線は鼻上翼の上の線とつながる目を取り巻く黥面の線刻であり、（30）に祖型が求められる森本型黥面の一類型である。

このように、近畿型黥面埴輪の要素の多くが備讃濃尾型黥面絵画に認めることができることや、茅原大墓古墳例という４世紀の実例と弥生時代後期の溝咋遺跡例の解釈からすれば、黥面は近畿地方で弥生時代後期から古墳時代まで消えずに残り、黥面埴輪成立の母体となったと考えたほうがよいだろう。

ただし、黥面埴輪の性格からすれば、熊襲－隼人系人物の番上が近畿地方の黥面埴輪の多様な展開をうながしたことは否定できない。

（３）イレズミの禁忌の発生

伊藤と吉田は社会構成史の立場から、黥面を下層階級の風習とした。筆者はその説に与し、近畿地方における備讃濃尾型黥面絵画の欠落から、近畿地方では３世紀にイレズミに対する禁忌が発生していたことを推定した（設楽 2001）。

５～６世紀の近畿地方の黥面埴輪は、あきらかに身分の低い人々と理解される。したがって、３～５世紀のどこかで近畿地方の上層部では黥面に対する禁忌が生じていたことになる。

４世紀と５世紀の比較的古い黥面埴輪は、盾持人埴輪が多い。４世紀は人物埴輪が多様化する以前だから、たまたま表現された遺物が少ないからわからないだけなのかもしれないが、それでも４世紀の実例が盾持人埴輪という身分的に高くない埴輪であることは示唆的である。

そうなると、問題は３世紀に絞られる。

近畿地方で典型的な備讃濃尾型黥面絵画が認められないことは、イレズミに関して吉備地方や濃尾地方と距離を置いていたとみなすべきだろう。近畿地方では弧帯文はわずかに取り入れるものの、黥面に積極的ではない。備讃濃尾型黥面は京都府域に類例はあるものの、大和地域ではまだ検出されていない。３世紀の墳丘墓が集中する当時の政治的な最有力地である大和盆地でイレズミにネガティブな評価を下している可能性は捨てがたい。

大和盆地で備讃濃尾型黥面絵画資料が出土したときには、持論を再考したい。

Ⅶ．おわりに

京都府森本遺跡の人面付土器は非黥面とされていたが、目の上下の線刻の類例をさがして黥面表現と考え森本型黥面絵画と命名した。大阪府溝咋遺跡の顔の絵画も森本型黥面の可能性を考えた。

目にかかわる黥面は、縄文時代の黥面の系譜をひいて弥生時代前期に確立し、黥面埴輪にまで引き継がれ、安曇目などとして記紀の黥面に反映されているのであり、息の長い重要な表現であることをうかがわせる。

本稿では目の上下あるいは目を取り巻く黥面を一括して森本型としたが、５世紀の時塚１号墳の（46）は目の上下の黥面を、四条１号墳の（48）は目を取り巻く黥面を引きついでいるので、細かく分類したほうがよいだろう。

筆者はかつて（2）→（14）→（30）→（42）→（36）と、縄文時代から弥生時代までほぼ一系的に黥面の系譜をとらえたが、安藤広道がその単線的な理解を批判した（安藤 2001）。本稿では、森本型の設定や（36）などにそれが継承されることと、近畿型黥面埴輪の（46）～（49）にそうした複雑な系統関係が反映していることを示して批判にこたえた。図解したかったが、黥面埴輪の分析とともに他日を期したい。

２世紀後半から３世紀は、倭国乱が生じその終息後も社会が乱れた時期である。３世紀の斉一的で複雑な黥面絵画を備讃濃尾型黥面絵画とし、吉田晶説をもとにしてその背景に備讃地方と濃尾地方の戦士の表象を等しくするつながりを推測した。

黥面表現が複雑化するもう一つの画期が縄文時代晩期終末であるが、その時期は気候寒冷化などを背景に中部、関東地方では社会が衰退する。その地域で盛行する黥面土偶とあわせて、イレズミを複雑化させて通過儀礼を厳しくすること、すなわち社会統制の強化の二つの画期が社会変動と結びついているのではないかと予察した。

黥面絵画をイレズミの表現とみなすことに異論もあろうが、一つの仮説と受け止めていただければ幸いである。

【註記】

1）図１・２は通し番号にしているので、以下「図－」は省略する。

2）ここで「黥面の資料」というのは顔に線刻がある遺物すべてをさすが、「黥面土偶」の場合は一定の線刻様式をもつ土偶をさすので、顔面線刻のある土偶がすべて黥面土偶ではない。

3）三嶋台遺跡の人面付土器は、画像資料の観察によるので、線刻かくぼませているかはっきりしない。観察は後日を期したい。

【参考文献】

安藤広道 2001「東京都羽ヶ田遺跡出土の線刻をもつ土器について」『MUSEUM』573、31-57 頁

伊藤純 1984「古代日本における黥面系譜試論」『ヒストリア』104、1-18 頁

北島大輔 2013「近畿の櫛描人面文－京都府水垂遺跡の広口壺－」『一般社団法人日本考古学協会第 79 回総会 研究発表要旨』46-47 頁

黒沢浩 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』416、11-16 頁

佐原真 2003『魏志倭人伝の考古学』岩波書店

設楽博己 1990「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』25、31-69 頁

設楽博己 1999「黥面土偶から黥面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』80、185-202 頁

設楽博己 2001「男子は大小となく皆黥面文身すー倭人のいでたち」『三国志がみた倭人たち 魏志倭人伝の考古学』山川出版社、75-91 頁

設楽博己 2021『顔の考古学 異形の精神史』吉川弘文館

設楽博己・石川岳彦 2017『弥生時代人物造形品の研究』同成社

吉田晶 1985「「倭人伝」の文身（いれずみ）についてー三世紀の社会構成（その一）－」『歴史科学』99・100、4-15 頁

吉田晶 1995『卑弥呼の時代』新日本出版社

【挿図出典】

図１・２の黥面絵画（33・35・36・40 ～ 42）および黥面埴輪（47・50）は設楽 1990・1999・2021 から引用し、38 は北島 2013 の図を改変して引用した。それ以外は設楽・石川 2017 から引用した。出土遺跡名の後に(※)を付した図は設楽のスケッチである。

弥生時代の築城技術

森　井　貞　雄

Ⅰ．はじめに

『魏志』倭人伝には卑弥呼の居所について「宮室・楼観・城柵、厳かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す」とあり、また、『後漢書』倭伝には倭人の住まいに「城柵・屋室あり」と記されている。

実際、弥生時代には、防御用と考えられる濠・壕を設けた「環濠集落」、ないしは日常生活に不便ながらも急峻な丘陵・山上に立地する「高地性集落」が出現する。両者はともに防御機能を強化した集落と考えられることから、本稿では「城塞集落」（居住以外の役割も含めると城塞遺跡）と総称する。城塞集落は日本列島において初期農耕社会の到来とともに出現し、地域的政治集団の形成と統合過程で生じた社会的な緊張状態を受けて発展した集落形態といえる。本稿では、森浩一の視点に則り[1)]それらの「城」としての側面を重視し、築城技術の視点からその内容を検討する。

Ⅱ．城塞遺跡の種類

弥生時代の城塞遺跡には、次のような機能を想定できる。

①防御された集落（「高城・水城」）、②逃げ城（有事の際の避難施設）、③防御された特別な施設（居館、倉庫群、祭祀の場など）、④軍事施設（見張り台・のろし台、臨時に構築された砦など）。このうち、本稿では防御された集落（長期の居住を想定した「逃げ城」も含む）を考察対象とする。

Ⅲ．防御施設について

（１）遮断のための施設

堀：通行を阻み、集落を外部と遮断するための溝。漢字では水を湛えた「濠」と空堀の「壕」が使い分けられるが、本稿では「堀」に統一する。その属性として次のものがある。

・条数：１条（重）の場合と、２～３重およびそれ以上の多重がある。

・断面形状：Ｖ字形（「薬研堀」）、逆台形（「箱堀」）、Ｕ字形などがある。Ｖ字形の堀は落ち込んだ者の動きを止めることと掘削土量を節約できる効果があり、北部九州から各地に伝播したとされる[2)]。

・規模：おおむね幅２～６ｍ、深さ1.５～５ｍと差が大きいが、中世城郭と比べて遜色がない[3)]。また、集落規模に比例したり、時期が下るに従って大規模化するものでもない。

堀にはその内部を移動することで敵の攻撃を避けつつ防戦可能な「塹壕」的利用も想定されている。また、物理的な遮断のみならず、アジールの結界としての象徴性がより重視される場面も考えられる。

土塁：堀の掘削土を盛り上げたと考えられるが、堆積状況から堀の外側に設けられたと想定される事例が多い。意図的な埋め戻し、あるいは後世の削平などで残ることは少ないが、もともと堀の深さを上回る高さを持たなかった可能性もある。

木柵：柱を立てて障壁としたもの。間に板を渡した板塀や、簡易なものとして「柴垣」がある。遺構としては柱穴列ないし布堀りの溝として検出される。柵単体で使われることも多いが、堀の法面やすぐ内側に立てることで更なる効力を発揮したと考えられる。

逆茂木・乱杭：逆茂木は木の枝を外向きに密集して並べたもので、乱杭は先を尖らせた木杭をランダムに埋め込んだものである。朝日遺跡／中期前～後葉ではじめて確認された[4)]。地面に痕跡を残すことは少ないが、敵の侵入を妨害する役割は相当高く、設置が容易なため、集落

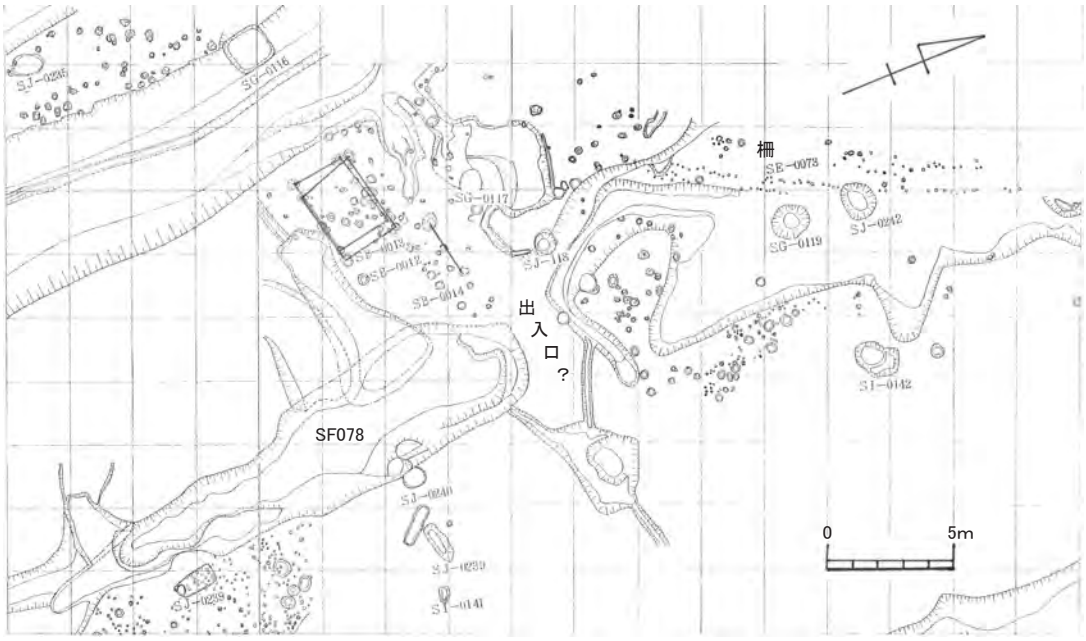


図１　池上曽根遺跡の出入口遺構
［第２阪和国道内遺跡調査会 1971『第２阪和国道内遺跡発掘調査報告書』４　p107 ～ 110 より、一部加筆］

の外周や通路となる場所に広く用いられた可能性がある。

（２）集落の出入口

中世城郭で「虎口」と呼ばれる出入口には敵の侵入を防ぐための工夫がなされる。

堀を越える

堀端をずらして重ね合わせ、その隙間を出入口としている場合（新潟県八幡山遺跡／後期後半）と、堀に土橋（埋め戻しないし掘り残し）、板橋（橋脚の柱穴が検出される場合もある）をかける場合があり、いずれも一度に通過できる人数を制御できる。

門の細部

門には開閉装置が設けられたと考えられる。中世城郭のように柵で経路を屈曲させる例（吉野ヶ里遺跡北内郭／後期末）はあるが、前面に土塁を伴っていた（馬出）かは明確ではない。

「番小屋」

下之郷遺跡／中期後葉では囲郭の内側に堀に直交する位置に掘立柱建物が建てられ、大塚遺跡／中期後葉では木橋のすぐ外側に１棟の竪穴式建物があり、いずれも「番小屋」的な性格が想定されている。

池上曽根遺跡においても、集落北東部の囲郭の堀（SF0078、幅 3.5 m、深さ 0.8 m）が一部途切れた箇所に、堀に直交して掘立柱建物があり、番小屋の可能性がある。SF0078 からは集落の出入口を守るとされる鳥形木製品が出土しているのも興味深い（時期は弥生中期前葉～後期まで幅をもつ）（図１）。

（３）物見櫓、囲郭の突出部

敵をいち早く察知し、防戦するには、眺望のきく高い構築物「櫓」が必要となる。囲郭の隅部や、張り出した部分など視界が広く確保できる箇所に設置され、多くは１間の堀立柱建物として検出される。堀の一部がコ字形に突出する遺構は、北部九州で弥生後期後葉に出現するが、吉野ヶ里遺跡の南内郭（新段階）／後期末では、出入口である堀の切れ目を両側面で挟む形に２か所設置され、側面から敵を攻撃する、いわゆる「横矢」をかけられる位置にある。囲郭が不規則に屈曲する場所も、こうした「横矢」かかりを意識している可能性がある。

Ⅳ．全体の構造

居住域と囲郭の関係であるが、防御的観点から次の３形態に分類できる。

（１）単郭構造：居住域全体を囲郭する形態。集落の中央に板塀などで囲まれた特別な区画があっても防御性が低い場合はここに含む。

（２）複郭構造Ⅰ：堀など顕著な防御施設で集落内部が複数に区画されている形態。中心部分が明瞭な場合と、

等質的な区画が併存する場合がある。集落の出入口から中心部に至る動線を複雑なものにできる。中世城郭ではこうした単位を「曲輪・郭」と呼ぶ。

（３）複郭構造Ⅱ：集落の一部特定部分が堀などにより区画され、一般の居住地がその外側に展開する形態。この囲郭内には、建物、貯蔵施設が設けられる場合と、遺構が検出されず空疎地となる場合がある。この囲郭部分を有事の際の臨時の避難所と想定する意見もある。

Ⅴ．自然地形と築城技術

中世城郭が「山城」「平山城」「平城」に区分されるように、地形環境が防御施設の種類や配置に影響を与えている。すなわち、基本的には、個々の地形的特徴に応じて各種防御施設が最小限の造作で済むよう効率的に用いられる[5)]。

（１）沖積地立地型

湿地･湖沼（杭上住居）など､より水域に近いもの（狭義の「水城」）[6)]も想定されるが、通常、自然堤防など微高地上に立地するものをさす。地下水位が高くかつ脆弱な地盤であるため、堀の断面は比較的浅い逆台形・Ｕ字形をとらざるを得ない。そのため、堀を多重化させることで防御機能を高める方向に発達し、唐古・鍵遺跡のように、幅百ｍを越える「環濠帯」を形づくる場合もある。また、河川、沼沢地などを自然の障壁として取り込み、その部分の堀を省略する場合もある。

（２）台地・低丘陵立地型

河岸段丘や低丘陵上に立地する。洪水が直接居住地に及ぶ心配はなく、農耕地にも近接しており、生活の利便性はよい。地盤が洪積層で安定しているため、防御効率の高いＶ字形の深い堀を自由に掘削することが可能となる。なお、段丘崖に面する部分では堀を省略したり、舌状台地では、その基部のみを直線的に切断する堀（「堀切」、丘尾切断）を設けるなど地形を生かした工夫もみられる。

（３）高地（丘陵・山地）立地型

研究史上「高地性集落」と呼ばれるもの。その条件として、日常生活に支障をきたすとされるおおむね比高40ｍ以上の丘陵・山地などで、周囲を急斜面に囲まれた立地形態である[7)]。紫雲出山遺跡など瀬戸内沿岸～大阪湾北岸などに分布する比高数百ｍに及ぶ山上に立地するものと、有鼻遺跡のように農耕地に近い比高数十ｍ以内の丘陵上に立地するものの２者がある。

高地性集落で発掘調査が行われたにもかかわらず、堀が検出されないものは、急峻な地形の特性を防御に活用することにより堀を省略したタイプと考えられる。但しこれらにおいても、中世山城の「切岸」[8)]や柵（中高瀬観音山遺跡／後期）、遺構として残りにくい逆茂木などが用いられた可能性は高い。それに対し、堀を備えたタイプは、堅固、かつ実戦的で「山城」と呼ぶにふさわしい。

余談だが、『日本書紀』神武紀に描かれた、順わぬ集団の拠点とされる「丘岬（おかさき）」はこうした丘上の城塞を彷彿とさせる。

Ⅵ．城塞集落の変遷

築城技術の視点からその変遷を概観する[9)]（図２）。

（１）弥生前期初頭

日本列島における初期の事例は板付遺跡である。台地立地型で１重のＶ字形堀を巡らす単郭構造をとる。これが日本列島における城塞集落の基本形となる（板付遺跡が立地する台地を横断する水路を外堀とみて複郭構造Ⅰを想定する意見もある）。他に那珂遺跡、有田遺跡などがあり、分布はほぼ玄界灘沿岸部に限られる。朝鮮半島南部の青銅器時代後期の検丹里遺跡などに共通する形態をとる。

（２）弥生前期中葉

弥生文化が東海地方まで拡大するのに伴って地形条件に応じたバリエーションを見せ始める。瀬戸内地域では中の池遺跡のように集落中央の一部が小規模に囲郭される複郭構造Ⅱとなるものもある。近畿～東海地域では安満遺跡のように沖積地立地型で１～２重の単郭構造のものが小平野単位に見られる。北部九州～西部瀬戸内では、横隈山遺跡第７地点のように台地上に居住地を設定し、近接して１重・Ｖ字形堀で囲まれた袋状貯蔵穴群を構築する複郭構造Ⅱ形態が盛行する。

（３）弥生前期末～中期初頭

山陰から京都北部に高地立地型が出現する。田和山遺跡では、この段階は１重堀で山頂部を囲み（内部に柵と

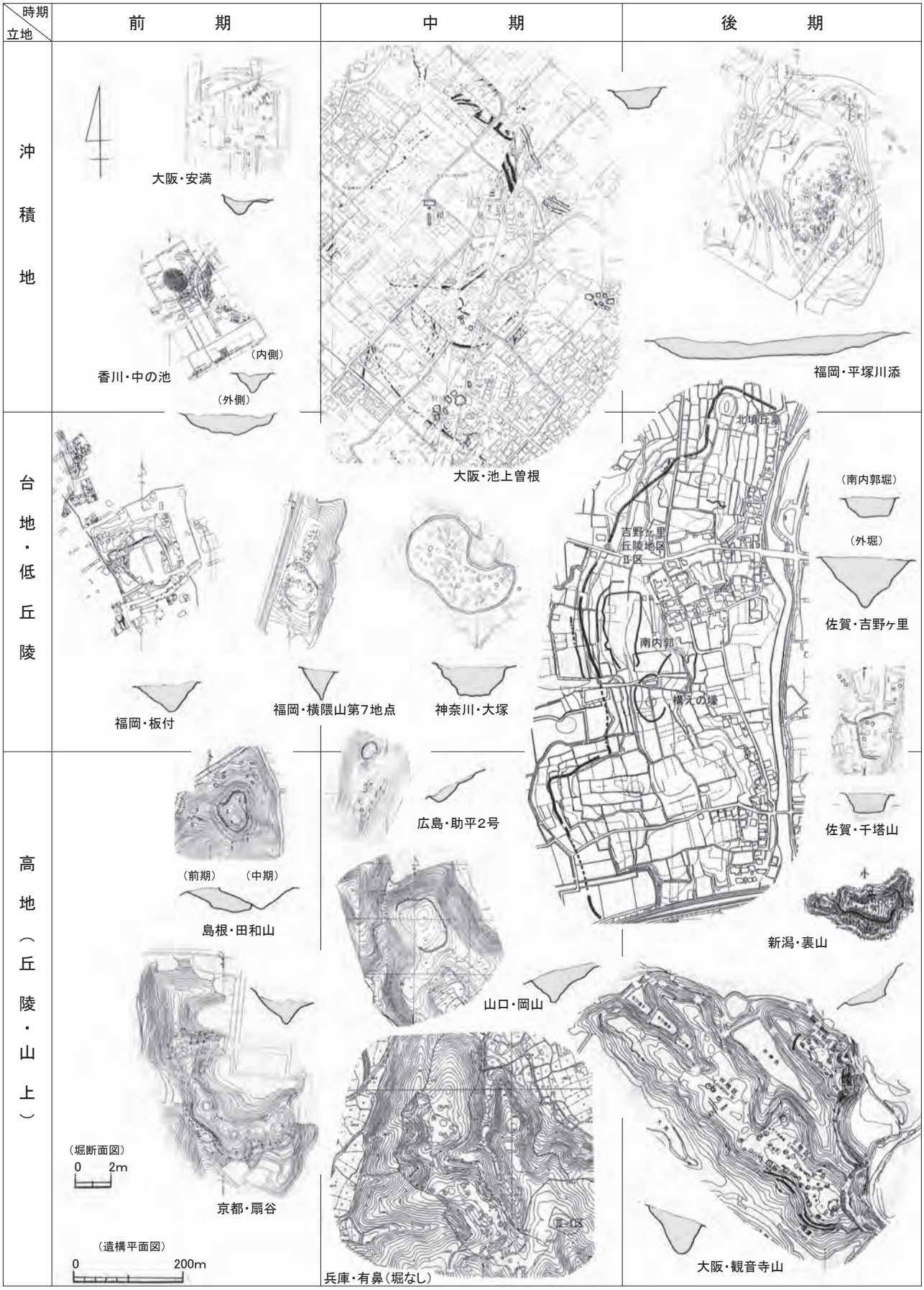


図２　城塞集落の立地と防御施設の配置　［図面は報告書等より引用・作成］

掘立柱建物）周囲の丘陵斜面に住居群が広がる複郭構造Ⅱ、扇谷遺跡では２重のＶ字形堀が丘陵稜線から谷部を囲むいわゆる「包谷式」の城塞が出現する。これらは、それまでのタイプの高地適応形とみるより、新たに海外から導入された可能性も検討すべきであろう。同じ頃、東北地方では系譜は不明だが、柵で囲郭された集落（秋田県地蔵田Ｂ遺跡）が出現する。

（４）弥生中期前葉

瀬戸内沿岸部では堀を持たない高地立地型が出現する反面、堀をもつ集落が見られなくなる。これに対し、畿内～東海地方では、沖積地・台地立地型では前代から継続する一部の城塞集落が大型化し、１重ないし２～３重堀の単郭構造のものが発展する。山陰・広島・山口地域では、高地立地型として、助平２号遺跡のように１重堀・複郭構造Ⅱ、岡山遺跡のように単郭構造のものが構築される。

（５）弥生中期後葉

城塞集落の分布圏が中部・南関東地方まで拡大する。瀬戸内地域では堀を持たない高地立地型が盛行する。これに対し、北部九州では吉野ヶ里遺跡のように大形で台地立地型の単郭構造が盛行する。畿内～東海地方では、沖積地・台地立地のものがさらに大型化し、沖積地立地型の唐古・鍵遺跡、下之郷遺跡、朝日遺跡などで多重化が進む。池上曽根遺跡では居住区が拡張に伴って複郭化し、朝日遺跡では自然河川を挟んで多重堀をもつ３個所の居住区画が併存するなどいずれも居住人口の増加に応じた対応が認められる。東京湾西部では大塚遺跡など台地上に１重堀・単郭構造の城塞集落が多数構築される。山陰地域では高地立地型の田和山遺跡で２～３重の堀が再掘削される。

（６）弥生後期前・中葉

高地立地型で堀を有する防御性の高い城塞集落が畿内とその周辺地域（四国東部など）、山陰地域に集中する段階。観音寺山遺跡は丘陵上部の平坦面に住居が集中し、２重堀・単郭構造となる。古曽部・芝谷遺跡は広大だが平坦部が少ないため「包谷式」的な堀の配置となり、急峻で頂上部が狭い橘谷遺跡では尾根を切断する４条の堀の下部（山麓部）、堀の間、山頂部に住居が分散し複郭構造Ⅰに近い形態ととるなど、地形の特性に応じたバリエーションが認められる。山陰から近畿西部では尾高浅山遺跡、古八幡遺跡、大盛山遺跡など高地立地型で単郭および複郭構造Ⅱのものがあり、この段階以降、瀬戸内中・東部では城塞集落が急減する。

（７）弥生後期後葉

北陸、中部高地、九州中部に至る範囲に城塞集落が広がる段階である。北部九州では台地立地型の吉野ヶ里遺跡で長大な外堀の内側に突出部を持つ南内郭が出現し、複郭構造Ⅰが明瞭となる。この突出部を含む築城技術を中国都城からの影響とみる意見もある[10)]。しかし、千塔山遺跡のように環濠の一隅が突出気味に屈曲し突出部の初源形と見なせる事例もある。筑後平野の沖積地立地の平塚川添遺跡では幅広い水堀を幾重にも巡らし、堀の間に住居や工房を設けた複郭構造Ⅰ（多郭構造）をとる。西部瀬戸内から北部九州の内陸部に高地立地型で１重堀・単郭構造のものが数が少ないが一時的に構築される（見張り台に特化している可能性もある）。三重県、愛知県東部、南関東、および熊本・大分県など中九州では、台地立地型で１重堀・単郭構造のものが分布し、次の庄内式期に継続するものもある。北陸地方では裏山遺跡のように高地立地型で１重堀・単郭構造の城塞が出現する。これに対し、畿内地域では高地立地型で堀を伴わない形式のみとなる。

（８）庄内式期

城塞集落は前代に近い領域に見られるが、東部瀬戸内～近畿地域では衰退する。新潟県などでは、前代に引き続いて高地立地型、１重堀・単郭および複郭構造の防御性の高い城塞集落が営まれる。広島湾岸では高地立地型で堀のないものが残存する。筑後地域では惣座遺跡のように台地立地型で全体が方形化し、コ字状突出部を備えたものが発達する。

Ⅶ．おわりに

弥生時代の築城技術は大きく４段階に推移する。第１段階は弥生時代初頭における朝鮮半島から伝播した１重Ｖ字形堀・単郭構造の出現、第２段階は前期中葉以降の農耕文化の拡大に伴う様々な地形条件への適応、第３段階は弥生前期末～中期初頭における高地立地型の出現、第４段階は弥生後期後半からの囲郭の方形化と突出部の出現である。また、城塞としての機能分化やそれに伴う

具体的な地域防御体制（のろし網[11]など）の構築についても検討が必要である。

城は常に営まれるものではないため、技術的な継続性を判断することが難しい面もある。一方で、弥生時代を通じて①土木・加工具の改良、②土木動員力の増大、③攻撃能力の進化（新しい武器・戦術の発明、攻撃動員力の増大）が認められ、これらが築城技術の進化の背景になっている。このうち、武器の鉄器化と防御施設の関係について研究が進められている[12]。

さらに、基本的には共同体成員の収容を目的とした弥生時代的な防御形態から、階層分化を前提とした古墳時代的な防御形態への転換過程、あるいは、７世紀に中央政権が構築したとされる古代山城が登場するまでの古墳時代の「城」のあり方など課題は多い。その意味で、纒向における防御機構が具体的にどのような形態をとっていたのか、今後の調査の進展に注目したい。

【註記】

１）「人間は平地に定住するのをほぼ原則にしているが、生命、財産がおびやかされる状態がつづくと、安全な居住地として、逃げ城や城塞を構築した。二～三世紀の高地性集落、六～八世紀の朝鮮式山城（これにはいわゆる神籠石も含む）、さらに中世、近世初頭の大小のおびただしい城塞（北海道のチャシ、沖縄のグスク、東北の館なども含む）を経て、本格的な近世の城郭にいたるまでの遺跡も、一貫して研究をする必要がある」森浩一『考古学入門』（カラーブックス）保育社 1976　p148

２）中間研志「西ノ迫遺跡の調査／環濠集落について」『九州横断自動車道関係埋文調査報告』25 福岡県教育委員会 1993 p119 ～ 125

３）村井毅史「中世城跡と堀の発生と展開－近畿地方の発掘事例を中心に－」『花園史学』11　1990　p59 ～ 74

４）石黒立人編『朝日遺跡』Ⅰ　愛知県埋文センター 1991

５）拙稿「弥生時代における城塞的集落の動向」『研究調査報告』７　大阪府文化財センター 2010　p137 ～ 140

６）角田文衛「古代ヨーロッパの高城」『古代史講座』２　学生社 1962　p49 ～ 90

７）寺沢薫「大和の高地性集落－「上ノ山遺跡」の紹介とその占める位置－」『青陵』36　1978　p3 ～ 8、同「高地性集落論」『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館 2014　p370 ～ 477

８）中井均『城館調査の手引き』山川出版社 2016

９）城塞集落（遺跡）の分布の推移は、拙稿「弥生時代の城塞集落が物語ること」『森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会 2015　p161 ～ 170 による

10）七田忠昭「有明海沿岸地方の弥生時代環濠集落にみる大陸的要素（予察）」『佐賀考古』４　1997　p23 ～ 36

11）都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』20-4　1974　p20 ～ 47

12）古代武器研究会編『古代武器研究』16（「弥生時代の後半期における金属製武器の普及と防御用施設」）2020

※ 図２に掲載した遺跡の図面は各報告書等より引用しましたが、出典記載を省略させていただきました。ご了承ください。

弥生時代集落の拡大と分散

－乙訓地域の遺構分布の変遷から－

福　家　　恭

Ⅰ．はじめに

近畿地方の各地に伝播した稲作を中心とした弥生文化は、縄文時代に変わる新たな生活様式を各集落にもたらした。この文化の流入は、縄文文化との融合によって弥生時代集落を誕生させ、やがて各地域の支配体制の成立へと繋がる。

本稿で取り上げる乙訓地域は、山城地域で最も早くに弥生文化を取り入れる。この地域は京都盆地西部を南流する桂川右岸に位置し、下流では桂川、木津川、宇治川が合流して淀川となる水路や、東西の街道・日本海方面へ通じる丹波街道などの陸路が交わる交通の要衝地にあたり、弥生時代においても、様々な地域の影響を受けた中核的な性格の集落を形成している。

こうした地域性は、８世紀末に長岡京への遷都に繋がる。そして、長岡京推定範囲全てが埋蔵文化財包蔵地に指定されたことで、発掘調査は長岡京跡だけで 4000 回以上を数え、工事立会などは年間に数百回を越えるという膨大な基礎データの蓄積を可能としている。

今回は、この豊富な基礎データを基に遺構の分布をプロットすることにより、遺構分布の状況を中心にした集落や集団の動態を再検討し、乙訓地域の弥生時代集落の発展過程を考えてみたい。

Ⅱ．遺構分布から見た弥生時代集落

弥生時代集落を構成する遺構には、環濠や溝、竪穴建物、掘立柱建物などの居住に関わるもの、方形周溝墓や土坑墓などの墓に関わるもの、生業や祭祀に関わる特殊な遺構・遺物、水田など様々なものが挙げられる。今回は居住と墓に関わる遺構に焦点をおき、その分布を確認していく。また、旧地形の復元も不可欠な要素であるため、発掘調査によって得られた弥生時代の河川・自然流路のデータ及び地形分類図を参考に復元を試みた[1)]。

弥生時代の乙訓地域は、学史的にも著名な雲宮遺跡をはじめ弥生時代前期から終末期まで数多くの遺跡が存在する[2)]。

各時期の遺構分布について図２・３を参照すると[3)]、弥生時代前期は、遺構のまとまりが限定的であり、特に河川近くの雲宮遺跡、上里遺跡、鶏冠井・石田遺跡、鴨田遺跡の４ヶ所に遺構の分布が集中することがわかる。

続く中期には、前期の遺構集中地点の周辺に別の集中地点がつくられる。雲宮遺跡付近では、神足遺跡で濃密な集中があり、上里遺跡周辺では、付近の小規模なまとまりとは別に今里遺跡に遺構が集まる。鶏冠井・石田遺跡周辺では、中期の内に分布の中心を移動させ、新たに出現する東土川遺跡を含めた概ね径２～３㎞の範囲内での居住域が移っていくことが想定される[4)]。また、小泉

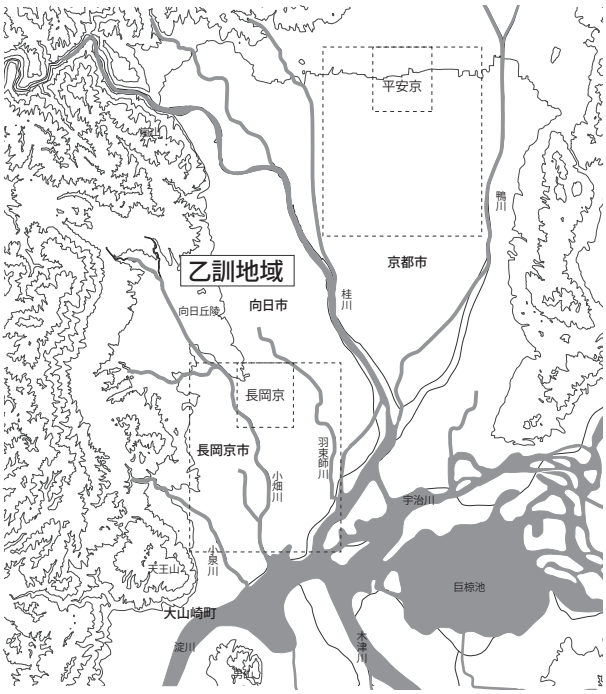


図１　乙訓地域の位置と環境（Ｓ＝1/200,000）

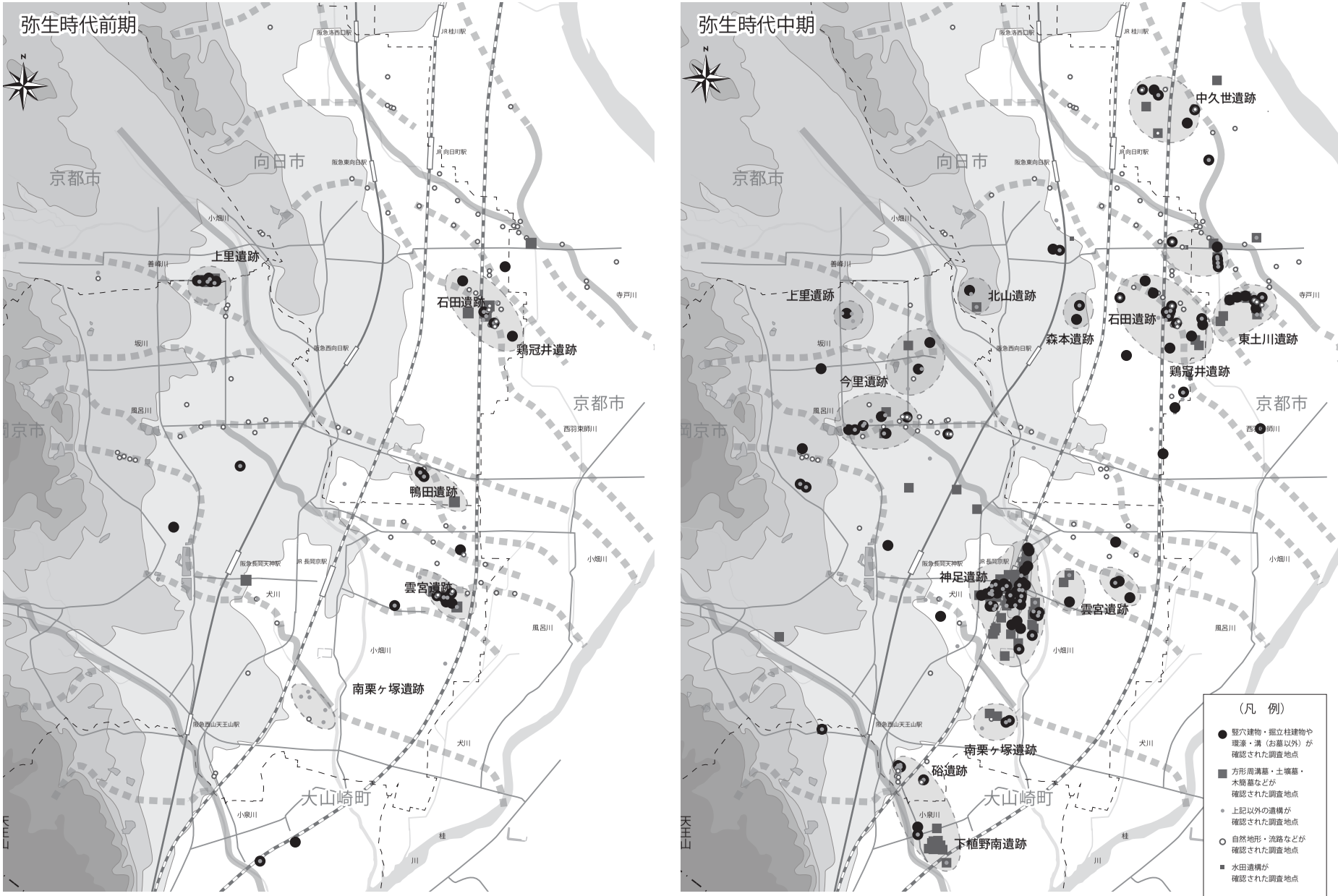


図２　弥生時代前～中期の遺構分布

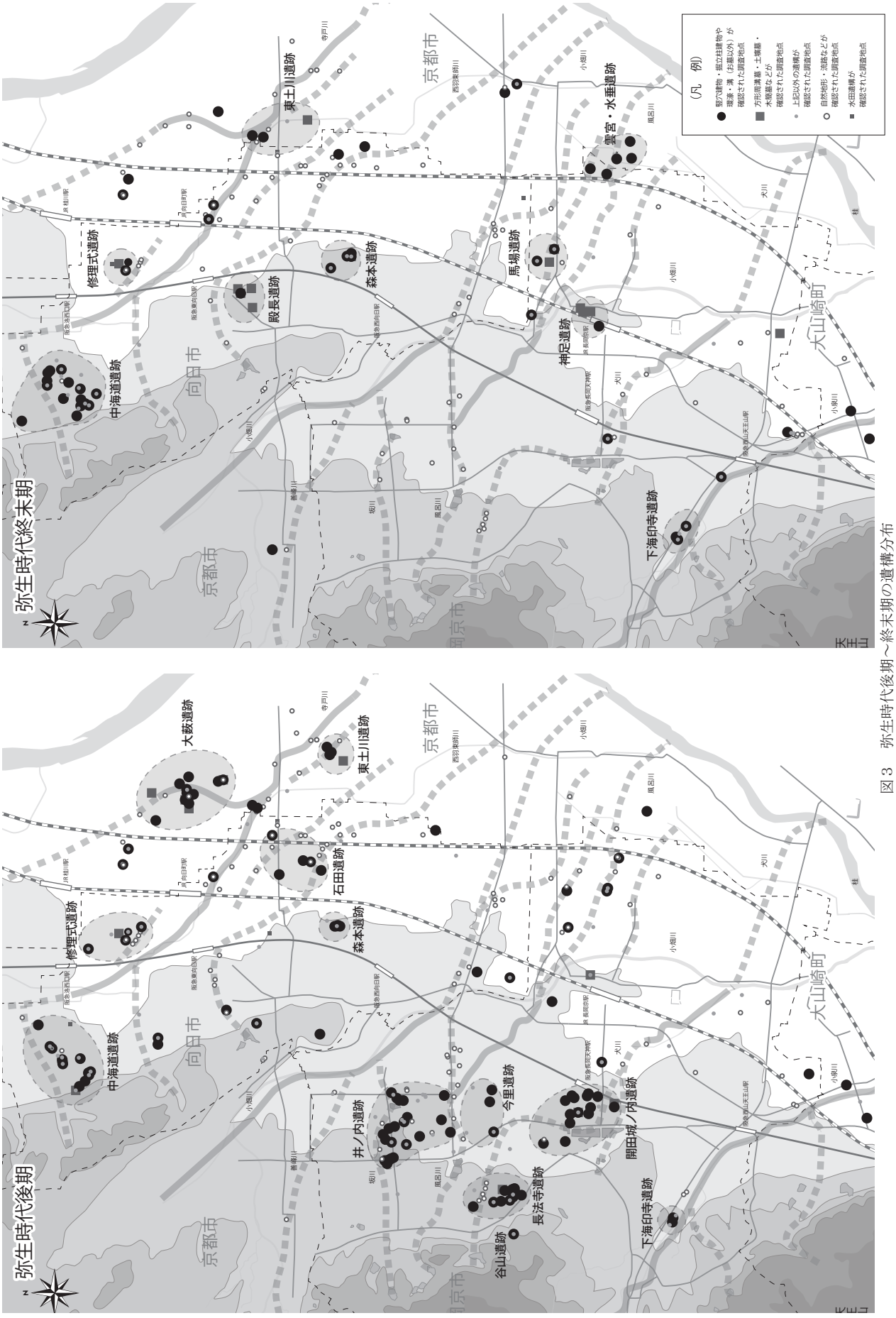


図３　弥生時代後期～終末期の遺構分布

川流域の硲遺跡から下植野南遺跡までの範囲や羽束師川流域の中久世遺跡など、弥生時代前期には見られなかった河川の流域でも遺構集中地点が出現している。

後期になると、長岡京市域の低地部では少数の遺構分布しか見られなくなり、逆に丘陵裾部の段丘や扇状地上へ活動域の中心が移っていると言える。大きく４ヶ所に遺構分布の集中があり、井ノ内遺跡、今里遺跡、長法寺遺跡、開田城ノ内遺跡が挙げられる。向日市域では、西羽束師川流域で石田遺跡や東土川遺跡が小規模ながら集落を継続させるが、中心的な分布は寺戸川流域の大藪遺跡へと移る。また、長岡京市域と同様に丘陵裾部でも中海道遺跡が新たに出現し、この２つの遺跡に遺構分布の中心が特に偏る傾向がある。

終末期には再び遺構集中地点が移動し、長岡京市域では雲宮・水垂遺跡などの小規模な遺構のまとまりのみとなる。向日市地域でも殿長遺跡などで新たな遺構集中地点が見られるが、同様の分布である。しかし、中海道遺跡だけが高密な遺構集中を継続し、その範囲も拡大させている。

以上のように、遺構の分布を見ると、集中する地点は１ヶ所で継続するのではなく、時期ごとに遺構密度の高い地点が移動しているように見える。こうした状況は、乙訓地域の特徴的な集落の在り方の１つと言えよう。

次章からは、遺構分布の動態と集落遺跡の関係について詳しく見てみたい。

Ⅲ．集落の出現と拡大

（１）稲作の流入と弥生時代集落の出現

乙訓地域は、瀬戸内海から淀川を遡り、山城地域への玄関口となる三川合流地点にあたる。そのため、桂川の下流に位置する雲宮遺跡では、山城地域で最も古い型式の弥生土器が出土しており、稲作文化を取り入れた最初の弥生時代集落が誕生する（図４）。その出現は、新たな土地への進出ではなく、縄文時代晩期には活動拠点として低地が選ばれた延長上にあるとされる[5)]。

雲宮遺跡は、小畑川と風呂川が形成した微高地に環濠をもつ集落である。環濠は１～３条が居住域を囲むように巡らされ、長岡京跡左京第 216 次調査区（以下、「長岡京跡」省略[6)]）では切り合いも確認できる。居住域は、これまでのところ竪穴建物２棟、掘立柱建物１棟が確認できた程度であるが、掘立柱建物が見つかった左京第 18 次調査区からは炭化米も出土しており、稲作の存在を窺える。また、墓域は明確ではないが、環濠の外側で方形周溝墓が検出されており、弥生文化の流入による新しい墓制も導入されている。

一方、小畑川を遡った内陸部の善峰川との合流付近に位置する上里遺跡では、稲作の導入は一段階遅れる。集落の出現は、雲宮遺跡と同様に縄文時代晩期であり、小流路付近に複数の竪穴建物や土壙墓を展開させる。晩期の集落規模は、雲宮遺跡より発展しており、出土したマメやクリ、クルミなどの農耕栽培も確認できる。

雲宮遺跡と上里遺跡の両者とも、縄文時代晩期に平地部へ進出した集落である。直線距離にすれば３㎞ほどしか離れていないが、雲宮遺跡では小規模な晩期の集落から弥生文化の環濠集落へ発展し、上里遺跡では縄文文化を継続させる。わずかな集落立地の差が文化の流入に時差を生じさせている。

（２）集住型集落の誕生

環濠で囲まれた雲宮遺跡の中心から西側に位置する微高地上にも、多くの遺構が見つかっている。大半は弥生時代前期後半に位置づけられ、環濠の再掘削とは別に西への進出がある。こうした動きは低位段丘上へ移動するまで動態に先行したものであり、弥生時代中期初頭には雲宮遺跡の集落を完全に放棄している（図４）。

その結果、弥生時代中期には、犬川と風呂川に挟まれた低位段丘上が活動の中心となる。ここは沖積地に近い安定した立地環境と言え、神足遺跡という中核的な集落を誕生させる。中期を通して継続し、時期が進むにつれて活動域を拡大させていく。また、居住域と墓域の分布（図５）を見れば、竪穴建物を中心とした居住域と墓域が複数地点にわかれた分布をとることがわかる。

特に墓域は、神足遺跡の出現当初から右京 10 次調査区付近、右京 494 次調査区付近、右京 654 次調査区付近の３ヶ所に分散し、中期と通してそれぞれの墓域を踏襲した継続的な造墓が行われる。居住域と墓域の関係から神足遺跡では３つ以上の集団の存在が推定され、１つの集落内に複数集団が集住し、それぞれの集団が形成したかのように分布を違える墓域が居住域を囲む。

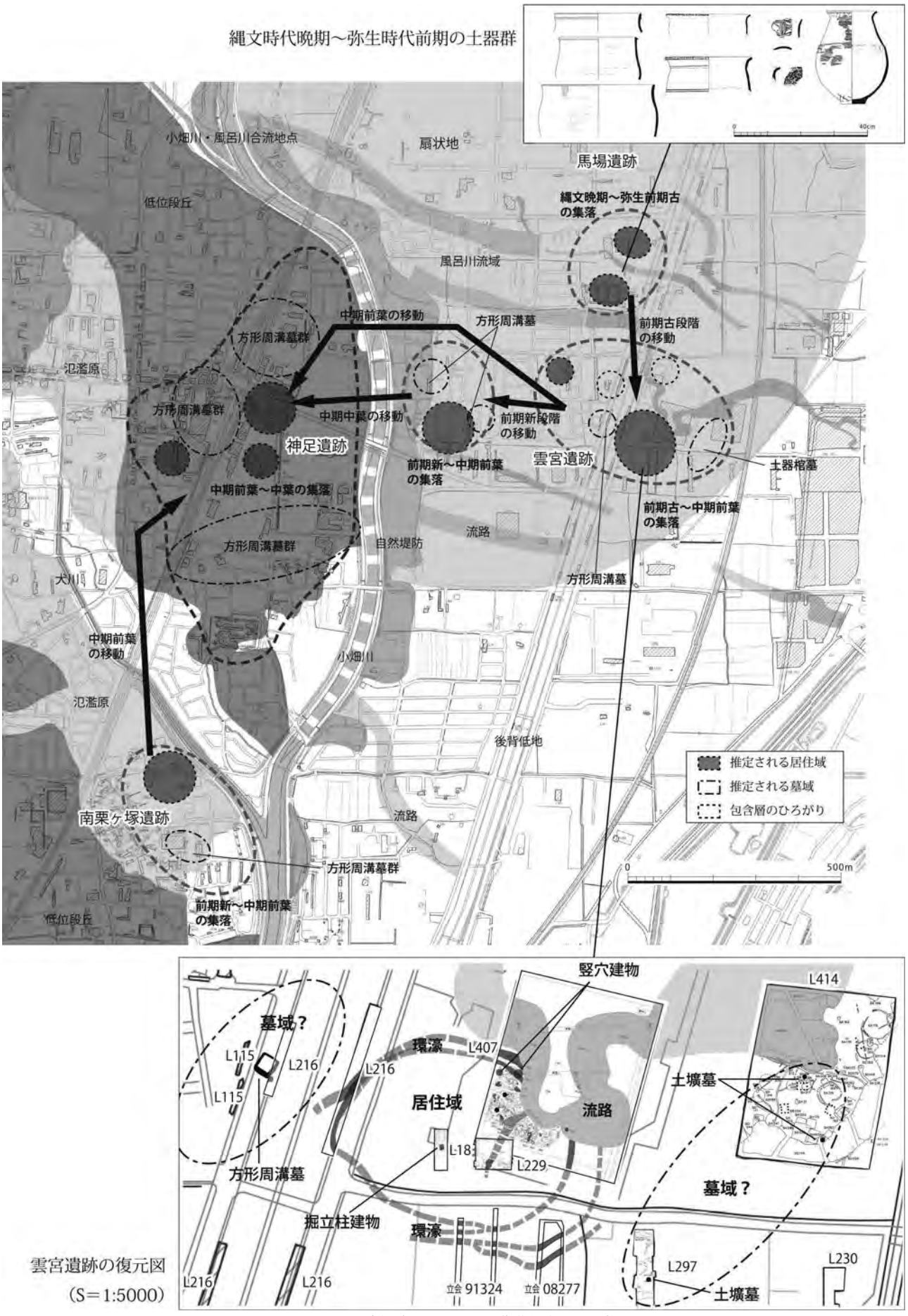


図４　弥生時代前期から中期の集落拡大への動態

このような神足遺跡の複数の集団は、神足遺跡の出現が雲宮遺跡の解体に連動するように、先行して雲宮遺跡と神足遺跡の間の微高地へ進出した集団や中期初頭の方形周溝墓が検出された南栗ヶ塚遺跡の集団などの独立した小集団が､神足遺跡の集落が拡大する状況と連動して、その立地を放棄することとの関連が想定できる。

こうして､「複合集住型集落」[7]と呼ばれるような基礎集団が複合・集住した集落構造が形成され、地域の中核的な集落となる。近江系や河内系の土器の出土が目立ち、磨製石剣・鏃を多量に生産する特異な遺跡であることは、他地域との交流が盛んな状況も裏付けている。

一方、弥生時代中期中葉の小泉川流域では、複数の方形周溝墓が集まる大規模な墓域を下植野南遺跡で確認されている。この居住域は不明とされてきたが、上流約800 mに位置する硲遺跡は、若林氏が設定する居住域形成パターンＢ型[8]よりも近接した範囲に収まる。そのため、同じ流域にある下植野南遺跡の墓域と硲遺跡の居住域が一体的な遺跡と捉えることが妥当であろう。その関係性は、神足遺跡より集落や集団の規模は異なるものの、下植野南遺跡の墓域構造や、硲遺跡で未製品を含む磨製石剣と石鏃が出土している点など、類似する要素も多い。

Ⅳ．集落構造の変化

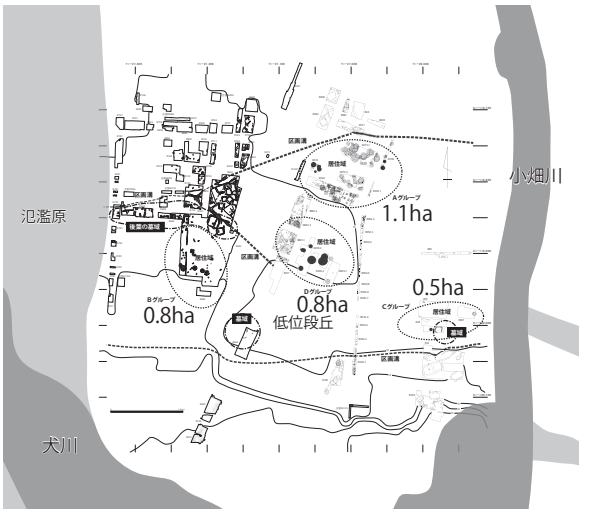
（1）神足遺跡における集落構造の変化（図５）

神足遺跡では、弥生時代中期後葉に地域最大規模まで拡大し、集落内における集団は独立性が目立つ。中期の前半段階には環濠に囲まれた範囲を中心とした居住域とその周縁に墓域を展開させるという構造であったが、中期後葉には低位段丘上を直線的な溝で区画し、同じ段丘上に分散した居住域、限定的な墓域という集落構造へと変化している。その居住域の状況をＡ～Ｄグループと仮称すると、Ａ・Ｂグループは前時期から継続する居住域で、Ｃグループは新たに誕生したもの、Ｄグループは特に大型の竪穴建物が集中するエリアとわけられる。

また、中期後葉の墓域は、基本的に前時期からの墓域を踏襲しているものの、新たに造られる方形周溝墓は少ない。その配置も居住域と対応する墓域というよりは、西側のエリアに集中するように形成され、方形周溝墓へ

弥生時代中期前葉～中葉の様相

弥生時代中期後葉の様相



区画溝で囲まれた範囲：13.1ha

図５　神足遺跡の復元（Ｓ＝1/8, 000）

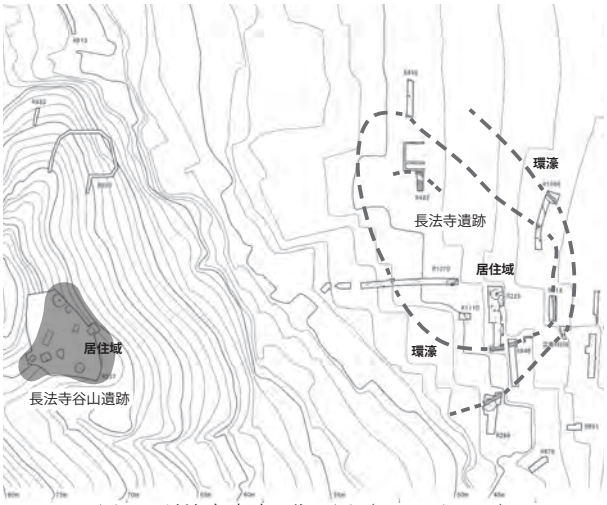


図６　長法寺遺跡の復元図（Ｓ＝1/5, 000）

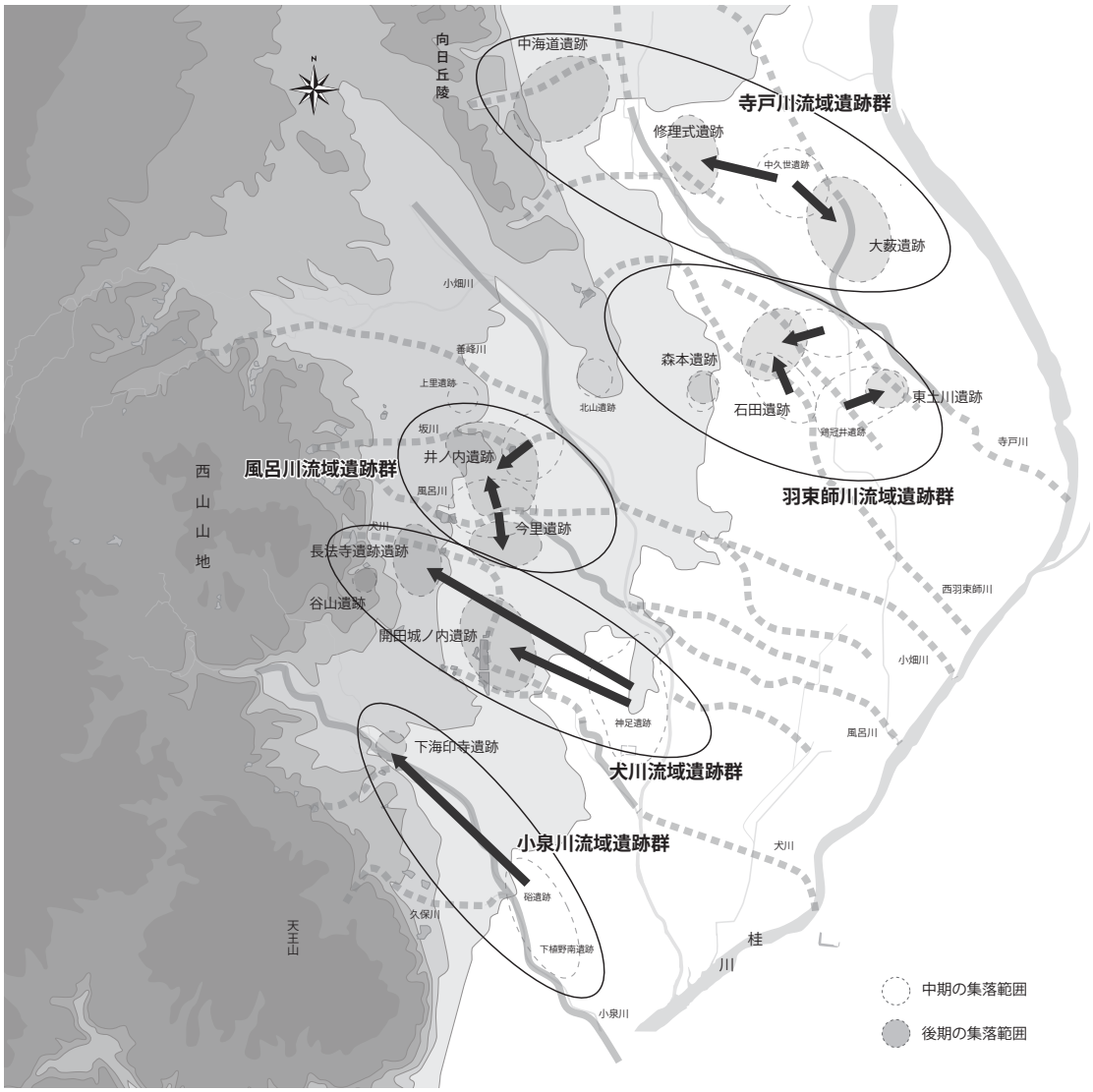


図７　弥生時代中期から後期における集落の移動

の埋葬者は限定的になったと考えられる。

そして、中期と後期の遺構分布を比較すれば明確であるように、後期には神足遺跡の集落は解体され、それに対応するように、犬川や風呂川の上流域にあたる地域で長法寺遺跡や開田城ノ内遺跡などの新たな集落が出現する。これには他地域からの流入などの要因も含まれるであろうが、神足遺跡の膨張と集団の独立性の高まりにより、中期の大規模集落の解体と後期の小規模集落の形成へ繋がる現象と捉える方が妥当と言える。

弥生時代中期から後期への移行期に、集落の規模や立地の変化、墓の減少など集落の在り方が大きく変化する。乙訓地域（特に長岡京市域）では、前期から後期の間に集落立地の主体が沖積地付近から段丘上へと移り変わる。この現象は、淀川流域から大阪平野[9]、奈良盆地[10]でも同様である。また、居住域と墓域の関係は後期に墓の数が激減するのに対し、集落数は増加するという傾向も、山城地域全体の現象[11]と捉えることができる。つまり、ローカル的な現象ではなく、畿内全体で連動した動きがある。

（２）居住域の規模（図５）

居住域の規模からも、集団の移動を窺わせる。神足遺跡に見られる居住域は、弥生時代中期後葉に最盛期を迎える。居住域につくられた新たな区画溝は、低位段丘全体を横断し、墓域との境は不明瞭となる。大きく４つが確認できる居住域は、独立した集団がそれぞれ規模を拡大させていく。その規模は、Ａグループの範囲は 1.1ha、Ｂグループは 0.8ha、Ｃグループは 0.8ha、Ｄグループは 0.5ha となる。

弥生時代前期の雲宮遺跡の環濠に囲まれた居住域の面

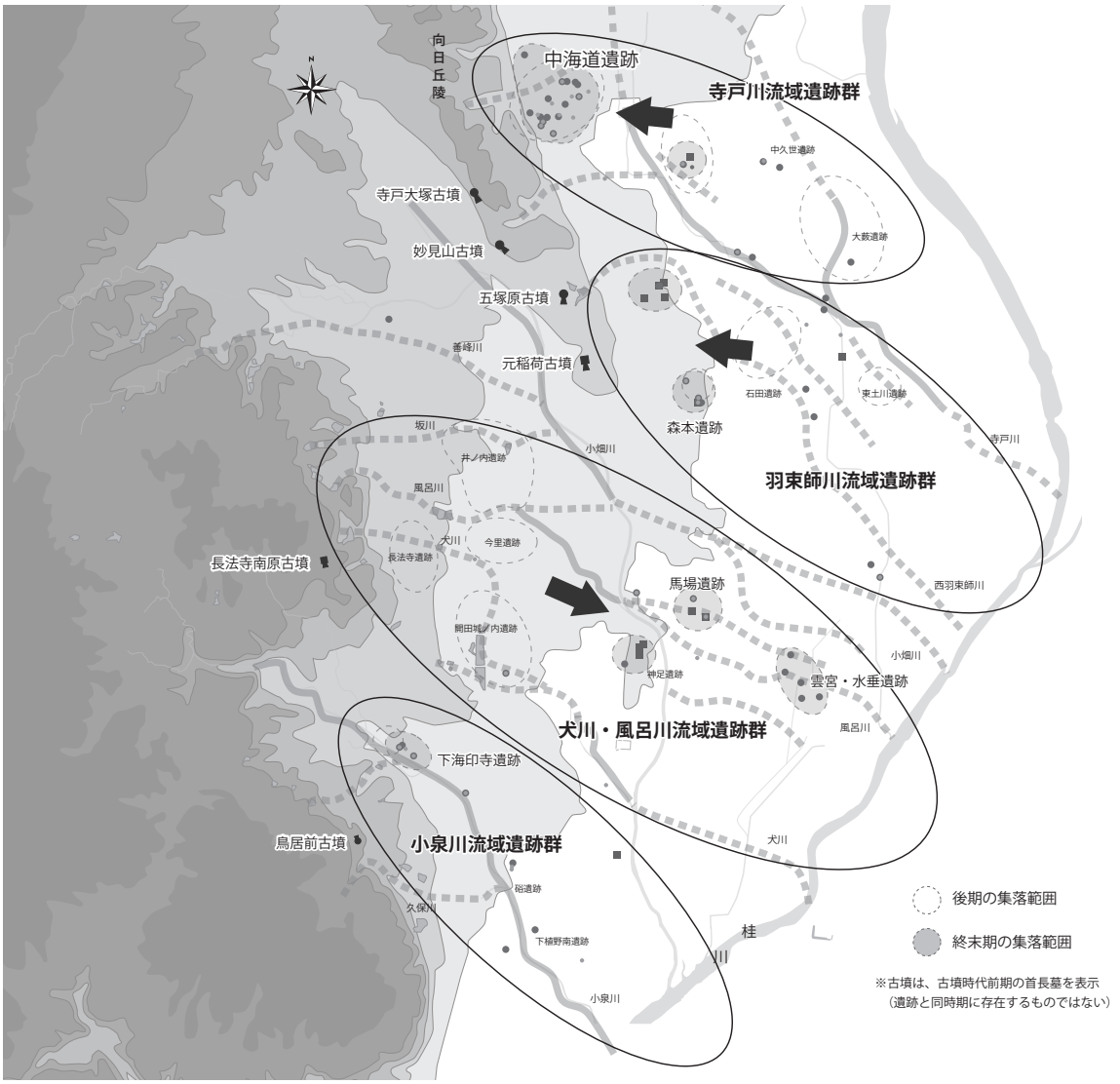


図８　弥生時代後期から終末期における集落の移動

積は、0.8ha である。単純に居住域の面積はＢ・Ｃグループとほぼ同規模と考えられ、遺構分布の変化に見られるように、雲宮遺跡から神足遺跡への集団の移動があるのであれば、対応する集団と言える。また、Ａグループの範囲は最大 200 m前後の規模に囲える。この規模と対応するものが、後期に出現する長法寺遺跡の環濠が巡る範囲である（図６）。

長法寺遺跡の竪穴建物の併存関係は３棟前後であり[12]、弥生時代中期から後期の山城地域の集落構成の最小単位が、竪穴建物２～３棟程度とする分析[13]とも一致している。神足遺跡で確認できる４つの住域を基礎集団の単位とすれば、径 100 ～ 200 m前後の規模が１つの集落を構成するのに十分な規模、或いは構成員数であったことを示している。つまり、遺構分布に表れる高密度の遺構分布は単純に集落が移動していくのではなく、基礎集団の移動と集住に対応して変化しているのである。

乙訓地域の集落は、単独の基礎集団で構成される前期集落から、中期には複数の集団が居住域を密接させた集住構造へ。そして中期後葉には独立性の高まりによる居住域の分散した集住構造となり、後期には独立した別の集落へという「基礎集団の在り方の変化＝集落構造の変化」として捉えることができる。

（３）集落の分散化

弥生時代中期の中核的な機能を担っていた神足遺跡の解体と同時に、後期初頭には後期を通じて展開する拠点的な集落の長法寺遺跡が出現する。

長法寺遺跡では、後期前半に位置付けられる２条の環濠が居住域を囲む。土器の様相から外側の方がやや新し

い傾向にあり、後期前半のうちに急激に集落を拡大させている（図６）。

ところが、後期後半になると、突如として居住域が消滅し、裏手の丘陵上に谷山遺跡が出現する。そのため、谷山遺跡は麓に母村となる集落をもたないタイプの高地性集落であり、集団全体が丘陵上へ移動した可能性が高い。また、南東約１㎞に位置する開田城ノ内遺跡は、後期後半から終末期に盛行する集落であり、さらに南側の小泉川流域では、硲遺跡の解体後、後期前半の遺跡はわからなくなるが、下海印寺遺跡で後期後半～終末期の遺構・遺物が見つかっている（図７）。

北部では今里遺跡や井ノ内遺跡で居住域の移動・拡大による集落構造の再編成がなされ、後期を通じて継続する。また、羽束師川流域では鶏冠井遺跡の解体と再編、寺川流域でも中久世遺跡に変わる大藪遺跡が出現するなど、後期の集落は各流域の範囲の中で分散的な移動、或いは拡大・再編成を行っているようである。

このような傾向は、中期のように同じ場所で複数の居住域を集住させた集落構造ではなく、居住域の独立性から派生した集落が分散的に出現するものと、新たな場所に移動し、集落を再編成するものがある。

しかも、いずれの形態の集落も、同一の流域内で１㎞以内の近接した配置であり、同流域の他の場所には集落となる遺跡は見られない。これは、単純に広域なエリアの中を移動しているというより、流域全体を１～２つの集落（集団）が生産域、或いは生活圏として利用していた可能が考えられる。つまり、中期の複数の集団が消滅したのではなく、同一流域という一つの領域の中で、中小河川を軸として結束した耕作や土木作業の共同労働を行う「農業共同体」的結合[14]を成立させることで、集住から分散した集落を形成したと考えられる。

また、この時期の近畿地方では、鉄器の流入など新たな技術革新があり、これまで未開であった段丘や丘陵地への進出が可能となる。独立した集団をまとめるだけでなく、新たな資源や土地の確保は首長層の誕生へ繋がる要因の一つと言えよう。これは、方形周溝墓などの造墓が中期の方形周溝墓群とは異なる限定的なものであることからも、階層差が生じていることを窺える。

さらに、流域単位の小集団同士に争った形跡が見出せないことは、各流域単位の集団が、生産域の共同運営や墓域、祭祀に至るまでを共有していたとも言える[15]。後期段階に発生した集団の分散化は、これまでとは全く異なった「共同体」という新たな集落や造墓の在り方を誕生させたのだ。

Ⅴ．乙訓地域における地域共同体の誕生

弥生時代後期の集落は、小規模集落が散在する傾向にあるが、旧流路を復元すれば、各流域単位での集団の動態を窺えることから、弥生時代終末期の遺構分布についても、極めて限定的に、後期とほぼ同様の流域にまとまる（図８）。小泉川流域、犬川・風呂川流域、羽束師川流域、寺川流域である。

南側では、風呂川下流域の雲宮・水垂遺跡付近に小規模な集落が認められる以外はほとんどの実態はよくわかっていないが、北側では、寺戸川上流にある中海道遺跡が、この時期に突出して遺構密度が高くなり、集落の規模も大幅に拡大させる。集落内には大型竪穴建物がつくられ、古墳時代前期初頭には方形の濠が巡る大型掘立柱建物がつくられる。背面に位置する向日丘陵上には、五塚原古墳をはじめとする大型前方後円墳が継続的に築造される。

この時期の遺構分布の状況は、中海道遺跡とその他という明確な優劣がある。これが集落間の序列なのか、地域機能の分化のようなものなのかは判然としないが、弥生時代後期に誕生した小地域のまとまりとなる地域共同体の中から、終末期には中海道遺跡の首長層を中心とした広大な地域共同体が成立している。

このことは、後の古墳時代前期の古墳の規模にも、如実に反映されており、向日丘陵上にある 100 m級の前方後円墳に対する、各流域の古墳は形状･規模ともに劣る。また、小泉川支流の久保川最上流地点に鳥居前古墳、風呂川流域に長法寺南原古墳が造墓されているように、各流域の水源地に古墳が立地する[16]。しかも、古墳時代の首長墓の系譜[17]は、弥生時代終末期に見られる流域毎のグルーピングとほぼ同様の範囲を示している。

これまでも指摘されているように、最初期の古墳が形成される纒向遺跡の古墳（墳丘墓）群と同型のものを築造する強力な首長の誕生が、ヤマト王権との関係の強い関係性をもつ中海道遺跡を中心とした支配体制の成立さ

せたことは間違いないだろう。

しかし、本稿で概観してきたように、弥生時代中期に集住した複数の集団が､独立した後期の集落を成立させ、流域単位の共同体を形成することが、地域支配の枠組み形成に必要なプロセスである。

つまり、 乙訓地域では、古墳の誕生を待たずに、各流域を主体とした共同体の成立により、弥生時代終末期にはすでに地域支配のプロト体制が成立していたと言える。そうした成熟した地域とヤマト王権の結びつきによって、列島全体の支配体制が確立されるという、次のフェーズへと移行していく。

【註記】

1） 図２・３・７・８に示す河川の復元は、京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の各報告書に掲載されている弥生時代の河川・自然流路のデータを参考にした。ただし、弥生時代における詳細な時期別の流路範囲特定までは困難であるため、向日市域は（國下・中塚 2003)、長岡京市内は「地形分類図」（長岡京市史編さん室編 1991）などの情報も反映させ、当時の流路範囲を推定したものである。なお、遺構分布図の作成には、佐藤陽子氏をはじめ（公財）長岡京市埋蔵文化財センター整理員の皆さんの協力によるものである。記して謝意を申し上げます。

2） 本稿で用いる弥生時代の時期区分は、表１（森岡 1990、岩﨑 1989、桐山 2018、福家 2016・2017、吹田 2006）のとおりである。

3） 遺跡名は、最も近い包蔵地名を用いているが、図２～３に示す遺跡範囲は「遺跡マップ」『京都府市町村共同統合型地理情報システム』に掲載している包蔵地範囲とは異なる。

4） 國下多美樹 2013「集落形成にみる地域の個性断章―「乙訓らしさ」とは何か―」『弥生研究の群像』大和弥生文化の会

5） 岩﨑誠 2018「乙訓地域の弥生集落と展開画期」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』古代学協会

6） 長岡京跡左京〇〇次調査は図４の「L〇〇」、長岡京跡右京〇〇次調査は図６の「R〇〇」と同じ調査区を指す。

7） 若林邦彦 2008「集落と集団２―近畿―」『集落からよむ弥生社会』(『弥生時代の考古学』８） 同成社

8） 居住域形成パターンＢ型は、「墓群に近接した領域には、その形成に相関する可能性のある集落が確認されていない場合。やや離れた地点（２～５㎞）の居住域の集団が造墓主体だったことが想定される。」（若林 2005）

9） 若林邦彦 2016「集落からみた弥生から古墳時代の変化」(古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』) 六一書房

10） 若林邦彦 2006「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大」『古代文化』58 古代学協会

11） 伊藤淳史 2005「国家形成前夜の遺跡動態－京都府南部（山城）地域の事例から－」『国家形成の比較研究』学生社

12） 福家恭 2016「長法寺遺跡の再検討」『近畿弥生の会第 19 回集会大阪場所』 近畿弥生の会

13） 岩﨑誠 1992「京都府の弥生集落遺跡概観」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会

14） 都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史１　原始・古代１』 東京大学出版会

15） 伊藤淳史 2013「集住から散住へ―弥生時代後期「乙訓低地帯遺跡群」の評価―」『弥生研究の群像』 大和弥生文化の会

16） 古閑正浩 2019「鳥居前古墳・流域・社会・王権」『鳥居前古墳』 大山崎町教育委員会

17） 都出比呂志 1989「古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

【参考文献】

國下多美樹･中塚良 2003「長岡宮の地形と造営～丘と水の都～」『都城 14』（公財）向日市埋　蔵文化財センター

長岡京市史編さん室編 1991『長岡京市史』資料編一　長岡京市役所

福家恭 2017「乙訓地域における縄文～弥生時代の集落―雲宮遺跡と上里遺跡の動態から―」『弥生文化出現期前後の集落について』 京都府埋蔵文化財研究会

福家恭 2019『令和元年度特別企画展弥生時代のムラ』（公財）長岡京市埋蔵文化財センター

古川匠 2011 ～ 2013「桂川右岸における古墳時代集落の動向（１）～（５)」『京都府埋蔵文化財情報』第 116 ～ 119・122 号

若林邦彦 2005「方形周溝墓群と集落」『考古学ジャーナル』534 ニューサイエンス社

表１　乙訓地域の時期区分

時期区分	弥生時代前期				弥生時代中期								弥生時代後期					弥生時代終末期
	前半			後半	前葉			中葉		後葉			前半		後半			
森岡1990	山城Ⅰ－1	山城Ⅰ－2		山城Ⅰ－3	山城Ⅱ－1	山城Ⅱ－2	山城Ⅱ－3	山城Ⅲ－1	山城Ⅲ－2	山城Ⅳ－1	山城Ⅳ－2	山城Ⅳ－3	山城Ⅴ－1	山城Ⅴ－2	山城Ⅴ－3	山城Ⅴ－4	山城Ⅴ－5	庄内式期
岩﨑1989	Ⅰ前半		Ⅰ後半		Ⅱ古	Ⅱ新		Ⅲ古	Ⅲ新	Ⅳ			Ⅴ古		Ⅴ中	Ⅴ新		
桐山2018	雲宮Ⅰ期	雲宮Ⅱ期	雲宮Ⅲ期	雲宮Ⅳ・Ⅴ	雲宮Ⅵ期													
福家2017					神足1期	神足2期		神足3期		神足4期	神足5期							
福家2016												長法寺1期	長法寺2期		長法寺3期	長法寺4期	長法寺5期	
吹田2006													山城Ⅰ～Ⅲ期		山城Ⅳ期	山城Ⅴ期		山城Ⅵ～Ⅶ期

<出典>
・岩﨑誠1989「山城地域」『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
・桐山秀穂2018「雲宮遺跡における弥生前期の環濠集落」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』古代学協会
・吹田直子2006「山城地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
・福家恭2017「長岡京市神足遺跡の再検討―中期拠点集落の構造―」『近畿弥生の会第20 回集会京都場所』近畿弥生の会
・森岡秀人1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ木耳社

吉野ヶ里集落における中国城郭構造の導入と日中外交

七　田　忠　昭

Ⅰ．はじめに

1986 年から開始された吉野ヶ里遺跡の本格的な発掘調査は、2012 年度でいったん中断して調査成果をまとめる作業がなされ、弥生時代については 2015 年以降 20 年までに集落跡、一般墓地、墳丘墓、墓地総括、弥生時代総括編[1)] が発行された。それ以前に発行された 10 編以上の概要報告書や、周辺遺跡の発掘成果等と合わせ、ようやく吉野ヶ里遺跡を評価することができるようになってきたといえる。

日本の縄文時代晩期から弥生時代にかけては、中国や朝鮮半島の先進文化が次々と伝播し、生産のみならず住居や集落、墓地の形態も様変わりした。水稲や畑作等の農業や、金属や絹布等の手工業生産の導入・発展は、富や権力を生みだし、地域毎の紛争や戦争を経ながら集落間のネットワークはさらに紐帯を強め、日本に原始的な国家群を生成させた。

中でも、集落景観は、従来の縄文時代のそれに比べ大きな変化を遂げる。縄文時代晩期後半に、中国文化の影響を受け朝鮮半島で成立した本格的な農耕文化である松菊里文化が九州北部地方に伝播し、次第に東方へと拡散した。半島系の竪穴建物や掘立柱建物が建ち並び、防御・防衛や区画のために周囲に環壕を設けた集落である環壕集落も出現した。

環壕は、日本での出現以来、朝鮮半島無文土器時代のそれと同様、自然地形に沿って平面円形や不整形に掘削され、門（出入口）は掘り残しただけの簡単なものであった。佐賀県吉野ヶ里遺跡では、弥生時代後期前半（１世紀）に設けられた集落全体のほぼ全域を取り囲む環壕（外環壕）に、くいちがい門など従来見られなかった構造の門が出現した。後期後半以降（２世紀後半）は、南と北の内部高所の集落拠点を平面長方形に近い形や長方形に、また円と方を合わせたような平面Ａ字形に環壕が取り囲むようになった。その環壕の各所に半円形・コ字形に外側に張り出す突出部が設けられ、その内側に物見櫓（望楼）が建設された。南北内郭の古段階環壕に伴うものは後期中頃（２世紀初め頃）に出現していた可能性が高い。

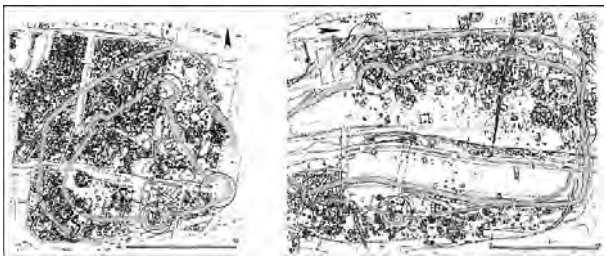


図１　吉野ケ里遺跡の北内郭跡（左）と南内郭跡（弥生時代後期中頃～終末期）

集落内の様々な施設の配置などを含め、このような中国的な構造の施設が出現する現象を、自然発生的、単なる民間の交流による現象ではなく、中国正史が記す日中外交等によってもたらされたものであり、外交に携わった倭人たちの手によって生まれたものと考えてきた[2)]。

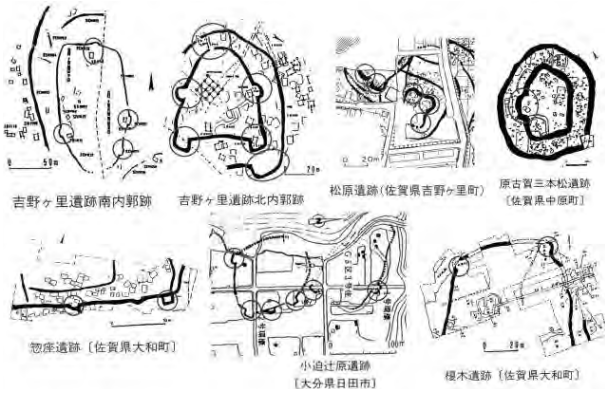


図２　環壕突出部をもつ環壕集落跡（〇印は環壕突出部）

Ⅱ．佐賀平野独特の環壕集落と吉野ヶ里遺跡

吉野ヶ里遺跡のような突出部が備わった環壕をもつ集落跡が、佐賀平野を中心に一部筑後川流域に分布するこ

とは知られていた[3)]。1986年から89年にかけての吉野ヶ里遺跡の発掘調査で、内郭を形成する幾つかの環壕に数か所の物見櫓と目される高床建物跡が伴う突出部が確認され、倭人伝が卑弥呼の居所の情景として記す「宮室・楼観・城柵」の楼観に当たるものではないかと話題になった。

1992から93年にかけての北内郭跡の調査でも同様な環壕突出部に伴う物見櫓跡や、新たに鍵形に屈曲したくいちがい門跡が確認された。また、南内郭正門左右で確認された一対の環壕突出部と物見櫓からなる施設が、中国城郭などの威厳のある防御的正門である双闕と類似するものであることも分かってきた[4)]。その後も、全国で環壕集落跡の発見は増加しているものの、このような施設は確認されておらず、分布状況に変化もない。

環壕に突出部が伴う弥生時代後期後半前後から終末期の集落跡は、現在までに吉野ヶ里遺跡を含む佐賀平野の11遺跡と、福岡県筑後平野の２遺跡、大分県日田盆地の１遺跡の計13遺跡で、計20の環壕跡が確認されている。つまり、佐賀平野を中心として、一部筑後川流域にこれらの遺跡が分布しているのである。この中で、突出部内側に物見櫓跡が伴うのは吉野ヶ里遺跡のみであり、10箇所あまりのすべての突出部にこの建物が付属することは、これら突出部を持つ環壕集落の間にも階層性を認めることができるかもしれない。

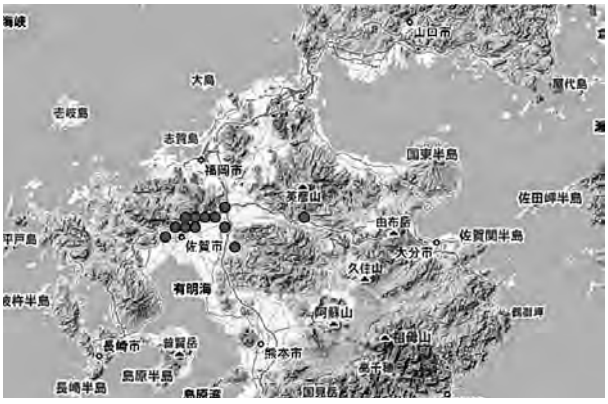


図３　環壕突出部をもつ環濠集落跡の分布

なお、これをさかのぼる弥生時代中期の前３～２世紀に属する福岡県小郡市一ノ口遺跡の柵囲い集落跡では柵が半円形に突出した部分とその内側で４本柱の物見櫓跡が発掘され[5)]、同時期に属する長崎県壱岐市原ノ辻遺跡の環壕集落跡では半円形に突出した環壕跡が確認されたという[6)]。これらの源流について興味がもたれるが、吉野ヶ里遺跡の中期初頭から前半にかけての遺構から出土した漢時代以前の内反りの青銅製素環付き鉄刀子や鋳造鉄斧片、鉄製蝶番（棺環）などは、漢書地理志が記す楽浪郡治への入貢以前の倭人による中国との何らかの交渉・交流をうかがわせる資料である。

先が丸い平面Ａ字形をなす二重の環壕によって囲郭された吉野ヶ里遺跡北内郭跡では、Ａ字の先端のやや右側に門が設けられているが、門の部分では内外の壕の陸橋部分を左右にずらして、その間を木塀と板で囲む極めて閉鎖的なものとなっている。中世以降の城郭のくいちがい虎口と同様な門であり、この施設も弥生時代では国内唯一のものとなっている。

これらの施設は、後期中頃から終末期に属する40ha規模の環壕集落の内郭（北内郭・南内郭）を構成する環壕に伴うものであるが、現在までに７～８箇所確認されている外郭ラインを構成する外環壕跡の門（出入口）跡でも、門の部分の環壕全体を外側に大きく突出させているものや、門両側の環壕先端付近を内外にずらしてくいちがい構造にしたもの、極端に入り口の幅を狭めたものなどが存在する。外環壕は後期前半代（１世紀前半）から後期中頃にかけて掘削されたと推定されることから、この時期、既に特異な形態の門施設が存在していたことになる。

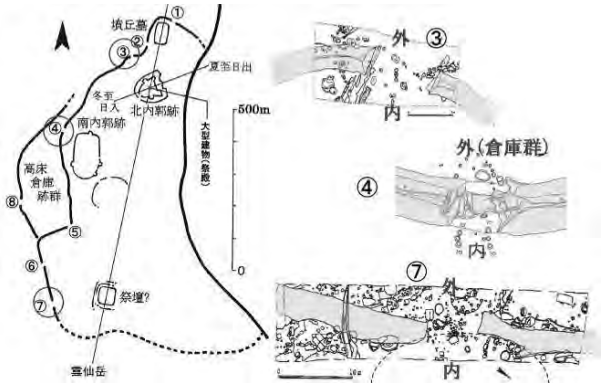


図４　吉野ヶ里遺跡概略図と外環壕の特異な出入口

Ⅲ．古代中国の城郭との関連

古代中国では城郭に様々な守城（防御）施設が備えられていた。新石器時代仰韶文化期の陝西省姜塞遺跡では平面円形にめぐる環壕にくいちがい門と平面コ字形の突出部が存在し、この頃すでに防御施設が出現していたことを示している[7)]。龍山文化後期に属する河南省王城崗

遺跡などでは、版築でつくられた城壁の角が外側へ突出しており、後世の角楼を想起させる[8]。春秋戦国時代斉国の都城である山東省臨淄古城では、数ヶ所の門部分の壕や城壁の跡が外側へ平面円形に突出する[9]など、後世の甕城の原型と考えられる。

漢・三国時代の城郭構造は、戦国時代に形成された基本構造に改良を加えながら踏襲している。前漢代の内蒙古三道営古城では、城壁の直線部分には等間隔に馬面が、角には角楼などの突出部が配置されており、門には平面Ｌ字形の付属の城壁である護城墻（甕城）が設けられている[10]。漢代の内蒙古潮格旗烏力吉高勒城障では、平面方形に巡る城壁の三方の中間点と四ヶ所の隅には、平面半円形と方形の突出部である馬面と角楼が、馬面がない城壁の中間には護城墻が設けられていた[11]。漢魏の都城である河南省洛陽城の城壁跡でも数カ所で馬面の遺構が発掘されている[12]。

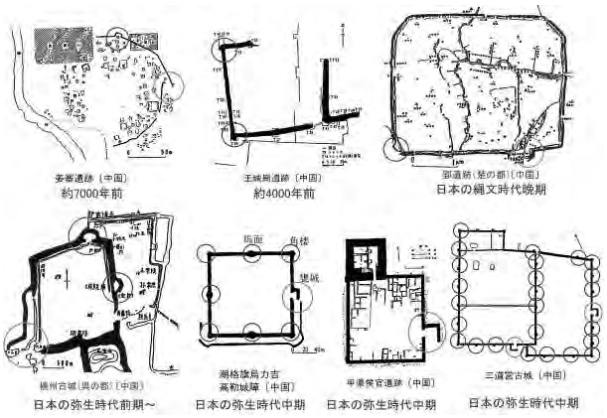


図５　中国の環濠集落と城郭（○印は環濠・城壁の突出部やくいちがい門）

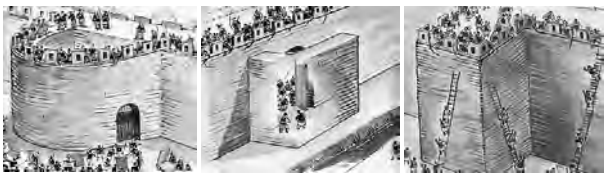


図６　甕城（左）、護城墻（中）、角楼・馬面（右）
［来村多加史他『戦略戦術兵器事典① 中国古代編』学習研究社 1994 より］

このように、日本の弥生時代に当たる中国漢魏時代の城壁には一定の間隔を持って馬面、城壁の角には角楼と呼ばれる突出部が設けられていた。これらは、正面からだけではなく左右に展開する敵に対しても攻撃が仕掛けられる守城施設である。また、守城の要である門には、馬面・角楼と同じく前方左右からの敵に対する守城施設であるとともに一枚目の門扉が破られても二枚目に達するまでに上部各所から攻撃が仕掛けられる平面半円形や方形、Ｌ字形の付属の城壁である甕城や護城墻が設けら

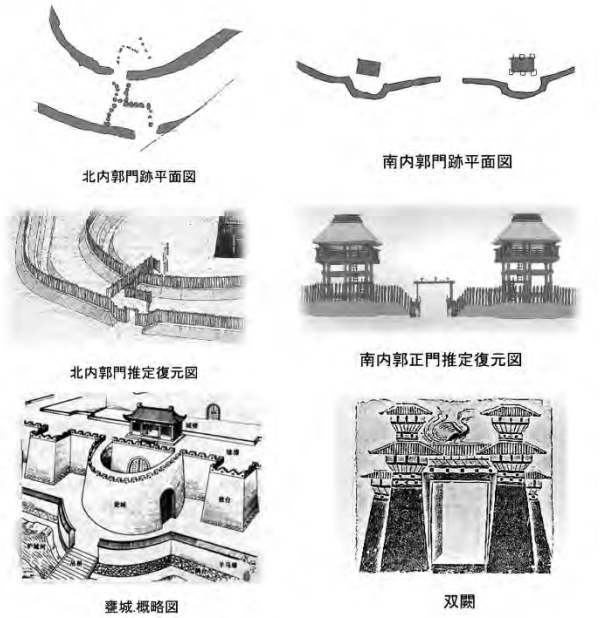


図７　吉野ヶ里遺跡南北内郭の門と中国城郭の門
［佐賀県『吉野ヶ里遺跡－弥生時代総括編１－』2020、建設省『国営吉野ヶ里歴史公園建物等復元基本設計報告書』1997、国土交通省『国営吉野ケ里歴史公園南内郭建物等基本設計報告書』2003、「瓮城」『百科知識中文網』、四川省成都市鳳闕画像磚 より］

れていたのである。

吉野ヶ里遺跡での、環壕集落内での各種施設の配置について見てみよう。まだ調査不足ではあるが、丘陵の南、前期後半の環壕が存在していたあたりが中期集落の中心部と考えられる。周囲には断片的に環壕も確認されておりこの丘陵南部全体を囲んでいた可能性がある。集落中心部には大型の竪穴住居跡が小規模ではあるが掘立柱建物とともに多く存在しており、東の傾斜部分には小型の竪穴住居跡群が存在する。背後である西の緩斜面には倉群（穴倉から高床倉庫へ変化）が住居群とは区別されて存在している。住居群の分布から考えると、西の丘陵頂部あたりが首長層の居住区で、東方や東斜面に一般の集落構成員の居住区があったと考えられる。中期前半に設けられた歴代首長を埋葬する墳丘墓は北方に位置する。

集落全体の構成について、中期の西上位・東下位の構成から、後期後半、終末期の北上位・南下位の構成への変化は、礼制の変化により「座西朝東」から「座北朝南」へと変化した中国前漢から後漢・魏への都城の変化[13]に対応している可能性がある。また、中期前半のうちに築造された墳丘墓や南の祭壇と目される人工丘は、弥生時代終末期まで祭祀の対象となっており、終末期に北内郭の中に建設された大型建物は墳丘墓と祭壇を結ぶ南北

線上に位置する。北に邙山や方丘などを、南に明堂や円丘などの祭祀施設を配置する漢魏時代全般にわたる中国都城における施設配置の影響も垣間見えそうである。この南北線の南方向60km延長には火山でとして有名な雲仙岳がそびえている。また、北内郭を二分する北東―南西方向の中軸線が夏至の日出―冬至の日の入方向を向いていることも注目される。

Ⅳ．外交を物語る鏡・刀と吉野ヶ里の首長

これまで述べたように、筆者は吉野ヶ里遺跡で特徴的な環壕突出部や鍵形のくいちがい門は、古代中国（漢・三国時代）の城壁に普遍的に付属する守城（防御）施設[14]をつよく意識したものと考えている。すなわち、吉野ヶ里集落の突出部と物見櫓のセットは中国城郭の城壁に付属する馬面や角楼を、くいちがい門は甕城や護城墻を模倣して、環壕の掘削や土塁の構築、高床建物の建設など在来の技術で、版築工法で構築された城壁で囲郭された中国の城郭景観に近づけようとしたとしか考えられないのである。

環壕突出部に物見櫓が伴い、くいちがい門を備えた集落跡は、現在のところ国内では吉野ヶ里集落が唯一の存在である。外見を中国の都城・城郭に見せようと努力したことが想起される。加えて、吉野ヶ里集落では、集落全体の中の諸施設の配置に関しても、中期以来、中国の世界観や、「座西朝東」から「座北朝南」へと変化した前漢から後漢への礼制の変化の影響を受けていたとも考えることもできる。

このことは、紀元前１世紀から継続的に繰り広げられた倭国から中国への朝貢外交が契機となったことは否めない。これら外交の下賜品として国内に流入した文物のうち朽ちずに残ったものに銅鏡や鉄製武器がある。

吉野ヶ里遺跡周辺（神埼地方、吉野ヶ里のクニ）の弥生時代墓地の甕棺墓や土坑墓、箱式石棺墓からは、中期後半（前漢代）から後期後半（後漢代）にかけて継続的に漢鏡（中国製の銅鏡）や鉄製素環頭大刀（鉄環首刀）などの武器が出土する。漢鏡副葬の初現は、神埼郡吉野ヶ里町と三養基郡上峰町にまたがる二塚山遺跡の15号甕棺墓に副葬された前漢の連弧文「絜清白」鏡である。その後、後期終末期までの間、幾つかの段丘上の少なくとも14ヶ所に分散して営まれた墓地の甕棺墓や土坑墓、箱式石棺墓などに漢鏡が副葬され続ける。この地方の銅鏡副葬の特徴として、中期中頃までの銅剣の副葬数が１棺１点であったのと同様、１棺１面の漢鏡副葬となっている。

このうち中型鏡は二塚山遺跡や、吉野ヶ里町三津永田遺跡、松原（横田）遺跡、松葉遺跡、坊所一本谷遺跡の５遺跡で計９点が出土し、小型鏡は二塚山や、三津永田を含む７遺跡で計９点が出土している。中でも二塚山・三津永田両遺跡では前漢から後漢の長期間にわたる中型・小型の漢鏡を後期の間副葬し続けていた。三津永田の104号甕棺墓棺内から出土した流雲文縁獣帯鏡は王莽時代に製作されたもので、後漢鏡の中では最古式のものであり、棺外には素環頭鉄刀が添えられていた。人骨と共に出土した二塚山遺跡や吉野ヶ里遺跡、および周辺の出土例などから、中型鏡は男性の、小型鏡は女性の副葬品であった可能性が高い。前漢から後漢終わりころまでの長期間にわたる銅鏡が、墓地を違えるように相次いで副葬されていることは注目される。ちなみに、吉野ヶ里遺跡の環壕跡や神埼市北外遺跡の箱式石棺からは20cm以上の大型後漢鏡の破片も出土している。

このことについて、岡村秀典は、「弥生時代中期から後期にかけて、吉野ヶ里から二塚山、そして三津永田へと青銅器を副葬する首長墓が移動していたようであり、集落を単位とする族長も、平野単位の社会を統率する上位の地域首長も、安定した世襲的な権力を掌握するにはいたっていなかった」と考えた[15]。

しかし、弥生時代前期前半に造営され、後期中頃以降から終末期に至り大規模環壕集落に発展し、随所に中国の城郭都市的な景観を取り入れた吉野ヶ里集落に、地域全体をまとめる首長が不在であったとは到底考えられない。私は、周辺の有力集落から共立され吉野ヶ里集落に君臨した首長は、中期中頃までは墳丘墓に埋葬されていたものが、中期後半以降は、役割を終えるか死亡したら出身集落の墓地に、漢鏡や鉄製素環頭大刀を添えて葬られた可能性が高いと考えている[16]。首長を輩出したのは主に三津永田と二塚山の墓地を営んだ有力集団であったと考えられる。

吉野ヶ里遺跡周辺の弥生時代墓地を比較してみると、中型棺や遺存状況が悪い棺など成人用・小児用の見分け

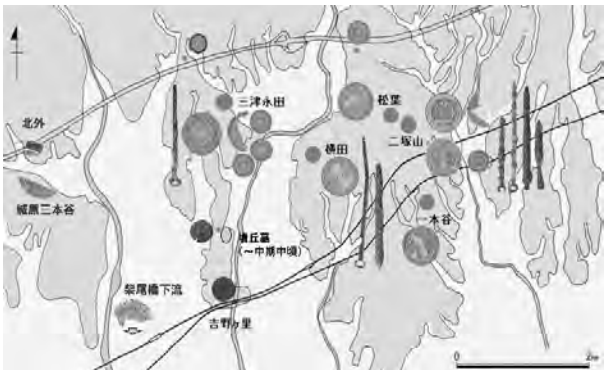


図８　吉野ヶ里遺跡周辺での漢鏡・鉄刀等の副葬

表１　九州北部各地域の漢鏡を副葬した首長の墳墓

時期	唐津	糸島	福岡	佐賀(神埼)	佐賀(佐賀)	遠賀川上流
中期 (後半前葉)		三雲南小路 K	須玖岡本 D 地点 K, 上月隈			
中期(後半後葉)	(+)	(+)		二塚山 K15		立岩 K10・K35
後期 (前半-中頃)	桜馬場 K	井原鑓溝 K, 飯氏 M7, 井原鑓溝 M6・M17	須玖岡本 B 地点, 宮ノ下	三津永田 K104・D, 二塚山 D29・D36・D52	ヒヶ瀬 S3062・D3256・D3214, 尼寺一本松 K	五穀神社 S, 磯光 S, 伊香利 S, 宝珠 S, 宮原 S
後期 (後半-終末)	中原	平原 1 号墓, 東二塚, 三雲寺口	日佐原 D	松葉 S, 横田 S, 一本谷 D, 城原三本谷 S, 北外 S	白石原 K	谷頭 S, 津生 S

(K 甕棺墓 D 土坑墓 M 木棺墓 S 箱式石棺墓)

福岡・糸島地方では漢鏡を 30 ～ 40 面副葬する墳墓が散在するが、佐賀・神埼地方では漢鏡１面を副葬する墳墓が継続的に存在（K は甕棺墓、M は木棺墓、S は石棺墓、D は土坑墓。福岡教委常松氏作成の表に加筆）

図９　吉野ヶ里遺跡周辺首長墓出土の漢鏡と鉄製武器

ができないものを除くと、成人用：小児用の比率は、二塚山遺跡で 84：16、吉野ヶ里遺跡で 66：34、上峰町船石南遺跡で 50：50 となる。大人と子どもが半々の船石南遺跡に比べ、中国製の銅鏡や鉄製武器、装身具など貴重な品々を多く副葬していた二塚山墓地の子どもの死亡率の低さが注目される。このことは、二塚山の墓地を営んだ集団には、歴代中国との外交に深く関わるなどクニをまとめる役割をもった階層の人が多く、集団の栄養状態や集落の衛生状態が良好であったらしいことに起因したものと考えられる[17]。緊急調査であったがために詳細が不明な三津永田遺跡も同様であった可能性が高い。三津永田遺跡の北方には未発掘地域が広範囲に存在し、将来の調査が期待される。

鉄製素環頭大刀や大型・中型の漢鏡は中国王朝の権威を帯びた下賜品であり外交の賜物であった。吉野ヶ里遺跡一帯での出土状況は、当地が長期間にわたり弛みなく対中国外交に深く関わっていたこと、あるいは外交の主体であったことを示すものであろう。福岡や糸島など玄界灘沿岸地域には、後の奴国内の須玖岡本遺跡 D 地点や、伊都国内の三雲南小路遺跡１号・２号墓・井原鑓溝遺跡・平原遺跡１号墓など、一つの墳墓から 30 面前後～ 40 面以上の銅鏡が出土するなどして、「王の中の王の墓」とも呼ばれている墳墓が存在する。須玖岡本や三雲南小路の甕棺墓では、漢鏡の他に剣・矛・戈などの青銅武器や武器形祭器、ガラス璧、四葉座金具、多数の勾玉などを、井原鑓溝では巴形銅器などを伴っていた。

倭人伝には、「渡海して中国に到るには、常に一人を使て…。これを持衰と為す。吉善なれば、共に其の生口、財物を顧ゆ。若し疾病あり暴害に遭えば便ち之を殺さんと欲す」とある。管見では持衰の墳墓について論じられたことを知らないが、外交のための航海の安全に重要な役割を担ったのが持衰であり、成功すれば多くの財物を手にしたわけであるから、たくさんの財物を副葬した者と持衰との関連について考える必要がある。

弥生時代における中国正史に残る後漢以降の日中外交は、委奴国王、倭（面土）国王帥升、倭国王卑弥呼（２回）、倭国王壱与の５回であった。他に、狗奴国を巡る帯方郡との交渉や、晋書武帝紀「泰始２年 (266) の西晋王朝への入貢などがある。これらの外交は成功しているので、航海に携わり財物などを得た持衰も数名いたと考えるのが自然であろう。

中国後漢代の高官などを埋葬した洛陽焼溝漢墓では、一人を埋葬した墳墓 40 例のうち、銅鏡１面を副葬したものが 36 例、２面が３例、３面が１例となっており、銅鏡１面を副葬することが通例であった[19]と考えられる。つまり、１面の鏡を副葬する墳墓が継続して営まれる佐賀・神埼地方では、多数の鏡を副葬する墳墓が突発的に現れる福岡・糸島地方とは違い、漢鏡や鉄製武器など中国の威信財を副葬した首長の数では、それらの地域をはるかに凌駕する。

「官を爾支と曰い、副を泄謨觚、柄渠觚と曰う。…世々王有り」と記される伊都国では、いわゆる王墓が幾つか存在していることは注目されるが、やはり断続的と言わざるを得ない。井原鑓溝遺跡では2004年に甕棺墓や木棺墓・箱式石棺墓からなる列状墓地の発掘調査が行われ、破片を含め6面分の後漢鏡などが出土した[18]。墓地の構造や副葬の在り方を含め、先の二塚山遺跡や、後に触れる佐賀市大和町七ヶ瀬遺跡に似ており、この墓地こそが伊都国の首長など官人を含んだ者たちの墳墓群であった可能性もある。

水稲農業の伝播期から中国、朝鮮半島の先進文化を積極的に受容し続けた佐賀地方では、社会の発展期である弥生時代中期始め頃に朝鮮半島などからの人々の大量渡来があり、水稲の生産増や青銅器や様々な染織製品の生産などと相まって大いに社会・文化が発展した。加えて、その後の外交に関わることによって、佐賀地方には中国の文化や世界観がさらに流入することになったと考えられる。

V．集落構造の中国化と倭国王たちの外交

弥生時代の日中外交は漢書地理志や後漢書東夷伝、三国志魏書東夷伝の外交記録に残っている。前漢武帝により108年に朝鮮半島に楽浪郡など4郡が設置されたのち、漢書が「…故に孔子、道の行われざるを悼み、もし海に浮かばば、九夷に居らんと欲す。ゆえ有るかな。夫れ楽浪海中、倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来たり献見すと云う」と記すように、倭諸国の王たちが朝貢外交を開始したことが理解できる。これ以後、九州北部の福岡・佐賀では漢鏡が首長たちの威信財とし所持され死後に副葬されるようになった。

後漢書には、「建武中元二年（57年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年（107年）、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ」とある。57年の遣使での貢納品は記されないが、福岡市志賀島から出土した金印によって「漢委（倭）奴国王」に叙せられたことが分かる。漢委（倭）奴について、明治時代末に内藤虎次郎や稲葉岩吉などは“ヤマト”と読み、これにつながったものとして後漢書引用の翰苑等にある倭面土国、三国志の邪馬台などもヤマトと読むべきであると唱えている[20]。つまり、倭国全体の王は、倭奴国王（名は不明）から、のちに述べる倭（面土）国王帥升、そして倭国王卑弥呼、倭国王壱与ということになる。

107年に160人の生口を貢納し外交を行った「倭国王帥升」は、後漢書を引用した翰苑には「倭面上国王帥升」（上は土の誤記と考えられる）とあり、唐類函・変塞部倭国の条所引の通典には「倭面土地王帥升」、北宋版通典には「倭面土王帥升」とある。面土は、「上峰町米多（めた）」「吉野ヶ里町目達原（めたばる）」などの地名として吉野ヶ里遺跡の東方至近に残り、古事記や国造本紀によると、古墳時代には応神天皇曾孫の都紀女加王を初代とする「筑紫米多国造」の本拠地となった土地であり、多数の前方後円墳からなる目達原古墳群が存在する。「めと」や「めた」に通じる古代の地名や、弥生時代後期になって急速に大型化・中国化した環壕集落跡が存在する土地は他にない。

つまり、倭面土王は、当時、国内最大級の環壕集落である吉野ヶ里集落を拠点としていた吉野ヶ里のクニの首長であった可能性がある。卑弥呼の大夫難升米や、邪馬台国の次官弥馬升など、邪馬台国時代の倭や邪馬台国の高官の名に米（面）や升を用いていることも、彼らが当地の有力氏族であったことを示しているのかもしれない。

吉野ヶ里遺跡を中心とする佐賀平野では、福岡や糸島などの玄界灘沿岸地域と同じく、57年の遣使以降、後漢の銅鏡が出土しはじめ、107年の外交以降はその数を増す。注目すべきは、吉野ヶ里遺跡では、57年の遣使の後、集落の大型化が進むとともに、外環壕にくいちがい門などの特殊な施設が登場し、107年の遣使とほぼ同時期の後期中頃以降に、南北の内郭が営まれ、環壕突出部や物見櫓、くいちがい門などを設け、集落景観を宗主国中国に近づけることに努力した跡がうかがえることである。玄界灘沿岸にあたる福岡・糸島地方など九州北部のほかの地域や、近畿地方など本州では見られない特異な現象である。

この外交で貢納された生口については、従来、中国での用例に従い単に奴隷といった解釈がなされてきたが、近年、孔子以来道徳を保持すると信じられてきた倭人

ではなかったかとする考えもでてきた[21]。このことは、先に示した漢書の記事で理解できる。「夫れ楽浪海中、倭人有り…」の前の文に論語にも「孔子、九夷に居すを欲す、…子曰わく、君子これに居らば、何の陋しきことかこれ有らん」や「孔子曰く、中国では道徳が行われないから、筏に乗って東の海に（ある九夷に）いきたいと…」として登場する孔子の思いが述べられており、後漢末といわれる論語の成立より以前、107 年の遣使の少し前（80 年代初め頃）に成立したとされる漢書の徳をもった倭人の記事が、後漢の若き皇帝安帝に倭人を求めさせたのであろう。中国皇帝は臣民に徳を授けるために徳を積む必要があったからである。この求めに即座に応じたのが倭面土国王帥升であったと考えられる。

三国志にも、「景初二年（三年の誤りとされる）六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。…汝献ずる所の男生口四人・女生口六人…正始四年、倭王、また使を遣わし、生口を献ずる」、「壱与…、男女の生口三十人を献上し…」とあり、引き続き中国皇帝が倭王に求めたのが生口であったことがわかる。卑弥呼の最初の遣使が 239 年であった場合、８歳と若くして即位した皇帝斉王芳に対し、３回の遣使で、おそらく 50 人以上の倭人が献じられたことになる。

以上述べたように、後漢に対する倭国としての初外交である 57 年の遣使は「朝賀」とあり、元旦の行事に合わせたものであり、107 年の外交は安帝が 13 歳で即位して間もない時期である。西域での反乱や父清河王の死去を経て少し安定した時期であった。日本が東アジアの秩序の中に組み込まれていく過程であり、まさに、国際政治的な動きであった。吉野ヶ里遺跡の集落構造の変革は、単なる自然的な変化ではなかった。外交によって観察した中国の城郭構造や目立った施設を、在来の技術を駆使して似たように建設し、強大な中国帝国の傘下にあることを国内外に示そうとしたものと考えている。

Ⅵ. 吉野ヶ里遺跡と邪馬台国問題

倭人伝に記された倭王卑弥呼が都を置いた邪馬台国の位置を知ることは、日本の古代国家成立の過程を明らかにするための重要な課題である。江戸時代以来、日本の古記録に記され今に伝わる地名や行程記事からの推察が主流を占めた。本格的な議論は江戸時代の新井白石や本居宣長、明治時代末期の東京帝国大学の白鳥庫吉と京都帝国大学の内藤虎次郎による論争以降、九州地方と近畿地方が二大候補地として定着した感があった。

そのような状況の中、考古学からのアプローチは大正時代末に始まる。東京帝室博物館の高橋健自は、邪馬台国を古墳時代ととらえ、「当時の政治・文化の中心であり、中国文化の影響が大きかった場所」に違いないと考え、中国漢・三国時代の銅鏡やその模造品が畿内で多く出土することなどから、邪馬台国は畿内にあったと主張した[22]。京都大学の小林行雄は、近畿地方を中心に古墳から出土する三角縁神獣鏡に代表される鏡の同笵鏡と、その地方への分布関係などから近畿大和説を唱え、三角縁神獣鏡を魏皇帝から卑弥呼に下賜された銅鏡百枚やその後宗女壱与に下賜されたものなどとみた[23]。

邪馬台国の有力な所在地候補とされる九州北部や近畿地方のみならず、全国的に邪馬台国時代（弥生時代後期終末期）に関する考古学的な情報が豊富に蓄積されている中で、倭人伝が記す邪馬台国やそこに存在した倭国の都に関する情報の片鱗は私たちの眼の前に現れているはずである。倭国の漢・魏帝国への度重なる外交使節（朝貢使）の派遣は、楽浪・帯方郡の郡治、洛陽城や宮殿、地方の城郭の有様、市井の有様、墳墓や祭祀、世界観、迎賓儀礼、豪華な文物など様々な先進文化を垣間見る機会となった。のちの遣隋使や遣唐使ほどではないにしても、その成果が集落構造や出土遺物にどのように表れているかなど、同時代の日本において、中国文化波及の濃さを把握すること、つまり、高橋が述べた「中国文化の影響が大きかった」地域や遺跡を探索することこそが、考古学に携わる者が邪馬台国の所在地を考える際に、第一になすべき作業であろう。

邪馬台国所在地が盛んに論議されるのは、言うまでもなく倭人伝に「南至邪馬台国、女王之所都」、つまり邪馬台国は倭国の都の所在地であり、倭国王卑弥呼の宮殿が置かれた国だと記されているからである。邪馬台国問題は、ヤマト政権の伸長など古墳時代以降の政治情勢、ひいては古代国家成立の問題などと深く関わるものとして重要である。しかし、奈良大和地方で生まれたヤマト政権の勢力が広く列島に波及するという後の時代像に影響されることなく、まず倭人伝の記事と考古学のこれま

での成果を比較検討することから始めなければならない。

倭国は、『魏志倭人伝』が伝えるように、魏と正式な外交を保っていた。つまり、倭人伝の記述と発掘によって明らかにされた同時期の考古学や関連諸科学の研究成果とを対比することは当然であるが、集落構造の変化や墓地から出土する中国の権威を帯びた威信財などから垣間見ることができる中国王朝との外交の成果に視点を置いて、邪馬台国の中心集落の様相について考えていく必要がある。邪馬台国や倭王卑弥呼の居所の有様を知る記述が「倭人伝」の中に幾つか存在するが、それらは遺構・遺物を扱う考古学でしか解釈できないからである。

ここでは、倭人伝の記述から、邪馬台国と呼ばれる集落群やその中心集落の構造、中心集落の中に存在した倭王卑弥呼の宮殿の構造に関する記事などを取り上げ、九州北部や吉野ヶ里のクニ（神埼地方）、吉野ヶ里遺跡の発掘成果とを比較をしたことがあった[24]が、改めて気づいたものも含め、倭人伝の記述順に以下に示してみたい。

(1)「**南して邪馬台国に至る。女王の都するところなり。…官に伊支馬有り、次を彌馬升と曰い、次を彌馬獲支と曰い、次を奴佳鞮と曰う。**」（読み下し文は、佐伯有清『魏志倭人伝を読む　下』吉川弘文館2000　を用いた）　この記事からは、邪馬台国は倭王卑弥呼の都となったこと、つまり倭国の都城（宮殿）が邪馬台国内に設けられたことや、邪馬台国の長官である伊支馬や弥馬升以下の次官たちがクニを運営するための宮殿とも呼ぶべき拠点が存在したことを示している。

図10　邪馬台国の構造

倭王の宮殿に関する記述には「男弟有りて国を佐け治む。…婢千人を以て自ら侍らしむ。唯、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝えて居所に出入す」とあり、倭国の宮殿内に倭国の運営に携わる官人的な人々の存在感がない。倭国と邪馬台国の運営（政事）が一体となって行われ、倭国と邪馬台国の宮殿が近隣に存在したものと考えられよう。

(2)「**其の国、本亦、男子を以て王と為す。住まること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名は卑弥呼と曰う。…**」　倭国が戦乱状態の中で、諸国の首長たちによって卑弥呼が共立されたことがわかる。つまり、卑弥呼を立てたクニグニの領域は、戦乱が頻発した地域ということになり、巨大化した銅矛など、青銅の武器型祭器によって集団祭祀が行われていた地域であったと推測される。

また、卑弥呼共立の前までは、歴代男王が存在していたことが記されている。このことを示す事象は、卑弥呼共立を２世紀末前後とした場合、弥生時代後期中頃から後半の時期に歴代の男王が存在していたことを示すものが考古学的な資料として存在するかどうかである。吉野ヶ里遺跡周辺（吉野ヶ里のクニ）には、漢鏡や素環頭鉄刀などの威信財を添えて男王を埋葬した弥生時代後期前半～後半もしくは終末期にかけての墳墓が多数存在していたことが明らかになっている。国内において、後期全般にわたり継続的に中国の権威を帯びた威信財を副葬した墳墓が営まれる地域は他にない。特に、吉野ヶ里遺跡の北東方約3.5kmに位置する二塚山遺跡と北方約2.6kmに位置する三津永田遺跡は、中期後半以降長期間にわたりクニの首長を輩出した有力集団の墓地と考えられる。

近年発掘された佐賀市大和町の七ヶ瀬遺跡でも、列状に営まれた甕棺墓、土坑・木棺墓のうちの主に土坑墓から漢鏡４　面（前漢小型鏡１面、後漢中型鏡３面）や中国製の素環頭鉄刀などが出土するなど、上記二つの墓地と同様な有力集団の墓地と考えられる[25]。

(3)「**（卑弥呼は）鬼道を事とし、能く衆を惑わす。…王となりて自り以来、見ること有る者少なし。…宮室、楼観・城柵、厳かに設け、常に人有りて兵を持して守衛す。**」　倭国王卑弥呼は、鬼道によって民の上に君臨していたこと記す。鬼道とは、中国の古典の用例から五斗米道・道教とみる研究者が多い[26]。北内郭の平面形は円形と方形を合体したような幾何学的な形である。「天円地方」は道教の基本的な考えであり、また、前方後円墳との関りも説かれている。祖霊祭祀の場であった吉野ヶ里遺跡北内郭の幾何学的な平面形と前方後円墳との関係、左右対称で各所に突出部をもつ平面長方形を基調とした大人層の区画であった南内郭と古墳時代のいわゆる豪族居館との関係にも興味がもたれる。

卑弥呼が倭王として共立されて以来、その居所は非常に閉鎖的なつくりで、卑弥呼が滅多に人前には姿を見せないカリスマ性を備えた女王であることを示している。吉野ヶ里遺跡北内郭は、大規模な外環壕内側の二重の環壕と土塁（おそらく上部には柵）で囲まれた非常に閉鎖的なつくりになっており、左右にずらした環壕の二つの入り口をつなぐ通路はくいちがい構造で内部を見通すことができないなど、同じく閉鎖的な構造となっている。

また、卑弥呼が居住する宮殿区画には宮室（宮殿）や楼観（物見櫓や祭殿などの高殿）、城柵（環壕掘り上げの土塁と上の柵施設）が備わっていたことを記しているが、この倭人伝の記述に最も似かよった景観をもつ遺構は、現在のところ吉野ヶ里遺跡北内郭跡だけである。

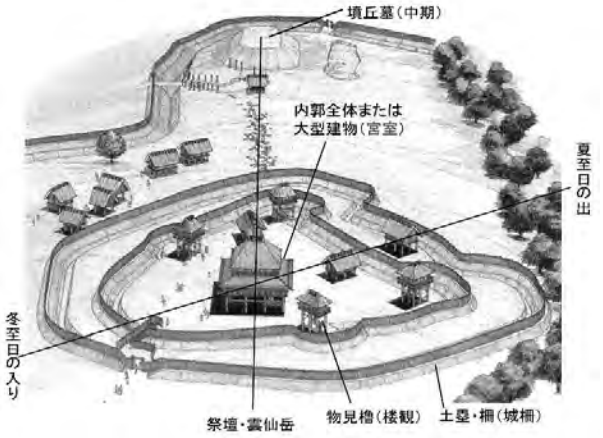


図 11 吉野ヶ里遺跡北内郭跡の施設（復元図）
［建設省『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』より］

(4)「**景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし、郡に詣らしめ、天子に詣りて朝献せんことを求む。大守劉夏、吏を遣わし、将い送りて京都に詣らしむ。**」などの外交行程記事　漢書が記す前１世紀の楽浪郡への入貢以来、度重なる遣使の過程で、倭の使いは各地の郡治や県治などをつぶさに見る機会を得、また、迎賓の饗宴にも預かったと考えられる。57 年の遣使以降は後漢・魏の都洛陽へも達しており、倭王たちが「漢委奴国王」や「親魏倭王」など外臣の王に封じられる。倭の要人たちは都の華やかさや都城の壮大さに驚き、感動を覚えたと同時に漢魏帝国の外臣としてふさわしい倭国の都のつくりや景観を中国のそれに近づけようと努力したことが想像される。

このことは、東南アジアからロシア沿海州南部にかけて、城壁に突出部やくいちがい門を設けた漢魏時代以降の城郭跡が存在することからもうなずける。

(5)「**今、以絳地交龍錦五匹、絳地縐粟罽十張、蒨絳五十匹、紺青五十匹を以て、汝の献ずる所の貢直に答う。又、特に汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤を賜い、皆、装封して難升米、牛利に付す。還り到らば録受し、悉く以て汝が國中の人に示し、國家、汝を哀しむを知ら使むべし。故に鄭重に汝に好き物を賜う也、と。**」卑弥呼の遣使と貢納に対する下賜品が列挙されている。絳地交龍錦（二匹の龍または蛟龍の文様を織り出した錦）や絳地縐粟罽（深紅の地に細密な小紋をパイル織りした毛織物）、また、特に汝に賜うと記された紺地句文錦（紺地に曲線文を織り出した区切り文様の錦）や細班華罽（細密のまだらの華文を織り出した毛織物）といった染織品は、製作に数か月以上を要するものなので、おそらく、宮中に厳重に収納されていたもののうちから女王である卑弥呼に対して最も適切と考えた品が選択されたと考えられる。「銅鏡百枚」については、特注説などがあるが、同じく宮中に保管されていたもの（おそらく後漢鏡）の中から 100 枚が下賜品とされたと考えるのが自然だと思われる。このことは、全体の下から３番目という下賜品の中の銅鏡の記載順位からもうかがうことができよう。

Ⅶ. おわりに

考古学から邪馬台国問題を考える時、それぞれの外交の時期までに生産された中国文物と、集落遺構の中の中国的な遺構の存在を把握することが必要と考える。前者については古くから日本出土の漢鏡や鉄製武器などが取り上げられていたが、後者については、吉野ヶ里遺跡の発掘調査開始以前は比較するものがほぼ皆無であった。吉野ヶ里遺跡で物見櫓（望楼）やくいちがい門の跡など、中国城郭の城壁に付属する馬面・角楼や甕城などを模倣したとしか考えられない遺構が発掘されたことは、まさに高橋が「中国文化の影響が大きかったところ」と述べた邪馬台国の位置を、はじめて集落・都市景観の流入といった面から考えるきっかけとなった。

これまで述べてきたように、吉野ヶ里遺跡では、特に弥生時代後期から終末期にかけての集落構造には当時の中国城郭の構造が強く反映されている部分が各所に存在

していた。ここでは、吉野ヶ里遺跡の特異な集落遺構を取り上げ、日中外交での中国王朝の下賜品と考えられる漢鏡や素環頭鉄刀の出土状況などと合わせて、これらの遺構が中国城郭構造の一部（目立った部分）が外交の成果として意識的に導入されたものであろうということを述べた。停滞する邪馬台国の位置論争において、吉野ヶ里遺跡の発掘成果は、遺構や遺物を基礎とする考古学からの探究にとって注目すべき成果であると考えている。

【註記】

1） 渡部芳久編 2020『吉野ヶ里遺跡 ―弥生時代総括編 1―』佐賀県文化財調査報告書第 227 集

2） 七田忠昭 1995「吉野ヶ里遺跡の環壕区画」第 37 回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』埋蔵文化財研究会、七田忠昭 1996「日本の弥生時代集落構造にみる大陸的要素―環壕集落と中国古代城郭との関連について」『東アジアの鉄器文化』大韓民国国立文化財研究所 など

3） 蒲原宏行 1995「九州２―佐賀県―」『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ』第 37 回埋蔵文化財研究会発表資料

4） 七田忠昭 2019「日本における城郭の誕生と日中外交」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第 14 号

5） 小郡市教育委員会 1994『一ノ口遺跡 Ⅰ地点』小郡市文化財調査報告書第 86 集

6） 古澤義久 2018「環濠集落としての原ノ辻遺跡」『環濠集落その源流を探って―環濠集落にみる東アジア交流―』

7） 西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館 1988『姜寨 上・下』文物出版社

8） 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部 1983「登封王城崗遺址的発掘」『文物』1983 年第 3 期、文物出版社

9） 群力 1972「臨淄斉国故城勘探紀要」『文物』1972 年第 5 期 文物出版社

10） 李興盛 1992「内蒙古卓資県三道営古城調査」『考古』1992 年 5 期 文物出版社

11） 蓋山林・陸思賢 1979「内蒙古境内戦国秦漢長城遺跡」『中国考古学会第 1 次年会論文集』文物出版社

12） 中国社会科学院考古研究所漢魏故城工作隊 1986「漢魏洛陽城北垣一号馬面的発掘」『考古』1986 年第 8 期 文物出版社

13） 田中淡 1989「「墨子」城守諸篇の築城工程」『中国古代科学史論』京都大学人文科学研究所

14） 楊寛 1987『中国都城の起源と発展』学生社

15） 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66 吉川弘文館

16） 七田忠昭 2010「拠点集落の首長とその墳墓―弥生時代中期から後期の地域集落群の動向の一例」『日韓集落研究の新たな視角を求めてⅡ』日韓集落研究会

17） 七田忠昭 2022「原始から古代への展開（弥生時代）」『上峰町史』上峰町史編さん委員会

18） 前原市教育委員会 2007『三雲・井原遺跡ヤリミゾ地区発掘調査成果－２－』

19） 中国社会科学院考古研究所編 1959『洛陽焼溝漢墓』科学出版社

20） 内藤虎次郎 1911「倭面土国」『芸文』第２年第６号、稲葉岩吉 1911「漢委奴国王印考」『考古学雑誌』第１巻第 12 号

21） 岡村秀典 1999「漢帝国の世界戦略と武器輸出」『戦いの進化と国家の生成 人類にとって戦いとは 1』東洋書林

22） 高橋健自 1922「考古学上から観たる邪馬台国」『考古学雑誌』12 巻５号

23） 小林行雄 1952「邪馬台国の所在論について」『ヒストリア』第４号 大阪歴史学会

24） 七田忠昭 2014「倭女王卑弥呼の宮殿 ―倭人伝が記す邪馬台国中心集落の構造と発掘成果―」『佐賀学Ⅱ 佐賀の歴史・文化・環境』佐賀大学・佐賀学創成プロジェクト編 岩田書院

25） 佐賀市教育委員会 2021『【報告】佐賀市七ヶ瀬遺跡の保存について』報道発表資料

26） 上田正昭 2016「魏志倭人伝の解釈について」『邪馬台国新聞』第３号 全国邪馬台国連絡協議会、門田誠一 2017「卑弥呼の鬼道に課する歴史的検討」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』13 号 など

集落の価値と関係

－邪馬台国時代の筑紫平野ネットワーク－

片　岡　宏　二

Ⅰ．はじめに

A　なぜ、遺跡の大きさに大小の違いがあるのだろう。そして、遺跡はなぜ均等に分布しているのだろう。

B　環濠のある集落とない集落、そして、その環濠の大きさにどうして違いがあるのだろう。

C　近畿には纒向遺跡のような大きな遺跡が発達するのに、筑紫平野にはなぜ発達しなかったのだろう。

当たり前に思える集落の姿も、こうしてあらためて考えてみると素朴な疑問が沸いてくる。そしてその答えは意外と解明されていないこともわかった。

本論では、いつの時代にもどの地域にも当てはまるような集落一般論を述べるわけではない。時代は、弥生時代後期の２世紀後半から３世紀中ごろまでとする。中国の史書にある倭国大乱から臺与即位後まで、すなわち私はこの時代を邪馬台国時代と呼ぶが、この定義は別に書いているので省略する[1)]。地域は、筑後川流域の筑紫平野とする。筑紫平野は、九州最大の平野である。筑紫平野がどの範囲かも併せて書いているので省略する。

私は、これらの問題について、

1　まず集落が持つ価値について、経済的観点から考えてみることにする。

2　次に、それぞれの集落が持つその経済的価値は、周辺の集落とどのような関係を生み出すのかを考えてみることにする。

3　最後に、筑紫平野の遺跡の価値が纒向遺跡のそれとどのように違っているのか、その比較を通して邪馬台国九州説について考えてみることにする。

本論に入る前に、この文章の中で使う用語について述べておくことにする。（ただし、ここで使用する用語の定義は、説明の便宜上、この文章だけにしか当てはまらないものもある点をご承知いただきたい。）

[集落]「集落」とは、広辞苑によると「社会生活を営む人類の特性に基づいて、隣保相互扶助の生活を目的とする団体的居住」とある。竪穴住居・掘立柱建物などがあって、人々が日常的に生活した痕跡のある遺跡は、「集落遺跡」とされる。集落遺跡の周辺にある水田や畑などは「生産遺跡」とされる。さらにその周囲には山林・河川・海（海岸や沿岸部程度を想定している）がある。ここは、食糧や燃料などを獲る場所であるが、ほとんど遺構が残っていないために、遺跡として認定することがない。私たちは、ふだんそういう場所を指して、「ムラはずれ」などという。本論では、「集落遺跡」「生産遺跡」「ムラはずれ」の全部を「集落」と呼ぶことにする。（「はずれ」とは、「中心から離れた所」、一定の範囲内の「はし」を指す。「ムラはずれ」は「はし」であって、集落の「はし」ととらえておく。）

ここで、酒井龍一の示した、集落（拠点集落）と周囲の社会環境を合わせた「円圏構造」が参考になる[2)]。

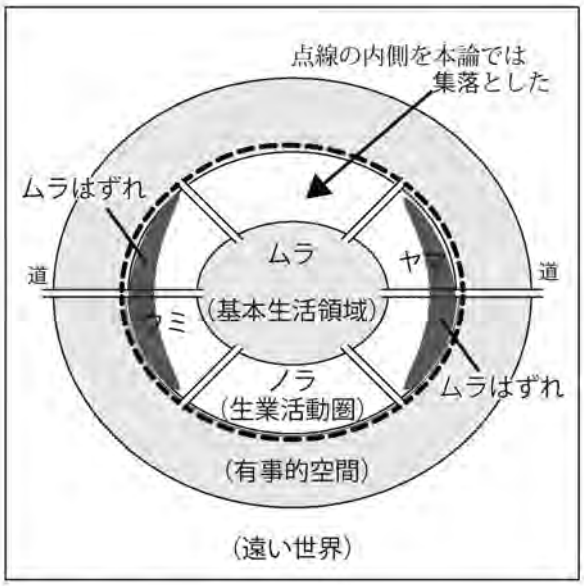


図１　酒井龍一の示す集落の円圏構造に筆者の考える「集落」を合わせた関係

酒井は、普通の生活の中心となる範囲を「基本生活領域」（ムラ）とし、その周囲を日常的な生業活動が行われる「生業活動圏」（ノラ）とした。ここは「生産遺跡」と「ムラはずれ」を含めた範囲である。本論では酒井の言う「基本生活領域」と「生業活動圏」を合せて、生活維持のための経済活動にかかわることから「集落」としている。それは半径５㎞程度の範囲である。そこには周辺の小集落なども散在し、相互の集落間を結ぶ道によってつながる関係を想定している。

酒井は、さらにその外側にはおよそ半径 30 ㎞の１日で到達できる範囲があり、それを「有事的空間」とした。さらにその周辺には１日で到達できない「遠い世界」がある。そしてそれらはすべてが道でつながっているとする（図１）。

［価値］ 集落には、それぞれの持つ特徴がある。その特徴とは、人の多さ、農耕地の広さ、周囲の山林・河川・海の有無、環濠などの防御施設の有無、生産物の種類と量、集落の伝統などさまざまである。それらはすべて個別の集落が持つ価値である。個々の価値をひっくるめて、本論では集落の「価値」と呼ぶことにした。

［経済圏］ 集落が持つ個別の「価値」のうち、収穫物、生産品や加工品など、それぞれの経済的な価値が他の集落に及ぼす範囲を「経済圏」という言葉で呼ぶことにする。集落の持つ個別の「価値」は、それぞれ異なっているが、最後に一つになる。例えば、ある集落が海辺にあって、海産物を獲ることができ、それを持たない内陸の集落へ供給するとなると、海産物の及ぼす経済圏は、近隣の内陸に及ぶことになる。しかし、経済活動は、一つの「価値」、ここでは海産物の供給にとどまることはなく、「ついでに」という行為によって、ほかの価値を伴って、その集落の経済圏は拡大されることになる。

［政治圏］ 邪馬台国時代以前の弥生社会では、集落どうしは、政治的関係よりも経済的関係が重視されたであろう。最初は集落間の単なるモノの交換の段階であるが、それにリーダーの指導力であるとか、集落の経済的格差など、そこにいろいろな無形の要素が加わってくる。経済的関係に加えて、そうした政治的関係によって築かれる集落間のまとまりを概念化して、「政治圏」という用語で説明することにした。

一つのモデルを上げて「経済圏」と「政治圏」の関係の変遷を説明してみよう。

仮に人口規模の大きなＡ遺跡と小さなＢ遺跡が、５㎞程度離れてあるとする。Ⅰタイプ（独立型）は、ＡはＢとは政治的、経済的にほとんど交渉を持たず、ＡとＢとはそれぞれに独立した「政治圏」、「経済圏」を持っている。Ⅱタイプ（政経分離型）は、ＡとＢとは政治的に対等であるが、経済的にはＢはＡに依存する関係である。ということになるとＡはＢを含む「経済圏」を持ちつつ、Ｂは独自の「政治圏」も持っていることになる。Ⅲタイプ（政経一致型）は、ＡとＢは同じ「政治圏」に属し、それまでの「経済圏」に政治的要素が加味され、「政治圏」に発達することになる（図２）。

この図式を北部九州の邪馬台国時代前後に当てはめると、Ⅰ・Ⅱタイプが弥生時代前期から邪馬台国時代以前、Ⅲタイプが邪馬台国時代になる。Ⅲタイプの集落Ａは、筑紫平野では佐賀県吉野ヶ里遺跡のように環濠を持つ集落をイメージすればよい。いっぽう近畿地方は少し様相が違う。Ⅲタイプの集落Ａは、どこにでもあるのではなく、いきなり纒向遺跡というスーパー集落Ａの突出した集落が出現し、その他の集落はそれに従属する。

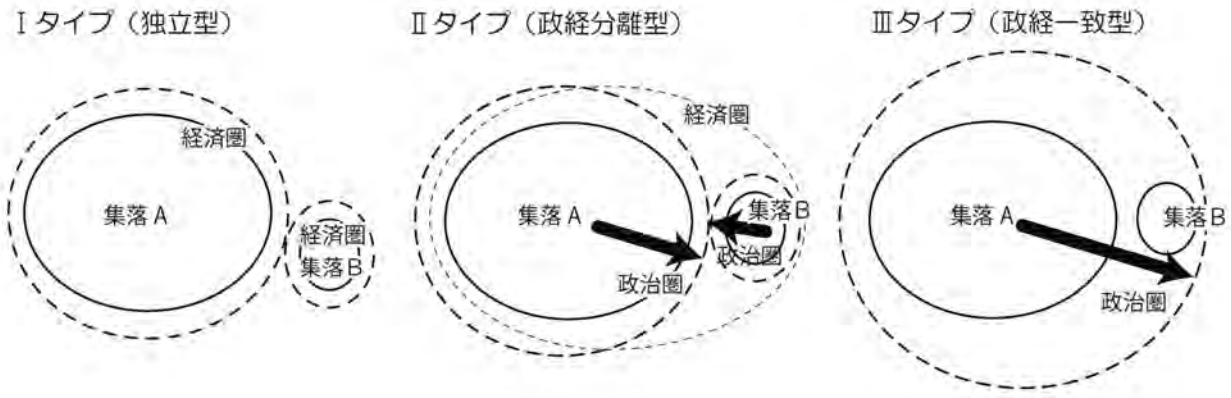


図２　各集落間の「経済圏」と「政治圏」の段階ごとの関係

Ⅱ．集落の大きさは農生産が基本

（1）集落に関する研究

従来の集落間研究を中心とした集落論は、発掘された遺跡を分析し、それぞれの遺跡の持つ要素から一般的法則を導き出す帰納法的・実証的方法が多かった。

初期の集落研究には、鏡山猛による比恵遺跡の方形環溝を基本生活空間として、その内部の遺構から集落を論じた研究[3]や、西谷正による複数の分散する独立・舌状丘陵にある集落群を周囲の谷水田を共有する、一つの世帯共同体ととらえた研究がある[4]。

九州以外に目を転じると近藤義郎による農耕集落の発展過程の中で生まれた共同作業による生産最小単位である「単位集落」がより広い範囲で経済的な結びつきを持った「農業共同体」に発展すると述べた研究[5]、和島誠一・田中義昭による集落分析の中で単位集団が集まった集落を氏族共同体内の世帯共同体と認定し、それが農業経営発展の中で氏族共同体の解体と「族長」による農業共同体への発展を示した研究[6]などが研究史上特筆されるものであった。

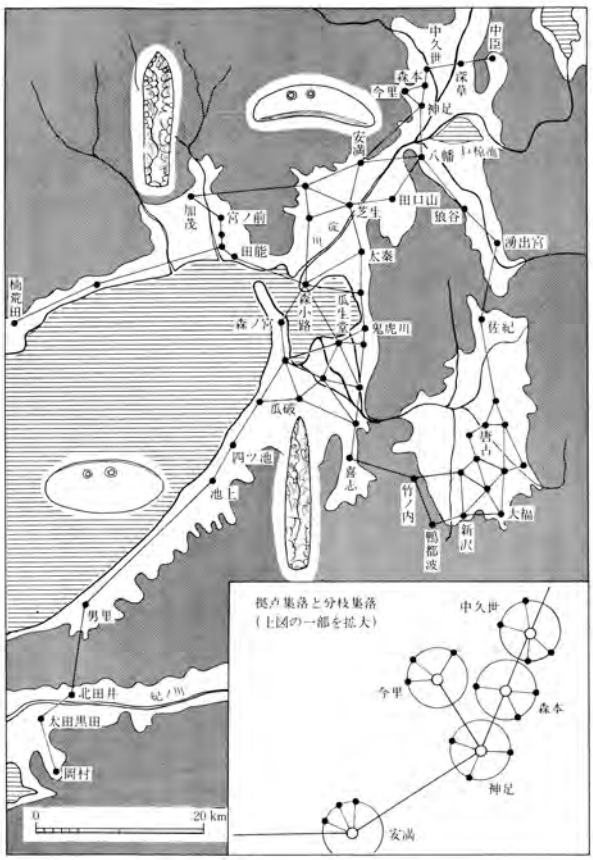


図３　都出比呂志が示す近畿地方主要部の物資流通ネットワーク［註７文献より転載］

筑紫平野では、近年の大規模調査は、過去の集落論を大きく見直すことになった。しかし、それでも分析の対象になった遺跡は、その遺跡が本来持っているものすべてが明らかになったわけではない。たまたま工業団地のように大掛かりな発掘によって全貌が明らかになった吉野ケ里遺跡や朝倉市平塚川添遺跡のような例もあるが、ほとんどは、限られた調査の断片をつなぎ合わせて遺跡を復元してきた。道路や新幹線が通って初めて大きな遺跡であることがわかった八女市八女遺跡群やみやま市山門遺跡群のような例がほとんどである。そうすると、今ある資料だけで、遺跡を単純に比較対照することはできないのである。

集落内部の分析を中心とした研究は、その後も多くみられるが、先にあげた酒井の「セトルメントシステム」論は、弥生集落を重圏的に基本的生活空間として取り巻く、もうひとつ広い概念でとらえたところが興味深い。都出比呂志は、酒井の構想をもとに、弥生時代中期から後期後半までの間、贈答物資の交換や交易が、唐古遺跡、池上曽根遺跡のような拠点集落を結節点とした物資交易を生み出すことを想定し[7]、集落間、地域間の広域連携システムをモデル化した（図３）。

（2）中心集落が適度に分散している理由

「拠点集落」という言い方は、各時代を通して中心的な役割を持つという意味とは少し違うので、本論ではその時代に限っての中心的集落という意味で「中心集落」

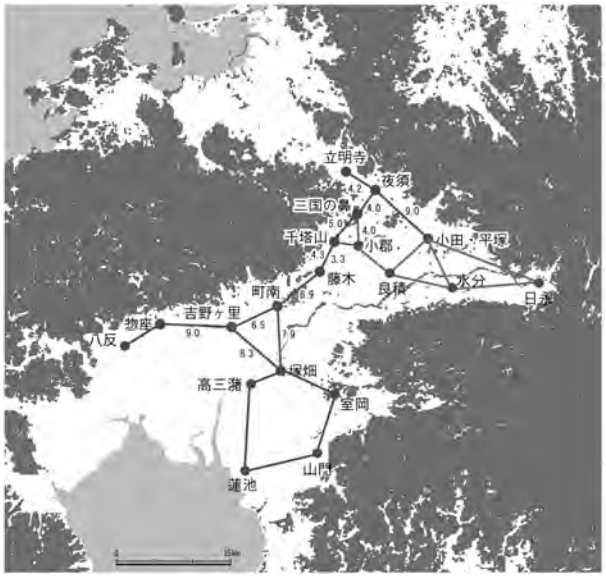


図４　筑紫平野の中心集落ネットワーク

と呼ぶことにする。それでは、中心集落は、どれも同じ規模や内容を持った等質的な遺跡なのか、というとそうではない。中心集落にも大小がある。

都出の示した実際の中心集落間の距離はもちろん長短ある。実際に発掘される集落遺跡間の距離が違うからだと言えばもちろんそうだが、むしろ、多くの遺跡が、ほぼ等距離のところにできていることに素朴な疑問を持ってしまう。この状況は、筑紫平野にも言えることである。筑紫平野の中心集落は適度な距離を保ってネットワーク化している（図４）。

そこで私が考えたのが次のようなプロセスである。

中心集落の価値には大小がある。価値の大きな中心集落は「経済圏」が大きいために、それに接する別の中心集落との距離は長くなる。それでは、中心集落間の距離があまりに長いときもあるだろう。その場合、中心集落間にもう一つ中心集落ができる場合もある。（図５）

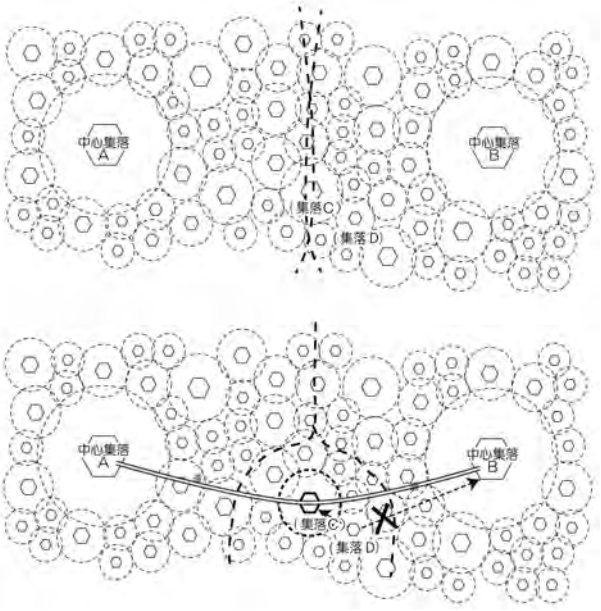


図５　上の図では中心集落Ａと中心集落Ｂのどちらにも遠い中間に集落Ｃ・Ｄがある。下の図では、集落Ｃを中心集落として、周辺の集落が成長させていくモデルである。

新しい中心集落はどうしてできるのだろうか。それを図５のように考えてみた。中心集落Ａ・Ｂの間にある集落Ｄは、遠くの中心集落Ｂより、労力をかけずに行くことができる中心集落が近くにあることを望み、そうした要求に応じた集落Ｃが、周囲の集落の支援を得て「経済圏」を広め中心集落Ｃとなっていった。

従来からの考え方は、中心集落は周囲の集落に経済的影響を及ぼし、時には生産物を収奪して、より大きくなったとされてきた。

私は、そうではないと思う。筑紫平野における中心集落は、周囲の集落を従属させて生まれるのではなく、既存の中心集落の経済圏に入ることよりも、新たな中心集落の出現を望む地域の集落が、主体となって、新しい中心集落を作り上げたものと解釈した方が良いと思う。その結果、筑紫平野には図５のようなネットワークができた。

（３）集落の基礎的な価値としての農耕

弥生時代の集落において、生活維持の基本は、農生産（食糧生産）であると確信する。（この農生産の中には家畜の飼育も含まれる。）農地を多く確保でき、生産性の高い場所があれば、そこに大きな集落が発達するのは明らかである。そうした集落では、集落を維持するための食糧をほかの集落よりは多く確保できるからである。

ただし、たくさんの食糧が獲れるからといって、食糧が余っているというわけではない。貯蔵が可能になった食糧（コメ）を「余剰生産」物とする表現は、少し違っているように思う。それは、集落内の人間すべてに行きわたった後に余った食糧という意味ではない。身分に応じて食糧を受け取ることができる人がいて、その人たちが受け取った後に余る食糧のことである。

『魏志』倭人伝には、倭には「大人」「下戸」「奴婢」などの身分があったとされる。集落の中には、「下戸」の一部や「奴婢」のように、コメのような高級食材を口にできない人間だって多くいたはずである。

そうして集落内の人員に配分された後、余った食糧は、集落内のひとところに貯蓄される。吉野ヶ里遺跡の外環濠の西側に、数十棟の掘立柱建物群の建つ区域があり、集落全体の倉庫群と考えられている。平塚川添遺跡には、米蔵と考えられる大型倉庫がある。４棟の並び蔵があって、そこは単なる食料貯蓄の場ではなく、穀霊と祖霊を結び付けた信仰の場でもあったと考えられる。ここに蓄えられた食糧は、吉野ヶ里や平塚川添の住民が、生産した食糧であろう。

基本的には、その集落で生産された食糧は、その集落に備蓄されると考えられる。吉野ヶ里遺跡から田手川を挟んで東側にある吉野ヶ里町松の森遺跡のように、小さな集落であっても、そこには独自に運営される、掘立柱建

物の倉庫が確認されている。すぐ近くに吉野ヶ里遺跡があるからといって、そこに備蓄するというわけではない。

まだ邪馬台国時代の段階には、集落を維持するうえで最も大事な食糧が搾取されたり収奪されたりして、集落間に力関係を生むことは少なかったと思える。政治的な関係ができ始める邪馬台国時代であっても、その集落の持つ基礎的な力は、農生産（食糧生産）力であって、それはその集落の人口に反映されると考えられる。

そうした意味においては、集落維持の基本は食糧生産であって、食糧生産以外の何かが、その集落を維持するうえで食糧以上の価値を持つことは稀なことではないだろうか。たとえ、金属器の生産を行っていたとしても、基本は農生産だと思われる。

余った食糧が外部に供給され、その遺跡の持つ「経済圏」が広がることがあったかもしれない。逆の場合もあるだろう。米が足りない集落は、米の余った集落に応援を願うこともあったであろう。しかし、それは集落の運営上、恒常的なものでなかった。もし、それが恒常的になったときには、集落同士の間に従属―被従属の関係ができることになる。しかし、筑紫平野では一つの遺跡だけに倉庫群が集約される段階は、邪馬台国時代が終わって、次の古墳時代を待たなければならない。

（4）筑紫平野の集落にみる食糧以外の財産

集落の価値を補う財産にはコメを中心とした食糧以外のものもあった。例えば木材・石材・鉱物・動植物など、その土地でしか採取できない原材料、金属器などの製品。有形のものに加えて、さまざまな技術、伝統、祭礼など無形のものもあったと考えられる。いくつか、集落の財産になったものを取り上げてみよう。

金属器生産は、邪馬台国時代には盛んにおこなわれた。その生産の中心は福岡平野の中心地、奴国にあったことがわかっている。特に春日市須玖岡本遺跡群やその北側では、青銅器生産工房跡や青銅器鋳型・るつぼなどの出土が相次いでいる。日本国内で出土した青銅器石製鋳型の半分以上がこの地域から出土している。

筑紫平野でも奴国に近い北側の地域では、青銅器鋳型の出土がある。小郡市津古東台遺跡の広形銅矛鋳型（図６の２）、鳥栖市江島町発見広形銅戈鋳型、藤木遺跡のるつぼ、筑前町夜須遺跡群中原遺跡の銅戈鋳型（同３）、ヒルハタ遺跡の内行花文日光銘鏡系銅鏡鋳型を含む５面鋳型（同４）、などである。これらを見ると、須玖岡本遺跡群の青銅器生産が、独占支配的なものでなく、周辺にその技術と技術者を供給していたことが考えられる。

青銅器は、それを生産していない地域にもいきわたっている。特に青銅器が出土する範囲を見ると、北は対馬島、南は南筑後地方、東は高知にまで及んでいる。もちろん少量出土する遺跡はもっと広がりを見せるが、注目すべき点は、対馬島、南筑後地方、高知という青銅器配布範囲の縁辺では、奴国からの距離に反比例して供給量は少なくなるどころか、逆に一括して多量に埋納される遺跡が見つかっていることである。希少価値があり、かつ生産に技術を要する青銅器だけを見ると、その影響圏は広く及んでいる。しかし、青銅器だけをそのまま政治的影響力の及ぶ範囲とみることはできない。

もう少しその他の財産の動きを見た方がよいであろう。

筑紫平野では、その東限にあたるうきは市日永遺跡（同７）では銅矛・銅戈が埋納され、南側広川町天神浦遺跡（同 12）では 13 本もの中広形銅矛が埋納されている。

近年、柳川市西蒲池池淵遺跡（同 11）では、卜骨や多量の動物遺体が発掘された。その中で注目されるのが、牛馬の骨である。『魏志』倭人伝には、倭には牛馬はいないと書かれているが、実際は日本国内で邪馬台国時代の牛馬の骨は発掘されている。７世紀の特定の場所に「牧」が設置されたように、動物を飼育し供給することも、集落の持つ価値の一つであったであろう。動物は食糧であり、運搬や農作業の担い手であった。こうした牛馬の骨もどこからでも出てくるのではない。やはり特殊な遺物として出土する。牛馬はその集落の財産である。また、卜骨がほぼ完全な形で発掘されている。まつりごとにおいて欠かせない占いが、特別な集落で行われていたわけではないことを示している。

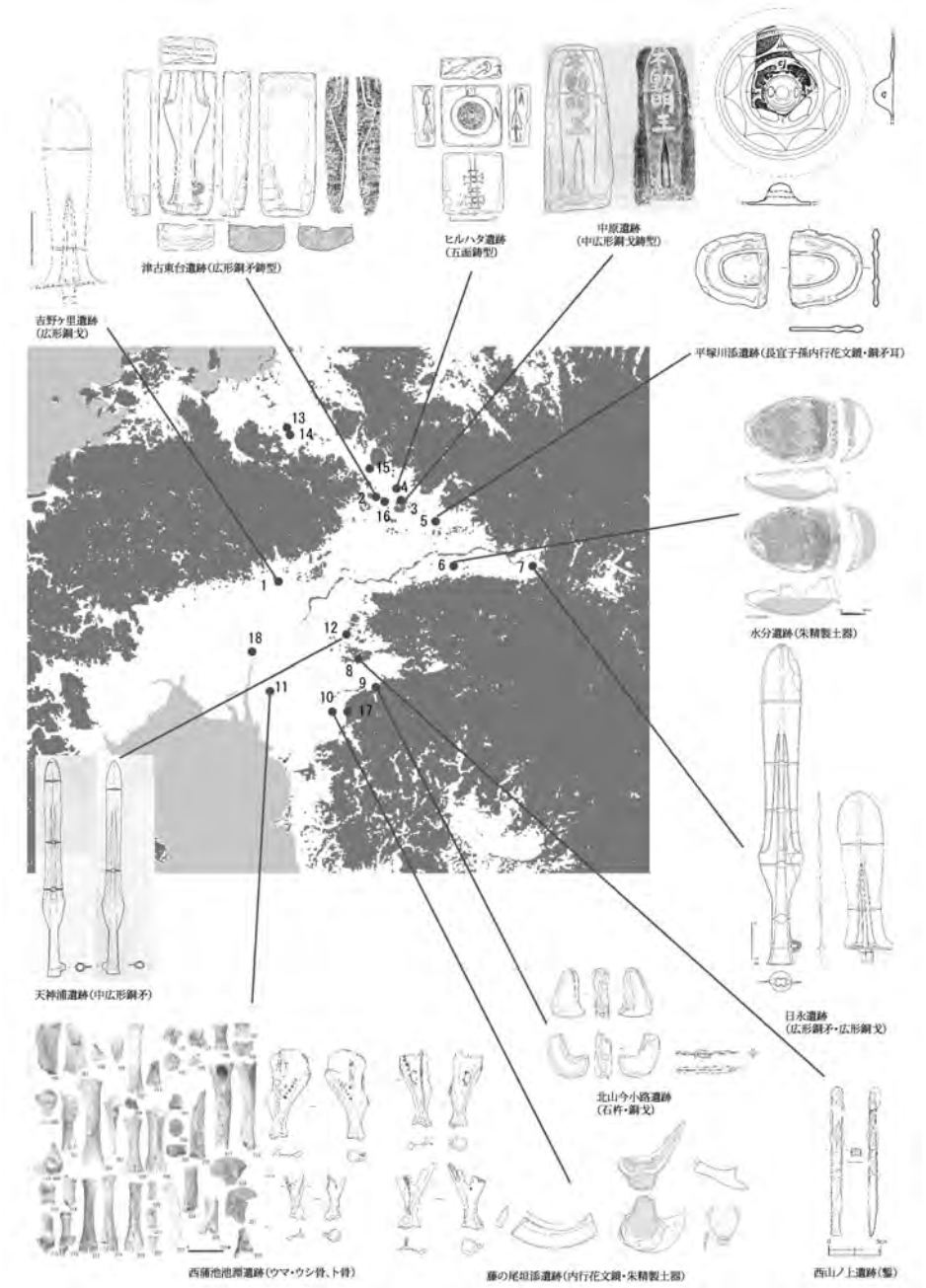
有明海の沿岸部からは、牡蠣などの多量の貝類の遺体が発掘される。ほかの魚もあるが、貝類は捕獲しやすい安定的な食糧となった。大川市酒見貝塚等有明海沿岸の遺跡では大量の牡蠣殻に加え、貝類・魚類の動物遺体が発見されている。石包丁や鶏の骨などもあるので、通常の農村でありつつ、海産物はそれに加えてこの遺跡の価値を高めたものと考えられる。

朱を精製するための土器が、久留米市水分遺跡（同６）、

山門遺跡群藤の尾垣添遺跡（同 10）などで出土している。朱を磨り潰すための石杵は北山今小路遺跡（同９）から出土している。水銀朱は『魏志』倭人伝にも魏から贈られたものの中に「鉛丹各ゝ五十斤」と出てくるし、倭人は「朱丹を以って其の身體に塗る」ので交易品にもなる。朱は倭人にとって身近なものだったと思われる。こうした生産品も集落の財産である。

集落の調査を行っているとかなり頻繁に発掘されるのが鉄製品である。

筑紫平野の邪馬台国時代の遺跡を調査すると、量の多少はあるものの集落内の遺構からは、たいてい鉄器が出土する。鉄製品は大切に埋納されるような状況ではなく、普通に住居跡内の廃棄された土器などとともに発掘されることが多い。鉄生産を行ったという証拠には、タタラなどの施設の遺構、フイゴなどの道具、鉄滓（カナクソ）のような残留物がなければならないが、ほとんどの遺跡ではそうしたものは発見されていない。ということは、どこかの遺跡で生産された鉄を入手しているということである。



［1 吉野ヶ里遺跡：佐賀県教委 1997『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文報 132 集、２津古東台遺跡：小郡市教委 1994『津古遺跡群Ⅱ』小郡市文報 92、3 ヒルハタ遺跡:筑前町町史編さん委員会 2016『筑前町史』上巻、4 片岡宏二 2007「『境界』埋納の思考」『原始・古代日本の祭祀』同成社、５平塚川添遺跡：甘木市教委 2001『平塚川添遺跡 1』甘木市文報 53、６水分遺跡： 久留米市 2016『水分遺跡　第 5 次調査遺物編』久留米市文報 364、７日永遺跡：福岡県教委 1994『日永遺跡Ⅱ』一般国道浮羽バイパス関係報７、８八女市教委 2004『西山ノ上遺跡（1・2 次調査）』八女市文報 70、９北山今小路遺跡：立花町教委 1993『北山今小路遺跡Ⅰ』立花町文報６、10 藤ノ尾柿添遺跡：福岡県教委 2010『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』九州新幹線関係文報 16、11 西蒲池池淵遺跡：九州歴史資料館 2014『西蒲池池淵遺跡Ⅱ』福岡県文報 243 、12 広川町教委 2001『天神浦出土銅矛』（教委＝教育委員会　文報＝文化財調査報告書の略）］

図６　筑紫平野の遺跡から出土した遺物の一部

弥生時代に製鉄が行われていたかどうかについては諸説あるが、既存の鉄を加工して製品に仕上げる技術は、すでに弥生時代中期の春日市赤井手遺跡（同 14）から出土する鉄加工品の例によって知ることができ、少なくとも北部九州では、邪馬台国時代には鉄をかなり多量に供給できる体制が生まれていたことがわかる。

八女市西山ノ上遺跡（同８）では、環濠の縁辺部に鉄器製作工房と考えられる竪穴式建物が多数発掘された。熱を受けて硬化した炉跡や切断面の残る鉄片や鍛打痕のある厚い板状の鉄片、鋳造鉄斧片やヤ

リガンナ、鎌の破片等が多量に出土している。鑿状工具も出土していて、鉄器の製作が行われていたことが想像される。

西山ノ上遺跡のように、大きな遺跡群の一部で鉄生産を行ったところは筑紫平野にとどまらず、肥後、特に北部の菊池平野においてもみられる。

鉄器は青銅器と比較すると、比較的身近な遺跡で生産が行われていて、その供給範囲は青銅器に比較すれば狭い。青銅器が限られた生産地しかなかったことに比較すれば、分散した供給地のあった様子がうかがえる。

鉄の方が青銅器よりも需要は多く、そのためにその生産箇所が多くできたのに対し、青銅器は需要が少なかったといえる。鉄が実用品だったのに対し、青銅器が祭器だった差が出ている。

集落の価値は、生産物ばかりでない。集落を取り巻く自然環境がその価値になることもある。両側に山が迫った集落は、交通の要地という地理的価値を持つ。二日市地峡帯の真ん中にある筑紫野市常松遺跡群（同 15）（立明寺遺跡も含む）は、福岡平野と筑紫平野を結ぶまさに交通の要衝に位置している。両平野の経済的交流の要地であるために、遺跡の経済的価値はその遺跡が抱える人口以上のものがあったことが想像される。この遺跡からは近畿・瀬戸内・山陰の土器のほか朝鮮半島からの漢式土器も出土している。

筑紫平野のいちばん北端にあって、見晴らしの良い三国の鼻遺跡（同 16）は、環濠で囲まれた中に、邪馬台国時代の住居跡が 38 軒発掘されている。ここは、地理的環境を最大限に生かした見張り場所としての機能を持つ。また山門遺跡群の背後の高台にあるみやま市三船山遺跡（同 17）は山門遺跡群の物見台として監視機能を持つ。

有明海に突き出した台地上にある諸富町村中角遺跡（同 18）では、畿内・山陰・東海の土器が出土している。海を介して外地との交渉を可能にした遺跡は、港湾機能という価値を持つことがわかる。

Ⅲ．集落どうしの関係について

（1）集落どうしの補完関係

筑紫平野では、弥生社会が発展して、クニの前身となる政治集団が生まれるに及んで、中心集落の「経済圏」は、周囲の集団に政治的要素が加わり、経済圏をベースに、新たな枠組みが生まれてくる。それらをすべて含めたものが「政治圏」である。（図２のⅡタイプ）ただし、誤解がないように述べておくが、その「政治圏」は、中心集落のような大きな遺跡が主導で作り上げたものではなく周辺集落を含めた連携の中で生まれたものと考えている。そしてそれぞれの集落の「政治圏」は、邪馬台国時代を通して中心集落を核にしたひとつずつの「政治圏」を形成し（図２のⅢタイプ）、それはクニになった。

中心集落は、筑紫平野に展開する。中心集落は、その「経済圏」に必要なものをすべて供給しているかといえばそうではない。中心集落には、ある程度の「品揃え」ができているとは思うが、中心集落の「特産品」によって、遺跡間に偏倚があるのは当然である。

今までの出土品だけで見ると、例えば八女遺跡群（西山ノ上遺跡）では鉄製品を供給できるが、朱の生産はできない。山門遺跡群（藤の尾遺跡）では朱の供給はできるが、農耕・食糧用の動物は供給できない、西蒲池池淵遺跡では動物を供給できるが、鉄製品の供給はできない、などと、農業生産物以外の個々の集落の価値によってお互いの足りないところを補完して成り立つ関係にある。

補完しあうということは、筑紫平野の諸遺跡間の政治的関係が安定していたということになる。同時期の近畿地方には、補完しなくても、すべてひとところでまかなうことのできる纒向遺跡があるが、筑紫平野もここはここで、安定した政治的関係が構築された。

（2）中心集落の求心機能と周辺の集落

中心遺跡が、周囲の遺跡に多くの価値を供給できるということは、そこが求心機能を持つということになる。それも供給が広範囲になればなるほど中心集落の求心力が増すことになる。

物質的な供給は、実際の出土遺物から見えてくるが、これが精神的なものになるとそれを証明するのはなかなかむつかしい。古墳時代のように、古墳というモニュメントがあれば、証明しやすいのだが、弥生時代のそうした精神的な求心力を示す遺構は数少ない。

吉野ヶ里遺跡の南北内郭の中に建つ復元された大型掘立柱建物・物見やぐらや環濠は、中心集落としての求心

力を高めたであろう。もちろん実用的なものではあるが、こうした視覚に訴える構造物は中心集落への求心力を高めることに役立ったであろう。その価値は近世の天守閣のようなものかもしれない。

一方で、中心集落求心力の拡大は、周辺集落の消滅・衰退を招くことがある。

中心集落に農業生産以外の付加価値があると、農業生産だけで維持されてきた周辺集落は、存続するか、いっそのこと移住して中心集落の一部になるかという選択に迫られることがあったと思われる。そのときに判断基準になるのは、そのままのほうが得か、中心集落の一部となった方が得かという計算である。これはあくまでも周辺集落が主体となった判断である。

すべての遺跡ではないが、筑紫平野では、弥生時代中期まで栄えた集落が後期に入ると解体する。大型掘立柱建物の祭殿がある鳥栖市柚比本村遺跡のような例である。筑紫平野ではないが、飯塚市立岩遺跡もその代表的な例である。ここで解体せずに継続した中心集落は、邪馬台国時代に再び求心力を回復し、クニへと成長した。

（3）中心集落までの経済距離と経済圏

中心集落からの供給を受ける周辺集落側では、その中心遺跡からの供給を受けることが道理にかなっている場合に限って、その経済圏に入ることになる。もし、別の中心集落から供給される方が便利であれば、そことの関係を持つことになるだろう。

例えば諸富町村中角遺跡のように、筑紫平野の筑後川北側にある遺跡では、直線距離にしてみれば南岸の柳川市東蒲池遺跡までの方が近い（6.5㎞）にも関わらず、筑後川を渡らずに行くことができる吉野ヶ里遺跡（8.5㎞）、あるいは佐賀市惣座遺跡（12㎞）とのつながりが深い。これは、出土する土器から推測できる。舟で行くという移動手段にかかる時間、舟をこぐという労力、安全性、この３つの要素から、陸上を歩いて移動する方を選ばせた。川という自然の障壁は、実際の距離以上に経済距離を長くする。

集落は、大きな遺跡も小さな遺跡もその往来には、この経済距離の考えが用いられ、中心集落が持つ経済圏の外郭までの経済距離は、中心集落からその旅程に関わる時間・労力によって決まる。その反対に、周辺集落から中心集落に行くまでの経済距離も、その旅程に関わる時間・労力によって決まる。したがって、周辺集落が遠くの中心集落Ａに行くよりももっと経済距離の短かい中心集落Ｂがあれば、中心集落Ｂを選択することになる。

こう考えれば、どの中心集落に経済的に近づくかは、むしろ周辺集落の方が主体的に考えて判断していたことになる。

旅行をする目的がその目的地でしかかなえられないもの、例えば中国製の鏡や絹など価値の高いものの入手であれば、その経済距離を克服してでも行くことになる。一方で、野菜のようにどこでもあるものは、その入手のため、遠くの集落まで行くことはない。つまり、価値の高いものを持つ集落は、経済距離が長くても、周辺集落を取り込んだ経済圏を築くことができることになる。

こうして「経済圏」が形成され、地位を高めた中心集落は、そこに政治的関係が生まれてくると、「政治圏」が発生して、その様相が変わる。私は筑紫平野において、この画期が邪馬台国時代だと思っている。

（4）環濠のある集落とない集落、そしてその規模

吉野ヶ里遺跡では、巨大な外環濠が２世紀前半から中ごろに掘られる。筑紫平野の弥生時代後期に掘削される環濠の時期は、どこもほぼ同じ時期である。中心集落の環濠掘削の労力は、その中心集落の人員だけでなく、周辺集落を含めて、多くの人間が動員されなければ実現しないはずである。高台にある朝倉市西の迫遺跡のように、防御のための見張り台に環濠が掘られたものでも、この環濠内には住居が２軒ほどしかなく、その住民だけで掘ったとは考えられない。この環濠の重要性を認識したふもとの集落、あるいは中心集落の人員の応援があったと考えるべきであろう。

地域の防衛に当たっての施設づくりは、その地域全体が協働で行う作業である。その代わり、いざ有事が発生した時には、周辺集落も環濠へ逃げ込むことができる。「政治圏」の中心に中心集落があって、周辺集落の人間も守護する安全保障を示すものが環濠であった。そのため、環濠がある集落というのは、「政治圏」の核にある中心集落だということができる。

環濠は、そこに逃げ込む人数、周辺集落の数などによってその規模が決まったであろう。中心集落だけの規模

ではなく、周辺集落を含めた「政治圏」の広さが環濠の大小に影響すると考える。

環濠がどこにでもあるわけでなく、中心集落にある理由とその規模に大小がある理由を、私は中心集落が周辺集落とともに構築した「政治圏」の大きさによるものだと解釈した（図７）。

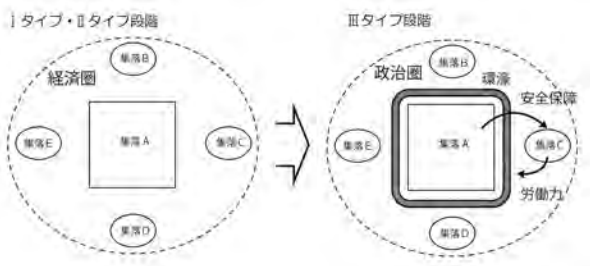


図７　中心集落に「政治圏」が形成され、環濠ができるメカニズム

（５）中心集落間をつなぐ道

中心集落と周辺集落を結ぶ道は網の目のように張り巡らされ、その道を通して中心集落の価値が拡散する。

中心集落どうしが政治的な意味において、連携を取らなければならないような非常事態の時など、遠距離交通路は特に重要度を増す。

そのため、中心集落どうしに集落間を最短で結ぶ道が新たに生まれる。それは、一番効率の良い道である。その幾筋もの道を俯瞰すると筑紫平野は、ネットワーク状の網のようになる。

当時の集落間の道が、遺跡外で発見されることはまずない。しかし、それがあったことは推定される。『魏志』倭人伝には、九州本土に入って、陸路末盧国から邪馬台国に至るまでのクニからクニへの方向と距離・日数が示されている。クニとクニの間だけでなく、集落間には、「禽鹿の徑の如し」であったとしても、道があったことをうかがわせる。そして、当時の人が、そこに到達するには、どういう方向でどのくらい行けばいいかという認識を持っていたことが『魏志』倭人伝の記述からうかがえる。

先の中心集落どうしを結ぶ遠距離交通路は、まさに『魏志』倭人伝の記述に見られる道のことである。

筑紫平野の中心集落の分布をみると、それぞれが近接して、適度に距離を持ちながら網の目の一部を構成しているように見える（図４）。洪水や潮位の関係で、生産性が低いと思われていた筑後川流域や有明海沿岸部にもその分布は散漫ながら、中心集落がある。

そしてそれぞれの集落が、道でつながれネットワーク化していることは、後述するように筑紫平野の連合体制を考えるときに不可欠な要素である。

Ⅳ．筑紫平野の集落と邪馬台国

酒井は、北部九州弥生社会は自己完結型で、そのため首長権が発達するのに対し、近畿地方は一つの遺跡では成立しないために、ネットワークを通して共存を図ってきたとしている。その理由として、北部九州では、生活に必要な資源をその領域内で調達できるのに対して、近畿地方では、その資源だけでは足りないためとした。

私は、北部九州の中でも伊都国、奴国はその指摘どおり自己完結型だと思うが、先に述べたように、筑紫平野に関しては、必要な資源は必ずしも１集落で調達できず、補い合って営まれる、自己完結型ではなく、相互扶助型だったと思っている。

中心集落どうしもそうだが、中心集落と周辺集落の政治的関係も支配―被支配という単純な図式ではなく、環濠の築造に象徴されるように、中心集落と周辺集落が相互の利益を補償しあいながら成り立っているのが、筑紫平野遺跡群の特徴だったと考えている。

筑紫平野は、規模の上で突出した遺跡がないだけでなく、その価値においてもすべてを揃えているわけではない。これは政治的にだけではなく、経済的にも独占しているところがないということを示している。それぞれの集落は、その集落でなければ他にない価値をもちつつ、中心集落として周辺集落の要求に応えられるだけの価値を有していたと考えられる。この価値は、自らの集落で生み出したものではなく、交易によって獲られた価値を含んでいる。筑紫平野のクニは、こうして足りないところを補完しあいながら営まれてきた。

こうした筑紫平野の弥生時代社会観は、藤間生大以来の考え[8]である「連合体制」であることを考古学的に示唆するものである。政治的にどこかのクニが特別突出したということはなく、互いに協調してきた。そうして、歴史の一道程で起こりうる危機に際しては、卑弥呼の共立、あるいはその後の臺与の共立という手段をもって乗り越えてきた。こうした政治体制は「原始的民主制論」と評価され、賛否両論を生んだ[9]。私は筑紫平野の

遺跡を見てきたように、突出した集落ができない状況から、原始的民主制という共同体遺制が残る体制を支持したい。

一方、近畿地方には、纒向遺跡出現までは、そうした首長権が進展しなかった。こうした状態が、纒向遺跡の出現するまで続いたことは、寺澤薫が大和の弥生集落を分析するなかで明らかにしている[10]。寺澤によれば、大和の弥生集落は纒向遺跡が出現する直前においていったん解体している。

では、なぜ大和に纒向遺跡のような突出した遺跡が出現し、しかも、その地が従来から伝統ある遺跡群の中でないのはどうしてか。寺澤は「より大きな政治勢力とは直接的な系譜関係になく、大和弥生社会がこの時期により大きな別の権力主体によって征服、あるいは包括、刷新される」と主張する。その主張のとおり、纒向遺跡の出現は、母体を大和地域に置きつつ、汎西日本から東海・関東に及ぶとしたとしても、そこに北部九州、ことに筑紫平野の勢力が含まれていたのかどうかはわからない。私は纒向遺跡の外来系土器の出土状況から見て、その可能性は低かったと思っている。

『魏志』倭人伝には、邪馬台国以南に「斯馬國有り」から最後の「次に奴國有り。此れ女王の境界の盡くる所」のクニグニが列挙される。それらのクニグニが具体的にどこを指しているのかはわからない。けれども、こうしたクニグニは、筑紫平野に点在する中心集落に重ねて考えることができる。『魏志』倭人伝には、邪馬台国以南のクニグニを羅列してそれぞれの距離や方向を書いていない。もし、私が考えるように、筑紫平野のクニグニが平野の中を網の目のように連なっていれば、それを書き留める必要がないのではないか。

筑紫平野には、纒向遺跡のように突出した遺跡がない。その原因は、今まで述べてきたように、筑紫平野には、まず農業生産物を基本とした集落が営まれ、それに新たな価値が加わる。その価値によって、農業生産量が高く、もともと人口の多い中心集落は、交易による価値、政治・文化による価値を付加する。そうした中心集落の周辺集落は、自らどの中心集落との関係を持つか選択し、さらにその価値を直接的に享受するためにそこに移住することもあった。

そのため、中心集落は、ひとところに固まってあるのではない。間に周辺集落を挟みながら、これらが、どこかに統一されるわけではなく、適当な距離を置きながら平野全体に分散して存在する。

筑紫平野の中心集落は、纒向遺跡のように、何もないところに突然、権力がもろに介在して作られたのではなく、弥生時代の長い伝統と経験をもとに、中心集落と周辺集落のいわば共同作業によって営まれ、またそれらの中心集落どうしも、互いが足りないところを補完しあいながら営まれてきた。

これは纒向遺跡のような突然出現し巨大化し、倭の中心になっていく可能性を持った遺跡とは違って、弥生時代の伝統・経験を積み重ねて発展してきた筑紫平野遺跡群の特長でもあり限界でもあった。

文献史学では、筑紫平野のクニグニは、連合体制をとって、原始的民主制による運営がなされていたと論評されることが多いが、今回、考古学資料を使いながら、邪馬台国時代の筑紫平野集落を考えてみた。

【註記】

1）片岡宏二　2021『邪馬台国論争の新視点』倭人伝が語る九州説、雄山閣出版（p34 ～ 42）

2）酒井龍一　1990『セトルメント　アーケオロジー』ニュー・サイエンス社

3）鏡山猛　1956『日本歴史新書　北九州の古代遺跡』 至文堂（p56 ～ 66）

4）西谷正　1971「Ⅳ結語」『福岡県三沢所在遺跡予備調査概要』福岡県教育委員会（p18 ～ 19）

5）近藤義郎　1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号（p13 ～ 20）

6）和島誠一・田中義昭　1966「住居と集落」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』 河出書房新社（p349 ～ 376）

7）都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店（p369 ～ 374）

8）藤間生大 1950『埋もれた金印　女王卑弥呼と日本の黎明』岩波新書

9）井上光貞 1960『神話から歴史へ』日本の歴史１ 中央公論社、上田正昭 2012『私の日本古代史（上）』 新潮選書

10）寺澤薫　2016「大和弥生社会の展開とその特質（再論）」『纒向学研究』第４号　桜井市纒向学研究センター

大分市内の弥生時代拠点集落 雄城台遺跡

－その歴史的意義－

高　橋　　徹

Ⅰ．はじめに

雄城台遺跡は大分平野南部に位置する独立丘陵上に営まれた、弥生～古墳時代にかけての集落遺跡である。県立高校建設に先立って調査が行われ、その後高校の付属施設建設に伴って合計９次の調査が行われている。

遺跡の立地

雄城台遺跡は大分川と七瀬川に挟まれた、標高 60 m の等高線に囲まれた東西 350 m、南北 300 mの平坦面を有す独立丘陵上にある。

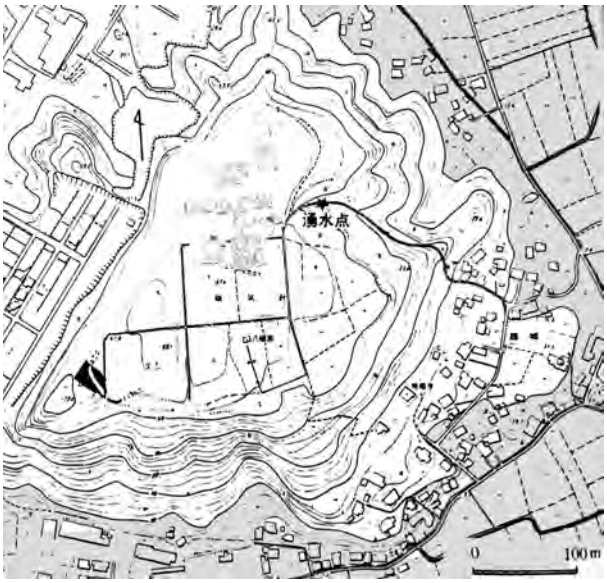


図１　雄城台遺跡の立地

遺構その他

９次の調査で竪穴住居跡 104 基、掘立柱建物１基、土坑 105 基が確認されている。

調査は最小限に実施されており、残りの範囲で同じような密度で遺構が検出されると仮定すると、総数 2000 基を超す規模の遺構となろう。

丘陵南西部で上面幅５m、深さ 1.4 mの断面Ｖ字状溝が検出されていて、出土土器からその時期は弥生時代終末と考えられる。

Ⅱ．主要な遺物

鏡片

雄城台遺跡からは２点の中国鏡の破片が竪穴住居跡から出土している。図２は第６次８号竪穴住居跡出土鏡。復元径 9.3㎝で平縁、直立する櫛歯文帯、２条の平行線文帯、幅狭の櫛歯文帯、８弧の内行花文帯、鈕座へと続く。高橋の雲雷文内行花文鏡編年Ⅳ式でも最新段階に位置づけられ、およそ後漢中葉～後葉のもの（高橋 1986）。漆黒色を呈し、鏡面や破砕面は摩滅している。櫛歯文帯と弧文の間に懸垂用の１孔が穿たれている。

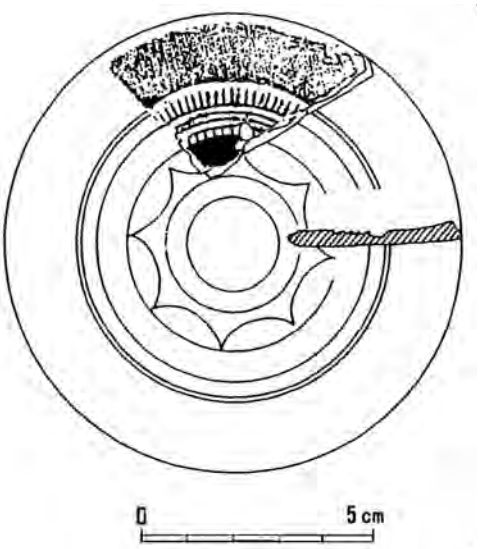


図２　雄城台遺跡第６次８号竪穴住居跡出土鏡

８号竪穴は主柱穴４個の５m×５mの平面方形。出土の土器は流れ込みで、他の住居跡などの所見から当該竪穴は弥生時代後期に位置づけられ、従って鏡の廃棄時期も同時期になる。

図３は第７次１号竪穴住居跡出土鏡である。径 9.7㎝に復元。鏡面の反りは殆ど見られず、幅の狭い平縁、複波文、陽起鋸歯文の外区へ続き、一段低くなって比較的密度の濃い斜行櫛歯文帯に接する。鏡面の表裏や破砕面

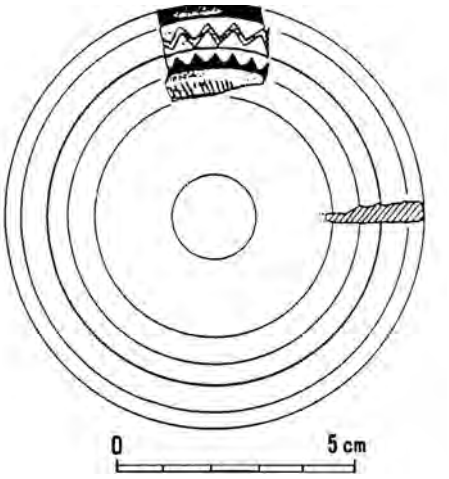


図３　雄城台遺跡第７次１号竪穴住居出土鏡

ともよく摩滅しており、色調は漆黒色を呈する。穿孔は施されていない。

当住居跡は１辺６ｍ程の方形プランで、出土土器からみて弥生終末～古墳初頭の時期に比定できる。鏡片の廃棄時期も同様である。

鏡片について

大分県の弥生時代遺跡から出土する中国鏡片と弥生時代小型仿製鏡例についてその特異な出土状況に気づいた高橋は、1979 年以来一連の論考を発表してきた。その論考で、

①大分の弥生時代遺跡から出土の中国鏡片や弥生時代小型仿製鏡は北部九州からもたらされたこと。②各鏡の製作時期、遺跡への流入時期がそれぞれ相当の時期幅が考えられるにもかかわらず、それらが弥生時代後期後半・終末～古墳時代初頭の極めて短い時期に一斉に廃棄されていることを指摘した。またそれらの一斉廃棄は鏡片などがもつ“弥生社会における価値”が当の鏡所有者達によって否定された結果であろうと考えた。高橋はその後の論考で、鏡の入手・流入時期や伝世時期の幅など多少の修正を行ったが、鏡の廃棄についての事実と解釈については現時点でも今なお妥当と考えている（高橋 1992）。

大分県出土弥生～古墳時代の古鏡については、岡崎敬の集成をもとに その後の出土例を加えた地名表を公表してきたが（高橋 1994a、1994b）、いま弥生時代に絞って集成を行うと現段階で34遺跡46例が知られる（表１）。

鏡の種類

鏡は①中国鏡、②朝鮮半島製鏡、③弥生時代小型仿製鏡である。出土鏡のうち①の中国鏡は全て破片であり、②朝鮮半島製鏡、および③弥生時代仿製鏡は破損して出土のものもあるが、本来は完形鏡であったと考えられるものである。

中国鏡片は様々な型式からなり、広縁の連弧文照明鏡、方格規矩鏡、四葉座雲雷文内行花文鏡、半肉彫獣形鏡、四乳四獣鏡などである。

連弧文照明鏡は犬飼町高松 16 号住居跡、大分市地蔵原遺跡、大分市守岡遺跡の３例が知られており、ゴシック体の銘文を持つ広縁タイプである。３例とも鏡面、破砕面とも良く摩滅しており、漆黒色を呈する。径、縁の幅や厚さ、櫛歯文帯、銘文からみてそれぞれ別の鏡で、同一鏡を破砕したものではない。広縁の当該鏡はおよそ後漢初頭に中心がある。北部九州では二塚山 76 号甕棺、三津永田甕棺のよう後期初頭を過ぎ、中頃に近い前半と考えられるものを初例とし、三津永田北方箱式石棺、椛島山箱式石棺、宝満尾４号土墳墓と甕棺葬が例外的になり石棺・土墳が盛行する段階の弥生後期中頃～後半に出土例が増える。

方格規矩鏡は日田市草場遺跡、野津町原遺跡の３号住居跡、雄城台遺跡７次調査区１号住居跡、安心院宮ノ原遺跡、大分市尼ケ城遺跡、豊後大野市高松遺跡 36 号住居跡、豊後大野市松木遺跡 27 号住居跡、豊後大野市高添遺跡 NO.56 号ピット等の出土例がある。松木遺跡 27 号住居跡鏡は凹帯に複線三角文があり、佐賀県二塚山 29 号土壙墓例のような獣帯鏡の可能性もあるが、いずれにしても中国における製作年代は前漢末から後漢初頭の古式鏡であろう。

四葉座雲雷文内行花文鏡は雄城台遺跡６次８号住居跡、日田市小迫辻原４号住居跡、玖珠町おごもり遺跡、宇佐市本丸遺跡、宇佐市上原遺跡、豊後大野市二本木遺跡 34 号住居跡等から出土する。小迫辻原４号鏡は復元径 23cm 以上で樋口分類 Aa ア式（樋口 1979）、高橋編年１式（高橋 1986）に比定され、製作時期は後漢前葉。二本木遺跡 34 号鏡や宇佐本丸遺跡鏡は重孤文化した特徴からこれより後出するもので、後漢中葉～後葉。雄城台遺跡６次８号住居鏡は本来の雲雷文が平行孤文となり、渦文も消失しており、高橋Ⅳ式の新しい段階に比定できる。

半肉彫獣形鏡、四乳四獣鏡は安心院町大平石棺、玖珠

表１　大分県出土の弥生～古墳時代の古鏡

番号	遺跡名と出土遺構	遺跡所在地	鏡　式	直径 cm	穿孔の有無	製作年代	出土遺構の時期	備　　考	文　　献
1	小園遺跡４号竪穴住居跡	竹田市大字戸上字小園	方格規矩鏡	9～	3	後漢中葉	弥生後期後葉		『菅生台地と周辺の遺跡X』、1985、竹田市教育委員会
2	小園遺跡５号竪穴住居跡	竹田市大字戸上字小園	仿製内行花文鏡	7.8		弥生後期～	弥生後葉～終末	完形鏡。	『菅生台地と周辺の遺跡X』、1985、竹田市教育委員会
3	石井入口遺跡遺構検出時出土	竹田市大字菅生	仿製鏡	10		弥生後期		ほぼ完形。	『菅生台地と周辺の遺跡XV』、1992、竹田市教育委員会
4	石井入口遺跡 57 号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	蕨手状文様鏡	5.5			弥生後期	完形鏡。	『菅生台地と周辺の遺跡XV』、1992、竹田市教育委員会
5	石井入口遺跡 65 号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	?			後漢	弥生後期～	文様不明。	『菅生台地と周辺の遺跡XV』、1992、竹田市教育委員会
6	石井入口遺跡 88 号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	?			後漢	弥生後葉以降	鈕のみ。	『菅生台地と周辺の遺跡XV』、1992、竹田市教育委員会
7	石井入口遺跡 92 号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	半肉彫四乳獣形鏡	12～		後漢晩期		文様不明。	『菅生台地と周辺の遺跡XV』、1992、竹田市教育委員会
8	紙漉遺跡 10 号竪穴住居跡	竹田市米納	長宜子孫内行花文鏡		1	後漢中葉	弥生後期後葉	住居跡床面から浮いた位置で埋土から出土。	『城原八幡社遺跡・舞渡遺跡・紙漉遺跡』、2014、竹田市教育委員会
9	鞍ケ田尾遺跡 A 地区 20 号竪穴住居跡	竹田市大字片ヶ瀬字沖ノ園	仿製鏡（6 弧文）	11			古墳初頭	住居跡埋土の中位から出土。完形鏡。	『片ヶ瀬遺跡・下片ヶ瀬遺跡・鞍ケ田尾遺跡』、2019、竹田市教育委員会
10	鞍ケ田尾遺跡 A 地区 27 号竪穴住居跡	竹田市大字片ヶ瀬字沖ノ園	唐草文帯鏡		1		弥生終末前後	住居跡埋土から出土。	『片ヶ瀬遺跡・下片ヶ瀬遺跡・鞍ケ田尾遺跡』、2019、竹田市教育委員会
11	老野遺跡2号竪穴住居跡	竹田市久住町大字久住	長宜子孫内行花文鏡	13	4	後漢中葉～後葉	弥生後期中葉	鏡面、破砕部は丁寧に研磨。	『老野遺跡』、2004、久住町教育委員会
12	石田遺跡７号住居跡	竹田市久住町仏原	仿製鏡（勾玉状文様８カ所巡る）	5.0			弥生後期	赤色顔料付着、完形鏡。	『市第1遺跡・石田遺跡』、1996、久住町教育委員会
13	山ノ神谷遺跡1号竪穴住居跡	竹田市荻町矢所	方格規矩鏡?	9.8	無	後漢	弥生後期後葉	住居跡埋土から出土。	『山ノ神谷遺跡』、1997、荻町教育委員会
14	二本木遺跡 34 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字田中	雲雷文長宜子孫内行花文鏡	15～	1	後漢中～後期	弥生後期後葉	床面直上出土。	『大野原の遺跡』、1980、大野町教育委員会
15	松木遺跡 27 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字中原	方格規矩鏡?	11.4		後漢中葉	弥生後期後葉	床面から 15cm 上で出土。	『大野原の遺跡』、1980、大野町教育委員会
16	穴井南遺跡１号竪穴住居跡	豊後大野市大野町杉園字萩迫原	雲雷文内行花文鏡	11.4	1	後漢前葉～		6.2×4.2 m方形竪穴床面から出土。6本柱。破砕面は手擦れあり。鏡片表面や楠歯文に赤色顔料。	『一般国道中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』、2007、大分県教育庁埋蔵文化財センター
17	岡遺跡下ノ原地区包含層	豊後大野市大野町後他	仿製鏡（10 弧文）	7.8				文様不鮮明。	『一般国道中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』、2007、大分県教育庁埋蔵文化財センター
18	鹿道原遺跡 157 号竪穴住居跡	豊後大野市千歳村大字柴山字長尾久保	仿製鏡	10			弥生後期後葉	完形鏡。	『鹿道原遺跡発掘調査報告書』、2001、千歳村教育委員会
19	鹿道原遺跡 168 号竪穴住居跡	豊後大野市千歳村大字柴山字長尾久保	方格規矩鏡?	13	無	後漢	弥生後期後葉	5×5.6 mの方形竪穴。漆黒色良質。割れ口に赤色顔料付着。	『鹿道原遺跡発掘調査報告書』、2001、千歳村教育委員会
20	舞田原遺跡 16 号竪穴住居跡	豊後大野市犬飼町大字田原	獣帯鏡		無	後漢後葉	弥生終末～古墳初頭		『舞田原』、1985、犬飼町教育委員会
21	高松遺跡 16 号竪穴住居跡	豊後大野市犬飼町大字大寒字松山	連弧文照明鏡	9.6	1	前漢	弥生終末	割れ口研磨。	『高松遺跡』、1988、犬飼町教育委員会
22	高松遺跡 36 号竪穴住居跡	豊後大野市犬飼町大字大寒字松山	龍雲文縁方格規矩鏡	15.3	1	後漢	弥生後期後葉～終末	割れ口研磨。	『高松遺跡』、1988、犬飼町教育委員会
23	高添遺跡 No.56 ピット	豊後大野市千歳町長峰	獣文縁方格規矩鏡		1	前漢末	弥生?	穿孔1と未通の孔1。	『高添遺跡　石五道地区３次調査・石五道地区４次調査・出口地区第２次調査』、2006、豊後大野市教育委員会
24	雄城台遺跡６次８号竪穴住居跡	大分市玉沢宮ノ口	雲雷文内行花文鏡		1	後漢中葉～後漢後葉	弥生後期・終末～古墳初頭（?）		本報告書
25	雄城台遺跡７次１号竪穴住居跡	大分市玉沢宮ノ口	方格規矩鏡		無	後漢中葉～後漢後葉	弥生終末～古墳初頭		本報告書
26	稙田条里跡 H 区溝	大分市玉沢	小型仿製鏡（蕨手状文様?）	5.9			弥生終末?	完形鏡、文様不鮮明。	『ガランジ遺跡　稙田市遺跡　稙田条里遺跡』、1997、大分県教育委員会
27	守岡遺跡Ⅱ区１号竪穴住居跡	大分市大字曲字守岡	連弧文照明鏡	9.3	無	後漢初	弥生終末		『守岡遺跡』、1979、大分市教育委員会
28	守岡遺跡Ⅱ区 11 号竪穴住居跡	大分市大字曲字守岡	四乳獣帯鏡	12～	無	後漢後葉	弥生終末	官?の文字。破砕面摩滅著しい。	『守岡遺跡』、1979、大分市教育委員会
29	地蔵原遺跡竪穴住居跡	大分市大字小池原	連弧文照明鏡?	10	2	後漢初	弥生後期後葉		『大分県史先史篇Ⅱ』、1989、大分県
30	尼ケ城遺跡竪穴住居跡	大分市永興字深河内	方格規矩鏡	17	2	後漢中葉～	弥生後期～		『大分市の文化財』、1997、大分市教育委員会
31	大道遺跡4SX015	大分市大道町	方格規矩鏡?			?	不明		『大道遺跡群２』、2009、大分市教育委員会
32	東大道遺跡 B 地区	大分市金池南１丁目	方格規矩鏡?	11.3	無	後漢中葉～		近世水田の床土下部出土。	『東大道遺跡 B 区』、2002、大分県教育委員会
33	原遺跡３号竪穴住居跡	臼杵市野津町原字下藤	方格規矩鏡	8～		後漢中葉	弥生後葉～終末（?）		
34	北方下角遺跡 10 号竪穴住居跡	由布市狭間町大字北方字下角	仿製鏡（7弧文）			弥生後期後葉	弥生後期後葉	住居跡床面よりやや浮いた状態で出土。完形鏡。	『北下角遺跡』、1999、狭間町教育委員会
35	円通寺遺跡 SC03 竪穴式住居跡	別府市大字北石垣字ウト井手	仿製鏡（複線6弧文）	7.4				完形鏡。	『文化財研究所年報１（4）第4次調査（2001 年）』、2003、別府大学文化財研究所
36	古城得遺跡 20 号住居跡	杵築市大田上沓掛	虺龍文鏡		無	後漢	弥生終末～古墳初頭		『古城得遺跡・小川原遺跡』、1996、大田村教育委員会
37	割掛遺跡２号石蓋土壙墓	豊後高田市大字来縄	雲雷文内行花文鏡		2	後漢		胸部付近から出土、ペンダントとして使用か。割れ口は摩滅。	『割掛遺跡』、1998、豊後高田市教育委員会
38	割掛遺跡４号石棺墓	豊後高田市大字来縄	方格規矩鏡		無	後漢		数カ所穿孔を施そうとした痕跡あり。	『割掛遺跡』、1998、豊後高田市教育委員会
39	宮ノ原遺跡 B3 区北部遺構	安心院下毛宮ノ原	方格規矩鏡	13.2	無	後漢中葉～	弥生後期?		『安心院宮ノ原遺跡』、1984、安心院町教育委員会
40	宮ノ原遺跡 12 号竪穴住居跡	安心院下毛宮ノ原	方格規矩鏡	10.4	無	後漢中葉～	弥生後期?	竪穴住居跡上面出土。	『安心院宮ノ原遺跡』、1984 安心院町教育委員会
41	上原遺跡竪穴住居跡	宇佐市法鏡寺上原	長宜子孫内行花文鏡			後漢中葉～後葉	弥生後期後葉～		
42	本丸遺跡 15 号石蓋土壙墓	宇佐市高森	雲雷文内行花文鏡		2	後漢後葉	弥生後期後半～古墳初頭（?）	副葬品。	
43	諫山遺跡単独ピット	中津市大字諫山	仿製鏡（7弧文）	7.5				完形鏡。	『諫山遺跡』、2016、大分県教育庁埋蔵文化財センター
44	草場第二遺跡6号方形墓内	日田市清願寺	仿製鏡	5.5		弥生後期	弥生後期後葉	本来完形の可能性・副葬品か（?）	『草場第二遺跡』、1989、大分県教育委員会
45	草場遺跡1号石棺	日田市清願寺	方格規矩鏡	12～		後漢前葉～	弥生後期か?	鏡片。	『大分県の考古学』、1971、賀川光夫
46	小迫辻原遺跡 B 区4号竪穴	日田市大字小迫字辻原	長宜子孫内行花文鏡	22～	1	後漢前葉			『小迫辻原遺跡』、1999、大分県教育委員会
47	後迫遺跡	日田市大字三和	仿製鏡	7.7		弥生後期～終末	弥生後期か?	完形鏡。	『後迫遺跡』、2001、大分県教育委員会
48	本村遺跡 32 号住居跡	日田市南友田町	仿製鏡	8			弥生後期後葉	長方形プラン竪穴住居跡床面から浮いた状態で出土。破片となる。	『本村遺跡３次』、2004、日田市教育委員会
49	徳世遺跡 C 区	日田市南友田字徳世	位至三公鏡				古墳前期～中期	鏡片。	『平成５年度日田市埋蔵文化財年報』、1995、日田市教育委員会
50	おごもりⅡ区土壙墓	玖珠町大隈	長宜子孫内行花文鏡片	15～			弥生～古墳初頭?	副葬品。土壙中央部西壁際で出土。	『おごもり遺跡調査概報』、1977、玖珠町教育委員会
51	名草台箱式石棺	玖珠町大字名草台	獣帯文鏡	?			古墳初頭？	副葬品。	『大分県の考古学』、1971、賀川光夫
52	井尻日焼田遺跡 SH15 竪穴住居	玖珠郡九重町大字書曲字井尻	長宜子孫内行花文鏡片	16	無	後漢前葉	古墳前期（?）	古墳前期の方形竪穴住居床面出土。	『井尻日焼田遺跡』、2011、大分県教育庁埋蔵文化財センター

町名草台遺跡石棺、石井入口遺跡、大分市守岡遺跡１区 11 号住居跡鏡があるが、守岡鏡は三国時代初頭によくみられる斜縁の鏡になる可能性があり、他の鏡も古墳初頭にくだる可能性が高い。

②朝鮮半島製鏡および③弥生時代仿製鏡例としては次の 10 例が知られている。竹田市小園遺跡５号住居跡、竹田市石井入口 24 号住居跡、同遺跡耕作土中、竹田市鞍ケ田尾遺跡 A 地区 20 号住居跡、豊後大野市鹿道原 157 号住居跡、由布市北方下角遺跡 10 号住居跡、別府市円通寺遺跡 SC03 住居跡、日田市草場第２遺跡６号方形墓、日田市後迫遺跡、日田市本村遺跡 32 号住居跡である。朝鮮半島製と思われる石井入口 24 号住居跡鏡（高倉の小型内行花文鏡１型）以外は北部九州製である。日田草場第２遺跡６号墓鏡は、弥生後期～古墳中期の集団墓地において埋土から発見されたもので、出土状況からみて、本来は弥生後期～終末の土墳墓に完成品として副葬されていた可能性が強い。鹿道原遺跡 157 号住居跡鏡は高倉 Ia 式に属し、小園遺跡鏡は複線６弧文の高倉Ⅲｂ式に分類される（高倉 1972、1976）。

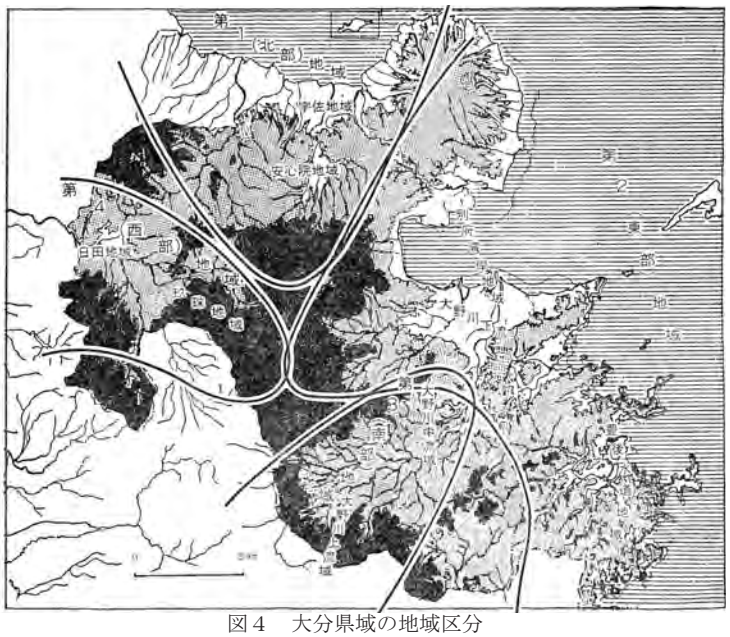


図４　大分県域の地域区分

鏡の出土する遺構は石棺や土壙墓などの墳墓（a 類）や竪穴住居・土坑等の生活跡（b 類）に大別されるが、大分県北部地域（宇佐、中津を中心にした地域で周防灘沿岸の平野が発達している。北九州や遠賀川流域との交通関係が顕著である。）や大分県西部地域（日田・玖珠盆地を中心とする地域で筑後川の上流にあたる。筑後、朝倉方面を介して北部九州との結びつきが強い。）では a 類、b 類が共に存在し、大分県東部地域（別府湾岸、大分平野、佐賀関半島以東のリアス式海岸地域。大分川や大野川の二大河川を介して、西部地域や南部地域との交通が顕著である。）や大分県南部地域（大野川中～上流域を中心にした地域で、厚い火山灰の堆積した台地と深い峡谷が発達している。大野川や阿蘇外輪山周辺ルートによって大分平野や肥後地域との交通関係を有する。）では、例外なく竪穴住居・土坑等の生活跡（b 類）のみの出土状況となる（図４）。

弥生時代における中国鏡の変遷

我が国において鏡は弥生時代前期の北部九州に墳墓の副葬品として出現する。それは中国での鏡副葬の風習が朝鮮半島を経由して北部九州弥生社会に波及したものである。我が国における「鏡使用の風習」の画期を以下のように設定する。

１期　弥生時代前期末～中期前葉。福岡市吉武高木遺跡、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、山口県下関市梶栗浜遺跡等、朝鮮半島で製作された多鈕細文鏡が他の半島製青銅武器とともに土壙墓、甕棺墓等に副葬される。

２期　弥生時代中期中頃～後半。大量の中国鏡が甕棺の副葬品として用いられるようになる。一括出土の鏡群に中国戦国時代の鏡（草葉文鏡、星雲鏡、雷文鏡等）と前漢時代の鏡群が混在しており、それらは中国大陸や、朝鮮半島に紀元前 108 年に設置された楽浪郡周辺において伝世使用されていた鏡が、北部九州弥生人と半島の有力者との接触によって多量にもたらされた結果と考えられている（高島 1979、岡村 1984）。

３期　後期。広縁連弧文照明鏡、方格規矩鏡、長宜子孫内行花文鏡、断面丸・台形の狭縁１式弥生時代小型仿製鏡が出現する。完形中国鏡は北部九州でしか出土しないが、中国鏡片や小型仿製鏡は周辺の豊後、肥後、四国、近畿地方にまで広くもたらされるようになる。

４期　弥生時代後期終末～古墳初頭。蝙蝠座鈕内花文鏡、新式方格規矩鏡、半円方形帯獣文鏡、半三角縁小型飛禽鏡、キ鳳鏡、半肉彫獣帯鏡、画象鏡などが出土する。北部九州の完形中国鏡独占体制が壊れ、近畿地方を中心に新たな中国鏡、（古墳時代）仿製鏡の使用、製作が開始される。

Ⅲ．雄城台遺跡出土鏡の歴史的背景

大分県下の弥生遺跡出土鏡はその殆どが前述の３期、４期にもたらされたものである。この頃になると、鏡副葬（風習）地域である北部九州におよびその周辺においては王墓やそれに準じる墓の被葬者達に倣って中国鏡への憧憬が高まりつつあり、完形の漢鏡の代用品として鏡片や弥生小型仿製鏡や漢式鏡片の需要が高まっていったと考えられる。そうした需要に応え得たのは北部九州勢力である。同一鏡に復元される鏡片の接合例が今のところ皆無であり、鏡片のなかに弥生時代や古墳時代をとおして我が国に完形での出土例の無いものがあることなどから、鏡片は彼の地で破砕されていたものがいわばスクラップとして輸入されたのであろう（森 1985）。

おおかたの鏡片の出土例数やその“大きさ”は、北部九州を中心にして、中部・東九州→四国・中国・近畿地方→中部・関東の東日本と、減少と小片化の地理的勾配を示しており（高橋敏 2015「破鏡と四方転びの箱」山形埋文研究紀要７号）、鏡片の流通が政治的な“配布”などで行われたのでは無いことが想定できる[1)]。北部九州では、漢鏡片は原則として墳墓の副葬品として使用されたが、墳墓に鏡を副葬する風習のない北部九州以東では、鏡片は穿孔され、磨かれ、ペンダント風に加工され日常的に用いられていたようである。宇佐市本丸土壙墓例では首飾りとして生前の被葬者の胸を飾っていた。兵庫県有年原出土の仿製鏡では鏡の上部に２孔が穿たれており、仿製鏡も漢式鏡片と同様に扱われていたことが推測できる。鏡副葬地域の北部九州に近接した日田､玖珠、宇佐地方や鏡副葬文化を理解した一部の地域では、鏡片の所有者はその死に際して、アクセサリーとしての鏡片を身につけたまま葬られた。一方そうした風習が定着していない地域では鏡片は最終的に住居や集落に廃棄されたのである。それは前方後円墳出現前後であり、近畿地方の有力勢力から定式化した前方後円墳の被葬者に三角縁神獣鏡を主とする大量の完形鏡が配布され、これらを副葬した古墳が築かれていた頃である。三角縁神獣鏡を初めとする大量の「中国における伝世鏡」を入手したと考えられる４期の近畿地方においても、北部九州製とは異なった弥生時代小型仿製鏡が作られており、当該期における複雑な社会・歴史的状況を暗示している。３期後半～４期に大量に輸入されたと思われる鏡片が、三角縁神獣鏡を主体とする大型鏡の配布リストに載らなかった人々の鏡片副葬やアクセサリーとして用いられたと考える。大量に舶載されたそれら鏡片の一部が、未だ鏡副葬の風習が定着していない雄城台遺跡などの集落に鉄器やガラス玉などと共に持ち込まれた。

４期以降の新たな政治状況の下、畿内政治勢力の主導で新規に持ち込まれた中国鏡や古墳時代小型仿製鏡等の配布、生産が本格化するにつれ、北部九州勢力が関与した後漢鏡片や弥生時代小型仿製鏡の生産と配布システムは終焉を迎える。それは北部九州弥生社会が担っていた政治･社会的秩序の変革と崩壊をも示唆するものである。さらに言えば、北部九州を超えて、弥生時代そのものの終焉を暗示しているのである。

【註記】

１）高橋はかつて、弥生時代終末に出土する、製作時期の溯る中国鏡片を国内における「伝世」として理解する往時の通念を無批判に用い、拙考を巡らしたことがある。しかしながらその後、前提とした「伝世（概念）」は再検討されなければならないという認識に至り、試論を発表している（高橋 1979、1986）。

【参考文献】

岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5

高倉洋彰 1972「弥生時代小形彷製銅鏡について」『考古学雑誌』58-3

高倉洋彰 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』２

高島忠平 1979「漢式鏡について」『二塚山遺跡』 佐賀県文化財報告書 46

高橋徹 1979「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第６集

高橋徹 1986「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60

高橋徹 1992「(E) 鏡」『菅生台地と周辺の遺跡ＸＶ－大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告』 竹田市教育委員会

高橋徹 1994 a「大分県出土の古鏡について（１）－出土地名表－」『大分県地方史』第 152 号

高橋徹 1994 b「大分県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集 共同研究［日本出土鏡データ集成２］

樋口隆康 1979『古鏡』 新潮社

森貞次郎 1985「弥生時代の東アジアと日本」『稲と青銅と鉄』 日本書籍

弥生集落におけるイノシシ属下顎骨穿孔・配列の再検討

宮　路　淳　子

Ⅰ．はじめに

弥生時代の集落遺跡から、イノシシ属の下顎骨が穿孔され、それらが配列された状態で発見される例がある。筆者もそのなかの一例を分析した経験をもつ（松井・宮路 2000)。先学諸氏の論考で既に論じられてきた通り、本事例が弥生集落における重要な儀礼の一つであったことに、疑う余地はない。

儀礼としての性格を否定するものではないが､一方で、その行為は古墳時代へ継承されない。農耕に関わる儀礼であったならば、弥生時代通じてもっと頻繁にかつ継続的に行われていても良いのではないか。これが本論における問いである。

遡って縄文時代にも、イノシシ属下顎骨に加え頭蓋骨の配列の事例があること[1)]、弥生時代にはイノシシ属の他部位ではなく下顎骨だけが扱われているということ、穿孔のある事例とない事例があることなど、イノシシ属を使用する儀礼行為について改めて検討すべき内容は多いと考える。

そこで本稿では、弥生集落から出土したイノシシ属下顎骨の穿孔・配列について、時期、検出状況、雌雄、年齢構成、死亡推定時期などを整理し、改めてこの行為について見直しを行い、その意味を再検討してみたい。

Ⅱ．先行研究

弥生時代の遺跡からイノシシ属の下顎骨が特異な形状で出土する事例は、1937 年の唐古・鍵遺跡の第 1 次調査時から確認されていた（藤岡 1943)。その後、弥生時代遺跡の調査が進むと、各地で同様の調査事例が報告されるようになり、農耕に関わる儀礼として注目された。春成は、日本列島における調査事例と中国大陸における事例を詳細に取り上げ、大きく 1）中国新石器時代の穿孔、2）中国新石器時代の副葬、3）アジアの民族資料を取り上げ、その時代背景と行為の持つ社会的意義、重要性を指摘した（春成 1993)。

春成は、イノシシ属の下顎骨が骨になった状態で穿孔されていることに気付き、あえて「懸架」という用語を用い、下顎骨を並べて吊り下げている情景を想定されており、正鵠を射た指摘であった。

春成の指摘するように、日本の出土事例についてはイノシシ属の年齢、雌雄、屠殺季節などの調査がまだ十分に進められていない。そこで本稿では、改めてこうした内容を精査し、そのうえで、弥生集落におけるイノシシ属下顎骨穿孔・配列の含意について、いくつかの可能性を指摘する。

本稿では、基本的には下顎枝に穿孔され配列されている事例を取り上げ、穿孔のみ単体で出土している事例、穿孔のない下顎枝の配列という事例もあわせて検討に加える。

Ⅲ．日本の事例の再整理

（1）年齢査定の方法

本稿で取り上げるイノシシ属は、哺乳類の偶蹄目に属する。学名は Sus であり、イノシシ *Sus scrofa* は「*Sus*（イノシシ属)」+「*scrofa*（雄豚)」という意味である。ウシやウマなど他の家畜の学名では、野生種より前に家畜種に命名されている例が多くあるが、イノシシとブタの間ではそのような問題はなく、ブタの学名は「*Sus scrofa domesticus*」であり、「*domesticus*（家畜の)」と“家畜化されたイノシシ”であることが示されている。弥生時代の遺跡から出土する資料にはイノシシとブタが含まれ、また明確に判別されていない個体も多いため、

本稿ではそれらを併せてイノシシ属と呼称する。

イノシシ属を含むイノシシ科のメンバーは、初期の偶蹄類がもっていた原始的な形質を多く保持しているとされる。たとえば、イノシシ属は哺乳類がもつ歯（切歯、犬歯、前臼歯、後臼歯）を全部揃えているが、多くの偶蹄類では切歯や犬歯は著しく退化している。歯の状態のこのような変化は、偶蹄類の大多数が草食性であることを反映しており、反芻に関する胃の特殊化にもそれは現れている。しかしイノシシ属は大部分の偶蹄類とは異なり、歯や消化管が特殊化していないために反芻しない。一方で、そのように特殊化したウシやヒツジ、ヤギなど他の偶蹄類に比べ、イノシシ属ははるかに高効率で食物を体に作りかえていくことができる。この特徴こそが、イノシシ属の家畜化において重要な役割を果たしたと理解されている（フランシス 2019）。

遺跡から出土する動物骨は、部位、雌雄、年齢、解体痕跡などから、種を同定し、それが人間によって殺された個体かどうか、殺されたとすればどのような理由、方法によって行われたのかが調べられる。本稿で扱うイノシシ属は、日本列島においてはニホンジカと並んで先史時代の遺跡から頻繁に出土する動物であり、弥生時代においても同様の傾向にある。

野生状態のイノシシはオス８歳、メス 11 歳まで生きることが調査されているが、遺跡から出土するイノシシ属の年齢構成は多様であり、それらは当時の人間の動物利用に関わる考え方の多様性を示している。

イノシシ属の年齢査定には上顎骨、下顎骨の歯牙萌出状態が使われる。本稿では、配列されたイノシシ属下顎骨がどのような年齢構成をもつのかを明らかにするために、歯牙の萌出状態を調査した。

イノシシ*Sus scrofa* は、ヨーロッパのイノシシにおいては、豊富な頭数の飼育個体を対象とした歯の萌出と交換の観察により、詳細な年齢査定方法が確立されている（Matschcke 1967; Wilson et al.1982; Boitani&Mattei 1992）。一方、ニホンイノシシ（*Sus scrofa leucomystax*; 以下イノシシと表記）では、林ほか（1977）が飼育個体と冬季に捕獲された野生個体、新美が冬季に捕獲された個体（新美 1991）、Anezaki（2009）が冬季以外の個体も用いて歯の萌出や交換状況を報告している。しかし、標本数が限られていることや萌出、交換の進行状況に個体差が確認されていることから、ニホンイノシシについては冬季以外の野生個体の年齢査定方法の整理は十分でなかった。そのようななか、近年、辻・横山が年間を通じて収集された個体を用いて、通年で可能となる年齢査定方法の整理を試みている（辻・横山 2014）。

本稿では、こうした先行研究を踏まえ、弥生集落から出土した穿孔・配列されたイノシシ属下顎骨の死亡年齢と雌雄を調査し、出土状況とあわせて検討を行った。年齢の区分は、０歳を幼獣、１～２歳を若獣、2.5 歳以上を亜成獣、3.5 歳以上を老成獣とした（林・西本 1986）。

（２）イノシシ属下顎骨穿孔・配列出土事例

弥生時代の遺跡について、イノシシ属下顎骨の穿孔・配列が報告されている事例を縄文時代の出土例とあわせて取り上げた（表１、図１）。弥生時代の出土事例の分布と時期的変遷をみると、西日本に多く、かつそれらの遺跡は地域の中核的な集落であることがわかる。

菜畑（佐賀県唐津市）からは、下顎枝に穿孔して木の棒で串刺しにされた３個体分の下顎骨が出土している（写真１）。１個体のみ犬歯が遺存していてオス、他の２個体も犬歯窩の形態からオスの可能性が指摘されている（渡辺 1982）。亜成獣（オス）１、老成獣（オス）２。

写真１　菜畑遺跡の出土事例［唐津市 1982］

表１ イノシシ属配列出土事例一覧

	遺跡名	所在地	時期	個体数	部位	出土遺構	穿孔	穿孔のないイノシシ属下顎骨の共伴
1	取掛西貝塚	千葉県船橋市	縄文早期前葉	7	頭蓋骨	貝層下		
2	西ノ浜貝塚	宮城県宮城郡松島町	縄文後期初頭	25	下顎骨	貝層下		
3	渡喜仁浜原貝塚	沖縄県国頭郡今帰仁村	貝塚時代中期（縄文晩期併行期）	6	下顎骨	貝層	○	○
4	金生	山梨県北巨摩郡大泉村	縄文晩期	138	下顎骨	土壙		
5	菜畑	佐賀県唐津市	弥生早・前期	3	下顎骨		○	
6	西川津	島根県松江市	弥生前期	12	下顎骨	自然河道	○	
7	新方（野手・西方地区）	兵庫県神戸市	弥生前期前半	5	下顎骨	溝	○	○
7	新方（大日地区）	兵庫県神戸市	弥生中期初め	5	下顎骨	溝	○	○
8	門田	岡山県邑久町	弥生前期中頃～末	14	下顎骨	貝塚	○	○
9	浜郷	長崎県南松浦郡	弥生前期中頃～中期中頃	24	下顎骨		○	
10	下郡桑苗	大分県大分市	弥生前期後半～中期初め	2	下顎骨	自然河道	○	○
11	青谷上寺地	鳥取県青谷町	弥生前期末～中期前半	2	下顎骨		○	○
12	納所	三重県津市	弥生前期	3	下顎骨	自然流路	○	
13	唐古・鍵	奈良県田原本町	弥生前期	3	下顎骨	環壕	○	○
13	唐古・鍵	奈良県田原本町	弥生中期	3	下顎骨		○	
13	唐古・鍵	奈良県田原本町	弥生中期	14	下顎骨	環壕		
13	唐古・鍵	奈良県田原本町	弥生中期	7	下顎骨	環壕		
13	唐古・鍵	奈良県田原本町	弥生後期	1	下顎骨		○	
14	原の辻	長崎県壱岐郡	弥生中期	2	下顎骨		○	
15	石丸	福岡県宗像市	弥生中期初め	1	下顎骨	貯蔵穴	○	○
16	南方	岡山県岡山市	弥生中期中頃	12	下顎骨	微高地縁辺	○	
17	恩智	大阪府柏原市	弥生中期	1	下顎骨		○	
18	坪井	奈良県橿原市	弥生中期	1	下顎骨	溝	○	○
19	朝日	愛知県清洲町	弥生中期	2	下顎骨		○	
20	亀井	大阪府八尾市	弥生中期後半	1	下顎骨	ゴミ穴	○	
20	亀井	大阪府八尾市	弥生後期後半	4	下顎骨	溝	○	

1 弥生時代早期～前期　　2 弥生時代中期　　3 弥生時代後期

図１　イノシシ属下顎骨穿孔・配列の時期別分布

西川津（島根県松江市）からは 12 個体出土している。成獣から老獣。オスが多い。西川津はその後、中期はイノシシ最小個体数６、幼獣が多くなる。

新方遺跡（兵庫県神戸市）は野手・西方：前期前半の溝 SD7001 から５個体出土している。成獣。人骨 10 体が赤色顔料（水銀朱）とともに出土している。

門田（岡山県邑久町）では、前期中頃から末に属する貝塚などから 14 個体。若獣２、亜成獣（メス）１、老成獣９。林・西本は、老成獣のものが多数を占めていることを指摘している（林・西本 1986）。

浜郷（長崎県南松浦郡）は五島列島中通島に所在する海岸近くの墓域であり、６基の墓に人骨とともに 24 個体が埋葬されていた。

下郡桑苗（大分県大分市）では、自然河道から２個体が出土している（西本 1989･1992ａ）。若獣１、亜成獣２。「この遺跡では下顎骨は下顎枝片２点を含む３点と少ないことも特徴である。特に、成獣や若獣の下顎骨は１点しかない。この資料は、小さい破片であるが穴が穿たれた痕がみられるものである。この遺跡ではブタの若獣、成獣の下顎骨が菜畑遺跡のような儀礼に用いられたものと推測される。」（林・西本 1986）

青谷上寺地（鳥取県青谷町）からは２個体が出土している。亜成獣（オス）。

納所（三重県津市）では自然流水路とそれに伴う落ち

込みから、３個体が出土している。若獣２、亜成獣１。

唐古・鍵（奈良県田原本町）では、前期から後期にかけて複数事例が出土している。

前期：成獣１、老成獣２

中期：亜成獣１、老成獣２

後期：老成獣１

唐古・鍵遺跡からは穿孔のない下顎骨も複数個体出土しており、ここでは同列に扱う。弥生中期の環壕 SD-06 の底から下顎骨 14 個体が下顎連合部を木の棒に掛けた状態で棒とともに環壕から出土している。春成は下顎枝に穿孔がなくても懸架されていたことを証明する資料であると指摘している（春成 1993、寺沢編 1979）。同じく弥生中期（Ⅲ期古）の溝 SD-06（環壕）内からは、下顎骨７個体も出土。メスの若獣。

原の辻（仙波 1960）からは亜成獣２個体が出土している。石丸（福岡県宗像市）では貯蔵穴から１点。亜成獣。南方(岡山県岡山市)では微高地の延辺から 12 個体。下顎枝には解体痕跡が観察できるものが多い。オスの成獣。第３後臼歯は萌出済。咬頭の摩耗はさまざまであり亜成獣から老成獣（扇崎・安川 1995）。恩智（大阪府柏原市）では１個体。坪井（奈良県橿原市）では溝から１個体。亜成獣（オス）。朝日（愛知県清州町）からは２個体。若獣（オス）。亀井（大阪府八尾市）では中期後半の層から亜成獣１個体、後期後半の溝から亜成獣４個体がそれぞれ出土している。

もっとも時期が早いのは、菜畑遺跡の事例であり、弥生時代早期である。以降、西日本を中心として中期の中頃まで続くことが分かる。ここで注意すべき点は、１）複数時期にわたって複数回行っているのは近畿地方の遺跡のみである、２）後期には唐古・鍵と亀井遺跡の事例を除いて行われていない、３）年齢構成は若獣を中心とするグループと老成獣を中心とするグループに大別できる、ということである。特に注目すべきなのは、唐古・鍵遺跡で複数回行われていて、しかも使用されているのがオスの老成獣ばかりが多いという点である。次節で詳しく検討する。

（３）年齢のパターン

歯牙の萌出状態から年齢査定を行ったところ、年齢構成は大きく２グループに分かれることがわかった。まず奇妙なのはそこから明らかになったのは「イノシシ属の下顎骨を使う儀礼」で使用されている個体が、異なる判断基準に基づいて選ばれているように見えるという事実である。

狩猟採集社会では、狩猟対象とするのはある一定程度年齢を重ねた個体である。幼い個体は、個体群の保全のために対象とはしない。一方､動物を飼育する社会では、ある一定の年齢を超えた特にオスの飼育を、長く継続することはしない。仔を産むメスとは異なりオスを長く飼育することの有意性は極めて低いからである。

そのような視点に立った場合、幼獣をそこに含む下郡桑苗、唐古・鍵（中期）のような事例と、亜成獣・老成獣が多数を占める南方・門田のような事例は、使用されている個体の年齢構成がまったく違うことに気づく。しかも唐古・鍵遺跡の場合、穿孔のないメスの若獣が用いられている。

筆者はこの違いは、それぞれの集落におけるイノシシ属との関わりの差異を示しているのではないかと考える。この行為に幼獣・若獣が使用されている集落では、西本が指摘してきたように、すでにイノシシ属の飼育を開始していたと積極的に判断できるのではないか。

また、さらに興味深いのは、亜成獣・老成獣という高い年齢層の個体を、同じ行為に用いている集落があるということである。イノシシ属の飼育を開始していない集団が、同じ儀礼を異なる原理のもと実施したりするだろうか。同じイノシシ属とはいえ、狩猟してきたものと飼育していたものでは、その持たされる意味が大きく異なるのではないか。

そこで筆者は、亜成獣・老成獣という高い年齢層の個体は､積極的な飼育対象ではなかったものの､集落に寄ってきていた、自己家畜化したグループだったのではないかと考える。そうであれば、このグループは、集落構成員からすれば、狩猟対象動物ではなく、半分飼っているような動物、という位置づけとなり、そうであれば同じ儀礼に用いることになんの躊躇いも生じないと考えるからである。

弥生時代の特に大集落ともなれば、人間が出す生活残渣、排泄物などが増えて、それらを狙ってイノシシは、自己家畜化を果たしていったのではないだろうか。動物の自己家畜化については、次章でさらに論じる。

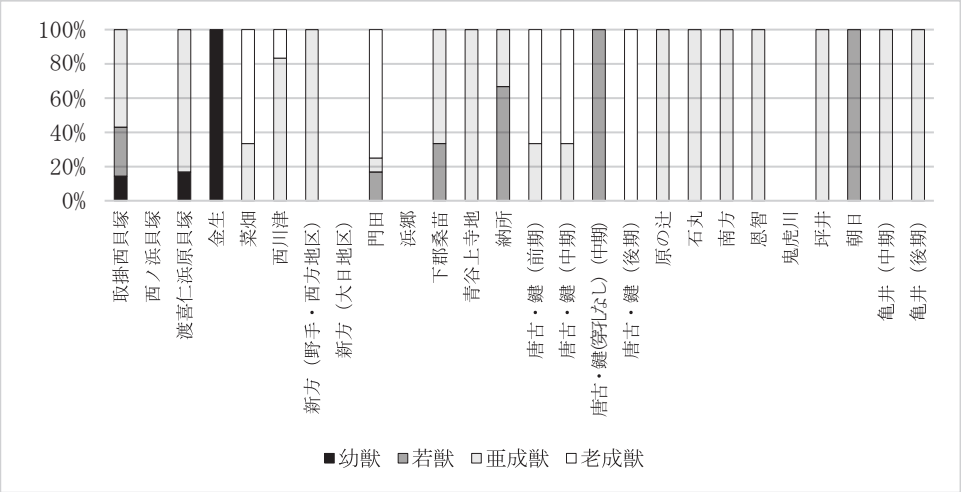


図２ イノシシ属下顎骨穿孔・配列の年齢構成

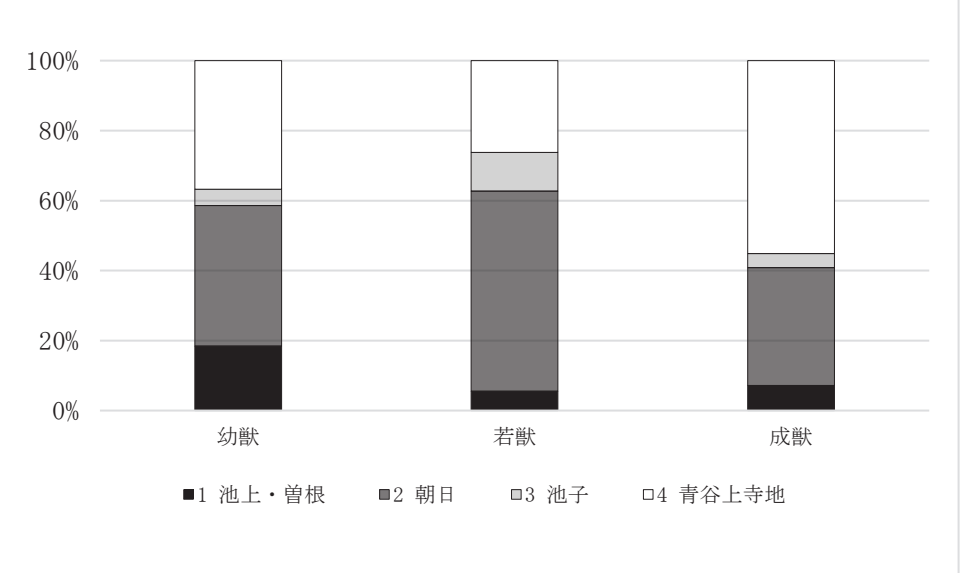


図３ 弥生集落出土のイノシシ属年齢パターン

時期的な変遷を追うと、この行為の後期の例は唐古・鍵と亀井遺跡の２例しかない。このことからは、どのような意味が考えられるだろうか。

筆者は、この行為が農耕儀礼であるならば、弥生時代を通して実施が続き、弥生時代が終わるまで継続しても良いのではないかと考える。なぜほとんどの地域で中期中頃までで行わなくなるのか､それまでと後期以降では、集団が変わったのか。なぜお祭りを変えたのか。なぜ唐古・鍵遺跡では後期に老獣が多いのか。

筆者はその理由に、動物の飼育、家畜化に伴う病気の発生を考えたい。イノシシ属飼育が広まらず、古墳時代にかけて継続しなかった原因もここにあると言えるのではないかと考える。

唐古・鍵遺跡の集団も、朝日遺跡の集団のように、イノシシ属の本格飼育に乗り出そうとしたが、それまでに経験したことのない病気が蔓延して殺処分したのではないか。メスの若獣が使われていることから、そのように想定したい。

また、穿孔に限らず、拠点的集落から出土するイノシシ属の年齢構成も見ておきたい。

出土したイノシシ属は、池上・曽根遺跡では、30 個体のうち、０～１歳が 23.3%、１～２歳が 53.3%、２～３歳が 20.0%、３歳以上が 3.3%を占める（金子・牛沢 1980)。

朝日遺跡では 140 個体のうち、幼獣が 32 体 22.9%、若獣が 75 個体（判別可能なものはオス７、メス 26）53.6%、成獣が 33 体（判別可能なものはオス６、メス８）23.6%。西本豊弘は、朝日では 200 年間に 5,000 ～

6,000 頭のブタを飼育し、年間の消費量は約 30 頭であったと推算している（西本 1992b）。

池子遺跡（神奈川県）では、22 個体のうち、幼獣が４個体、若獣が 14 個体、成獣が４個体であった（西本・姉崎 1999）。青谷上寺地遺跡では、119 個体のうち、幼獣が 32 個体、若獣が 33 個体、成獣が 43 個体、老獣が 11 個体であった（井上・松本 2002）。

池上、朝日、池子はいずれも、０～２歳の幼・若獣が多数を占めている。青谷上寺地は、成獣も多いがやはり幼・若獣のほうが多い。これらはいずれも、年齢層が低いパターンである。

一方、唐古・鍵は同じく遺跡から出土する全個体の年齢構成を見ても年齢層が高いパターンである[2)]。

このように、拠点集落出土イノシシ属の年齢構成には、２パターンがあり、それは下顎骨の穿孔・配列と同様の傾向を示していることがわかった。次章では、その背景を検討する。

Ⅳ．イノシシ属下顎骨集積行為の再検討

（１）イノシシ属の自己家畜化

Ⅲ章での検討の結果、拠点集落における年齢層の低いパターンと年齢層の高いパターンという、２パターンがあることがわかった。本章では、年齢と性別が示すパターンの違いは、飼育形態・状態の違い、つまり「完全家畜化パターン（＝年齢層低め）」「自己家畜化パターン（＝年齢層高め）」を示しているのではないか、弥生集落におけるイノシシ属の飼育には、人間によるものとイノシシ属自身によるものがあったのではないか、という新たな設問について述べていきたい。

フランシスはイノシシ属の特性と家畜化の過程について、次のように指摘する。

「ブタの家畜化に至る経路には、おそらく二つの別個のルートがあった。一つはイヌやネコの家畜化と似たもので、ブタが人間の居住地やゴミに近寄ってきて、自発的な人馴れによって家畜化過程を開始したと考えられる。メリンダ・ゼーダーはこれを「片利共生的」ルートと呼んでいる。もう一つのルートは人間が野生集団を管理したことによるものだ。最初は群れを追い集めるようなことから始まり、やがては完全に囲い込んで飼育するようになったと考えられる。これはウシやヒツジ、ヤギ、ウマの家畜化と同様の過程である。こちらのルートでは、人間が深く関わって家畜化過程が開始された。この二つのルートは相容れないわけではない。群れを追い集めるに先立って、ある程度の片利共生的な関係ができていた可能性もある。イノシシおよびブタ（*Sus scrofa*）は、今日に至るまで、大規模で存続可能な集団が以前からの生息地域に残っているという点で、家畜化された大型哺乳類のなかで特殊な存在である。そのため、家畜化が始まってから現在まで、野生集団から家畜への遺伝子移入〔他の集団との交雑によって生じた個体が元の集団の個体と交雑することで、元の集団内に他の集団の遺伝子が広がっていくこと〕がよく起こっている。その結果、今日、世界の多くの地域では家畜のブタ集団と野生化したブタ集団、イノシシ集団の間にはなにがしかの遺伝的な連続性が見られるのだ。」（フランシス 2019）

（２）縄文時代のイノシシ属下顎骨儀礼例

イノシシ属の自己家畜化を考えるために、さらに縄文時代におけるイノシシ属の下顎骨、頭蓋骨を使用した儀礼について触れておきたい。弥生時代のことを論じるのに、なぜ１万年以上も時間幅のある縄文時代の事例を取り上げるのか。それは、日本列島における動物飼育および生業の選択性に関連して、大変重要だと考えるからである。

取掛西貝塚（千葉県船橋市）は、縄文時代早期前葉を主体とする貝塚を伴った集落遺跡である。地球規模での環境変動を経て、世界各地で人間が植物栽培や動物飼育に取り組み始めた頃、日本列島では広範囲の内外水域を得て、水産資源の利用へとシフトした。その後１万年間続く狩猟採集経済を基本とする縄文時代の基礎を築いた重要な時期が早期であると考える。

その早期前葉に、取掛西貝塚ではイノシシの頭骨を使った儀礼が行われている。それまで日本列島では見られなかった所作であり、その後、同様の行為が続かなかったこともまた重要である。

取掛西貝塚では、使われなくなった竪穴住居跡に形成された貝層最下部から、動物の骨を配列し火を焚いた痕跡が発見され“動物儀礼跡”と呼ばれている。縄文時代早期前葉（約１万年前）のものであり、日本列島におけ

る最古の事例といえる。

イノシシの頭蓋骨は７個体分（幼獣１個体、若獣２個体。成獣が４個体）。住居の壁近くの斜面の一番上に、イノシシ下顎骨連合部が上下反転した状態で置かれ、その下に頭蓋骨（若獣）がやはり上下逆に、その横と下には上下正位置の頭蓋骨（オス成獣）がまとまって置かれていた。いずれも被熱痕が認められている。傍に焼けたニホンジカの頭蓋骨・角なども出土していることから、出土地点で焼かれたものと考えられている。他に幼獣、メス成獣、亜成獣の頭蓋骨が出土している（西本・石坂 2013）。

渡喜仁浜原貝塚（沖縄県国頭郡今帰仁村）では、沖縄貝塚時代中期（縄文晩期併行期）に属する貝層（B 区 a3 ピットⅢ）から、出土したイノシシの下顎骨の右側破片に穿孔のあることを春成が指摘している（春成 1993）。成獣（オス）。B 区Ⅱ c 層では１m×２mの発掘区から、イノシシの下顎骨５個とホラガイの殻、アコヤガイ・ヤコウガイの殻に穿孔した貝製品が集中的に出土している。

西ノ浜貝塚（宮城県宮城郡松島町）では縄文後期初め堀之内式併行期のイノシシ下顎骨 25 個が「完全な姿で、しかも歯の部分を下方に伏せて、東方を向け、同一平面上より出土」（春成 1993）している。

金生遺跡（山梨県北巨摩郡大泉村）は、居住区･墓域･祭祀域・広場が検出され、200 点を超える土偶、多くの土製耳飾り、石剣・石棒類など豊富な遺物が出土した縄文時代晩期の集落遺跡である。土壙から 138 個体もの下顎骨が被熱した状態で出土し、そのうち 115 個体が幼獣（オス 54、メス 61）であった（金子 1989、西本 2003）。

取掛西貝塚の事例はさらに検討が必要ではあるが、筆者は、これらの縄文時代のイノシシ下顎骨・頭蓋骨の出土事例について、フランシスが指摘するような、イノシシの自己家畜化による人間との関わりがあった可能性を指摘したい。他にも、これまでに縄文時代の遺跡では、下太田貝塚（千葉県）､鳥浜貝塚（福井県）､野国貝塚（沖縄県）からの出土事例において「縄文ブタ」「縄文時代にブタが飼育されていた」という指摘がなされてきた（西本 2003 など）。

筆者は、縄文時代において早期以降、人間が集住するようになり、彼らの排出する生活残渣、つまり食料残滓や排泄物などを求めて、イノシシが集落の周りに寄ってきて徘徊するようになった可能性は十分ありうるのではないかと考える。それをイノシシの自己家畜化と捉え家畜化の第１段階と捉えるならば、第２段階としての人間による積極的な飼育に踏み出したケースもあったとしても不思議ではないと考えるものである。

ただし、日本列島にはイノシシ属（とイヌ）以外には家畜になるような大型動物種が元来少なく、また生活空間として水産資源が豊富な環境を、縄文時代を通じて選択することができたため、動物の家畜化の第２段階へ、社会として踏み出す必要が長く無かったのだ、と考えられないだろうか。

（３）動物の家畜化と感染症の発現

最後に、ここまでの議論を受けて、イノシシ属下顎骨を使ったこの儀礼と、病気の発生が関わっている可能性について述べる。

縄文の例は、金生遺跡を除いては、年齢層は亜成獣・老成獣が多い。筆者が呼ぶところの、イノシシ属の自己家畜化パターンである。金生遺跡は逆に幼獣が多いことから、人間による家畜化パターンに属すると捉えたい。

先述の通り、弥生集落において、パターンの違う年齢構成を持ったイノシシ属を、同じような方法で儀礼に用いている。これが意味するところは、イノシシ属がどちらのパターンにせよ、人間との関わりを強めていたことを示すのではないかということである。イノシシ属の飼育が、人間からの積極的なものにせよイノシシの側からのものであったにせよ、行われていたことを示しているのではないか。

違うパターンのイノシシ属を使って人間がこのような穿孔・配列を行ったのはなぜだろうか。

筆者は、穿孔・配列の目的は、人間によるものにせよ自主的なものだったにせよ、家畜化という共通のキーワードでイノシシ属が人間と関わりを強めた際に、人間集団にとって、忌むべき、そしてそれまでに経験したことのない病気をもたらしたからではないかと考える。ダイアモンドが指摘するように、人間と動物に共通する感染症が発現するに至ったのではないだろうか（ダイアモンド 2000）。

その関連性“イノシシ属を飼っていたら病気が流行る”

に気づき、飼育個体を殺処分し、下顎枝に穿孔しもしくは懸架し、二度と起こらないようにと行った儀礼だったのではないか。今回、死亡季節まで調査することができなかったが同じ季節に複数頭が屠殺されたころを確認することができれば、病気以外にも饗宴など、改めて証明しなければならない課題は残されているが、その蓋然性は高められよう。

ダイアモンドは人畜共通感染症について、以下のようにまとめている。

「人間だけがかかる集団感染症は、人類全体の人口が増加し、人びとが寄り集まって集団を形成して暮らすようになった時点で出現した。しかも、それまでは人間の病気として存在しておらず､新種の病気として登場した。こうした集団感染症は、いったいどのように誕生して、人間だけがかかるようになったのだろうか。

この疑問に対する答えは、最近の分子生物学の研究によって明らかになりつつある。人間特有の病気を引き起こす病原菌には、分子生物学的に近い近縁種が存在し、それらは家畜やペットだけに集団感染症を引き起こす。しかし、全ての種類の動物がこうした集団感染症にかかるわけではない。この種の病気にかかるのは、人間の場合と同様、病原菌が生き延びることができる規模の集団を維持できる群居性の動物だけである。ということは、ウシやブタなどの群居性の動物が家畜化されたとき、そのあいだですでに集団感染症の病原菌がはびこっていたということになる。

たとえば、ウシのあいだで猛烈に伝染する牛疫のウィルスは、人間の麻疹ウィルスに非常に近いが、反芻動物にしか感染しない。人間の麻疹ウィルスがウシに感染することもない。この二つのウィルスの類似性は、人間の麻疹ウィルスが牛疫ウィルスから進化したことを示唆している。おそらくウシから人間にうつった牛疫ウィルスが、人間の体内という新しい環境に適応できるようにいくつかの属性を変化させて、人間の麻疹ウィルスへと進化したのだろう。多くの農耕民が、ウシやウシの糞尿などといっしょに寝起きしていたことを考えれば、牛疫ウィルスが人間にうつったとしても不思議ではない。人間は、野生動物を 9,000 年前に家畜化して以来、家畜と密接な接触を保ち続けてきている。9,000 年といえば、牛疫のウィルスが自分の近くにいる人間を見つけるには十分な時間である。表２（筆者改変）が示すように、麻疹以外にも、人間がよく感染する病気に似た病気が家畜化された動物のあいだには存在している。

表２ 人畜共通感染症［ダイアモンド 2000］

人間の病気	もっとも近い病原体を持つ家畜
麻疹（はしか）	ウシ（牛疫）
結核	ウシ
天然痘	ウシ（牛疫）または天然痘ウィルスを持つ他の家畜
インフルエンザ	ブタ、アヒル
百日咳	ブタ、イヌ
熱帯熱マラリア	家禽（ニワトリとアヒル？）

人間と動物との密接な接触を考えると、われわれは常に動物のまき散らす病原菌にさらされている。しかし、それらの病原菌も自然の摂理によって選別的に淘汰され、人間の病気へと進化できたのはほんの一握りの種類だけであった。現存している病気を調査分析してみると、動物由来の病気は、四つの段階を経て、人間だけがかかる病気に変化することがわかる。

第一段階は、我々がときおり動物や家畜から直接うつされる病気である。ネコからうつる猫ひっかき病（猫爪病）、イヌからうつるレプトスピラ症、ニワトリやオウムからうつるオウム病、ウシからうつるブルセラ病（マルタ熱）などがこの種の病気である。われわれは、たとえば猟師がノウサギの皮を剥ぐときに感染する野兎病（ツラレミア）などのように、野生の動物からもこの種の病気をうつされることがある。これらの病気の病原菌はまだ、人間だけに感染する病原菌になる進化の途上にあり、人間から人間へと感染することはない。動物から人間へと感染することもまれである。

第二段階は、もともと動物のものだった病原菌が、人間のあいだで直接感染するようになり、流行するものである。しかしこの流行は、現代医学によって治療されるとか､まわりの人が全員かかって免疫を持つようになる、治らずに死亡するなどの理由で収束してしまう。

（中略）

第三段階は、もともと動物だけに感染する病原菌だったものが、人間に感染するようになり、まだ絶滅しておらず、かつ、将来的に大量の犠牲者を出すかどうかがまだ不明な病原菌に代表されるものである。

最後の第四段階は、人間だけがかかり、昔から大流行することで知られている疫病に代表されるものである。

こうした病気の病原菌は、動物からわれわれ人間へと宿主を切り替える過程で、自然淘汰されずに子孫を残せた数少ない成功者といえる」（ダイアモンド 2000）。

先にも触れたとおり、日本列島において人間が恒常的な居住生活を始めて以降、イノシシがそうして形成された集落の周りに寄ってきたこともあったであろう。西本や新美が指摘しているように（西本 2003 など）、飼育が始まった事例があったことも充分に考えられる。

繰り返しになるが、縄文時代ではしかし、そこから積極的に家畜化へは社会は動かなかった。なぜなら、日本列島には海産資源をはじめとする豊かなタンパク質食料があったため、家畜化の第２段階へ踏み出す必要が長く無かったからである。

弥生時代に入り稲作農耕の技術と人間の流入が拡がると、人間の集団規模は大きくなり、イノシシ属もまた集落へ生活残渣や排泄物を求めて寄ってきて、そして今度は積極的にその家畜化を人間が指向したのではないか。下顎配列にみる年齢構成の２パターンは、そうした背景を示しているのではないか。しかし共生を始めると、集落内に感染症に罹患する人が出てきてしまったのではないか。感染症の原因がイノシシ属であることを恐れて下顎枝を貫通させ儀礼を行い、そして廃棄したのではないか。

そのように考えるもう一つの根拠は、農耕儀礼であればその後も継承されていても良いのではないか、という、はじめに立てた問いである。農耕儀礼であるならば、弥生時代の中期半ばで途絶えることについて説明がつかない。

筆者はまた、ウシの導入時についても同様に感染症の発現の契機となったことを別稿で指摘している（宮路 2019）。ウシの場合、イノシシ属とは異なり、それまで日本列島にまったくいなかった動物であったためその感染力はさらに大変強力なものだったのではないか。

人が集住することによって、生活廃棄物（含む糞便）が恒常的に発生するようになり、それを求めてイノシシ属が集落の周辺へ寄ってくるという自己家畜化が、実際には縄文時代から起こっていたのではないか。ただしそこから、野生集団を完全に管理するという方向へはなかなか進まなかったのではないか。なぜか。安定的、重点的に飼育すると人畜共通感染症の罹患が起き、それが忌諱されたからではないか。

感染症の発現を論じるためには、イノシシ属下顎骨穿孔・配列としばしば共伴する弥生人骨について調査を進めなければならない。そのことは別稿で改めて論じる。

Ⅴ．おわりに

本稿では、弥生集落から出土するイノシシ属下顎骨穿孔・配列について、年齢構成、雌雄、検出状況について整理を行い、改めてこの行為を見直してみた。狩猟獣と家畜では、別々の屠殺原理が働くはずなのに（若い個体は殺さない vs 若い個体から殺す）同じ行為に使っているのは、何か別の、それを超える理由があるはずだ、という視点から本稿をまとめた。

そして、この行為に使用されたイノシシ属の年齢構成・雌雄には２つのパターンがあること、この行為が弥生時代中期中頃までしか行われていないことから、イノシシ属の飼育、それに伴う感染症の発現の可能性について論じた。縄文時代の出土例をあわせて検討することにより、人が集住することによって生活廃棄物（含む糞便）が恒常的に発生すると、それを求めてイノシシ属が集落の周辺へ寄ってくるという自己家畜化が、日本列島では実際には縄文時代から起こっていたのではないか、ただしそこから、野生集団を完全に管理するという方向へはなかなか進まなかったのではないか、という可能性を指摘した。なぜ進まなかったのか。それは、縄文時代には環境的要因、弥生時代以降は社会的要因が背景にあり、集落内での本格的飼育は人畜共通感染症の罹患を招き、それが忌諱されたからではないか、ということを述べた。本稿をまとめるにあたり、各出土資料の年齢構成、死亡時期などを詳しく調査する予定であったがかなわず、十分に議論を深めることができなかった。稿を改めて論を進めたい。

謝辞

桜井市纒向学研究センターの皆様には平素より学生の教育・研究活動へご指導、ご鞭撻を賜り、このたびは設立 10 周年記念論集である『纒向学研究』第 10 号に拙文まで掲載いただけましたことに、心より厚く御礼申し上げます。

【註記】

1）取掛西貝塚（千葉県船橋市）では縄文時代早期前葉のイノシシ７体分の頭蓋骨を用いた配列が検出されている（船橋市教育委員会 2021）。

2）唐古・鍵遺跡についての詳細な検討は別稿に譲る。

【参考文献】

Anezaki, T. 2009 “Estimating age at death in Japanese wild boar(Sus scrofa Leucomystax) based on the timing of molar eruption in recent comparative samples” Mammal Study 34(2), pp.53-63, The Mammal Society of Japan

井上貴央 1988「西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について」『西川津遺跡発掘調査報告書 IV』pp.261-274、島根県教育委員会

井上貴央・松本充香 2002『青谷上寺地遺跡４』本文編２ 鳥取県教育文化財団 pp.470-480

扇崎由・安川満 1995「岡山市南方（済生会）遺跡のイノシシ類下顎骨配列」『動物考古学』5、pp.69-73、動物考古学研究会

岡村秀典 2004『中国古代王権と祭祀』 学生社

金子浩昌 1989「金生遺跡出土の獣骨」『金生遺跡 II（縄文時代編）』pp.222-242、山梨県教育委員会

金子浩昌・牛沢百合子 1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡６ 自然遺物編』pp.9-32、大阪文化財センター

唐津市教育委員会 1982『菜畑』

北浦弘人 2002『青谷上寺地遺跡４』 鳥取県教育文化財団

小寺祐一・竹田努・都丸成示・杉田昭栄 2012「週齢査定によるイノシシ *Sus scrofa* の出生時期の推定」『哺乳類科学』52（2）、pp.185-191、日本哺乳類学会

島根県教育委員会 1988『西川津遺跡発掘調査報告書 IV』

島根県教育委員会 1989『西川津遺跡発掘調査報告書 V』

仙波輝彦 1959・1960「長崎県壱岐島中期及び後期弥生式時代遺跡出土哺乳類動物骨の研究」『人類学研究』VI 4・VII 1～2、pp.190-233

辻知香・横山真弓 2014「ニホンイノシシの年齢査定方法」『兵庫ワイルドライフモノグラフ』6-5、pp.59-70

寺沢薫編 1979『昭和 53 年度唐古・鍵遺跡第４・５次発掘調査概報』田原本町教育委員会

冨田靖男・島地岩根 1979「納所遺跡より出土した動物遺体について」『納所遺跡-その自然環境と自然遺物-』pp.3-13、三重県教育委員会

中川毅人 2009「島根県西川津遺跡の狩猟活動」『物質文化』86、pp.39-48、物質文化研究会

新美倫子 1991「愛知県伊川津遺跡出土日本イノシシの年齢及び死亡時期査定について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 29 集、pp.123-148、国立歴史民俗博物館

西本豊弘 1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書 第 80 輯 pp.48-61、大分県教育委員会

西本豊弘 1992a「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡 II -弥生時代のブタ-』大分県文化財調査報告書 第 89 輯、pp.92-110、大分県教育委員会

西本豊弘 1992b「朝日遺跡の弥生時代のブタ」『朝日遺跡 II（自然科学編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 31 集、pp.213-229、財団法人愛知県埋蔵文化財センター

西本豊弘 2003「縄文時代のブタ飼育について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 集、pp.1-15、国立歴史民俗博物館

西本豊弘・石坂雅樹 2013「取掛西貝塚の動物遺体について」『取掛西貝塚（５）I』、pp.68-80、船橋市教育委員会

西本豊弘・姉崎智子 1999「No.1-A 地点の動物遺体」『池子遺跡群 X』かながわ考古学財団

林謙作・西本豊弘 1986「縄文晩期～弥生前期の狩猟と儀礼」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼』pp.26-42、昭和 60 年度科学研究費補助金（一般 A）研究成果報告書（研究代表者 大井晴男）

林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 1977「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」『日本獣醫學雑誌』39（２）、pp.165-174、日本獣医学会

春成秀爾 1993「豚の下顎骨懸架」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集、国立歴史民俗博物館

藤岡謙二郎 1943「自然遺物類」『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告第十六冊、pp.221-231、図版 104

船橋市教育委員会 2021『取掛西貝塚総括報告書-東京湾東岸部最古の貝塚-』（第１分冊）（第２分冊）

松井章 1986「亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体の分析」『亀井（その２）』本文編、pp.423-484、大阪府教育委員会・大阪文化財センター

松井章・宮路淳子 2000「坪井・大福遺跡から出土した動物遺存体」『坪井・大福遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第 75 冊、pp.194-212、奈良県立橿原考古学研究所

宮路淳子 2019「古墳時代におけるウシ飼養に関する予備的研究」『奈良女子大学文学部研究教育年報』16、pp.1-11、奈良女子大学

渡辺誠 1982「動物遺体１．哺乳類」『菜畑（分析・考察編）』pp.399-419、唐津市教育委員会

ダイアモンド、ジャレド 2000『銃・病原菌・鉄』 草思社

フランシス、リチャード・C 2019『家畜化という進化 人間はいかに動物を変えたか』 白揚社

Boitani, L. and Mattei L. 1992. Aging wild boar (*Sus scrofa*) by tooth eruption. In: Spitz, F., Janeau, G., Gonzales, G. and Aulagnier, S. (eds)pp.419-421. Ongules/ Ungulates 91, Toulouse-Paris

Matschke, G. H. 1967. Aging European wild hogs by dentition. J Wildl Manage 31 (1); 109-113.

Wilson,B., Grigson, C.,Payne, S.1982. Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites. Oxford, Archaeological Journal, 140(1), p. 391

弥生時代の十進法

武　末　純　一

Ⅰ．はじめに

弥生時代に質量をはかるためのおもり（権）が存在し、しかも天秤権と棹秤権の二者があることは、何人かの論考ですでに明らかとなっている。筆者は先般、福岡県春日市須玖遺跡群から出た天秤権８点（図１－１～８。以下、須玖権）を紹介して、その上限が中期前半までさかのぼり、基準質量が 11.365 ｇで茶戸里体系に属すると共に、３倍・６倍・20 倍・30 倍の権と１倍の可能性を持つ権（図１－８）があって１＋３＋６で 10 になることから、弥生時代での十進法の使用を指摘した（武末純一 2020・2021）。この十進法でも２倍の権が必要であり、実際に石川県小松市八日市地方遺跡で２倍権が存在するため、１＋２＋３＋６＝12 で十二進法との考えも提起されようが、福岡県筑前町東小田峯遺跡で５倍権が出ており、須玖権では 20 倍・30 倍の権も存在するのに、24 倍や 36 倍・72 倍・144 倍の権は無いから、十二進法は棄却される。

その後、須玖岡本遺跡の整理作業中に、10 倍の天秤権とみられる石製品（図１－９）が判明したため紹介すると共に、十進法が弥生時代中期前半までさかのぼって用いられた可能性がさらに高くなったと述べた（井上義也・武末純一 2021）。ただしその際には紙数の関係で傍証資料の提示までには至らなかった。本稿ではあらためて弥生時代の十進法使用の傍証資料を提示し、その可能性を補強したい。

Ⅱ．方保田東原遺跡出土の壺

古墳時代中期の十進法につながる論考は、小田富士雄氏が大分県臼杵市下山古墳の鉄鋌 30 枚を紹介する中で、滋賀県新開第２号墳で 10 枚が撚紐で結ばれた例や、韓国釜山市東萊福泉洞第１号墳で 10 枚１組の鉄鋌 10 組（100 枚）が南側の三面壁ぞいに「コ」字形に１列で並べられた例を指摘した（小田富士雄 1974）。その後、宋桂鉉氏はそうした鉄鋌の前段階に位置する大型板状鉄斧副葬例として、原三国時代後期の蔚山下垈２号墓 10 枚、同 76 号墓 10 枚や金海良洞里 162 号墓 40 枚、三国時代前期の金海良洞里 235 号墓 30 枚、同 280 号墓 10 枚などを挙げた（宋桂鉉 1995）。また、近年では古墳時代前期

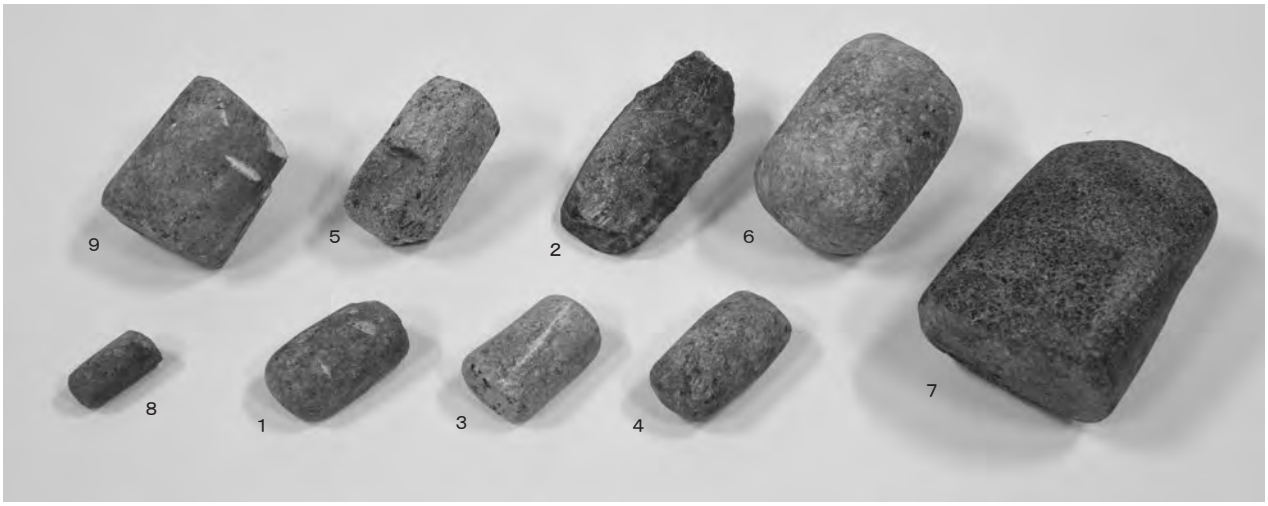


図１　須玖遺跡群の天秤権　［番号は井上・武末 2021 の図番号］

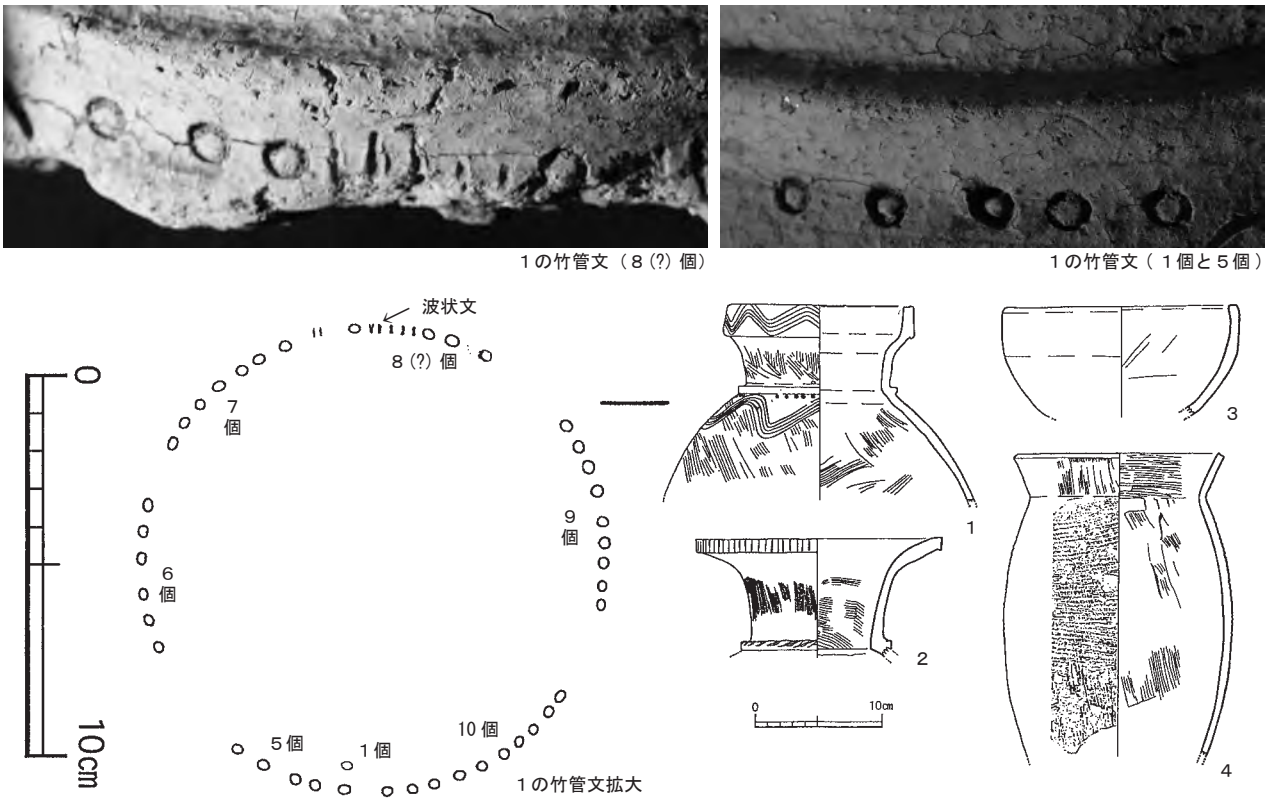


図２　方保田東原遺跡 146 番地 13 号住居跡出土土器

後半に併行する韓国忠清北道忠州市弾琴台土城の水槽遺構で、これまでの鉄鋌とは異なった分厚い細長方形（長さ 25.8 ～ 34.2 ㎝、幅 3.6 ～ 5.0 ㎝、厚さ 1.1 ～ 2.2 ㎝）の弾琴台型鉄鋌が５枚１組で８組 40 点発掘された（中原文化財研究院 2010）。この弾琴台型鉄鋌を素材に作られた板状鉄斧が京都府椿井大塚山古墳に存在するとされ（李東冠 2018）、十進法は古墳時代前期までさかのぼる。

弥生時代の資料でまず取り上げるべきは熊本県山鹿市方保田東原遺跡 146 番地 13 号住居跡出土の複合口縁壺（図２－１）である（熊本県山鹿市 2007）。

この壺は上半部しか残っていないが、頸部つけねの突帯の直下に竹管文（小円文）を、その下方に描かれた波状文（５本１組の櫛描）の頂点と頂点の間、６個所に描く。しかも上から見たときこの竹管文の個数は、５個から始まって時計回りに、６個、７個、８（？）個、９個、10 個となり、元の５個に戻る。さらに本資料を 2021 年７月６日に実見観察した際には、５個部分の向かって一番右側の竹管文と突帯を挟んで直上の位置に、竹管文とみられる小円文を１個確認した。また、８（？）個部分は、破損と竹管文施文後に重なった波状文の終点部分のために、竹管文は４個しか確認できないが、あと４個は十分に存在できる間隔であることも確認した。７個と９個に挟まれた竹管文の個数の順番からも、ここに８個存在したことは疑いない。

新たに確認した突帯部分より上の１個は、５個の始まりである一番右の１個の上にあるから、この竹管文 46 個中でも、始まりの１である。１から始めて２，３，４を省略し、下の５へ移動して順次６，７，８，９，10 を描いたといえよう。10 で終わるため、十進法に則っていることは間違いない。また１～５と６～ 10 がそれぞれまとまって、５が１小単位になることも考えられる。

報告書では、この土器が出た 13 号住居跡は、布留式系甕が出た 11 号住居跡を切ると記述する[1)]。しかし、共伴の土器（図２－２～４）は弥生時代後期終末に位置付けて差し支えない土器群で、今回詳述した複合口縁壺も拡張部が直立に近いが弥生時代後期終末でよいとみられる。11 号住居跡の土器群と比較しても、半球形鉢は 11 号例のほうが低平で、13 号例よりも後出する。重複関係の見直しが必要だが、13 号住居跡の土器群は弥生時代後期終末に位置付けてよく、この時期に十進法が存在したことを証明する。

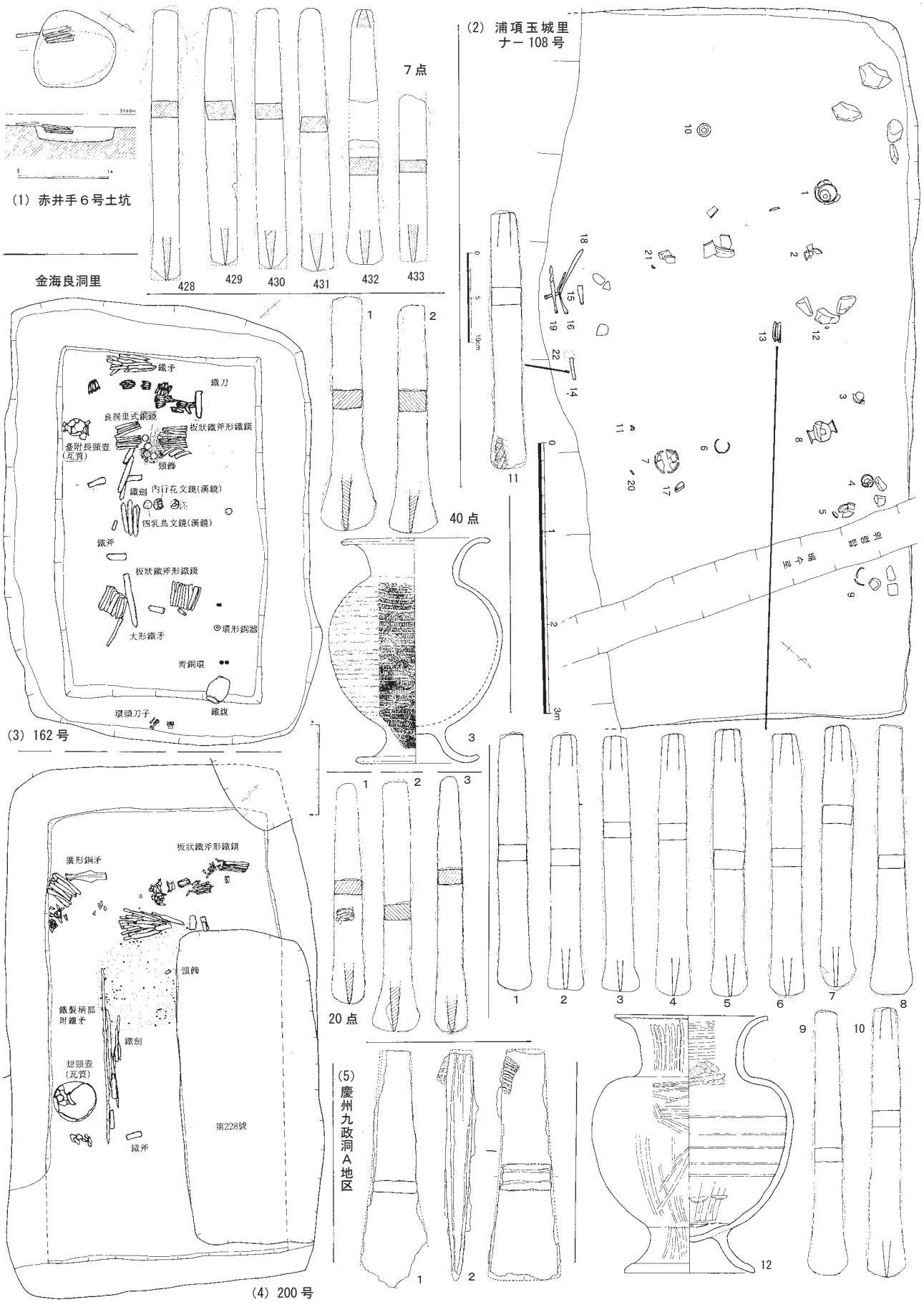


図３　日韓の棒状鉄斧〔(1) ～ (4)〕と慶州九政洞遺跡 A 地区の板状鉄斧〔(5)〕

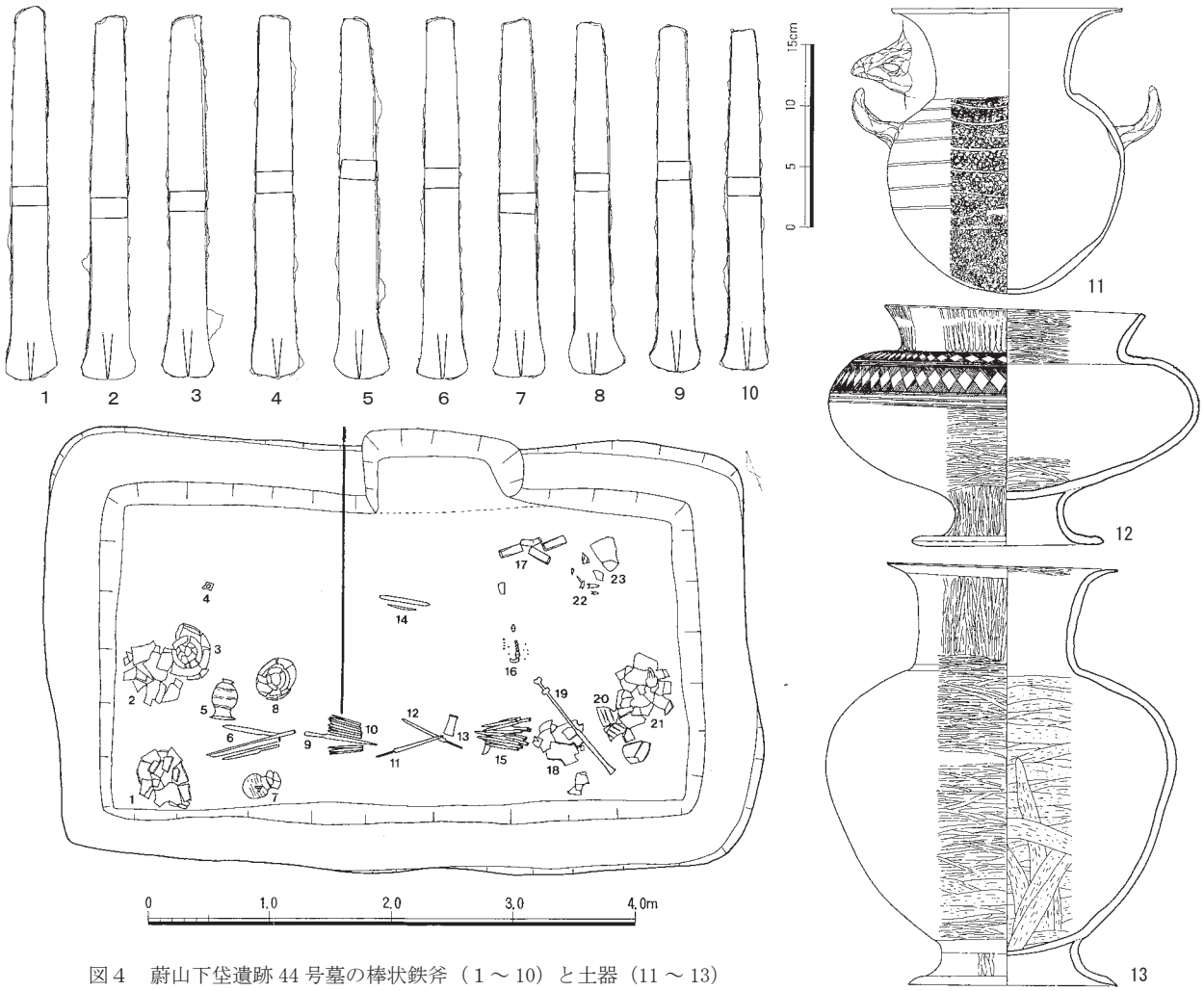


図４　蔚山下垈遺跡 44 号墓の棒状鉄斧（１～ 10）と土器（11 ～ 13）

Ⅲ．日韓の棒状鉄斧と大型板状鉄斧

次は鉄鋌と同じように鉄素材とみられる大型の棒状鉄斧と板状鉄斧の様相である[2)]。宋桂鉉 1995 の段階では棒状鉄斧と大型板状鉄斧を区別してないが、形態が異なる[3)] ため分離して検討する。

（１）棒状鉄斧

まず、須玖遺跡群の一角に位置する赤井手遺跡は鉄器製作地区として有名で、報告書（春日市 1980）ではＡ地点 11 区の弥生時代後期終末の 57 号住居跡を切る平面円形の６号土坑から７点の棒状鉄斧が出たが、「図示可能なのは６本である」という（図３―(1)、番号は報告書と一致する）。日韓の棒状鉄斧の多くは長さ 24 ～ 30 ㎝の大型品で、赤井手例も長さが 28.4 ～ 29.7 ㎝の間にある。本例を再検討した境靖紀氏は 57 号住居跡の土器を、「近年の研究から言えば弥生時代終末ではなく、古墳時代初頭に位置付けられる」と指摘した（境靖紀 2004）。

韓半島の棒状鉄斧は嶺南地域の特産品で、原三国時代後期に盛行する。

嶺南埋蔵文化財研究院が発掘して報告書が刊行された浦項玉城里ナ地区 108 号木槨墓は、墓壙の長さ８ｍ、残存幅 3.38 ｍ、深さ 0.3 ｍで（図３－(2)）、墓壙東長壁は後代に削平されて流失し、中央部床面には火を受けたような焼土の痕跡範囲（残存長 1.8 ｍ、幅 2.4 ｍ）が確認された（嶺南埋蔵文化財研究院・浦項市 1998）。出土土器から原三国時代後期に属する。棒状鉄斧は中央西側に積み重ねられた状態で 10 点（図３－(2)―１～ 10）が出土した（出土位置 13）。全長 28.1 ～ 29.4㎝で刃部はやや扇状に広がるが、縦断面が刃端部で「コ」字形になり、刃がつかず、報告書では副葬用とする。さらに中央東側でも削平部分近くで棒状鉄斧１点（図３－(2)―11）が出土し（出土位置 14）、遺構がほとんど流失した点からみて、10 点で１群だった可能性がある[4)]。

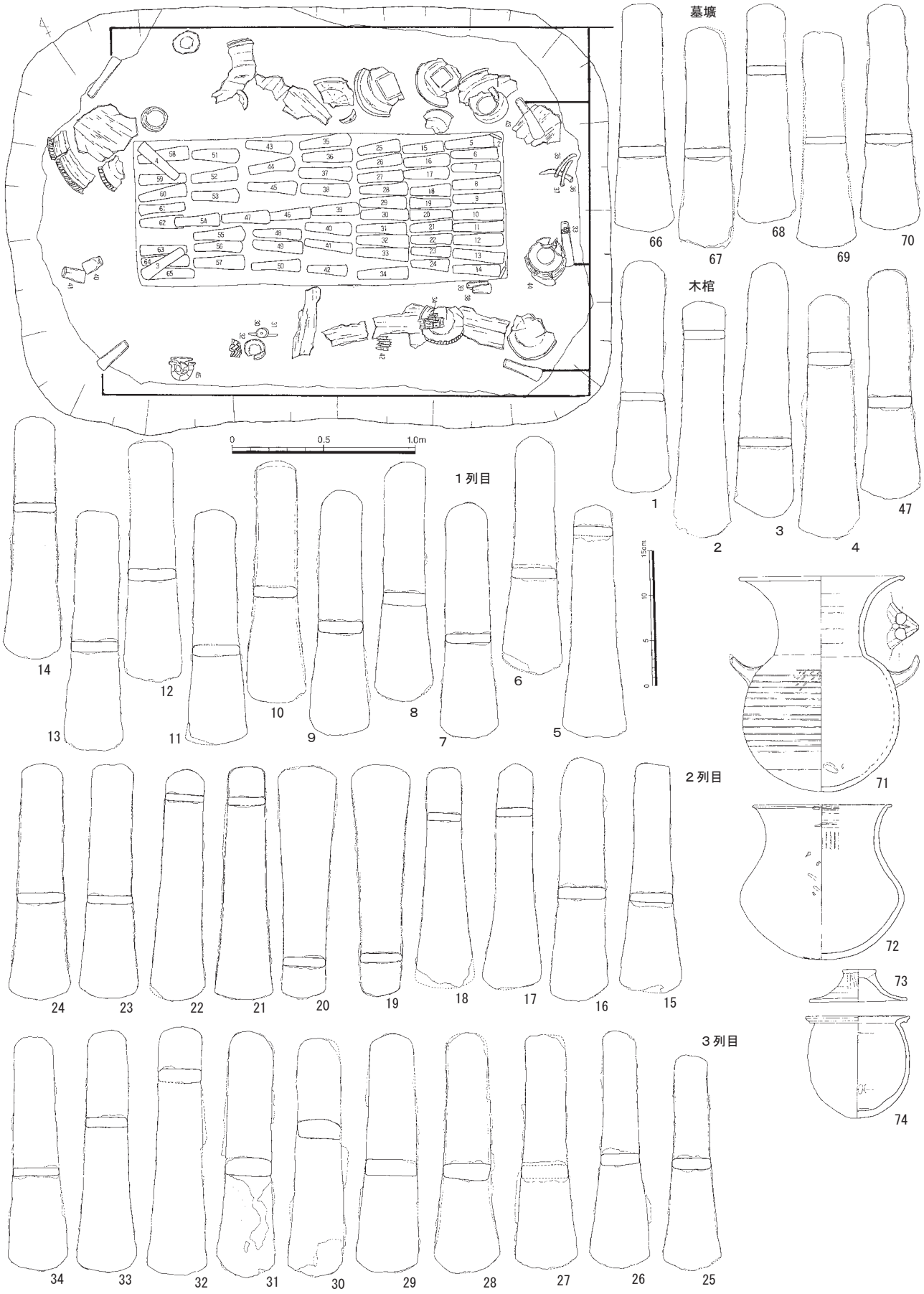


図５　慶州舎羅里遺跡 130 号墓の板状鉄斧（１～ 34、47、66 ～ 70）と土器（71 ～ 74）

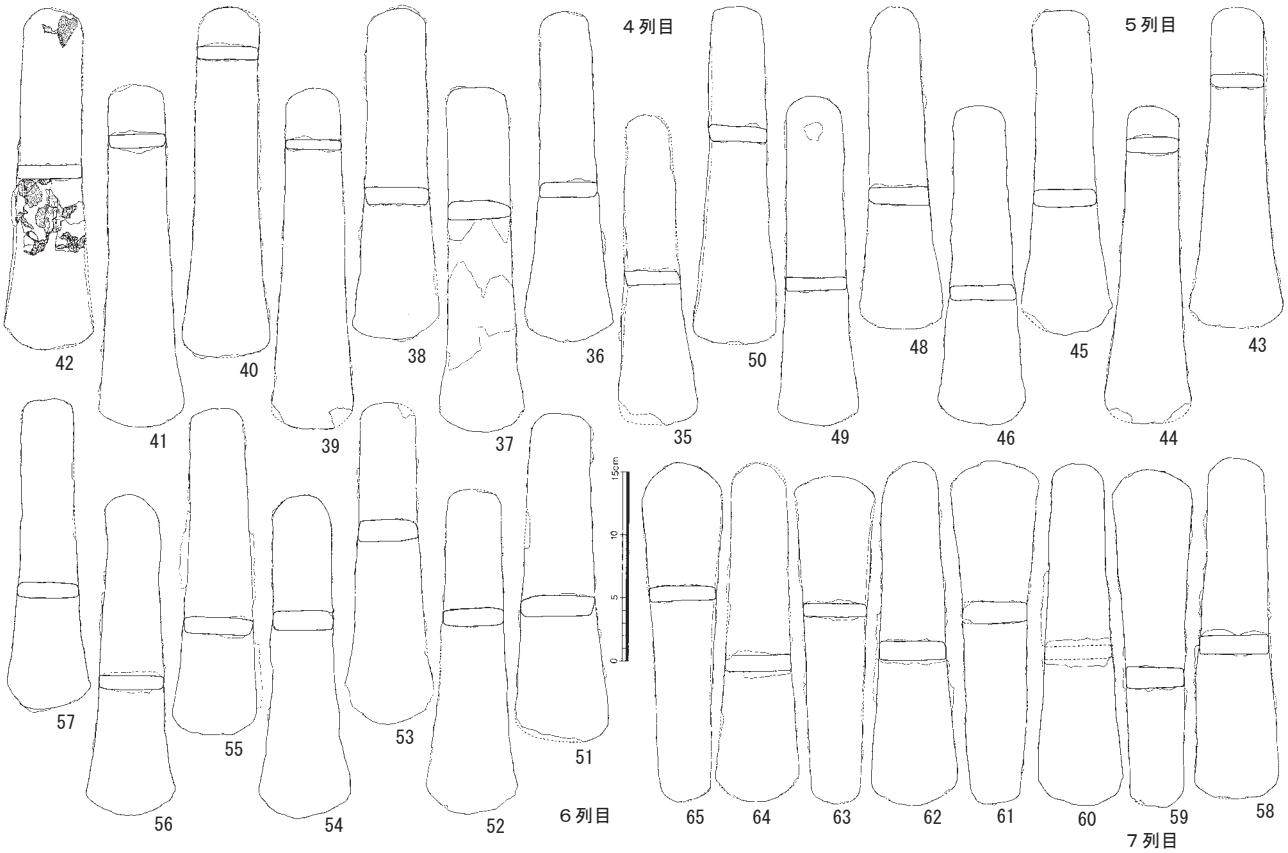


図６　慶州舎羅里遺跡 130 号墓の板状鉄斧（35 ～ 46、48 ～ 65）

釜山大学校博物館が発掘して報告書が刊行された蔚山下垈 44 号木槨墓は墓壙の長さ 5.8 m、幅 3.5 m、深さ 0.6 mで、出土土器から原三国時代後期に属する。棒状鉄斧は木槨南側中央(出土位置 10) に一まとまりで出土し(図４－１～ 10)、全長は 27.8 ～ 30.6cm の間に収まり、刃部はやや扇状に広がる（釜山大博 1997)。

また正式報告書は未刊だが、出土遺物の一部と出土状態図画公表された金海良洞里遺跡では、図示された土器から原三国時代後期に属する棒状鉄斧が、162 号木槨墓で 40 点、200 号木槨墓で 20 点、いずれも集積された状態で出土した（東義大博 2000)。これら３遺跡４例の中で金海良洞里 162 号墓は原三国時代後期初頭で最も古く、図示された７点からの算出値と写真説明に記載された棒状鉄斧の全長は 25.3 ～ 29.3cm で刃部が扇形に大きく広がり、一方 200 号墓４点は 24.4 ～ 28.2cm で刃部の広がりは小さい。

これらに対して原三国時代前期新段階（弥生時代後期中ごろに併行）の慶州朝陽洞 60 号木槨墓では棒状鉄斧が、木槨の両短壁に各３点（四隅と両短壁中央に１点ずつ）と木槨内部の中央左右に並んで１点ずつ置かれた状態で、合計８点出土した[5)]。棒状鉄斧が主体部内に広く配列された点は上記の集積例と異なり、棒状鉄斧の全長も 22.4 ～ 25.8cm で金海良洞里 162 号墓例よりさらに短くて刃部はあまり広がらない。棒状鉄斧自体は、原三国時代前期古段階の茶戸里１号木棺墓で木柄に装着されて刃部が全く広がらない例（長さ 37.0cm）があるが（国立中央博物館 2012)、今のところ 10 点１組の普遍化は原三国時代後期からで、原三国時代前期にはない。

こうした点から考えると、赤井手遺跡の棒状鉄斧は全長が蔚山下垈 44 号墓例や浦項玉城里ナ―108 号墓例と近似するから、埋納された時期は古墳時代前期初頭としても、10 点１組で原三国時代後期新段階に併行する弥生時代後期末に持ち込まれた可能性、そしてそのまま埋納後に削平で一部が失われたか、一部は鉄器製作に使用された後に埋納された可能性があるといえよう。

（２）大型板状鉄斧

大型板状鉄斧の場合、まず韓国の原三国時代後期の事例で、宋桂鉉氏が取り上げた蔚山下垈２号墓および 76 号墓は正式報告書が未刊だが、公表された一覧表と写真・

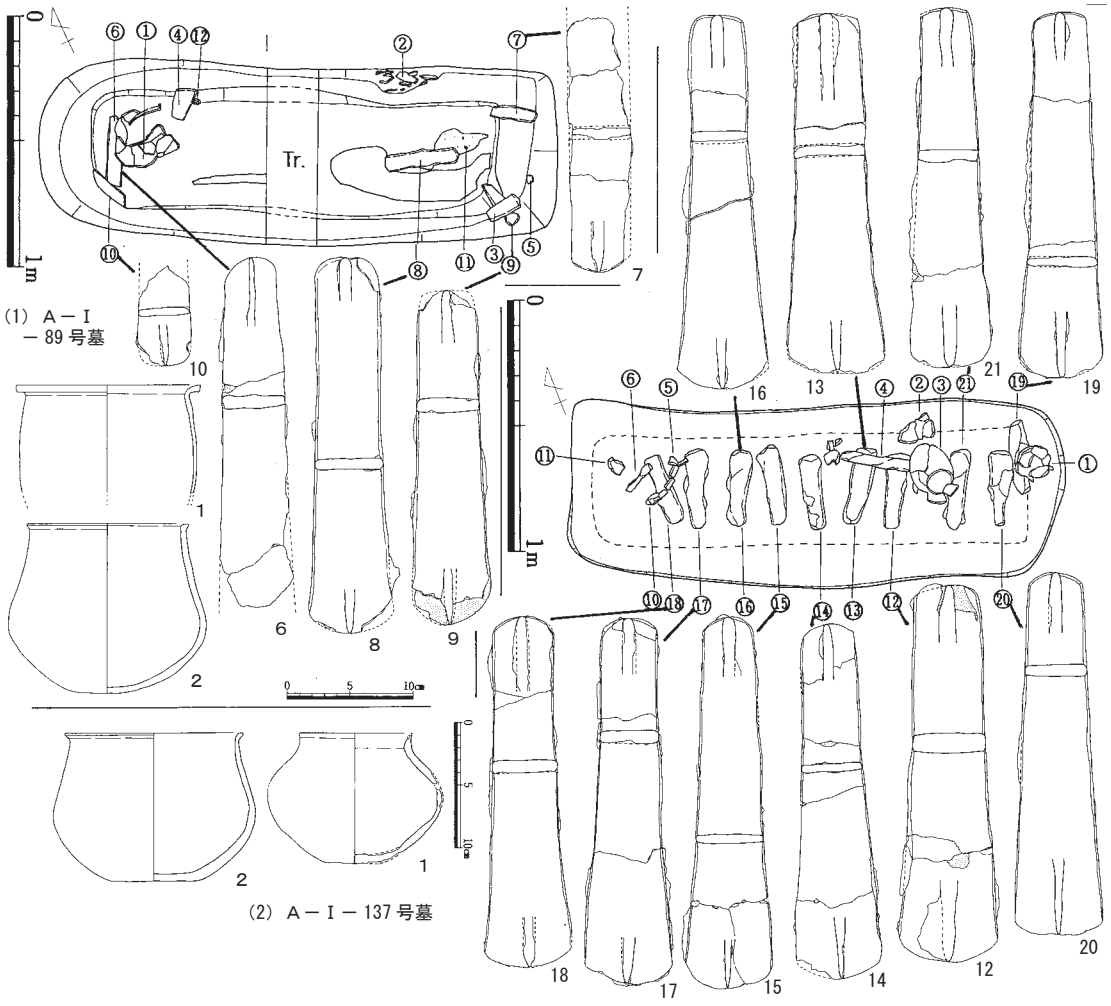


図７　慶山林堂遺跡の板状鉄斧と土器（遺物番号と出土状態図の番号は一致する）

記述からいずれも 10 点１組で副葬されたと分かる[6]。

一方、嶺南文化財研究院が発掘して報告書が刊行された慶州舎羅里 130 号木棺墓（嶺南文化財研究院 2001）は、原三国時代前期中段階（弥生時代後期前半にほぼ併行）の時期で、大型板状鉄斧 70 点（平均値は全長 26.0 ㎝、刃部幅 6.6 ㎝、基部幅 4.3 ㎝で、厚さは概ね 0.8 ～ 1.2 ㎝）が出土し、木棺内部床面には７列で 61 点が敷かれていた（図５・６）。その配置様相は、まず長さ 3.32 ｍ、幅 2.30 ｍ、深さ 1.00 ｍの墓壙の四隅で１点ずつの４点と、東短壁中央で１点の計５点（66 ～ 70）が出土した。次に木棺内部の７列 61 点は、東の頭部側から始めて１列目 10 点（５～ 14）、２列目 10 点（15 ～ 24）、３列目 10 点（25 ～ 34）、４列目８点（35 ～ 42）、５列目７点（43 ～ 46・48 ～ 50）、６列目７点（51 ～ 57）、５列目と６列目の間に１点（47）、７列目に８点（58 ～ 65）が、それぞれ床面に長軸方向で並べられた。さらに４点を木棺四隅に１点ずつ刃部を下にして立てるが（１～４）、西の足部側２点は中に倒れ込む。注目されるのは、木棺床面に並べられた 61 点が、刃部と基部を交互にする７列目を除くと原則的に刃部を東に向ける中で、２列目の中央２点（19・20）だけは刃部を西に向けてその左右の各４点は刃部東向きだから、中央２点の間に境ができて５点１組の単位が２組となる点である。そうした目で見ると、１列目の北から５点目（９）と南から５点目（10）の間の空白がほかの鉄斧間よりも広く、やはり５点１組の単位が２組となる。また墓壙も５点だから、この木棺墓の 70 点は５点１組で取り扱われたとみられる。そう考えると、５列目と６列目の間で孤立する１点（47）は５点１組の中で、最後に木棺四隅に４点を立てる際に置かれた可能性が高い。忠州弾琴台土城で見られた５点１組の取り扱いがこの時期まで遡り、十進法の使用を示す。

慶州舎羅里 130 号木棺墓より古い事例には慶山林堂遺跡Ａ地区・Ａ―Ⅰ地区[7]の大型板状鉄斧がある（韓国文化財保護財団 1998）。ここでは原三国時代前期古段階

（ほぼ弥生時代中期後半併行）の木棺墓群が多く発掘され、A―Ⅰ地区89号墓で５点、A―Ⅰ地区137号墓では10点が出土した（図７）。いずれも遺構に欠失部はない。A－Ⅰ地区89号墓例（図７－(1)）のうち４点は墓壙の四隅に１点ずつ斜めに立つか倒れており、残りの１点（図７－(1)－８）は墓壙床面東側で、刃部を西に向けて長軸方向に置かれた。A－Ⅰ地区137号墓例（図７－(2)）は墓壙の床面全体に、刃部を北に向け長軸に直交する形で頭部から足部まで10点を敷く。

このような５点や10点の副葬例は十進法の使用を推定させるが、ここでは５の倍数ばかりではなく、A地区11号木棺墓で３点、A―Ⅰ地区88号墓で４点、A―Ⅰ地区91号墓で２点、A―Ⅰ地区96号墓で３点、A―Ⅰ地区147号墓で１点が副葬された。これらはいずれも遺構は欠失せず、数は確定である。それらは、A地区11号では南長壁に沿って３点がまとめて並べられた集積の状態、A―Ⅰ地区88号では４点を床面２か所に長軸方向で２点ずつ置き、A―Ⅰ地区91号では２点を床面足側左右２か所に長軸方向で１点ずつ置く。一方、A―Ⅰ地区96号は３点を等間隔で長軸と直交して床面に敷く。A―Ⅰ地区147号では１点が北西長壁に沿って隅付近に置かれた。このほか、A―Ⅰ地区74号墓で16点、A―Ⅰ地区139号墓で15点が出土したが、いずれも西短壁と北長壁の西側が失われているため、本来の副葬数はさらに増えるとみられ、確定しない。

ともあれ、１点、２点、３点、４点、５点、10点の例があり、慶州朝暘洞の８点の例も勘案すると、十進法のほかに二進法（２の累乗倍）も使用された可能性があるが、この点は今後の検討に譲りたい。また、床面に敷きならべる場合と、一まとめにする場合があり、原三国時代後期の棒状鉄斧と大型板状鉄斧の取り扱いも併せて考えると、原三国時代を通じてこの二者が共存した。

これらより遡って十進法を示す事例はないが、鉄器時代後半（弥生時代中期前半併行）の慶州九政洞A地区出土資料中の大型板状鉄斧が注目される。慶州九政洞A地区出土資料は木棺墓と推測される遺構から出土した不時発見資料で、２回に渡って「慶州九政里」（金元龍1952）および「慶州坪里」（金載元1964）の名称で報告されたが、両者の遺物の一部が接合するため本来は同一遺構出土品である（崔鍾圭1991）。大型板状鉄斧は金元龍1952では「鍬形鉄器」の名称で３点が報告された。1982年の再整理で作成された図面では２点が図示され、そのうちの１点（図３－(5)－２）は、図面から判断すると、３点が集積された状態と考えられる[8)]。この時期から集積副葬の取り扱いが存在したことになり、５点や10点１組の可能性も排除できなくなる。

日本列島の大型板状鉄斧は弥生時代中期後半までは確実に遡り、長崎県小値賀町神ノ埼遺跡20号石棺出土例のように中期前半とみられる例もある（小値賀町1984）[9)]。十進法での取り扱いを示す例そのものはまだないが、５点や10点１組で搬入された可能性は十分にあろう。

Ⅳ．おわりに

以上、須玖権に端を発した弥生時代十進法の傍証資料を述べてきた。弥生時代後期終末ではあるが、１・５～10の数を表現した方保田東原遺跡の壺は、強力な証拠となろう。

一方、韓半島の棒状鉄斧や大型板状鉄斧関連資料はあくまでも必要条件で、今後日本列島で弥生中期前半まで遡らせるためには更に多くの検証が必要なことは、筆者も十分承知している。

また、人間の手の指が右手５本・左手５本、合わせて10本だから、十進法は人間の出現と共に存在し得るとの声もあるだろう。もちろんそうした可能性はあるが、何の証拠もなしにそれを言うのではなく、実際の物質的資料で一つ一つ証明することこそが考古学では重要であると筆者は考えている。

本稿を成すに当たっては、下記の方々にご教示・ご協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。

崔鍾圭　金武重　趙晟元　井上義也　山崎悠郁子　宮崎歩　古澤義久（順不同　敬称略）

【註記】

１）報告書では、11号住居跡の項で「南の13号住居跡に切られている」とあり、13号住居跡の項では「北にある11号住居跡を切っており」と述べる（熊本県山鹿市2007　81・83頁）。

２）『金海良洞里古墳文化』（東義大学校博物館2000）では、棒状鉄斧と大型板状鉄斧を一括して「板状鉄斧形鉄鋌」と記

述する。これらの鉄斧を鉄素材と認識したためであろう。

3） 棒状鉄斧は現在のところ全長が 20 ㎝を超える大型品ばかりだが、板状鉄斧には全長 20 ㎝以下の小型品もあるため「大型」を冠して区別する。大型板状鉄斧の全長と幅の比は１：５～１：６程度で厚さが 1.2 ㎝をほとんど超えないのに対して、棒状鉄斧は全長に対する幅の比が１:10 ～１:13 で、幅は大型板状鉄斧の 1/2 以下だが厚さが 1.5 ～ 2.1 ㎝と分厚いため、両者は明確に分離できる。

4） 報告書ですでにその可能性が指摘された。

5） 報告書（国立慶州博物館 2003）では、「木槨の四隅にそれぞれ１点ずつ板状鉄斧が置かれており」と述べるが、発掘者の崔鍾圭に問い合わせたところ、両短壁に３点ずつとの教示を得た。出土状態図で見ても、四隅と両短壁中央に各１点の合計６点が置かれたとみられる。

6） 釜山大学校博物館 1997 では２基とも一覧表の主要出土遺物の項に「板状鉄斧 10」とあり、考察の板状鉄斧の項では「柄が着装されたり個別的に出土する場合はなく、全て 10 点単位で木槨の床に敷くかまとまって出土する」と述べ、２号墓と 76 号墓の出土状態写真を見ても床に敷いてはいない。

7） 慶山林堂遺跡は韓国文化財保護財団が、1995 年の１次発掘調査でＡ地区を発掘し、1996 年～ 1997 年の２次発掘調査でＡ地区に連結する商業地区をＡ―Ⅰ地区として発掘したため、Ａ地区とＡ－Ⅰ地区は連接するが別個の地区である。

8） 崔鍾圭の博士論文では「断面の観察で何度も鍛接したことが分かった」（崔鍾圭 1993）とあるが、今回問い合わせたところ筆者の判断通り集積でよいとの教示を得た。

9） この大型板状鉄斧の時期には論難もあるが、形態的には慶州九政洞Ａ地区出土例に近似するため、中期前半までさかのぼる可能性は十分にある。

【引用参考文献】

井上義也・武末純一 2021「須玖岡本遺跡岡本地区５次調査の天秤権」『古文化談叢』第 87 集

小田富士雄 1974「大分県下山古墳出土の鉄鋌」『古文化談叢』第２集（後に「大分県・下山古墳出土の鉄鋌」の題で小田富士雄 1979『九州考古学研究　古墳時代篇』に所収）

小値賀町教育委員会 1984『神ノ埼遺跡』小値賀町文化財調査報告書第４集

春日市教育委員会 1980『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第６集

熊本県山鹿市教育委員会 2007『方保田東原遺跡（８）』山鹿市文化財調査報告書第４集

境靖紀 2004「弥生時代の鍛冶工房の研究―福岡県春日市赤井手遺跡の再検討―」『たたら研究』第 44 号

武末純一 2020「日韓の権」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告書　論考編）』「新・日韓交渉の考古学―弥生時代―」研究会・「新・韓日交渉の考古学―青銅器～原三国時代」研究会

武末純一 2021「弥生時代の天秤権（分銅）」『西日本文化』498 号

筑前町教育委員会 2020『東小田峯遺跡Ⅱ』筑前町文化財調査報告書第 25 集

韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅰ） Ａ～Ｂ地区古墳群』学術調査報告第５冊 （本文）および（図面・図版）

国立慶州博物館 2003『慶州朝暘洞遺蹟Ⅱ―本文―』国立慶州博物館学術調査報告第 13 冊

国立中央博物館 2012『昌原茶戸里―１～７次発掘調査総合報告書―』国立中央博物館古蹟調査報告第 41 冊

中原文化財研究院 2010『忠州弾琴台土城１―2007 年度発掘調査報告―』調査報告書叢書第 81 冊

東義大学校博物館 2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書

釜山大学校博物館 1997『蔚山下垈遺蹟―古墳Ⅰ』釜山大学校博物館研究叢書第 20 輯

嶺南埋蔵文化財研究院・浦項市 1998『浦項玉城里古墳群Ⅱ―ナ地区―』嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告第 14 冊

嶺南文化財研究院 2001『慶州舎羅里遺蹟Ⅱ―木棺墓，住居址―』嶺南文化財研究院学術調査報告第 32 冊

金元龍 1952「慶州九政里出土金石併用期遺物について」『歴史学報』第１輯

金載元 1964「扶余・慶州・燕岐出土銅製遺物」『震檀学報』25・6・7 合併号

宋桂鉉 1995「洛東江流域の古代鉄生産」『加耶諸国の鉄』仁済大学校加耶文化研究所編

崔鍾圭 1991「九政洞遺跡」『日韓交渉の考古学　弥生時代編』六興出版

崔鍾圭 1993『三韓社会についての考古学的研究―土器を中心に―』東国大学校大学院博士学位論文

李東冠 2018「古代鉄製農工具からみた韓日交渉」『日韓交渉の考古学―古墳時代―（最終報告書　論考編）』

【図出典一覧】

図１：武末撮影／図２：武末撮影および熊本県山鹿市 2007 より作成／図３：春日市 1980、嶺南埋蔵文化財研究院 1998、東義大学校博物館 2000／図４：釜山大学校博物館 1997／図５・図６：嶺南文化財研究院 2001／図７：韓国文化財保護財団 1998

（2021 年８月 21 日稿了）

【補記】

脱稿後に須玖岡本遺跡岡本地区５次調査区では、石斧を転用した天秤権も出ていたことが明らかになった。この資料については井上・武末 2021 の補記でふれたが、再説すると、石材はドレライト、質量 354.2g で、茶戸里体系の 30 倍権となり、誤差は約 3.9% である。

（2021 年 11 月 29 日追記）

庄内式の年代再考

岸　本　直　文

Ⅰ．はじめに

2014 年に「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」、2015 年に「炭素 14 年代の検証と倭国形成の歴史像」を書いた（〔岸本 2014･2015〕、あわせて前稿とする）。重要と考える点を列挙する。

（0）1990 年代の三角縁神獣鏡研究により、箸墓古墳は３世紀中頃に特定され、卑弥呼墓と考えることができる〔岸本 2004〕。邪馬台国の所在地は畿内ヤマトで決着し、〈魏志倭人伝〉に見える邪馬台国と、前方後円墳と三角縁神獣鏡の全国展開から考えられてきた倭王権は直結し、連続的発展として理解できる。前稿での議論はこれを前提とした。また年代の定点として、箸墓古墳の埋葬時期は 250 年頃であるとした[1)]。

（1）１世紀に、のちの畿内がまとまる広域地域圏が形成された（令制前であるが「畿内」を用いる）。

（2）これは西日本で連動的に進む広域地域圏形成の一環で、こうした地域統合の急速な進展と、諸地域のつながりの形成が弥生時代後期の本質である。

（3）弥生時代後期に急速に社会が変化する要因は鉄器化にあり、安定的に鉄素材を入手するための地域主体を生み出す動きと考えられる。

（4）３世紀の〈魏志倭人伝〉に見える女王の都する倭国本拠地である邪馬台国は、１世紀に畿内が統合されて生まれた国と考えてよいだろう。魏がこれを「邪馬台」国、『隋書』が「邪靡堆」国と表記するので、１世紀にできた国をヤマト国と表現することにした。

（5）ヤマト国は令制５ヶ国におよぶ規模をもち、平野部は広く開発が進めば第一次生産力は高く、弥生時代中期における青銅器生産や武器の発達、弥生時代後期における「見る銅鐸」の分布、中国鏡の出土から、その力量はかなりのものと考えられる。

（6）弥生時代後期の鉄器出土量は、全国で同程度のサンプリングができているわけでなく、畿内の出土量が少ないのは調査率が低いからである。また大型墓を生み出していないとされる点は、纒向石塚古墳に始る約 100 m の寺沢薫のいう纒向型前方後円墳がこれにあたり、ヤマト国王墓として創出されたと考えられる。

（7）奈良盆地を中心とする弥生時代後期から古墳時代前期前葉（布留１式）までの炭化物の C14 年代値から、当該期のおよその年代を考えた。

（8）とくに庄内式は２世紀にさかのぼり、纒向遺跡の形成はヤマト国の自律的な本拠地建設と考えられる。

（9）『後漢書』の倭国王帥升等の朝貢は、西日本規模で共通利害に対処するために諸国が連帯した倭国の成立を示し、特定の有力国の王が代表者としての倭国王になったのであろう。倭国成立を導いたのは、北部九州より東方における諸国形成と相互関係の構築であろう。

（10）庄内式期の事象から考えられてきたヤマト国の優位は２世紀後半にさかのぼり、その進行のなかで２世紀後葉に倭国乱が生じたと考える必要がある。

（11）卑弥呼共立による倭国乱の収束は（３世紀初頭と推測）、戦乱の持続を回避する休戦合意で、「共立」に示される関係諸国の合議・承認であるがゆえに、倭国王位は強固なものとなる。ヤマト国王墓である纒向型前方後円墳は、卑弥呼の在位した３世紀前半にも継続するので、ヤマト国王が倭国王になったのではなく、卑弥呼が共立された倭国王位は、諸国の王の上に立つ公権力としての地位で、これにより倭王権が確立する。

およそ以上の内容を主張した。これらのうち、（8）の庄内式の年代について久住猛雄氏に反論をいただいた（〔久住 2017･2019〕など。以下、敬称を略す）。久住の指摘は筆者の勉強不足を明らかにしたもので、厚く感謝申し上げる次第である。反論を受けて庄内式の開始年代

を見直し、２世紀第２四半期としたものを２世紀中頃に引き下げた〔岸本 2018〕。しかし、多くの論拠を挙げての反論に正面から応えていないので、対応できる範囲で、改めて本稿でこの問題を検討したい。

検討に際しては、久住の挙げる年代決定資料を中心に取り上げ、各事例について可能な限り具体的に詰めることにする。そして、各事例から年代を導く際には、無理のない順当な推定を心がけたい。

Ⅱ．畿内ヤマト国について

庄内式の議論の前に、(1) ～ (6) の畿内ヤマト国論にふれる。というのも、筆者の提起にほとんど反応がないからである。前稿を書いた動機として、弥生時代後期の畿内についての低い評価に対する違和感があった。庄内式の年代以前に、弥生時代後期の畿内におけるヤマト国形成と、倭の社会における優位性の獲得という筋道が、根本的に重要であると思っているのだが。

この点について、筆者の議論を俎上に上げたものではないが、若林邦彦の言及がある。若林は、弥生時代のなかで列島内の政治的中心は生まれておらず、とくに畿内社会に古墳時代の倭王権本拠地となるような成長は認められないと否定する〔若林 2018〕。しかし、１世紀に入り畿内の拠点集落の多くが継続しないこと、土器が畿内第Ⅴ様式に斉一化すること、この本質的と考える事象についての理解は示されない。

弥生時代研究者の立場からすれば、筆者の見方は事実誤認や理解不足の所産で、取るに足らないということであろうか。また、古くからある常識論で、そこに回帰しただけと受け取られているのかもしれない。

筆者としては、遺跡の動態をはじめ、畿内の弥生時代後期の事象を総合的に重ねあわせ、畿内社会の形成を精一杯考えたものである。考え方は既に明確に示しているので、ここでヤマト国形成論を改めて論ずることはしない。今後の議論を期待したいと思う。

Ⅲ．古墳時代前期の土器の年代

庄内式の前に、布留式の年代観を検討する。前稿では、卑弥呼墓である箸墓古墳の設計による黒塚古墳などの存在から、箸墓古墳も生前造墓で、箸墓古墳築造期が布留０式古相との調査成果にもとづき〔寺沢 2002〕、布留０式古相を３世紀第２四半期と考え、C14 年代値も問題ないと判断した。これに対し久住猛雄は、三角縁神獣鏡の副葬が布留０式古相にさかのぼり、それは、布留０式古相の年代すなわち箸墓古墳の築造が３世紀第３四半期に下がることを意味し、台与墓であるとする〔久住 2017〕。まずこの問題から始めたい。

（１）前期前葉の古墳編年と土器の対応

三角縁神獣鏡の編年を軸とした３世紀後半を中心とする前期古墳の編年と〔岸本 2011〕、これに出土土器の時期を記入したものを表にまとめる（表１）。三角縁神獣鏡の年代観から、前１期・前２期・前３期のおよその年代を考えてきた（表１左端）。しかしこれは、後述する岩本崇の年代観をもとに修正しなければならない。

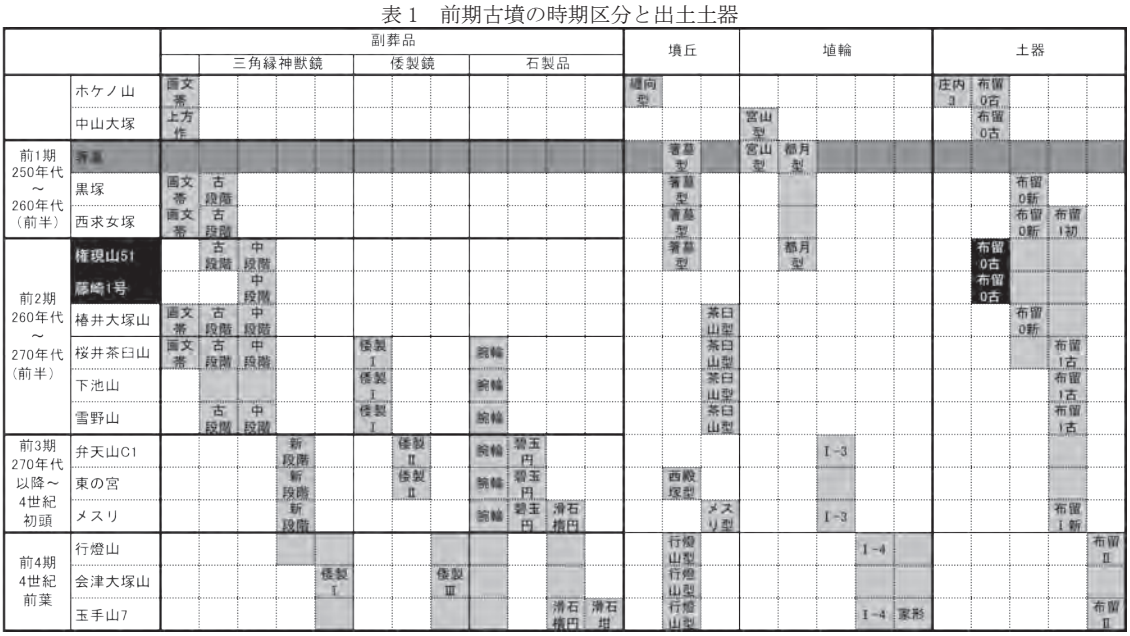
これらの前期古墳から出土した土器であるが、黒塚古墳が布留０式新相〔寺沢 2018〕、西求女塚古墳が「布留０式新段階の土器様相を含む布留１式の初頭」〔柳本 2004〕、椿井大塚山古墳が布留０式新相、桜井茶臼山古墳が布留１式である。椿井大塚山古墳の土器について、吹田直子は、後円部の二重口縁壺を山城Ⅸ期に位置づけ下田Ⅲ式併行とし〔吹田 2003〕、これは布留１式古相にあたり〔西村 2003〕、一方、前方部テラス出土の土器は山城Ⅷ期で、庄内式末（≒布留０式）とする。布留０式新相とみておくことにする。桜井茶臼山古墳の二重口縁壺について、久住は布留１式より古く、城島遺跡の資料もふまえ布留０式新相とみるが（〔久住 2019〕223・224頁）、君嶋俊行は布留１式とする〔君嶋 2005〕。検討できるものが二重口縁壺だけであり、椿井大塚山古墳同様、より古くなる可能性は残るであろう。

ホケノ山古墳については、庄内３式との見方と〔寺沢 2005〕、布留０式古相との見方がある〔橋本 2006〕。

以上、限られた範囲であるが、箸墓古墳築造期である布留０式古相に三角縁神獣鏡の副葬はほとんどなく、布留０式新相に黒塚古墳などで三角縁神獣鏡の副葬が始まり、少数の中段階鏡が入るがまだ倭製鏡や腕輪形石製品をともなわない椿井大塚山古墳が布留０式新相のなかで後続し、倭製鏡や腕輪形石製品が共伴する段階以降が布留１式とおよそ考えることができる。

なお黒塚古墳の報告書において、墳丘・石室・鏡・鉄鏃・

表１　前期古墳の時期区分と出土土器



土師器それぞれの型式組列が、古墳での組み合わせにおいて矛盾がないことを確認し、ホケノ山→中山大塚（箸墓）→黒塚→桜井茶臼山・下池山古墳という段階差が提示されている〔岡林・水野 2018〕。

以上のことから、布留０式新相と布留１式古相の境界は、椿井大塚山古墳や桜井茶臼山古墳の時期ないし直後と推測される。両墳にともなう中段階の三角縁神獣鏡は 260 年代とされ〔福永 2005〕、桜井茶臼山古墳は 270 年代と推測してきた。前稿では、C14 年代値においても、布留１式の年代値には「270 年のボトム」とよばれる下降部の値が含まれ、布留０式はボトムに向かうボトムより前に、布留１式はボトムを含むそこから後の上昇部に対応すると判断した。しかし、椿井大塚山古墳のもっとも新しい三角縁神獣鏡である（目録番号）80・81 鏡（N 群）と 105 鏡（J1 群）、桜井茶臼山古墳の同じく 80・81 鏡と 84 鏡（H1 群）は、岩本崇によれば 250 年代であるという（第３段階〔岩本 2020〕）。したがって、両古墳の時期を 250 年代から 260 年代とする必要がある。

（２）布留０式古相と三角縁神獣鏡の副葬

久住は、たつの市権現山 51 号墳と福岡市藤崎１号墳（藤崎の石棺）の土器が布留０式古相で、箸墓古墳築造期に 260 年代とされる中段階の三角縁神獣鏡が副葬されていることを指摘する。箸墓古墳の築造は 260 年代以降となり、古段階鏡からなる黒塚古墳は布留０式新相なので、権現山 51 号や藤崎１号墳より新しいことになる。

まず、権現山 51 号墳のもっとも新しい三角縁神獣鏡である 16・86 鏡、藤崎１号墳の５鏡（三角縁盤龍鏡）について、岩本崇は第２段階とし（〔岩本 2020〕66･67 頁表９）、240 年代に位置付けている（同上 172 頁表 24）。したがって、入手から死没・埋葬までの期間を見積もり、両古墳の年代は 250 年代にさかのぼりうる。

権現山 51 号墳の布留０式古相とされる土器は吉備型二重口縁壺であるが、久住は高橋護編年の Xb 期（≒久住ⅡA 期）、布留０式古相〔久住 2017〕とし、最近では布留０式古相から布留０式新相への過渡期とする（〔久住 2019〕222･223 頁）。確かに頸部が斜めに立ち上がり、その端部が二重口縁部より外方に張り出す点は高橋 Xb 期の資料に近いが、二重口縁部が緩やかに外反し端部が外折しない点、胴部上半に肩の張りがない点は、Xc 期（布留０式新相）に近いように思われる。

藤崎１号墳については、周溝下層土器は畿内第Ⅴ様式系（B 系統）が主体で、これに庄内式系の小型精製丸底壺、山陰系小型直口壺がともない、ⅡA 期とする。山陰系直口壺が、出雲の草田６期（≒布留０式）古相と併行する点も指摘する（〔久住 2017a〕21 頁）。

以上、とくに藤崎１号墳から、布留０式古相の年代が 250 年代におよぶとみておく必要がある。

（３）布留０式古相の年代

布留０式古相の年代をさらに検討する。まず京丹後市大田南５号墳を取り上げる。第１主体から、福永伸哉が 240 年代から 260 年代の年代を与えた三国期の規矩鏡群のなかでも、最初期にあたる青龍３年（235）の方格規

矩四神鏡が出土し、土器は布留０式古相とされる（〔寺沢 2005〕31 ～ 32 頁）。埋葬までの期間を考慮し、布留０式古相が 240 年代に１点をもつ可能性が高いだろう。

次に、同じく三国期の方格規矩鳥文鏡が出土した小郡市津古生掛古墳である。久住はこの鏡を 250 年代とする（〔久住 2019〕221 頁）。岩本崇はこれらの鏡群についても詳細に検討し、生掛鏡を華北系鏡群の第２段階に位置づけ（〔岩本 2020〕138･139 頁、144 頁図 65）、三角縁神獣鏡第２段階併行とし（同上 158 頁表 21）、240 年代を与えている（同上 172 頁表 24）。土器はⅡA（≒布留０式古相）である。埋葬までの期間を考慮すると、これも布留０式古相が 250 年代におよぶ可能性を示唆する。

前稿の検討に加え〔岸本 2015〕、ここまでの議論をふまえて布留０式古相の年代をまとめておく。布留０式古相の出土鏡の主体は、200 年前後の画文帯神獣鏡が主体となり、これに 220 年以降とされる斜縁二神二獣鏡が加わり〔實盛 2012〕、これらの鏡の年代から、布留０式古相は３世紀第２四半期頃と考えられる〔岸本 2015〕。235 年の紀年銘鏡をもつ大田南５号墳は、これを裏付ける重要な定点となる。津古生掛古墳がもっとも新しい鏡の副葬とみてきたが、これに藤崎１号墳の三角縁神獣鏡が加わり、両者の鏡を 240 年代とする岩本の見方をふまえ、埋葬までの期間を考慮し、布留０式古相と新相の交代期が 250 年代のなかにあると判断しておく。ただし、布留０式古相の中心は、240 年代を中心とする３世紀第２四半期側にあるだろう。

なお、二口かみあれた遺跡 SX208 の井戸枠（辺材型）について、最外年輪が 222 年で削られた辺材部の推定 36 年を加算した 258 年頃の伐採が考えられている。堀大介は、土器は加賀の白江２式ないし３式に位置づけられ、布留０式に併行し、堀の推定年代 240 年～ 280 年と矛盾はないとする（〔堀 2009〕123･124 頁）。

Ⅳ．庄内式新段階の年代

次に、庄内式後半（庄内２・３式）を検討する。なお庄内式を２分する場合、以下では、庄内式「前半」（庄内０・１式）と庄内式「後半」（庄内２・３式）で統一する。

（１）萩原１号墳の画文帯神獣鏡

鳴門市萩原１号墳から、黒谷川Ⅱ式の阿波型小型丸底壺をともない、画文帯同向式神獣鏡が出土している。久住は、土器の類例が纒向辻土坑２（庄内１式）や美園 DSK306（庄内２式）、門田辻田 18 号住居跡（ⅠA 期新相≒庄内１式）にあり、庄内１式併行である可能性が高いとする（〔久住 2017〕20 頁）。一方、寺沢薫は庄内式後半（庄内２・３式）〔寺沢 2005〕、堀大介は庄内３式あるいは布留０式とする（〔堀 2009〕117 頁）。ここでは菅原康夫の庄内２式との見方にしたがう〔菅原 2011〕。

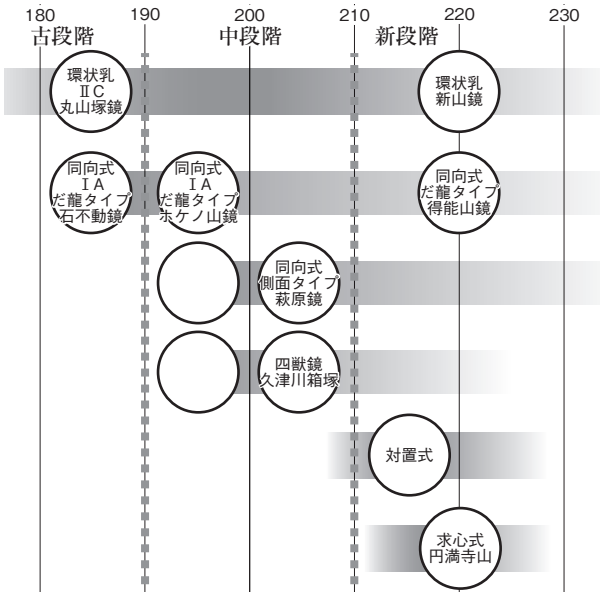


図１　華北東部の画文帯神獣鏡の年代観

萩原１号墳の画文帯同向式神獣鏡の製作年代を、久住は 190 年代とする（〔久住 2017〕20 頁）。筆者は 200 年代頃とみており（図１）、萩原１号墳の時期は 210 年代と考えておこう。したがって、庄内２式の年代は 210 年代におよぶと考える必要がある。

（２）朝日谷２号墳

松山市朝日谷２号墳から、漢鏡７期第３段階の斜縁二神二獣鏡と、平縁二禽二獣鏡が出土し、庄内式後半とされる〔寺沢 2005〕。庄内３式とみることにする。斜縁二神二獣鏡は實盛Ⅰ期（220 ～ 240 年）で（〔實盛 2016〕第 4 表）、平縁二禽二獣鏡は三角縁神獣鏡に引き継がれる要素を多くもつもので、寺沢薫は２面とも「３世紀第２四半期にかかる頃」とする（〔寺沢 2005〕12 ～ 13 頁）。古墳の時期は 230 年代というところであろう。庄内式後半の墳墓に副葬された最も新しい鏡であり、庄内３式と布留０式古相の交代期は 230 年代と考えられよう。

（３）庄内式新段階の年代の推定

ここまでの議論により、萩原１号墳から庄内２式が

210 年代におよび、朝日谷２号墳から庄内３式と布留０式古相の交代期が 230 年代と判断する。

Ⅴ．上方作獣帯鏡の問題

次に、庄内式前半に入る前に、それとも関連し、上方作獣帯鏡（上方作系浮彫式獣帯）の問題を取り上げる。

（１）小長川周溝墓の画像鏡系斜縁鳥文鏡ほか

福岡県みやこ市小長川遺跡の方形周溝墓から、久住のⅠA 期新相（≒庄内１式）の土器とともに、画像鏡系斜縁鳥文鏡が出土している。久住は、「縁部や外区・内区図像表現から飛禽鏡や上方作系半肉彫獣帯鏡の古相型式と親縁関係がある」とする（〔久住 2017〕20 頁）。そして、上方作獣帯鏡Ⅰ式の製作年代を 190 年～ 220 年とする實盛良彦の年代観を参照し〔實盛 2016〕、庄内１式が３世紀前葉との見方を示す。

また、唐津市中原遺跡 SP13231 木棺墓における、久住ⅠB 期（≒庄内２・３式）の土器と上方作獣帯鏡四像Ⅱ式の出土、木更津市高部 32 号墳の同じ組み合わせ（廻間Ⅱ式前半≒ⅠB）を挙げる（〔久住 2017〕20･21 頁）。上方作獣帯鏡Ⅱ式の製作年代の中心を 220 年～ 240 年とする年代観により〔實盛 2016〕、庄内２・３式が３世紀第２四半期頃とみている（〔久住 2019〕220 頁）。

（２）上方作獣帯鏡の年代に関する見解の乖離

上方作獣帯鏡は、漢鏡７期を設定した岡村秀典が、２世紀後半と考え第１段階に位置づけたものである〔岡村 1999〕。これに対し福永伸哉は、第２段階の画文帯神獣鏡より古いと判断することはできないとし、畿内を中心とする画文帯神獣鏡の分布と共通することから、ともに「邪馬台国政権と公孫氏政権との交渉開始を契機として、同時に列島に」もたらされたとみる（〔福永 2005〕156 頁）。このように、上方作獣帯鏡の製作年代（流入時期）については、２世紀後半か、２世紀末を含む３世紀前葉以降か、見解が分かれているのである。

（３）實盛良彦の年代観への疑問

實盛良彦は、六像と四像がある上方作獣帯鏡について、Ⅰ～Ⅳ類の系列を設定し、Ⅰ・Ⅱ式の２時期に区分する。そして、Ⅱ・Ⅲ類は２世紀中頃の（上野祥史の）袁氏系円圏Ⅱ式画像鏡から派生し、またⅠ・Ⅳ類は２世紀後半に出現する（上野の）劉氏系デフォルメ四獣Ｂ式の系譜を引くことから２世紀末以降とし、Ⅱ・Ⅲ類を含め、すべての上方作獣帯鏡の製作開始を 190 年以降とする〔實盛 2016〕（上野祥史の画像鏡分類は〔上野 2001〕）。しかし、上方作獣帯鏡Ⅱ・Ⅲ類を２世紀中頃の円圏Ⅱ式画像鏡からの派生とみる根拠として、図像や銘文とともに、上方作獣帯鏡六像Ⅰ式のなかに円圏Ⅱ式画像鏡と共通する厚い外区をもつものがある点を挙げている。

上方作獣帯鏡について、實盛は袁氏系・劉氏系という華北東部の画像鏡作鏡集団のなかで創出されたとみる。同一流派のなかで、時期差を反映する縁部形態の変化は、画像鏡と上方作獣帯鏡の併行関係を考える手がかりになるだろう。上方作獣帯鏡六像Ⅰ式のうち外区がまだ厚いものは、同じ縁部形態を示す円圏Ⅱ式の製作が続く２世紀半ば過ぎに位置づけられるのではないか。

（４）楽浪地域出土例は２世紀後半

上方作獣帯鏡は楽浪地域や中国からも多く出土する（〔實盛 2016〕第１表・第２表）。楽浪地域では松山里１号墓と貞柏里 221 号墳から六像Ⅰ式が出土している。高久健二は、（穹窿式塼天井単室）塼室墓Ⅰ型式の松山里１号墓を２世紀中葉、Ⅱ型式古段階の貞柏里 221 号墳を２世紀後葉前半とする。また南井里 116 号墓（彩篋塚）から六像Ⅱ式が出土している。横口式の木室墓で、高久は用いられた塼の厚さ指数から、塼室墓のⅡ型式新段階併行に位置づけ、２世紀後葉後半～３世紀前葉とする。

高久の年代比定には岡村秀典の漢鏡編年が重要な根拠となっているが、塼室墓Ⅱ型式新段階と推定する貞梧洞 31 号墳の 195 年の紀年銘塼、Ⅲ -1 型式のセナル里古墳の 252 年の紀年銘塼をふまえている。六像Ⅰ式をともなう塼室墓Ⅰ型式およびⅡ型式古段階が２世紀末以前の２世紀後半であることは確実であろう〔高久 2009〕。

中国出土例には、山東省の済南張庄１号墓・滕州市顧廟７号墓･即墨市於蘭村鎮･棗庄市渇口漢墓群 M114 号墓、遼寧省の大連市前牧城駅漢墓、湖北省鄂州市鄂鋼 630 工地がある（〔實盛 2016〕第１表・第２表）。上方作獣帯鏡の製作年代を考える上で、中国での出土遺跡の年代を追究する必要がある。筆者にその力量はないが、楽浪地域での出土古墳の検討から、上方作獣帯鏡の製作開始は２世紀後半にあるとみてよいだろう[2)]。

（５）上方作獣帯鏡出土古墳はより古いか

岡村漢鏡７期第２段階の画文帯神獣鏡や第３段階の斜

縁二神二獣鏡は、布留０式新相以降の前期古墳からもかなり出土し、三角縁神獣鏡との共伴例も多い。倭製を含む三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡との共伴例として、福永伸哉は 19 例を挙げる（〔福永 2005〕表 13)。三角縁神獣鏡と斜縁神獣鏡・四獣鏡との共伴例について、實盛の一覧表からカウントすると（〔實盛 2016〕第４表・第５表)、14 例 25%である（母数 55)。

一方、上方作獣帯鏡の出土古墳は、庄内式新段階（庄内２・３式）と布留０式古相に顕著である〔寺沢 2005〕。三角縁神獣鏡との共伴例を實盛の一覧表からカウントすると〔實盛 2016〕、８例 11.5%である（母数 69)。

個々の出土古墳の年代を点検し、副葬の中心時期にズレがあれば傍証になりうるものの、それができない現状での感覚論であるが、上方作獣帯鏡は、画文帯神獣鏡よりもやはり古いように思われる。

（６）上方作獣帯鏡をめぐって

上方作獣帯鏡の製作開始が２世紀後半で、もし庄内式前半が２世紀後半ならば、その時期の墳墓における副葬例もあるはずだが、いまのところ事例はなく、庄内式後半からである。この点について寺沢薫の言及がある。寺沢は、庄内式後半に北部九州以東で中国鏡の出土が顕在化し、岡村漢鏡７期第１段階から第３段階の鏡の副葬が一挙に始まることを指摘した上で、第１段階から第３段階の明確な時期差はないとしながら、第１段階の上方作獣帯鏡は「おもに北部九州から出土する夔鳳鏡､獣首鏡、双頭龍鳳文鏡などのグループとは対照的な分布を占め」（福永伸哉の見方と同じ)、王権誕生を示すことは間違いないとする。そして「流入時期は当然前段階の庄内式古段階に遡る」と考えている（〔寺沢 2005〕11 頁)。

寺沢は、庄内式前半に上方作獣帯鏡がもたらされても、北部九州より東方では鏡を副葬することがそれまでなく、庄内式後半に中国鏡の副葬が顕著となり、上方作獣帯鏡が顕在化するとみている。そして、王権誕生は庄内式前半にさかのぼり、上方作獣帯鏡の庄内式後半に顕在化する分布がそれを示す根拠になると考えているのである（〔寺沢 2005〕20 頁註 120)。

寺沢とは年代観が異なるが、筆者も上方作獣帯鏡について同じように考えている。前稿で指摘したように（〔岸本 2014〕384 頁)、もし庄内式が２世紀後半にさかのぼるのであれば、畿内ヤマト国が列島の求心点となる時期であるので、画文帯神獣鏡に先んじて、先行する上方作獣帯鏡の分布が畿内を中心とするものに転換するのは整合性をもつ。上方作獣帯鏡が庄内式の画期を示すとの理解は共通するものの、寺沢薫は全体を３世紀以降の事象と捉えるのに対し、筆者は、岡村秀典の年代観の通り２世紀後半にさかのぼると考える。

Ⅵ. 庄内式の開始年代

いよいよ庄内式の開始年代に入る。庄内式の上限を考える上で、現時点で最も重要なデータは、金沢市大友西遺跡の井戸 SE18 の井戸枠、その年輪年代による伐採年 169 年というデータである。

（１）大友西遺跡の年輪年代 169 年

計測された井戸枠は樹皮型で、年輪年代から 169 年の伐採が確定している。井戸下層の土器群は、月影１式の甕が含まれるが､月影２式とみられる甕も共伴する（〔堀 2009〕124 頁第 48 図の５)。中層は月影２式である。堀大介は、月影１式を畿内の庄内０式古相、月影２式を庄内０式新相併行とする〔堀 2009〕。したがって、庄内式の開始年代に直結する資料である[3)]。

まず、前提となる判断として、下層土器が井戸使用の初期を示すものとみておくことにする（井戸の使用開始が下層土器より古いとはみない)。その下層土器群について、月影１式期で２式の土器を混入とみるか、古い土器も含まれるが月影２式期とみるか、両方がありうる。中層は月影２式期で問題なく､井戸の埋没時期とみられ、下層も月影２式期とすれば井戸の使用期間は短期間であったことになる。下層の月影１式を重視し、井戸の使用開始期と考える方が妥当であるのかもしれない｡堀は、下層が月影１式期（≒庄内０式古相）にさかのぼる可能性は高いとみるが、井戸全体としては月影２式期（≒庄内０式新段階)の時期と判断している（〔堀 2009〕123 頁)。ここでは､下層土器群は月影１式期と考えることにする。ただし、堀の見方を参考にすると、下層土器の時期は、月影１式と２式の交代期頃であるのかもしれない。

井戸使用の開始の上限が 169 年で、下層土器の投棄年代を 170 年から 175 年と仮定すると、月影１式（≒庄内０式古相）の年代には 170 年代前半が含まれることになる。これが庄内式の開始期を考える際の、もっとも確度

の高い年代であり、庄内式は 170 年頃までさかのぼることは確かなことであろう。

さらに、堀と同様に１小様式約 20 年とし、井戸下層土器が月影１式期（≒庄内０式古相）の中央とみなし、月影式の開始期をそこから 10 年さかのぼらせると、庄内式の開始は 160 年から 165 年となる。また、月影１式と２式の交代期の頃であれば、月影式の開始期は 20 年さかのぼり、庄内式の開始は 150 年から 155 年となる。

（２）嘉麻市原田石棺墓

嘉麻市原田遺跡１号石棺墓を取り上げる。久住は出土した四鳳鏡を２世紀中頃前後とし（〔久住 2019〕216･217 頁）、土器は久住の後期後葉古相とする。この四鳳鏡の年代を詳しく論じる力量はないが、鳳凰文の各部位は形骸化し、同じように素縁・凹帯・連弧文帯からなり平彫図像を入れる双頭龍文鏡Ⅰ式に近く〔西村 1983〕、Ⅰb・c 併行とすれば２世紀第２四半期とみられ、久住の見方は妥当であろう。墳墓の年代は２世紀中頃とみられる。

しかし、土器について寺沢薫は庄内式前半のなかでも古い様相とする（〔寺沢 2005〕２頁）。庄内０式と理解しておく。同じ土器についての時期判断の乖離について、どちらが妥当であるか、いまは判断できない。

なお、久住の後期後葉新相について言及しておく。久住は、北部九州の後期後葉新相を、畿内の後期Ⅵ-3 後半と「(大和)Ⅵ-4= 纒向１式(古)」に対応させている（〔久住 2019〕表１）。大和のⅣ-4 は、弥生後期の最末期小様式として設定されたものだが（藤田三郎・松本洋明）、寺沢はこの時期を含む纒向１式を庄内０式とする〔寺沢 1986〕。したがって、「(大和) Ⅵ-4= 纒向１式（古）」が庄内０式古相、次期の久住ⅠA の前半併行である「庄内０= 纒向１（新）」が庄内０式新相と理解する。

つまり、久住の後期後葉新相の後半は庄内式に入っているのである。ここに併行関係の理解にかかわる問題が横たわっているように思われるが、いずれにせよここでの議論において、畿内の庄内式の直前は、久住のいう後期後葉新相のなかの「前半」ということである。

原田石棺墓の土器について、寺沢の庄内０式とする見方からすると、庄内式が２世紀中頃にさかのぼる根拠となる。一方、久住の後期後葉古相との見方からすると、それが２世紀中頃であるので、庄内式の開始は、これに続く後期後葉新相の「前半」の後であり、２世紀後半のなかに求められるだろう。

（３）雀居遺跡の年輪年代 100 ＋α年＋

福岡市雀居遺跡の環濠Ⅱ区 SD03 下層から出土した刳り抜き式槽について、心材型であるが、年輪年代から最外年輪が 100 年という値が得られている。樹齢 200 年～300 年のスギ材の辺材の年輪平均 33 年分を加算すると 133 年となり、さらに削られた心材の年数を加える必要がある。心材型で推測にならざるをえないが、仮に伐採年を 130 年～ 140 年とし、遺跡での使用を 10 年と見積もれば、投棄年代は 140 年～ 150 年となる。

これにともなう土器が久住の後期後葉古相である。原田石棺墓とほぼ同じであり、庄内式の開始は２世紀後半のどこかになる。なお、雀居遺跡の環濠が後期後葉古相に木製品や土器が投棄され埋まり始めることは重要であろう。上層は新相とのことであるが、古相期に集落放棄が始まる意味を考える必要があるように思われる。

（４）韓国・良洞里 162 号墓

韓国・金海市良洞里 162 号墓から、岡村秀典の細線式獣帯鏡Ⅵ式より後出的な鳥文鏡が出土し、久住は「２世紀第２四半期から中頃」とする。良洞里 162 号墓の時期は、同一時期の金海市長有里 12 号墓にともなう北部九州西北部の土器から、北部九州の「後期後葉古相か、新相段階でもその初期まで」という（〔久住 2019〕217 頁）。

介在する要素が多く、また副葬時期を２世紀中頃としても、土器の推定時期に幅があり不確実であるが、古相と新相の交代期が 150 年前後というところかと思われる。短い新相後の庄内式の開始は、２世紀後半でも中頃からそう下降しない時期になるだろう。

（５）庄内式の開始年代の推定

庄内式の開始年代を考える材料として大友西遺跡の年輪年代値がもっとも重要で、中国鏡と土器の対応関係については、より新しい時期に比べると不確かな資料が多い。大友西遺跡の年輪年代値からすると、庄内式の開始は 160 年代にさかのぼる蓋然性があり、さらにいくぶんさかのぼる可能性もある。

原田石棺墓の事例は、土器の編年的位置に見解の相違があり、寺沢の庄内０式との見方が妥当であれば、庄内式の開始は２世紀中頃になるが、久住の後期後葉古相との見方では２世紀後半のどこかとなる。雀居遺跡や良洞

里162号墓の事例も後期後葉古相をめぐるもので、雀居遺跡から後期後葉古相が140年代を含み、良洞里162号墓から150年前後に新相に移行することを考えた。

庄内式の開始年代をまとめると、大友西遺跡の年輪年代から160年代にさかのぼる蓋然性があり、北部九州の後期後葉古相から新相への交代期が150年前後とすれば、160年代という数字との齟齬はない。筆者が現時点で検討できるのは、この範囲までである。

庄内式の開始年代は160年代と考えられる。また大友西遺跡の資料解釈において、年輪年代値に対応する土器の考え方次第で、ややさかのぼる可能性もある。また、畿内における庄内式土器が一歩先んじていた可能性を考慮し、現時点の判断として155年を提示しておく。

Ⅶ. 当該期の年代観のまとめ

これまでの議論をふまえ、庄内式の時代を中心とする土器の年代観を図にまとめる（図２）。

これまでに、各地の良好な一括資料にもとづき土器編年が組み立てられ、また併行関係を組み上げる努力がなされてきた。そのなかで、北陸南西部の緻密な土器編年を基礎とし、畿内や東海はもとより北部九州を含めた併行関係を示した堀大介の研究成果は、根拠を明示し論理的に組み立てられ明瞭である。１小様式20年を均等に割り振ることへの異論はあるだろうが、長期間にわたる枠組みを考える上ではこうした案分が必要であろうし、その仮説を中国鏡や年輪年代データなどを用いて網羅的に検証し、妥当性を確認している〔堀2009〕。そこで、この堀の編年表を基礎とする。

まず、越前・加賀編年と、畿内の寺沢編年、東海の赤塚編年、北部九州の寺沢編年について、堀の対応関係をトレースする（濃いグラデーション）。次に、久住猛雄の併行関係表により〔久住2019〕、北部九州の久住編年および吉備編年を、畿内の編年に対応させ配列する。また、菅原康夫による併行関係の理解にもとづき、阿波と讃岐を配置する〔菅原2011〕。なお、東海と畿内の併行関係については、北陸を介しての検討を加味した堀の結論により、久住の考える対応関係を破線で示す。

以上のように配列し、年代について、堀の小様式20年という配分を基礎とした上で、今回の検討結果により補正した。(1) 庄内式の始まりを140年から155年に下げる。(2) 庄内２式と３式の交代期を220年から215年に上げる。(3) 庄内３式と布留０式古相の交代期を240年から235年に上げる。(4) 布留０式古相と新相の交代期を260年から255年に上げる。(5) 布留０式新相と布留１式古相の交代期を280年から265年に上げる。

これらのうち、庄内式の始まりを140年から155年とする変更が大きい。弥生時代後期については、畿内の後期Ⅴ-0の頭をAD20年とする堀の基準をそのままとし、後期が長くなった期間を案分するにとどめる。ただし、久住の北部九州の後期後葉古相と新相の交代期を150年前後と考えたので、この部分の調整を加えた。弥生時代後期について堀は中国鏡により検証しており〔堀2009〕、庄内式を下げることで齟齬が生じないか同様にチェックすべきであるが、できていない。

土器の変化は、新しい様相が現れつつ旧来の様相を残しながら漸移的に変化する。A小様式から典型的なB小様式に移り変わるには一定の時間を要する。こうした移行期を表す図とすることもできるが、見解を明確にするため、155年や215年などの数字を出し、図では横一線の境界とした。その境界の前後に移行期間があり、その点、誤解のないよう願いたい。

本図を見ると、議論をふまえて調整したものであるので、図中に示した年代決定にかかわる事例について、手がかりとなる年代資料と、それにともなう土器の推定年代の間に、埋めがたい大きな矛盾はない。

各時期の事例から導いた年代は、それぞれ一定の独立性のある分析結果であると考えている。したがって、ある時期の年代について、上下に補正しなければならないことが生じるであろうが、どこかひとつの誤認により、全体の年代を一斉に下げなければならない、ということにはならないだろう。この図をもって、現時点における庄内式の年代に関する結論とする[4)]。なお、纒向地域の古墳にかかわるC14年代値なども取り上げようと考えていたが、扱うことはできなかった。

Ⅷ. おわりに

庄内式の始まりと軌を一にして、各地で連動的に新たな独自の土器様式が生み出されること、しかしそこに共

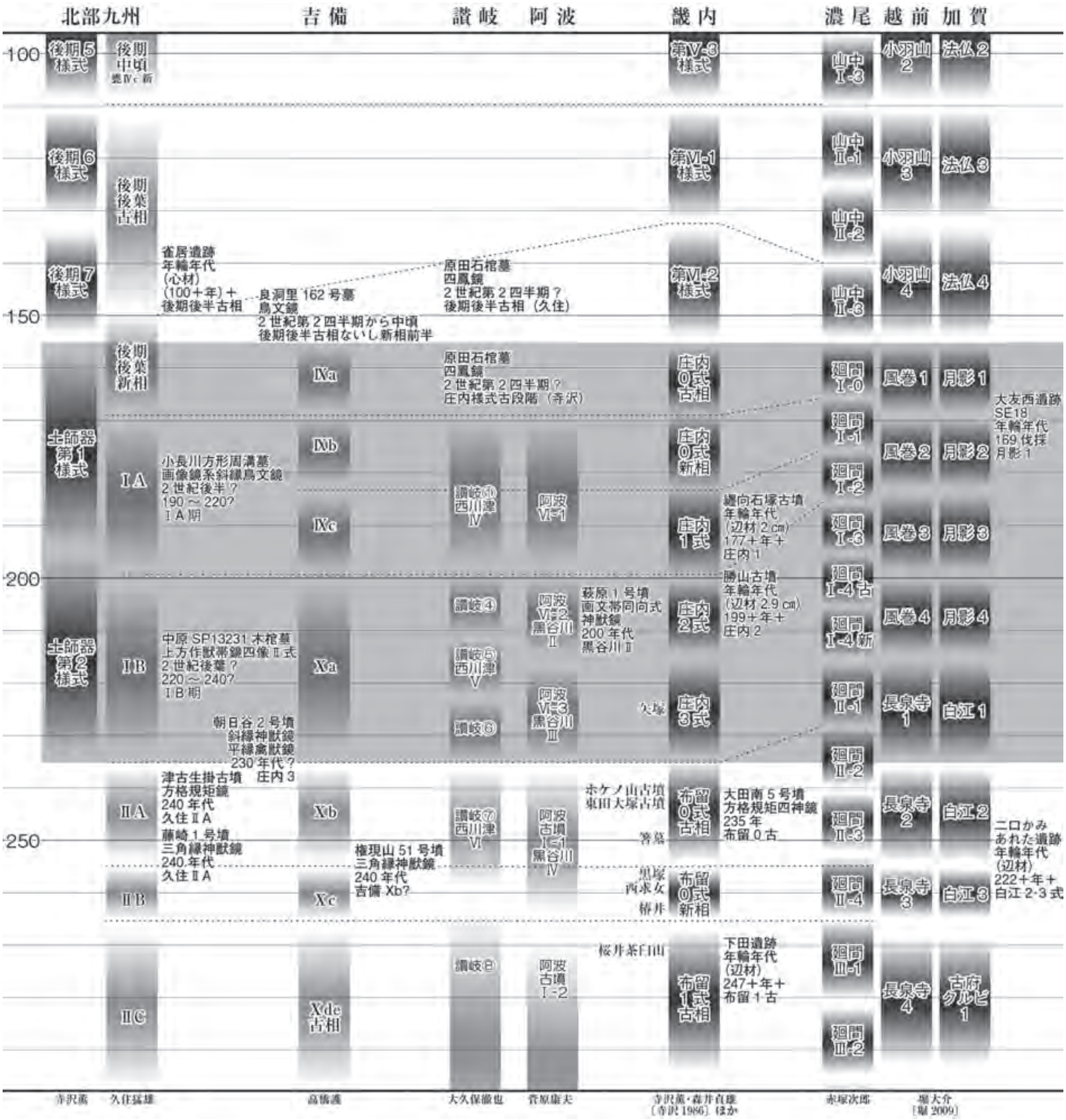


図2　庄内式を中心とする時期の年代観

通して軽量薄甕へ移行する通底する同一歩調がある。こうした転換が共通する範囲こそ、倭国が本格的な国家形成に向かう庄内式という重要な段階を切り開いた主体地域であろう。そして、土器様式の転換には、これら関係地域の主導層の強い連携の意思が働いているように感じられる。この庄内式の時代に、広域にわたるネットワークが形成されるなかで、やはり纒向遺跡を生み出した畿内が求心点であったとみたい。したがって、こうした各地主導層の連携をリードしたのはヤマト国であったのではないか。新たな土器様式の創出は広域にわたり連動するが、畿内の庄内式土器が一歩先んじていたことは十分に考えうることであろう。

庄内式は２世紀後半にさかのぼる。107年頃の倭国成立、３世紀初頭とみる卑弥呼共立の間に、大きな変革があったと考えなければならない。弥生時代後期において広域にわたる社会関係が生まれ、その上に、２世紀中頃、畿内ヤマト国を中心とする体制の形成に進む、ということであろう。堀大介がコシにおける紀元後の社会変容を緻密な分析の上に論じたように〔堀 2009〕、各地における庄内式期以降の社会変化を総合化することにより、年代論を越えて、列島規模での庄内式期の歴史的意義を明確にしていくことが重要である。

【註記】

1）この姿勢は「結論ありき」との反感を招くだろう。しかし、箸墓古墳が最初の巨大前方後円墳＝初代倭国王墓＝卑弥呼墓との見方は、単純ゆえに強固であるが、そうではなく箸墓古墳が３世紀中頃であることを考古学的に詰めた上での結論である〔岸本 2004〕。箸墓古墳が卑弥呼墓であることは、今城塚古墳＝継体墓に準ずる「ほぼ確実」なことで、年代の定点とすることができる。

さらに、箸墓型前方後円墳から箸墓古墳も生前造墓で、死没後モガリを経てまもなく埋葬されたと考え、250 年前後に特定できると考えた。これは前方後円墳共有システムの立場から判断したものである。よって、箸墓古墳の埋葬時期≒250 年を堅持する。

2）實盛良彦の上方作獣帯鏡の研究をふまえた上で、製作時期全体にわたる年代観を提示できるわけではない。

3）ただし、直接的な土器の搬出・搬入資料はなく、新たな土器様式の成立を畿内の庄内式と同調するものとの判断による（〔堀 2009〕81 ～ 82 頁、90 頁）。

4）取り上げていない久住の議論にふれておく。久住は北部九州での楽浪土器が、後期後葉新相から IA 期（≒庄内式前半）までがもっとも多く、IB 期（≒庄内式後半）にやや減少し、IIA 期（布留 0 式古相）に急減することを挙げる。〈魏志倭人伝〉に見える魏の使者の往来は 240 年代で（三角縁神獣鏡の授受は３世紀後半に継続する）、その時期を布留０式古相とするのは楽浪土器から矛盾するという〔久住 2017〕。

纒向遺跡など畿内における楽浪系土器に言及する準備はないが、久住の指摘する変化は、外交関係の主体が北部九州でなくなることを示すものであろう。

【参考文献】

岩本崇 2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』 六一書房

上野祥史 2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』 第 86 巻第２号，１-39 頁

岡林孝作・水野敏典 2018「編年的位置」奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳の研究』八木書店，326-327 頁

岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』〈歴史文化ライブラリー〉66 吉川弘文館

岸本直文 2004「西求女塚鏡群の歴史学的意義」『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会，339-348 頁

岸本直文 2011「古墳編年と時期区分」『古墳時代の考古学１古墳時代史の枠組み』同成社，34-44 頁

岸本直文 2014「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集 369-404 頁

岸本直文 2015「炭素 14 年代の検証と倭国形成の歴史像」『考古学研究』第 62 巻第３号，59-74 頁

岸本直文 2018「倭王権と倭国史をめぐる論点」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 211 集，15-50 頁

君嶋俊行 2005「桜井茶臼山古墳出土の二重口縁壺」大阪市立大学日本史研究室『桜井茶臼山古墳の研究』〈大阪市立大学考古学研究報告第 2 冊，115-125 頁）

久住猛雄 2017「３世紀のチクシと三韓と倭国」『魏都・洛陽から『親魏倭王』印の旅―楽浪・帯方・三韓から邪馬台国へ―』（資料集）〈ふたかみ邪馬台国シンポジウム〉17，19-47 頁

久住猛雄 2019「２・３・４ 世紀の土器と鏡―土器の併行関係と出土鏡からみた暦年代を中心として」実盛良彦篇『銅鏡から読み解く２～４世紀の東アジア 三角縁神獣鏡と関連鏡群の諸問題』〈アジア遊学〉237，勉誠出版，214-229 頁

吹田直子 2003「山城における古墳時代初頭前後の土器様相」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集 大阪府文化財センター，283-305 頁

菅原康夫 2011「阿波の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』 学生社，121-150 頁

實盛良彦 2012「斜縁神獣鏡・斜縁四獣鏡の製作」（『考古学研究』第 59 巻第３号，76-87 頁

實盛良彦 2016「漢末三国期の斜縁鏡群生産と画像鏡」『ヒストリア』第 259 号， 1-26 頁

高久健二 2009「楽浪・帯方郡塼室墓の再検討 塼室墓の分類・編年・および諸問題の考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集，161-210 頁

寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』〈奈良県史跡名勝天然記念物調査報告〉第 49 冊 奈良県教育委員会，327-398 頁

寺沢薫 2002「箸墓古墳の築造手順と築造時期」『箸墓古墳周辺の調査』〈奈良県文化財調査報告書〉第 89 集 奈良県立橿原考古学研究所，132-137 頁

寺沢薫 2005「古墳時代開始期の暦年代と伝世鏡論（上・下）」『古代学研究』第 169 号，1-20 頁、第 170 号，1-22 頁（21-42 頁）

寺沢薫 2018「出土土器からみた黒塚古墳の築造時期の位置づけ」奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳の研究』八木書店，326-327 頁

西村歩 2003「古墳出現期における和泉地域の土器様相と集落の動向」『古墳出現期の土師器と実年代』（シンポジウム資料集） 大阪府文化財センター，5-38 頁

西村俊範 1983「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』第 66 巻第１号，95-115 頁

橋本輝彦 2006「纒向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚大古墳』〈桜井市内埋蔵文化財 1998 年度発掘調査報告書〉１ 桜井市文化財協会・桜井市立埋蔵文化財センター，157-181 頁

福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』 大阪大学出版会

堀大介 2009『地域政権の考古学的研究―古墳成立期の北陸を舞台として―』雄山閣

柳本照男 2004「土器からみた西求女塚古墳の年代」『西求女塚古墳発掘調査報告書』 神戸市教育委員会，349-356 頁

若林邦彦 2018「「畿内社会への胎動」はあるか―唐古・鍵遺跡の評価をめぐって―」『講座 畿内の古代学 第Ⅱ巻 古墳時代の畿内』 雄山閣，18-31 頁

中河内地域における初期庄内式甕成立から河内型庄内式甕定型化への過程素描

原　田　昌　則

Ⅰ．はじめに

古墳時代初頭の土器様式である庄内様式を代表する器種に庄内式甕がある。中河内地域に位置する八尾市域では、これまでに、中田遺跡刑部土坑、中田遺跡Ｎｏ 39 トレンチ（ＳＸ 01)、成法寺遺跡第１次（ＳＷ１）などの資料から、初期庄内式甕の成立に関わる過程が想定され、これらの初期庄内式甕の出現をもって古墳時代初頭（庄内式期）[1)] とする土器編年案が米田敏幸氏（米田 1981・1991)、筆者（原田 1993 ａ・2003)、若林邦彦氏（若林 1999)、杉本厚典氏（杉本 2001・2006)、西村歩氏（西村 2008) などにより提唱されてきた。しかしながら、中河内地域における初期庄内式甕の資料は、1970 年代後半から 1980 年代後半に検出されたもので、さらに検出例が少ないことも相俟って、その実態についての詳細は不明な点が多かった。

ところが 1990 年代後半から 2010 年代にかけて、八尾市の小阪合遺跡第 35 次、久宝寺遺跡第 34 次、東郷遺跡第 71 次、矢作遺跡第 10 次、成法寺遺跡第 29 次や大阪市平野区の長原遺跡 09 － 6 次などの各調査で、初期庄内式甕を含む良好な資料が増加しており、初期庄内式甕の成立過程などを考えるうえで示唆に富む資料を提供している。

本論ではこれらの初期庄内式甕が出土した資料を通して、初期庄内式甕が成立した段階（庄内Ⅰ）から、河内型庄内式甕として定型化した段階（庄内Ⅱ）の土器組成や当該期の集落のあり方などの諸問題を推考する。

Ⅱ．初期庄内式甕の諸資料と土器組成

まず、中河内地域における初期庄内式甕の形状・特徴を整理しておく。初期庄内式甕は、「２．庄内式甕の成立と拡散」『新版八尾市史考古編２』（原田 2020 ｂ）で示したように、第Ⅴ様式甕をベースとし、口縁部は「く」の字状、底部は突出しない小さな平底ないしは尖り底で、体部内面はヘラケズリ技法を用いた薄甕である。また体部の成形技法の違いから、分割タタキ技法を用いるＡ１型式と右上がりの連続螺旋タタキ技法で製作されたＢ１型式に区別される。さらに使用胎土の違いから、河内平野部の在地産Ａ１型式・Ｂ１型式と生駒山西麓産のＡ１型式の２系統の三種類がみられる（図２参照)。

以下、これまでに確認されている主な初期庄内式甕の出土資料を調査年順に整理してみる。

① 中田遺跡（刑部土坑）

刑部土坑として認知されている資料で、63 点の土器類が図化されており、在地産の庄内式甕Ａ１型式と数点の第Ⅴ様式系甕を除く壺、甕、高杯（有稜－Ａ１・２型式、Ｃ１型式、Ｄ１・２型式、有段－Ｆ型式)、鉢の大半が吉備系の土器で占められなど特異な土器組成を持つ資料である。

② 成法寺遺跡第１次（ＳＷ１）

良好な在地産の庄内式甕Ａ１型式１点を除けば細片が大半を占めるほか、有稜高杯や外来系土器との共伴は認められない。

③ 萱振遺跡（ＳＤ 4001 下層）

庄内式甕Ａ１・Ｂ１型式が見られるが、報文に胎土の記述がないため不明な点がある。有稜高杯にはＡ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｄ１型式、有段高杯にはＥ型式が見られる。

④ 中田遺跡Ｎｏ 39 トレンチ（ＳＸ 01）

在地産の庄内式甕Ａ１型式・Ｂ１型式のほか、外来系では吉備系の甕、鉢を含む。ただし、生駒山西麓産の河内型庄内式甕Ｂ２型式や浅い皿形の受部と円錐形の脚部を持つ定型化した小形器台など、庄内Ⅱに比定されるものが一部含まれている。

⑤ 八尾南遺跡（井戸１）

在地産の庄内式甕Ａ１型式､有稜高杯Ｂ２型式のほか、外来系では吉備系の有段高杯Ｅのほか、東部四国系の壺を含む。

⑥ 小阪合遺跡第 35 次（ＳＤ 403）

在地産の庄内式甕Ａ１型式、生駒山西麓産の庄内式甕Ａ１型式、有稜高杯ではＢ１・２型式のほか、外来系では吉備系の鉢を含む。

⑦ 久宝寺遺跡第 34 次（ＳＫ 424）

在地産の庄内式甕Ａ１型式、生駒山西麓産のＡ１型式を含む。有稜高杯は不明で外来系土器は認められない。

⑧ 久宝寺遺跡第 34 次（ＳＫ 510）

⑦のＳＫ 424 に隣接する遺構で、在地産の庄内式甕Ａ１・Ｂ１型式を含む。有稜高杯はＢ１型式のほか、外来系では吉備系壺が含まれている。

⑨ 東郷遺跡第 71 次（ＳＤ 309）

上層には布留式古相（布留Ⅰ）を含むが、下層を中心に在地産の庄内式甕Ａ１型式、有稜高杯Ｂ１・２型式などの一括資料のほか、外来系では隣接するＳＯ 201 から低脚の脚部を持つ吉備系高杯が出土している。

⑩ 長原遺跡 09 － 6 調査（ＳＥ 7105）

在地産の庄内式甕Ａ１型式､有稜高杯Ｂ１型式のほか、外来系土器には吉備系、讃岐系、北近畿系の甕、近江系の小形器台が含まれている。

⑪ 矢作遺跡第 10 次（ＳＫ 202・203、ＳＤ 204）

在地産の庄内式甕Ａ１型式のほか、外来系土器には吉備系の複合口縁壺や低脚有稜高杯（Ｄ２型式）が含まれている。

⑫ 成法寺遺跡第 29 次（ＳＫ 108）

在地産の庄内式甕Ａ１・Ｂ１型式のほか、外来系土器には吉備系の高杯、台付直口壺、鉢と讃岐系甕が含まれている。

以上が現時点までに中河内地域において確認されている初期庄内式甕が出土した主な資料で、それらに共伴した有稜・有段高杯や外来系土器などの主な土器組成は図３・４で示した。

初期庄内式甕には在地産Ａ１型式のほか、在地産Ｂ１型式が③萱振遺跡（ＳＤ 4001 下層）、④中田遺跡Ｎｏ 39 トレンチ（ＳＸ 01）、⑧久宝寺遺跡第 34 次（ＳＫ 510)、⑫成法寺遺跡第 29 次（ＳＫ 108）で確認されて

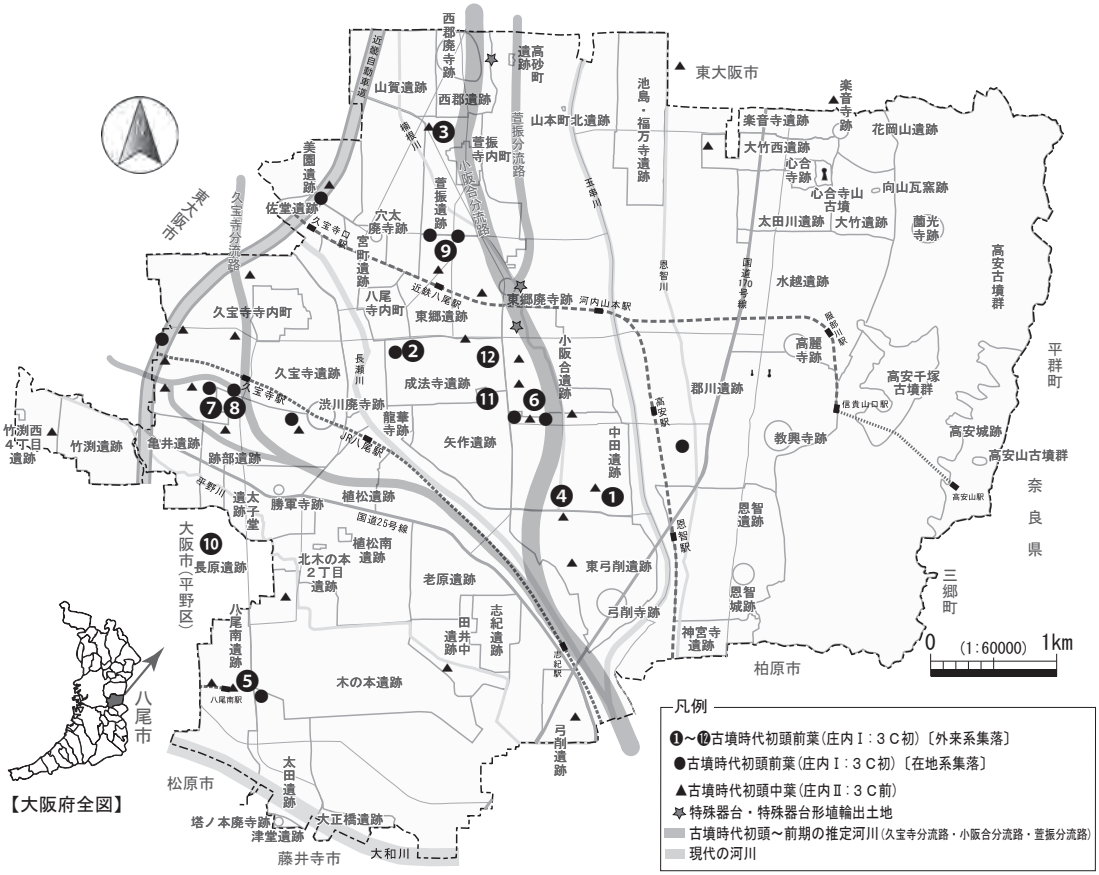
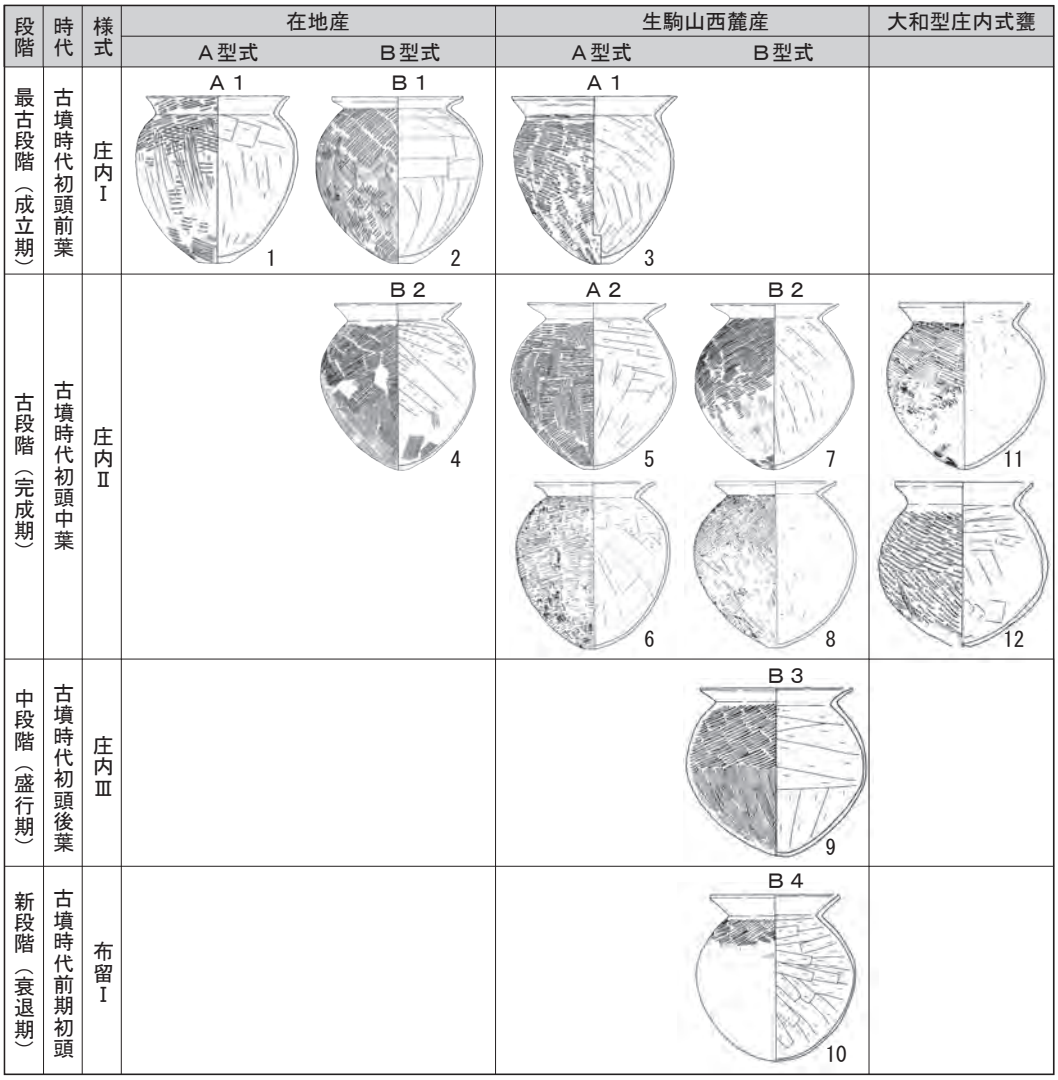


図１　八尾市域を中心とした初期庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）の「在地系集落」「外来系集落」と庄内Ⅱの集落分布



1・3－小阪合遺跡第35次（ＳＤ403）、2－久宝寺遺跡第34次（ＳＫ510）、4・5・7・12－小阪合遺跡第42次（ＳＤ401）、6・8・11－東弓削遺跡第４次（ＳＤ１）、9－小阪合遺跡第３次（ＳＤ316）、10－小阪合遺跡第４次（ＳＤ１）

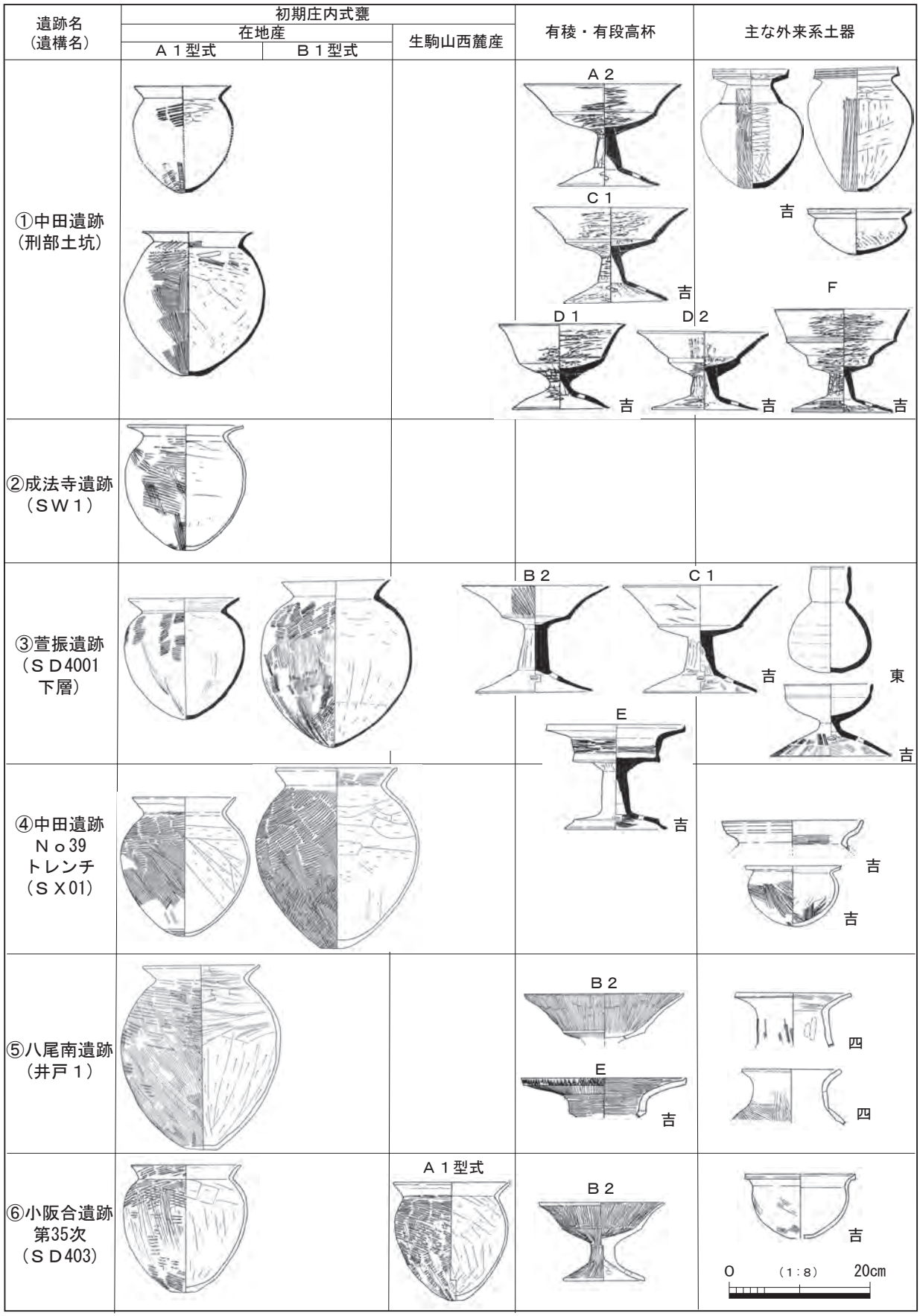
図２　初期庄内式甕および河内型庄内式甕の変遷図（一部、大和型庄内式甕を含む）

おり、体部のタタキ方向や底部・口縁端部の形状などにおいて差異が認められる。一方、生駒山西麓産ではＡ１型式が⑥小阪合遺跡第35次（ＳＤ403）と⑦久宝寺遺跡第34次（ＳＫ424）で確認されており、成立期においては僅少な存在であったことを示している。外来系土器との共伴は、①刑部土坑に代表される吉備系土器（壺、甕、鉢、高杯）が最も多く、さらに、⑨東郷遺跡第71次（ＳＤ309）に隣接する落ち込み（ＳＯ201）出土の吉備系高杯を含めれば、12資料中の10資料で認められる。そのほか、東部四国系（讃岐・阿波）の壺が⑤八尾南遺跡（井戸１）で、甕が⑩長原遺跡09-６次（ＳＥ7105）と⑫成法寺遺跡第29次（ＳＫ108）から出土している。北近畿系では、甕が⑩長原遺跡09-６次（ＳＥ7105）、近江系では、小形器台が⑩長原遺跡09-６次（ＳＥ7105）から出土している。このように、中河内地域の初期庄内式甕出土資料には、高い比率で吉備系土器をはじめとする外来系土器の共伴が確認された。

これらの資料を総合すれば、従前から諸氏により指摘されてきたように、中河内地域での初期庄内式甕の成立へ向かう過程において、吉備地方との相互関係が大きかったことを追認する結果となった。

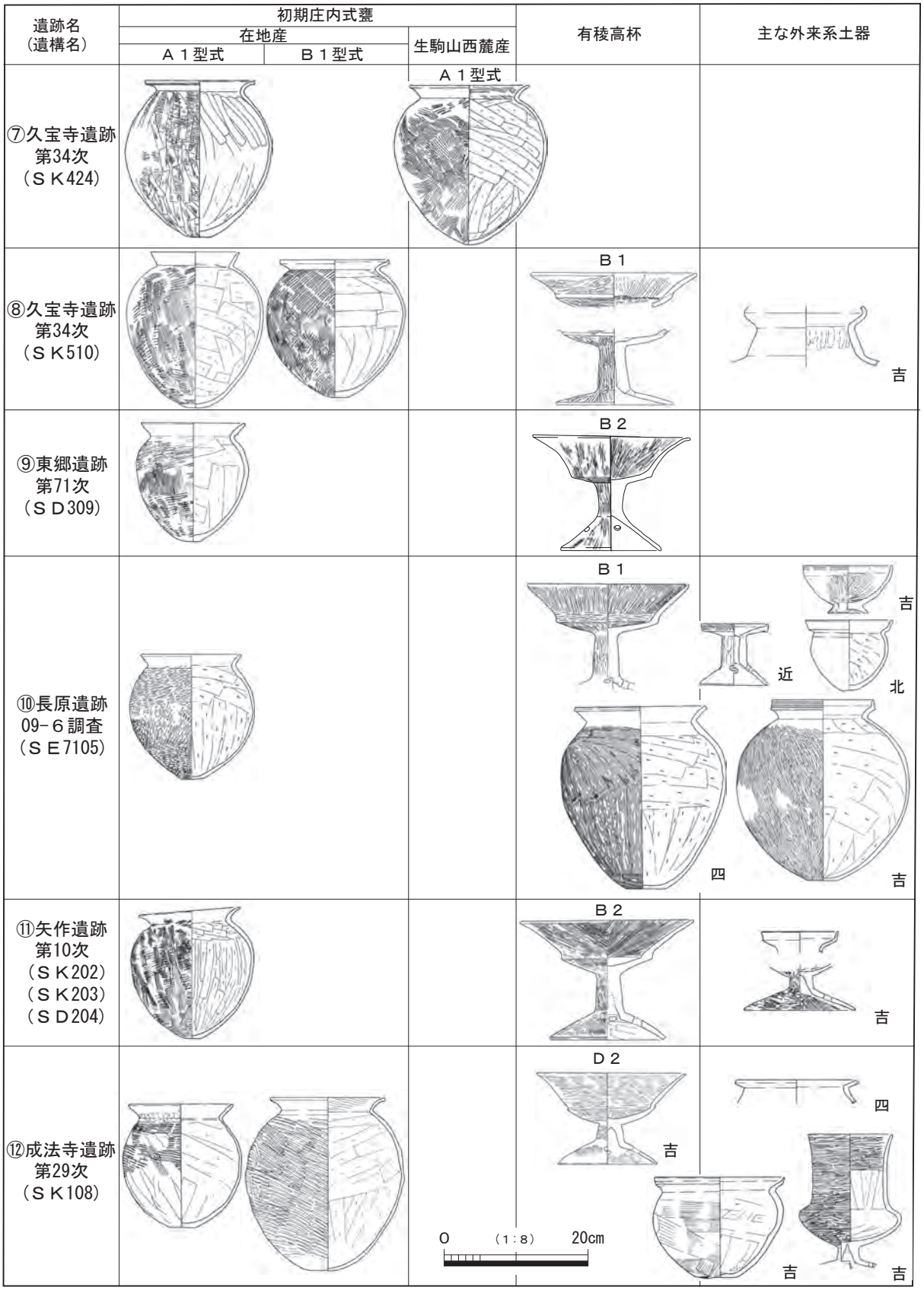
これらの事象を勘案すれば、中河内地域における初期庄内式甕は、吉備地方からの移住者を主体とする集落内で成立した可能性が高いと考えられる。これらを証左する諸特徴としては、初期庄内式甕の大半が弥生時代後期末の北鳥池遺跡下層式の第Ⅴ様式甕にみられる体部連続螺旋タタキ技法による球形志向ではなく、分割タタキ技法で体部最大径が上位にある点や、生駒山西麓産の胎土ではなく沖積地の在地胎土を使用したことなどが挙げられる。

このようにして成立した初期庄内式甕は、在地産の胎土を使用したＡ１型式が主体である。そのほかに、微量ではあるが在地産Ｂ１型式や生駒山西麓産Ａ１型式が含まれている。これらの存在は、後述でもふれるが初期庄内式甕の成立段階の比較的早い段階に、移住集団と在地



※吉備系（吉）、東海系（東）、東部四国系（四）

図３　中河内地域における古墳時代初期前葉（庄内Ⅰ）の初期庄内式甕、有稜・有段高杯と主な外来系土器－１



※吉備系（吉）、東部四国系（四）、北近畿系（北）、近江系（近）

図４　中河内地域における古墳時代初期前葉（庄内Ⅰ）の初期庄内式甕、有稜・有段高杯と主な外来系土器－２

集団との交流で生み出されたものであったと考えられよう。このように初期庄内式甕の成立は、限定された条件下で発生したと想定されるため、その検出例が少なかったものと考えられる。

初期庄内式甕の成立時期については、共伴した外来系土器の各地域における土器編年との対比から併行関係が推定される。吉備系土器（壺、甕、鉢、高杯）では、吉備地方で弥生時代後期末に比定される川入・上東遺跡編年（柳瀬 1977）の才ノ町Ⅰ・Ⅱ式、高橋護氏編年（高橋 1988）のⅨａ～ｃ期、百間川原尾島遺跡編年（江見 1980）の百・後・Ⅳ、津寺遺跡２編年（正岡 1995）の弥・後・Ⅳ、河合忍氏編年（河合 2015・2018）の終末期２・３から１期、平井泰男氏編年（平井 2010）の弥・後・Ⅳ－２期に比定される。なお刑部土坑の吉備系土器については、高橋編年のⅨｃ期（米田 1994）、Ⅸａ・Ⅸｃ期（秋山 2002）とする見解がある。

そのほか、長原遺跡 09- ６次出土の讃岐系甕（71）、近江系の小形器台（61）が伴野幸一氏編年（伴野 2006）のⅥ－２（器台Ｄ）に比定されている。このように、共伴した外来系土器との併行関係では、弥生時代後期末から庄内式併行期とされる時期にあたる。

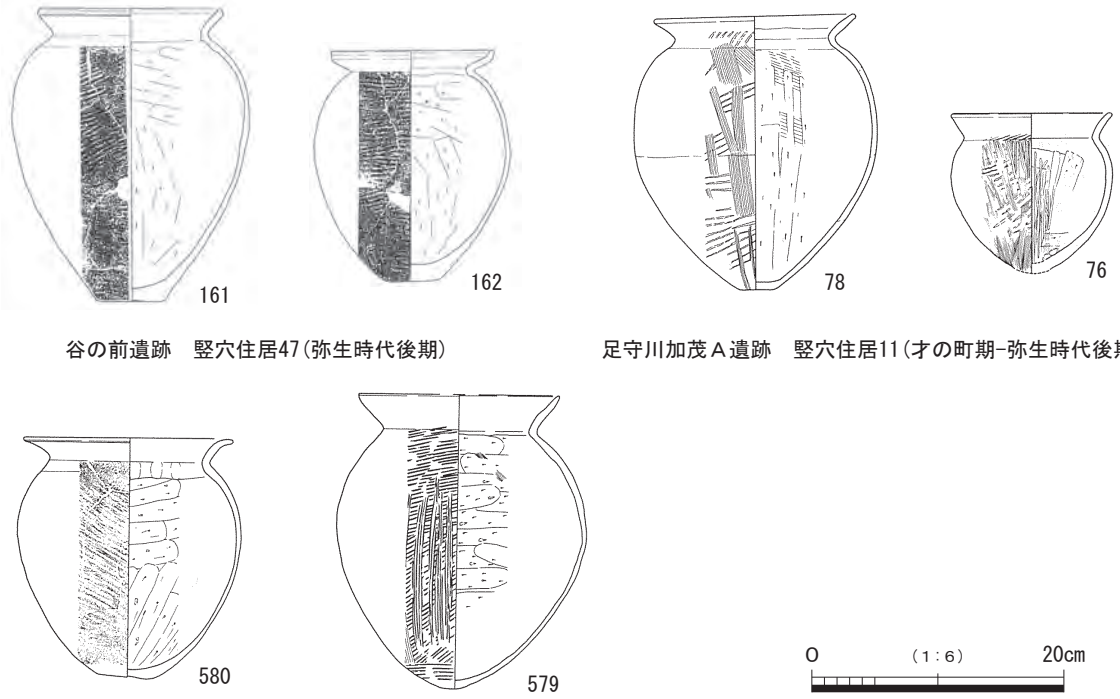
なかでも、外来系土器のなかで最も多くを占める、吉備地方で弥生時代後期末（才ノ町Ⅰ・Ⅱ式）とされる時期が、中河内地域での初期庄内式甕の成立期に対応するものと思われる。

吉備地方においてはこの時期、畿内地域との交流を示すように、弥生時代後期後半（畿内第Ⅴ様式）の弥生土器の搬入が各遺跡で認められている。なかでも、岡山県赤磐郡熊山町の吉井川流域に位置する谷の前遺跡の竪穴住居 47 出土の甕（161・162）（浅倉ほか 2005）のように、「く」の字状口縁部に突出しない平底、体部がタタキ成形で内面にヘラケズリを行う第Ⅴ様式甕と吉備地方の土器製作技法が融合した折衷型の甕が一定量認められる。さらに、岡山市加茂と倉敷市矢部に位置する足守川加茂Ａ遺跡の竪穴住居 11（島崎 1995）からは、中河内地域の初期庄内式甕（Ａ１型式）に酷似した甕（76・78）が出土している（図５）。この時期、吉備地方においては、畿内第Ⅴ様式甕と吉備型甕の製作技術とが融合して創出された折衷甕の存在や中河内地域の初期庄内式甕（Ａ１型式）と同型の甕の存在が確認されている。

吉備地方の弥生時代後期末（才ノ町Ⅰ・Ⅱ式）と、中河内地域で古墳時代初頭前葉とされる初期庄内式甕成立期との時期的な尺度を厳密に考慮する必要があるが、吉備地方が先行していたと仮定とすれば、吉備地方において既に庄内式甕が成立し、その製作技法を知る移住者により中河内地域に導入された可能性がある。そうであれば、中河内地域における初期庄内式甕の成立は、森岡秀人氏が提唱された移住者が出身地の土器を製作する「臨地製土器」（森岡 1999）の性格を持つものと考えられる。またそれとは逆に、足守川加茂Ａ遺跡の竪穴住居 11 出土の初期庄内式甕（Ａ１型式）や下田所期とされる竪穴住居 30（579）出土の初期庄内式甕（Ａ１型式）（図５）が中河内地域からの搬入品だとすれば、初期庄内式甕が成立した比較的早い段階での直接的な交流関係が看取され、吉備地方からの移住民の故地を推定するうえで重要なヒントになろう。いずれにしても、中河内地域での初期庄内式甕の成立に関しては、楯築弥生墳丘墓や津寺遺跡、上東遺跡などの吉備地方を代表する遺跡が密集する備中南部地域の足守川遺跡群や百間川遺跡群が関与した可能性が高いと思われ、当該期の両地域間の密接な相互関係が推察される。

Ⅲ．初期庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）から定型化期（庄内Ⅱ）の集落とその展開

前述したように中河内地域での初期庄内式甕の成立は、吉備地方からの移住者を中心とした集落内で創出された可能性が高くなった。これらから、中河内地域の初期庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）の集落の実態は、在地系集落と吉備地方などからの移住民を主体とする外来系の集落が混在する二極化した集落構成を呈していたものと推定される。ここでは、この時期の集落に限定して、前者の集落を「在地系集落」、後者の集落を「外来系集落」と呼称する。これらの二タイプの集落は、奈良盆地から流下し河内平野を北流して河内湖南岸に注ぐ古大和川流域一帯を中心に展開していた。近年の発掘調査成果から、当時の古大和川は八尾市八尾木一丁目付近で分岐し、二方向に分流していたことが確認されており、そのうち北方流路を「小阪合分流路」、北西方流路を「久宝寺分流路」と名付けられている。初期庄内式甕が確認された「外来



谷の前遺跡　竪穴住居47（弥生時代後期）　　足守川加茂Ａ遺跡　竪穴住居11（才の町期−弥生時代後期後半）

足守川加茂Ａ遺跡　竪穴住居30（下田所期ー古墳時代初頭）

図５　吉備地方出土の吉備・畿内折衷甕と庄内式甕（年代は報告書記述による）

系集落」12ヶ所のうち10ヶ所がこの二大河川流域周辺で検出されている。そのうち８ヶ所が「小阪合分流路」中流域の遺跡内で検出されている。左岸側では北から、③萱振遺跡（ＳＤ4001下層）、⑨東郷遺跡第71次（ＳＤ309）、②成法寺遺跡第１次（ＳＷ１）、⑫成法寺遺跡第29次（ＳＫ108）、⑪矢作遺跡第10次（ＳＫ202・203、ＳＤ204）、⑥小阪合遺跡第35次（ＳＤ403）、右岸側では①中田遺跡（刑部土坑）、④中田遺跡Ｎｏ39トレンチ（ＳＸ01）が位置している。これらの初期庄内式甕が出土した遺跡は、特に古墳時代初頭から前期においては、地域での中心的な役割を果たした「東郷・中田遺跡群」と呼称される遺跡群を構成した遺跡に位置している。一方、「久宝寺分流路」の左岸側では、⑦⑧久宝寺遺跡第34次（ＳＫ424・510）の２ケ所で確認されており、これらは「久宝寺・加美遺跡群」を構成した遺跡に位置している。そのほか、⑩長原遺跡09−６調査（ＳＥ7105）は、「久宝寺・加美遺跡群」の南に位置している。

次に、初期庄内式甕の成立に関わる「外来系集落」とその周辺で確認された同時期に存在した「在地系集落」との関連を考えてみたい。なお「在地系集落」として抽出した集落は、初期庄内式甕を製作・所有しない集落で、その比定については、図６、表１で示したように、有稜・有段高杯の各型式の保有関係をもとに認定した。「在地系集落」で確認された当該期の有稜高杯の型式には、弥生時代後期末からの系譜を持つ弥生系高杯Ａ・Ｂ型式がある。さらにＡ型式は、杯部下半に丸味を持つＡ１型式と杯体部が浅く脚部が短いＡ２型式、Ｂ型式は、北鳥池遺跡下層式高杯の系譜を持つＢ１型式と、さらに杯部が深く口縁部が直線的に伸びるＢ２型式に区別される。この４型式以外の庄内系有稜高杯Ｃ１型式、吉備系有稜高杯Ｄ１・Ｄ２型式、有段高杯Ｅ・Ｆ型式の高杯類は「在地系集落」では確認されていない。

そのほか外来系土器の共伴では、瓜生堂遺跡（前期下層）（堀江ほか1980）の吉備系鉢、久宝寺遺跡（05077土坑）（森屋ほか2007）と太田遺跡2005-366（ＳＫ１）（原田2007ａ）の東部四国系（阿波・讃岐）の甕が認められる程度で概して少ない。このように、同時期に存在した「在地系集落」では、「外来系集落」にみられた吉備系の有稜・有段高杯類を含まない点や、外来系土器の共伴が少ないなど、土器組成においても差異が認められた。

このように、古墳時代初頭前葉の中河内地域では、初期庄内式甕を生産した「外来系集落」と非生産の「在地系集落」の共存が認められた。これらの二極化した集落は、古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）には同化して、定型化した河内型庄内式甕を生産する集落に移行している。

以下では、初期庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）の「外来系

集落」と「在地系集落」の集落位置と、その周辺で確認された定型化した河内型庄内式甕を生産した段階（庄内Ⅱ）の集落の推移が明確な類例を示し、当該期の集落のあり方を推察する（図１参照）。

東郷遺跡では、⑨東郷遺跡第 71 次で庄内Ⅰの「外来系集落」、その約 100 ｍ北の東郷遺跡第 36・69 次で「在地系集落」が確認されている。庄内Ⅱでは、その中間に位置する東郷遺跡第 44 次付近に集落が移動しており、庄内Ⅰ～Ⅱを通して約 150 ｍの範囲に集落が展開している。

東郷遺跡の南方に位置し、東郷遺跡と同様「小阪合分流路」の左岸側に位置する⑫成法寺遺跡第 29 次、⑪矢作遺跡第 10 次、⑥小阪合遺跡第 35 次で庄内Ⅰの「外来系集落」を確認している。これらの三例は遺跡名を異にするが近接しており、それぞれの距離は約 270 ｍを測る。これらに関わる「在地系集落」は小阪合遺跡第 13･44 次、中田遺跡第 29 次、91-293 調査で確認されている。庄内Ⅱの集落は、⑫成法寺遺跡第 29 次では、北西約 350 ｍに府教委昭和 60 年調査地、⑥小阪合遺跡第 35 次では、東約250 ｍの小阪合遺跡第42次で確認されている。一方、「小阪合分流路」の右岸側に位置する中田遺跡では、①刑部土坑とそれより西約 370 ｍの④中田遺跡Ｎｏ 39 トレンチ（ＳＸ 01）で「外来系集落」が確認されているが、「在地系集落」については現時点では 300 ｍ圏内では確認されていない。庄内Ⅱの集落は、それより南東約 130 ｍの東弓削遺跡第４次調査で確認されており、検出されたＳＤ１からは、庄内Ⅱの編年指標とされる河内型庄内式甕、大和型庄内式甕のほか、播磨産庄内式甕とされた良好な資料が出土している。

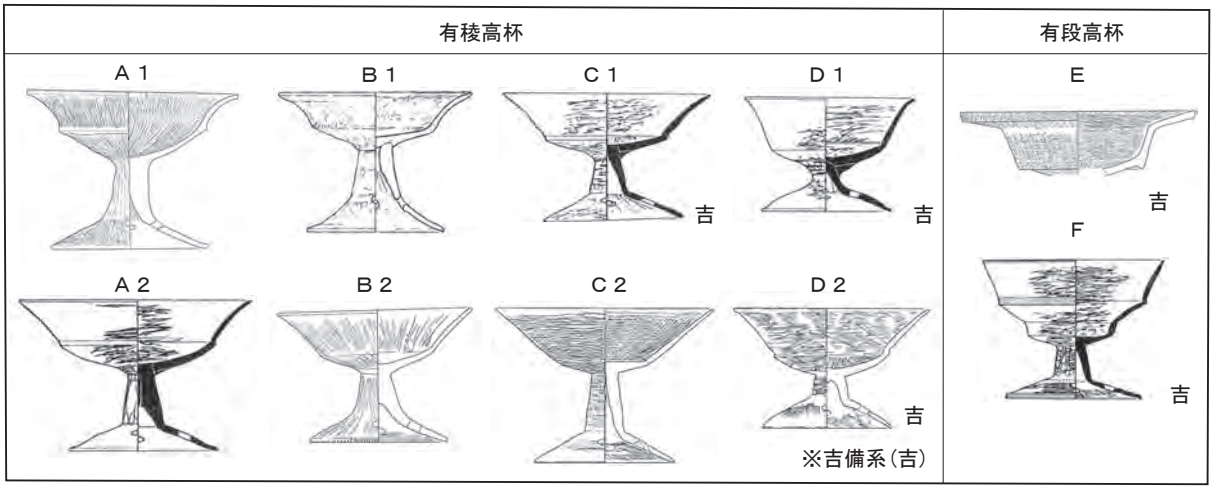
久宝寺遺跡では、第 34 次調査で庄内Ⅰの「外来系集落」が確認されている。これに関連した「在地系集落」は、府センターによる竜華水みらいセンター建設に伴う発掘調査の第５－２ｂ（２）面で検出された竪穴住居９棟で構成される中央部北集落、ならびに竪穴住居の可能性があるものを含めて 14 棟が検出された西部集落があり、「外来系集落」との距離は前者が 150 ｍ、後者が 130 ｍを測る。庄内Ⅱの集落は、府センターによる竜華東西線建設に伴う発掘調査の５区５面で検出された 531 井戸を中心とする集落が、「在地系集落」と「外来系集落」の中間に位置している。このように、この付近では、庄内Ⅰ～Ⅱの集落が約 200 ｍの範囲に展開したことが推定される。

以上の類例から、初期庄内式甕の成立期（庄内Ⅰ）には、「在地系集落」に近接して「外来系集落」が位置し、両者が共存・共生する関係であったことが推定される。続く、河内型庄内式甕として定型化した段階（庄内Ⅱ）の集落は、成立期（庄内Ⅰ）の「在地系集落」「外来系集落」に隣接した位置に集落域が移動する推移が認められた。なお初期庄内式甕成立期の居住域の規模は、竪穴住居や掘立柱建物を中心として、径 100 ｍ以内の範囲に展開していたことが想定される。庄内Ⅱ段階の集落については、集落数の急激な増加と拡散が認められるものの、規模的には庄内Ⅰ段階と同様に推移したことが推定される。

Ⅳ．初期庄内式甕の成立から定型化した河内型庄内式甕へ

初期庄内式甕の成立は、「外来系集落」と呼称した吉備地方からの移住者により、古墳時代初頭前葉に創出された可能性が高くなった。これらから出土した初期庄内式甕は、「く」の字形の口縁部で体部外面はタタキ技法、底部は突出しない小さな平底ないしは尖り底で体部内面にヘラケズリを行うなどの共通した特徴を示すものの、体部外面のタタキ方向などにおいて差異が認められた。これらの差異は、初期庄内式甕の成立に関わる「外来系集落」の分布位置の分散が示すように、その成立要件は共通するものの発生位置は一元的ではなく多元的であったことに起因したものと推定される。

また初期庄内式甕に使用された胎土においては、平野沖積地の在地産が大半を占め、生駒山西麓産は僅少である。生駒山西麓産の特徴とされる閃緑岩を起源とする角閃石は、奥田尚氏（奥田 1993）によれば、平野部東方の生駒山地西麓部の八尾市恩智、水越地区がその産出地とされている。この産出地点は、初期庄内式甕が出土した「東郷・中田遺跡群」からは約３Km、久宝寺遺跡からは約５Km の距離がある。したがって、初期庄内式甕の大半が沖積地の胎土で製作された背景には、初期庄内式甕の製作段階に「在地系集落」の土器製作では通有であった生駒山西麓から産出する角閃石を混和材として土器胎土に使用することや、その取得場所などの集落域の圏外



Ａ１－久宝寺遺跡05076土坑（７）、Ａ２－中田遺跡刑部土坑(56)、Ｂ１－久宝寺南（その２）溝ＳＤ52（９）、Ｂ２－久宝寺遺跡第34次ＳＤ６・701(402)、Ｃ１－中田遺跡刑部土坑(57)、Ｃ２－久宝寺遺跡（竜華東西線）531井戸(340)、Ｄ１－中田遺跡刑部土坑(61)、Ｄ２－成法寺遺跡第29次ＳＫ108(27)、Ｅ－久宝寺遺跡（水処理）05076土坑（６）、Ｆ－中田遺跡刑部土坑(62)

図６　中河内地域における庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）から定型化段階（庄内Ⅱ）の有稜・有段高杯分類

表１　中河内地域における初期庄内式甕成立期（庄内Ⅰ）の外来系・在地系集落出土の有稜・有段高杯の組成と外来系土器

集落種別	資料名	有稜高杯							有段高杯		外来系土器
		A１	A２	B１	B２	C１	D１	D２	E	F	
外来系	①中田遺跡刑部土坑		○			○	○	○		○	吉備（壺・甕・鉢・高杯）
〃	③萱振遺跡（ＳＤ 40001 下層）	○			○	○	○		○		吉備（壺・高杯）、東海（瓢壺）、小形器台
〃	⑤八尾南遺跡（井戸１）				○				○		東部四国（壺）、淡路（甕）
〃	⑥小阪合遺跡第 35 次（ＳＤ 403）	○	○								吉備（鉢）
〃	⑧久宝寺遺跡第 34 次（ＳＫ 510）			○					○		
〃	⑨東郷遺跡第 71 次（ＳＤ 309）			○	○						吉備（ＳＯ 201 高杯）
〃	⑩長原遺跡 09 － 6 調査（ＳＥ 7105）			○							吉備（甕･鉢）、讃岐（甕）、北近畿（甕）、近江（小形器台）
〃	⑪矢作遺跡第 10 次（ＳＫ 202・203、ＳＤ 204）				○			○			吉備（壺）
〃	⑫成法寺遺跡第 29 次（ＳＫ 108）							○			吉備（台付長頸壺・鉢）、讃岐（甕）
在地系	瓜生堂遺跡（前期下層）		○								吉備（鉢）
〃	美園遺跡（ＣＳＫ 301）	○									
〃	東郷遺跡第 36 次（土器群Ⅰ～Ⅲ）				○						東海系（甕・高杯）
〃	東郷遺跡第 69 次（ＳＤ 205）			○							
〃	小阪合遺跡第 13 次（ＳＷ１）				○						
〃	小阪合遺跡第 44 次（ＳＯ 321）				○						
〃	中田遺跡 91-293（ＳＸ 01）			○							
〃	中田遺跡第 29 次第１グリッド（ＳＫ１）		○		○						
〃	久宝寺遺跡第 14 次（ＳＤ 301）			○							
〃	久宝寺遺跡第 34 次（ＳＤ６・７01）			○	○						
〃	久宝寺遺跡第 47 次（ＳＯ 501）										
〃	久宝寺南（その２）（ＳＤ 51）			○							
〃	久宝寺南（その２）（ＳＤ 52）			○	○						
〃	久宝寺遺跡（水処理）(05007 土坑）	○	○	○	○						
〃	久宝寺遺跡（水処理）（05009 井戸）				○						
〃	久宝寺遺跡（水処理）（05076 土坑）	○									
〃	久宝寺遺跡（水処理）（05077 土坑）	○		○	○						阿波（甕）
〃	跡部遺跡第 23 次（ＳＤ３）	○			○						
〃	太田遺跡 2005 － 366（ＳＫ１）			○	○						讃岐（甕）

におよぶ情報を「外来系集落」が認知するに至らなかったことに起因していると思われる。

一方、中河内地域で成立した初期庄内式甕と同形状の初期庄内式甕は、奈良盆地東南部の纒向遺跡においても確認されている。関川尚功氏は「大和型庄内式甕の出現とその意義」『古墳出現期土器研究』第６号（関川2019）で纒向遺跡第 192 次ＳＸ -113、辻土坑２、東田土坑３出土の初期庄内式甕を紹介されている。これらの資料は、中河内地域の初期庄内式甕に併行するものと考えられ、辻土坑２出土の有稜高杯（24）などは、中河内地域の初期庄内式甕の成立期にみられる有稜高杯Ｂ２型式に酷似している。また、外来系土器は、辻土坑２から東部四国系小形鉢、東田土坑３からは東海系の壺、甕などが出土しているが吉備系土器の共伴は無く、中河内地

域での初期庄内式甕成立期にみられた、吉備地方との直接的な関係を見出すことはできない。したがって、纒向遺跡で検出された初期庄内式甕は、成立が先行していた中河内地域からの搬入ないしは、移住に伴いもたらされたと考えるのが妥当で、河内型庄内式甕と同様に、古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）には大和型庄内式甕として定型化し、纒向遺跡を中心にその分布圏を広げている。

古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）の庄内式甕は、生駒山西麓産胎土に特化し、河内型庄内式甕と称される定型化した地域型甕として確立している。成立期から定型化へ至る期間においては、上述したように、成立期に展開した「外来系集落」「在地系集落」の二極化した集落形態が、集落間の日常的な相互交流などを通して同化し、集落数の増加と拡散を果たしている。この時期に製作された庄内式甕には、在地産のＢ２型式と生駒山西麓産のＡ２型式・Ｂ２型式があり、このうち、大半を占める生駒山西麓産のＢ２型式が定型化した河内型庄内式甕にあたる。Ｂ２型式の大概的な特徴は、口縁部は「く」の字状で、体部は球形で底部は突出しない小さな平底ないしは尖り底、体部成形は連続螺旋タタキ技法、内面調整はヘラケズリを行う。胎土は角閃石･長石を含む生駒山西麓産で、焼成は良好で硬質なものが多く、色調は角閃石に起因した暗褐灰色から茶褐色を呈する。庄内式甕Ｂ２型式の成形および調整技法など詳細は以下の通りである。口縁部はタタキ出し手法による「く」の字状口縁で、屈曲部におよぶヘラケズリにより、鋭角な稜線を形成する。口縁端部の形状では、丸く終わるもののほか、端面を持つものには、端面を跳ね上げる、上方に拡張する、擬凹線を持つものがある。体部の形状は、体部の上位に最大径を持つ倒卵形である。体部外面の連続螺旋タタキは右上がりで、タタキの単位は第Ⅴ様式甕に通有な太筋のものと１㎝あたり３～４本程度の細筋タタキが混在している。その後に、初期庄内式甕でも確認された縦方向ないしは斜め方向にハケでタタキを消す調整が行われている。これらの行為は、吉備地方の弥生時代後期の甕にみられるもので、ある種の思想的な要因を含む伝統的な製作技術の一環が庄内式甕に踏襲されたものと考えられる。ただ、庄内Ⅱ段階の庄内式甕においては、庄内Ⅲ段階以降に主流となる体部中位以下の部分をハケで消すものが出現しており、これらは体部内面のヘラケズリによる薄甕指向に対応してタタキで生じた凹凸面を平滑にする目的のために行われた調整と考えられる。

体部内面のヘラケズリ痕跡は明瞭で、ケズリ痕跡に見られる砂粒の動きから、底部から体部中位までが垂直、体部中位が斜め、体部上位が横方向に施されており、器壁は体部上位で３㎜､そのほかは２㎜程度の厚みを持つ。中央部に深みのある靴篦状の工具刃先によるケズリ痕跡からみて､ケズリの工具としは､岡山県津寺遺跡の古･前･Ⅰ～古・前・Ⅱに比定される竪穴住居 143・147・152・157（亀山ほか 1997）出土の鉄製鉋（図８）のような硬質素材の工具が想定されるが、現時点では同型のものやこれに代わるものは中河内地域では確認されていない。

一方、土器胎土には混和材として、裸眼ないしは実体鏡で確認できる生駒山地西麓で産出される閃緑岩質岩起源とされる角閃石・長石の粒子を含む胎土が使用されている。生駒山西麓産胎土の使用は、庄内式甕の成形時における粘土の粘着性・可塑性や、薄甕の指向による強度低下を補うための高い温度焼成に充分な耐火性・収縮性などの要件を満たす諸条件に合致していたためと考えられる。このように、古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）には、八尾市域内での集落間の協業関係を通じて、生駒山西麓産胎土の取得可能な社会的秩序が整っていたものと示唆される。なお現時点では、集落内における庄内式甕の製作工房の痕跡や焼成土坑およびその痕跡のほか、失敗品を廃棄した物原的な存在は確認されていない。

このように、生駒山西麓産胎土に特化した河内型庄内式甕Ｂ２型式（図７）は、定型化へと向う漸移相のなかで細部においては差異が認められるものの、大概的には製作技法、胎土、焼成などの諸属性の規格性を統一して製作された甕であったと思われる。なお、森岡秀人・西村歩氏は「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（森岡・西村 2006）で、河内型庄内式甕Ｂ２型式の標識の一つとされる庄内Ⅱ期の久宝寺遺跡 531 井戸（西村ほか 2004）出土の吉備系高杯（346）、北陸系複合口縁壺（273）との共伴から定型化した時期は、高橋護氏編年（高橋 1988）のⅨｃ期、田嶋明人氏編年（田嶋 1986）の漆町４群頃と推定される。これらから、中河内地域における初期庄内式甕の成立時期が高橋護氏編年のⅨｂ期に遡ることを示唆されている。

庄内Ⅱ段階においては、これらの庄内式甕のほか、高

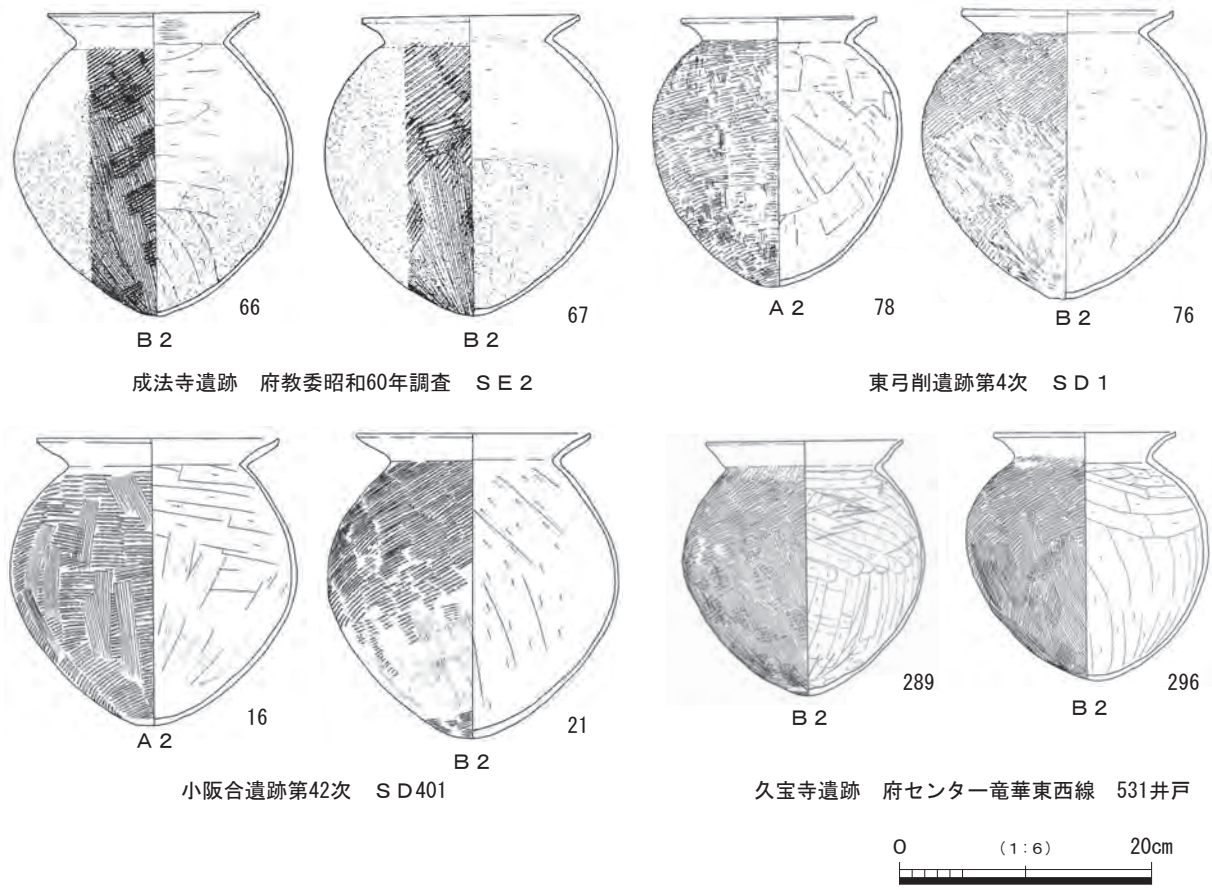


図７　古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）の河内型庄内式甕Ａ２型式とＢ２型式の類例

杯では庄内系高杯を代表する精製品の高杯Ｃ２型式や、吉備系の有段高杯Ｆから派生した二段屈曲の杯部を持つ高杯の確立がある。そのほか、受部が貫通しない型式の小形精製器台や小形精製鉢が確立しており、庄内式土器様式の組成が完成している。ただ、甕形土器においては庄内式甕が主体となるものの第Ⅴ様式系甕も存続して使用されている。そのため、この時期には、炉内で置いて焚く第Ⅴ様式系甕と、石や土製支脚などを用いて浮かして焚く庄内式甕が共存しており、調理用途や調理具材に即した甕の使い分けが行われていたものと推定される。これらの、調理様式の変化のなかで竪穴住居内の炉形態などにも何らかの影響を与えたものと推察される。

Ⅴ．まとめ

中河内地域における初期庄内式甕成立期の古墳時代初頭前葉（庄内Ⅰ）から、河内型庄内式甕として定型化を果たす初頭中葉（庄内Ⅱ）への庄内式甕の変遷を中心に、当該期の集落動態や土器組成の変化などを考察した。その結果、有稜・有段高杯の組成の違いから初期庄内式甕成立期の平野部の集落は、「在地系集落」の近隣地に遠隔地からの移住者を主体とする「外来系集落」が位置し、両者が混在する二極化した状況で展開していたことが確認された。

初期庄内式甕は、このような集落構成のなかで吉備地方からの移住者を主体とする「外来系集落」において、河内地域の弥生時代終末期とされる「北鳥池下層式」の後半頃に吉備地方での土器製作技法を用いて、同時期に多元的に成立した蓋然性が高くなり、従前からの諸説を追認する結果となった。この時期は寺澤薫氏（寺澤 1986）により提唱された庄内０式にあたる。ただ、吉備地方においても初

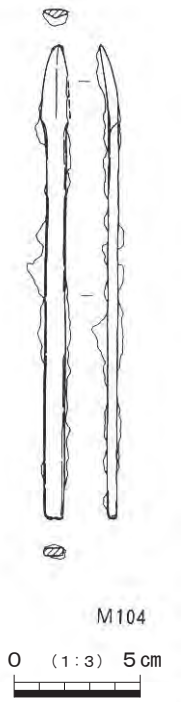


図８　鉄製鉇（竪穴住居 143）［『津寺遺跡４』から転載］

期庄内式甕の萌芽につながる畿内型折衷甕や庄内式甕酷似形式の存在が確認されており、中河内地域で成立した初期庄内式甕そのものが吉備地方の備中地域からの移住者により製作された「臨地製土器」の可能性があることを示唆した。森岡秀人氏は「初期庄内形甕をめぐる諸論の争議と論点の行方」『古墳出現期土器研究』第６号（森岡 2019）において、初期庄内式甕の胎動のモデルとして①吉備型甕・外反口縁タタキ甕融合吉備発生説、②吉備型甕･外反口縁タタキ甕融合西播磨発生説、③吉備型甕･大和産外反口縁タタキ甕融合大和発生説、④吉備型甕・山城産外反口縁タタキ甕融合山城発生説、⑤吉備型甕・中河内産外反口縁タタキ甕融合河内発生説、⑥吉備型甕融合中河内発生後､伝播大和東南部発生説（纒向発現説･飛鳥地域発現説）、⑦中河内・大和同時二元論発生説の７説を挙げられている。そのなかでこれまでは、⑤吉備型甕・中河内産外反口縁タタキ甕融合河内発生説が有力な説と考えられてきたが､初期庄内式甕が「臨地製土器」であったとすれば①吉備型甕・外反口縁タタキ甕融合吉備発生説も有力な説になり得るし、吉備地方からの移住者の移住先の如何では、中河内地域以外の地域でも発生した可能性を含んでいる。なお、大和東南部での初期庄内式甕の発生については⑥説が現時点では有力と考えられる。

続く、古墳時代初頭中葉（庄内Ⅱ）においては「在地系集落」「外来系集落」の同化から河内型庄内式甕と呼称される地域型庄内式甕が確立し、初期庄内式甕の成立をみた「小阪合分流路」「久宝寺分流路」の二大河川を中心として、集落数の増加や集落分布の拡散が確認されている。

このように初期庄内式甕の成立から定型化した河内型庄内式甕への早急な変化の動因としては、初頭中葉（庄内Ⅱ）段階の集落数の増加・密集化に伴う構成員の増加で生じた食料や燃料の問題に対応して、熱効率に優れた薄甕を創生ぜざるを得ない社会情勢を反映したものと推定される。

この時期には、小阪合遺跡第 42 次出土の手焙り形土器（坪田 2009）にみる準構造船の絵画や久宝寺遺跡出土の準構造船（赤木ほか 1987）などから、「小阪合分流路」、「久宝寺分流路」の河川を介して八尾市域南部までの通航が可能で、この流域には川津的な役割を果たした集落が存在したことが推定されている。初頭中葉（庄内Ⅱ）に地域型甕として商品化された河内型庄内式甕は、この時期以降に、これらの準構造船や水運を通じて広く西日本一帯に拡散されたことが確認されている。

中河内地域は、瀬戸内海交通の終着地点の河内湖南岸に位置し、卑弥呼共立から初期ヤマト王権時代にあっては、政治の中枢を形成した奈良盆地東南部へ向かう玄関ないしは外港、中継地としての役割を果たした。

古墳時代初頭前葉（庄内Ⅰ）～中葉（庄内Ⅱ）の中河内地域で見られた初期庄内式甕の成立から定型化した河内型庄内式甕への土器相の変化は、奈良盆地東南部を中心に大きく変革した社会情勢の一環を反映した事象と考えられる。

【註記】

１）庄内式期の時期認識においては、古墳の発生時期などの関連も相俟って、調査組織や個人別により弥生時代後期末、弥生時代終末期、古墳時代早期、古墳時代初頭、古墳時代前期初頭などの表記がみられる。庄内式期の甕の表記においても、庄内式甕、庄内形甕のほか地域型の地名を前後にするなど、概念や識別用語などの統一が困難な状況下にある。ここでは、これまでの中河内地域での既往研究の経緯に従って、河内型庄内式甕とする。庄内式期の時代区別としては、古墳時代初頭として前葉･中葉･後葉と区別した。なお、2017･2020『新版　八尾市史　考古編１・２』では、庄内式期を古墳時代早期としており、個人的にはこちらが流布することを望む。

【参考文献】

赤木克視・一瀬和夫　1987『久宝寺南（その２）』　大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター

秋山浩三　2002「摂河泉の吉備系土器」『邪馬台国時代の吉備と大和』　香芝市教育委員会、香芝市二上山博物館

浅倉秀昭ほか　2005「土井遺跡　谷の前遺跡　慶運寺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 191』　岡山県教育委員会

荒川和哉　2007「Ⅱ　東郷遺跡第 36 次調査（ＴＧ 91 － 36）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告 97』（財）八尾市文化財調査研究会

市村慎太郎　2013「畿内地域の４期画期」『東生』第２号　東日本古墳確立期土器検討会

市村慎太郎　2019「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理（１）『古墳出現期土器研究』第６号　古墳出現期土器研究会

江見正巳　1980「百間川原尾島１　時代区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 39』　岡山県教育委員会

奥田尚　1993「付章　東弓削遺跡出土の砂礫種」『八尾市埋蔵

文化財発掘調査報告』 財団法人八尾市文化財調査研究会報告 37 （財）八尾市文化財調査研究会
亀山行雄ほか 1997『津寺遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 116 岡山県教育委員会
河合忍 2015「中国・四国」『弥生土器』 ニューサイエンス社
河合忍 2018「山陽東部」『前期古墳編年を再考する』六一書房
島崎東 1995「足守川河川改修工事に伴う発掘調査 足守川加茂Ａ遺跡 足守川加茂Ｂ遺跡 足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査発掘調査報告 94』 岡山県教育委員会
嶋村友子ほか 1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
杉本厚典 2001「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」『研究紀要』第４号 財団法人大阪市文化財協会
杉本厚典 2006「河内地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
関川尚功 2019「大和型庄内式甕の出現とその意義」『古墳出現期土器研究』第６号 古墳時代出現期土器研究会
高木真光 1981「中田遺跡〈刑部地区〉」『昭和 53・54 年度発掘調査年報 八尾市文化財調査報告７』 八尾市教育委員会
高萩千秋 1990「小阪合遺跡 第８・10・13・16 次調査報告」『（財）八尾市文化財調査研究会報告 26』（財）八尾市文化財調査研究会
田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』石川県教育委員会
高橋護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告９』 岡山県立博物館
田中清美 2011『長原遺跡発掘調査報告ⅩⅨ』 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
坪田真一 1998「Ⅱ 東郷遺跡（第 44 次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 61』（財）八尾市文化財調査研究会
坪田真一 2008「久宝寺遺跡第 14 次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 122』（財）八尾市文化財調査研究会
坪田真一 2009「Ⅰ 小阪合遺跡（第 42 次調査）」『（財）八尾市文化財調査報告 126』（財）八尾市文化財調査研究会
坪田真一 2011「Ⅲ 小阪合遺跡（第 44 次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 135』（財）八尾市文化財調査研究会
寺澤薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第 49 冊） 奈良県立橿原考古学研究所
成海佳子 2003「Ⅴ 久宝寺遺跡第 47 次調査（ＫＨ 2002－47）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 78』（財）八尾市文化財調査研究会
成海佳子・河村理恵 2009「Ⅴ 東郷遺跡第 69 次（ＴＧ 2007－69）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告 127』（財）八尾市文化財調査研究会
西村歩ほか 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 118 集 （財）大阪府文化財センター
西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム８資料集 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
西村公助 2017『成法寺遺跡第 29 次調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告 155 （公財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 1993ａ「Ⅱ 久宝寺遺跡（第１次調査） 第５章 まとめ」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 37 （財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 1993ｂ「Ⅰ 東弓削遺跡（第４次調査）」『（財）八尾市文化財調査報告 37』（財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 1996「ⅩⅠ 中田遺跡（第 29 次）」『財団法人（財）八尾市文化財調査研究会報告 53』（財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2003「中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第 29 次発掘調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 74 （財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2004「Ⅱ 跡部遺跡第 23 次調査（ＡＴ 96－23）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 81』（財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2007ａ「１－１太田遺跡（2005-366）の調査」（八尾市内遺跡平成 18 年度発掘調査報告書）『八尾市文化財調査報告 55』八尾市教育委員会
原田昌則 2007ｂ『久宝寺遺跡第 34 次発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告 96 （財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2008「Ⅲ 小阪合遺跡（第 35 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告 116』（財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2020ａ『東郷遺跡第 71 次調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告 162 （公財）八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2020ｂ「２．庄内式甕の成立と拡散」『新版八尾市史考古編２』八尾市史編纂委員会
原田昌則 2021「Ⅳ 矢作遺跡（第 10 次調査）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究報告 167』（公財）八尾市文化財調査研究会
伴野幸一 2006「近江地域－野洲川流域を中心に－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
平井泰男 2010「吉備における古墳出現期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第 30 号
広瀬雅信ほか 1992『萱振遺跡』（大阪府文化財調査報告書第 39 輯）大阪府教育委員会
福田英人 1986『中田遺跡発掘調査概要－柏原・八尾幹線下水管渠築造工事に伴う調査－』大阪府教育委員会

堀江門也ほか 1980『瓜生堂』大阪府教育委員会（財）大阪文化財センター
正岡睦夫 1995「津寺遺跡２　時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 98』 岡山県教育委員会
宮野淳一・山田隆一・瀬川眞美子 1991『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
森岡秀人 1999「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』ⅩⅨ　庄内式土器研究会
森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
森岡秀人 2019「初期庄内形甕をめぐる諸論の争議と論点の行方」『古墳出現期土器研究』第６号　古墳出現期土器研究会
森屋美佐子・亀井聡ほか 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』（（財）大阪府文化財センター調査報告書第 156 集）（財）大阪府文化財センター
柳瀬昭彦 1977「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 16』岡山県教育委員会
米田敏幸 1981「古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
米田敏幸ほか 1983『成法寺遺跡－八尾市光南町１丁目 29 番地の調査－』（財）八尾市文化財調査研究会
米田敏幸 1991「土師器の編年　Ⅰ近畿」『古墳時代の研究』６雄山閣
米田敏幸 1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究Ⅶ』庄内式土器研究会
米田敏幸 2019「庄内式期Ⅰの認識整理と今後の課題について」『古墳出現期土器研究』第６号　古墳出現期土器研究会
吉田野乃 1992「８．中田遺跡（91-293）の調査」（八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告Ⅱ）『八尾市文化財調査報告 26』八尾市教育委員会
若林邦彦 1999「河内平野南遺跡群における弥生後期から古墳前期土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態』Ⅶ　大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター
渡辺昌宏ほか 1985『美園』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

纒向遺跡出土のキビ系土器

草　原　孝　典

Ⅰ．はじめに

纒向遺跡から外来系の土器が数多く出土するのは周知の事実である。小稿では、そのうちキビ系の土器を取り上げ、分布と出土傾向について整理し、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の時期に、各地の土器が移動している背景について若干の考察を行う。

ところで、キビとは『古事記』、『日本書紀』（以下『記・紀』）で、天皇に対して３度も反乱を企てた伝承を有する豪族の拠点地である吉備を指標としている。吉備とは、令制下で備前国、備中国、備後国、美作国に分割され（狩野 2000）、それらをまとめると、現在の岡山県全域と広島県東半に相当する範囲になる。しかしながら、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭は、備前国から備中国の南半に広がる岡山平野と重なる範囲に、土器の地域圏が形成される。各地で出土するキビ系土器は、基本的に岡山平野の土器である。したがって、小稿では『記・紀』や令制国で示される吉備とは異なるという意味で、岡山平野を中心とした地域をキビ地域とする。同様に、小稿で使用する旧国単位についてはカタカナで示す。

Ⅱ．纒向遺跡のキビ系土器の分布

纒向遺跡は、奈良盆地の東南部に位置し、弥生時代後期後半から形成され、墳長 278 mの巨大古墳である箸墓古墳、墳長 100 m未満の中型古墳である纒向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳が築かれ、王宮とされる建物群、導水施設を伴った祭祀場、運河などがあり、東は関東、西は九州までの土器が出土していることから、日本列島の中枢と考えられている（桜井市教育委員会 2016）。

纒向遺跡の発掘調査報告書からキビ系土器を抽出し

表１　纒向遺跡出土のキビ系土器

番号	調査年次・遺構	出土遺物・数			文献
		甕	壺	鉢	
1	纒向遺跡 第４次				石野ほか 1976
	辻地区古墳前期河道	5		1	
	辻地区東田地区	2			
	辻地区土坑３	2			
	辻地区土坑７	1			
	東田地区南溝	3			
2	纒向遺跡 第 23 次 －昭和 54 年度遺跡範囲確認発掘調査概報－	2			萩原 1980
3	纒向遺跡 第 90 次				萩原ほか 1997
	SD-1001	1	1		
4	纒向遺跡 第 132 次				木場ほか 2003
	第２トレンチ	2			
	第２トレンチ SX3001	3		2	
	第２トレンチ SE3001	1			
5	纒向遺跡 第 129 次				清水ほか 2003
	第１トレンチ	2			
6	纒向遺跡 第 134 次				清水ほか 2003
	土坑３	2			
7	纒向遺跡 第 42 次				橋本ほか 2007
	溝３	6			
	落ち込み			1	
	B 区ピット群	1			
8	纒向遺跡　第 23, 27, 31, 33, 47, 48 次				橋本ほか 2009
	方形周溝墓３溝 25	1			
	方形周溝墓３溝 29	1			
9	纒向遺跡 第 159 次				松宮ほか 2010
	土坑１	1			
10	纒向遺跡 第 174 次				福辻ほか 2014
	SX105	1			
	その他の遺構・包含層	1			
11	纒向遺跡 第 184 次				丹羽ほか 2019
	第４トレンチ	1			
12	纒向遺跡 第 58 次	1			森ほか 2018
13	纒向遺跡 第 192 次				三沢ほか 2019
	SX-113	2			
14	纒向石塚古墳				橋本ほか 2012
	石塚第３トレンチ	2			
	石塚墳丘盛土	1			
	方形周溝墓２	1			
15	東田大塚古墳				橋本ほか 2006
	SD-1001	2			
集　計		48	1	4	

たのが表１と図１で、出土地点を示したのが図２である。纒向遺跡で出土する外来系土器の占める比率は15～20％で、そのうち49％がトウカイ（東海）系で、キビ系は７％とされている（関川1976）。したがって、キビ系土器の占める割合は出土土器の１％程度ということになろう。さらに、刊行されている発掘調査報告書の次数から数えると、９％未満の調査次で出土している。これは、キビ系土器の分布密度を示す参考値といえるかも

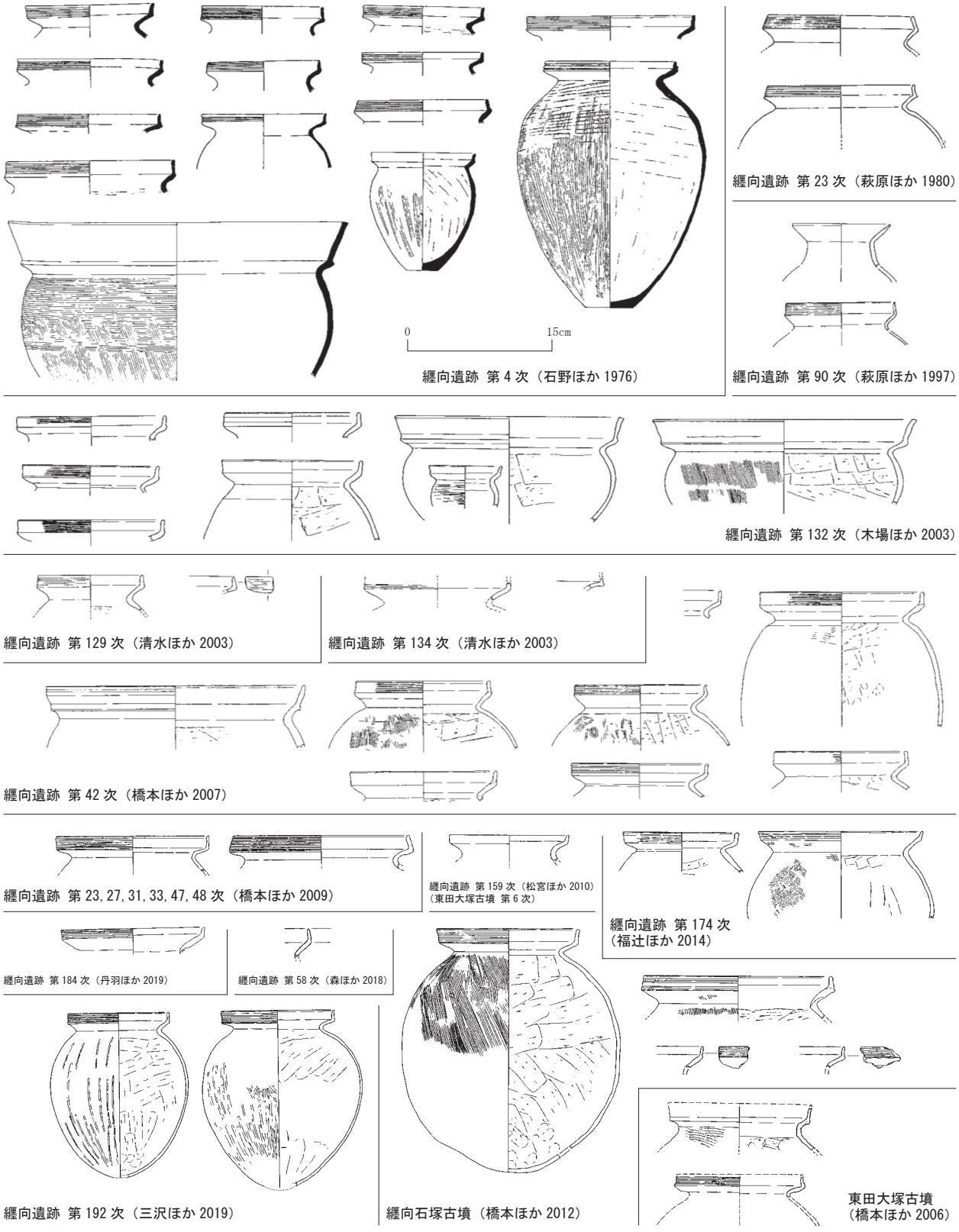


図１　纒向遺跡出土のキビ系土器

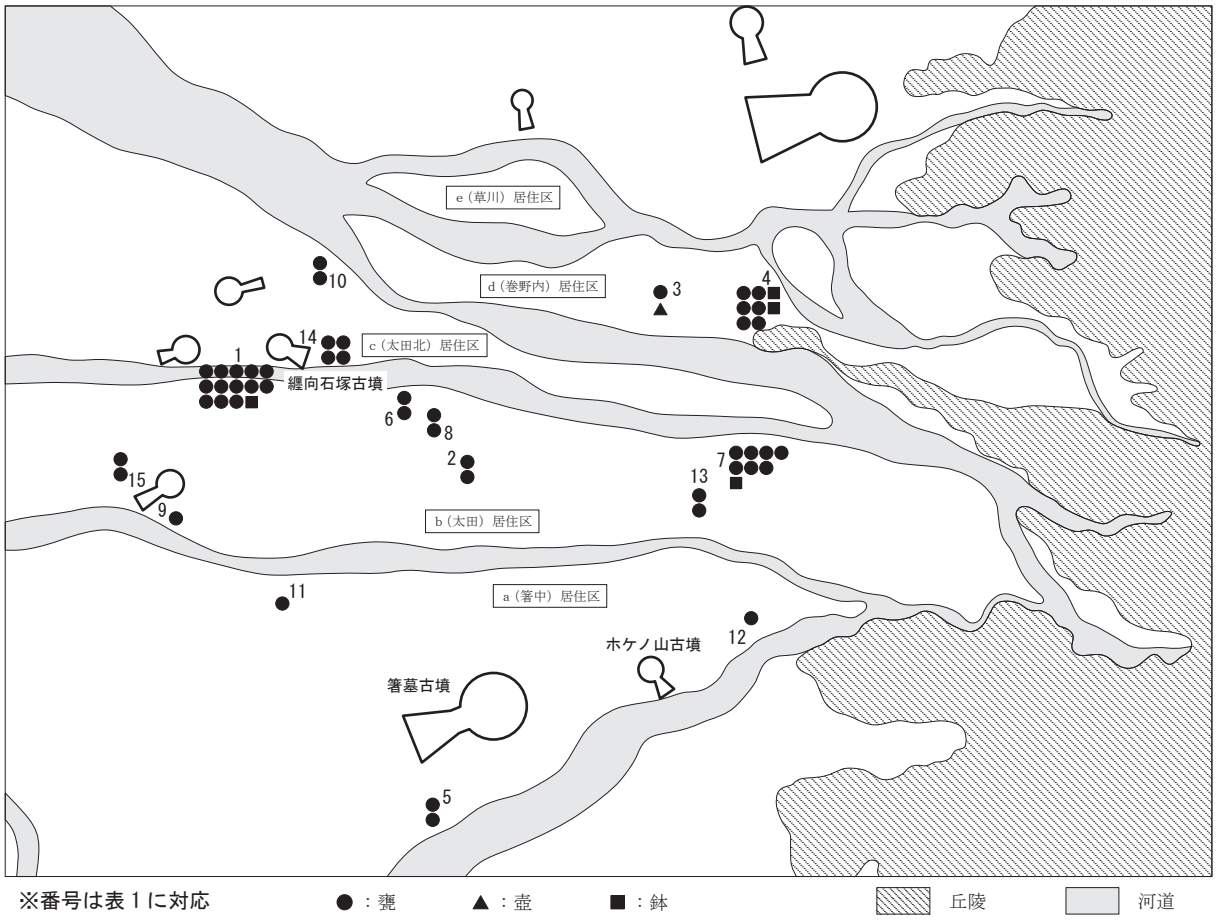


図２　纒向遺跡出土のキビ系土器分布

しれない。

次に、出土地点の分布傾向を見てみたい。図２には、出土した土器の数量と器種も記入している。纒向遺跡を微地形から見ると、三輪山や巻向山の裾で纒向川などの小河道によって形成された扇状地状地形の部分と、その裾部分に接する沖積平野に分けられる。古墳の分布を見ると、ホケノ山古墳は扇状地状地形、纒向石塚古墳などは沖積平野、箸墓古墳は扇状地状地形と沖積平野の境付近に築かれている（藤岡 1962）。居住区は、丘陵部から流れ出た小河道によってａ～ｅの５つに分かれている（桜井市教育委員会 2016）。キビ系土器の出土地点は、ａ～ｄの４つの居住区で認められる。ａ居住区では３つの調査区、ｂ居住区では７つの調査区、ｃ居住区では３つの調査区、ｄ居住区では２つの調査区で出土している。ｂ居住区は他の居住区と比べて調査区数が多いものの、７、13 の調査区と、２、６、８の調査区と、９、15 の調査区はそれぞれ近接した調査区であり、それらをまとめると、３調査区ということになり、他の居住区の調査区数と殆ど同じになる。これが妥当だとすると、分布地点数は居住区ごとに顕著な差があるとまではいえないということになる。

土器の出土量では、５個体以上出土する調査区と１～２個体しか出土しない調査区がある。前者は、ｂ、ｃ、ｄ居住区で認められる。出土量については、調査区の面積や出土遺構によって異なると考えられ、むしろ、異なる居住区で複数個体出土する調査区が認められることからすると、特定居住区、あるいは居住区内の特定地点に偏って多量に出土する傾向ではなさそうである。

次に、出土土器の器種組成について見てみると、全体では甕 48 点、壺１点、鉢４点で、甕が出土土器全体の 91％を占める。甕が圧倒的に多数を占めているといえる。各地点でも甕のみの出土地点が最も多いが、ｄ居住区の４の調査区では甕と鉢が複数個体出土している。しかしながら、ｂ居住区のの調査区でも同様であり、複数器種が特定地点や特定居住区で出土するわけではない。

つまり、纒向遺跡におけるキビ系土器は、偏在するのではなく、全体的に分布する傾向といえそうである。

Ⅲ．キビ系土器の時期

次に、纒向遺跡で出土しているキビ系土器の時期について説明しておきたい。キビ系土器については、後期を弥後Ⅰ～Ⅳ期の４小期に、古墳時代前期を古前Ⅰ～Ⅲ期の３小期に分け､各期をさらに細分する（草原 2016）（図３）。古墳時代前期の指標は、甕の平底が喪失することである。纒向遺跡との平行関係では、供伴する外来系土器からすると、纒向Ⅱ式が弥後Ⅳ期、纒向Ⅲ式が古前Ⅰ期、布留０式が古前Ⅱａ期、纒向Ⅳ式が古前Ⅱｂ期以降に想定される。纒向遺跡とキビ地域の土器編年との平行関係をまとめたのが、表２である。

表２　土器編年対比表

本 稿	纒向（寺沢）編年 （寺沢 1986）	柳瀬編年 （柳瀬 1977）	高橋編年 （高橋 1986・1988・1991）
弥後Ⅳａ	纒向Ⅱ式	才ノ町Ⅰ	Ⅸａ
弥後Ⅳｂ		才ノ町Ⅱ	Ⅸｂ
弥後Ⅳｃ			Ⅸｃ
古前Ⅰａ	纒向Ⅲ式	下田所	Ⅹａ
古前Ⅰｂ			Ⅹｂ
古前Ⅰｃ			
古前Ⅱａ	布留０式	亀川上層	Ⅹｃ
古前Ⅱｂ	纒向Ⅳ式		Ⅹｄ
古前Ⅱｃ			Ⅹｅ

弥後Ⅳａ期の指標は、矢部南向遺跡土壙 72（江見ほか 1995）出土の土器群である。弥後Ⅳｂ期の指標となるのは、加茂政所遺跡竪穴住居 27（平井ほか 1999）出土の土器群である。弥後Ⅳｂ期になると、弥後Ⅲ期からの系譜を引く器種がかなり減少する。弥後Ⅳｃ期の指標となるのは百間川原尾島遺跡２竪穴住居 36（岡田ほか 1996）、上東遺跡 P-ト（伊藤ほか 1974）出土の土器群である。弥後Ⅲ期の特徴が完全に払拭される。

古前Ⅰａ期の指標となるのは、加茂政所遺跡竪穴住居 66（平井ほか 1999）出土の土器群である。この期を特徴づけるのは、平底の名残が認められる尖底の甕と短脚傾向の強い高杯である。また、新たな器種として、口縁部が「ハ」字形に開く小型器台が認められるようになる。古前Ⅰｂ期の指標になるのは、鹿田遺跡６土器だまり１（光本ほか 2010）、百間川原尾島遺跡１井戸２（中野ほか 1980）出土の土器群である。古前Ⅰｃ期の指標になるのは、百間川沢田遺跡３土壙 117（井上ほか 1993）出土の土器群である。壺にも丸底が認められるようになる。

古前Ⅱａ期の指標となるのは、百間川原尾島遺跡３井戸７（宇垣ほか 1994）、矢部南向遺跡竪穴住居 62 上層（江見ほ

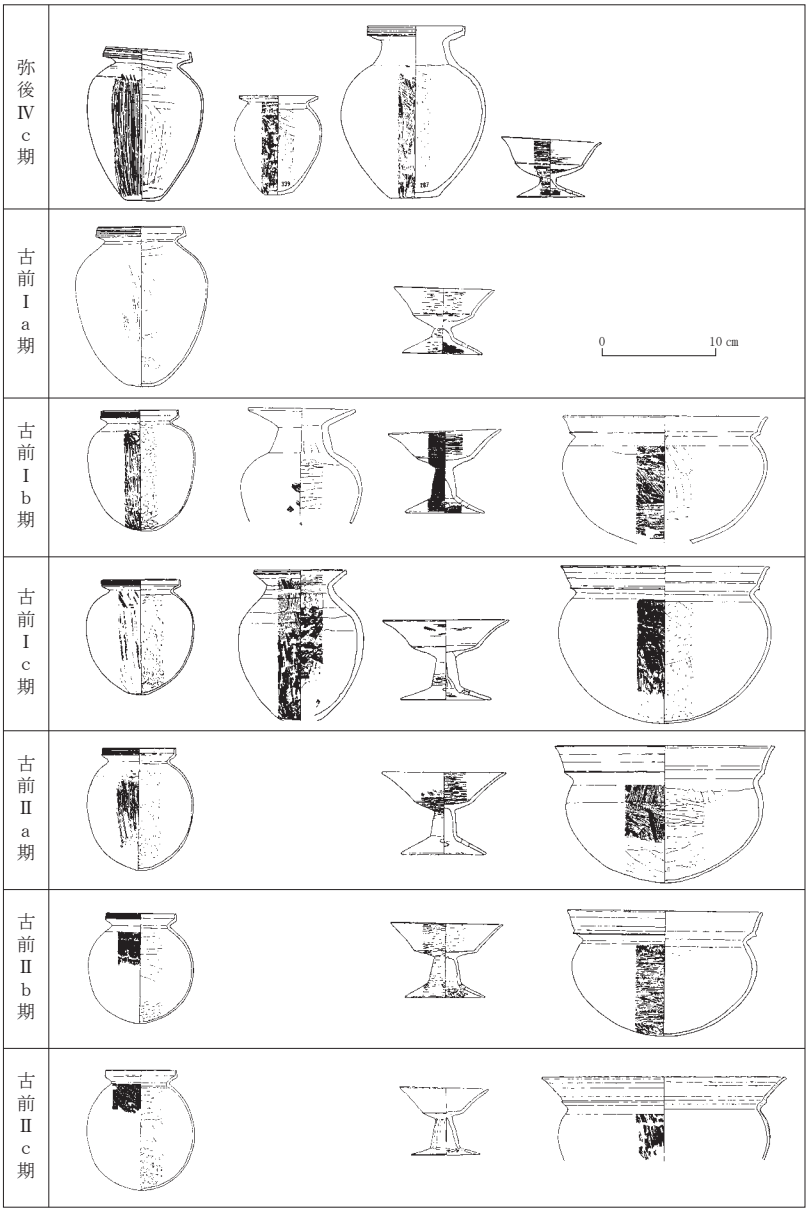


図３　吉備地域の土器（抄）

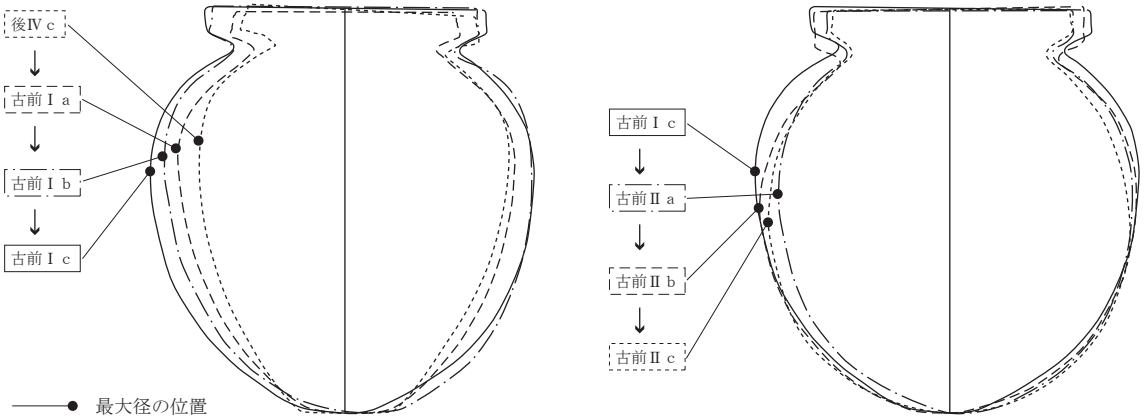


図４　吉備型甕の外形比較

か 1995)、加茂Ａ遺跡竪穴住居 21（河本ほか 1995)、津島遺跡６井戸３（島崎ほか 2005）出土の土器群である。小型器台・小型丸底壺・小型有段鉢が認められるようになる。古前Ⅱｂ期の指標となるのは、津寺遺跡５の竪穴住居 310(高畑ほか 1998)、井手天原遺跡の竪穴住居７(亀山ほか 2001）出土の土器群である。壺は、二重口縁壺と短頸壺のみとなる。古前Ⅱｃ期の指標となるのは、津島遺跡４竪穴住居 46、同井戸３（高畑ほか 2003)、津島遺跡６井戸１（島崎ほか 2005)、百間川沢田遺跡２井戸 18（岡田ほか 1985)、百間川沢田遺跡３井戸３、４、５、６（井上ほか 1993）出土の土器群である。小型器台は中空で、いわゆるＸ器台となる。

纒向遺跡で出土しているキビ系土器の時期は、弥後Ⅳ期から古前Ⅱ期である。最も多く出土しているのは、口縁部が受け口状で器壁の薄いキビ型甕である。キビ型甕は弥後Ⅲ期から認められるが、古前Ⅰ期以降は口縁外端部にクシ描文をめぐらし、調整、施文も均一化され、出土する甕の８割前後を占めるようになる（草原 2011)。形態変化が漸次的なため、弥後Ⅳｃ期から古前Ⅱｃ期までの外形を器高に合わせて重ねた（図４)。そうすると、弥後Ⅳｃ期から古前Ⅰｃ期までは段階的に胴部が広がり、それとともに最大径の位置が下がっている。また古前Ⅰｃ期を起点とすると、古前Ⅱ期以降は器高に対して肩部径が縮小する。そして、胴部最大径の位置も段階的に下がり、古前Ⅱｃ期には下ぶくれの形態となる(図４)。この期以降になると、キビ型甕は認められなくなる。

纒向遺跡で出土しているキビ系土器のうち、完形、もしくは完形に近い土器が４点あり、いずれもキビ型甕である。図３と図４から、ｃ居住区の１調査区で出土した甕は弥後Ⅳａ期で、ｂ居住区の 13 調査区で出土した甕は古前Ⅰａ期と古前Ⅰｂ期、ｃ居住区の 14 調査区で出土した甕は古前Ⅱｂ期である（図１)。他は口縁部周辺の破片であることから、明確な時期を決めることは難しいが、概ね古前Ⅰ～Ⅱ期の時期で、壺と鉢についても同様の時期である。

出土地点と出土土器の時期については、纒向石塚古墳のあるｃ居住区には弥後Ⅳ期が認められ、ｂ居住区の東田大塚古墳でも同時期の可能性のある口縁部片が出土している。微地形的には、両地点とも沖積平野である。最初に沖積平野で、時期が降るにしたがって扇状地状地形にも分布が広がるように見える。しかし、それが有為か無為かは、もう少し弥後Ⅳ期の地点数が増加した段階で検討する必要がある。ただし、古前Ⅰ期以降は、出土地点数や出土数が飛躍的に増加しているとはいえそうである。

Ⅳ．奈良盆地と河内平野のキビ系土器

奈良盆地では、纒向遺跡以外からも同時期のキビ系土器が出土している。それらのうち、纒向遺跡の北側の平等坊・岩室遺跡（石田ほか 2011）と成願寺遺跡（青木ほか 2010)、盆地中央の矢部遺跡（寺沢ほか 1986)、伴堂東遺跡(坂ほか 2002)では、弥後Ⅳ期から古前Ⅱ期の甕、壺、高杯が出土している（図５、６)。そのうち、伴堂東遺跡では土坑から弥後Ⅳ期の壺、甕、高杯が出土しており、キビ型甕以外のキビ系の甕も出土している。平等坊・岩室遺跡と矢部遺跡では古前Ⅰ～Ⅱ期の甕が複数個体出土している。

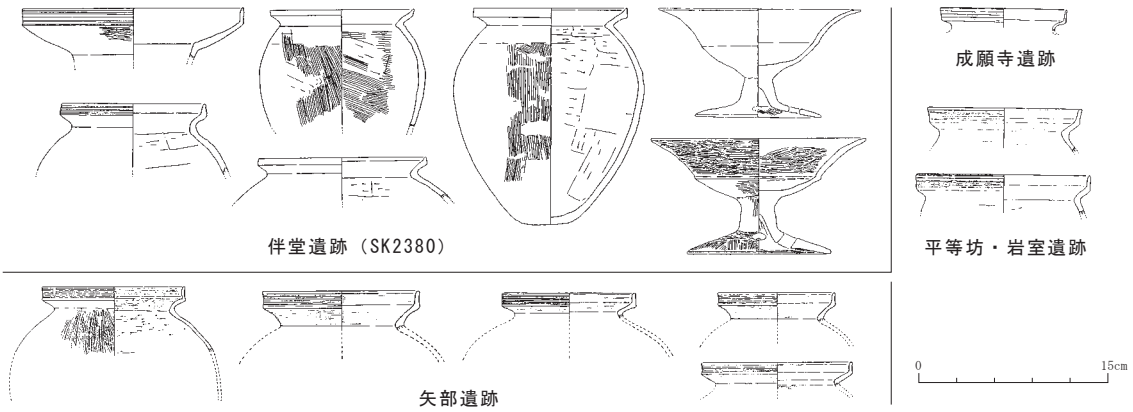


図５　奈良盆地出土のキビ系土器（弥後Ⅳ期以降）

近畿各地で出土しているキビ型甕を中心に、キビ系土器の集成を行った成果によると（図７）、河内平野の遺跡が全出土遺跡の 70％を占め、隣接する奈良盆地よりも分布地点が多い。時期は、弥後Ⅳ期から古前Ⅱ期である。しかし、古前Ⅰ～Ⅱ期が圧倒的に多く、器種も甕が中心である。纒向遺跡の傾向と共通する。河内平野の中田遺跡刑部土坑からは弥後Ⅳ期の土器が出土しており、器種は壺、甕、鉢、高杯で構成されている。しかも甕には、キビ型甕以外も含まれている。これは、奈良盆地の伴堂東遺跡と共通する（秋山 2006）。

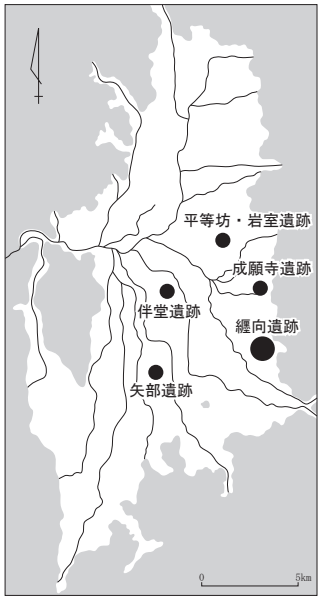


図６　奈良盆地出土のキビ系土器

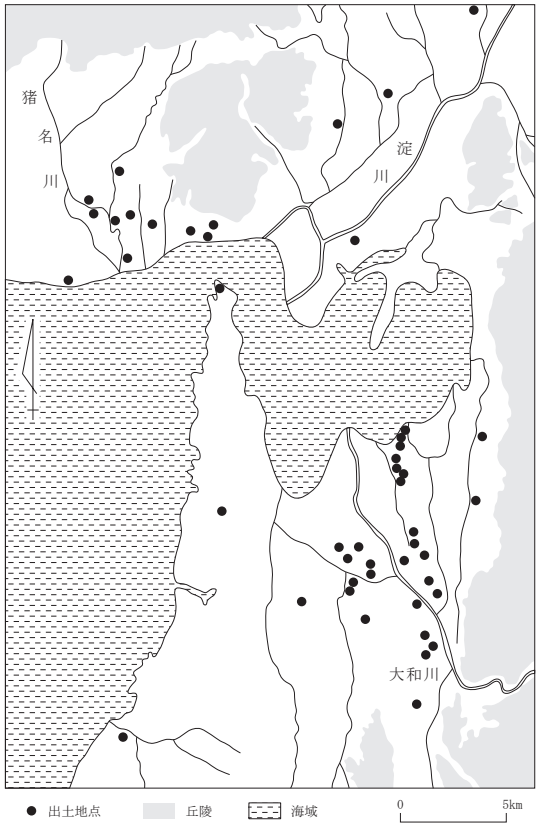


図７　河内平野周辺のキビ型甕の分布
［秋山 2006 を元に作成］

そうすると、奈良盆地と河内平野では、弥後Ⅳ期とそれ以降で、キビ系土器の出土傾向が異なっている可能性が指摘できる。弥後Ⅳ期には３器種以上の土器が出土する場合があり、それはキビ地域の生活様式がそのまま移入されているようにも見える。すでに指摘されている通り、キビ地域からの移住がある程度行われていたことを示している可能性が高い（秋山 2006）。その契機の１つと考えられるのが、キビ地域を襲った自然災害である。キビの中枢地の１つである旭川下流域では、洪水砂で埋没した弥後Ⅳ期の水田跡が広範囲で検出されている（下澤 2000）。水田域が壊滅的な被害を受けたことを示している。そのような突発的なインパクトへの対処として、移住を選択する場合があったのではなかろうか。

一方、古前Ⅰ期以降のキビ系土器は器種が甕に偏り、分布数が飛躍的に増加している。ただし、流通品であったと考えられるほどの量でもない。移住とは異なる何らかの目的を持ったキビ地域の人々の、行動痕跡を示しているように思われる。

次に、その目的について検討する。

Ⅴ．古墳時代前期における土器移動の背景

北部九州地域では弥生時代中期後半に、大型甕棺へ前漢鏡を副葬した首長墓が築かれる。その中で副葬品の多さが突出しているのが伊都国に相当する三雲南小路遺跡と、奴国に相当する須久岡本遺跡である。両遺跡の首長が朝鮮半島の楽浪郡へ朝貢して舶載鏡を贈与され、それを周辺の首長へ配布したと考えられている（岡村 1999）。北部九州の集団間には、三雲南小路遺跡と須久岡本遺跡を最上位とする序列化ができていたといえる。ところが、弥生時代後期になると、北部九州地域の首長は、独自で後漢鏡を獲得していることから、並列的な首長間関係になったとされる（辻田 2019）。中期後半の序列化は、さらなる成層化へは向かわなかった。以上の首長間関係を朝鮮半島からの流通関係に置き換えると、舶載鏡の背後には、当時の列島では生産できない必需物資の１つである鉄（都出 1991）などが想定される。中期後半は特定の集団がそれらを手に入れて各集団へ分配していたが、後期になると各集団が独自で手に入れるようになり、そのため北部九州全体の鉄の流通量も増加した（寺沢 2000、野島 2009）ということなのであろう。そうすると、首長の存在形態を規定していた要因の１つが、朝鮮半島との交易であったと考えることができる。

キビ地域の中枢地である岡山平野では、弥後Ⅲ期に墳長が 80 mにも達する双方中円形の楯築墳丘墓が出現する。キビ地域背後の中国山地を挟んだ北側、日本海沿いのイズモ地域でも四隅突出形で墳長が 40 mの西谷３号墓（渡邊ほか 2015）が出現する。西谷３号墓からは、楯築墳丘墓と同じ特殊器台や特殊壺が出土しており、両地域の首長間に緊密な交流があったことを示している（近藤 1992）。

同様に、日本海側と瀬戸内海側に分布しているのが、福田型銅鐸である。福田型銅鐸は、弥生時代中期後半から末に、北部九州地域の佐賀県の安永田遺跡や本行遺跡、福岡県の赤穂ノ浦遺跡で製作され、九州以外では日本海沿いと瀬戸内海沿いに分布し、瀬戸内海側の東限がキビ地域で、日本海側がイズモ地域、もしくはその隣接地であるホウキ（伯耆）地域である（藤瀬 2016）。それらの分布から、両地域と北部九州を結ぶ交易路が成立していたと考えられている（北島 2004）。この交易路の東限となるキビ地域とイズモ地域で、ほぼ同時期に首長墓が出現している。それは偶然でなく、瀬戸内海流通と日本海流通の相互補完関係が成立したことを示しているのではなかろうか（池淵 2019）。

キビ地域では、楯築墳丘墓以降の首長墓は墳丘規模が縮小し、双方中円形墓も認められない（草原 2016）。その一方で、日本海側のイズモ（出雲）地域では西谷３号墓以降も継起的に同程度の首長墓を築き、四隅突出形の墳丘墓も日本海沿いに分布している（坂本 2006）。キビ地域で、楯築墳丘墓の墳形が踏襲されていないこととは対照的である。さらにイズモ地域の東側で、日本海沿いのタンゴ（丹後）地域に築かれている京都府中郡峰山町の赤坂今井墳丘墓は、一辺が 40 m前後の方形墓で、鉄器や多くの玉類が出土している。時期は弥生時代後期末である（岡林ほか 2004）。タンゴ地域の弥生墳丘墓に多量の鉄製品が出土するようになるのは、弥生時代後期中葉以降とされ（石崎 2004）、同時期に墳丘墓の築造数もピークを迎える（高野 2004）。また、弥生時代後期末の

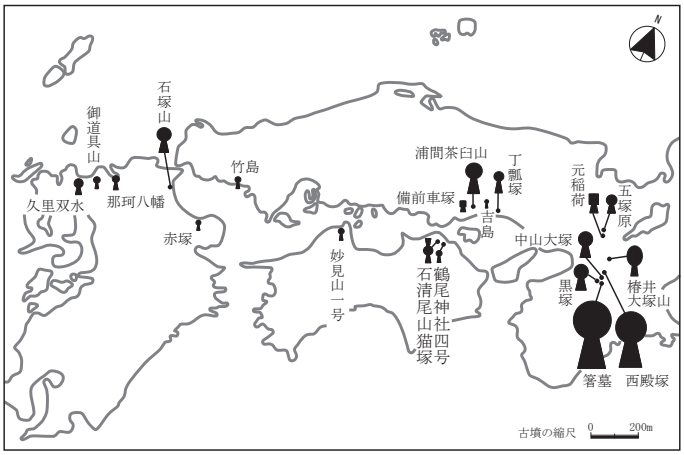


図８　西日本における古墳時代前期初頭の首長墓の分布［白石 1999］

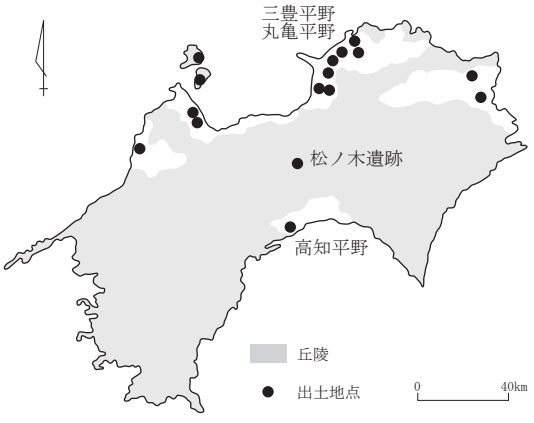


図９　四国地域のキビ型甕の分布［出原 1995 を元に作成］

大型鉄刀の出土量は、北部九州地域や瀬戸内地域よりも日本海沿いの山陰東部地域と北陸西部地域が多く、この両地域では素環刀の生産も行われていたと考えられている（豊島 2005）。それは、鉄素材が十分に確保されていたことを示唆している。日本列島で鉄が生産できるようになるのは６世紀後半からで、それまでは朝鮮半島に依拠していた。そのため、本州島や四国島への鉄素材は、主に北九州地域を経て、瀬戸内海ルートと日本海ルートで運ばれたと考えられる。日本海ルート沿いに分布する首長墓の規模や数、築成状況、鉄刀の分布数を見る限り、弥生時代後期末は日本海ルートの方が優勢であったように見える。

ところが古墳時代前期初頭になると、舶載鏡や鉄器類を副葬する前方後円墳が、瀬戸内海の両岸と北部九州地域や東部九州地域には分布するものの、日本海沿いには分布していない（白石 1999）（図８）。瀬戸内海ルートが、日本列島の主要流通ルートになったことを示している。それが、前方後円墳の時代の流通体系ということになろう。そうすると、首長の役割の１つが、流通ルートの維持にあったことが理解される。そして、このルート上には、キビ地域の甕が分布し、交通の結節点となる地域に集中することも指摘されている（次山 2007）。キビ地域は中部瀬戸内に位置することから、瀬戸内海ルートを安定化する役割を果たしたのであろう。

四国地域で出土しているキビ型甕についても集成されている（出原 1995、梅木 2002）（図９）。時期は古前Ⅰ期からⅡ期である。それらは、瀬戸内海沿岸部で 80％以上が出土しており、瀬戸内海ルートとの関係を示唆している。さらに、キビ地域の対岸に位置する三豊平野や丸亀平野と、太平洋に面した高知平野の中間地点でも出土している。松ノ木遺跡である。松ノ木遺跡は、讃岐国と土佐国を結ぶ古代の南海道にも近接している。四国地域では、太平洋沿岸と瀬戸内海沿岸を結ぶルートがすでにできていた可能性とともに、海路だけではなく、陸路にもキビ地域の影響が及んでいたことを示している。つまり、キビ地域は、瀬戸内海ルートから派生して、各地を結ぶ役割も果たしていたと考えられる。

古墳時代になると、共通する形式の首長墓が汎列島的に分布しているが、それも瀬戸内海ルートを主軸とした流通関係の拡大とともに広がっていったという見方もできるのではなかろうか。首長墓の築成状況を見ると、継起的に築かれる場合、単独で築かれる場合、途切れる場合、突然出現する場合など様々である。それは集団関係の不安定さとともに自然災害や流路変更などの影響を受けやすい、この時期の流通拠点の脆弱さなども反映されていると推測するのである。また、交通の結節点に立地している首長墓があることも、具体的に検証されてきている（滝沢 2020）。

さらに、初期の前方後円墳の規模を見ると、奈良盆地にだけ巨大古墳が築かれている。しかも河内平野に顕著な古墳が認められないことから、河内平野と奈良盆地は一体でヤマト王権となり（白石 1999）、その成立は瀬戸内海ルートへの固定化と不可分の関係にあったと考えられる。日本列島の対外的な流通ルートが瀬戸内海ルートに集約されると、朝鮮半島からの流通物が終着点となるヤマト王権に集積される。そのため、それらの東日本への流通は、ヤマト王権が起点となる。視点を変えれば、東日本の生産物や労働力がヤマト王権に交換財として集まってくることになるわけである。纒向遺跡出土の外来系土器のうち、49％がトウカイ（東海）系土器であることが示唆的である。瀬戸内海ルートへの集約は、ヤマト王権の位置が、どの地域よりも経済的に有利になったことを意味している。

河内平野のキビ系土器は、大和川周辺に分布する傾向が認められるものの、特定の地点に集中するという傾向は認められない（図７）。それは、纒向遺跡でも同様である。キビ地域の人々が王権を中心に活動していたというイメージにはならない。しかも、甕が主体である。甕は、器表面にススが付着して出土することもある煮沸用甕である。この時期の煮沸用甕は、労働力が集中する古墳造営現場で多量に使用されたと想定されている（酒井 1977）。それと同様に、キビ系土器の分布も共通する行動パターンの結果であったとすると、河川や瀬戸内海などの交通路の周辺に分布していることから、物流に関係する活動であったことが推測されてくる。つまり、キビ系土器の分布は、王権との関係よりも経済原理に規定されていたように見えるのである。

箸墓古墳以降、奈良盆地と河内平野には、大和・柳本古墳群、佐紀盾列古墳群、馬見古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群などの、巨大古墳を含む古墳群が出現する。

経済的な視点から見ると、労働力や様々な生産物、流通品などの消費拠点が複数形成されていたことになる。それらの具体像としては、奈良盆地を東西南北に貫く横大路と上ツ道、もしくは山辺道の交点付近で、大和川にも近接している「海石榴市」、あるいは「軽市」、「餌香市」、「阿斗桑市」などの『紀』に記載された古代の市などが参考になる。また、３世紀の日本列島の状況を記述している『三国志』「魏書第三十巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条」の市も参考となろう（寺沢 2011）。古墳築造現場が市の役割も果たし、交易によって生じた余剰物は、古墳築造に消費されたと推測するのである。それは固定的な経済活動といえる。一方、キビ系土器の分布が示すように、集約されていない動的な経済活動を行っている集団の存在も想定される。それは『紀』で、船舶を用いて交易を行っている商客が参考となる。この時期の流通関係は、多様であったといえそうである。

律令国家成立期以前の交易とは、商品流通が展開するものではなく、王権への貢納・輸送であったとされる（平野 1969）。しかし、王権によって編成された協業・分業関係が前提であったとしても、全てが一元的に統制されたものではなかったのではなかろうか。それが、各地の古墳築造を実体化するための経済基盤の１つになっていたと推測するのである。

Ⅵ. 結語

纒向遺跡のキビ系土器を集成したところ、特定の地点に偏在する傾向ではないという見通しとなった。しかし、さらに調査がすすみ、調査成果が資料化されていく中で再検討していく必要があると思われる。また、古前Ⅰ期以降は、土器の器形が地域を越えて平準化する傾向がある。そのため、胎土分析等の手法で産地を明らかにすることができると、搬入された土器が増える可能性はある。ただ、現況の見通しがある程度一般化できるとすると、キビ系土器の移動は、弥生時代後期末と古墳時代前期前半の２段階に分かれることになる。そのうち弥生時代後期末は、キビ地域からの移住が含まれていたと推測した。一方、古墳時代前期前半は交易が目的であり、王権に引き寄せられた東日本からの流通物が契機になったと推測された。考古資料が、王権の経済的側面を分析することに有効であることを示していると考えられるのである。

【引用参考文献】

青木勘時ほか　2010『天理市埋蔵文化財調査概報　平成 17(2005)年度』 天理市教育委員会

秋山浩三　2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　p405 ～ 422

池淵俊一　2019「出雲と日本海交流」『考古学講義』筑摩書房　p271 ～ 290

石崎善久　2004「赤坂今井墳丘墓出現の背景」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第 24 集　p143 ～ 148

石田大輔ほか　2011『天理市埋蔵文化財調査概報　平成 18(2006)年度』 天理市教育委員会

伊藤晃ほか　1974「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集

井上弘ほか　1993「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84

宇垣匡雅ほか　1994「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88

梅木謙一　2002「松山平野出土の古墳時代初頭の吉備型甕・吉備系甕」『環瀬戸内海の考古学　－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　p187 ～ 208

江見正己ほか　1995「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94

岡田博ほか　1985「百間川沢田遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59

岡田博ほか　1996「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56

岡林峰夫ほか　2004「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第 24 集

岡村秀典　1999『三角縁神獣鏡の時代』 吉川弘文館

狩野久　2000「古代国家の発展と吉備」『岡山県の歴史　県史 33』山川出版社　p34 ～ 77

亀山行雄ほか　2001「井手天原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156

北島大輔　2004「福田型銅鐸の型式学的研究　－その成立と変遷・年代そして製作背景－」『考古学研究』第 51 巻３号　p32 ～ 52

草原孝典　2011『津島江道（給食・南棟校舎）遺跡』岡山市教育委員会

草原孝典　2016「弥生墳丘墓から前期古墳へ　－岡山平野の事例から－」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第８号 p21 ～ 48

河本清ほか　1995「足守川加茂 A 遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94

近藤義郎　1992『楯築墳丘墓の研究』 楯築研究会の研究刊行会

酒井龍一　1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕　－造営キャ

ンプの検証にむけてー」『考古学研究』第 24 巻第２号　P52 ～ 69
坂本豊治　2006『西谷墳墓郡　ー平成 14 年度～平成 16 年度の調査ー』 出雲市教育委員会
桜井市教育委員会　2016『奈良県桜井市史跡纒向遺跡・史跡纒向古墳群　ー保存活用計画書ー』
島崎東ほか　2005「津島遺跡６」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190
下澤公明　2000「弥生時代後期末の吉備南部の社会について　ー百間川遺跡群を通してー」『古文化談叢』第 45 集　九州古文化研究會　p101 ～ 115
白石太一郎　1999『古墳とヤマト政権　ー古代国家はいかに形成されたかー』 文藝春秋　p54 ～ 108
関川尚功　1976「畿内地方の古式土師器」『纒向』橿原考古学研究所編　p460 ～ 500
高野陽子　2004「丹後の弥生後期土器様式と赤坂今井墳丘墓の土器」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第 24 集　p116 ～ 122
高畑知功ほか　1998「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
高畑知功ほか　2003「津島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173
滝沢誠　2020「古墳の立地と視認性　ー霞ヶ浦沿岸域の前期古墳をめぐってー」『常槻先生退職記念論文集　世界と日本の考古学ーオリーブの林と赤い大地ー』 六一書房　p333 ～ 345
辻田淳一郎　2019『鏡の古代史』（株）KADOKAWA　p101 ～ 114
次山淳　2007「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』第 54 巻第３号　p20 ～ 33
都出比呂志　1991「日本古代の国家形成論序説　ー前方後円墳体制の提唱ー」『日本歴史』三四三号　P5 ～ 39
出原恵三　1995「四国出土の吉備型甕」『古代吉備』第 17 集　p47 ～ 59
寺沢薫ほか　1986「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊
寺沢薫　2000『日本の歴史　第 02 巻　王権誕生』講談社　p212 ～ 216
寺沢薫　2011『王権と都市の形成史論』吉川弘文館　p138 ～ 165
豊島直博　2005『弥生時代の鉄製刀剣』 奈良文化財研究所　p49 ～ 62
中野雅美ほか　1980「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39
野島永　2009『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣
坂靖ほか　2002「伴堂東遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 80 冊
平野邦雄　1969「古代の商品流通」『流通史Ⅰ　体系日本史叢書 13』 山川出版社　p15 ～ 50
平井泰男ほか　1999「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
藤岡謙二郎　1962『日本歴史地理序説』 塙書房　p114 ～ 128
藤瀬禎博　2016『シリーズ遺跡を学ぶ 114　九州の銅鐸工房　安永田遺跡』 新泉社
光本順ほか　2010「鹿田遺跡６」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第 26 冊
渡邊貞幸ほか　2015「西谷３号墓発掘調査報告書」『島根大学考古学研究室報告』第 14 冊、『出雲弥生の森博物館研究紀要』第 15

【図１、表１引用】

石野博信ほか 1976『纒向』橿原考古学研究所編、萩原儀征ほか 1980『纒向遺跡 －昭和 54 年度遺跡範囲確認調査概報告 －』桜井市教育委員会、萩原儀征ほか 1997「桜井市平成８年度国庫補助による発掘調査報告書」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 18 集、木場佳子ほか『桜井市内埋蔵文化財 2002 年度発掘調査報告書』３（財）桜井市文化財協会、清水真一ほか 2003「桜井市平成 14 年度国庫補助による発掘調査報告書」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 24 集、橋本輝彦ほか 2007「纒向遺跡発掘調査報告書」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 28 集、橋本輝彦ほか 2009「纒向遺跡発掘調査報告書２」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 32 集、松宮昌樹ほか 2010「桜井市平成 20 年度国庫補助による発掘調査報告書」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 33 集、福辻淳ほか 2014『桜井市内遺跡発掘調査報告書 －2012 年度－』（財）桜井市文化財協会、丹羽恵二ほか 2019『桜井市内遺跡発掘調査報告書 －2014 年度－』（財）桜井市文化財協会、森暢郎ほか 2018「纒向遺跡発掘調査報告書４」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 47 集、三沢朋未ほか 2019「桜井市平成 29 年度国庫補助による発掘調査報告書」『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 49 集、橋本輝彦ほか 2012「奈良県桜井市史跡纒向石塚古墳発掘調査報告書」『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 38 集、橋本輝彦ほか 2006「東田大塚古墳」『桜井市内埋蔵文化財 1998 年度発掘調査報告書』１

【表２引用】

寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第 49 冊、高橋護 1986「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館報告』第７集、高橋護 1988「弥生時代の終末期の土器編年」『岡山県立博物館報告』第９集、高橋護 1991「土師器の編年　中国・四国」『古墳時代の研究』６
雄山閣、柳瀬昭彦 1977「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16

【図５引用】

青木勘時ほか 2010『天理市埋蔵文化財調査概報　平成 17(2005) 年度』天理市教育委員会、石田大輔ほか 2011『天理市埋蔵文化財調査概報　平成 18(2006) 年度』天理市教育委員会、寺沢薫ほか 1986「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊、坂靖ほか 2002「伴堂東遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 80 冊

奈良盆地と河内平野南部の集落・古墳からみたヤマト王権

坂　　靖

Ⅰ．はじめに

纒向遺跡では、辻トリイノ前地区と巻野内地区において、大型建物やそれを取り囲む方形区画、導水施設などが検出されている。ヤマト王権の王が祭祀を実践し、権力を行使した施設であると考えられる。

これまでに、桜井市教育委員会と纒向学研究センターによる発掘調査とこれまでの研究活動によって、徐々に纒向遺跡の実態は明らかになってきた。とはいえ、いまだ不明な点は多い。膨大な資料をまえに、日夜遺物の整理作業や、発掘調査報告書の刊行にむけての努力がつづけられている最中であり、未だ時期尚早の感はあるが、今般の『纒向学研究』の 10 号記念論集によせて、奈良盆地の集落遺跡の変遷と、纒向遺跡の中枢施設と関連する古墳との関係、河内平野南部の集落遺跡との対比などをおこなって､ヤマト王権の支配構造の実態に迫りたい。

なお、古式土師器の編年においては、庄内式を前半、後半、布留式を初頭、前半、後半、末葉に区分し、庄内式期を３世紀初頭～中葉、布留式期を３世紀後葉～４世紀後葉に位置づける。庄内式は、タタキ調整を主体とした尖底の庄内形甕、布留式は、ハケ調整で丸底の布留形甕および小型精製土器（丸底鉢・器台）などの形式に代表される土器型式であり、精緻な細分案は示されているところであるが､庄内式期を前後の二分以上にするのは、難しいという筆者の認識による。

Ⅱ．弥生時代の唐古・鍵遺跡

奈良盆地最大の弥生時代の拠点集落遺跡は、唐古・鍵遺跡である。

奈良盆地の弥生時代の拠点集落遺跡の特性は、前期から後期まで断絶することがない継続的な営みにある。

唐古・鍵遺跡の場合は、前期に集落の営みが開始され、前期末～中期初頭に西側の地区を取り囲む環濠が掘削され、中期中頃には直径 500 ｍの範囲に及ぶ大環濠とその外側に５条の環濠が掘削され、集落の範囲は、最大で 42 haに及んだという。環濠は、溝浚えを繰り返しながら中期末に埋没するが、後期初頭には再掘削され、後期末に埋没する。さらに、庄内式期に環濠は認められないものの井戸、方形周溝墓などが確認されている。布留式期に環濠の幅や深さは減じるものの、集落の範囲は、再び直径 500 ｍの範囲に及ぶ大規模なものとなる。遺構面の削平が著しく、住居跡が遺構として検出されない条件にあって、同時期にどの程度の人口があったかさだかではない。また、拠点集落の継続性や集落単位やその構造については疑義が示され、小規模な基礎集団が、時間的経過のもとに集積された結果うみだされた「複合型集落」として意義づけるという試みもなされている（若林 2001)。しかし、祭祀に供せられた大型建物、青銅器、玉をはじめとした手工業生産関連工房が環濠内に計画的に配置されている状況があることからみて、弥生時代中期において集落全体を統括し、それを維持・管理した首長が出現したとみることは可能であろう（坂 2020)。

この弥生時代中期における唐古・鍵遺跡の首長の影響範囲は､遺跡から半径２㎞の範囲に及んだと考えられる。すなわち、北に隣接し、流路で直接つながっていた清水風遺跡、東北には法貴寺北遺跡、南には小阪里中遺跡、阪手東遺跡、西には八尾九原遺跡、西北には三河遺跡、伴堂東遺跡、西南には保津・宮古遺跡・宮古北遺跡・羽子田遺跡などがあり、同時期の土坑・井戸や方形周溝墓などの遺構が検出されている。これらは、唐古・鍵遺跡を母集落とし､そこから分村､分岐した集落や墓域であったとみなすことができる。

そのことを傍証するのが、同時代の絵画土器である。

巫女が鳥に化身し、祭祀を執行する場面を描いた絵画土器は、近畿地方を中心とした地域で認められるものだが、唐古・鍵遺跡と清水風遺跡のものは、その意匠が共通している。両遺跡では、多くの絵画土器が出土しており、首長のもとで、絵画土器に描かれた祭祀や、戦い、狩猟、交易、農耕、日常の生産活動などが実践されたと考えられる（坂 2019）。いうまでもなく、この時代に王権と呼べるような権力構造や、王権や首長権を継承するシステムは存在しない。

そして、弥生時代後期にも、唐古・鍵遺跡の集落規模は維持されている。首長のもとで、大規模な環濠の維持・管理と、集落の治水や様々な生産活動が継続的におこなわれていたと考えられる。これまでとは異なり、区画溝が設定され環濠内に方形周溝墓が造営されるようになるなど、首長層と関わる集落構造の変化は認められるものの、歴代の首長がその権力を代々継承するような状況があったとは考えられない。

Ⅲ．庄内式期の纒向遺跡とミヤケ遺跡群

そのようななかで、庄内式期に唐古・鍵遺跡周辺部では、集落構造や墓域に変動がおこる。また、唐古・鍵遺跡の上流部で、庄内式期～布留式期を盛期とする大規模な集落遺跡が勃興する。纒向遺跡である。

纒向遺跡は、弥生時代後期末葉にすでに集落の営みを開始していたが、庄内式期に、その集落規模を大きく拡張させ、その範囲はおよそ１㎢に及んだ。

大規模で計画的な人工水路である纒向大溝は、庄内式期に開削された。土地開発のための灌漑水路であり、物資流通のための運河であった。そして、その起点を取り巻く石塚古墳、矢塚古墳の２基の纒向型前方後円墳は、確定はしていないが墳丘・周濠の土器や弧文円板などの出土遺物から、庄内式期のあいだに築造されたと考えられる。

石塚古墳の場合は、墳丘盛土には弥生時代後期末葉の土器が多量に含まれ、周濠の最下層には庄内式後半期とされる高杯脚部、上層から下層には布留形甕がそれぞれ含まれている。また、導水溝の下層には布留式期の小型丸底壺がふくまれており、築造時期をめぐっては弥生時代後期末葉（石野博信氏）、庄内式期初頭（橋本輝彦氏）、庄内式期後半（寺沢薫氏）とする三説に分かれている（桜井市教育委員会 2012）。

矢塚古墳の周濠から出土した土器には、弥生形甕と庄内形甕が主体で、典型的な布留式甕が含まれていない。また、庄内式後半期にみられる高杯や丸底化していない壺などの器種が主体的であり、庄内式期後半に位置づけることができる（橿原考古学研究所編 1976）。

さらに、辻トリイノ前地区で掘立柱建物とそれを長方形に取り巻く溝や塀などの方形区画と施設が検出されていて、そのうちの東端部のもの（図１①）と中央部のもの（図１②）が、①⇒②の順序で造営されたものとされている（森 2021）。資料は公表されていないが、②が庄内式後半期のものとされており、その場合、①が庄内式期前半期に遡るものとなる。この方形区画と施設は、首長が政治・祭祀を実践し、その権力行使する場であったと考えられる。その場合、庄内式期にここで権力を行使した首長は、石塚古墳・矢塚古墳に埋葬されたとみることもできる。歴代の首長が権力を行使し、それが次の世代にも継承されていったことが遺跡構造のありかたから実証されるのである。

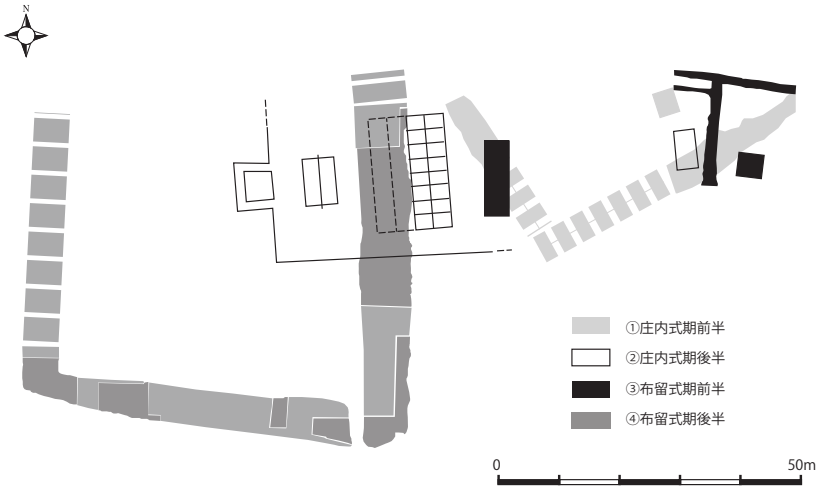


図１　纒向遺跡辻トリイノ前地区の方形区画と施設

ところで、庄内式期に入ると、唐古・鍵遺跡では、環濠が埋没するとともに、その集落規模が減退する。一方、周辺部では、かつて唐古・鍵遺跡の直接影響下にあった半径２㎞ほどの範囲内においては、清水風遺跡、法貴寺北遺跡、八尾九原遺跡、法貴寺斎宮前遺跡、伴

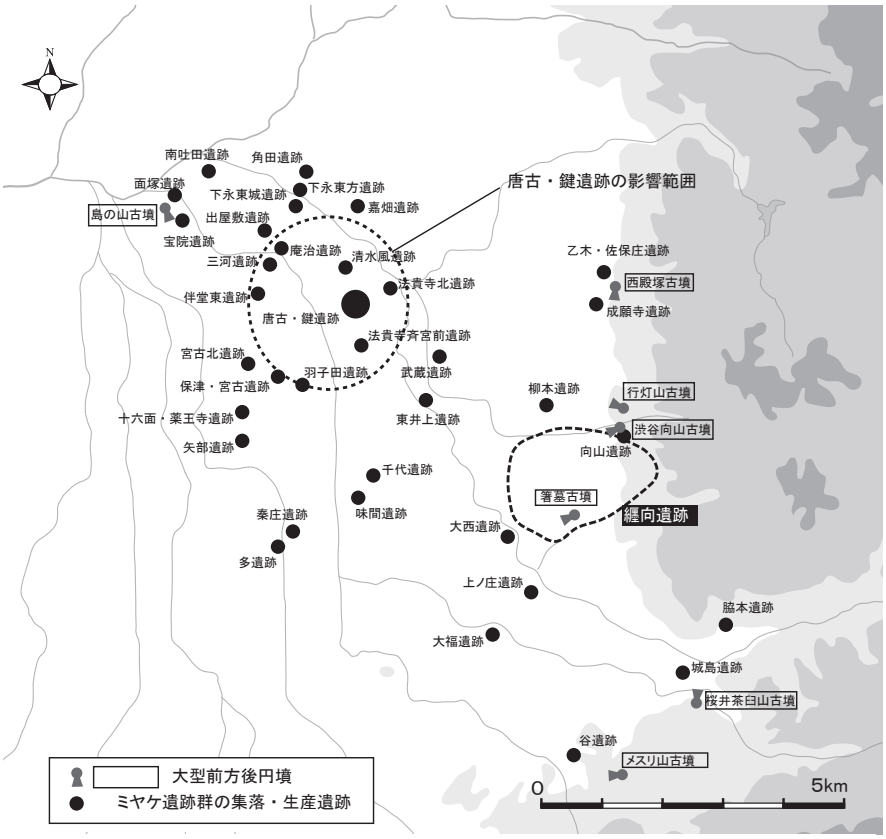


図２　ミヤケ遺跡群・纒向遺跡と大型前方後円墳

Ⅳ．ミヤケ遺跡群の環濠と区画施設

前述のとおり、唐古・鍵遺跡では、布留式期に環濠が再掘削され、弥生時代と同様の直径 500 ｍに及ぶ集落規模をもつにいたった。外部からの防御と集落の治水や利水の必要性から、弥生時代のそれと同様の位置に掘削されたものと理解される。北東環濠帯からは体部が球形化した定型化した布留形甕、小型精製土器（丸底鉢、器台）などの布留式期前半の土器と東海地方の外来系土器が、北西環濠帯からは弥生形甕・庄内形甕・布留形甕・小型器台・小型丸底鉢・坏部に稜線をもつ高杯などの庄内式～布留式期初頭の土器が関東地方・東海地方・吉備地方・山陰地方・北陸地方の外来系土器とともに出土している。さらに、環濠内の居住区では、土坑（井戸）から、庄内形甕や、球形の定型化した布留形甕などが出土しており、庄内式期後半～布留式期後半に位置づけることができる（清水 2015）。

このように、布留式期前半において、唐古･鍵遺跡は、盆地中央部においては開発拠点・流通拠点として機能していたものと考えられる。

一方、唐古・鍵遺跡の西南２㎞に位置する保津・宮古遺跡は、弥生時代から古墳時代までのあいだの幾たびかに盛期をもつ集落遺跡である。かつては、弥生時代の拠点集落とされたこともあったが、調査がすすみ、環濠が認められず、集落の規模、継続性において、その評価には疑問がもたれることになった。そのようななかで、二重に溝を巡らした区画施設が検出されている。区画施設の南北長は、100 ｍに達する（図３）。溝からは、容器、農具、建築材などの木製品や弥生形甕、庄内形甕、布留形甕、大型鉢、小型精製土器（小型丸底鉢、小型器台）、高杯などの土器が出土しており、時期的には布留式期初頭～前半期に位置づけられる（橿原考古学研究所

堂東遺跡、三河遺跡、羽子田遺跡、東井上遺跡などで庄内式期～布留式期にかけての土坑、井戸、方形周溝墓などの遺構が数多く検出されている。とりわけ、伴堂東遺跡では、熊野地方、東海（三河）地方や吉備地方など特定地域からの外来系土器が集中して出土している土坑があり、各地域からの移住者を受け入れている状況が確認できる。その動向は纒向遺跡や、奈良盆地中央部最大規模の前方後円墳である島の山古墳の造営に連動している。

さらに、その下流部や上流部にあたる初瀬川・寺川の中・下流域では、庄内式期～布留式期にかけて継続する遺構や遺物が検出されている遺跡が数多くあり、遺跡群を形成している（図２）。

私は、ヤマト王権の成立過程が、この遺跡群の動向と密接に連関していると考えており、「ミヤケ遺跡群」と呼んでいる（坂 2009）。ミヤケ遺跡群は、ヤマト王権の成立基盤となった集落、生産遺跡、墓域として位置づけられる。

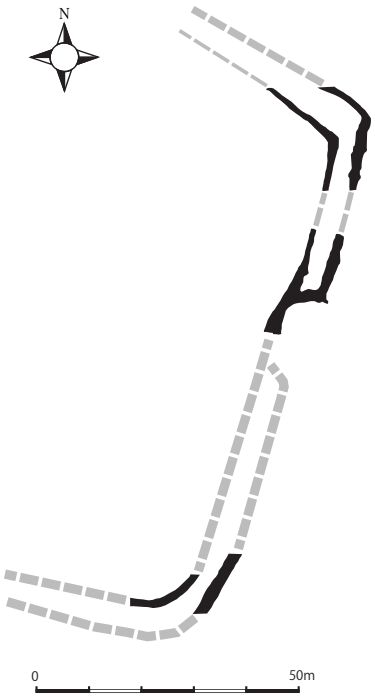


図３　保津・宮古遺跡の方形区画

2003)。この方形区画から西 600 mほどの地点では、木製盾が出土しているが、内部の状況が不明であり、区画施設内部が権力行使の場であったとは即断できない。区画施設の外部からも同時期の遺構・遺物が検出されていて、唐古・鍵遺跡のような居住域や墓域を取り囲むために設けられた環濠とみなすことはできない。しかし、唐古・鍵遺跡と同様に、溝の機能は、防御と治水、利水などにあった可能性が高く、地域開発に供せられたものであったと考えられる。

Ⅴ．ヤマト王権の王墓と関連遺跡

布留式期初頭に、箸墓古墳が纒向遺跡の南辺部に造営される。箸墓古墳が、墳丘長 200 mを超える大型前方後円墳の端緒であり、これ以降、桜井茶臼山古墳、西殿塚古墳、メスリ山古墳、行燈山古墳、渋谷向山古墳、島の山古墳などの大型前方後円墳が、纒向遺跡の周辺部とその上流部において、布留式期のうちに累代的に築造されている。ここでは、出土土器をもとにその年代観を示しておこう。

箸墓古墳は、墳頂部で茶臼山型二重口縁壺が出土している。体部から底部にかけての形態や口縁端部からみれば、布留式期初頭に位置づけるのがよいだろう。周濠内からも土器が出土しており、布留形甕が顕在的に認められる。

桜井茶臼山古墳の墳頂部方形区画の茶臼山型二重口縁壺は、体部の形態は箸墓古墳より後出的であり、布留式期前半に位置づけられる。

メスリ山古墳からは、小型器台と小型丸底鉢が出土しており布留式期前半に位置づけられる。

島の山古墳の造り出しからは、器壁が厚く、口縁端部を丸くおさめた布留形甕の退化型式が出土しており、布留式期末葉に位置づけられる（川西町教育委員会 2019)。

その他の大型前方後円墳では、築造年代を示す古式土師器の出土はないが、特殊器台や円筒埴輪から布留式期初頭～後半の段階に、西殿塚古墳、行燈山古墳、渋谷向山古墳の順序で築造されたものと考えられる。

布留式期の墳丘長 200 m以上の大型前方後円墳は、その規模の隔絶性からみて、それだけで王（支配者層）の墳墓であると意義づけることが可能である。ミヤケ遺跡群から輩出された人物が、ヤマト王権の王やそれに準ずる人物となり、何世代にも亘って、ミヤケ遺跡群の縁辺部にヤマト王権の王墓や「副王」墓として大型前方後円墳を造営したものと考えられる。

一方、勝山古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳、石名塚古墳などの纒向遺跡内とその周辺部に所在する纒向型前方後円墳については、周濠や墳頂部などで出土した土器からみて、確定できないものの築造時期が布留式期まで降る可能性がある。

勝山古墳の周濠の前方部南隅角では、尖底の直口壺と平底の大型鉢が出土している（寺沢編 2011)。また、東側くびれ部からは庄内形甕、尖底の壺とU字形木製品など多量の木製品が出土しており（橿原考古学研究所 2001)、いずれも庄内式期後半に位置づけられる。

一方、周濠外北側の落ち込み SX02 からは、庄内形甕・布留形甕のほか、庄内式期後半の高杯、東海地方・山陰地方・吉備地方などの外来系土器、刀装具木製品が多量に出土している（橿原考古学研究所 1999)。また、鞴羽口や小鉄片、洛東江河口部に故地が求められる陶質土器などが出土している土坑 SK04 が検出されている（橿原考古学研究所 1998)。周濠の外側の遺構は、いずれも布留式期初頭に位置づけられる。集落や居住に関わるものとみなされているが、古墳築造と関連する遺構・遺物で

あると考えることもできる。

東田大塚古墳は、周濠内と周濠や墳丘下層で検出された遺構から出土した土器があり、周濠下層でハケ調整の庄内形甕、SD1001・SD2001・SE2001 などの遺構には、庄内形甕・布留形甕が含まれ、布留式期初頭に位置づけることができる（桜井市文化財協会 2006）。古墳の築造は少なくともそれ以降であると考えるのが妥当だろう。

ホケノ山古墳では、埋葬施設である石組み木槨の上面から矢部分類（寺沢 1986）のⅡD類小型丸底鉢が出土しており、布留式期初頭に位置づけることが妥当である。古墳の築造時期も布留式期初頭に位置づけることが可能である。

また、纒向遺跡の周辺では、柳本大塚古墳、イヅカ古墳、上の山古墳などの中規模の前方後円墳や、茅原大墓古墳などの帆立貝式古墳は、出土土器の詳細について検討はできないが、出土遺物や埴輪などからみて布留式期のうちに築造されたものであるといえる。

こうした状況から、布留式期に纒向遺跡内やその周辺部に営まれた墳墓のなかには、纒向遺跡のみならず、ミヤケ遺跡群の各遺跡から輩出された人物が埋葬されることもあったと考えられる。もっとも、ミヤケ遺跡群においては唐古・鍵遺跡、十六面・薬王寺遺跡、三河遺跡、伴堂東遺跡などで布留式期の方形周溝墓が検出されていたり、羽子田遺跡で布留式期に遡る小型前方後円墳の存在が知られており、各遺跡の集落構成員の墳墓や、中間層にあたるような人物が遺跡に近い位置でその墳墓を造営することが主体的であったのだろう。

いずれにせよ、ヤマト王権は、布留式期初頭にミヤケ遺跡群から輩出された王によって成立し、ミヤケ遺跡群の範囲内を直接の支配領域としていたのである。ヤマト王権の始原は、奈良盆地の中央部・東南部の有力地域集団であり、ここを発信源として日本列島の東西に影響を及ぼしたのである。

Ⅵ．ヤマト王権と布留式期の纒向遺跡

纒向遺跡は、布留式期に集落規模を拡大させ、遺跡の全体規模は約３㎢に及んだ（図４）。

さらに、布留式期初頭の段階に、新たに巻野内地区において遺跡中枢部の諸施設が造営される（図５）。遺跡中枢部諸施設は、庄内式期には辻地区にあったが、布留式期初頭に巻野内地区に移動したとみられる。これらは、箸墓古墳の造営と期を一にして造営されたものであり、箸墓古墳の被葬者たるヤマト王権の初代王が、ここにおいて祭祀を執行し、その政治権力を行使した場であると考えられる。

巻野内地区の西端部（巻野内家ツラ地区）には、溝から水を取り入れ不純物を沈殿させ浄水とし、さらに、溝、木樋を通して流し、切り込みのある大型木槽に水を溜め、さらに不純物を沈殿させ、水を浄化したうえで、木樋を通して排水するという構造の導水施設がある。

同様の導水施設は、京都府京丹後市浅後谷南遺跡、石川県小松市千代・能美遺跡、福岡県行橋市延永ヤヨミ遺跡、奈良県御所市南郷大東遺跡、同奈良市大柳生宮の前遺跡、大阪府東大阪市西ノ辻・神並遺跡、三重県阿山郡伊賀町水衛遺跡など古墳時代前期～後期の遺跡で検出されている。木製品や手捏ね土器などの祭祀遺物を伴っている場合があり、また、覆屋や食い違う「囲形」の閉鎖空間に中心となる導水施設が配置されているところから、「水のまつり」をおこなった施設であると考えられる。

また、このような導水施設を模した埴輪や土製品、石製品などが関東地方から九州に及ぶ古墳から出土している。これは、古墳の被葬者がおこなった「水のまつり」の造形であり、古墳に樹立したり、副葬したりしたものと考えられる。

この「水のまつり」の内容は、首長やヤマト王権の王みずからが司祭者となって、集落の治水と開発の象徴として導水施設を造形し、水を支配して土地開発をすすめ、地域支配を実現するための祭祀を挙行したものとして、意義づけることができる。

巻野内家ツラ地区については、その全体についての詳細な報告はないが、第 50 次調査で弧帯文を施した木製品や、第 90 次調査ではハケメと縄蓆文タタキを施した韓式系土器が出土しており、前者は吉備地方と、後者は朝鮮半島の洛東江河口部との交渉を窺わせる資料と位置づけられる。

第 50 次調査で木槽内から出土した土器は公表されており、布留形甕・小型器台・小型丸底鉢・高杯など布留式期初頭に位置づけられる土器が出土している（桜井市教育委員会 1997）。

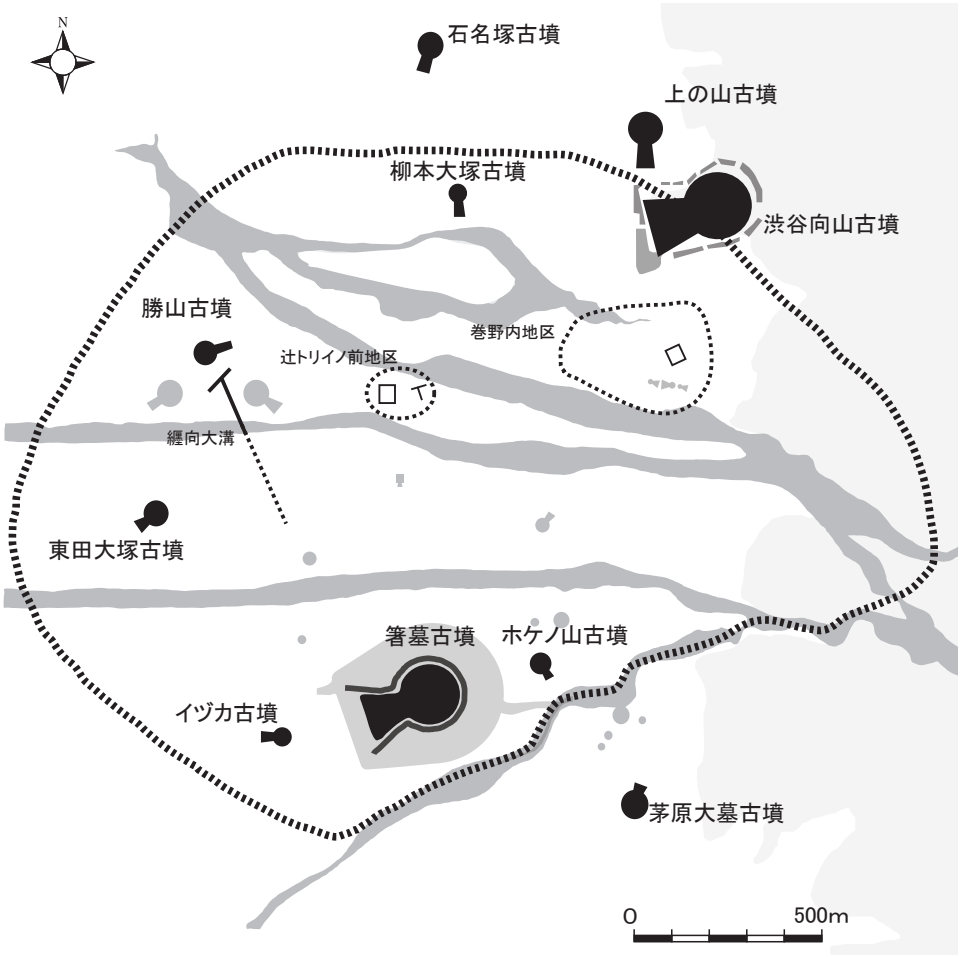


図４　布留式期の纒向遺跡

図５　纒向遺跡巻野内地区の遺構

さらに、近年、第 90 次調査区の導水施設に水を流したと推定される溝の土器についての詳細な分析がおこなわれた（橋本 2021）。

溝は、上部に位置する SD-2001、その下部にある SD-2002 からなっており、SD-2001 からは、上述の韓式系土器のほか、鞴羽口、ウリ・桃核類などの種子類、木鍬・梯子・槽・有頭棒などの木製品が出土している。SD-2001、SD-2002 では多量の土器が出土しており、その分析結果が示されている。

SD-2001、SD-2002 ともに、弥生形甕・庄内形甕とともに布留形甕が含まれているほか、矢部分類のⅡＤ類やⅢＢ類の小型丸底鉢が含まれていることが報告されており、SD-2001、SD-2002 がいずれも布留式期初頭に形成されたことが確かめられる。SD-2001 から SD-2002 最上層にむかってこれらの器種の割合が増加しており、布留式期初頭の古い段階で SD-2001 が開削され、布留式期初頭の新しい段階に SD-2002 が埋没したと考えられる。

さらに、これらの溝から出土した外来系土器 190 点の分析がなされており、東海地方が 43.2％の割合を占め、それに続くのが河内地方、阿波・讃岐地方で、いずれも 12.6％の割合を占めているという結果が報告されている。

一方、巻野内地区の北東部で、布留式期初頭の断面Ｖ字形の溝と土塁、柵列が検出されており、その延長部分の状況は不明ではあるが、地形を考慮して復元すれば一辺 90 ｍほどの方形区画が形成されていた可能性がある。

落ち込み SX-2001 からは、定形化した布留形甕と長胴化の兆しがみられる布留形甕、布留式期通有の有稜高杯などが出土しており、布留式期前半期～末葉に位置づけられる。また、東海地方、山陰地方からの外来系土器や鞴羽口、石釧なども出土している（桜井市教育委員会 1995）。方形区画内の内部構造は不明であるが、辻地区の庄内式期における首長の権力行使の場である方形区画と施設の後継と考えられる。それに比べて規模は大きく、施設の構造は堅牢であり、纒向遺跡の首長が、ヤマト王権の王に成長した証しとして捉えることができる。

一方、辻トリイノ前地区の区画施設には、この巻野内地区の方形区画と同時期に造営されたものがある。その規模や様相は明瞭ではない（図１③）が、 この施設を構成する溝 SD-1002 からは石硯の可能性がある板状石製品が出土し、伴出土器とあわせてその内容が示されている（森 2021）。板状石製品について、これが石硯であるかどうかの判断はここでは保留するが、定形的な布留形甕が主体的に含まれている一方、その下層ではⅡＤ類、ⅢＢ類小型丸底鉢が含まれていない。上層にⅡＤ類、ⅢＢ類小型丸底鉢や坏部の稜線が明瞭な高杯があり、全体的に巻野内地区 90 次調査の SX-2001 に後続する様相を示しており、布留式期前半期にこの施設が埋没したことが確認できる。

巻野内地区の導水施設と辻トリイノ前地区の施設③が造営されるあいだに、箸墓古墳、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳、行燈山古墳などの古墳が造営されている。導水施設は継続期間が短く、直接関係するのが箸墓古墳であったとみられる。ヤマト王権の初代王により、「水のまつり」が執行されたと考えられる。辻トリイノ前地区の施設③と巻野内地区の方形区画は時期的に重複しており、個別の明確な関係は明らかにしがたい。巻野内地区の方形区画は、ヤマト王権の王の継続的な権力行使の場であった可能性がある。

一方、辻トリイノ前地区では、一辺 50 ｍほどの溝で取り囲まれた方形区画が布留式期後半に形成されている（図１④）。出土土器の報告はないが、辻トリイノ前地区の遺構変遷過程からみれば第４段階にあたる（森 2021）。巻野内地区の方形区画と時期的に重複し、確定できないが、纒向遺跡のすぐ北側に渋谷向山古墳があり、辻トリイノ前地区の方形区画は、ヤマト王権の三～四代目の王にあたる人物の権力行使の場であった可能性が高い。

このようにみるなら、纒向遺跡は、布留式期を通じて、ヤマト王権の王がその政治権力を行使する場であり、その支配拠点として機能していたと考えることができる。個々の古墳と遺跡の関係については、表１のようにまとめておく。

ただし、布留式期後半には奈良盆地北部に菅原東遺跡、西大寺東遺跡など、新たにヤマト王権の支配拠点が造営されており、ヤマト王権は奈良盆地のなかに、二カ所の支配拠点をおいていたと考えられる。この段階では、ヤマト王権は、奈良盆地北部及び京都府の南山城地域を取り込んで、この周辺の集落・生産遺跡などを成立基盤にして、佐紀古墳群東群にも王墓を造営し、ヤマト王権の

表１　纒向遺跡の中心施設と関連遺跡・古墳との関係

	遺跡名	地区名	200年 庄内式 前半	200年 庄内式 後半	300年 布留式 初頭	300年 布留式 前半	300年 布留式 後半	300年 布留式 末葉
集落遺跡	纒向遺跡	辻トリイノ前地区①	■					
		同②		■				
		同③				■		
		同④					■	
		巻野内地区50次調査集水桝			■			
		同90次調査溝SD-2002			■			
		同90次調査溝SD-2001				■		
		同80次調査SX-2001				■	■	■
	唐古・鍵遺跡	北東環濠帯				■		
		北西環濠帯		■	■			
		居住区		■	■	■	■	
	保津・宮古遺跡	方形区画			■			
纒向型前方後円墳	石塚古墳	墳丘下層・周濠・導水路	■	■	■			
	矢塚古墳	周濠下層		■				
	勝山古墳	周濠・SX02・SK04		■	■			
	東田大塚古墳	墳丘下層遺構SE-2001・SD-2001			■			
	ホケノ山古墳	石組み木槨上面			■			
大型前方後円墳	箸墓古墳	墳頂・周濠			■			
	桜井茶臼山古墳	方形区画				■		
	メスリ山古墳	墳丘				■		
	行燈山古墳						▒	
	渋谷向山古墳						▒	
	島の山古墳	造り出し						■

王は並立することになったと考えられる。このように、ヤマト王権は、布留式期後半までのあいだに、徐々にその勢力を伸長させていったのである（坂 2020）。

Ⅶ．河内平野南部の遺跡構造

ミヤケ遺跡群は、大和川の上流部の遺跡群である。同じ大和川下流部の河内湖南岸には、このミヤケ遺跡群と同様に、庄内式期～布留式期に盛期をもつ遺跡群がある。

河内平野の遺跡動態については、すでに詳細な検討がおこなわれ、集落構造の分析、交易や流通、人口動態、微地形の復元についてさまざまな提言がなされている。

大庭重信氏の研究グループは、ジオアーケオロジーの実践的研究として、発掘調査や立会調査のデータを用いて河内湖南岸の古地形と集落遺跡や墳墓との関係を通時的に復元した（大庭編 2020）。図６は、同時期の奈良盆地の纒向遺跡やミヤケ遺跡群と比較するために、古墳時代前期（庄内式期～布留式期）における河川と居住域・墓域・生産域を抽出したものである。

ミヤケ遺跡群の場合は、詳細な古地形を復元するにはいたっておらず、単純に比較することはできないものの、小河川を挟んで両岸に集落・墓域が散在し、それが広域に展開している状況が共通している。河内湖南岸の遺跡を総体として捉えたとき、ミヤケ遺跡群よりさらに規模が大きく、生産力も上回っていたということが予測される。また、加美遺跡、中田遺跡などにおいては韓式系土器や吉備地方を中心とした地域からの外来系土器の出土量も多く、さらにはこの地域が庄内形甕の発信源となっていることなど、この地域の庄内式期～布留式期にかけての先進性や拠点性も明らかである。

遡って、弥生時代においては、奈良盆地の拠点集落との差違が認められる。加美遺跡に代表されるように弥生時代前期にはすでに集落構造や墓域において、階層構造が認められる一方、集落に環濠はなく、個々の集落規模は小さく、長期にわたる継続性が認められない。そうしたなか、弥生時代後期後半に集落（居住域）が小河川沿

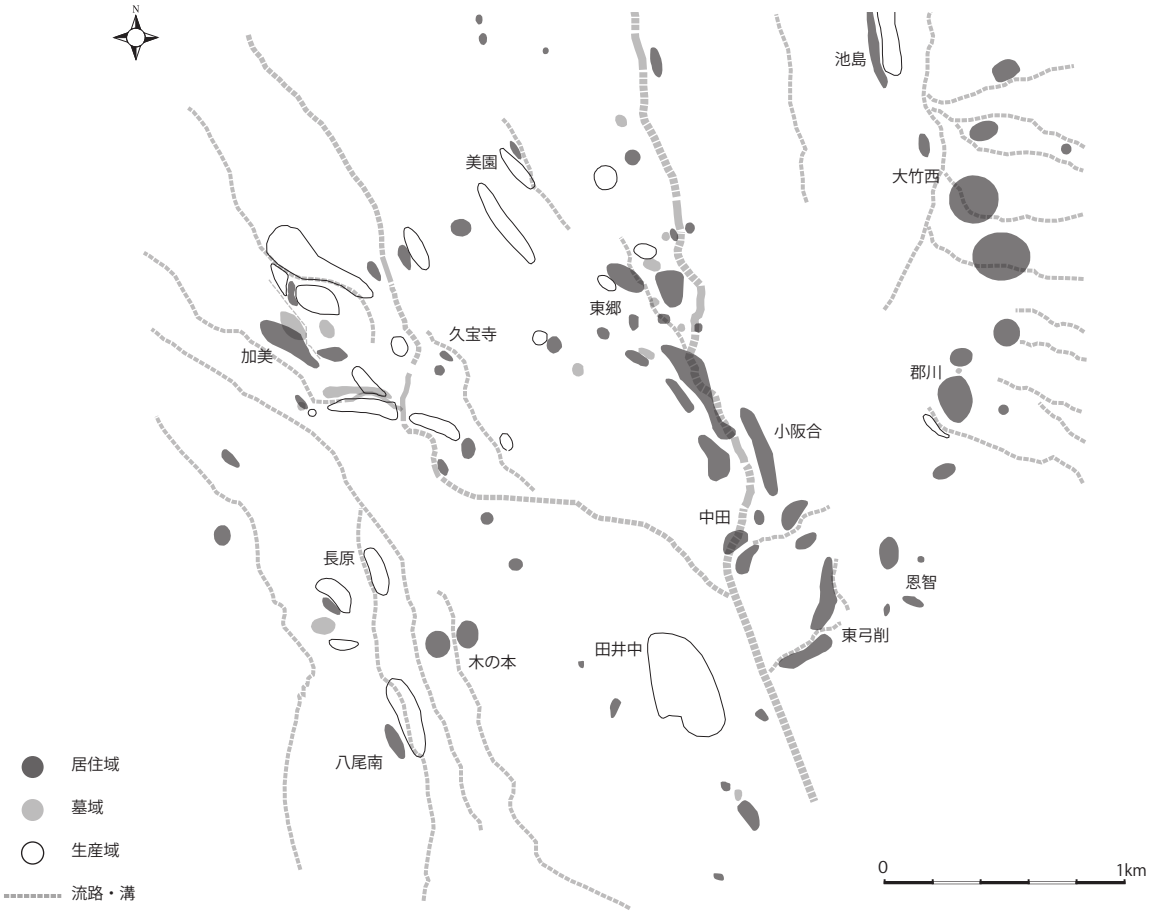


図６　河内平野南部の庄内式期～布留式期の集落遺跡（居住域・墓域・生産域）と流路・溝

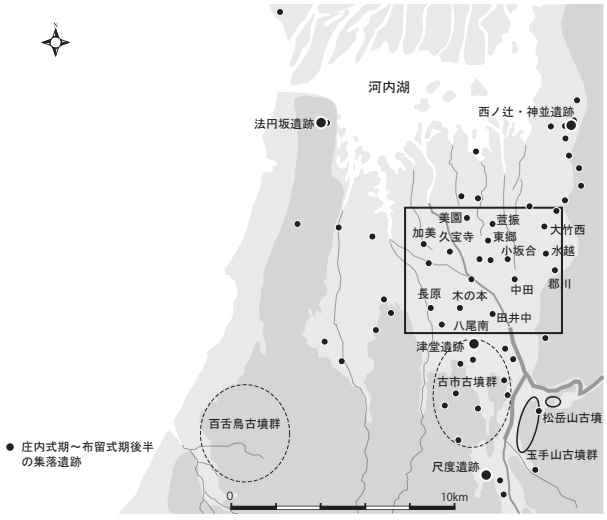


図７　河内平野南部の遺跡と古墳群

にまとまって営まれるようになる。

そして、庄内式期～布留式期には、個別の集落ごとで生産域と墓域が確保され、全体として集落規模が拡大し、集落内や墓域において階層構造が明確化する。当該地の個別の集落は、古墳時代中期に衰え、法円坂遺跡（流通拠点）、長原遺跡（手工業生産拠点）、西ノ辻・神並遺跡（祭祀拠点）など、ヤマト王権の拠点が設けられる。

ミヤケ遺跡群の遺跡動態と近似したものであり、大型前方後円墳の築造、すなわちヤマト王権の成立とともに、集落が解体したわけではなく（坂 2016）、地域社会のなかで、在地の地域集団が成長・発展していく状況が明らかである。そこに、地域の治水と流通、交易を管理し、地域支配を貫徹した在地首長が存在したであろうことは容易に想像ができるところである。

ところが、首長層の権力行使の場と考えられる方形区画については、この一帯では今のところ確認されていない。庄内式期～布留式の首長層に関わる方形区画が認められるのは、羽曳野市尺度遺跡であり、加美遺跡からは南方 11 ㎞というかなり離れた地点である。古市古墳群のある羽曳野丘陵にあって、直結させることは難しいが、藤井寺市津堂遺跡などが勃興する以前に、この地域の首長層にかかる拠点であった可能性がある。

また、首長層の墓域についてもこの地域では認められない。加美遺跡からは南西９㎞の石川東岸には、柏原市玉手山古墳群や松岳山古墳群で墳丘長 100 ｍほどの中規模前方後円墳が、布留式期初頭から後半期にかけて累代

的に営まれている。櫻田小百合氏などの検討では、玉手山古墳群と当該地の布留式期前半の遺跡群が関連づけられている（櫻田ほか 2016）。布留式期後半については、松岳山古墳群がその候補となる。

こうしたところから、河内平野南部の場合、北側にある庄内式期～布留式期後半の集落・遺跡群を成立基盤にしながら、やや距離をおいた地点の丘陵頂部に前方後円墳を築造するという遺跡構造が復元できる。

河内平野南部において布留式期末葉に築造されるのが、古市古墳群の大型前方後円墳の嚆矢である津堂城山古墳である。私は、津堂城山古墳の被葬者は、ヤマト王権の王の一人であり、在地集団から輩出されたものであると考えている。布留式期後半期に、ヤマト王権は、奈良盆地北部の在地集団を取り込んでいたが、布留式期末葉には、河内平野南部の在地集団も取り込んで、ヤマト王権の王が鼎立していたとみている。

Ⅷ. 結び

弥生時代においては、大河川支流域一帯を占めるような広域の地域社会が形成されることはなかったと考えられる。当然、首長の支配領域も極めて限定されたものであった。

庄内式期～布留式期において､交易が盛んになる一方、治水管理が進捗して、地域の統合がすすんだと考えられる。布留式期初頭に、纒向遺跡とミヤケ遺跡群を成立基盤にして、ヤマト王権が成立する。日本列島各地の地域勢力が結集し、ヤマト王権が成立したという見解もあるが、少なくとも河内平野南部に地域支配を貫徹した在地首長が存在することを本稿で明らかにした。

奈良盆地の有力地域集団を始原とするヤマト王権は、周辺地域を統合しながら、徐々に伸長していくのである（坂 2020）。

【引用文献】

大庭重信編 2020『先史・古代の河内平野南部地域の古地理復元を通じたジオアーケオロジーの実践研究』 一般財団法人 大阪市文化財協会

橿原考古学研究所編 1976『纒向』 桜井市教育委員会

橿原考古学研究所 1998「纒向遺跡 102 次（勝山古墳第 1 次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997 年度』

橿原考古学研究所 1999「勝山古墳第 2 次（纒向遺跡第 111 次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1998 年度』

橿原考古学研究所 2001「勝山古墳第 4 次（纒向遺跡第 122 次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 2000 年度』

橿原考古学研究所 2003『保津・宮古遺跡第 3 次発掘調査報告』

川西町教育委員会 2019『島の山古墳第 3 ～ 13 次発掘調査報告書』

桜井市教育委員会 1995『平成 6 年度国庫補助事業による発掘調査報告 2』

桜井市教育委員会 1997『平成 8 年度国庫補助事業による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会 2012『奈良県桜井市 史跡纒向古墳群 纒向石塚古墳発掘調査報告書』

桜井市文化財協会 2006『東田大塚古墳 奈良盆地東南部における纒向型前方後円墳の調査』

櫻田小百合・森本徹・市村慎太郎 2016「河内地域」 古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』 六一書房

清水琢哉 2015「古墳時代前期の唐古・鍵遺跡」『古墳出現期土器研究』第 3 号

寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』 橿原考古学研究所

寺沢薫編 2011『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』 奈良県立橿原考古学研究所

橋本輝彦 2021「纒向遺跡巻野内家ツラ地区における土器様相」『纒向学研究』第 9 号

坂靖 2009『古墳時代の遺跡学―ヤマト王権の支配構造と埴輪文化―』 雄山閣

坂靖 2016「古墳時代の集落研究からの視点―遺跡学的検討―」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』 六一書房

坂靖 2019「絵画と埴輪の人物表現」『橋本博文先生退職記念論集 磨斧作針』 六一書房

坂靖 2020『ヤマト王権の古代学―「おおやまと」の王から倭国の王へ―』 新泉社

森暢郎 2021「纒向遺跡第 180 次調査出土の板状石製品」『纒向学研究』第 9 号

若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価―大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に―」『日本考古学』第 12 号

近畿弥生社会の中の漢・韓系要素

石　野　博　信

Ⅰ．はじめに

私が、〝東アジアの中の日本列島史〟を改めて意識したのは、1977（昭和 52）年刊・岡田英弘『倭国―東アジア世界の中で―』（中公新書）であった。報告書『纒向』の刊行が 1976 年なので、日本列島史の中の纒向の意義はその後の３・４世紀の大王墓を含む〝おおやまと古墳集団〟分布調査から改めて始まったように思う。

2021 年３月中旬の今、「近畿弥生社会の漢・韓系要素」を書き終え、書棚から『倭国』をとり出し手に取ったら、折りたたんだ９頁が手に掛かった。そこには、〝南方から舟でやってきた夏人〟の小見出しがあり、解説が続く。そして、93 頁の「三世紀の朝鮮半島」の地図を載せ、「朝鮮半島における中国文化の普及」のもと、「海のかなたからは、倭人が積極的に乗り出してきて」楽浪・帯方二郡や「原住民の諸国と取り引きをはじめている」状況であった。そして、そこには半島中部の濊と共に、南部の馬韓・弁韓・辰韓が占居する地図がある（図１）。

奈良県香芝市二上山博物館では、2001 年から 2017 年まで毎年夏季に「邪馬台国時代の〇〇と大和」の研究会と中国史跡めぐりを行ってきた。ある年、中国の湖南省博物館で館長主催の歓迎会があり私が答礼のご挨拶を行うこととなった。

私は用意のないまま立上り、「日本は古来、中国から漢字をはじめ、今も使用している多くの文化を頂いています。その都度、お礼を言っていませんが、数千年間ありがとうございました」と述べ、笑いと拍手で答えて頂いたことを思い出す。

図１　三世紀の朝鮮半島　［岡田 1977 より］

Ⅱ．北部九州

日本列島の日本海沿岸は旧石器時代以来、大陸系文化の流入地域である。弥生文化を象徴する水稲農耕・金属器はその主要な一部で、弥生早期（従来の縄文晩期末）の佐賀県唐津市菜畑遺跡や福岡県板付遺跡の水田跡はその代表例である。両遺跡とも発掘中に現地を訪ね、とくに板付遺跡跡では担当の山崎純男氏にお願いして「縄文水田」に残る弥生人の足跡の石膏型をとり、当時の勤務地の奈良県立橿原考古学研究所に持ち帰り「稲作りをする九州縄文人、海を渡る」と博多のみんなが喜んでくれたことを思い出す。

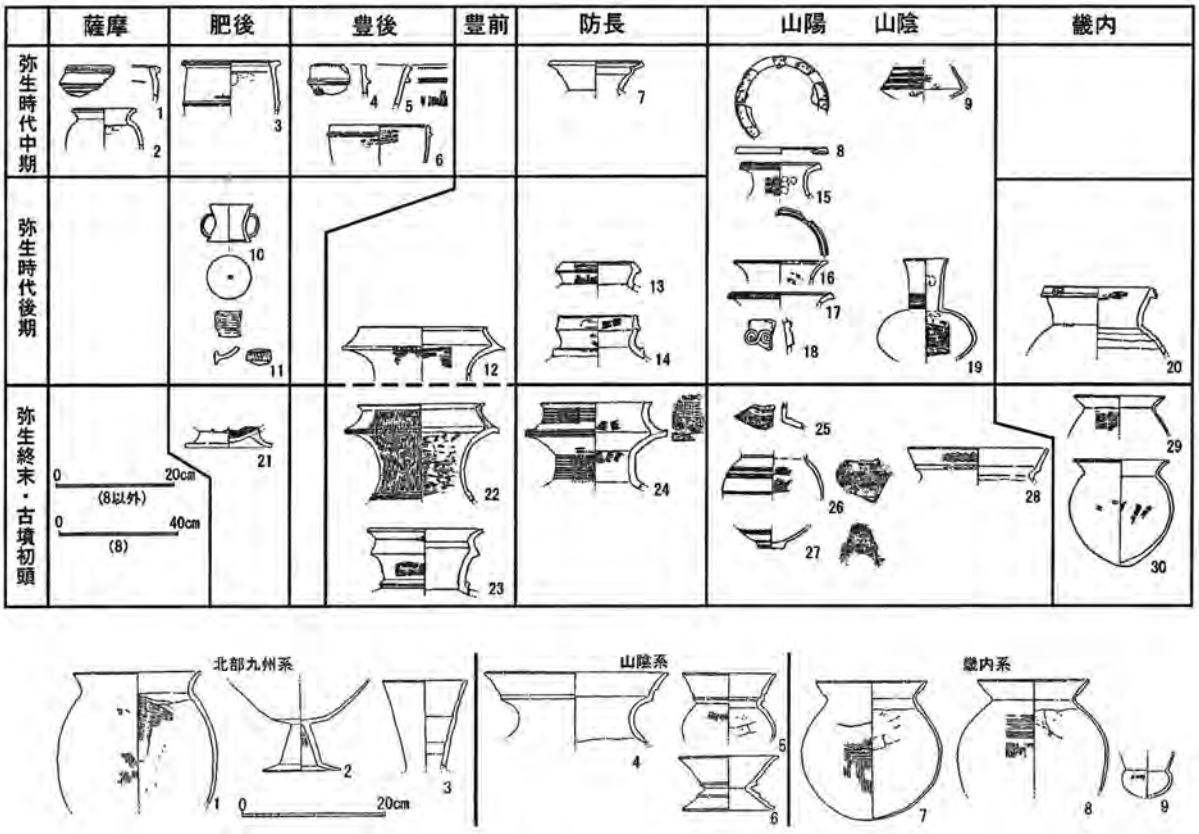


図２　原の辻出土日本列島各地土器［古澤 2016 より］

山崎さんは「イネをつくる縄文人」について楽しそうに語ってくれた。「縄文人は低い丘の縁に沿って水路をつくり、ところどころに水路から水田に水を引き込む取入口をつくり、不用のときは泥でふさぐ。そして、水田には畦から 10 ～ 30 mのところに掌より小さな石が点々とあり、きっと縄文人が雀を追い払うために石ころを投げたんだ」と。

私は日本初の「稲をつくる縄文人」の足跡を持って奈良の研究所に戻り、意気揚々と説明したがみんな〝フウン〟といった感じで、現場を見てない人に伝えるのは難しい。

それより前、福岡市埋蔵文化財調査事務所を訪ねたとき、後藤直さんが韓系壷の完形品を持って、〝市内の諸岡遺跡出土〟と言って現れた。朝鮮考古学が専門の後藤さんから見ても〝弥生初期の完形韓系壷〟は珍しかったのだと思う。福岡県北部は、初期農耕文化や鉄器文化の流入地であり、その余波が日本海沿岸の山陰や但馬、丹後に波及している。他方、福岡県には弥生初頭の韓系住居群や支石墓が福岡市曲り田遺跡などにあり、水稲農耕開始期の韓人の移住・開発が十分に考えられる。

古澤義久氏（長崎県埋蔵文化財センター）によると、玄界灘の壱岐島には、弥生～古墳時代の日本列島各地の土器が出土している（図２、古澤 2016）。それによると、壱岐･原の辻遺跡出土の弥生～古墳時代の外来系土器は、九州の薩摩・肥後・豊前・豊後をはじめ、本州の山陰・山陽から近畿に及ぶ。弥生中・後期には朝鮮半島南部の勒島から山陰系土器が出土し、弥生末から古墳初頭には近畿系叩甕も出現する。この傾向は布留式期には一層強まり、「甕・複合口縁壷の口縁部個体数をみると、北部九州系４点、山陰系４点、布留系 11 点」となる、という。

Ⅲ．東進する漢・韓人

北部九州の３・４世紀の近畿系土器は、博多湾岸の西新町遺跡をはじめ北部九州で 30 ヶ所をこえており、対外交易を意図した長期居住が推定できる。３・４世紀の西新町遺跡には九州･韓･近畿３地域（略称、九･韓･畿）に出自をもつ人々が居住していて、漢・韓人は畿内をはじめ日本列島各地の情報を入手していた。

壱岐を拠点とする漢・韓人は壱岐人と共に日本列島

北岸を東上し、少なくとも能登半島には到達していたであろう。その間の出雲や越にはそれぞれ独自の文化があった。３世紀の出雲には四隅突出型方形墓文化があり、大型墓としては木槨・木棺の二重棺を想起させる西谷３号墓などがあって、宍道湖周辺には進出していた近畿人とも出会ったであろう。出雲には、吉備で発達した葬儀用器台文化が波及しており、３世紀の吉備・出雲連合が想定できる。

はじめて西谷墳墓群を訪ね歩いたとき、草をかき分けながらフト、西谷＝ニシタニ＝サイタニ＝斎谷＝イツキノタニで、本来は斎谷だったのでは？と思った。その日、出雲人に会ったが語呂合せみたいで口に出さなかった。出雲、山持（ざんもち）遺跡など３ヶ所ほどから韓系土器が出土しており、半島南端の勒島遺跡には山陰系土器もあって相互の交流が考えられる。

鳥取県青谷上寺地遺跡からは 100 体をこえる殺傷人骨が集落内に放置された状態で出土し、人々を驚かせた。近隣集落との戦乱としては規模が大きく大陸・半島からの戦斗集団の渡来を思わせるが、人骨そのものからは検証されていない。

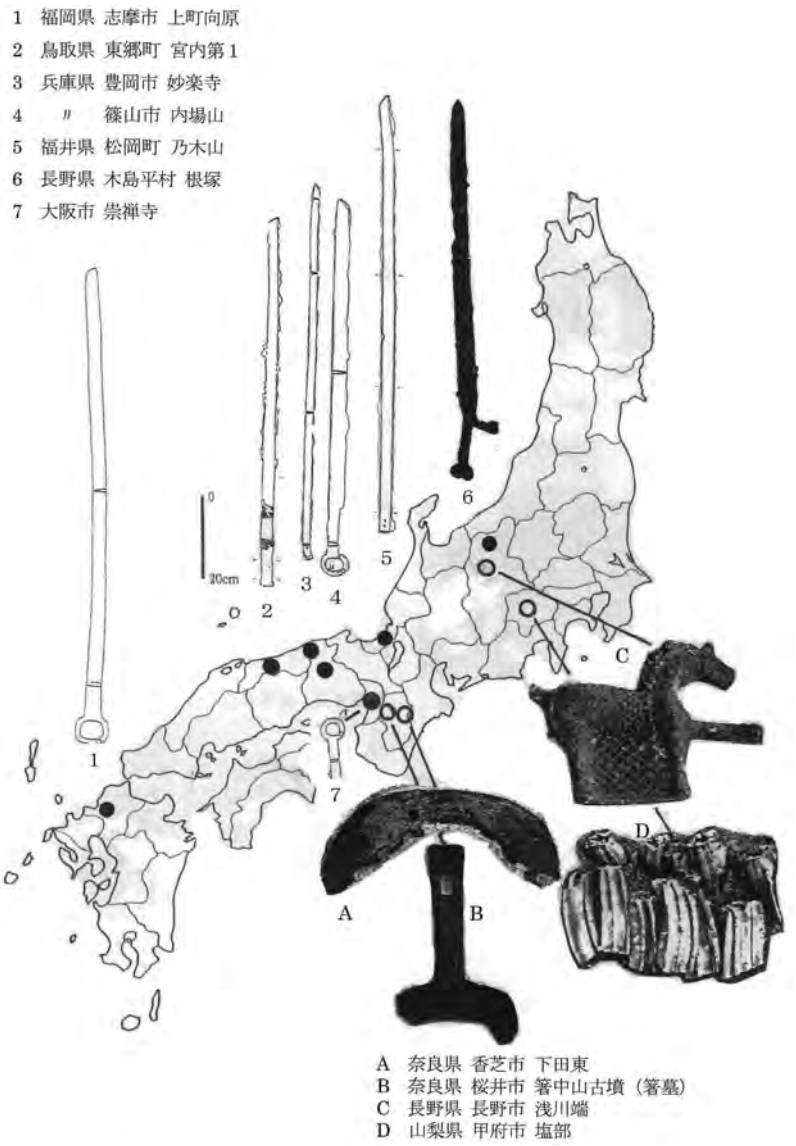


図３　３世紀の長刀と４世紀前半の馬具・馬歯［石野 2014 より］

Ⅳ．漢・韓人と２・３世紀の日本海交易（図３）

但・丹地域の鉄刀と鉄剣　２・３世紀―弥生後期～古墳早期の日本海沿岸のクニグニが倭国の表玄関であったことは、早くからの森浩一氏の指摘の通りである。鳥取県青谷上寺地遺跡旧海岸平野の 100 体をこえる弥生後半の殺傷人骨群はその痕跡を生々しく示す。

兵庫県と京都府北部の但馬と丹後・丹波地域の墳墓にはその余波を感じさせる弥生後期から古墳早期の鉄刀と鉄剣が副葬される。

全長 100 ㎝を前後する弥生末～古墳初の鉄刀は玄界灘の福岡県志摩市上町向原遺跡を西端とし、日本海沿岸の鳥取県宮内第１遺跡から福井県乃木山遺跡の６本が知られている。『魏志』韓伝には鉄鉱石は朝鮮半島に産出し、「韓・穢是を採る」とする著名な記事の通り、日本列島産の鉄素材はこの段階では未使用である。

吉備の鬼川市２式＝弥生後期中葉の全長 80 ｍの両突円墳（中円双方墳）である楯築古墳には長刀も銅鏡もない。

Ⅴ．吉備・楯築古墳の大和・河内支配

（１）楯築古墳と纒向遺跡の「葬儀用器台」

楯築古墳の被葬者は２世紀前半に吉備を本拠地とし、出雲と河内・大和に進出した最初の大王である。とくに河内では八尾市中田遺跡をはじめ、当時の河内湖南部を拠点とし、大和へは盆地東南部の纒向に拠点を築いた新

政権であり、古墳時代の幕開けとなった。

1972 年、纒向遺跡の発掘調査初期に弥生末～古墳初期の土器片が堆積する旧河道の中に色調の異なる 10 ㎝大の土器片に気付き、手に取った。大げさに言えば〝衝撃が走った〟。近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（考古学研究 13 巻３号、1967）の特殊器台＝葬儀用器台片であった。

（２）新都市・纒向の開発

イ．占地

奈良盆地東南部の三輪山南麓を南限とし、三輪山北麓の車谷から西南流する巻向川を西北流する小河川を北限とする東西２㎞南北２㎞の不整三角形の地域が旧纒向村で、２世紀末～４世紀初の纒向遺跡の範囲である。

この範囲には縄文～土師器・須恵器の小片散布は認められるが、集住地ではなく東西方向の微高地と微低地が入りまじる。

ロ．　居住地（王宮）

不整三角形の居住地の西部に推定 100 × 150 ｍの長方形区画の屋敷地があり、東西一直線に並ぶ３世紀の建物が４棟検出されている。

西からＢ棟（4.8 × 5.2 ｍ）、Ｃ棟（5.3 × 8 ｍ）、Ｄ棟（12.4 × 19.2 ｍ）の３棟が推定南北 100 ｍ× 150 ｍの長方形の柵で囲まれている。建築史の黒田龍二氏（神戸大学）は、建物Ｃ棟は伊勢神宮系、建物Ｄは出雲大社系として復原され（黒田 2012）、３世紀と推定されている建物列の中に建築史上異質とされている伊勢神宮系と出雲大社系の建物が共存しているのか？新たな課題が生まれてきた。

ハ．　王宮隣接地の埋納資料群（表１）

東西に並ぶ王宮群内の最大の建物Ｄの南端近くの土坑 3001 は 2.2 × ３ｍの長楕円形で、纒向４類（寺沢・庄内３式新）期に建物Ｄで行なわれたであろう祭祀用具類が埋納されている。表で眼につくのは、海のない奈良県の纒向にイワシ・タイ・アジ・サバなどの海の魚が多いことだ。食用となる植物でも、イネ・ヒエ・アワなどの栽培種に加えて 2769 個に達するモモの種が加わる。その上、黒漆塗の弓や剣形木製品などの祭祀用具類や底に孔をあけた小壺やミニチュアＳ字甕などの祭祀品が加わる。特に、ミニチュアＳ字甕は尾張・伊勢・三河などの日常容器を小型化した祭祀用具であり、伊勢系祭祀の浸透を考えさせる。

とくに、関東の群馬県高崎市周辺や千葉県市原市周辺の２～３世紀の集落遺跡などに、多量の東海系土器がと

表１　纒向遺跡第 168 次調査大型土坑（SK-3001）の出土遺物一覧 ［橋本 2013 より］

纒向遺跡第 168 次調査大型土坑（SK-3001）出土遺物一覧		
動物遺存体		イワシ類・タイ科（マダイ・ヘダイ）・アジ科・サバ科・淡水魚 ツチガエル・ニホンアカガエル・カモ科・齧歯類・ニホンジカ・イノシシ属
植物遺存体（食用となるものに限定）	野生種	カヤ 1・ヤマモモ 36・クリ 2・シイ属 5・コナラ属 145・アカガシ亜属 9・ムクノキ 14・ ヒメコウゾ 480・ヤマグワ 23・サクラ属サクラ節 3・キイチゴ属 2・サンショウ 80・ トチノキ 216・ブドウ属 22・マタタビ 18・サルナシ 15・グミ属 4・ ガマズミ属 1・ニワトコ 7・アカザ属 4・ヒユ属 34・シソ属 2・イヌホウズキ 87
	栽培種	モモ 2,769・スモモ 52・イネ 938・ヒエ 2・アワ 74・アサ 535・ ササゲ属 3・エゴマ 24・ウリ類 2,076・ヒョウタン類 213
土　　器		線刻を施した短頸直口壺・底部穿孔を施した小型直口壺・ 手捏ね土器・ミニチュアＳ字甕・壺・高坏・甕・器台など
木　製　品		ヘラ状木製品 4・黒漆塗り弓 1・槽 1・筒形容器 1・ 横槌 2・剣形木製品 1・竹製籠 6・敷居材 1・垂木 1
そ　の　他		ガラス製粟玉 2

もなっており、東海各地からの集団移住が推定できる（大村 2013）。

Ⅵ. 神武東征伝承・瀬戸内海ルート

『記・紀』によると、神武天皇は九州東南部の日向国を出発、北上し一旦、関門海峡をこえて筑前に寄港してから再び海峡をこえて瀬戸内海に入り、各地の港湾に長期滞在をくり返して軍備を整え、明石海峡をこえて大阪湾に攻め入った、という。

途中、豊予海峡・関門海峡をはじめ、防予諸島・芸予諸島・備讃瀬戸などの海の難所が多く、港々でそれぞれ数年間の船団整備を行っている。神武軍は旧河内湖東岸の日下の戦いで破れ、大阪湾から紀淡海峡をこえて、紀伊半島各地で戦いながら半島南端をこえて北上した、という。

2002 年 8 月、紀伊長島に一泊したあと、気になっていた神武伝承地、丹敷戸畔（にしきとべ）の里である紀勢町錦神社を訪ねたが、三角縁神獣鏡が保管されているという錦小学校は夏休み中だった。錦浦全体を遠望できる対岸の丘にのぼり、しばらく海と里を眺めた。良港だが平地は少なく三角縁神獣鏡出土地としてはふさわしくない、と感じた。

錦浦の北方の志摩市おばたけ遺跡は弥生末～古墳初の遺跡で近くの港から船に乗り、もと学生たちと一泊し、たのしく飲み明かした。志摩から紀伊半島南部にかけては、九鬼氏一族の地域で以前に九鬼神社や博物館を訪ね、海洋民の一端に触れたが、その城郭が奈良県境に近い山岳地と聞いて不思議に感じた。

志摩の不思議さを加えると、北部九州系の横穴石室であるおじょか古墳の存在だ。福岡県にあってもおかしくないほどの横穴石室の入口にもぐりこんだ。これも海洋民の動きなんだろうか。〝おじょか〟とは〝王女丘のなまり〟と地元の人々は信じているそうだが、娯しい想像だ。

筑後系の横穴石室は讃岐の古墳など瀬戸内海沿岸に点在し、海洋民の拠点支配を考えさせる。

Ⅶ. おわりに

1975 年、長崎県島原半島の山の寺遺跡を訪ねたとき、山腹の高燥な畑地に稲が植えられていた。農家の方にお聞きしたら陸稲だという。そのような地域に山の寺遺跡があり、縄文晩期系の突帯文土器をもつ。

その時、頭に浮かんだのは〝日本列島への稲作農耕の導入には水稲だけではなく、陸稲も同時に同量輸入されていた〟という考えだった。今も、あり得るとは思うが実証は難しい。稲籾（圧痕）そのもので識別できれば、と思う。

縄文晩期＝突帯文土器段階の稲籾圧痕は案外数多い。兵庫県加古川市岸遺跡の籾痕土器片は噂を聞いて実物を見せてもらいながら、紹介は控えた。大阪平野でも２・３例はあるようだ。

青森県田舎館遺跡の弥生水田跡で、早い段階に東北での弥生稲作を主張されていた、東北大学の伊東信雄先生の静かな見学姿を調査担当者からお聞きしたことを思いおこす。

【参考文献】

石野博信　2014「２・３世紀の日本海と甲・信」『邪馬台国時代の甲・信と大和』香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

岡田英弘 1977『倭国　東アジア世界の中で』 中公新書

黒田龍二 2012『纒向から伊勢・出雲へ』学生社

大村直　2013「邪馬台国時代の房総」『邪馬台国時代の関東と近畿』 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

橋本輝彦 2013『奈良県桜井市纒向遺跡発掘調査概要報告書－トリイノ前地区における発掘調査－』 桜井市教育委員会

古澤義人　2016「邪馬台国時代の壱岐」『邪馬台国時代の狗邪韓国と対馬・壱岐』 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

移動・移住（Migration）の考古学

藤原　哲

Ⅰ．はじめに

1972年に本格的な発掘が開始された奈良県纒向遺跡では出土する土器の10～15%、場合によっては26%もの割合で外来系の搬入土器が存在しており、頻繁な人の移動（移住）が推察されるところである（橿原考古学研究所1976、寺沢1984）。

しかしながら、考古学において人の移動・移住を検討する根拠や理論的な枠組みは非常に課題が多い事柄の一つである。そこで本論は、考古学から移動・移住を読み解く方法論の理論や学史をとりまとめ、今後の研究における展望を考えてみたい。

Ⅱ．ヨーロッパ考古学の移動・移住論

近代的・科学的な型式学的研究法を確立したスウェーデンのオスカー・モンテリウスは、1887年に「我らが祖先の北方への移住について」（Omvåra förfäders invandring till Norden）と題する小論を発表し（独語訳は翌1888年：Montelius 1888）、三時期区分の連続性という事実から石器時代における移住の可能性について言及した。

こうした先進的なスカンディナビア考古学の影響を受け（Baudou 2005）、考古資料の分布から移住や移動に関する研究を発展させたのはドイツのグスタフ・コッシナである。コッシナはゲルマン人やスラブ人といった古文献にある「民族」を先史時代まで遡って実証し、その移動や移住を解明しようと試みた。彼自身はその方法を“Siedlungsarchäologie”と名付け[1)]、「明確に定義された考古学的な文化圏は、常に特定の民族や部族と一致する」という著名なテーゼにとりまとめた（Kossinna 1911、p.3）。

コッシナの研究はアーリア人の優位性を主張したドイツ第三帝国に政治利用されたため、第二次世界大戦後のヨーロッパではコッシナの研究についてネガティブな評価（エガース1981）が多い[2)]。

しかしながら、少なくとも考古学的な分布圏に「文化」の概念を導入して歴史や移住を復元する方法論を開拓したのはコッシナであり（トリッガー2015）、その視点はゴードン・チャイルドに引き継がれることによって世界中の考古学へ影響を与えていく。

コッシナとチャイルド、20世紀初頭の考古学を代表する彼らは、政治的信条（民族主義と共産主義）や気質（自信家の組織派と懐疑的な一匹狼）が全く異なっているにも関わらず、学問的には驚くべき類似性があった。二人とも言語学から先史学（考古学）へ転身し司書などの傍ら独学で研究を続けたこと、フィールドワークよりも図書館と博物館で知識を蓄え、その膨大な資料を「民族」や「文化」としてヒューリステックに解釈することで、単なる古物趣味であった考古学に目標や意味を与えたからである（Veit 1984）。

したがって、初期のチャイルドがアーリア人の考古学的な実証を試みたことや（Childe 1926）、コッシナとその著作とを賞賛したとしても不思議ではない（Childe 1927）。チャイルドは繰り返して共存する遺物の組み合わせを「文化集団」（cultural group）、または単に「文化」（culture）と呼び、それは「ピープル」（people）の物質的な表現であって、文化が移動（拡大）する現象を「人の移動」（movements of people）と関連付けた。同時にピープル（pepole）の形容詞はドイツ語のvölkische、英語のethnic、すなわち「民族」であって、特定の身体（骨格）タイプと関連している場合には「人種」（race）に置き換えられる、とさえ明言している（Childe 1929、pp. v～vi）。

1931年にコッシナが世を去り、その２年後にナチスが政権を奪取すると、ドイツ国内でコッシンナは新しい運動の先駆者として称賛されるようになった。このような状況に、熱心な共産主義者で反ナチズムのチャイルドはヒトラーの人種政策を念頭に置いて、人種という用語を先史時代の文化集団に適用することを強く批判した(Childe 1933)。そして晩年に近づくほど、考古学的な文化を社会という側面で補完しようとした。

しかしそれでもなお、チャイルドの基本的な方法論は姿を変えて残り続ける。すなわちそれは考古資料の分布(範囲)域を露骨に「民族」と結び付けることが無かったにせよ、考古学的な文化圏の背景に何らかの集団(イデオロギー的な響きの薄い「～文化」という抽象的な同質集団)が存在しているという暗黙の了解の上に成立した議論であって、本質的にはコッシナの理論と大きな違いがなかったのである。

こうして、文化史的な視点により諸集団の移動や移住を検討するための考古学的手法が確立された(Childe 1950)。このことによって、伝播主義(diffusionism)と並んで移住主義(migrationism)が、社会や文化が変容する画期を説明するための、先史学上の有力な仮説の一つに成長していくのである。

Ⅲ．北アメリカ考古学の移動・移住論

北米大陸における初期の考古学では人種差別的な偏見もあって、先住民(ネイティブ･アメリカン)は原始的･静的で古代から文化がほとんど変化していないと考えられることが多かった(フェイガン2010)。そのようなアメリカ考古学においても、20世紀前半に至るとヨーロッパとは別系統で文化史的な考古学が発達する。

時間軸の前提となる科学的な層位発掘はアルフレッド・キダーのアメリカ南西部地域の調査で総合的に取り入れられ(Kidder 1924)、遺物の頻度や配列(セリエーション)に基づく詳細な土器の分類研究も深化していった。このような時期(1914年～1940年)は学史的に「分類＝歴史期－編年への関心」の段階と位置付けられている(ウィリー・サブロフ1979)。

これらの過程において､北アメリカ考古学では「文化」という用語よりも、より専門的な術語の開発や議論に力点が置かれてきたことが特徴的である。「コンポーネント」(component)、フォーカス(focus)、アスペクト(aspect)、フェイズ(phase：相)、パターン(pattern)といった階層的な中西部分類体系や(McKern 1939)、空間的･時間的な基礎単位であるフェイズを「ホライズン」(horizon)や「トラディション」(tradition)として秩序づける研究(Willey and Phillips 1958)などがその代表であろう。

文化史的な視点による考古学研究が深化すると、アメリカ考古学においても先史時代の移住や移動が議論されるようになるが(Thompson 1958)､1960～1970年代に｢新しい｣考古学が勃興すると､文化史的な研究は少なくなっていく。しかしカリブ海周辺の考古学研究に従事していたアーヴィング・ラウスは、文化史的な視点に立脚して移動や移住の研究を追い続けた。

ラウスは人工遺物から導かれた文化的に同質の集団をピープル(people)とし[3)]、ピープルは文化を伴って移住するために文化規範の分布から考古学的に移動を跡づけることができるとした。なお、ラウスは地域に吸収･同化されるような少数の移住は考古学的な検討が困難であるとして「移民」(immigration)として区別し、先住の地域集団を駆逐･同化するような大きな動きを「集団移動」(population movement)と呼んでいる[4)]。すなわち概念的には「集団移動」と「移民」の両者を包括するものが「移住」(migration)になる(Rouse 1986、ラウス1990)。

ラウスによれば、同一言語･同一文化内での移住や、後続の移民が続かない移住は文化形態の変化が顕在化しないので考古学から明らかにすることはできない。新言語や新文化を先住民に押し付け先住民を駆逐･吸収してしまうような巨視的な移住(集団移住)によってはじめて、考古学は移住を認識することができるのである。

このような特質から、ラウスの(文化史的な)研究法で目覚しく成功するのはヨーロッパ人による北アメリカの植民や、アイランド･カリブによるウィンズワード諸島の征服事例など、島嶼の例や極端な征服活動などに限られてしまう。後述するデヴィッド・アンソニーは、考古学者が分類学(classificatory methods)を精密化することで移動を認定できるという考えそのものが誤った設問であって、この種のアプローチでは島の植民地化な

ど極めて明確なケースを除いて決定的な研究成果は得られていないと指摘している（Anthony 1990）。

Ⅳ．日本考古学の移動・移住論

日本において文化史的な考古学の方法論が導入されたのは、北米と同じく20世紀前半に遡る。濱田耕作（青陵）、松本彦七郎、中谷治宇二郎などによる科学的な研究（層位発掘や型式分類）の紹介・実践を背景に、山内清男の縄文土器研究、小林行雄の弥生土器研究といった詳細な編年作業が進展した。

その結果、日本考古学では文化体系を時間軸で整理する編年研究が盛んになり、各地域・時代での土器編年の大枠が定まる1970年代以降において、遺物の分布を移動や移住として解釈する動きが現れてくる。

土器での移動研究に先鞭をつけたのは、肉眼でも識別が容易な河内産の弥生土器である。佐原真は河内産の甕など多器種が摂津に動くのは人の移動、貯蔵具の壷だけが和泉に動くのは内容物が運ばれたからだと考えた（佐原1970）。これを受けた都出比呂志は土器の搬入・搬出経路から推定できる（近距離の）地域間交流について通婚の可能性を示唆している（都出1974）。

他方、土器の移動に関する理論的な考察も深化した。文化史的な編年や分類が得意な日本では遺物の分類に留まらず移動という事象でさえも分類して把握しようとした。都出比呂志は貯蔵用の弥生土器（壷・鉢）が相互に少量移動するものを移動Ａ型、生活（煮沸）具の甕を含む多器種が多量に動くものを移動Ｂ型、庄内甕が一方的に搬出されるものを移動Ｃ型とし（都出1979）、森岡秀人は移動という現象を様々な要素から細かく分類した（森岡1993）。近年では比田井克仁が土器移動の現象を「大規模融合埋没型」、「大規模非融合定着型」、「小規模埋没型」「一次波及型」の４類型に分類している（比田井2004）。

また純粋な移動・移住論ではないが、土器研究が微細まで突き詰められた結果に移動や移住が言及される場合もある。今村啓爾は異系統土器から推定できる土器の移動を、製品の運搬、製作者の移動、製作方法の伝播の３者に分け、それぞれ近距離と遠距離とで区分した。そして近距離での制作者の移動は婚姻など個人的・恒常的なもので、遠距離の製作者の移動を集団での移動と想定している（今村2011）。

こうした、土器論と密接な関係にある日本考古学の移動・移住論は、膨大な記録保存調査に基づいた詳細な個別研究の積み上げが特徴であり、その故に緻密で首肯できる点が多い。あえて問題点を示唆するならば、シュテファン・ブルマイスターの次の言葉が参考になるだろう。

「ヨーロッパの考古学では、出土品の空間的な分布を説明するために移動（Mobility）という言葉が一般的に用いられているが、これは観察された現象の公理的な仮定にすぎない。移住（migration）それ自体に説明や研究の必要性があるとはみなされておらず、移住と他の潜在的な文化変化の原因（例えば交易や、その他の形での知識や文化の移転）を区別する方法論が欠如していることを指摘しなければならない（Burmeister 2016、p.42）。」

Ⅴ．移動・移住論への批判と復興

考古学から移動や移住を考えてきたのは主として文化史的な考古学的手法に基づくものであった。特にヨーロッパでは、考古学的な文化圏を民族や部族の実体的な集団と推定し、その移動・移住・侵略といった行為を社会変化の画期とみなすことが多かった。

そういった事情から「新しい」考古学が勃興する1960年代以降、社会の変容は人口増加や環境変化といった別の原因に置き換えられていく。文化の変化が移住や民族変化の証拠となる可能性は実証されていないため、考古学者の移住論はその場しのぎの理屈後付け（ad-hoc explanation）に過ぎないとさえ評された（Adams. et.al. 1978）。

プロセス考古学の旗手、コリン・レンフルーの次の言葉は、そういったプロセス学派の雰囲気を非常に良く示しているように思える。

「五十年前には説得力のあった『ギリシャ人の出現』、『ヨーロッパにおける先史時代の民族移動』というような研究は今では時代遅れである。現在の我々は、東地中海の初期の都市文化の発生というような人類史上の大変化は、単純に民族移動を跡づけることによって説明されるものではなく、もっと複雑な社会的、経済学的交流の産物であることをよく知っている。（略）プロセス学派

(processual school)と名づけられるべき学派の主張は、ときに誤解されてきた。彼らは民族移動はなかったといっているのではない。かつて提唱された証拠が、多くの場合不適切だと言っているだけである。批判を受けているのは方法論なのだ（レンフルー 1993、pp.10 〜 13、原著出版 1987 年)。」

このような潮流の中で、移動・移住の研究を復興したのは考古学者ではなく人類学者のデヴィッド・アンソニーである。アンソニーの画期的な論文「考古学における移住（Migration in archeology)」の奇妙な副題「赤ん坊と風呂水」(The baby and the bathwater）にはプロセス考古学者たちが移住を無視・否定した結果、まるで風呂水と共に赤ん坊（のような有望で貴重なもの）まで一緒に捨ててしまったのではないか、という皮肉が込められている。

この論文においてアンソニーは、移住は人間行動の構造化されたものの一つであり社会学等で盛んに研究されてきたことに注意を促す。現在の移住においてさえ、その原因の特定については議論が絶えない。したがって部分的な考古データから移住の原因を追求することは不毛であって、むしろ考古学者は移住をマクロ的・構造的に把握する必要がある。社会学等で研究された成果からすると、移住とは「特定の目的を持ったサブ・グループに分化した小集団（主に親族集団）が、良く知られたルートや目的地を対象として典型的に行われる行動」であって、親族間の連帯や情報量に制限されるため、一度開始されると予測可能な方向性に発展する傾向が強い。これらを指摘した上でアンソニーは､古典経済学のプッシュ・プル理論やスカウト（scouts：偵察・斥候)、跳躍移動(leapfrogging)、移住の流れ（migration streams)、帰還移民（return migration）など移住の諸側面を明確にした（Anthony 1990)。

こういった新しい提言を受け、近年の欧米考古学では再び移住に関する議論が盛んになっている。ドイツのステファン・ブルマイスターは考古学的側面から移住に関して積極的な検討を進め（Burmeister 2000、2013、2016)、イギリスではジョン・チャップマンが移住や侵入に関する論集を編纂し（Chapman and Hamerow 1997)、アメリカではキャサリン・キャメロンが、13 世紀南西部のフォー・コーナーズからリオ・グランデへの移住を取り上げている（Cameron 1995)。『世界考古学』46 巻 4 号では、新石器時代から植民地時代の様々な地域における移住の特集が組まれた（Van Dommelen 2014)。スザンナ・ハーケンベックは考古学における移住論 150 年の研究史を回顧し、移動や移住そのものの動的なプロセスを解明しようとする今後の方向性を示している(Hakenbeck 2008)。

Ⅵ．移動・移住論の課題と展望

考古学研究における移動・移住論の課題と展望とをまとめておこう。移動・移住論は主として考古資料を文化や集団へ象徴化する過程において発生する。すなわち、雑多な考古資料を地理軸や時間軸でまとめると、文化圏の範囲が拡大・縮小する現象や、イレギュラーな異系統の遺物が明らかになってくる。それらの合理的な解釈の一つとして、集団の移動や移住という考え方が導かれるのである。

しかしながら、こうした方法論で提示できる考古学的な文化とは物質文化に過ぎないことを再確認する必要がある。なぜなら、往々にして文献資料が皆無な先史時代では、物質文化を当時の文化そのものや集団領域を示す範囲と誤解する危険性が高いからである。

ラテン語の colere（「耕す」や「住む」の意）を語源とする「文化」(culture、Kultur）の概念は多様な解釈が可能だろうが、エドワード･タイラーの「知識、技術、信念、道徳、法、慣習など、社会の成員としての人間が身につけるあらゆる能力と慣習からなる複合的な全体」という古典的な定義からすると（タイラー 2019、p.9)、文化の対象となる範囲は極めて広い領域に跨がることだけは間違いない。確かに物質の形態や装飾には何らかの意味があり、唯物的な機能や技術に留まらず、考古学は象徴や観念の文脈さえも解き明かすことができるだろう。しかしそれでもなお、物質文化は文化の一部分であるに過ぎない。

人文・社会科学の分野では、1980 年代から 1990 年代の文化史のテーマとして身体を取り上げるボディリィ・ターン（bodily turn）の潮流があったが、近年では物質の役割や物質性の影響を重視するマテリアル ターン(material turn）が増えているという（Hicks 2010、後

藤 2013、Clever and Ruberg 2014)。それらの議論や研究史を振り返ると、物質がどのような機能を果たし、何を意味するのか、あるいは社会の中でどのように関係しているかは極めて多様な視点があって、物質文化や考古学的な文化を拡大解釈したり固定化した概念で用いるのは危険である。

具体例を挙げよう、現在の浄法寺塗を対象にした研究では、その伝統的な器種やまとまりの多くは考古学的手法で識別することができなかった。その理由としては伝統的な製作・利用上のコンテクストの違いや、歴史的な変遷に伴う影響が考えられている（松木 2002)。すなわち、形態や口径、器高といった合理的・理論的な型式分類だけでは、過去における実際上の使用区分や分類の実態を表していない可能性が高いのである。

アフリカのティヴ族の経済人類学を研究したポール・ボハナンによれば、その交換可能なアイテムは食料品(yiagh）を始めとする「生活財」と、奴隷、牛、金属などの「威信財」(shagba)、そして「女性と子供の権利」といった３つのカテゴリーに区分されている。これらはティヴ族独自のイデオロギーや道徳的な価値と密接に関連しているために（Bohannan 1955)、物質の形態や機能差といった単純な物差しの区分だけでティヴ族自身のカテゴリーや機能を復元することは困難だろう。

欧米で議論の多い民族性(ethnicity)についていえば、特定の集団に対する自己意識的な同一性を指すものであるから、物質文化の分布域が必ずしも過去の自己意識的な民族集団の範囲や境界を示すと断言することはできない（Jones 1997)。シュメール人やアッカド人など歴史時代の大規模な人口移動は主として言語学的に証明されているが、言語以外の文化領域では変化が少ないという指摘もある（Adams.et.al. 1978)。

これらの諸事例からすると、物質文化と実際の人々の行動との間には、直接的・普遍的な関係性は存在しないと考える方が無難である。イアン・ホダーが指摘しているように、行動と物質文化は、さまざまな文化歴史的コンテキストにおける個人の活動によって成り立っていたといえる（ホダー 1997)。

このことを移動・移住の問題から再確認しておこう。ステファン・ブルマイスターによる北米大陸のヨーロッパ移民の検討によると､北米の開拓者たちは丸太小屋(ログキャビン）という物質文化を広く利用していた。これは元来、少数のスカンディナビア人が持ち込んだ文化であるが、彼らの拡散や侵略によって北米に広まったのではなく、単にその風土や機能性から多くの人が採用したと考えられる。そのために、移住者は必ずしも文化と一体で移動するものでなく、物質文化と人の動きを同一視することは危険である（Burmeister 2000)。

そこでブルマイスターは外的文化領域（external cultural domain）と内的文化領域（internal cultural domain）の違いに注目した。外的文化領域とはいわゆる公共的な側面で、物質文化は環境や利便性に伴い容易に変化するが、逆にプライベートな部分を占める内的文化領域は慣習が継続する可能性が高い。個人的な側面が過去の経験を反映することはピエール・ブルデューのハビトゥス概念からも説明することができるという。

この点からいえば、日本考古学において注目されてきた松菊里形住居やオンドル状の施設など、特徴的な住居遺構などは移住の痕跡を濃厚に示す蓋然性が高い。研究史上で指摘されてきた煮炊き用の甕やそのセット関係にある土器のあり方（庄内甕のような非常に薄く熱伝導に優れた甕は除けば）の内的な文化領域としての検討によっては、移住を示す根拠の理論面を補強することができるだろう。

また近年では、自然科学分析の進歩によって移動や移住が解明できるのも大きな特色であり、ヨーロッパ先史時代のベル・ビーカー文化では、人骨や歯のストロンチウム同位体分析が盛んに行われている（Price.et.al. 2004、Pearson.et.al. 2016)。日本においても、ストロンチウム同位体を用いて食性や移動を復元する研究が試みられているが（日下 2012)、安定同位体分析は資料の取り扱いや分析方法がやや複雑で制約も多い。そうはいっても、今後は土器の胎土分析（水沢 2014）やストロンチウム同位体分析など、自然科学分析の進歩によって新しい視点から具体的な移動・移住が明らかになっていくことだろう。

Ⅶ．纒向遺跡における移住論の予察

最後に、先述したデヴィッド・アンソニーの研究を参考にして、纒向遺跡における移住論の予察を試みておこ

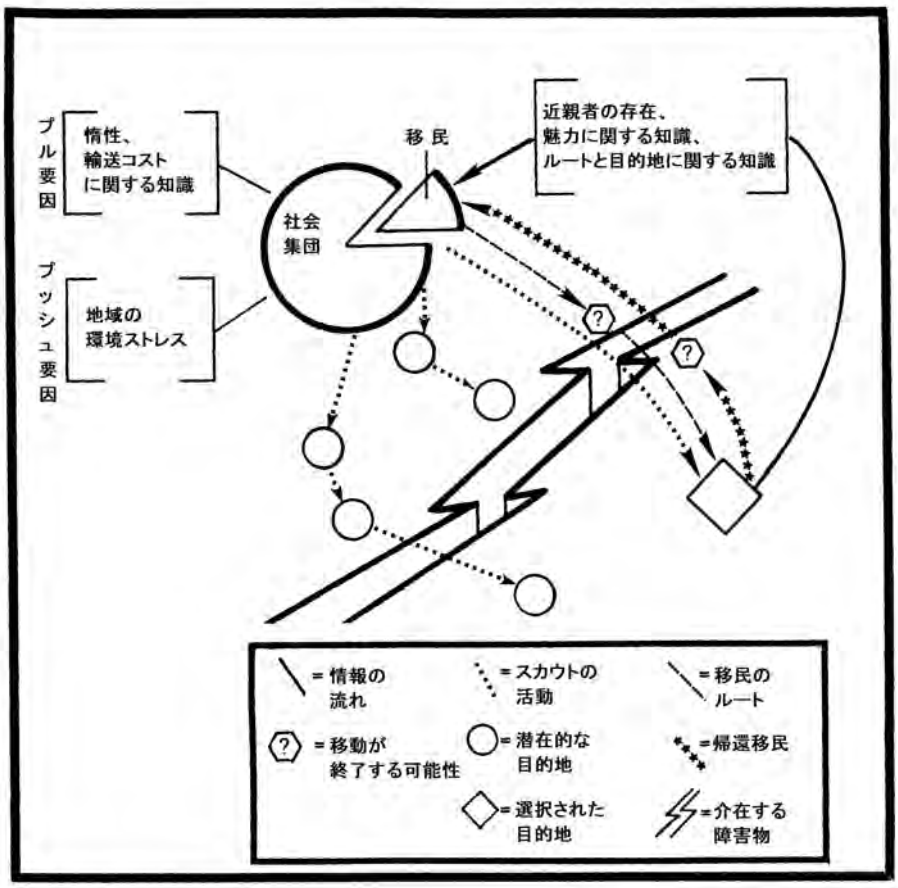


図１　移住プロセス模式図［Anthony 1990 を一部改変］

う。

アンソニーによると、移住の構造は波というよりも流れに似ている。移住の流れ（migration streams）として固定化するルートのほとんどは、移住者が出身地へ戻る反流（counterstream）の流れを発達させる。これが帰還移民（return migration）であって、移住とは常に双方向の流れとして構造的に把握しなければならない。

この視点からみると、纒向１～２期の纒向遺跡では多数の外来系土器が出土しているものの、同時期の東海・吉備・山陰各地においては大和、又は近畿からの確実な搬入土器をほとんど確認できないことは重要である。

紙面の都合もあるため外来系で最も多い東海系を中心に確認しておくと、その中心分布域にある伊勢湾沿いの三重県雲出島貫遺跡や濃尾平野の愛知県廻間遺跡でも、纒向１～２期併行段階における近畿系土器の出土は稀である。また東海系特有のＳ字状口縁台付甕は器壁が極めて薄い精緻な作りが特徴であって、これは纒向を含め東海から関東地方を中心に広く分布（移動）している。

通常、移住という行為は強制的でない限り、全く情報の無い地域へ移動することはなく、移住に先立って情報を「スカウト（scouts：偵察・斥候）」する仲介者が存在する場合が多い。彼らの行動は目的や環境に強く偏った、焦点を絞った跳躍移動（leapfrogging）として現れる。東海系を始めとした北陸系や山陰系など広範囲に流通する土器も拠点的な集落から出土する事例が多いため、スカウト的な最初期の移住者たちが広範囲かつ点的に広がっていったものと考えられる。そういった跳躍移動の具体的な様相としては、商業的な交易や土器製作などの技術者、婚姻などの人的な交流が推察できるだろう。

次の纒向３～４期併行段階になると、纒向遺跡では東海系など外来土器の割合がピークを迎え、同時に雲出島貫遺跡で明確な近畿系土器の搬入が確認される。廻間遺跡でも近畿系が増加するのは廻間６～７期以降である。

纒向と伊勢湾とを結ぶ最短ルートとしては、桜井から東に榛原まで進み、山越えを避けて名張を経由する旧初瀬街道を通れば約 80km で津にたどり着く。１日 30km の移動であれば３日程度、日常圏とはいえないが比較的に近い距離にある。このルート上に成立する名張の城之越

遺跡では、典型的な布留式や庄内甕と共に、S字状口縁台付甕も出土するため、纒向３～４期には津～名張～纒向といった明確な移住の流れの形成を追うことができ、同時にまた、反流の流れという相互交流も認められる。そのため、この段階において東海から纒向への本格的な集団移住が存在したと推定することができるだろう。

一般的な原則（古典経済学のプッシュ・プル理論）でいうと、移動元の地域に負のストレス（プッシュ）が、移住先の地域に正の魅力（プル）があり、かつ、輸送コストが少ない場合に最も移住が起こりやすいが、纒向１～２期におけるスカウト的な情報収集の結果、纒向遺跡には政治・経済・文化などの面で人々を引き付ける、何らかの強いプル要因が認められ、移住が促進された蓋然性が高い。

もう少し具体的にいえば、纒向遺跡は一般の竪穴住居が認められない反面、纒向型前方後円墳、纒向大溝、大型掘建柱建物、導水施設、大型祭祀土坑、大型鞴羽口を伴う鍛冶関連遺物など、通常の集落でなく都市的な、極めて特殊な遺跡のあり方が濃厚である。そのため、人々を引き付ける要因の一つとして水路や高塚の建設といった大規模な土木工事の需要があり、奈良県城島遺跡で指摘された労働者のキャンプサイト（飯場）のようなあり方（桜井市 1991）がそれに近いかもしれない。

それ以外にも、古墳の成立を含めた三輪山麓における祭祀といった思索的な活動、東日本と西日本との結節点である「市場」としての経済的な魅力、又はより政治的に人々が集められた可能性など、様々なプル要因を纒向遺跡に推定することが可能である。

このようなプロセスによって纒向３～４期において集団の移住が本格化し、同じころ纒向遺跡に隣接して大規模な箸墓古墳が築造される。そしてこのような情報交流や移住の後に、汎日本列島の各地において定型的な古墳が成立していくのである。

纒向遺跡における人口動態の変化や移住の問題は、初期ヤマト政権の形成を議論する上で非常に重要な要素を占めているといえるだろう。

Ⅷ．おわりに

考古学において移動・移住は、遺物のまとまりや分布といった文化史的な研究の発達の過程において常に意識されてきた現象であった。そしてその枠組みや根拠を検討してみると、文化圏の意味や物質文化の解釈といった、考古学的方法論の最重要な部分と非常に密接につながっていることが明らかになった。

そうした移動・移住研究は、一般的に欧米考古学では概念や方法論など観念的な要素が強く、日本考古学は分類学的な思考が主で、むしろ個別具体的な実証が得意である。日本では詳細な遺跡や土器のデータが蓄積しているために、これに理論的・演繹的な方法論や方向性を加味すれば、世界的にも極めてユニークで蓋然性の高い研究を行うことが可能になるのではないだろうか。

特に、纒向遺跡における移動や移住の解明は初期ヤマト政権や古代国家の形成に際して非常に重要な位置を占めている。今後の纒向学のより一層の研究・発展のなかに、移動・移住に関する研究の深化を祈念したい。

【註記】

1）英訳すると“settlement archaeology”、「居住考古学」と邦訳されることもあるが、コッシナは主に墳墓出土品を用いて民族（集団）の移動や移住の解明を主眼としていたので「入植考古学」や「移住考古学」と訳すほうが妥当なように思われる。

2）コッシナへの批判が多いその反面、ドイツやその周辺地域においては歴史的にみても様々な民族が興亡を繰り広げた史実を消し去ることはできない。そのため、たとえコッシナの研究を否定しようとしても、歴史学や考古学の分野では文化圏や民族の問題を避けて通ることはできず、ヨーロッパの考古学者たちは長い間、コッシナ症候群（Das Kossinna-Sydrom）に苦しめられることになる（Veit 1989、Götz 2009）。

3）ラウスの原語表記は“people”（Rouse 1986）。小谷凱宣はこれを「民族」と訳しているが（ラウス 1990）、『先史学の基礎理論』を翻訳した鈴木公雄は「ピープル」と日本語表記する。そしてこの概念は「文化的組み合わせの類をのこした諸個人。これらの人々はその類の特徴的な複合体によって性格づけられ、それゆえ同じ文化を保持していた人々」と解説している（ラウス 1974）。

4）原語表記は“population movement”（Rouse 1986）、小谷凱宣はこれを「民族移動」と訳しているが（ラウス 1990）、「民族」は誤解を招く恐れがあるので「集団移動」と改めた。

【引用・参考文献】

和文

今村啓爾 2011「異系統土器の出会いー土器研究の可能性を求めてー」今村啓爾（編）『異系統土器の出会い』 同成社 1-26 頁

ウィリー・G・R、サブロフ・J・A（小谷凱宣訳）1979『アメリカ考古学史』 学生社

エガース・H・J（田中琢・佐原真訳）1981『考古学研究入門』岩波書店

橿原考古学研究所（石野博信・関川尚功編）1976『纒向』

日下宗一郎 2012「縄文時代人の食性と集団間移動ー安定同位体分析による試論ー」『考古学研究』59 巻 1 号、92-102 頁

後藤明 2013「序説：モノ・コト・時間の人類学」ー物質文化の動態的研究ー『人類学研究所 研究論集』 1 号、1-32 頁

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』

桜井市教育委員会 1991『桜井市城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書』

佐原真 1970「大和川と淀川」岸俊男・坪井清足（共編）『古代の日本』第 5 巻（近畿）, pp. 24

タイラー・E・B（松村一男監、奥村倫明ほか訳）2019『原始文化』上、宗教学名著選第 5 巻、図書刊行会

都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第 20 巻第 4 号, pp. 20-47

都出比呂志 1979「ムラとムラとの交流ー集落と地域圏」樋口隆康（編）『図説　日本文化の歴史』第 1 巻, pp. 153-176

寺沢薫 1984「纒向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』 6、吉川弘文館、35-72 頁

トリッガー・B（下垣仁志訳）2015『考古学的思考の歴史』同成社

比田井克仁 2004『古墳出現期の土器交流とその原理』 雄山閣

フェイガン・B.M（小泉龍人訳）2010『考古学のあゆみー古典期から未来へ向けてー』 朝倉書店

ホダー・I（深澤百合子訳）1997『過去を読む』フジインターナショナルプレス

松木拓 2002「型式とその解釈ー現代漆器資料を用いた一考察ー」『史観』146、87-107 頁

三重県埋蔵文化財センター 1992『城之越遺跡』

三重県埋蔵文化財センター 2001『嶋抜 Ⅲ』

水沢教子 2014『縄文社会における土器の移動と交流』雄山閣

森岡秀人・比田井克仁「土師器の移動」『古墳時代の研究　6 土師器と須恵器』雄山閣、229-244 頁

森岡秀人 1993「土器移動の諸類型とその意味」『転機』 4 号、29-45 頁

ラウス・I（鈴木公雄訳）1974『先史学の基礎理論』雄山閣

ラウス・I（小谷凱宣訳）1990『考古学への招待ー先史時代の民族移動ー』 岩波書店

レンフルー・C（橋本槇矩訳） 1993『ことばの考古学』青土社

欧文

Adams, W. Y., Van Gerven, D. P. and Levy., R. S. (1978). “The retreat from migrationism”. *Annual Review of Anthropology*, 7(1), 483-532.

Anthony, D. W. (1990). “Migration in archeology: the baby and the bathwater”. *American anthropologist*, 92(4), 895-914.

Baudou, E. (2005). “Kossinna meets the Nordic archaeologists”. *Current Swedish Archaeology*, 13, 121-140.

Bohannan, P. (1955). “Some Principles of Exchange and Investment among the Tiv”. *American Anthropologist*, 57(1), 60-70.

Burmeister, S. (2000). “Archaeology and migration: approaches to an archaeological proof of migration”. *Current anthropology*, 41(4), 539-567.

Burmeister, S. (2013). “Migration-Innovation-Kulturwandel”. *Topoi - Berlin Studies of the Ancient World* 9. pp. 35-58.

Burmeister, S. (2016). “Archaeological research on migration as a multidisciplinary challenge”. *Medieval worlds*. No. 4. pp. 42-64.

Cameron, C. M. (1995). “Migration and the movement of Southwestern peoples”. *Journal of Anthropological Archaeology*, 14(2), 104-124.

Chapman, J. and Helena Hamerow (1997). *Migrations and invasions in archaeological explanation*. BAR International Series 664.

Childe, V. G. (1926). *The Aryans. A study of Indo-European origins*. Kegan Paul, Trench, Trubner and Co. Ltd. London.

Childe, V. G. (1927). “Rezension von Gustaf Kossinna: Ursprung und Verbreitung der Germanen in vor- und frühgeschichtlicher Zeit”. *Man*, 27.Nr.33, 54-55.

Childe, V. G. (1929). *The Danube in prehistory*. Oxford: Clarendon Press.

Childe, V. G. (1933). “Is prehistory practical?”. *Antiquity*, 7, 410-418.

Childe, V. G. (1950). *Prehistoric migrations in Europe*. Oslo : Institutet for Sammenlignende Kulturforskning.

Clever, I. and Ruberg, W. (2014). “Beyond cultural history? The material turn, praxiography, and body history”. *Humanities*, 3(4), 546-566.

Van Dommelen, P. (2014). “Moving on: archaeological perspectives on mobility and migration”. *World Archaeology*, 46:4, 477-483.

Götz, M. A. F. (2009). “Gustaf Kossinna: análisis crítico de una figura paradigmática de la arqueología europea”. *Arqueoweb. Revista sobre arqueología en*

Internet, 11, 1-27.

Hakenbeck, S. (2008). “Migration in archaeology: Are we nearly there yet”. *Archaeological Review from Cambridge*, 23(2), 9-26.

Hicks, D, 2010 “The material-cultural turn: Event and effect”. Hicks, D. and Beaudry, M. C. (Eds). (2010). *The Oxford handbook of material culture studies*. Oxford: Oxford University press, 25-98.

Jones, Siân. 1997. *The archaeology of ethnicity: constructing identities in the past and present*. London: Routledge.

Kidder, A. V. (1924). *An introduction to the study of Southwestern archaeology*. Yale University Press.

Kossinna, G. (1911). *Die Herkunft der Germanen: zur methode der Siedlungsarchäologie* . Curt Kabitzsch.

McKern, W. C. (1939). “The Midwestern taxonomic method as an aid to archaeological culture study”. *American Antiquity*, 4(4), 301-313.

Montelius, O. (1888). “Über die Einwanderung unserer Vorfahren in den Norden.” *Archiv fur Anthropologie,* 17, 151-160.

Pearson, M. P., Chamberlain, A., Jay, M., Richards, M., Sheridan, A., Curtis, N. and Wilkin, N. (2016). “Beaker people in Britain: migration, mobility and diet”. *Antiquity*, 90(351), 620-637.

Price, T. D., Knipper, C., Grupe, G. and Smrcka, V. (2004). “Strontium isotopes and prehistoric human migration: The Bell Beaker period in central Europe”. *European journal of archaeology*, 7(1), 9-40.

Rouse, I. (1986). *Migrations in prehistory: inferring population movement from cultural remains*. Yale University Press.

Thompson, R.H. (Ed). (1958). *Migrations in new world culture history*. University of Arizona Bulletin, Tucson : University of Arizona Press.

Veit, U. (1984). “Gustaf Kossinna und V. Gordon Childe”. *Saeculum*, 35(3-4), 326-364.

Veit, U. (1989). “Ethnic concepts in German prehistory: a case study on the relationship between cultural identity and archaeological objectivity”. *Archaeological approaches to cultural identity*, 35-56.

Willey, G. and Phillips, P. (1958). *Method and theory in American archaeology*. University of Chicago Press.

唐古・鍵遺跡と纒向遺跡の「板石硯」とその意義

久　住　猛　雄

Ⅰ．はじめに

島根県松江市田和山遺跡における2000年の「板石硯」の発見[1]からおよそ20年が経過した。2016年の福岡県糸島市三雲遺跡番上地区における板石硯の発見[2]から、「板石硯」は一部の研究者の認識の俎上に乗り、近年の精力的な研究によって、弥生時代から古墳時代のその可能性のある遺物は200点以上（「研石」を含む）認識されるに至った[3]。さらには、板石硯の裏面に「文字」が発見される事例[4]まで報告されるに至っている。いくつかの懐疑的見解や、肯定論の中にも「増えすぎた」事例への懐疑から、「砥石との弁別に問題が残る」という疑問も提出されてはいるが[5]、もはや全面的な否定論は困難な情勢であると考える。本稿では、これまで北部九州や山陰の事例が主に紹介されてきたが、「板石硯」が畿内大和（奈良盆地）の地にも古くから波及し、展開していた可能性について、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡の事例[6]と奈良県桜井市纒向遺跡の事例[7]を紹介することにより、論じるものである。

Ⅱ．唐古・鍵遺跡の板石硯とその意義

すでに学会発表で紹介したことがあるが[8]、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡には、少なくとも３点の「板石硯」の可能性がある遺物が存在する。以下、各遺物について写真と実測図（一部略測図）を提示しながら、「板石硯」とする根拠を示しつつ、その意義について考えてみたい。

（１）「S1124」板石硯（図１、写真１）

「S1124」は唐古･鍵遺跡69次調査SK-1137の第５（下）層から出土し[9]、共伴する土器は大和Ⅲ−３様式[10]とされている。報告書では「砥石」とされる遺物であるが、筆者は「板石硯」と考える。法量は、最大長5.8cm、最大幅4.75cm、上部破断面幅4.0cm、最大厚12.5mmである。なお図１のｂ辺と下辺の側面図は報告書掲載実測図に加筆改変トレースしたものである（他は筆者原図）。「Ａ面」とした方が最終使用面であるが、略楕円形の微妙な凹みがあり、長軸に対して横位の使用摩滅（研磨）痕がこの範囲に認められる。長軸に対して平行ないしやや斜行して使用痕跡があるのが通有の「砥石」であるが、この石製品は横位主体である。また、利器の刃部の幅が分かる明確な往復研磨痕などがない。ただし一部、実測図の縦位方向でそのように見える箇所もあるが、他の使用痕が上にかぶるので整形痕跡と考える。この状況は、「板石硯」の上で、「墨丸」を「研石」で磨り潰した時に、研石が板石硯に当たることによって生じると考えられる板石硯の使用痕[11]に類似している。また通有の砥石としては、最大厚12.5mm、薄い部分で６～７mmで、やや薄く、板石硯に多い厚さである。「Ｂ面」は、「Ａ面」と同じ天地方向とした場合、使用研磨方向が長軸に平行ないしやや斜行しているため、当初は「砥石」面とも考えた[12]。しかし石材が北部九州の砥石や板石硯石材に多い暗褐色気味の砂質泥岩の可能性が高いこと[13]、だとすれば単なる「砥石」であれば遠隔地への搬入機会は少ないだろうこと、よく見ると、「Ａ面」の長軸（天地）の向きを90度横転させると、より広い「略楕円形凹み」の一部と考えられる凹みの中の使用研磨痕は、「横位」の使用痕となり、刃部を研いだ際に生じる刃部幅痕跡も無いことから、本来は図１に略図を描いたような向きの一回り大きな個体であり、これが破損によって「Ａ面」の向きで使用する一回り小さい板石硯に改変再加工された「再生硯」[14]とみるのが合理的な解釈と考えられる。なお当初の平面形は正確には不明だが、推定下辺（ｂ辺）がやや内湾する、平面台形ないし円頭笏状形、あるいは五

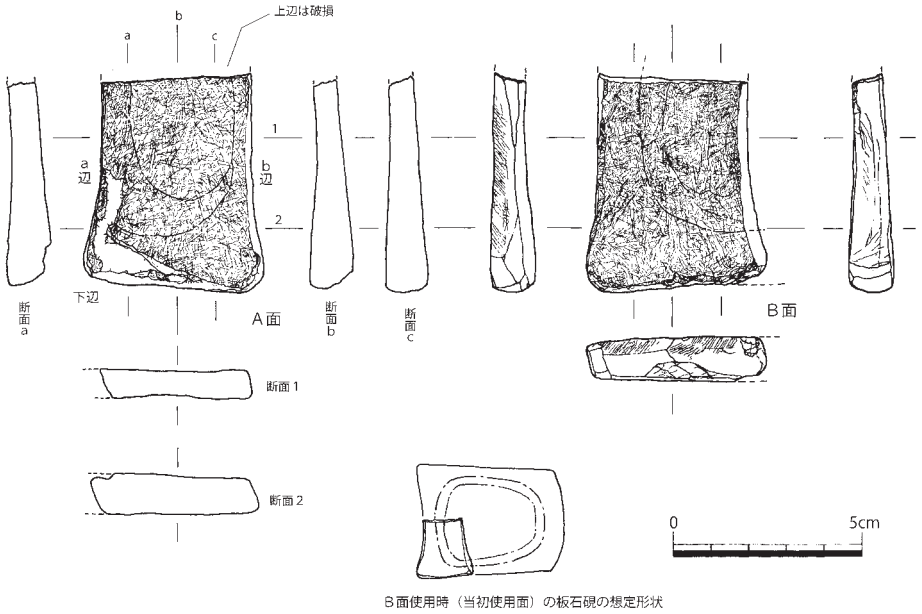


図１　唐古・鍵遺跡出土 S1124 板石硯実測図（S ＝ 1/2）

写真１　唐古・鍵遺跡出土 S1124 板石硯写真

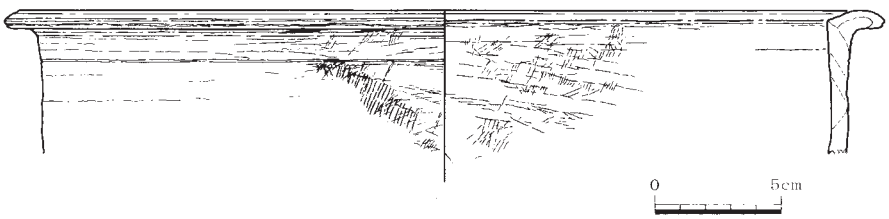


図２　唐古・鍵遺跡出土須玖式系甕形土器実測図（S ＝ 1/3）

角形だった可能性があり、整った「長方形」ではなかったのは間違いない。最終的なＡ面使用時も同様に台形などの平面形だったであろう。また側面は、最終的な研磨により本来の素材からの切り離し加工（技法）がやや不明確であるが、いずれも両側打裂の「打割Ｂ」技法[15]の可能性が高く、「擦切り技法」ではない。

はたしてこの個体を「板石硯」とみると、「大和Ⅲ－３様式」に属するとすれば、畿内地域では最も古い板石硯となる。管見では、畿内地域で「確実に、安定的に」板石硯が波及し継続するのは、唐古・鍵遺跡の他の事例も含めてⅤ様式初頭以降なので[16]、飛び抜けて古いことになる。ただし、時期はわずかに新しいが、唐古・鍵遺跡34次調査SD-102Cの「Ⅲ－４様式」を主体とする遺構（層）から、北部九州の須玖式系甕の破片が出土している[17]（図２）。「S1124」が「南地区」の69次、須玖式系甕が「北地区」[18]の34次と出土地点に違いがあり、時期も１小様式違うものの、比較的近似した時期の北部九州との直接的往来を示す遺物であり、偶然とは思えない。34次の須玖式系甕については、「須玖Ⅰ式新相」とする見解もあるようだが、口縁部上面が外に湾曲しており、また丹塗りであることも含めて、須玖Ⅱ式古相（初頭）とした方がよいと考える。福岡市西区飯氏遺跡９次調査SD04下層～最下層の甕が類例としてあげられる[19]。しかし、口縁部形状や口縁部内側の突出具合の未発達からいって、須玖Ⅱ式新相には下らない。いずれにしても、S1124板石硯と須玖式系甕の存在は、大和Ⅲ－３～４様式期（≒須玖Ⅰ式末～須玖Ⅱ式初頭頃）に、北部九州と唐古・鍵遺跡の間に何らかの直接的関係があった証左とみることができる[20]。さらに69次の西隣の33次では、やや遡る可能性が高いけれども、細形銅矛破片が出土していることも注目される（図５）。

（２）「M5309」板石硯（図３、写真２）

「M5309」は唐古・鍵遺跡65次調査SK-105の第２層から出土し[21]、共伴土器は厳密には不明だがⅤ様式の幅内とされている。報告書では「砥石」とされる遺物であるが、筆者は「板石硯」と考える。報告書の観察表では、「完存」とされるが、筆者が「下辺」と判断した部分は最終的な破断面であり、かつその部分が「砥面」として再利

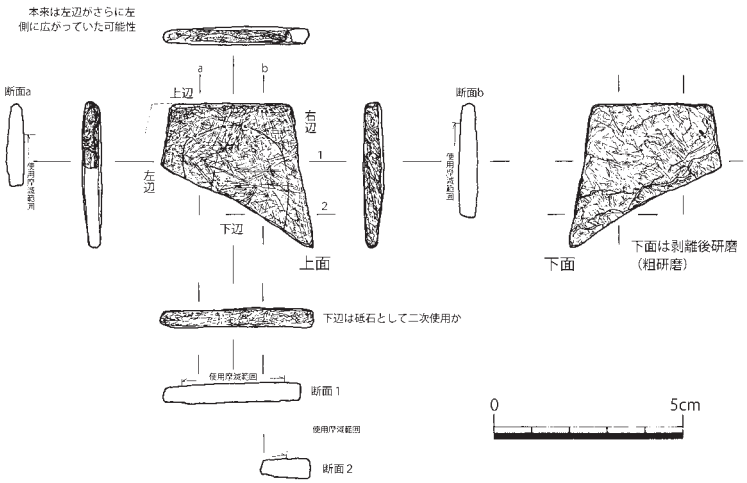


図３　唐古・鍵遺跡出土M5309板石硯実測図（S＝1/2）

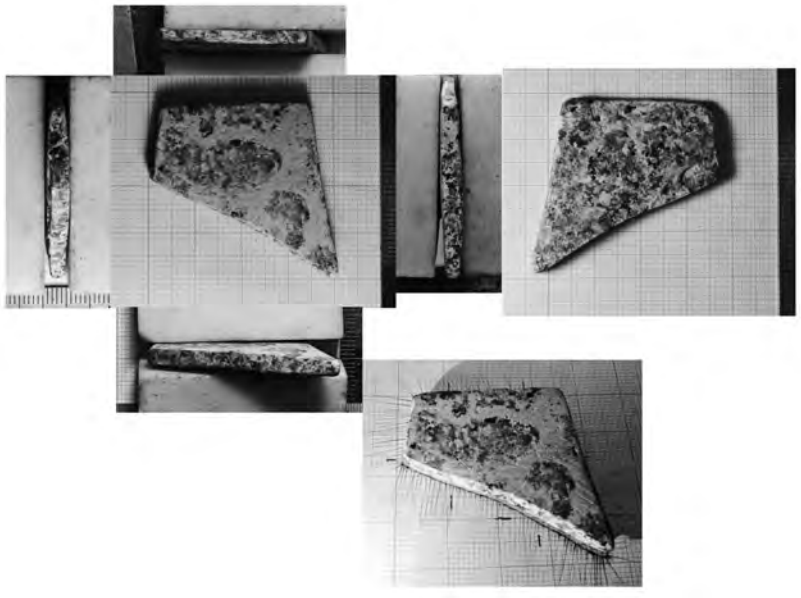


写真２　唐古・鍵遺跡出土M5309板石硯写真

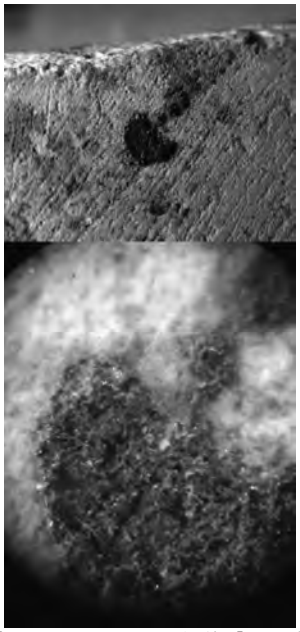


写真３　M5309板石硯付着「墨」痕と拡大写真（下）

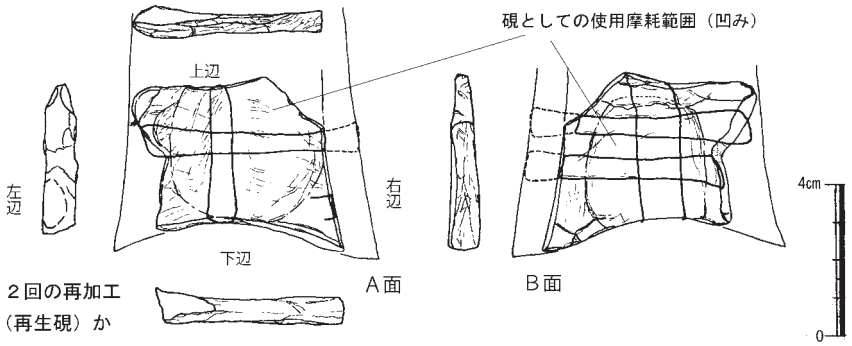


図４　唐古・鍵遺跡出土 M5317 板石硯実測図

写真４　唐古・鍵遺跡出土 M5317 板石硯写真

用されている[22]。法量は、最大長 3.95cm、最大幅 3.6cm、下辺破断面幅 4.5cm、最大厚 5.5mm である。全体的にかなり薄いのが特徴で、全体的には３～５㎜の厚さの部分が多い。「Ａ面」とした方が硯としての使用面であるが、略楕円形の微妙な凹みがあり、長軸に対して横位の使用摩滅（研磨）痕がこの範囲に認められる。この石製品Ａ面には利器の刃部の幅が分かる往復研磨痕などがない。この状況は、先に説明した「板石硯」の使用痕とみられる。「Ｂ面」とした方が未使用の裏面（下面）と推定されるが、板石硯によくあるという「剥離未調整」[23]ではなく、素材からの剥離整形後に、敲打→粗研磨を施している。ただやはり非常に薄いことと合わせ、Ｂ面は「砥石」としては未使用と考えられることから、板石硯の特徴を備えている。石材は報告によると「流紋岩H」とされるが、在地の耳成山流紋岩とは雰囲気が異なり、今後の検証を必要とするが、筆者は山陰地方の流紋岩ではないかと考えている[24]。また側面整形であるが、左辺は「施溝分割Ｂ」[25]後研磨、上辺は「打割Ｂ」後研磨、右辺は「打割Ａ」後研磨である。左右辺側面の整形技法が異なるが、おそらく、比較的平滑に整形・調整している右辺が本来（当初）成形時の側面が残っていると考え、左辺は破損後に再加工したものと推定する。

なおこの個体には、上面（使用面）の上辺に近い箇所に幅２㎜に満たない黒色物質の付着があり（写真３）[26]、「墨」付着痕跡とみられる。

（３）「M5317」板石硯（図４、写真３）

「M5317」は唐古･鍵遺跡 65 次調査「黒褐色土」層（包含層）から出土し[27]、共伴土器は大和Ⅵ－３様式（従来のⅤ様式末）とされている。なお図４は「実測図」というより「略測図」である。報告書では「砥石」とされる遺物であるが、筆者は「板石硯」と考える。報告書の観察表では、「ほぼ完存」とされるが、おそらく２回ほどの改変（再加工）を経た最終形状であり、「再生硯」と考える。法量は、残存長 4.8cm、最大幅 5.6cm、上辺残存幅 3.6cm、下辺残存幅 5.0cm、最大厚９㎜であ

るが、厚さは中央付近で4.5～5㎜前後と薄く、通有の「砥石」としては異例である。本例は、以下述べるように、再加工に伴い結果的に両面ともに使用している。A面とした部分は、やや凹みのある略楕円形の使用摩滅（研磨）範囲があるが、現状の中軸線から右辺側に偏っている。このため、右辺側は破損後に現在の箇所に再整形されたものと考える。B面は中央に略円形の使用摩滅範囲があるが、最終形状の中にほぼおさまっている。したがってB面が最終使用面と考えるのだが、ここで上辺は一部破損があるも、大部分が「破断面」ではなく、「打割B」（→敲打→粗研磨）により整形（再整形）されたものと観察する。下辺は打割B→敲打→比較的丁寧な研磨である。下辺の曲線形状の内湾度が大きいが、台形あるいは圭頭五角形、あるいは円頭笏状形の下辺の内湾度がきつくなる型式は比較的新しいものという見通しをもっている。右辺はすでに述べたように再整形の可能性が高いが、打割B→敲打→研磨である。左辺はほとんど破断面だが、上辺に移行する隅角前後はわずかな幅が生きている可能性がある。A・B両面ともに「使用摩滅範囲」に横位の研磨痕跡がある[28]。最終的な上辺を整形するための再加工があり、その前にA面から見て右辺の再加工があり、おそらくその前はより長い台形または圭頭五角形、あるいは円頭笏状形の平面形だったと推定する[29]。石材は、「石英安山岩質凝灰岩A」と報告されるが、これは奈良盆地周辺で採取できる「在地」の石材とみてよいだろう。

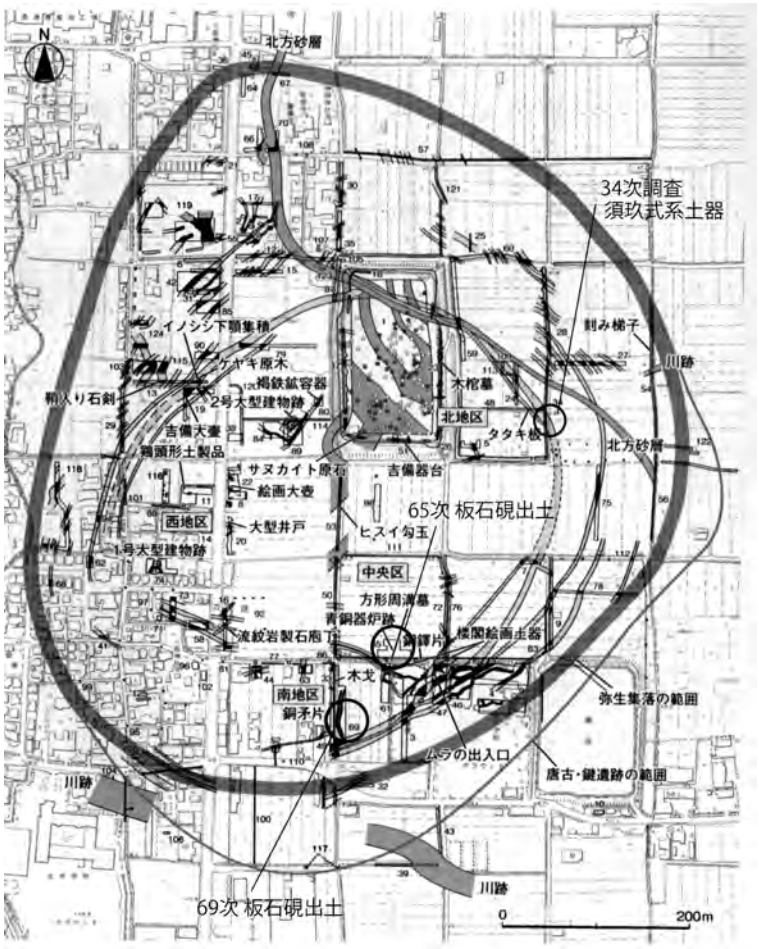


図５　唐古・鍵遺跡全体図と硯出土地点［藤田三郎 2015 掲載図に加筆］

（４）唐古・鍵遺跡出土の板石硯の意義

これらの「板石硯」は、いずれも唐古・鍵遺跡の「南地区」から出土していることが注意され（図５）、この「南地区」は青銅器鋳造などが行われた場所であること、あるいは集落の主要な「ムラの出入口」があった場所だと推定されている[30]ことが注目される。これは今後の検証が必要だが、唐古・鍵遺跡における「板石硯」は、①青銅器原材料の調合量などのメモ、あるいは原材料取引（入手）の際のメモに使われた、②青銅器や青銅器原材料のみならず、集落の出入口近くに物資交換・交易の場所（「市」）があり、そこでの交換取引の記録や交易物資の伝送目録を書くために使われた、といった用途を仮説として提示しておきたい[31]。今後、この地区付近で出土する「木切れ」に、墨書が消えかけた木簡などが含まれていないか、十分な注意が必要であろう。

Ⅲ．纒向遺跡の板石硯とその意義

（１）第 180 次調査出土板石硯（図６、写真５）

この遺物は、すでに桜井市の調査担当者である森暢郎によって報告されている[32]（「報告」とする）。出土したSD-1002 は布留１式期の掘削のようだが、布留２式まで存続し、さらに出土した箇所は、出土土器から布留２式後半におそらく再掘削された上層部分であり、石製品出土該当層位出土の大半は布留３式(＝古墳時代中期初頭)であり、その時期に廃棄されたものであろう[33]。図６は、その報告掲載図を等倍（実物大）に拡大し、実物を確認・

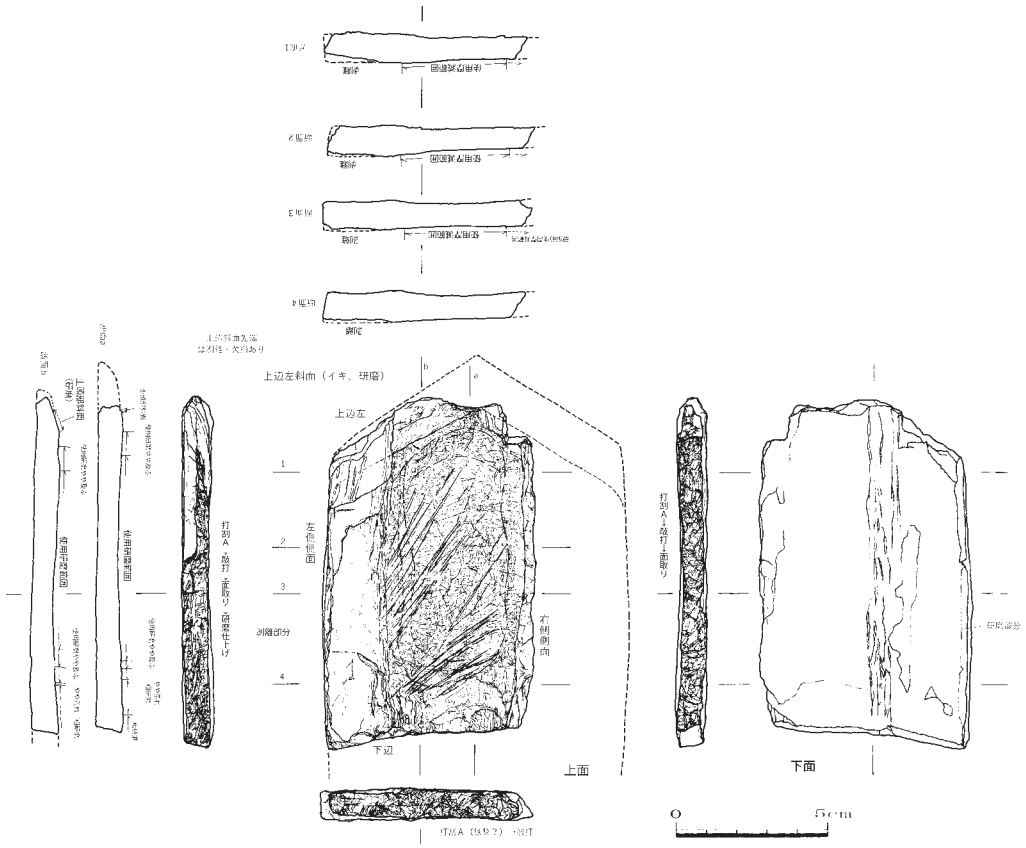


図６　纒向遺跡 180 次調査出土板石硯実測図（S ＝ 2/5）

写真５　纒向遺跡 180 次調査出土板石硯写真

観察し、再計測して補足したものである。断面図の一部と右側側面図、下辺側面図は新たに図化し、また表面の整形・調整痕、使用痕を観察により加筆した図をトレースしたものである。まず法量について述べておく。残存長 11.6cm、最大幅 6.55cm ～最小幅 5.6cm、左辺長 9.65cm、右辺長 9.5cm、下辺長 6.4cm、最大厚 10.5mm である。厚

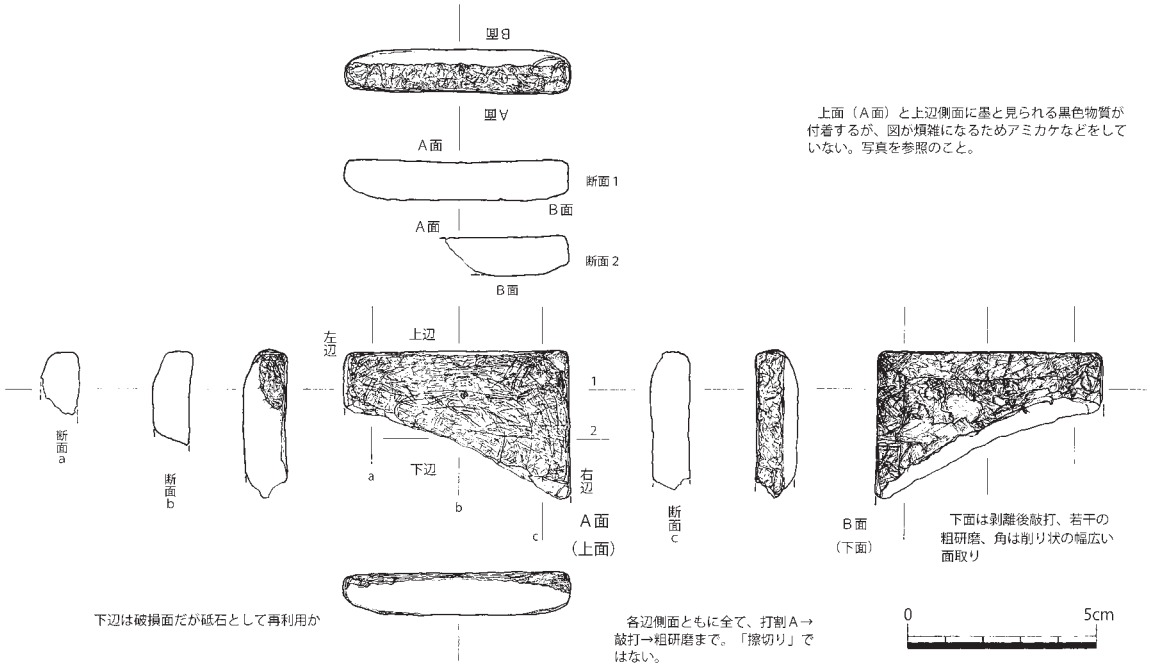


図７　福岡市比恵遺跡群 141 次調査出土板石硯（S ＝ 1/2）

さは、左辺側が厚く、また下辺側もやや厚くなるが、中央から右辺側は７～８㎜前後と薄くなっている。後に再度説明するが、右辺側は本来（当初）の側面ではなく、再整形した辺であり、本来は中央部付近であったため薄いものと推定される。「報告」では、右辺側および下辺側は、「破断面」として「生きていない」と判断しているが、いずれも「打割Ａ」技法による（二次）整形面である。右辺は「打割Ａ」→敲打→面取り粗研磨、下辺は鏨状工具で一気に割るような「打割Ａ」[34] →若干の敲打であり、「生きている」。左辺は、「擦切り」ではなく、やはり「打割Ａ」を施した後、敲打、さらにやや丁寧な研磨を施す。左右側面の整形が異なるのは、再加工された「再生硯」であることを示す。「使用摩滅範囲」の範囲の重複では不鮮明だが、横断面図を見ると、左辺側が厚く、右辺側がやや薄いのは、先述の通り、さらにやや離れた右側に本来の右辺を想定できるからである。上辺に着目すると、長軸に斜行する部分が「斜め」に傾いている（写真参照）。これは研磨された「生きた」面である（図ではウスアミをかけている）。先端はやや剥離・欠損しているが、おおよその本来の端線が推定できる。左辺と右辺から推定できる長軸線から斜行するので、この個体は本来、「圭頭五角形」の板石硯であったと判断できる。そのように観察、理解して作図したのが図６である。なお、下面（裏面）は基本的には剥離整形を残すが、若干研磨されている痕跡がある。また石材は、「報告」によると「珪質頁岩」という。

写真６　比恵遺跡群 141 次調査包含層出土板石硯写真

さて「報告」では、「板石硯」の可能性を指摘しながら、いくつかの点で断定するに至っていないが、新たな観察により、この個体は「板石硯」と判断してよいと考える。まず、使用されている「上面」には、「使用摩滅範囲」が略楕円形状に存在し、僅かに凹んでいる。この凹みは左側では表面の剥離により失われている。この範囲に、中軸に斜行する「おろし目刻線」[35]がある。この「おろし目刻線」は、利器刃部の「研ぎ」に伴う「線状痕」と異なり、刃部幅の凹みを伴わないものであり、意図的に付加されたものである。これも上面左側の表面剥離部分では薄く消えていく。また「報告」にある、武末純一の指摘により、側面整形が「擦切り」ではないから「板石硯」であることを躊躇するというのは、ここまで見た唐古・鍵遺跡出土板石硯も含めて諸事例から言って誤りである。参考として、福岡市博多区比恵遺跡群 141 次調査出土板石硯[36]を図示しておくが（図７、写真６）、この事例は比較的整美な「長方形板石硯」になるもので、下面隅角の斜めの「面取り」から、硯枠台と合わせて製作されたと推定されること、さらに「墨」の可能性が高い黒色物質が表面（上面）に付着し、さらに上辺小口側面に滴り垂れていることから、「硯」であることがほぼ確実なものである。しかし、側面整形は明らかに「擦切り」ではなく、「打割Ａ」技法である。したがって、側面整形が「擦切り」ではないから「板石硯」ではない、とする見方はもはや意味が無い[37]。纒向 180 次例は、「板石硯」として評価することができるのはほぼ確実である。

（２）纒向 180 次出土板石硯の意義

本事例の注目すべきところは、「卑弥呼の宮殿か？」としても話題になった、纒向遺跡の中枢部の、「方形区画（居館）」群が継起して累代的に営まれた地区から出土した点である。つまり、「王権」の中枢地区である可能性が高いという点が重要である。当然、「外交」に「文字」を使った蓋然性がまずあるが、古墳時代前期末（布留２式新相）～中期初頭（布留３式）というと、実年代では４世紀後半～末にあたり[38]、文献史学では一般的に「応神朝」が想定されている時期にあたる[39]。「応神朝」は、記紀の記述を信じれば、「阿直岐（阿知使主）」や「王仁博士」により、古代中国の「経典」（漢籍）が多くもたらされたということになっており、従来の「通説」では、これが列島における「文字使用」の開始（伝来）とされてきた。しかし、弥生時代中期中頃前後からの「板石硯・研石」の存在、田和山遺跡における文字使用（弥生時代中期末＝北部九州の後期初頭、紀元前後）[40]、『魏志倭人伝』の記述から[41]、「文字使用」自体が遡るのは間違いない。おそらく「応神朝」の記述（伝承）は、多量の漢籍の伝来により、「文字使用」の範囲が広がったこと、その後の５世紀の金石文の出現などに示されるように、「内政」や「歴史記録」に使用範囲が広がったことを示すと再解釈すべきだろう。ところがその契機を経ても、一方の中国では、三国両晋期に墨の改良（膠墨による「墨錠」の出現と普及）があり、それに伴い陶瓷製円面硯に古代中国では移行していたのに対し[42]、列島（倭）では飛鳥時代前半にその模倣の須恵器製円面硯を制作するまで円面硯は導入されなかった[43]。纒向 180 次の資料は、４世紀後半～末頃にあって倭王権の「王宮」ないしそれに準ずる王権の政治拠点の出土であっても「板石硯」であったことは、「応神朝」の画期後も、列島では、質の悪い「墨丸」を使用し、硯は「板石硯・研石」のままであったことを示唆する点で重要である。

【註記】

1）2000 年に西谷正が最初に認定し、後に白井克也が追認し、報告書の考察で公式見解となった。西谷正 2003「楽浪文化と古代出雲」『北東アジアシリーズ報告書 '02 楽浪文化と古代出雲』環日本海国際交流会議。白井克也 2004「朝鮮半島の文化と古代出雲」『田和山遺跡国史跡指定 3 周年記念講演記録集』田和山サポートクラブ。岡崎雄二郎 2005「環濠内出土石板状石製品について」『田和山遺跡群発掘調査報告 1 田和山遺跡』松江市文化財調査報告書第 99 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興財団。

2）武末純一・平尾和久 2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』第 76 集　九州古文化研究会。平尾和久・江﨑靖隆（編）2019『三雲・井原遺跡群ＸⅠ−三雲番上・石橋地区の調査−』糸島市文化財調査報告書第 21 集　糸島市教育委員会。

3）柳田康雄 2020「倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術」『纒向学研究』第８号　桜井市纒向学研究センター。

4）久住猛雄 2020「松江市田和山遺跡出土「文字」板石硯の発見と提起する諸問題」『古代文化』第 72 巻第１号　財團法人古代學協会。

5）「弥生時代に「文字」があるわけない」というような頑迷

な立場からの否定論はもはや相手にする必要はないと思われるが、たとえば、弥生時代（から古墳時代初頭）に板石硯があるが、その後の古墳時代にはないのは不審だという声も聞かれる。しかし後者の疑問については、筆者が最初に次の発表で答えを出している。久住猛雄 2019「古墳時代における「板石硯」の展開について（予察）」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会。古墳時代中期～後期にも板石硯は存在するので、そのような疑問は当たらない。また、最初に板石硯が弥生時代中期後半以降に広く展開していると予測した武末純一は（武末純一 2016「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纒向発見と邪馬台国の全貌』角川文化振興財団）、それを裏付けるはずの筆者や柳田康雄による資料調査の結果の板石硯と研石の多数発見についてなぜか疑問を呈している。武末純一 2020「弥生時代日韓交渉を巡るいくつかの問題–総論に代えて–」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代–（最終報告書　論考編）』「新・日韓交渉の考古学–弥生時代—」研究会・「新韓日交渉の考古学–青銅器～原三国時代–」研究会。しかしそれは、武末が「板石硯」の認定要件を、楽浪（漢代）の「長方形板石硯」に形態だけでなく製作技術（側面を「擦切り技法」に限定）まで含めて酷似しているものに限定しているからであり（武末 2020 前掲、および、武末純一 2019「弥生時代に文字は使われたか」『18 歳からの歴史学入門』彩流社）、それ自体が問題である（久住 2019 前掲、久住猛雄 2020「西新町遺跡における「板石硯」の発見とその意義」『吉留秀敏氏追悼論文集』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会）。また列島の板石硯の形態についても、前漢中期からの「長方形板石硯」の模倣が最初ではなく、前漢早期からのやや不整方形なものを含む「方形板石硯」の模倣から始まったとする論が、板石硯の出現年代（須玖Ⅰ式前半新相か）からも妥当とみられ、従来の楽浪の「長方形板石硯」との類似度で判断する議論は再考を要すると考えられる。柳田康雄 2020「漢と倭の初期方形板石硯」『令和２年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会。また武末純一も、自身の「石硯」の認定基準要件からは外れるはずの、筑前町薬師ノ上遺跡例、比恵遺跡群 141 次・143 次例などを「石硯」の例としてあげている（武末 2020 前掲）。そもそも武末が最初に「石硯」と認定した三雲番上１号硯例が、側面１辺だけが「擦切り」で、他の３辺は「打割Ａ」（註５前掲・久住 2019、久住 2020）で再加工した「再生品」であり、その認定基準に合致していない。このことは柳田康雄も述べている（註３前掲・柳田 2020）。また筆者は、「形態」や「製作技術」よりも、「使用痕」を認定基準の上で重視している（註５前掲・久住 2020）。

6）久住猛雄 2020「近畿地方以東における「板石硯」の伝播と展開」『第 34 回考古学研究会東海例会　荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～』考古学研究会東海例会。唐古・鍵遺跡出土石製品および須玖式系土器の実見・資料調査にあたっては、田原本町教育委員会の藤田三郎、柴田将幹のご協力とご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

7）森暢郎 2021「纒向遺跡第 180 次調査出土の板状石製品」『纒向学研究』第９号　桜井市纒向学研究センター。纒向遺跡出土の石製品および共伴土器の実見・資料調査にあたっては、桜井市埋蔵文化財センターの橋本輝彦、森暢郎のご協力とご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

8）註６）文献。

9）藤田三郎ほか編 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ–範囲確認調査–遺構・主要遺物編』田原本町教育委員会、第 225 図 S1124。

10）大和（奈良盆地）の弥生土器編年は以下による。松本洋明・藤田三郎 1989「大和地方」寺澤薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社。

11）註５）前掲・久住 2020、および註６文献参照。

12）註６）文献。

13）註９）文献の石材表記は（奥田尚の鑑定による）「細粒砂岩Ｅ」であるが、まさか北部九州の石材が搬入されている可能性は考えていなかっただろう。微細な白雲母が多く混入し、北部九州の砂質泥岩に酷似している。

14）「再生硯」の用語は柳田康雄による。註３）前掲、柳田 2020。

15）註５）前掲・久住 2020。

16）註６）文献。

17）藤田三郎 2015「唐古・鍵遺跡出土の須玖式土器」『田原本町文化財調査年報 23　2013 年度』田原本町教育委員会。

18）「南地区」、「北地区」、および「西地区」の唐古・鍵遺跡の３地区区分は、以下による。藤田三郎 2019『シリーズ「遺跡を学ぶ』135　ヤマト王権誕生の礎となったムラ　唐古・鍵遺跡』新泉社。

19）池田祐司・久住猛雄 2000『ＪＲ筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 654 集、福岡市教育委員会。

20）このような口縁部が短めだが口縁部の断面形（特に上辺の湾曲）から須玖Ⅱ式に下る例は、糸島地域に多く散見される。

21）藤田三郎ほか編 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ–範囲確認調査–特殊遺物・考察編』田原本町教育委員会、遺物図版 M5309。

22）このような小型砥石について藤田三郎は、青銅器の鋳造後の仕上げなどに使ったものではないかとの想定をされていたそうである（藤田氏ご教示）。確かに最終的な使用痕（下辺破断面の利用）などはその可能性があるが、表面（Ａ面）のみ使用、裏面（Ｂ面）は未使用という点から、当初は通有の「砥石」ではなかったと考える。またＢ面を見ると下辺は意図的に中軸に対して斜め方向に整形された（剥離痕跡がある）可能性がある。おそらく、自然に破損した形状を生かして再整形したのだろう。

23）註２）前掲・武末ほか 2016、註５）前掲・武末 2019。実際には、硯使用面の裏面（下面）が、完全に「剥離未調整」のものはあるが、半数にも満たず、若干の敲打、あるいはさらに粗研磨ぐらいまでは調整しているものが多い。同様の見解は柳田康雄も指摘している。註３）文献。

24）藤田三郎によると在地によくある耳成山流紋岩としては雰囲気が異なり、またこのように薄く加工した製品は少ない

という。筆者の管見では、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土の「砥石」の中に類似した形状、ほぼ同一石材の「板石硯」があり（河合章行編 2015『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 10　石器（１）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 60 鳥取県埋蔵文化財センター、第 51 図 230）、山陰の因幡地方の製品の搬入ではないかと疑っている。その青谷上寺地遺跡出土の推定「板石硯」については、下記文献に紹介がある。中尾智行編 2019『白兎のクニへ一発掘された因幡のあけぼの一』弥生文化博物館特別展示図録　大阪府立弥生文化博物館。

25）以下、側面整形の分類（説明）は、註 11）文献参照。

26）写真３の下段の写真は、Vixen 製ポケットマイクロスコープ 120 ズ ーム（60 倍）で観察し、スコープの接眼レンズにコンパクトデジタルカメラ（オリンパス TG-4）を接して撮影した。

27）註 21）文献。

28）この個体を含め、多くの板石硯や研石の「使用摩滅範囲」の横位の「使用研磨痕」は、「紫外線ライト」（ブラックライト）を照射した接写写真を撮影すると比較的明瞭に痕跡が分かるが、今回はカラー写真が使えないため、写真掲載は見送った。

29）圭頭五角形には韓国勒島遺跡や福岡県筑前町東小田峰遺跡 117 号住居（註３前掲・柳田 2020）、島根県松江市田和山遺跡（註６前掲・久住 2020）や大阪府高槻市古曽部・芝谷遺跡住居 S13（宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第 20 冊　高槻市立埋蔵文化財調査センター、図 346－4460）等がある。円頭笏状形には、福岡県筑前町薬師ノ上遺跡（柳田康雄・石橋新次 2017「福岡県筑前町薬師ノ上遺跡の石硯」『平成 29 年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会）、西新町遺跡第２次Ｄ区 SC16（註５前掲・久住 2020）等がある。台形には、古曽部・芝谷遺跡住居 K10（註６前掲・久住 2020、註 28 前掲・宮崎編 1996、図 118－4048）、福岡県築城町十双遺跡 19 号住居（註３前掲・柳田 2020）等がある。

30）註 18）文献。

31）註５）前掲・久住 2020 では、西新町遺跡という「対外交易港」での出土状況、註６前掲・久住 2020 では、各地拠点集落や「高地性集落」で出土する傾向から、「対外交易」や「長距離交易」に関連して「文字」が使用され、「板石硯」が使われたという見通しを述べた。文献史の平川南も、「紀元前後から」、「外交上（交易も含む）の必要性から」「渡来人に外交文書を作成させていた」と延べ、「外交」以外に「交易」での使用を考えているようである。平川南 2017『新しい古代史へ２文字文化の広がり』吉川弘文館。『魏志倭人伝』には「王（倭王）」が遣使する時、「王遣使詣京都、帯方郡、諸韓國。及郡使倭國、皆臨津捜露、傳送文書、賜遣之物詣女王、不得差錯」として、「賜遣之物」（交易文物）に「伝送文書」を付けて、「差錯するを得ず」と読める箇所があり、「倭王」だけでなく、諸国の「長距離交易」や「対外交易」においても、広く「文字」が使われた可能性を考えるべきであろう。

32）註７）文献。

33）板石硯が使用された時期としては、溝の一部が再掘削されたと想定される布留２式後半から、廃棄される布留３式までの間が考えられる。なおここでの古式土師器の編年観は下記による。寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊　奈良県立橿原考古学研究所。

34）このような鉄鑿で打ち割って一気に裁断するような「打割Ａ」の一種には、福岡県筑紫野市貝元遺跡Ⅱ -121 号住居（MT15 期の須恵器）の板石硯（註５前掲・久住 2019）など、古墳時代以降の板石硯に少なくない例が存在する。

35）註５）前掲・久住 2020。

36）松崎友理 2018『比恵 80』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1348 集　福岡市教育委員会。

37）武末純一も比恵 141 次板石硯はなぜか認めている。註５）前掲・武末 2020。

38）暦年代論には諸説あるが、以下のように考えている。布留２式は北部九州の「ⅢＡ期」に併行し（久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』発表要旨集・基本資料集，第 19 回九州前方後円墳研究会実行委員会）、北部九州ⅢＡ期は、韓半島東南部の「金官加耶Ⅲ・Ⅳ段階」（申敬澈 2000「金官加耶土器의 編年-洛東江下流域의 前期陶質土器의 편년-」『伽耶考古學論叢』駕洛國史蹟開發研究院）に併行する（久住猛雄 2020「３・４世紀における韓半島と日本列島の併行関係」『柳本照男さん古稀記念論集－忘年之交の考古学―』柳本照男さん古稀記念論集刊行会）。金官加耶Ⅲ・Ⅳ段階は、金官加耶における三燕（慕容鮮卑）系遺物の検討から、ほぼ４世紀第２・３四半期に比定できるので（沈載龍 2020（訳・肥田翔子・柳本照男）「金官加耶の外来系威信財の受容と意味」『古文化談叢』第 84 集九州古文化研究会）、ⅢＡ期＝布留２式もほぼその時期となる。布留２式後半～布留３式については、４世紀第３・４四半期とみて大過ないであろう。

39）井上光貞 1965『神話から歴史へ』中央公論社。「応神朝」を４世紀末前後に想定する説は、他にも多くの研究がある。

40）註４）文献。

41）註 31）で述べた以外に、『魏志倭人伝』の記述では、魏からの詔書への返書を「上表」していることがある。「外交」に「文字」を使ったのは、おそらく板石硯を受容した紀元前２世紀に遡るだろう。

42）吉田恵二 2018『ものが語る歴史 38　文房具が語る古代東アジア』同成社。

43）陶瓷製円面硯の搬入と模倣（陶質土器製）は、百済では５世紀にあり、新羅では６世紀からとみられる。百済から漢籍などを導入したのに、それらがすぐ導入されなかったのは、一つには「膠墨」の製造が難しかったという可能性が考えられる。『日本書紀』では推古朝（616 年）に、高句麗の僧から「墨の製法」を学んだという旨の記述があるが、おそらく「膠墨」の製法の伝来を示すものであろう。

周濠の出現

－箸墓古墳の周濠と外濠状遺構の意義－

福　辻　　淳

Ⅰ．はじめに

墳丘の周囲をめぐる周濠は、古墳にともなう主要な外部施設の一つである。満々と水を湛えた周濠は、現代社会における大型古墳の景観を形成する重要な一要素ともなっているが、全ての古墳が周濠をそなえているわけではなく、その形態はきわめて多様である。

また周濠と類似する遺構は弥生時代墳墓にも存在する。これらは主に周溝と呼ばれ、前方後円墳出現以降の周濠とは区別されてきたが、これまで資料的制約もあり、その差異を具体的に論じることは難しい状況にあった。本稿では、近年増加しつつある古墳出現期の墳墓の調査事例を検討し、上記の問題について考察することとする。

Ⅱ．周濠に関する研究と現状

周濠はかつて「環湟」や「周掘」など様々な名称で呼ばれてきたが、現在では概ね「周濠」という語が定着している。古くから古墳にともなう施設として認識されてきたものの、周濠そのものを扱った研究はそれほど多くはない。またかつては発掘調査により周濠の形状が確認された例が少なく、現在も水を湛える近畿地方の大型前方後円墳の事例が主に研究の対象とされてきた傾向がある（梅沢 1959、末永 1962、堅田 1971、白石 1983、一瀬 1987、岸本 2005 など）。

奈良盆地や大阪平野に分布する大型前方後円墳の周濠を検討した白石太一郎氏は、周濠の形態を６つの類型に分類し、それらが時期的に変遷するとした。周濠の出現については前方後円墳の出現よりも後れるものとし、弥生墳丘墓の周溝とは一線を画するものと理解する。また周濠は本来水を湛えることを目的として構築されたものとし、当時の有力首長が持つ「灌漑王的性格」を象徴するものと考えた（白石 1983）。

同じく畿内地域の前方後円墳の周濠形態を検討した一瀬和夫氏は、古墳時代前期から後期にかけて９つの段階を設定し、周濠の形態変遷を示している。大きな変遷の流れは白石氏とほぼ共通するものであるが、外周溝を含む多重周濠や外堤などの要素についても注意し、周濠の出現から衰退にいたるまでの変遷をより詳細に提示している。なお一瀬氏は前方後円墳出現以前の前方後円形墳墓の周溝と周濠を比較し、前者は区画として不明瞭であり、後者とは異なるものと考え、周濠は前方後円墳出現後に成立したものとしている（一瀬 1987）。

白石・一瀬両氏が示した周濠形態の変遷については、30 年以上経過した現在においても大枠での修正を必要とするものではないと思われる。しかしこの間に周濠に関する発掘調査事例は格段に増加しており、特に最初期の巨大前方後円墳である箸墓古墳の事例は、周濠の成立を考える上できわめて重要な位置にあると言えるだろう。以下ではまず箸墓古墳の周濠状遺構について考察した上で、他の墳墓の事例の検討し、これらを比較することにする。

Ⅲ．奈良盆地東南部の前期古墳の周濠状遺構

（１）箸墓古墳の周濠状遺構

最古の定型化した前方後円墳として知られる箸墓古墳は、奈良盆地東南部の桜井市に位置し、纒向川が形成する扇状地上に立地する。古墳の北側には弥生時代終末～古墳時代前期の大規模集落遺跡である纒向遺跡が広がり、集落域に近接して同時期の大型墳墓が複数存在している。墳丘全長は約 280 ｍで、特殊壺・特殊器台形埴輪や周濠出土遺物などから、布留０式期（３世紀中頃～後半）の築造と考えられている。また周辺の発掘調査によ

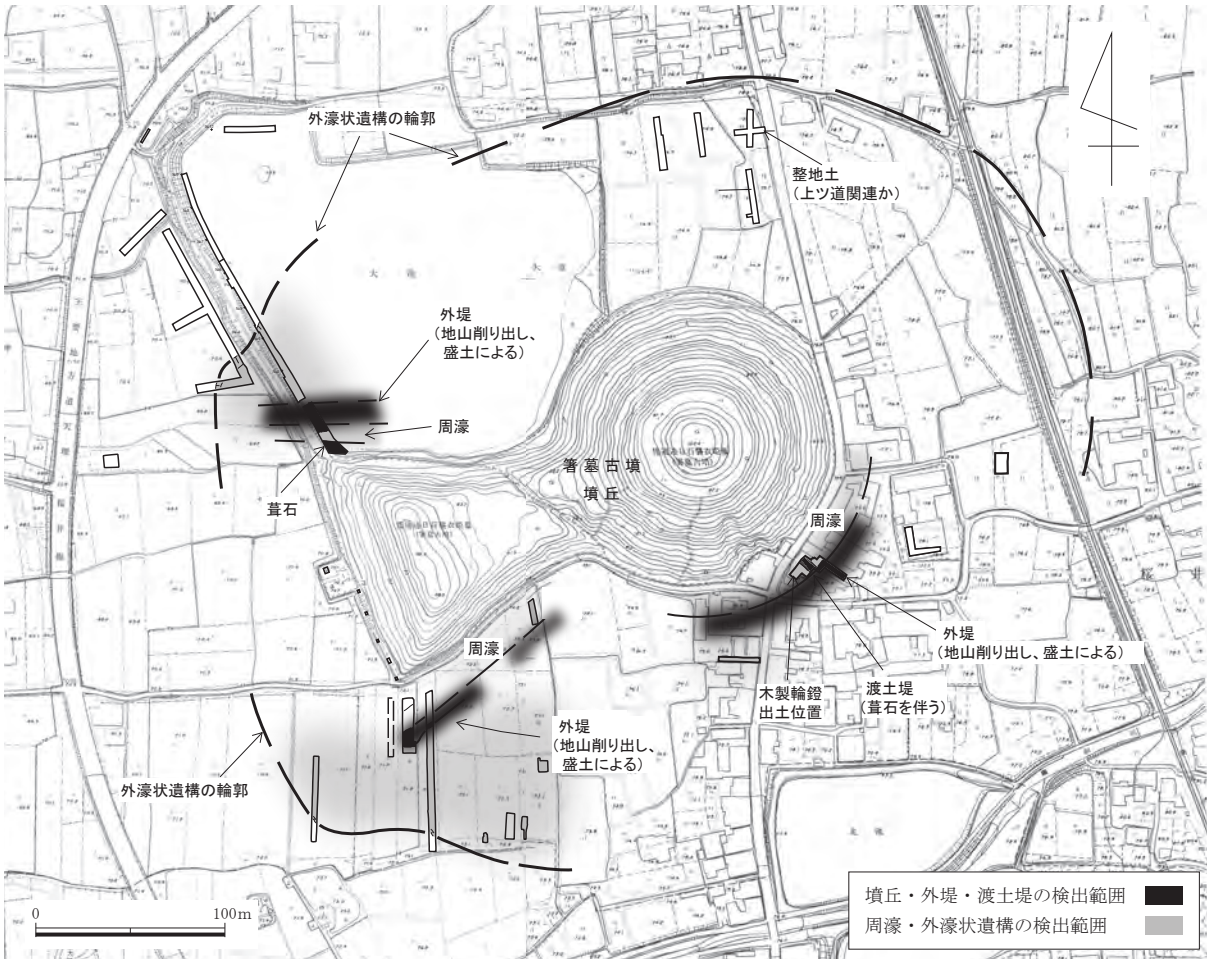


図１　箸墓古墳の周濠と外濠状遺構（Ｓ＝1/4,000）

り、葺石の存在が確認されている。

墳丘周辺の状況を見ると、現状では前方部の北側に池が存在するほか、後円部の北東側に円弧状の地割がみとめられ、これを根拠に大規模な周濠の存在が推定されてきた。いっぽう墳丘の周辺ではこれまでに 20 次にわたる発掘調査が実施され、小規模な周濠状遺構（周濠、内濠）と、その外側に広がる大規模な「外濠状遺構」（地山掘り込み遺構）が確認されている[1)]（図１）。

周濠状遺構は、墳丘裾とその外側に巡らされた外堤（土堤状遺構、周堤）との間に形成されており、幅[2)]はおよそ 10 ｍでほぼ一定し、墳丘を全周するものと推定される。外堤は地山を一部削り残した部分に盛土を積み上げて構築されており、幅 15 ｍ前後の規模をもち、周濠の外縁を形づくるために設けられたものと考えられる。外堤は後円部南東側と前方部南側でも確認されており、このうち前者の調査では、葺石を施した渡土堤が確認されている。

外堤のさらに外側を巡る「外濠状遺構」は、幅 50 ｍ以上と内側の周濠状遺構に比して規模が大きいものである。巨大な墳丘を構築するための土取りの痕跡と考えられ、上記の池や地割はその痕跡であると推定される。東西約 470 ｍ、南北 400 ｍ以上の範囲に及ぶ巨大なものである可能性が高く、前方部側では堆積状況から滞水があったと考えられる（寺沢編 2002、福辻編 2014 ほか）。

（２）奈良盆地東南部の事例

箸墓古墳が位置する奈良盆地東南部には、弥生時代終末期から古墳時代前期後葉にかけての前方後円形・前方後方形の墳墓が複数存在している[3)]。これらは箸墓古墳と築造時期が近いことに加え、立地環境が類似しているという点において、周濠状遺構の形態を比較する上で有効な資料であると考えられる（図２）。以下で各事例について見ていくことにするが、各事例に関する内容は、主に調査報告書を参考とするものであり、時期や遺構等の解釈については一部筆者の所見に基づくものを記している[4)]。

メクリ１号墓（桜井市）　纒向遺跡のほぼ中央に位置し、南に突出部を向ける全長約 28 ｍの前方後方形の墳丘を持つ。時期は庄内２式～３式期（３世紀前半～中頃）。周濠状遺構は後方部の北側と西側で２～ 4.5 ｍ程度の幅で検出されており、突出部の南側は幅 1.5 ｍ程度の溝で区画されたと考えられる（図３－１）。

纒向石塚古墳（桜井市）　纒向古墳群に属し、纒向遺跡集落西側の緩斜面地に立地する。南東側に前方部を向ける全長約 99 ｍの前方後円形の墳丘を持ち、埴輪・葺石などは確認されていない。築造時期については、３世紀前半～中頃を中心に様々な見解がある。

後円部径に対して前方部長が短い点が大きな特徴であり、「纒向型前方後円墳」（寺沢 1988）の代表例に挙げられる。周濠状遺構は発掘調査により後円部南側を除く墳丘の周囲で確認されている。後円部側で幅が広くかつ深く掘削されており、前方部側では浅く幅が狭い形状であることがわかっている。全体の平面形態は馬蹄形に復元されている（図３－２）。

勝山古墳（桜井市）　纒向古墳群に属する全長 115 ｍの前方後円墳で、纒向石塚古墳の北西側に近接して存在する。埴輪や明確な葺石は確認されていないが、墳丘北側では多量の木製品が出土している。時期は３世紀前半あるいは後半とする考えがある。墳丘は後円部が明瞭な高まりとして残存し、東側に低平な前方部が取り付いている。

墳丘際に池が存在することから、かつては方形の周濠がめぐると考えられていた。しかし現在は調査成果から、後円部側には外周が円弧を描く幅 16 ｍ以上の周濠状遺構が存在することが判明している。なおこの周濠状遺構は、前方部側で幅が狭くなる馬蹄形を呈し、前方部前面付近で浅くなる形態が推定されている（図３－３）。

矢塚古墳（桜井市）　纒向古墳群に属し、勝山古墳や纒向石塚古墳と近接する位置関係にある。南西方向に短い前方部を持つ全長 93 ｍ以上の前方後円墳で、庄内３式期（３世紀中頃）の築造と考えられている。埴輪・葺石などは確認されていない。

墳丘の周囲では後円部北側から東側、南側において、幅 16 ｍ前後の周濠状遺構の存在が確認されている（図３－４）。前方部周辺では後円部東側のような顕著な掘削は見られない。なお後円部の南側では周濠状遺構が掘り込まれた直後に埋め戻されたと見られる部分が存在するが、その性格は不明である。

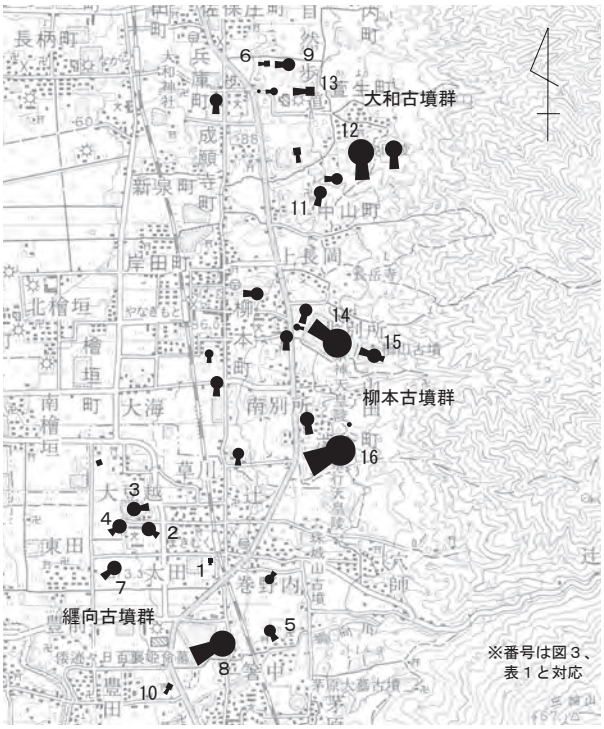


図２　大和・柳本・纒向古墳群の前期古墳の分布（S ＝ 1/50,000）

東田大塚古墳（桜井市）　纒向古墳群に属し、纒向遺跡西端近くの緩傾斜地に立地する。南西に前方部を向ける全長約 120 ｍの前方後円墳で、墳丘盛土や下層遺構などの土器から、布留０式期（３世紀中～後半）の築造と考えられる。葺石・埴輪などは確認されていない。

墳丘周辺では、主に後円部の周囲をめぐる周濠状遺構が確認されている（図３－７）。幅は 20 ｍ前後でくびれ部に近い前方部南側で収束する状況が確認されており、前方部の前端側には及んでいない。いっぽう前方部の北側では同様の収束部は見られず、さらに幅が広くなる余地があり、墳丘主軸を挟んで非対称となる平面形態であったと考えられる。滞水を示す土層が確認されいるが、意図的に湛えられたものかどうかは不明である。

ホケノ山古墳（桜井市）　纒向古墳群に属し、箸墓古墳東側の緩傾斜地に位置する。南東に前方部を向ける前方後円墳で、墳丘全長は約 80 ｍに推定される。中心埋葬施設は石囲いの内側に木槨を設ける二重構造で、画文帯神獣鏡のほか多数の銅鏃、鉄製品などが出土している。埴輪は確認されていないが、埋葬施設上には底部に穿孔を持つ二重口縁壺が配列されていたと考えられる。葺石を有し、時期は箸墓古墳築造の直前にあたる庄内３式期

頃（３世紀中頃）ないしそれ以降とする意見がある。

周濠状遺構は後円部北側から東側くびれ部付近に存在する。後円部北側付近で最も幅が広く 17 m以上を測るが、東側では狭くなり、前方部前端に近い部分にはめぐらない可能性が高い（図３－５）。底面はほぼ平坦であるが全体に浅く、外側では立ち上がりが弱くなっている。

稲荷山古墳（桜井市） 纒向古墳群に属し、箸墓古墳の南西約 100 mの平地部に位置する。一辺 26 m以上の方形の主丘部を持ち、南西に前方部を持つ前方後方墳の可能性が高い。時期は判明していないが、埴輪を有さず、古墳時代前期の古い段階に遡る可能性がある。

周濠状遺構は墳丘の北側から東側で確認されており、幅は約５mを測る（図３－ 10）。なお墳丘端付近では石材は一切確認されなかったが、残存する高まりの上部では石材が検出されており、部分的に葺石が存在した可能性が考えられる。

渋谷向山古墳（天理市） 柳本古墳群に属し、龍王山塊より西へのびる丘陵上に位置する。西側に前方部を向ける全長約 300 mの巨大前方後円墳で、出土埴輪などから築造時期は４世紀後半頃に考えられる。

現在墳丘の周囲には、数箇所の土堤により区切られた幅 15 ～ 20 m程度の周濠状の池が存在する（図３－ 16）。幕末の修陵の影響が大きいと思われるが、修陵以前の絵図に見られる水田区画から、周濠状遺構が墳丘を全周していた可能性が高いと考えられる。なお現況の池の外側を取り巻くように段差が確認されており、「盾形区画」の存在が指摘されている（有馬 2010）。

行燈山古墳（天理市） 柳本古墳群に属し、渋谷向山古墳の北側の丘陵上に位置する。西北西に前方部を向ける巨大前方後円墳で、全長は 242 m以上と推定される。出土埴輪などから４世紀前半頃の築造と考えられる。

渋谷向山古墳と同様に幕末の修陵による改変を受けるが、それ以前の絵図には周濠状遺構の痕跡とみられる水田区画が描かれており、墳丘を全周していた可能性が高い。なお後円部西側の調査では、周濠状遺構の外側斜面に施された葺石が確認されている（図３－ 14）。

波多子塚古墳（天理市） 大和古墳群に属し、奈良盆地東縁の傾斜地に立地する。後方部の西側に狭長な前方部を有する全長約 150 mの前方後方墳である。出土埴輪から４世紀初頭頃の築造と考えられる。

後方部の北側において葺石を施した墳丘裾が確認されており、その北側に盛土よる外堤が構築され、両者の間に周濠状遺構が形成されている。その幅は４m余りと狭く、地中物理探査の成果から、前方部側にも同様の周濠状遺構がめぐっていたと推定される（図３－ 13）。

西殿塚古墳（天理市） 大和古墳群に属し、西側が低くなる傾斜地上に立地する。南側に前方部を向ける全長約 230 mの巨大前方後円墳で、出土埴輪から３世紀後半頃の築造と考えられる。

墳丘の東側には、幅 10 m程度の周濠状遺構（落ち込み・掘り割り）が存在する。またこの遺構を横断する陸橋状の遺構が存在し、盛土は確認されていないが渡土堤の可能性も考えられる。前方部南側にも外堤の可能性がある高まりが存在する。なお上記の周濠状遺構の東側には、墳丘を囲むように弧を描く段差地形がみとめられ、墳丘構築時の土取りの痕跡ではないかと思われる（図３－ 12）。

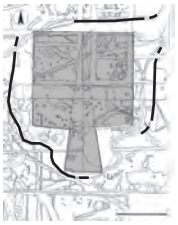
中山大塚古墳（天理市） 大和古墳群に属し、西殿塚古墳の南西側にのびる丘陵上に位置する。南南西に前方部を向ける全長約 130 mの前方後円墳で、竪穴式石室を中心埋葬施設とする。埴輪・葺石を有し、３世紀中頃～後半頃の築造であると考えられる。

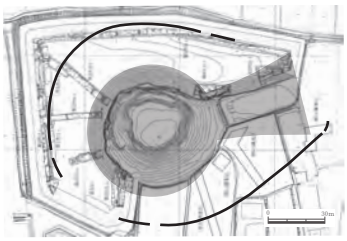
後円部の西側に、盛土による「外堤相当の高まり」をともなう周濠状遺構（周濠相当区画）が存在する。幅は 17 m前後で、後円部北側の撥形張り出し部の西側から、くびれ部に近い前方部西側の三角形張り出し部の北西側にかけて存在すると考えられ、墳丘を全周するものではない（図３－ 11）。また滞水があったかどうかも確定的ではないが、整備された区画であると捉えられる。

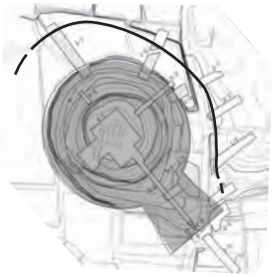
ノムギ古墳（天理市） 大和古墳群に属する全長 63 m以上の前方後方墳で、地形が低くなる西側に前方部を向ける。出土土器から布留式の古相段階（３世紀中頃～後半頃）の築造であると考えられる。墳丘南側の調査では石材が散見され、葺石を有する可能性が考えられている。

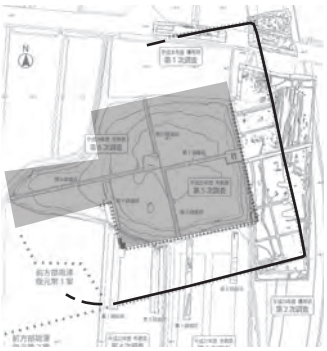
周濠状遺構は後方部の東側と南側で確認されており、幅は 10 ～ 14 mを測る（図３－６）。その外側輪郭は後方部の墳端ラインに沿うように直線的であるが、前方部側の様相は未調査のため不明である。

ヒエ塚古墳（天理市） 大和古墳群に属する全長 127 mの前方後円墳。西側が低くなる緩傾斜地に位置し、前

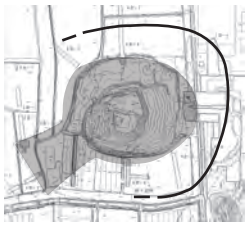

1. メクリ1号墓 (1/1,500)

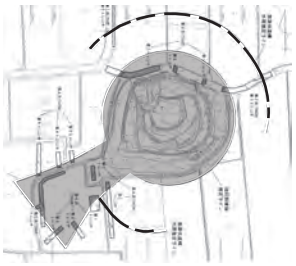

3. 勝山古墳 (1/4,000)

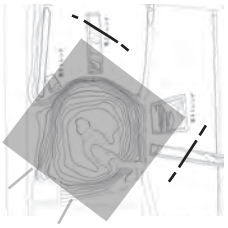

5. ホケノ山古墳 (1/3,000)

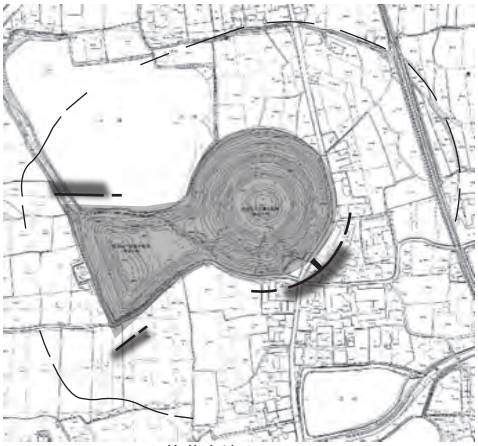

6. ノムギ古墳 (1/2,000)

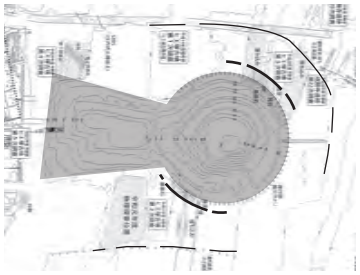
2. 纒向石塚古墳 (1/4,000)

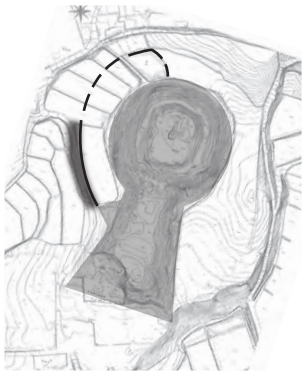

4. 矢塚古墳 (1/4,000)


7. 東田大塚古墳 (1/4,000)

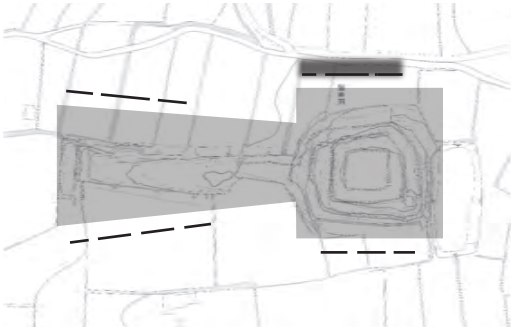

10. 稲荷山古墳 (1/1,500)

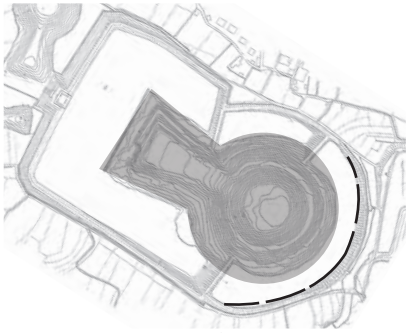

8. 箸墓古墳 (1/8,000)


9. ヒエ塚古墳 (1/4,000)

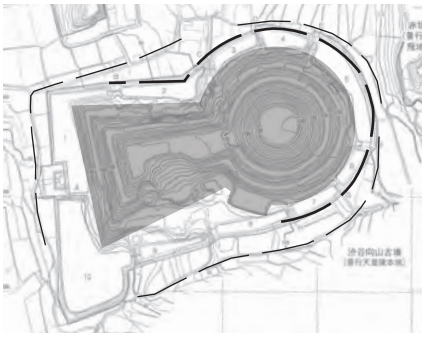

11. 中山大塚古墳 (1/4,000)

12. 西殿塚古墳 (1/6,000)


13. 波多子塚古墳 (1/3,000)


14. 行燈山古墳 (1/8,000)

15. 櫛山古墳 (1/5,000)


16. 渋谷向山古墳 (1/8,000)

周濠状遺構の輪郭
大規模区画の輪郭
外堤 (外堤状遺構)
渡土堤 (盛土による)

※ 方位はすべて上が北を示し、番号は表 1 と対応する。

※ 測量図は各調査報告書及び石田編 2015 より転載した。

図 3　奈良盆地東南部の前期古墳に見られる周濠状遺構の形態

方部を西に向ける。葺石を有するものの埴輪は確認されておらず、箸墓古墳と同時期の３世紀中頃～後半の築造と推定される。

後円部の北側と南側において、葺石を伴う墳丘裾と、幅 10 mに及ばない周濠状遺構が確認されているが、前方部北側では墳丘裾部分とともに、後世の削平により既に失われていると考えられる。なお墳丘北側では、上記の遺構よりも 20 mほど北側において「外堤」の存在が推定されており、周辺の地形からも、周濠状遺構のさらに外側をめぐる外濠状の遺構が存在した可能性が考えられる[5)]（図３－９）。

櫛山古墳（天理市） 柳本古墳群に属する。龍王山から西へ派生する丘陵尾根に立地し、同一尾根上の西側には行燈山古墳が築造される。前方部を西に向ける前方後円墳で、円丘の東側にも大型の造出を持つ。全長約 155 m、後円部径約 90 m、４世紀中頃の築造と考えられる。

幅 10 m程度の周濠状遺構と外堤状遺構は、北側くびれ部の小規模な調査において確認されている。このほか墳丘の南側と西側に池が存在しており、近年の航空レーザー測量の成果から、この池を含む方形の区画が存在し、古墳築造に伴うものである可能性が指摘されている（松本・石田 2019）（図３－ 15）。

その他の事例 周濠状遺構の全体把握が難しいため個別に取り上げないが、奈良盆地東南部には上記以外にも周濠状遺構を有する前期古墳が存在する。

天理市域の大和古墳群では東殿塚古墳の前方部西側において周濠状遺構が確認されており、現況地形から墳丘全体を巡る方形区画の存在が推定される。マバカ古墳では前方部前面付近において、底面に凹凸がある周濠状遺構が確認されているが、後円部側の状況は不明である。マバカ西古墳では幅３m程度の周濠状遺構が検出されているが、墳丘形態・規模の推定が難しい。

同じく天理市域の柳本古墳群に属する黒塚古墳では「鍵穴型」の周濠が存在する可能性が考えられているが、実像の解明には至っていない。上の山古墳では前方部西側で周濠状遺構が検出され、外側斜面にも葺石が施されていたことがわかっている。石名塚古墳では前方部前面で周濠状遺構が確認されているが、後円部側については未調査である。立花遺跡では盾形埴輪等が周濠状遺構より出土しているが、墳丘の規模・形態は不明。

桜井市域では、纒向古墳群に属する二反田古墳が方形の主丘部を持ち、葺石を施した墳丘裾と、幅約５mの周濠状遺構が確認されている。前方後方墳の可能性も考えられ、出土埴輪から４世紀前半頃の築造と考えられる。このほか桜井茶臼山古墳では、現況の地割や発掘調査成果から、平面形が台形状を呈する周濠状遺構が存在したと考えられている。

Ⅳ．周濠状遺構の分類

（１）周濠状遺構の要素と分類

ここまで奈良盆地東南部の前期古墳の事例を見てきたが、周濠状遺構として一括した遺構のなかにも、様々な形態のものが存在する。これらの周濠状遺構について、以下でその形態や諸要素に基づき整理しておきたい。

周濠状遺構の幅 図４では、今回検討の対象とした古墳・墳墓の後円部径（後方部幅）に対する後円部側の周濠状遺構の幅の比率[6)]（以下「幅の比率」と示す）の分布を示している。後円部径が 150 m前後となる大王墓級の前方後円墳ではその比率は 0.1 以下となり、径 100 m以下の古墳では同様に 0.1 前後かそれ以下の例に加え、0.2 ～ 0.3 となる古墳が多数存在することがわかる。

平面形態 上記の幅の比率も踏まえて平面形態を見ると、概ね以下のⅰ～ⅳの４つの類型に分類が可能である（図５）。

ⅰ型：墳丘周辺のごく限られた部分にのみ存在する。中山大塚古墳の例がこれにあてはまる。区画の範囲が限定されることから、これまで確認されていない墳墓においても今後確認される可能性が考えられる。

ⅱ型：後円部（後方部）側はほぼ全周するものの、前方部全体には及ばないと思われる例。幅の比率は 0.2 ～ 0.3 前後である。東田大塚古墳の周濠状遺構に代表され、主軸を挟んで非対称形となるものもある。

ⅲ型：墳丘を全周すると考えられるが、後円部（後方部）側に対し前方部側で著しく小規模となるもので、全体に馬蹄形に近い平面形態をなすことが特徴である。幅の比率は 0.2 ～ 0.3 前後で、纒向石塚古墳や勝山古墳などがその例として挙げられる。

ⅳ型：墳丘規模に対し幅が狭く、後円部側（後方部側）と前方部側で規模に大きな差がないと考えられるも

の。幅の比率は 0.1 前後かそれ以下で、箸墓古墳の周濠状遺構がこの類型に考えられる。

このほか東殿塚古墳や桜井茶臼山古墳など、外側の輪郭が長方形の例を類型として捉えることも可能である。ただしこれらは後述する大規模区画に相当するものである可能性もあり、ここでは一旦措くこととする。

外堤　今回検討対象とした古墳のなかでは、中山大塚古墳、箸墓古墳、波多子塚古墳において盛土で構築された外堤が確認されている。このほか盛土の存在は不明であるが、櫛山古墳においても外堤状の遺構が存在するとされている。

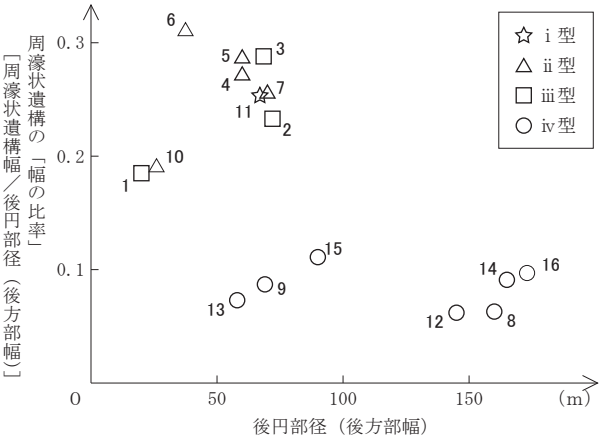
外側斜面の葺石　4 世紀代の行燈山古墳や上の山古墳において、周濠状遺構の外側斜面に施された葺石が確認されている。奈良盆地東南部では現在のところ、3 世紀代に築造された古墳の周濠状遺構ではそうした事例は確認されていない。

渡土堤　箸墓古墳において葺石が施された渡土堤の存在が確認されている。確認箇所は 1 箇所であるが、本来は複数存在したのではないかと思われる。また西殿塚古墳では地山を削り出した渡土堤状の遺構が存在する。このほか未確認ではあるものの、行燈山古墳や渋谷向山古墳にも存在する可能性が考えられ、他の古墳についても今後の調査で確認される可能性がある。

なお渡土堤の性格については、作業道・墓道としての役割を本来的なものとする考え（和田 1997、長友ほか 2018）があり、加えて傾斜地の古墳において、周濠の湛水面を整える役割を持つとする考えがある（高橋 2009 ほか）。箸墓古墳の事例など墳丘完成後に除去されない例については、周濠への湛水を示すものとして評価できるのではないかと思われる。

大規模区画　墳丘際をめぐる比較的小規模な周濠状遺構の外側に、古墳の築造に伴うと推定される大規模な区画が存在する例が見られる。箸墓古墳の「外濠状遺構」や櫛山古墳周辺の方形の区画のほか、ヒエ塚古墳においても外濠状の遺構が存在する可能性がある。窪地状を呈するものではないが、渋谷向山古墳の「盾形区画」のように、丘陵上の墳丘周囲を取り巻く平坦面についても同様の性格を持つものと推定される。

発掘調査等でも認識することが難しく、形態も多様であると推定されるが、詳細な地形測量などにより今後確認例が増える可能性がある。本稿ではこうした遺構を包括して「大規模区画」と呼ぶこととした。



※番号は表 1 に対応。印の線が細いものは、類型・数値が不確定な例。

図 4　周濠状遺構の幅の比率の分布

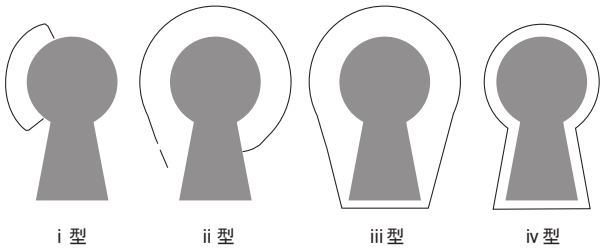


図 5　周濠状遺構の平面形態の類型

（2）各要素の関係性

次に上記の各要素の相関関係について、平面形態の分類を基軸として見ていきたい（表 1）。

平面形態の ii 型と iii 型は後円部周辺での掘削が顕著であり、幅の比率がおよそ 0.2 ～ 0.3 という点において共通する[7]。一瀬和夫氏はこのような掘削パターンが生まれる要因は、「纒向型前方後円墳」とよばれる墳墓の形態的特徴にあるとする。前方部が極端に小規模な墳墓の築造にあたっては、より土量が必要となる後円部周辺で掘削規模が大きくなり、前方部周辺では必然的に掘削規模が小さくなるということである（一瀬 1986）。事実 ii 型・iii 型とされる墳墓は、纒向型前方後円墳や前方部が低平な古墳がほとんどを占めており、このことから ii 型と iii 型の親縁性を考えることができる[8]。

いっぽう iv 型を採用する古墳は、箸墓古墳や波多子塚古墳などがあり、ヒエ塚古墳や櫛山古墳、西殿塚古墳もこの類型に含まれると考えてよいであろう。明確な葺石を有するいわゆる「定型化した前方後円墳」に限られ、

表１　奈良盆地東南部の前期古墳の周濠状遺構

		墳丘形態	墳丘全長	時期	周濠状遺構平面類型	周濠状遺構幅の比率	外堤	渡土堤	外側葺石	大規模区画	備考
1	メクリ１号墓	前方後方	28 m	３世紀前～中	iii	0.185					
2	纒向石塚古墳	前方後円(纒向型)	99 m	３世紀前～中	iii	0.233					
3	勝山古墳	前方後円	115 m	３世紀前～後	iii	0.288					
4	矢塚古墳	前方後円(纒向型)	93 m以上	３世紀中	ii	0.273					
5	ホケノ山古墳	前方後円(纒向型)	80 m	３世紀中	ii	0.288					葺石、二重口縁壺
6	ノムギ古墳	前方後方(纒向型？)	63 m以上	３世紀中～後	ii or iii	0.312					葺石？
7	東田大塚古墳	前方後円	120 m	３世紀中～後	ii	0.257					
8	箸墓古墳	前方後円	280 m	３世紀中～後	iv	0.063	○	○		○	葺石、特殊器台・埴輪
9	ヒエ塚古墳	前方後円	127 m	３世紀中～後	iv	0.087	△			△（盾形？）	葺石
10	稲荷山古墳	前方後方？	30 m以上	３世紀後半？	ii or iii	0.192					葺石？
11	中山大塚古墳	前方後円	130 m	３世紀中～後	i	0.254	○				葺石、特殊器台・埴輪
12	西殿塚古墳	前方後円	230 m	３世紀後	iv	0.062	△	△		△	葺石、埴輪
13	波多子塚古墳	前方後方	145 m	４世紀初	iv	0.073	○				葺石、埴輪
14	行燈山古墳	前方後円	242 m以上	４世紀前	(iv)	0.091	△	△	○		葺石、埴輪
15	櫛山古墳	前方後円(双方中円)	155 m	４世紀中	iv	0.111	△			○（方形？）	葺石、埴輪
16	渋谷向山古墳	前方後円	300 m	４世紀後	(iv)	(0.097)	△	△		△（盾形？）	葺石、埴輪

※ 表中の○印は存在が明確なもの、△印は存在が推定されるが不明確なものを示す。

幅の比率は0.1前後かそれ以下であり、墳丘規模に比して著しく幅が狭い点が特徴である。この形態は墳丘構築のための土取りにのみ起因するとは考えられず、ii・iii型とは異なる要因により生まれたものと考えられる。なお大規模区画の存在がiv型を採用する古墳に限られるのは、この点に関わるものと思われる。すなわち幅の狭い周濠状遺構の掘削ではまかなえない土量が、大規模区画の造成により補われたと考えることができる。

このほか事例が少ないものの、外堤や渡土堤、外側斜面の葺石などについても、iv型を採用する古墳でのみ確認されている。これらはいずれも周濠状遺構を「整備」する意図のもと設けられたと考えられるもので、iv型の周濠状遺構の性格を考えるうえで重要である。

時期については、i型の中山大塚古墳は３世紀中頃～後半、ii型・iii型は「纒向型前方後円墳」など３世紀代のものが多数を占めるが、もう少し時期の下るものも存在する可能性がある。iv型は箸墓古墳など３世紀中頃～後半の例が最も古く、４世紀代の事例も複数みられる。

Ⅴ．周濠の成立

奈良盆地東南部の前期古墳にともなう周濠状遺構を検討した結果、平面形態ii型・iii型で構成されるグループと、iv型を採用するグループの間に、明確な差異が存在することが明らかとなった。前者は先学が指摘するように、弥生時代の墳墓の「周溝」の系譜を引くものであるが、３世紀中頃～後半に出現する後者は、古墳の外部施設として明確に意識されている点で、これとは一線を画するものであることが明白である。本稿ではこれまで全ての類型に「周濠状遺構」の語を用いてきたが、先に見てきた要素や分類に基づき、ii型・iii型については「周溝」、iv型については「周濠」と呼ぶべきものと考える[9)]。このような最初期の周濠は、巨大前方後円墳の出現に先行するとされる古墳では確実な例が見られない。後に多様な形態へと発展を遂げる周濠は、最初の巨大前方後円墳である箸墓古墳において成立した可能性が高いと考えられる。

ではこのような周濠は、どのような要因により、従来的な周溝とは区別されるものとして成立したのか。最後に考えておきたい。

出現期の周濠を考える上で、特に重要な意味を持つと思われる特徴は、大規模な墳丘には似つかわしくない「幅の狭さ」である。おそらく初期の周濠は、箸墓古墳の事例からも想起されるように、外側に大規模区画を形成し得るような大きな労働力を保有してなお、幅の狭いものである必要があったと思われる。その理由を明らかにすることは難しいが、水を湛える機能をそなえている点を周濠の要件とすれば（白石 1983）、湛水を意図したことがその理由の一つとして考えられる[10)]。幅が狭く、かつ渡土堤を設けることで周濠の水位調整を容易にし、水

を湛えることを意図したのではないかと思われる。

なおこうした周濠の狭さを可能にしたのが、箸墓古墳の「外濠状遺構」などの大規模区画の存在である。大規模区画は墳丘盛土を確保するという点において「周溝」と同様の性格を持ち、幅の狭い周濠ではまかなえない土量を補う目的のもと造成されたと考えられる。いっぽうで大規模区画は、傾斜地や丘陵部に立地する奈良盆地東南部の前期古墳では、その規模ゆえに安定的に水を湛えて「周濠」とすることは困難であったと推定される。このため周濠は、大規模区画とは別個のものとして成立したと考えられる。最初期の周濠が幅の狭い形態で出現した背景には、こうした奈良盆地東南部における前期古墳の立地環境が影響していると思われる。

VI. おわりに

本稿は、筆者が箸墓古墳周辺での発掘調査を担当した折に、「なぜこれほど巨大な墳丘を築き、広大な外濠状遺構を掘削しておきながら、纒向石塚などよりも幅の狭い周濠をめぐらせたのか？」という疑問に接したことを契機として企図したものである。以来 10 年以上が経過し、疑問が氷解するに至っていないが、この幅の狭い周濠は、弥生時代以来の伝統を引く周溝と明確に区別されるものであり、最初の巨大前方後円墳である箸墓古墳において成立した可能性が高く、また他の前期古墳にも採用されていることを示すことができたと考えている。

今回、主に周濠状遺構の平面形態に注目してきたが、断面形状や堆積物などについては十分に検討することができなかった。また周濠の性格を論じるためには、土木技術や墳丘盛土の体積と掘削量の関係性、あるいは前方後円墳出現に関連する思想的背景など、考慮すべき事項が数多く存在するが、これらについては今後の課題としておきたい。

【註記】

1）各墳墓の遺構の名称については、後述するように「周溝」「周濠」などと呼び分けることが可能と考えるが、各事例の記述の中ではすべて「周濠状遺構」と記し、必要に応じて報告書記載の遺構名称を（ ）付で併記している。

2）本来であれば古墳築造当時の状況に基づく「幅」を示すべきであるが、調査で得られた成果から判断できない例も多い。本稿では、客観的に把握が可能なものとして、墳丘端から周濠・周濠状遺構の外肩検出位置までの距離を、便宜的に「幅」の数値として示すこととした。

3）筆者は箸墓古墳など定型化した前方後円墳の成立以降を古墳時代とする考えを採り、その時代の墳墓を古墳と考える。なお纒向遺跡の大型墳墓については、箸墓古墳に先行するとしても、両者にさほど時期差はないのではないかと考えている。その場合、箸墓古墳とこれらの墳墓の被葬者は同時代に活動した、列島最初の大王と、それを支える役割をもつ人物という関係性を考えることができるだろう。全長 300 m近い巨大古墳と径 70 m前後の墳墓という規模の格差にはそうした関係性が反映されており、後者の築造時にすでに巨大古墳の築造が企図されていたとすれば、後者についても「古墳」と呼んで差支えないと考える。巨大古墳と径 70 m前後という規模格差は、続く時期の大和古墳群でも見てとることが可能であり、そうした格差は前方後円墳出現とともに形成されたのではないかと思われるが、これについては機をあらためて論じることとしたい。

4）調査報告書は文末の参考文献の中に示したが、紙幅の都合により各古墳の新しい成果がまとめられたものを挙げるに止めている。ご了解いただきたい。

5）ヒエ塚古墳第１次調査（坂・鈴木編 2007）で想定された「外堤」は、その後の天理市教育委員会の調査では存在を追認するには至っていない。仮に外堤が存在しなくとも、古墳築造に伴って形成された外濠状の遺構の外肩が、その付近に存在したのではないかと筆者は考えている。

6）表１に示した「幅の比率」の根拠とした周濠状遺構の幅の値は、後円部（後方部）側の複数の箇所で異なる数値が得られている場合は平均値を用いている。

7）ⅱ・ⅲ型における周濠状遺構幅の比率（0.2 ～ 0.3）は、弥生終末期の墳墓である瀬田遺跡例（0.29）や奈良盆地の平地部に築造された中期大型古墳の後円部側の周濠幅比率とも概ね共通している。平地部にいわゆる高塚の墳丘を築く際の掘削範囲としては、適当な比率であったと考えられる。

8）纒向石塚古墳、勝山古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳の４基は近接して立地しながら、ⅱ型とⅲ型のように平面形態に差が見られる。これは前２者が地形の高い東側に前方部を向けるのに対し、後２者は西側に前方部を向けていることと関連すると思われる。すなわち前方部を明瞭化するにあたり、後２者では比較的少量の盛土で可能であったのに対し、前２者ではより多くの盛土あるいは溝による区画が必要であったために、こうした差が生じたと考えられる。

9）周濠出現後に弥生時代以来の周溝が一新されるとは考え難く、周濠出現以降の周濠状遺構を、全て「周濠」と呼ぶべきかどうかについては慎重にあるべきである。なお本文中ではⅰ型についてあまり言及していないが、伝統的なものとは考えられず、周濠的な性格を持つものと考える。

10）纒向石塚古墳では、周濠状遺構に水を引き込むための「導

水溝」とされる遺構が存在するが、これには異なる性格を考える意見もある（久住 2016）。また堆積状況などから意図的な「湛水」と天水や湧水による結果的な「滞水」を区別することは今後の課題であるが、「湛水」「滞水」にも様々な様態があり、厳密に区別することは困難であると考えられる。湛水の存在は重要ではあるが、現段階では渡土堤や外堤、外側斜面の葺石など、「整備」状況が明らかな事例であれば、周溝から区別して捉えてよいと考える。

【参考文献】

青木勘時 2007『波多子塚古墳』 天理市教育委員会

有馬伸 2010「渋谷向山古墳の墳形について」『玉手山１号墳の研究』大阪市立大学日本史研究室

有馬伸・土屋隆史 2017「景行天皇 山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第 68 号 宮内庁書陵部

石田大輔編 2014『大和古墳群Ⅰ』 天理市教育委員会

石田大輔編 2015『天理の古墳 100』 天理市教育委員会

一瀬和夫 1986「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性－前方後円形成立に関する覚え書き－」『古代学研究』112 古代学研究会

一瀬和夫 1987「周濠」『古墳時代の研究』７ 雄山閣

梅沢重昭 1959「前方後円墳に附設する周掘について」『考古学雑誌』45－３ 日本考古学会

岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』 奈良県立橿原考古学研究所

堅田直 1971「前方後円墳の立地と周濠構造」『歴史研究』７－８ 大阪教育大学歴史学研究室

河上邦彦・豊岡卓之・卜部行弘・坂靖編 1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所

岸本直文 2005「墳丘と周濠」『講座日本の考古学８ 古墳時代（下）』 青木書店

北口聡人 2021「ヒエ塚古墳（第５次）」『天理市文化財調査年報 令和元（2019）年度』 天理市教育委員会

木下亘編 1996「上の山古墳」『中山大塚古墳』 奈良県立橿原考古学研究所

久住猛雄 2016「「纒向」異論－纒向古墳群の検討序説－」『魂の考古学』 豆谷和之さん追悼事業会

西藤清秀 2013「箸墓古墳・西殿塚古墳の墳丘の段構成について」『橿原考古学研究所論集』第 16 八木書店

白石太一郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』 角田文衛先生古稀記念事業会

末永雅雄 1962「古墳の周堤帯と陪冢」『書陵部紀要』13 宮内庁書陵部

高橋裕子 2009「前方後円墳周濠の渡土堤について」『京都橘大学文化財調査報告 2008』 京都橘大学文学部

都出比呂志 1998「総論―弥生から古墳へ」『古代国家はこうして生まれた』 角川書店

寺沢薫 1988「纒向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズⅣ

寺沢薫 2018「前方後円墳の創生－纒向型か定形型かー」『実証の考古学』 同志社大学考古学シリーズⅫ

寺沢薫編 2002「箸墓古墳周辺第７次の調査」『箸墓古墳周辺の調査』 奈良県立橿原考古学研究所

豊岡卓之編 2011「勝山古墳第５・６次調査報告」『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』 奈良県立橿原考古学研究所

長友朋子・園原悠斗・前田仁暉・山崎公輔 2018「古墳の渡り土手：近畿地域を中心として」『立命館文學』659 立命館大学人文学会

橋本輝彦 2006「纒向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会

橋本輝彦・橋爪朝子編 2009『纒向遺跡発掘調査報告書２』 桜井市教育委員会

橋本輝彦・寺沢薫・丹羽恵二・木場佳子編 2012『纒向石塚古墳』桜井市教育委員会

坂靖・鈴木裕明編 2007『マバカ古墳周辺の調査』 奈良県立橿原考古学研究所

福辻淳 2011「東田大塚古墳の測量調査」『桜井市平成 21 年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

福辻淳編 2014『HASHIHAKA －始まりの前方後円墳』桜井市立埋蔵文化財センター

松宮昌樹 2010「纒向遺跡第 160 次（矢塚古墳第４次）発掘調査報告」『桜井市平成 20 年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

松本洋明編 2000『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市教育委員会

松本洋明・石田大輔 2019「櫛山古墳航空レーザー測量調査・平板測量調査」『天理市文化財調査年報 平成29(2017)年度』天理市教育委員会

三沢朋未編 2019「二反田古墳の検討」『桜井市平成 29 年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

三沢朋未 2020「纒向遺跡第 198 次（稲荷山古墳第２次）発掘調査報告」『桜井市令和元年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

森暢郎 2020「纒向遺跡第 193 次調査」『史跡纒向遺跡 第１期整備事業報告書』 桜井市教育委員会

森岡秀人 1995「定型化以前の前方後円形墓」『季刊考古学』52 雄山閣

和田晴吾 1997「墓壙と墳丘の出入り口－古墳祭祀の復元と発掘調査」『立命館大学考古学論集』Ⅰ 立命館大学考古学論集刊行会

纒向古墳群と周辺景観

北　條　芳　隆

Ⅰ．本稿の目的

奈良県纒向遺跡に築造された初期前方後円（方）墳には、のちの前期古墳群には現れない独特な様相がある。それは隣接する古墳相互の前方部の向きが揃わないことである。この点が本古墳群の最大の特徴だといってもよい。

なによりも注目されるのは、地形的環境との不整合が目立つ点である。纒向遺跡は龍王山山帯の裾に位置し、東から西に向けて緩やかに下降する巻向川扇状地の扇央部にあたる。そのため前方部を付設する方角を合理的に選択するなら、西向きが優勢となるか東向きが優勢となるか、そのどちらかであろうと想定するのが一般的な理解である。いわゆる地性線と平行させる軸線決定をさすが、そうした理解が可能なのは箸墓古墳だけであり、他の事例はすべて地性線とは斜交ないし直交する恰好で築造されている。つまり築造にあたっての合理性を無視する様相が顕著なのである。

前方部の祖型が墓道（陸橋や突出部）であり、その先端が切断されたことによって成立した部位であることは解明されて久しい。だとすれば前方部は居住域の中心を向くと想定することも理屈上は許容される。しかし纒向古墳群の場合は、そのような状況でもない。

さらに石塚・勝山・矢塚古墳の３基は比較的隣接した場所に築かれているため、どれか１基の墳丘軸線が他の古墳の後円部と重なる可能性も想起されたのであるが、実態はそうではなく、重ならないよう配置されている。つまり前方部を付設する方位には明確な意味があり、その選択は個別的であった可能性が高いといえるだろう。

ではこれら諸古墳の軸線は、それぞれどのような様相を示し、いかなる意味をもつのであろうか。本論の目的はこの点の追求である。

あらかじめ結論を述べると、周辺景観への関連づけが明確で、のちに引き継がれる方位観を先取りする様相も認められる反面、以後は捨象される軸線設定法が優勢だったと理解されるのである。

本稿でもちいるのは景観史的な把握である。周辺景観には地上の景観と天体景観とがあり、地上の景観との関係を点検するさいには、特定の峰などの自然景観や、既存の諸遺構など人為景観との関係を問うことになる。一方の天体景観については、過去の天体運行を再現しつつ、古墳や祭儀施設の軸線との対応関係を点検することになる。使用するソフトは〈カシミール３Ｄ〉・〈Google Earth〉・〈ステラナビゲーター（ver.11)〉である。

表１　纒向遺跡の主要な建物・墳丘墓の位置と軸線

種別	遺構名	時期	緯度	経度	軸線１（長軸・後円部側）	軸線２（長軸・前方部側）	視準先の峰・古墳	太陽の出没範囲	月の出没範囲	鉤陳軌道内	天枢軌道内	揺光軌道内	方位観念
古墳	渋谷向山古墳	布留１新	34° 33′ 26.48″	135° 50′ 58.45″	T.E－28.6°	T.W＋28.6°	弓月岳北方鞍部	○	○	—	—	—	古相
古墳	柳本大塚古墳	布留１中	34° 33′ 03.78″	135° 50′ 30.93″	T.W＋84.2°　(T.N5.8° W)	T.E－84.2°	—	—	—	◎	○	○	新相
古墳	勝山古墳	庄内２～布留０	34° 32′ 50.43″	135° 50′ 05.06″	T.E＋9.9°	T.W－9.9°	（二上山）	○	○	—	—	—	古相
建物址	辻地区建物２	纒向３（布留０）	34° 32′ 47.5″	135° 50′ 17.1″	T.E＋29.5°	T.W－29.5°	（龍王山南鞍部）	—	◎	—	—	—	古相
建物址	辻地区建物１	纒向２（庄内２）	34° 32′ 47. 2″	135° 50′ 20.2″	T.E＋16.3°	T.W－16.3°		○	○	—	—	—	古相
古墳	石塚古墳	庄内１～庄内３	34° 32′ 46.50″	135° 50′ 09.86″	T.E－26.5°	T.W＋26.5°	三輪山	○	○	—	—	—	古相
建物址	大型建物Ｄ	庄内３	34° 32′ 46.5″	135° 50′ 25.9″	T.E＋94.1°　(T.N4.1° W)	T.E－85.9°	弓月岳（短軸）	○	○	—	—	—	古相
古墳	矢塚古墳	庄内３	34° 32′ 46.28″	135° 50′ 01.90″	T.E＋29.2°	T.W－29.2°	龍王山山頂北寄り	—	◎	—	—	—	古相
古墳	メクリ１号墳	庄内３	34° 32′ 39.43″	135° 50′ 25.70″	T.E＋89.8°　(T.N0.2° E)	TW－89.8°	—	—	—	◎	○	○	新相
古墳	東田大塚古墳	布留０古	34° 32′ 36.66″	135° 50′ 00.23″	T.E＋35.6°	T.W－35.6°	龍王山 520m ピーク	—	—	—	—	—	古相
古墳	巻野内石塚古墳	不明	34° 32′ 35.02″	135° 40′ 40.04″	南か？	北か？							—
古墳	南飛塚古墳	庄内３～布留０	34° 32′ 32.02″	135° 50′ 09.34″	北北西	南南東							—
古墳	ホケノ山古墳（墳丘）	庄内３～布留１古	34° 32′ 23.73″	135° 50′ 41.96″	T.E－48.9°	TW＋48.9°	—	—	—	—	—	—	（新相）
古墳	ホケノ山古墳（埋葬）	布留１古	34° 32′ 23.73″	135° 50′ 41.96″	T.E＋75.8°　(T.N14.2° E)		—	—	—	—	○	○	新相
古墳	箸墓古墳	布留０	34° 32′ 21.18″	135° 50′ 28.28″	T.E＋22.3°	T.W－22.3°	弓月岳（後円部）	○	○	—	—	—	古相
古墳	稲荷山古墳	庄内３～布留１古	34° 32′ 12.56″	135° 50′ 15.66″	T.E＋54.9°	T.W－54.9°	箸墓古墳（後方部）	—	—	—	—	○	新相

表１には纒向遺跡の古墳や祭儀施設など主要な遺構を列挙し、位置情報や軸線の方位を真北基準に沿って示し、右側に検討結果を添えた[1)]。渋谷向山古墳と柳本大塚古墳の２基は柳本古墳群の南端に位置するが、比較のために抽出した。年代観は石野博信・橋本輝彦両氏の論考（石野 2008、橋本 2006）を参照した。なお墳丘軸線の方位が確定しているのは石塚・メクリ１号・東田大塚・ホケノ山・箸墓・稲荷山古墳の６基であり、その多くは国土座標に準拠した調査区設定であるため、0.1° 単位での検討が可能である。一方、くびれ部の片側や前方部側面の一部が検出されたことにより、およその軸線方位が推測可能なのは勝山・矢塚古墳の２基である。これら２基には不確定な要素が伴うため、1° 単位での検討となる。また祭儀施設において方位が確定しているのは大型建物群であり、これも 0.1° 単位での検討が可能である。ただし辻地区の２棟の建物址については、磁北から機械的に真北基準へと補正された。そのため１° 単位での検討となる[2)]。

Ⅱ．方位観の概要

日本列島における先史時代社会の方位観には、天体の運行に依拠する客観的方位と地上の景観にもとづく主観的方位すなわち民俗方位との二者が指摘され、両者を融合させた事例も確認できる。奈良盆地を例にとると、双方の融合は弥生時代中期前半に生じ、大枠が定まったと考えられる。それが年間の日の出とその指標となった龍王山山帯の峰峯との関連づけである（北條 2017・2019）。奈良盆地の中央に営まれた唐古・鍵遺跡からみた龍王山一帯は、水源地側にそびえる「日向かし」の山並として意味づけられた。このうち龍王山 520 m ピークが年間の日の出の中央値であり、日取りは春分と秋分に対応する。高橋山が夏至の日の出の峰、三輪山が冬至の日の出の峰として意味づけられ、古墳時代までには聖域化された。さらに巻向山は立春と立冬の峰であり、弓月岳はその前景であった。

太陽と月の運行は地球上のどの地点においても客観的な指標であるが、奈良盆地では地上の山並との関連づけのもとで知覚され、それぞれの嶺は季節の推移と連動させて意味づけられる民俗方位観との融合であった。暦の観念も同源で、奈良盆地の弥生文化は龍王山の山並を象徴化しつつ、「日の出暦」計としても活用したのである。

上記の認識を前提に今回の作業を進めるが、纒向遺跡に照準を定めると、２世紀末から３世紀までの方位観として想定しうる枠組の概要は図１のようになる。この図は纒向古墳群中でも最西端に築かれた東田大塚古墳の後円部中央を観測点とし、周辺景観の概要と、そこから復元される方位観を示したものである[3)]。

北は天の北極と周極星に依拠した方位観念で、鉤陳星（こぐま座のα・ポラリス）と北斗七星の周回範囲によって規定された。３世紀中葉の鉤陳星は天の北極から東西に 12.6° の偏角をもつ周極星であった。北斗七星の柄の先に当たる揺光星（破軍星、おおぐま座・アルカイド）は天の北極から 39.3° の偏角で周回していた。この扇形に広がる範囲が当時の倭人によって北と認識された可

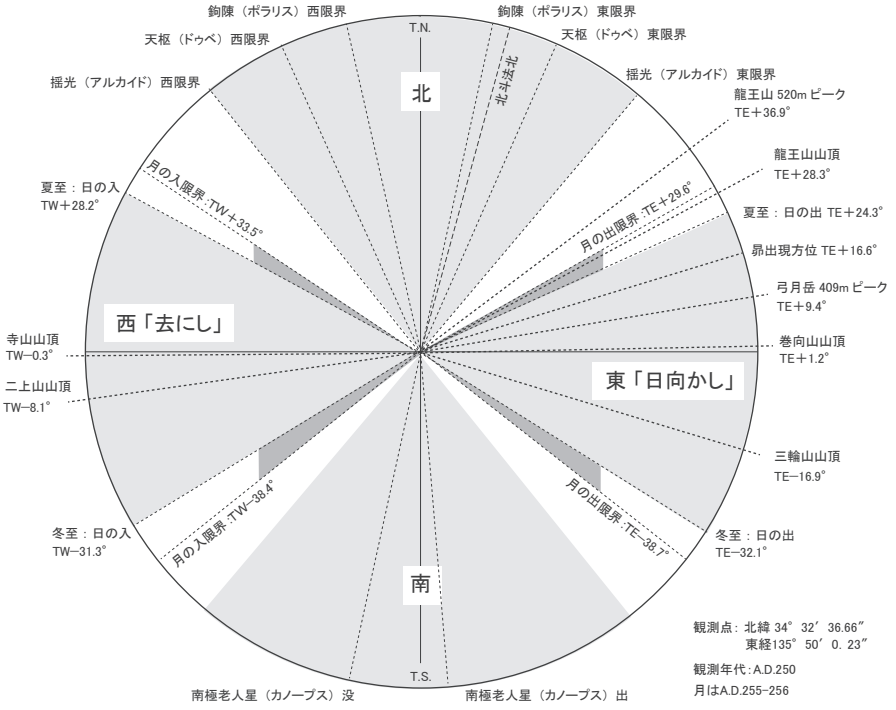


図１　先史時代における方位観の概要

能性が高い。

なお古代中国には、太陰太陽暦の 11 月の日暮れ時に北斗七星の柄の先が直立する方位、「斗建」を暦算の基準とする「北斗法」があった（藪内 1949、細井 2014)。成立は周代だといわれ、第６星の開陽星（武曲星、おおぐま座・ミザール）およびその脇に小さく輝くアルコルと、第７星の揺光星が直立する方位である。なお歳差運動のため、「斗建」の情景は下降しつつ東へと移動した。そのため３世紀中葉には真北から 14.6° 東への偏角であった。この「北斗法」の基準方位が日本列島に及んだ可能性も考慮する。

東西は古語が示すとおり年間の太陽と月の出没範囲によって規定され、それぞれ扇形に広がる。なお月の出没範囲は太陽のそれより南北に各６° 前後広いが、それは「高い月のモード」の期間に生じる現象であり、18.6 年周期で訪れる月の軌道の極大期を中心とする前後７年間に限定される。それ以外の「移行期のモード」と「低い月のモード」の 12 年間の月の出没範囲は、太陽のそれより狭くなる（北條 2020)。

南は太陽の南中を中核に据えた北の反転であった可能性と、南極老人星（カノープス）の出没範囲に限定された可能性との２案があって、どちらとも決めがたい[4)]。

纒向遺跡からみた年間の日の出の嶺は龍王山山頂より南側に限定される。夏至の日の出は鞍部からとなり、指標となるような高まりや窪みはない。より南の弓月岳、巻向山、三輪山が主要な嶺であるが、冬至の日の出は三輪山の南斜面３合目付近からとなる。このうち巻向山は真東から１° 程度の誤差に収まるが、山に接近した場所であるため日の出の仰角が高く、観測点からみた巻向山が春分・秋分の日の出方位と対応することはない。

一方の日の入の峰として目立つのは、奈良盆地の西方にそびえる二上山（雄岳 517 ｍピーク）とその北方にある寺山 294 ｍピークであり、とくに後者は真西から１° 未満の方位であるため、春分･秋分の日の入の目印となった可能性は指摘できる。

この点に関連して、本稿では二十四節気との関係にも言及する。太陽暦に由来する本概念が３世紀の日本列島に正しく導入された形跡は乏しい。とはいえ先に述べたように、奈良盆地の弥生文化では、二至二分および四立までは何らかの手法のもと把握されていた可能性が高い。そのため現在は二十四節気との対応関係を点検すべき局面に立ち至っていると私は考えている。

なお世界各地の事例を参照すると、東方から昇る昴（プレアデス星団）を神殿建築の軸線に定めたとみられる事例や、オリオン座の三つ星が昇る方位に軸線を沿わせた事例もある（野尻 1955、後藤 2017、関編 2017)。纒向遺跡の祭儀施設と直接関わるのは昴なので、今回は昴の出現方位を抽出し、東から昇る他の恒星は省略した。

ではこの基本図で示した方位観の枠組みを前提に、以下、諸古墳の様相を点検する。

Ⅲ．各事例の軸線と周辺景観

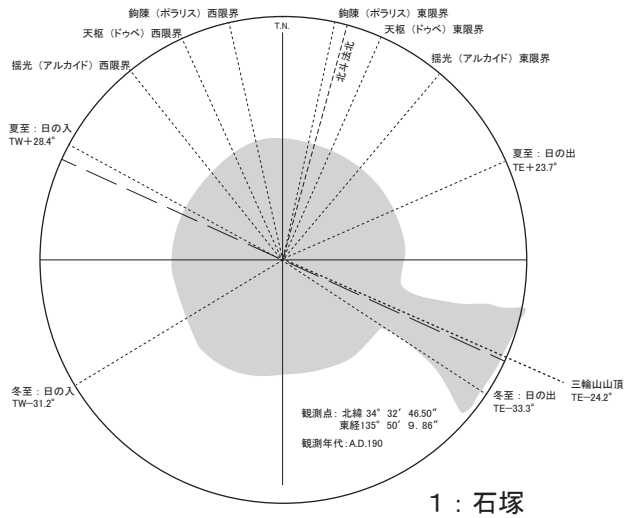
① 石塚古墳と三輪山

図２－１は石塚古墳の墳丘軸線と周辺景観との関係を探るために作成したものである。観測点は後円部の中央であり、以下の諸例も同様である。

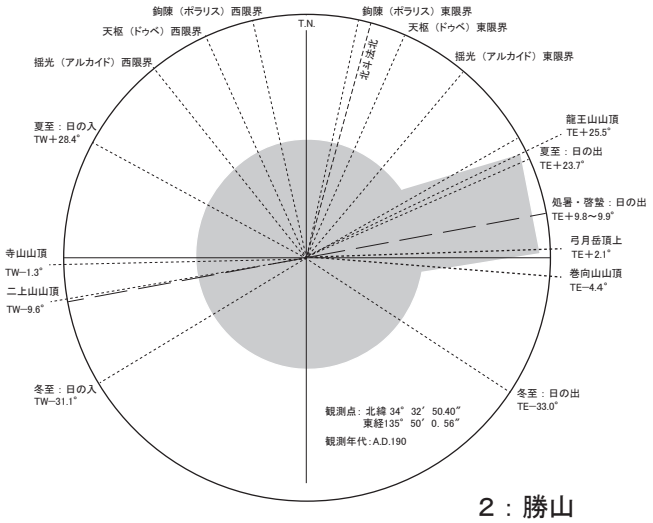
前方部が付設される方位は東南東で、その延長線上には三輪山がそびえている。この情景は以前からも注目されてきたが、この図からも同様の理解が可能である。一方、後円部側の軸線の延長線上には生駒山の山帯を遠望できる。ただしその山並に目立った高まりや窪みはない。さらに２・３世紀代の夏至の日の入り方位と軸線との近似も指摘されるが、誤差は２° あり、三輪山山頂との近似に比べると隔たりが大きい。このことから石塚古墳の前方部は、三輪山に向けることを意図した可能性が高いと判断できる。この位置からだと、三輪山山頂からの日の出は２月９日と 11 月４日（ユリウス暦表記−以下同じ）となる。一方、石塚古墳の軸線延長線上からの日の出は２月２日と 11 月 11 日であり、立春・立冬とは前後２、３日の誤差となる。

②－ａ 勝山古墳と二上山

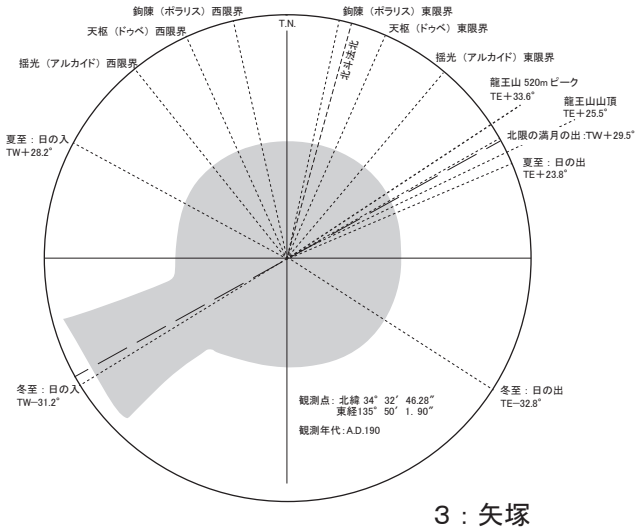
図２－２は勝山古墳の墳丘軸線と周辺景観との関係を示したものである。石塚古墳と同様、前方部は東の龍王山側に付設されている。ただし前方部側の軸線延長線上は龍王山山頂と弓月岳の中間付近の鞍部となり、そこに指標となるような高まりや窪みは認められない。その反面、軸線を後円部側に延伸すると、奈良盆地の西方にそびえる二上山雄岳の頂上とは１° 未満の誤差で近似することがわかる。この事実が偶然の産物だとは考えられず、



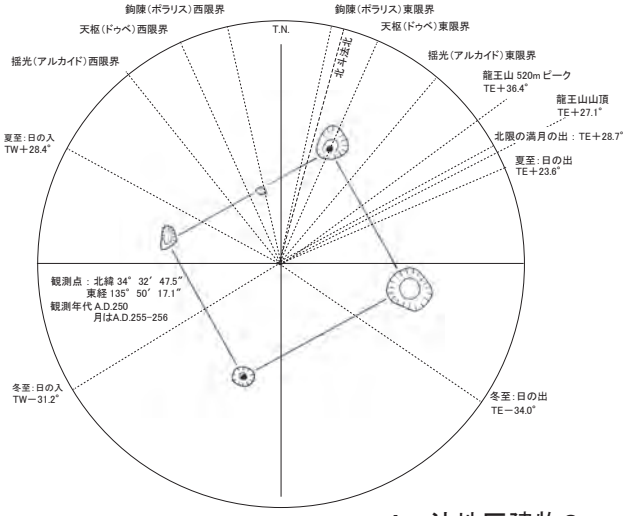
1：石塚



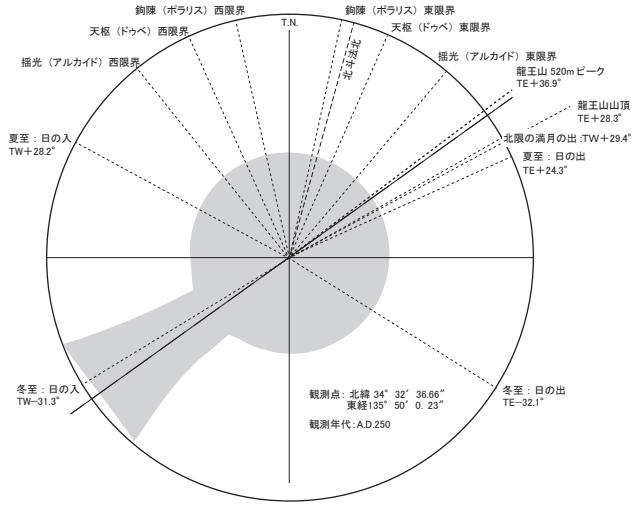
2：勝山



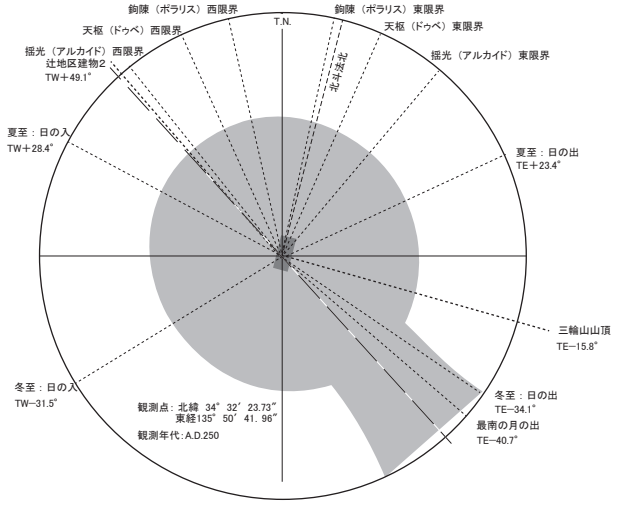
3：矢塚



4：辻地区建物2



5：東田大塚



6：ホケノ山

図２　纒向遺跡の諸古墳と建物の方位

素直に二上山との関係を認めるべきであろう。具体的な情景は図３－１に示した。想定される視準先が後円部側である点で石塚古墳とは逆の関係となり、「去にし」側の峰との関連づけが目論まれた結果だと理解できる。

なお前方部側の軸線延長線上からの日の出を点検すると、二十四節気の穀雨（４月 22 日）と処暑（８月 25 日）の日の出方位と誤差なく一致する。さらに春分・秋分の日の出は、この位置からだと巻向山の山頂からとなり、両日日の入りは二上山北方の寺山北麓へとなる。

もちろん、完成後の勝山古墳の後円部から日の出・日の入り暦の観測が実施された可能性を強調するものではないが、本古墳の周溝くびれ部付近からは、朱塗り材を含む多量の建築用材が出土した事実があり、後円部上に建物が建っていたと推定されている。こうした状況を考慮すると、後円部頂に建てられた建造物が日の出・日の入暦と関連して運用された可能性も、あながち否定できないのではなかろうか。ちなみに二上山への日の入は３月３日と 10 月 11 日であり、前者は啓蟄の３日前、後者は寒露の２日後となる。

②－ｂ　辻地区建物１と昴の出現方位

勝山古墳で推測された日の出・日の入暦と関連する遺構が辻地区建物１である。紙面の都合で図の提示は省略し、図１と表１を参照願いたいが、この建物の東側軸線延長線上からは１°未満の誤差で昴が上昇する。日没直後のいわゆる宵出として昴が昇る期日は 10 月８日～ 10 日であり、二十四節気の寒露に相当する。また同地点からの日の出は５月 10 日と８月７日であるが、両日は立夏（５月７日）および立秋（８月９日）と前後２、３日の誤差である。なお５月の昴は暁どきの直前に昇るため、そののちは視認できず、８月になると夜間に視認される。つまりこの建物は、昴の出現か日の出か、どちらに注目するかによって解釈は異なるが、農事暦との兼ね合いで把握される可能性が高い[5)]。さらにこの場所からだと、立春と立冬の日の出は三輪山山頂からとなり、啓蟄の前日と寒露の翌日の太陽は、石塚古墳の後円部斜面越しに二上山山頂へと沈む。

上記のとおり、石塚・勝山・辻地区建物１の３例は、部分的で誤差も含まれるが、年間の節目となる期日の日の出・日の入方位および指標となる前景の峰との対応関係が認められる。こうした様相は、纒向遺跡の庄内２・３式期における日の出・日の入暦の管理が、これら３例のごく近隣でおこなわれた可能性を示唆するものである。

③－ａ　矢塚古墳と北限の満月

図２－３には矢塚古墳の墳丘墓軸線と周辺景観の関係を示した。現地での GPS 観測時には、後円部側の軸線延長線上に龍王山の山頂が重なるかに思えた。しかし前方部の推定付設方位を勘案すると、誤差は３°あることが判明したため、この想定は破棄された。

そこで天体景観をふまえた点検作業を実施したところ、冬至の日の入り方位と「高い月のモード」における北限の満月の出現方位が候補として浮上した。墳丘墓軸線との誤差は後者の方がはるかに小さく１°未満であるため、一致する可能性が高いと判断できる。したがって矢塚古墳の墳丘軸線は 18.6 年周期で到来する北限の満月の出を視準する格好で定められた可能性がある。

③－ｂ　辻地区建物２と北限の満月

矢塚古墳と同様の方位設定となる建物遺構として注目されるのが、辻地区の建物２である。先に述べた建物１と同様、２基の遺構はすでに消滅しているため、報告書の周辺地形図と現況との摺り合わせをおこなって原位置を推定し、作成した図面が図２－４である。１間四方の小型掘立柱建物であるが、その東北東側の長軸方位は龍王山山頂とは２°以上の誤差がある反面、「高い月のモード」における北限の満月の出現方位と誤差１°未満で一致する。この月は夏至の太陽よりも南中高度が高く、非常に長い月夜を照らす満月なので、月の若水信仰の源泉でもあったと考えられる。したがって、この建物は冬至付近に到来する高い満月を遙拝する施設であった、との解釈が可能である。

なお本例の重要性は、辻土坑４との関係が深いと評価される点である（関川 1976）。この土坑下層出土の一括資料は、土器編年上、庄内式と布留式の境界を画する纒向３式新段階、纒向４類、布留０式期の標識資料として周知され、上層出土の資料は布留１式中段階の標識とされている。月の運行軌道の極大期は 255 － 256 年、273 － 274 年、292 － 293 年、310 － 311 年であり、それぞれの年代を挟む前後３、４年間が「高い月のモード」なので、この間の冬至近辺に訪れる満月の出に合わせ、本建物を舞台に月の祭祀がおこなわれた可能性も指摘でき

る。のちの月読神社との関係を想起させる重要遺構だといえよう。

④ 東田大塚古墳と龍王山 520 mピーク

図１を基礎に東田大塚古墳の軸線と周辺景観を点検する目的で作成したものが図２－５である。本例の特性は、墳丘軸線の示す方位が年間の太陽の運行範囲から外れ、月の出限界からも外れることである。唯一、前方部側の軸線は「高い月のモード」における月の入り限界より内側に入る。その一方、後円部側の軸線延長線上には龍王山 520 mピークがそびえており、軸線との誤差は 1.3° である。３世紀代の冬至の日の入方位や月の入限界方位と軸線との誤差は２° 以上あるため、消去法的に本例の墳丘軸線は龍王山 520 mピークを視準しつつ定められた、という復元案が有力視される。

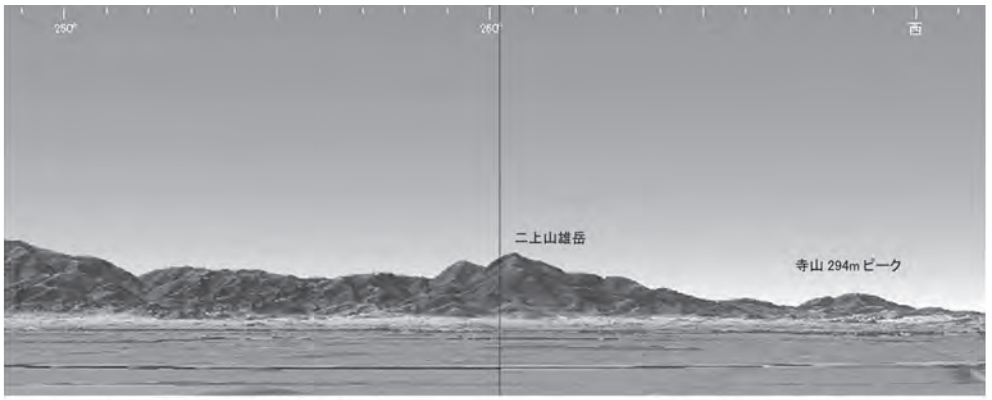
⑤－ａ ホケノ山古墳と北斗法

図２－６はホケノ山古墳の墳丘軸線と後円部中心埋葬施設の方位を点検したものである[6)]。東田大塚古墳と同様、本例の墳丘軸線も年間の太陽や月の出没範囲から外れる。ただし北天の周極星である北斗七星の柄の先にあたる揺光星の周回軌道の西側限界とは 1.8° の差で近似する。とはいえ誤差が大きい。

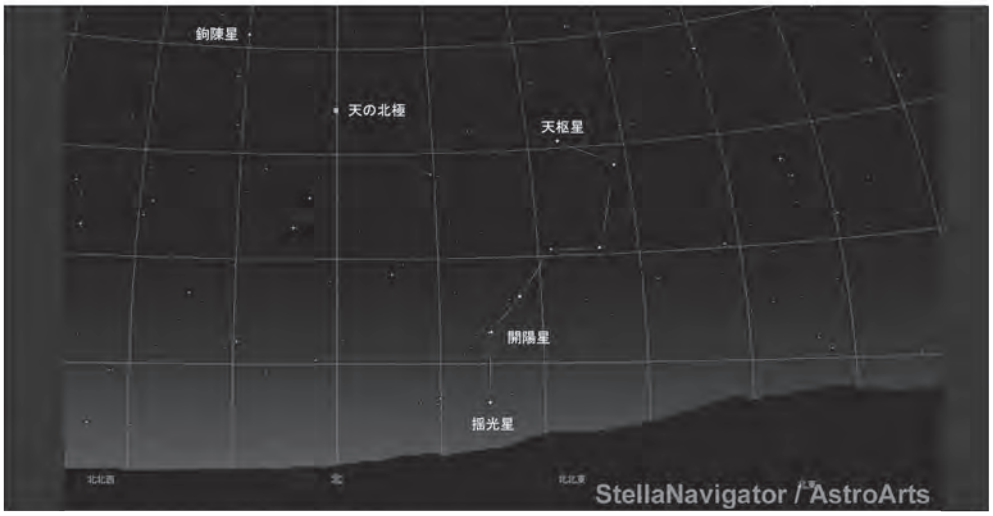
さらに後円部側、前方部側のどちらをみても軸線の延長線上に目立つ峰はみあたらない。そこで既存の古墳や祭儀施設との位置関係を点検すると、後円部側では辻地区の建物２の地点をさす方位と誤差 0.2° で近似することがわかる。一方、前方部側については、三輪山山麓に築かれた茅原大墓古墳のやや東方をさすことを確認しうる程度である。このことから、本例の軸線は周囲の自然景観との関係ではなく、纒向遺跡の中枢部に配された建造物など既存の人為景観との兼ね合いのもとで決定された可能性が浮上する。報告書にも後円部頂から纒向遺跡中枢部への眺望が優れることへの言及がある。とはいうものの、現状ではそれ以上の絞り込みはできない。

ところで後円部埋葬施設の方位には注目すべき様相が認められる。石槨の軸線（東西両壁面の平均値）は真北から 14.2° 東に振れる。この偏角は天の北極に最も近い周回軌道をとる鉤陳星の軌道範囲より 1.6° 東に外れる反面、北斗法の「みなし北」とは誤差 0.4° で一致するのである。この事実は３世紀後半代に「北枕の思想」（都出 1979）が近畿地方に導入された当初、いかなる方位観測法が採用されたのかを示す証拠だといえる。

具体的な情景を再現したものが図３－２である。夕暮れ時となると１月 23 日から 30 日までの８日間に限定さ



1：勝山古墳軸線後円部側の延長上の景観　　カシミール3D（国土地理院地図使用）



2：ホケノ山古墳後円部埋葬施設と斗建の情景　　ステラナビゲーター 11（地形は 50m メッシュ）

図３　勝山古墳後円部とホケノ山古墳埋葬施設の軸線上の景観

れるが、この条件を外せば８月下旬の午前４時頃には観察されるようになり、そののち「斗建」が現れる時刻は夜間へと移動し、10 月下旬には深夜０時頃に観察できる。また冬至の頃になると 20 時すぎには「斗建」となり、１月下旬には先に述べたとおり日の入り直後に「斗建」が現れるが、２月以降は観察できない。つまり初秋から冬にかけての５ヶ月間が「北斗法」に則した方位の観測期間である。この間にホケノ山古墳の石槨の軸線も定められたと考えられる。

なお本例は墳丘軸線と埋葬施設の軸線とが斜交する、いわゆる斜交主体部に属する。ただし軸線を斜交させること自体に目的があったとは考えられず、ホケノ山古墳の埋葬が完了した布留１式期古相の段階にあっては、双方の軸線にはそれぞれ固有の意味づけが与えられたとみるべきであろう。

⑤－ｂ 稲荷山古墳と箸墓古墳

既存の人為景観に軸線を沿わせる事例として明確なのは稲荷山古墳であり、図の提示は省略するが、後方部側軸線の延長線上には箸墓古墳の前方部前端中央付近が重なる。つまり本例は、墳丘軸線を当てることによって日本列島最古最大の前方後円墳への従属を表示したと評価できる。のちの陪冢へと引き継がれる現象だといえよう。

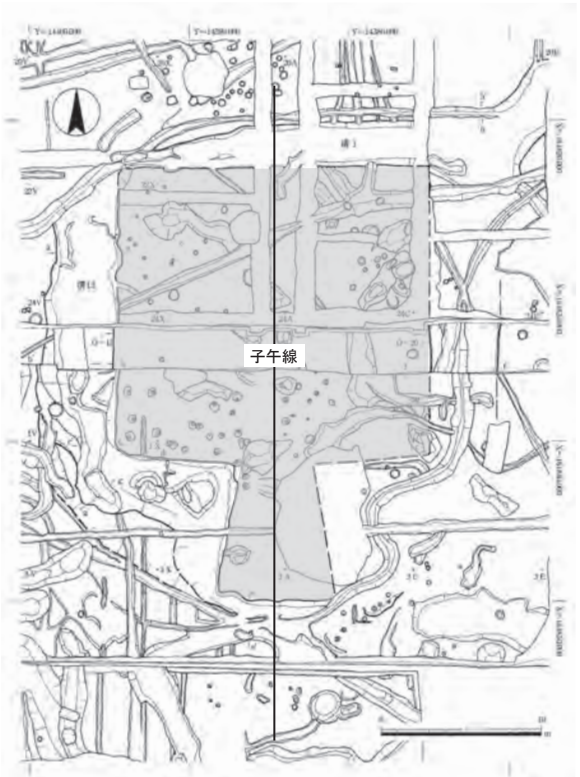


図４　メクリ１号墳検出状況［桜井市教育員会 2009 報告書より］

⑥ メクリ１号墳と天の北極

図４に示したのはメクリ１号墳の検出状況である。国土座標に準拠した図面であるため方位は 0.1° 時計回りに補正している[7)]。ただし補正状況を目視で確認するのは困難であるため墳丘の中心に子午線を添えた。

一目瞭然、墳丘の軸線は正確に南北を向く。そのため地上部分の周辺景観との対応関係を検討する必要はない。明らかに天の北極に依拠した軸線決定であり、客観的な方位観測が実施されたうえでの築造であることに疑問の余地はない。具体的な観測法は、のちの藤原京や平城京など宮都の建築時に使用された可能性の高いインデアン・サークル法[8)]であろう。太陽の影をもちいて正東西を求め、そのラインから直交させて軸線を定める方法である。この観測法を採用した場合、私が沖縄県西表島で８月におこなった簡易実験でも、東西の観測誤差は０° 01′ 15″であった。本例は庄内３式期の築造だと推定されているので、この観測法が採用された奈良盆地最古の事例として注目される。

Ⅳ．古相と新相の方位観念

以上の検討結果をふまえると、纒向古墳群中の諸例がもつ方位観念上の意味も明らかとなる。今回提示した順序は、日本列島で採用された方位観念の古相から新相への推移におおむね沿った状況だともいえる。

象徴的な山岳や峰の頂上に照準を合わせた祭儀施設や墳丘墓は、北部九州地域の弥生中期前半には登場しており、佐賀県吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓は雲仙普賢岳の山頂に長軸を向け、同県柚比本村遺跡の甕棺墓群の軸線は阿蘇中岳に照準を定めるものであった（七田 2012）。さらに墳丘墓の軸線を年間の日の出方位内に設定し、特定の期日の日の出方位に軸線を合わせる事例としては、弥生終末期の福岡県平原１号墓が著名である（原田 1966・北條 2017）。

その一方、「高い月のモード」における北限の満月の出に軸線を沿わせた祭儀施設は、縄文時代中期末に確認され、青森県三内丸山遺跡で検出された６棟の祭儀建築が該当する（北條 2020）。ただし火山を主体とする特定の山岳や太陽の運行との関連づけをおこなった可能性のある祭祀遺構も、縄文時代中期には各地で散見される

ので、月に向けた祭祀が先行したわけではない（小林編2005、後藤2017）。

さらに弥生終末期に造営された吉野ヶ里遺跡北内郭の軸線は、北限の満月の出現方位に沿わせたものであることが確定し、夏至の日の出との関連づけは私の事実誤認であることが明らかとなった[9)]。つまり月への信仰は、縄文時代以来の長期にわたる伝統のもとにあり、弥生終末期までは社会的記憶として保持されたと理解すべきで、矢塚古墳と辻地区建物２でみた様相は、この伝統が纒向遺跡にも及んだことを示している。

ようするに先の項目①から③までの状況は、縄文時代から弥生時代にまで引き継がれた古相の方位観に沿わせるものであったと理解できる。弓月岳に軸線を向ける箸墓古墳や大型建物群も同列である。また太陽や月の運行範囲からは外れる一方、龍王山520ｍピークを視準すると解釈した項目④についても、唐古・鍵遺跡で培われた日の出暦の中央値の峰を視準するという意味において同様の方位観念に沿ったものと理解できる。

なお楊寛氏によれば、古代中国での古相の方位理念は「坐西朝東」（楊1987）であり、日本列島ではそれを裏焼きにした「坐東朝西」が採用されたと考えられるが、項目①〜④までは、こうした解釈とも整合する。

それにたいし項目⑤における後円部埋葬施設の様相と項目⑥は、地球の自転軸の延長線上すなわち天の北極を指標とする「北辰信仰」の表出であり、新相の方位観念に沿わせる様相だと理解される。古代中国では新の王莽による政権簒奪を機に、楊氏のいう「坐西朝東」から「坐北朝南」へと方位理念は90°時計回りに回転したが、その影響が日本列島にも及んだ結果だといえる。

このうち⑤の埋葬施設でみた、軸線決定が「北斗法」によるものと考えられる点は重要で、暦算としての導入であったか否かは不明ながら、普遍的で簡便な方位観測法であるため広域に波及しやすかったと推定される。近畿地方における古墳時代前期の埋葬施設の方位が北斗七星の周回範囲に収まる事実はすでに解明されたのであるが、このうち真北から14〜15°程度東に振れる事例については、今後「北斗法」の採用例として再評価できる可能性があり、最寄りの最有力候補は大和古墳群中の中山大塚古墳である。

ただし項目⑥の様相は、別次元の重要性を帯びる。系統立った正方位観測法がすでに３世紀前半には日本列島へと波及したことを物語るからである。さらにメクリ１号墳の様相が孤立的であることにも留意すべきである。桜井茶臼山古墳をほぼ唯一の例外として、そののちの前期前方後円（方）墳の墳丘軸線にはほとんど現れない、高度な厳密性を保持した様相であり、埋葬施設の方位決定において部分的に指摘される現象に留まるからである。なおこの点に関連して、四国北半部の讃岐型前方後円墳の埋葬施設は異彩を放つ。正方位東西を指向する現象が顕著に認められるからである。

なお項目⑤－ａでみた墳丘軸線の様相も現時点では孤立的である。⑤－ｂで確認された陪冢につながる様相を除くと、既存の人為景観に墳丘の軸線を沿わせる事例がどの程度指摘されることになるか、将来的な課題とせざるをえない。

Ⅴ．結論

墳丘軸線の方位と周辺景観からみた纒向古墳群の特徴は、すべて個別の視準先をもつことである。視準先が重複するのは矢塚古墳と辻地区建物２、箸墓古墳と大型建物群であり、古墳と祭儀施設の組み合わせに限定される。

ただし日本列島における当時の方位観に則した整理をおこなえば、ホケノ山・稲荷山古墳の２基を除き、箸墓古墳を加えた６基は古相５例と新相１例に区分される。古相は太陽と月の運行に依拠するものであり、特定の時期の出没の景観すなわち指標となる峰や地点を見定めるものであった。新相は天の北極に依拠するものであり、その観測法は太陽の影を利用するものであった。

さらに古相に区分される５基の場合、個別の視準先は先例を踏襲することなく変更された。このことは纒向遺跡が営まれる間、周辺景観を構成する山岳や天体現象など諸要素への奉祭や由緒づけが輪番的に施されたことを物語っている。この点に関連して、古相のなかから東の龍王山山帯の峰を視準する事例を抜き出すと、石塚－三輪山、箸墓－弓月岳、東田大塚－龍王山520ｍピークといった状況であり、視準先の峰は築造年代の古いものから順次北へと移動したことがわかる。例外は矢塚であり、比較的早い段階において、北限の月の出を指標に龍王山520ｍピークと龍王山山頂との中間点を視準した。

さらに新相の方位観を採用する前方後方墳の築造年代も、古相の前方後円墳とほぼ同時期ないし少しだけ後出的である点も重要である。古相の方位観念の日本列島での起源地は北部九州地域であった可能性が高い。一方の新相の方位観念の先行的導入地域については、埋葬施設の方位決定法を考慮すれば吉備地域を含む東部瀬戸内地域が有力候補となるが、墳丘の軸線に限るなら、メクリ１号墳自体が日本列島における初現候補である。

ではそののちの変遷過程を概観する。古相の方位観念の表出は北方の柳本古墳群中の巨大前方後円墳２基を始め、黒塚古墳など５基の前方後円墳に踏襲された。表１に示した渋谷向山古墳はその一例である。北方の大和古墳群中では波多子塚古墳やヒエ塚・フサギ塚古墳など９基の前方後円（方）墳に引き継がれた。さらに北方の杣之内古墳群中の西山古墳もこの一群に含まれる。

それにたいし新相の方位観念の表出は、柳本古墳群中の天神山古墳や石名塚古墳など５基の前方後円墳に引き継がれ、表１には柳本大塚古墳を示した。さらに大和古墳群中では５基の前方後円（方）墳がこちらの方位観念を引き継いでいる。その代表例は西殿塚・東殿塚古墳であり、２基は並列配置をとる。

以上、柳本古墳群から杣之内古墳群までの諸古墳をみると、古相が優勢ではあるものの、新相も一定数含まれることがわかる。つまり纒向古墳群でみた古相の優位はそののちも維持される反面、新相の採用率は着実な増加を示すのである。

なお私は、纒向・柳本・大和古墳群から杣之内古墳群の東端までを包括して「大和東南部古墳群」と把握すべきだと考えている。正面観は西向きで唐古・鍵遺跡側からの眺望が意識され、背景上の頂点は龍王山 520 mピーク、西殿塚・東殿塚古墳の２基を頂点に配し、北端は西山古墳で南端は箸墓古墳だとみなす（北條 2012）。このような把握法を今回の作業結果に導入するなら、纒向古墳群の造営時までは圧倒的に優勢であった古相の方位観念を下位に位置づけ、新相の方位観念を最上位に置き直しつつ、全体景観を「坐東朝西」に再定位する、布留１式期以降の倭王権の動勢をうかがうことになる。

それと同時に、柳本古墳群や大和古墳群など北方の古墳群において古相の方位観に沿わせる古墳の軸線は、行燈山・渋谷向山・櫛山・西山古墳の４基を除けば、正方位東西に近づく傾向が認められ、かつ前方部を西向きに配置する事例が優勢となる。周辺一帯は西向き斜面なので、この変化は地形的環境との整合性を保持する事例の増加だと読み替えられる。そして、このような推移こそが墳丘軸線の決定法における「定型化」である。

後円部中心埋葬は北枕をとるため前方部とは直交する。柳本古墳群中の黒塚古墳が典型例であり、もう一方の西殿・東殿塚古墳のような、おそらく埋葬施設の方位も南北だと推測される平行タイプと併せて、布留１式期を起点に両者は近畿地方一帯へと波及した結果、前期古墳にみる墳丘主軸と埋葬施設との直交・平行原則が成立したのである。直交原則をとる古墳が古いと最初に説いたのは小林行雄であるが、今回の作業結果は、小林説（小林・近藤 1964）を現在の資料的状況のもとで再点検し、それ以前の経緯を補足説明することになった。またこのような観点からみても、纒向古墳群はまだ弥生文化の伝統を色濃く残すものだったことがわかる。

【註記】

1）諸古墳の墳丘軸線の推計にあたっては、報告書で復元案が開示された場合にはそれに依拠したほか、石野博信氏の著作（石野 2008）で示された復元案を適宜活用した。

2）奈良県立橿原考古学研究所による 1970 年代の調査区設定は、磁気偏角を考慮して磁北から６° 00′ 東に補正したものである。そののちは国土座標基準へと移行している。

3）太陽と月の出没方位について、今回の作業ではそれぞれの天体の下端が丘陵の稜線上や峰の頂点に接するタイミングとした。経緯は拙著を参照いただきたい（北條 2017）。

4）南極老人星はのちの福禄寿の起源となり、古代中国でも寿星とされ、南の極であった。なお平安期の老人星信仰については斎藤国治氏の著作に詳しい（斎藤 1982）。

5）昴の出現時期や輝く様子を観察して種まき期や収穫期をはかる習俗は琉球列島を含む日本列島の各地からも報告され、農事暦の指標であった可能性は高い。そのため今回の作業結果は、今後重視されるべき知見となりうる。

6）報告書では墳丘の軸線を「N 40° W」とし、埋葬施設の主軸方向を「N 14° E」とする。国土座標に依拠する方位設定であるため真北への補正をおこない 0.1° 単位で計測した結果、墳丘はN 41.1° W、埋葬施設は西壁（N 14.0° E）と東壁（N 14.3° E）の平均値（14.15° ）を丸めN 14.2° Eと推計した（岡林・水野編 2008 参照）。

7）国土座標は平面直角座標であるため真北への補正が必要となる。直近の三角点（東田大塚古墳上）から真北方向角を点検すると、真北からは 0° 05′ 40″（0.09° ）東への偏角

を示す。そのため、0.1°時計回りに補正した。

8）地表に同心円を描き、その中央に長８尺の表ないし髀（棒）を立て、午前中の太陽の影が円に接する地点と、午後の太陽が円に接する地点とを結べば正方位東西が定まり、それを直交させると正方位南北が定まる。この観測法は『周髀算経』の解説として、藪内清によって紹介された（藪内 1980）。なお北辰信仰に依拠する方位観念である以上、「極星」を直接視認する方位観測もあったに違いないとの指摘もあるが、西暦３世紀代の北天には「極星」がなかったため、太陽の影をもちいる間接的な子午線の方位出しであったと判断する。この点については拙著でも解説した（北條 2017）。

9）先史社会における月信仰の重要性は以前からも指摘されてきた（ナウマン 2005、三浦 2008 など）が、考古天文学の手法をとれば検証可能である。さらに吉野ヶ里遺跡北内郭の軸線は夏至の日の出方位より北に 2.3°振れるため再検討を実施した結果、この軸線は「高い月のモード」における満月の出方位に沿うものであることが判明した。北内郭では日の入の入り方位を参照する恰好の月の出暦が作動した可能性も高い。詳細は別稿「吉野ヶ里遺跡と北限の満月」（後藤明先生退職記念論集、2022 年３月刊行予定）で論じた。

【引用文献】

石野博信 2008『邪馬台国の候補地纒向遺跡（シリーズ「遺跡を学ぶ」051)』 新泉社

後藤明 2017『天文の考古学』 同成社

小林達夫編 2005『縄文ランドスケープ』 アム・プロモーション

小林行雄･近藤義郎 1964「古墳の変遷」『世界考古学大系３（日本３)』 平凡社

斎藤国治 1982『星の古記録』 岩波新書

七田忠昭 2012「邪馬台国－九州説の一例－」『邪馬台国をめぐる国々（季刊考古学別冊 18)』 雄山閣出版

関雄二編 2017『アンデス文明－神殿から読み取る権力の世界－』 臨川書房

関川尚功 1976「纒向遺跡の古式土師器」『纒向－奈良県桜井市纒向遺跡の調査』 奈良県教育委員会

都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第 26 巻３号

ネリー・ナウマン（檜枝陽一郎訳） 2005『生の緒』 言叢社

野尻抱影 1955『星の神話・伝説集成』 恒星社厚生閣

橋本輝彦 2006「纒向遺跡の出現期古墳出土土器とその年代」『古式土師器の年代学』 大阪府文化財センター

原田大六 1966『実在した神話』 学生社

北條芳隆 2012「東の山と西の古墳」『考古学研究』59 巻４号

北條芳隆 2017『古墳の方位と太陽』 同成社

北條芳隆 2019「古事記と景観・天文考古学」『古事記年報』61 号

北條芳隆 2020「三内丸山遺跡と北限の満月」『日々の考古学３』 東海大学文学部考古学研究室

細井浩志 2014『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』 吉川弘文館

三浦茂久 2008『古代日本の月信仰と再生思想』 作品社

藪内清 1949「中国の天文学」､『中国の天文暦法』平凡社（1969）に収録、『藪内清著作集（第３巻）天文学史１』（2018）臨川書店に再録

藪内清 1980「解説」『中国天文学・数学集』 朝日出版社

楊寛 1987『中国都城の起源と発展』 学生社

【報告書－墳丘図の出典等】

石野博信・関川尚功編 1976『纒向-奈良県桜井市纒向遺跡の調査』 奈良県教育委員会

岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』（橿原考古学研究所研究成果第 10 冊） 奈良県立橿原考古学研究所

桜井市教育委員会 2009『桜井市平成 19 年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 31 集）

桜井市教育委員会 2009『奈良県桜井市纒向遺跡発掘調査報告書２－メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査－』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 32 集）

桜井市教育委員会 2011『桜井市平成 21 年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 34 集）

桜井市教育委員会 2017『桜井市平成 27 年度国庫補助による発掘調査報告書－纒向遺跡第 186 次・第 187 次調査－』（桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 46 集）

桜井市教育委員会 2019『桜井市平成 30 年度国庫補助による発掘調査報告書－纒向遺跡第 196 次調査－』（桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 50 集）

橋本輝彦編 1998『東田大塚古墳-奈良盆地東南部における纒向型前方後円墳の調査-』（桜井市埋蔵文化財 1998 年度発掘調査報告１） 桜井市教育委員会

特異な初期大型墳

－箸墓古墳の基準尺度－

苅　谷　俊　介

Ⅰ．はじめに

箸墓古墳を桜井市箸中及び豊田地区の地図（箸中地区、豊田地区地図 1/1000 桜井市教育委員会 1982）で見ると、墳長約 280 m、後円部径約 155 m（南北）、前方部前面幅約 130 mを測る。今日まで、奈良県立橿原考古学研究所、桜井市教育委員会により小規模ながら 20 次にわたる近接調査が行われているが、墳丘・墳裾に関わる情報が得られたのは第３、７、11、12、15 次（宮内庁）の調査である（図３）。

箸墓古墳の重要性は多くの研究者が指摘するところだが、私の観察結果を含めると以下のような特異性を持っている。

A．緩やかな東高西低の扇状地に全面盛土で構築され、該期の古墳とは隔絶した規模をもつ

B．後円部５段、前方部前面４段、側面２～３段で葺石が認められ、前方部と後円部の第１段目テラスは整合しない。前方部側面の段の存在は明治 12 年 10 月調『御陵図』からも看取れる

C．前方部最上面付近採集遺物（二重口縁壷）と後円部最上段付近採集遺物（特殊器台・特殊壷）に相違があり、両者の間に若干の時間差と祭礼形態の違いが認められる

D．３世紀代の広大な遺跡『纒向遺跡』の『宮殿域』南北軸の南郊外の『郊祀』の位置に該当する

E．神と聖婚した『特定巫女』（倭迹迹日百襲媛）の陵（箸墓伝承）、神と人との共業造墓記録（日本書紀崇神紀 10 年）を残す異例の古墳である

これらの特徴をもつ箸墓古墳の出現は、激動する倭の統合へ向けての象徴であることは研究者の共通認識であり、様々な視点から論じられている。

ところが、纒向遺跡と箸墓古墳築造に「中国王朝の国都概念」が強く影響していることはあまり論じられていない。考古学による確認例はないが、『日本書紀』「成務天皇五年秋九月」の条には「阡陌」による東西南北方形区画の記録があり、『古事記』仁徳天皇の段には「直線の山立て」の足跡が辿れる。

阡陌区画は中国湖北省雲夢県の秦墓から発見された遺物によって BC350 年（秦の孝公 12 年）には既に施行されていたことが判明している。また、前漢の長安城の区画にも阡陌が認められており（古賀 1980）、1975 年に湖北省雲夢剣睡虎地で秦墓から出土した竹簡の一つに「～封即田阡陌頃半封～」と記されたものがある。

成務の実在性が高く年代想定が可能であれば阡陌による区画も４世紀代に遡る可能性が示唆され、中国王朝の国都概念の導入・模倣も早い段階に取り入れられた可能性は否定されるものではない。しかしながら阡陌区画は、今のところ条坊制という形で完成する藤原京の出現まで待たなければならない。

そこで、他に中国王朝の国都概念の導入・模倣と思われる事象を孝査していくと、纒向遺跡の宮殿域と箸墓古墳の位置関係が浮上してくる。上記箇条書きDの「３世紀代の広大な遺跡『纒向遺跡』の『宮殿域』南北軸の南郊外の『郊祀』の位置に該当する」がそれである。中国王朝では『都城』の南郊外に重要な国家的祭礼『郊祀』を執り行う施設を設ける。これに該当するのが、纒向遺跡の宮殿域と箸墓古墳の位置関係である。つまり都城と郊祀という中国王朝の国都概念の導入･模倣と考えられる。

そこで本稿は、箸墓古墳築造に使用された基準尺度、築造の過程､前方部と後円部の第一段目テラスの不整合、南側からの観察で得た結果などを踏まえて、纒向遺跡と箸墓古墳に看取れる中国王朝の国都概念の導入・模倣について述べ、箸墓古墳の復元案を図示していきたい。

Ⅱ．三輪山と立春の日の出

纒向石塚と建物Ｂ跡からの日の出の撮影には 10 分の時間差があり、写真１の纒向石塚からの日の出は、2010 年２月４日 07：36 分。写真２の建物Ｂ跡は同日 07：46 分である。写真の右が南で、仮に纒向石塚後円部を高さ約 10 ｍに復元し墳頂から撮影した場合、もっと早い時刻でも三輪山山頂付近が陽光に輝く状態で見られるのみで太陽と閃光は観察できない。遅ければ太陽は三輪山の南側上に離れてしまう。三輪山山頂からの立春の日の出を目視できるのは写真２のように建物Ｂからである。

従って建物Ｂは、「立春歳首」（立春のある月が正月で立春の日が元旦）という一年のはじまりを、三輪山山頂から昇る立春の日の出で決定する重要な建物であった可能性が高い。更に、巻向山・穴師山（斎岳）・竜王山系のピーク等の日の出を観察し、農耕に関する諸時節や祭祀の時期も建物Ｂが担っていたと考えられ、暦の基準を司る建物としての性格がある。建物Ｂの現在標高は 75 ｍ、纒向石塚は 68.4 ｍである。

直線に並ぶ建物群の東西軸線が、「直線の山立て」により約５度西偏することは、地勢だけに限らず、建物Ｂと三輪山山頂（426.7 ｍ）から昇る立春の日の出（暦の基準）が深く関係すると思われる。従って、建物群の最西に位置する建物Ｂは、「楼観」として高い建物でなければ建物Ｃ・Ｄに遮られ三輪山山頂から昇る立春の日の出を目視することはできない（図１）。

三輪山が神山、聖山として崇められているのは、こうした背景を加味する必要があろう。

第 20 次調査で建物Ｂ（SB101）を検出した寺沢薫氏は、「～この時期としては、かなり堅牢な建築物の存在が予想できる」としている[1)]。この見解からも「楼観」の想定に妥当性があろう。

Ⅲ．暦と尺度

推定される東西軸線は、玉の山丘陵（珠城山古墳群）西端部と天照御魂神社（太田神社）の位置に立てられた立柱を基準とする「直線の山立て」により決められたと考えられ、この東西軸線に直行する大型建物Ｄの南北中軸線の延長は箸墓古墳後円部中心に達する（図２）。この一致は、建物Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆの纒向遺跡宮殿域の建物群が機能していた時点で、箸墓古墳の築造位置も計算されていた蓋然性が高く、大型建物Ｄと箸墓古墳後円部は密接な繋がりをもっていたと思われる。

写真１　三輪山から昇る立春の日の出（纒向石塚より）

写真２　三輪山から昇る立春の日の出（建物Ｂ跡より）

宮殿推定域の東極を南北に走るライン（白破線）は箸墓後円部東側に正しく接しており、ここに宮殿と箸墓古墳を結ぶ道の存在を仮定すると最古の南北直道となり、図２で「原上ツ道」と仮称した。

この図で明らかなように、箸墓古墳は宮殿域の南郊外に位置している。中国王朝で言えば都城の南郊にあって最も重要な国家祭礼が執り行われる「郊祀」に該当する。これは箸墓、殊に円丘部が単に埋葬目的のためだけではなく、中国王朝の国都概念と国家祭礼の場を念頭にして築造されたと考えられる。この件についてはⅣ章で述べる。

その前に『魏志倭人伝』の卑弥呼の死と箸墓古墳築造との関連を一考しておきたい。2001 年日本考古学協会第 67 回総会研究発表資料に渡邉正氣氏の『卑弥呼以死、大作冢、径百余歩、徇葬者奴婢百余人』の読みについての論考がある[2)]。氏は多くの文献から「以」の用例を挙げ、副詞の「すでに」や接続詞の「もって」ではなく、動詞の「おもう・おもえらく」であり、「すでに死す」とか

「死をもって」ではないとしている。「卑弥呼、死を思い、大いに冢を作る。径百余歩～略～」と読み、箸墓古墳を「寿陵」とする見解を示している。箸墓古墳の築造・出土土器の年代を考える上でも重要な指摘である。

私は箸墓古墳の築造は２段階に分けられると推定している。仮に寿陵とするならば、それは図２にみられる「円丘」（実際は方形壇付円丘）に限られ、時間差を置いて前方部の拡大・延長の追加築造が行われ前方後円形となったと考えている。前方部の追加築造は「前期（第１期）宮殿域」の廃絶後に「後期（第２期）宮殿域」の遷移が成された時点である可能性が高い。『日本書紀』に記された「日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。～」とは、神・人・信仰の強固な絆が箸墓古墳築造の背景にあることを示すと同時に、“大労働力を動員して昼夜兼業の突貫工事が続けられ短期間で完成”されたことを物語っている[3)]。箸墓古墳はそれだけ特異で重要な意味をもっている。築造の様子が記されたのは箸墓古墳のみで他の古墳にないことも、築造工事の異様さを示唆している。それは先行築造の「方形壇付円丘」の箸墓築造を指す伝承であろうと思われる。そこに前方部を追加築造して前方後円形にしたことは、両者に密接な繋がりがあることを

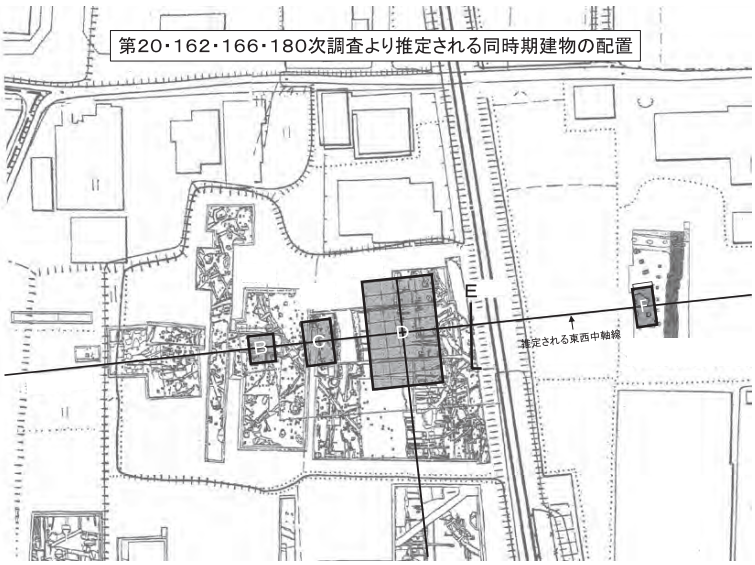


図１　纒向遺跡辻地区 建物群配置図［桜井市教育委員会 2014 に加筆］

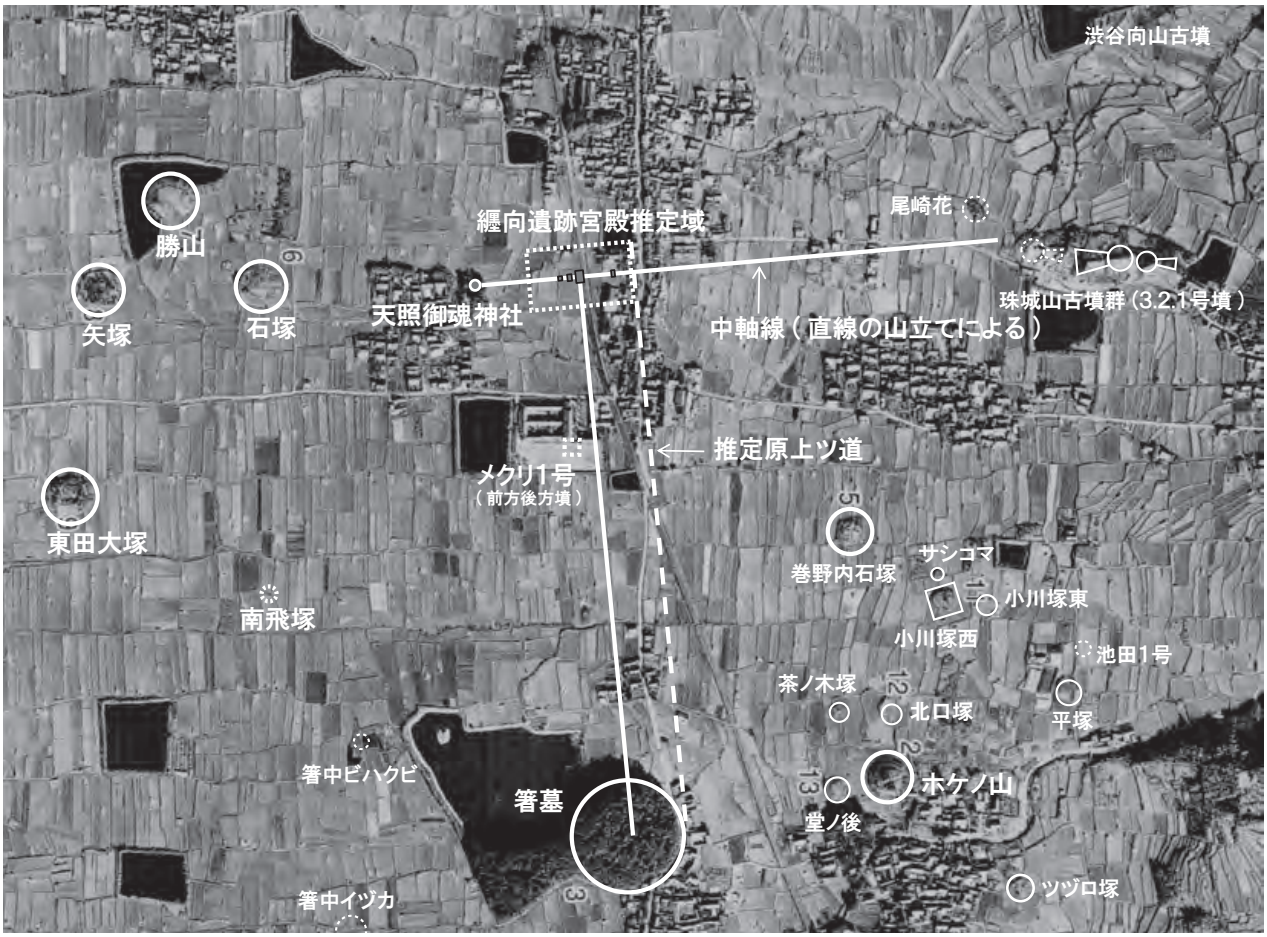


図２　昭和 30 年代中頃の纒向遺跡の写真［奈良県立橿原考古学研究所 2008］に苅谷作図

窺わせ、前方部にも埋葬主体が存在している可能性が高く、被葬者像を予察する手掛かりともなり得る。とすれば後円部の被葬者と前方部のそれとでは、地位・権力に格段の差が認められる。

さて、暦と尺度であるが、中国王朝の暦は、音律・度量衡と連動して改定され、国家祭礼とも密接に関わっている（その法は律を以て暦を起こす『漢書』律暦誌）。中国王朝の国都概念の導入・模倣を意識する統合体倭国の政体樹立と、纒向遺跡・箸墓古墳造営に密接に関わっている重要事項なので、主に前漢から後漢・魏に至る暦の改正を略記する。

前漢武帝の太初元年（前 104）五月に、長期間使用されていた「四分暦」による暦日が適合しなくなったため「太初暦」が施行され、前漢末平帝元始五年（５）に劉歆によりに不足を補って「三統暦」と改められている（『漢書』律暦誌）。太初暦以前の暦法はすべて四分暦に属するものである。

後漢第三代の章帝は元和二年（85）に改暦し、太陽年を 365 と４分の１日とする四分法に基づく暦法、「後漢四分暦」を施行する（二月甲寅、始用「四分歴」。詔曰、今山川鬼神應典禮者～略～以祈豐年。『後漢書』巻三章帝）。それまで冬至（12 月 22 日頃）のある月が正月「冬至歳首」とされてきたが、この改暦により立春のある月が正月「立春歳首」となる。以後この暦は延康元年（220）までの基準で、「魏では 17 年、呉で１年、蜀では 43 年間使用」されている。従って３世紀前半に出現する纒向遺跡に導入された暦は「後漢四分暦」と「立春歳首」で、“ 聖山三輪山から昇る立春の日の出が最重要となる ”（写真１）。必然的に纒向で使用された基準尺度は後漢尺であり、「一尺＝ 23.75 ㎝」「一歩＝６尺＝ 1.425 ｍ」「一丈＝ 10 尺＝ 2.375 ｍ」「一里＝ 300 歩＝ 427.5 ｍ」である。

測量・測地・地図作成の歴史は『周礼』『礼記』『史記』などに挿話・官制のかたちで記載され、前５世紀段階には既に完全実施されている。後漢には、「張衡（78 ～ 139）」が測量・測地・地図作成方法を『算罔論』として著している（『後漢書』巻八十九）。また西晋の『裴秀伝』に載せられている『禹貢九州地図論』の序文には、さらに詳細な技術・知識が網羅されている（分率＝縮尺、准望＝網目方眼、道裏＝距離、高下＝高低、方邪＝方位角度、迂直＝曲直線）。

突如出現する「纒向遺跡」は、計画・設計された「都宮」が置かれた都市である[4)]。そこには天文・方位・選地・直線の山立て・阡陌等による緻密な事前調査が考えられる。これまでの調査結果と私の参加した多次の調査から、先学も指摘しているように纒向遺跡は二次期に区分される。私は、出現期～３世紀中葉を「前期（第１期）纒向遺跡」、３世紀中葉～４世紀前葉までを「後期（第２期）纒向遺跡」としている（以下前期・後期纒向遺跡の表記使用）。また、私の計測によれば、図２の長方形区画は「宮殿域」の可能性が高く後漢尺東西 90 歩×南北 60 歩＝ 128.25 ｍ× 85.5 ｍとなる。ちなみに纒向石塚古墳は、70 × 70 歩で一辺 99.75 ｍの方形区画内に築造されている。これも阡陌＝准望による可能性が高い。

Ⅳ．祭礼と改暦

中国王朝の国家祭礼として最も重要な祭祀は「郊祀」「封禅」である。天の祭祀を国都南の郊外に設けた円壇「南郊」で、地の祭祀を北の郊外に設けた方壇「北郊」で執り行い、この両者を合わせて「郊祀」という。前漢では、冬至に南郊・夏至に北郊で定例的に行われたとされているが定かではない。『史記』巻二十八「封禅書」第六書の注釈書である『史記三家注』の一つ『史記正義』に、「正義此泰山上築土為壇以祭天、報天之功、故曰封、此泰山下小山上除地、報地之功、故曰禅」（泰山の頂に土壇を築いて天を祭り、天の功に報いるのが「封」で、その泰山の麓の小山の地を平坦に整えて、地の功に報いるのが「禅」）とある。

「封禅」は「郊祀」と同じく重要な国家祭礼だが、郊祀とは形態を異にし、聖山（霊山）の聖域を選んで天を祀る「封拝」と山下に土を平坦にして「墠」または「壇」・「禅」を造り出し地を祀る「禅際」とを併せもっている。封禅を執り行った皇帝は、中国歴代の中でも数えるほどしかいない。

また、同書には次のような注目すべき記述がある。「天は陰を好むので天を祀るには、必ず高山の麓の小山の上に築いた壇で行う」。「地は陽を貴ぶので地の祀りは沢・池・沼の辺の円丘で行う」とあり、天地祭祀はともに円丘で執り行われている。

この記述は箸墓古墳を考える上で興味深い。ここに記

された高山（聖山）を三輪山に、麓（聖域）の小山の上に築いた壇「封拝」（天を祀る）を箸墓古墳の５段目に、土を平坦にして地を祀るために造りだした「禅際」（地を祭る）を前方部に比定した場合、箸墓古墳は封拝・禅際を行う天地合祀の「郊祀・封禅」となる。

箸墓古墳をこの視点から論じた研究は無く、実は箸墓古墳築造の鍵を握る重要ポイントである。つまり「天は陰を好むので天を祀るには、必ず高山の麓の小山の上に築いた壇で行う」「地は陽を貴ぶので地の祀りは沢・池・沼の辺の円丘で行う」の件に適する立地は、沢・池・沼に近接していることが最も重要な条件となろう。箸墓古墳の立地は緩やかな東高西低の扇状地であり、築造当時は纒向川の流れとその氾濫による沼沢地が散在していたであろうことは土層から容易に看取れる。従って“築造当初の箸墓古墳は決して長大な前方部をもつ必要はなく、円丘に平坦で短い突出部（方形壇）の禅際を付設した重要祭祀の場”であったと考えるのが自然で、完成したばかりの箸墓古墳は「方形壇付円丘」であり、前方後円形ではない。ここに私が『箸墓古墳は郊祀・封禅の一体化』と考える一つの根拠がある。また、纒向石塚・矢塚古墳は、倭の伝統的方位観（東西が縦・南北が横『日本書紀』成務５年９月）と後漢の祭礼の融合から生み出された「祭祀場」に該当し、「前期宮殿域」の西端部に設けられた「立春歳首祭礼」の場であったと思われる。

夏至の地の祀りに「北郊」の記述はなく、天地祭祀ともに南郊で施行されていたと思われ、祭祀に舞楽が伴っていたことも分かる。また『郊祀志』にも「天は円丘で祀り、地は方沢で祀る」という記事が多くみられるが北郊の記述を欠くものが多い。

前漢皇太子の孺子嬰（５～25）より禅譲を受けた外戚の王莽（前 45 ～後 23）は、初始元年（８）に「新」（８～ 23）を建国するが、“天地祭祀を合祀して南郊のみで実施する”“儒家的国家祭祀体制による郊祀の成立はこの王莽からであり”、後漢は「元始故事」と名付け継承し、正月に行われた「天地合祀は南郊」で行われ、初代光武帝の即位にあたり初めて天地を祭る壇が築かれている。『後漢書』（范曄 398 ～ 445）に欠けている「志」の部分を著した司馬彪（？～ 366）の『続漢書』祭祀志上第七に、「建武元年（25）光武、部に即位するに壇墠を部の陽に為る。祭りて天地に告するに元始中の郊祭の故事を采用し～」という記事と、「二年正月、初めて郊兆を洛陽城南七里に制するに、部に依り、元始中の故事を采る」とあり、前漢元始５年（５）に王莽が説いた天地合祀に則った南郊のみで実施された祭礼であったと考えられ、正月に一度だけ南郊で天地合祀が行われている。

「北郊」が設けられるのは建武中元元年（56）で、『続漢書』（５世紀代成立の後漢書に先行する）祭祀志中第八に「三十三年（中元２）正月辛未、郊するに別ちて地祇を祀り～」とあり、北郊を設けたことでそれまで南郊にあった地祇の座が北郊に移されている。この段階から南郊で天と高祖を、北郊で地と皇后の祭礼が行われるようになったことが分かるが、現在、この記述はかなりの疑問が残るとされている。後漢第三代章帝の元和２年（85）以降は、改暦により立春月が正月となる「立春歳首」が施行され、年一度の南郊での祭礼は欠かせなかったようだが北郊の記述は定かではない。こうした記録から「郊祀」といえば「南郊」を指すのが一般的である。

「方形壇付円丘」の箸墓築造は、「前期宮殿」が機能していた段階で計画されていたと考えられることは既に述べた。大型建物Ｄの南北中軸線に敷設された石敷不正円形遺構（写真３）は、東西の「直線の山立て」ラインに直交する箸墓古墳後円部中心までの「直線の山立て」基準点の立柱の痕跡とみられる。箸墓古墳後円部中心は、そこから南へ 784 m（550 歩）延長した南郊外にあり、選地・計算された位置に「郊祀」として築かれたことが解る。

短い方部を付設した「方形壇付円丘」の箸墓古墳は「郊祀・封禅」の要素を強く持つ墳丘で、『日本書紀』に記

写真３　大型建物Ｄの石敷不正円形遺構

された神・人・信仰の強固な絆・大労働力を動員しての昼夜兼業の突貫工事を示唆する記載は、中国都城の設計に則った「郊祀・封禅」を執り行う重要祭礼の場を急ピッチで築き、完成後に統合体倭国王の御魂屋（明堂要素を含む）を有する墓廟を築くことが最大の目的であったと考えられる。そこには中国王朝の国都概念と国家祭礼を導入・模倣した統合体倭国独自の「新政体樹立」の意志が強く現われている。

さて、明帝景初元年（237）三月に改暦が行われ「景初暦」（1年＝365.24688日）となり、冬至の月（12月）を正月とする「冬至歳首」に変更される。「冬十月乙卯、洛陽南委粟山為円丘。冬十二月壬子冬至始祀」（『魏志』巻三明帝紀）とあり、洛陽の南にある委粟山に円丘を築き、その十二月壬子の日に冬至の国家祭礼が初めて行われ、53年ぶりに「冬至歳首」の復活がなされている。こうした記録からすると、天地を祀る郊祀を備えて400余年、礼制の変容で皇帝による大きな祭礼すら廃止されてしまったことや、偉大なる皇帝を天として円丘に祀り、偉大なる皇后を地として方丘に祀り、皇天の神（天神）を南郊に祀り武帝を配し、皇地の祇（地祇）を北郊に祀り武宣皇后を配したことが分かる。

明帝景初二年(238)12月は卑弥呼の使者が洛陽に至った年で、「親魏倭王」の称号が与えられている。景初暦は次の王朝「晋」に継承され、晋の武帝泰始元年（265）に「泰始暦」に改暦されたとされるが、それは景初暦と同一のものである。

魏の元帝（在位260～265）に禅譲を迫り、晋を建てた武帝司馬炎（在位265～290）は、この年（265）の冬12月に南郊に壇を設け祭礼を行っている（『晋書』巻三武帝紀「泰始元年冬十二月丙寅、設壇於南郊」）。即位と改暦に伴う盛大な郊祀であろう。さらに翌年（266）、「泰始二年十一月己卯、倭人来献方物。並円丘、方丘于南、北郊、二至之祀合於二郊」（11月己卯＝5日、倭人が来て方物を献上した。円丘を南郊に併せ、方丘に北郊を併せ、二至の祭祀を南北郊に併せて行った）との記述がある。少々難解だが、都城の南郊外の円丘と南郊を併せ、都城の北郊外の方丘と北郊を併せ、冬至・夏至の祭祀を行ったということで、おそらく南に2ケ所・北に2ケ所、都合4ケ所あった祭礼の場を二つに併せたということであろう。倭からの使者はこの祭礼と壇を目の当たりにした可能性がある。また『晋書』巻十九礼志上に「是年（泰始二年）十一月、有司又議奏、古者丘郊不異、宜並円丘方丘於南北郊、更修立壇兆、其二至之祀合於二郊。帝又従之、一如宣帝所用王肅議也。是月庚寅冬至、帝親祠円丘於南郊。自是後、円丘方沢不別立」とあるのも、その主旨は円丘と南郊を合併し、方丘と北郊を合併し二至の祭祀を行ったということである。従ってこの記述を円と方の合体として、そこに巨大前方後円墳の起源を求めることは難しい。

『晋書』は唐の太宗（李世民）の命によって648年に編纂された史書で、複数の編者が携わっていることから前後の矛盾や誤りも多く指摘されており正確性についての評価は低い。しかし、唐の太宗は未編纂の史書を作成するように命じており、『北斉書』『梁書』『陳書』『隋書』『周書』も編纂が進められて完成している。それまでの正史は個人編纂したものを後に正史に定めたものだが、『晋書』は残存する膨大な記録から重要部分を抜き出して編纂した一から出発した史書でもある。そのために前後の矛盾や誤りも多いが、史料価値として低いものではないと私は考えている。史書編纂が国家事業となり滅亡した王朝の史書編纂を行うのが正統王朝の義務となったのは、この『晋書』の編纂以降のことである。

こうした観点から『晋書』巻三武帝紀泰始二年十一月五日（266）、「～倭人来献方物。並円丘、方丘于南、北郊、二至之祀合於二郊」の件を一考すると、ここに記された倭からの使者は、「臺與」が遣わしたとするのが一般的だが、『晋書』巻三武帝紀泰始二年十一月五日(266)には、上記の如く臺與とも女王とも記されていないことに注視する必要がある。私はこの時点では「臺與」は既に没していたと推測している。遣使の時期は、統合体倭国から発展し権力集中がより鮮明になった「ヤマト王権黎明期」にあたり、その時の大王は「崇神」（御間城入彦五十瓊殖）であろうと考えられる。換言すれば倭の大王即位の報告を兼ねての遣使・朝貢と思われる。（ここでは臺與の短命、崇神大王誕生の経緯は省く。）

Ⅴ．箸墓古墳の築造

（1）後漢尺と後円部、二つの疑問点

暦と基準尺度（後漢四分暦・後漢尺）、祭祀（郊祀・

封禅）等について多くの紙幅を費やしたが、纒向遺跡・箸墓古墳出現の背景には、中国王朝の国都概念の導入・模倣があることを確かめるためである。卑弥呼がはじめて魏に遣使したのは景初２年（238）である。方形壇付円丘の箸墓古墳は、それから凡そ10年後には完成していたと考えられるので、本来ならば「景初暦」により「冬至歳首」が復活し度量衡も改定され、尺度も一尺＝24.12㎝の「魏尺」の使用が考えられる。しかし、既に述べたように方形壇付円丘の箸墓古墳は、「後漢尺」90歩×60歩の区画で造営された「宮殿域」の建物Ｄの南北中軸線中心部の石敷遺構から、南へ後漢尺550歩延長した地点に円丘部中心点が位置する。これは明らかに建物Ｄ建立時点には計画されており、箸墓古墳の築造も後漢尺を用いたものとしてその復元案を示す。

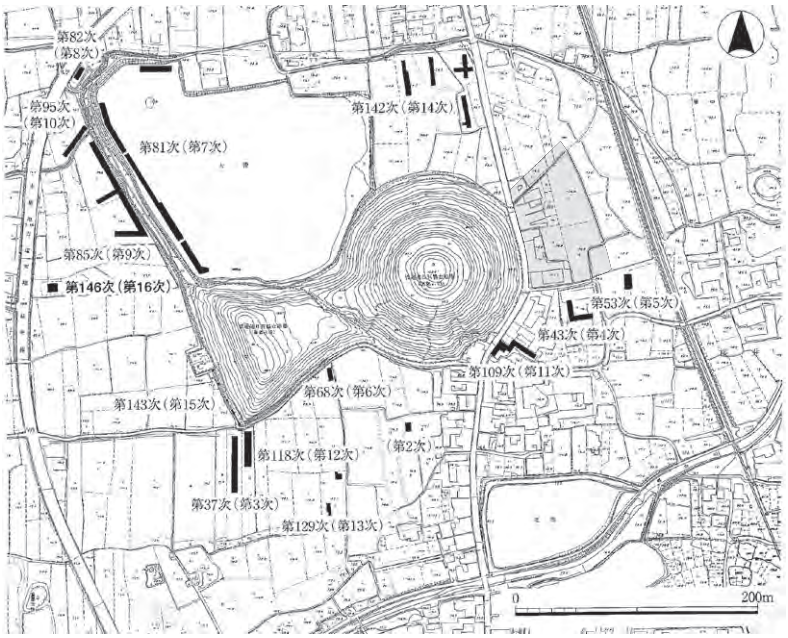


図３　箸墓古墳の平面復元［松宮 2008 の図に加筆］

ここで、築造時期を今一度整理しておく。箸墓古墳の築造を２段階に分け、第１段階は重要祭例の場「郊祀・封禅の一体化＝天地合祀」「御魂屋を有する墓廟・統合体倭国王陵」とし、墳形は「方形壇付円丘」で完成は３世紀中葉、これを「前期箸墓古墳」とする。第２段階は後期宮殿遷移直後の３世紀後半前葉で、前方部が追加築造され墳形が「前方後円形」となった時点で、これを「後期箸墓古墳」とする。両者には約十年余の時間差があると思われる（以後、前期箸墓古墳・後期箸墓古墳の用語を用いる）。

前期箸墓古墳の４段目テラスから５段目にかけて吉備に由来する宮山型系特殊器台・特殊壺の破片、都月型特殊器台形埴輪の破片が集中して出土している。これは前期箸墓古墳が吉備との繋がりをもっていた考古資料である。おそらく大和で製作されたものと思われるが、吉備の工人が大和に移動して製作または製作に関与したか、既に大和での生産体制が成立していたかのいずれかであろう。

箸墓古墳後円部には不可解な点が２つほどある。その１つは、箸墓古墳の現状平面図を観察すると、後円部東側に付設された突出部が存在していたことを思わせる畦畔を確認することができる（図３）。何度も現地を視察したが、田畑開墾のために古い段階から徐々に削平されてしまったと思われ、宅地化された部分もあり、高まりを確認することはできなかった。おそらく平坦な低壇の突出部であったと考えられる。もし突出部が存在していたとすれば「楯築弥生墳丘墓」のような墳形が想定され、前期箸墓古墳と吉備との繋がりがさらに強まることとなる。図３の黒塗り部分は、箸墓古墳近隣部調査位置と回次数である。後円部東側の網掛け部分が、想定される平坦な低壇突出部である。

後円部についての２つ目の疑問は、クビレ部から後円部４段目に続くスロープ（隆起斜道）が、後円部４段目傾斜面にも存在するとすればコンターの間隔は他の傾斜面と異なり広くなる筈である。しかしその間隔に大差はなくスロープの傾斜は急勾配となる。むしろ存在していなかったと考える方に妥当性があり自然でもある。想定復原については次項からで述べていくことにする。

（２）前期箸墓古墳（方形壇付円丘）

箸墓古墳を前期（方形壇付円丘）・後期（前方部追加築造）の２段階にわたる造営と推測する大きな要因は、前期箸墓古墳が中国王朝の国都概念と国家祭礼を導入・模倣した「郊祀･封禅」の場として築かれたことにある。更に、円丘部第４段目テラスから５段目に吉備に由来する宮山型系特殊器台・特殊壺の破片、都月型特殊器台形埴輪片が集中して出土するが、追加築造された前方部頂

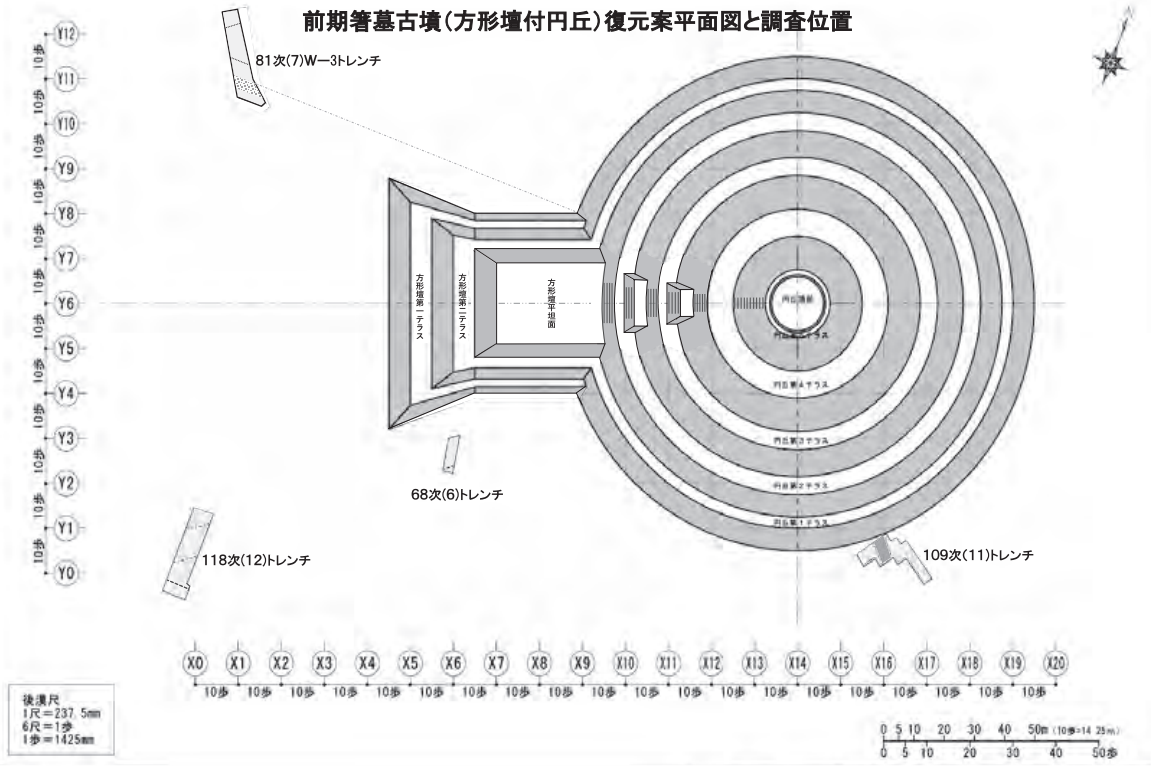


図４　前期箸墓古墳（方形壇付円丘）復元案平面図と調査位置［苅谷 2015 より、加筆修正］

付近からは二重口縁壺・二重口縁壺形埴輪片がほとんどで、特殊器台形埴輪片は極少にすぎない。これは２度の大きな祭祀が行われた可能性を示唆し、両者間にある祭礼の違いと時間差を考慮する必要がある。

今一つ、1998（平成 10）年９月 22 日、奈良県下を直撃した台風７号によって、墳丘の樹木は幹から折れたものや根こそぎ倒れたものが目立ち、2000 年５月 23 日に纒向遺跡第 118 次調査視察時でも、南側から見た古墳の外観はそれまでと一変していた。書陵部によると､倒木･根起き個所は 29 個所におよび、1999（平成 11）年３月に倒木の除去･根起き個所の埋め戻しが行われている[5)]。この自然災害により 2000 年 12 月６日の時点でも、それまで見えにくかった墳形を南側から観察することができた。クビレ部付近から前方部へと延びる段の存在は確認できたが、そのテラスと思われる部分は、円丘部第１段目テラスとの整合性が看取れなかった。2003 年の拙論には墳丘側面は２段築成と記述した[6)]。しかし南側からの墳丘観察記録手帳を何度も検討した結果、今では図４に示したように変則的な３段築成と推定している。第１段目テラスと第３段目上面平坦面は、円丘部テラスに整合しない。

前項で述べた４段目傾斜面の等高線の間隔の疑問から、スロープ（隆起斜道）が存在しなかった場合に考えられる構造も示した。円丘部第２段目第３段目テラスには、それぞれ３段目４段目傾斜面の中間まで基壇が築かれ、全て丸太段が設置されていたと推定する。丸太段は太線で示した。方形壇にも丸太段の付設は十分に推定されるが円丘部より勾配が緩やかであることからここでは省略した(20 ～ 25 度弱)。基壇と丸太段を想定した場合、傾斜角が急でも容易に４段目テラスまで登ることが可能となる。各段の傾斜角度は後に記すが、<u>もしスロープであればスキー競技のジャンプ台同等の急勾配となり容易に登ることは難しい。</u>

図示した基壇と丸太段が長い年月の間に崩落して、図３または図６にみるような逆「コ」の字状等高線となったと考えられる。基壇の南北幅と丸太段(複数本で１段)の長さは必ずしも図４と一致するものではない。方形壇第１段目テラスは円丘部１段目斜面中間に接続し、円丘部第１段目テラスとは整合しない。これは 2000 年の観察結果と同じである。整合するのは方形壇第２段目テラスのみである。方形壇３段目上面は平坦で、円丘部２段目斜面の中間に接続する。この平坦面底辺長は 30 歩(42.75 m)、幅 25 歩（35.625 m)、平坦面頂部長 25 歩(35.625 m)､幅は約 18 歩(25.65 m)となるが 20 歩(28.5

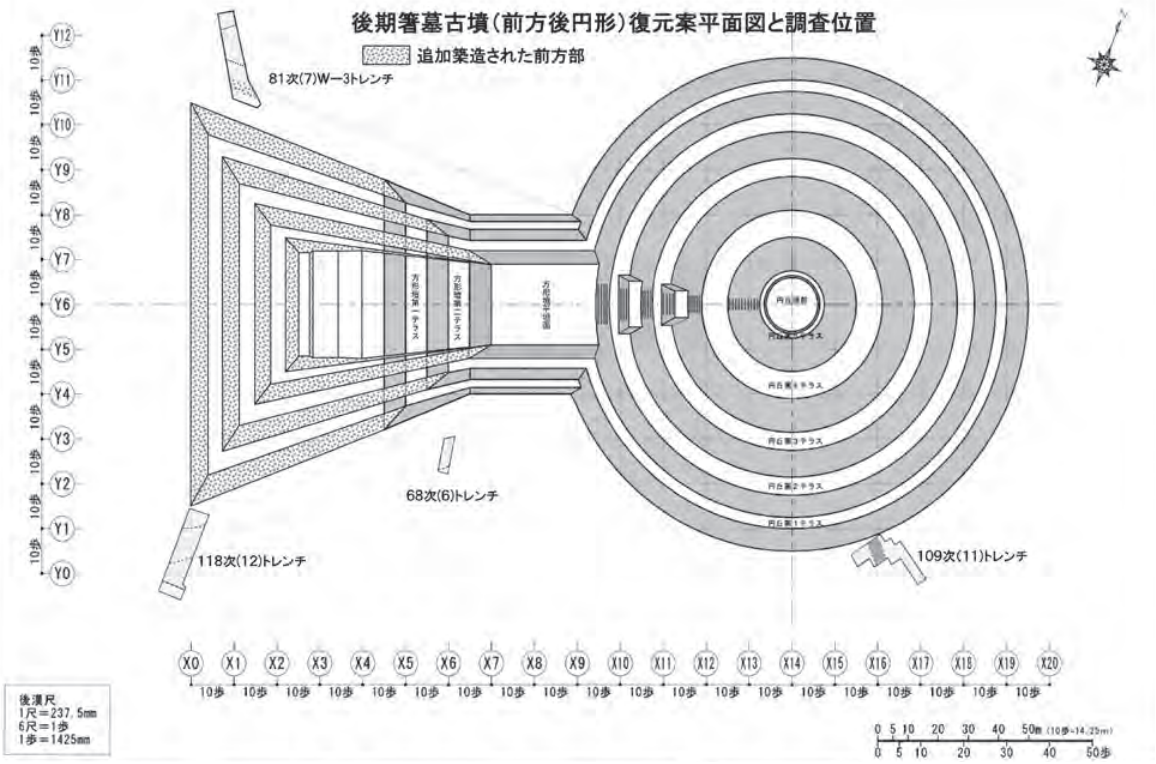


図５　後期箸墓古墳（前方後円形）復元案平面図と調査位置［苅谷 2015 より、加筆修正］

m）の可能性もある。

Ｘ軸０～ 20・Ｙ軸０～ 12 は、後漢尺 10 歩（14. 25 m）単位で１枡は 10 歩× 10 歩である。従って、前期箸墓古墳は、全長 150 歩（213. 75 m）、円丘部径 110 歩（156. 75 m）、方形壇前面幅 55 歩（78. 375 m）、クビレ部幅 40 歩（57 m）で、側面ラインはバチ形に開き始める起点までは直線である。

第 68 次・81 次・109 次・118 次調査位置を示したが、これは前方後円形となった後期箸墓古墳（現在の墳形）の調査位置である。第 81 次では基段状の葺石と周溝状落ち込み（内濠？）が検出され[7]、第 109 次では渡り堤[8]、更に第 118 次では地山整形の跡（基段？）と周溝状落ち込み（内濠？）が確認されている[9]。

図に示したように円丘部５段目外周には幅１歩（1. 425 m）の小テラス（図では円丘第５テラス）が全周し、その内側に高さ１歩で急峻な法面をもつ「積石低壇」が存在すると考えている。書陵部紀要[10] からもその状況が窺え、執筆者は「最上段は広いテラスの内側に截頭円錐状に築かれ、その上面は径 17 mの円形の平坦面をなす」としている。それは図３・図６の地図（102 mコンター）によっても確認できる。円丘第５テラスとしたが、墳頂にある径 17 mの「積石低壇」を区画するための平坦面と思われ、事実上テラスではあるが、箸墓各段のテラスに比べて極端に狭く、テラスには含めず「区画平坦面」と考えている。つまり６段目に相当する積石低壇は、埋葬主体を覆う大量の石積みで整形されていた蓋然性が高い。

（３）後期箸墓古墳（前方後円形）

図５は前期箸墓古墳に追加築造され前方後円形となった後期箸墓古墳である。紙吹雪文様の部分が拡大延長された追加築造部の傾斜面葺石で４段築成である。この図から第 68 次・81 次・118 次調査位置をみると、築造の前段階で施行された地業（地山整形・根切り・低地栗石盛土・葺石等）による基段が存在していたと推定される。第 81 次調査Ｗ－３トレンチでは盛土底辺を根石で固め葺石整形した基段の一部が検出されている。上面レベルを均一にするための基段延長が存在するとすれば、地山レベルの高いクビレ部付近で消滅する可能性がある（図５の前方部北側の破線）。担当者の寺沢薫氏もほぼ同様の見解を示している[11]。第 118 次調査でも地業（地山整形）の跡が検出されているが、纒向川の氾濫によって全容は不明である。担当者の橋本輝彦氏は、前方部西南端の墳形が現在のように変形（図３・６参照）している

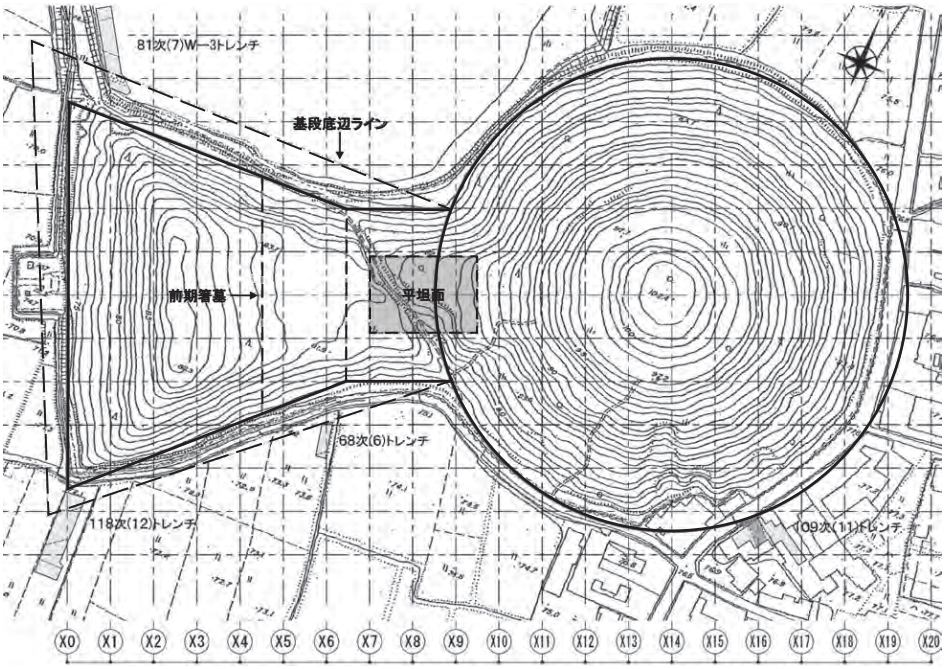


図６　現状平面図と復元案重ね図［苅谷 2015 より、加筆修正］

のは氾濫の影響と考えられることを指摘している[12]。

前方部４段目上面は、書陵部紀要[13]によると南北長 50 m・東西幅５mの平坦面となっている。この平坦面とそれに続く東側の緩斜面南側から多量の二重口縁壺片・二重口縁壺形埴輪片が出土している。円丘部と前方部とでは祭式に違いが認められ、前方部での祭礼は桜井茶臼山古墳の後円部方形壇を廻る二重口縁壺配列に先行する要素をもつ。こうした点からも、やはり前方部は時間差を置いて追加築造されたと考えられる。後期箸墓古墳は、前期箸墓古墳方形壇のテラスに整合させ同角度で盛土延長し、緩やかな上り勾配をもたせて前方後円形にしている。そのためクビレ部幅が狭くバチ形に開く前方部が長大となる墳形を呈している。従って後期箸墓古墳は、円丘とクビレ部の長さ・幅は前期箸墓古墳（方形壇付円丘）に同じで、全長は 195 歩（277.875 m）、前方部前面幅 90 歩（128.25 m）の前方後円形である。これに基段部（前方部北側の破線）を加えると前方部全面幅は歪で更に広くなり、墳丘主軸（Y6）より北側は約 58 歩(82.65 m)、南側は約 52 歩(74.1 m)で計 110 歩(156.75 m）となり、歪だが円丘部径と同じ数値となる（図６参照)。

（４）現状平面図と復元案重ね図（図６）

前方部前面の地山標高は現在でも南側が高く北側がそれより約 2.5 m低い。従って、図６前方部外側の破線で示した基段底辺推定ラインは東西南北均等ではないため歪な形となっている。この基段も方形壇付円丘の前期箸墓古墳基段の延長と考えている。

実線は後期箸墓古墳の底辺で、長い南北破線までは前期箸墓古墳を踏襲したもので前期箸墓古墳の方形壇底辺である。短い南北破線は同３段目底辺である。破線で囲った網掛け長方形範囲は前期箸墓古墳方形壇頂の平坦面で、後期箸墓古墳でも維持されている。この方形壇は、Ⅳ章で述べた「郊祀・封禅の一体化」による「禅祭」を執り行った場であり、「封拝」の場は円丘頂部である。

しかしここに疑問が生じる。それは（２）項で記した円丘頂にある径 17 mの不正円形（102　mコンター）が主体部を覆う「積石低壇」（実質６段目）であれば、年一度の重要祭礼「封拝」を埋葬主体の上で執り行うことになり、それは先ずあり得ないと思われる。それについては次のような解釈が成り立つ。

５段目は、底径 30 歩（42.75 m）・高さ３歩（4.275 m）・頂部径 15 歩（21.375 m）の平坦面であり、ここで「封拝」が執り行われていたが、統合体倭国王（親魏倭王）の死を受けて、５段目中央部に墓壙を掘り込み埋葬し、埋葬主体を覆うために５段目頂部外周に幅１歩（1.425 m）の区画平坦面＝小テラス（図　４・５の円丘第５テラス）を廻らせ、その内側に高さ１歩（1.425 m）で急峻な法面をもつ積石低壇を築いた。

第２段階で「埋葬主体部と積石低壇・御魂屋」をもつ墓廟となる。従って「封拝」を行っていた前期箸墓古墳と「積石低壇」の間には、ある程度の時間差があったと考えられる。渡邉正氣氏の寿陵説[14]は、先行築造された方形壇付円丘の前期箸墓古墳を指すとすれば可能性をもつ。

『魏志倭人伝』の「～略～卑彌以死大作冢徑百餘歩～

略～」の記述を、渡邉正氣氏の寿陵説に従って詳細に検討すると、親魏倭王（統合体倭国王）の卑弥呼は、中国の国都概念の導入・模倣に従って「郊祀・封禅＝天地合祀」の場と、親魏倭王（統合体倭国王）としての自分自身の墓廟を一体化して寿陵とすることを、生前に決断していたと考えられる。それが「卑弥呼、死を思い大いに冢を作る」の一節の実態であろう。

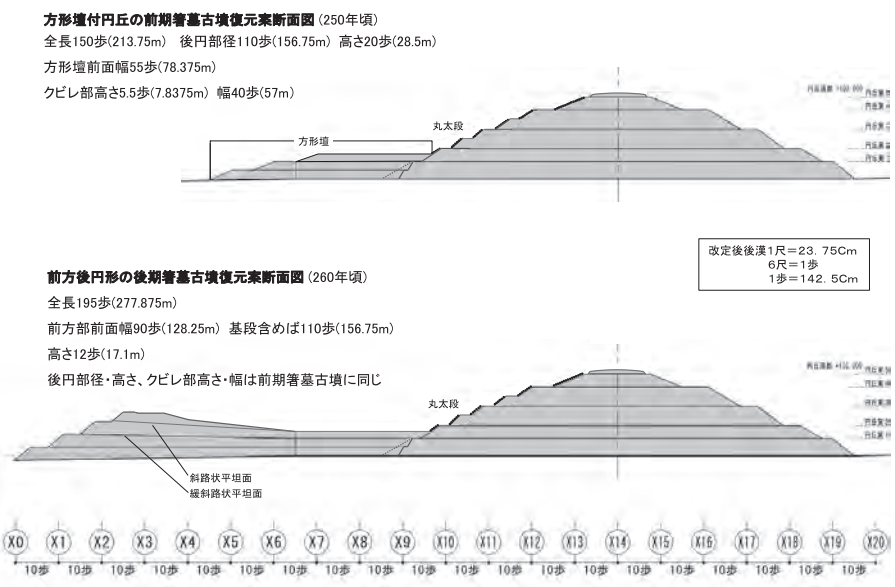


図７　前期・後期箸墓古墳復元案断面図［苅谷 2015 より、加筆修正］

統合体倭国王が埋葬された時点で、中国王朝の国都概念と国家祭礼を導入・模倣していた「郊祀・封禅」の祭礼は終焉を迎え、重要祭祀の場「方形壇付円丘」は、統合体倭国王の御魂屋を有する墓廟としての「埋葬施設」となったと考えられる。それはまた統合体倭国の「新政体樹立」の幕開けであったことを示唆している。つまり先述したように、統合体倭国の中でも権力集中がより鮮明になった「ヤマト王権黎明期」にあたる。先行築造された前期箸墓古墳（方形壇付円丘）は、第４段目テラス幅・５段目傾斜角から考えると４段築成の可能性もあり得る。各段の高さ・径・傾斜角・テラス幅等の詳細は後述する。

（５）前期・後期箸墓古墳復元案断面図（図７）

図７の上図は方形壇付円丘の前期箸墓古墳復元案の断面図である。方形壇は低平な３段築成で、最上面は平坦で円丘部２段目の傾斜面の中ほどに接合する。この方形壇最上面がⅣ章で述べたように、「郊祀・封禅の一体化」における「禅祭（地を祭る儀礼）」を行った場となる。

円丘部は、東側（図の右側）が５段築成で、西側の「禅祭」を行った方形壇３段を合わせると、断面図では見かけ上９段となるが、これは４段目傾斜面の中間まで基壇が築かれ丸太段が設置されていたためである（図４・５参照）。統合体倭国王（親魏倭王）はこの木段を登り、頂部の平坦面で最も重要な祭礼「封拝（天と祖霊を祭る儀礼）」を執り行ったと考えられる。

統合体倭国王（親魏倭王）の死を受けて、今まで「封拝」を行っていた頂部の平坦面に墓壙を掘り、埋葬主体を覆うための「積石低壇」を設けた（見かけ上６段）。この時点で、中国王朝の国都概念と国家祭礼を導入・模倣していた「郊祀・封禅」の祭礼は終焉を迎え、重要祭祀の場「方形壇付円丘」は、統合体倭国王（親魏倭王）の御魂屋を有する墓廟としての「埋葬施設」となったと考えられる。

前期箸墓古墳は、中国王朝の国都概念と国家祭礼を導入・模倣し「郊祀・封禅の一体化」として築造された祭礼色の強い古墳であったものと思われる。

図７の下図は前方後円形となった箸墓古墳である。前方部を追加築造した理由としては、憶説ではあるが次のような二つのことから推測される。その一つは、『魏志倭人伝』の卑弥呼（親魏倭王＝統合体倭国王）死後の記述である。

「～略～卑彌以死大作冢徑百餘歩～略～更立男王國中不復更相誅殺當時殺千餘人復卑彌呼宗女壹（臺）與年十三爲王國中遂定～略～」

（卑弥呼は死を思い、大いなる塚を作った。直径百余歩。～略～復、卑弥呼の宗女台与、年十三なるを立てて王と為す。国中、遂に定まる）

の記述からである。

台与は親魏倭王＝統合体倭国王卑弥呼の「宗女」であり、正統の血縁を有した少女である。この宗女台与を王とすることで国中が定まったということは、親魏倭王＝統合体倭国王卑弥呼の超越的霊威が強く影響している。台与も巫女であろうが、王となっても個人名の「台与」

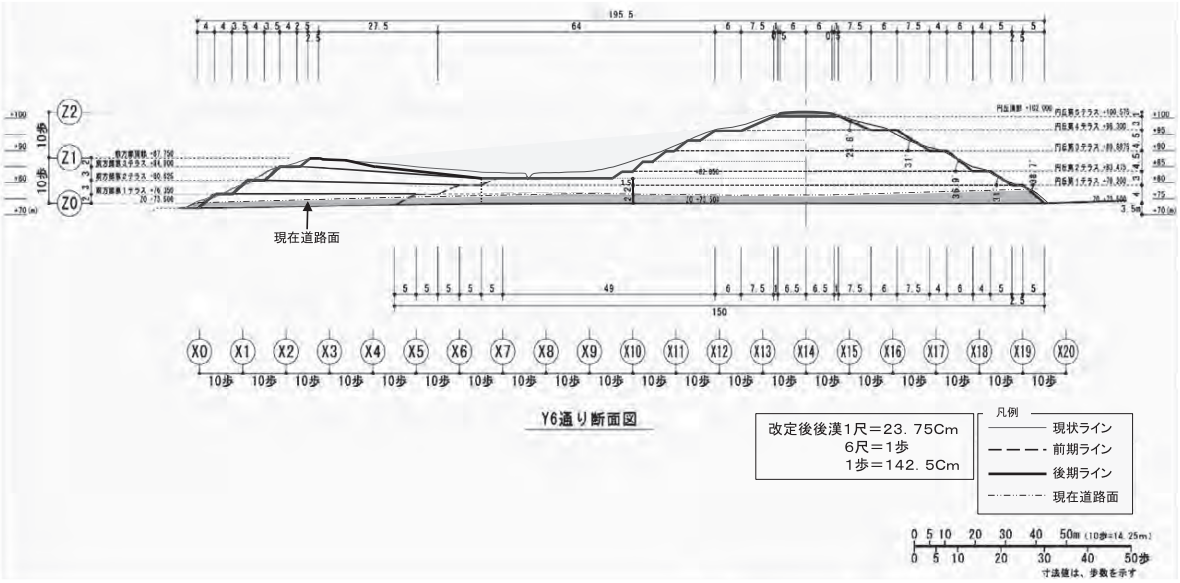


図８　前期・後期箸墓古墳復元案断面図と現状墳丘重ね図［苅谷 2015 より、加筆修正］

であり、「卑弥呼」は個人名ではなく最高司祭だけを指す尊称「特定巫女＝ヒメミコ＝卑弥呼」として呼ばれた女性である。卑弥呼と台与には権力・地位において格段の差がある。言い換えれば台与は卑弥呼の宗女という社会的身分で、宮殿遷移・豊穣祈願等の巫術や祭事に専念した「代表巫女」で、祭祀のみを司る「傀儡的王」であったと考えられる[15]。

13 歳で王となった宗女「台与」の在位は、250 年頃～260 年頃までの十年余という短期間で、役目を全うして（主に宮殿遷移祭事）死んだと考えている。そこには巫女としての宿命があろう。

台与が短命であったことは『晋書』巻三武帝紀泰始二年十一月五日（266）の条からも十分に推測される。「～略～倭人来献方物。～略～」とあり、「女王」とも「臺與」とも記されていない(Ⅳ章を参照)。この時の記述を、女王となった台与からの使者であるとするのは『日本書紀』に影響された誤謬である。

箸墓前方部の追加築造は、あくまでも「統合体倭国王(親魏倭王)」―「特定巫女＝ヒメミコ＝卑弥呼」の宗女「台与」を合祀埋葬するためである。宗女台与は、最後まで卑弥呼の霊威の庇護のなかで存続した女性であったことがわかる。

正統の血縁を有する二人の「巫女王」の埋葬主体があるのは箸墓以外になく、極めて特異な古墳であり、こうした事象も『日本書紀』に記された「日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。～」の要因の一つである。

但し、前方部と後円部には権力・地位における格段の違いと時間差が表れている。言う迄もなく先行築造の後円部頂には「卑弥呼」、追加築造の前方部頂には宗女「台与」である。

前方部は４段築成で頂部には幅４歩（5.7 m）、長さ 17 歩（24.225 m）の平坦面が存在する（図４・５参照）。おそらく前方部埋葬主体を葬具（二重口縁壺等）・柵列？で区画した聖域（禁足地）であろう。喪葬儀礼の場はその東（図７では右側）の一段低い平坦面（長さ 25 歩＝35.625 m、幅８歩＝ 11.4 m）で行われたと考えられる。

（６）前期・後期箸墓古墳復元案断面図と現状墳丘重ね図（図８）

図８の細い実線が現在墳丘ライン、破線は前期箸墓方形壇ライン、太い実線は後期箸墓ラインである。下部の二点破線ラインは現在道路面で、それより下の網掛け部分は、現在道路下の地中に埋もれている１段目である。南側の前方部先端付近は、前方部１段目が道路面より約 2.5 mの高さで確認できるが、クビレ部付近では現在道路面と重なり、そこから目視できる段は前方部２段目（前期箸墓古墳の方形壇２段目）で、円丘部１段目と整合する。目視するのは難しいが、その上の段が前方部平坦面（前期箸墓古墳の方形壇頂部）の３段目で、バチ形に開き始めるところから緩やかな上り勾配となっていく（テラスは斜路状平坦面）。

2003 年の拙論で墳丘側面は２段築成である[16] とした誤認は、こうした複雑な段築構造と、箸墓築造に先立つ地業段階で基段となる平坦面は構築しているが、東高西低の地形を均一レベルにする基礎工事が行われなかったと考えている。現在でも約 5.5 mほど東側（円丘部東端）の方が高い。

前期箸墓古墳・後期箸墓古墳の墳長・高さ、円丘部各段の傾斜角・高さ・テラス幅等を記しておく。

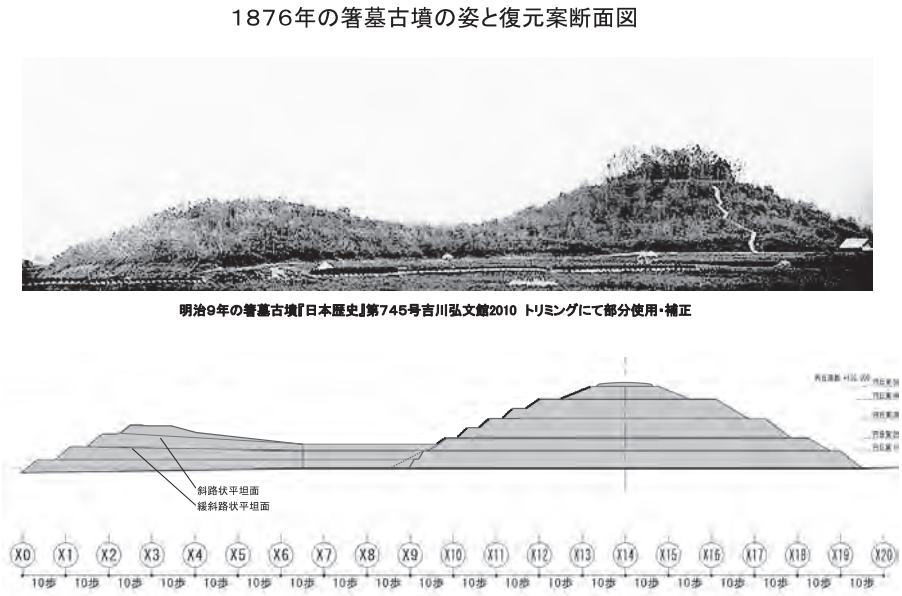


図９ 後期箸墓古墳復元案断面図と明治９年撮影の箸墓古墳対比図［苅谷 2015 より、加筆修正］

＊前期箸墓古墳（方形壇付円丘）

墳長 150 歩（213.75 m） 円丘部径 110 歩（156.75 m） 高さ 20 歩（28.5 m） 方形壇全面幅 55 歩（78.375 m） クビレ部高さ 5.5 歩（7.8375 m） 同幅 40 歩（57 m）

＊後期箸墓古墳（前方後円形）

円丘部径・高さ、クビレ部高さ・幅は前期箸墓古墳に同じ 墳長 195 歩（277.875 m） 前方部前面幅 90 歩（128.25 m）・基段含めば偏倚 110 歩（156.75 m） 前方部高さ 12 歩（17.1 m）

＊円丘部各段の傾斜角（基壇と木段のある前方部側は省く）・高さ・テラス幅は、以下の通りである。

	傾斜角	高さ	テラス幅
第１段目	38.7 度	4.0 歩（5.7 m）	2.5 歩（3.5625 m）
第２段目	31.0 度	3.0 歩（4.275 m）	4.0 歩（5.7 m）
第３段目	36.9 度	4.5 歩（6.4125 m）	4.0 歩（5.7 m）
第４段目	31.0 度	4.5 歩（6.4125 m）	6.0 歩（8.55 m）
第５段目	21.8 度	3.0 歩（4.275 m）	3.0 歩（4.275 m）
第６段目	?	1.0 歩（1.425 m）	1.0 歩（1.425 m）

＊埋葬主体は実質６段目だが、幅１歩（1.425 m）の極小テラスと高さ１歩（1.425 m）の急峻傾斜角のため極小テラスを「区画平坦面」、実質６段目を「積石低壇」として段に含めない。

（７）後期箸墓古墳復元案断面図と明治９年撮影の箸墓古墳対比図（図９）

写真は、南側の離れた位置から撮影された明治９年（1876）の箸墓古墳の全景である。後円部５段目は柵列によって区画され高木に覆われている。明治 12 年の『御陵図』（作者不明）では前方部側に向かって門扉が取り付けられていることも確認でき、この時点でも５段目が聖域視されていたことがわかる。５段目以外は人の手によって何度も刈込が行われたと思われ灌木（低木）のみとなっている。写真では段築の痕跡も辿ることができ原形をよく保っているが、テラス面が不明である（図９参照）。それに比べ、現在の墳丘は高木に覆われ前方部と後円部の比高差すら判然としなくなっている。

円丘部各段上面径は、第１段目 100 歩（142.5 m）、第２段目 85 歩（121.125 m）、第３段目 65 歩（92.62 m）、第４段目 42 歩（59.85 m）、第５段目 15 歩（21.375 m）、墳頂積石低壇上面 12 歩（17.1 m）となる。

第４段目上面径が 42 歩と端数になるのは、祭礼（封拝）の参列者の場として幅を広くとることと、底 30 歩（42.75 m）・上面径 15 歩（21.375 m）の神聖な第５段目（円壇＝親魏倭王のみによる封拝の場）を載せるためと解釈した。また、墳頂積石低壇も端数 12 歩（17.1 m）となるが、親魏倭王の埋葬主体との関係から生じたものと思われ、埋葬主体の大きさが優先された結果と考えられる。埋葬主体は 10 歩（14.25 m）と想定する。

前方部全面の各段の高さは第 1 段目 3.6 歩（5.13 m）、第２段目３歩（4.275 m）、第３段目３歩（4.275 m）、第４段目２歩（2.85 m）、その頂部は幅４歩（5.7 m）・長さ 17 歩（32.775 m）の細長い長方形平坦面を成す。

Ⅵ. おわりに

纒向遺跡の「宮殿域」は、後漢尺東西 90 歩×南北 60 歩＝ 128.25 m × 85.5 mで、纒向石塚古墳は、70 × 70 歩で一辺 99.75 mの方形区画内に築造されている。おそらく「阡陌」＝准望の可能性が高い。また、中国の国都概念の導入・模倣により「立春歳首」と三輪山との関係がある。中国の国都概念の導入・模倣は、大型建物Ｄの南北中軸線中心部より後漢尺 550 歩（784 m）の位置に箸墓古墳円丘部の中心が位置していることにも表れ、箸墓古墳が「郊祀・封禅の一体化＝天地合祀」として宮殿域の南郊外に築造されている。但し、建物の尺度は後漢尺ではなく、倭の伝統的建築色が強い（建物Ｃの近接棟持柱等）。

箸墓古墳は、方形壇付円丘の「前期箸墓古墳」と前方後円形に追加築造された「後期箸墓古墳」の二段階に分かれ、先行築造の後円部頂には「統合体倭国王（親魏倭王）＝特定巫女＝ヒメミコ＝卑弥呼」、追加築造の前方部頂には宗女「台与」の埋葬主体がある。ざっと以上のようなことを述べてきた。

【註記】

1）久野邦男・寺沢薫 1979「桜井市　纒向遺跡発掘調査概報 昭和 53 年度　辻 64-1 番地地点の調査」『奈良県遺跡調査概報 1978 年度　纒向遺跡発掘調査概報』 奈良県立橿原考古学研究所

2）渡邉正氣 2001「『魏志倭人伝』の「卑弥呼以死」の読みについて」日本考古学協会第 67 回総会研究発表要旨

3）苅谷俊介 2003「箸墓古墳の観察と纒向遺跡」『新世紀の考古学』 大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
　苅谷俊介 2015「箸墓古墳にみる倭国の変革」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』

4）岸俊男 1993『日本の古代宮都』 岩波書店
　寺沢薫 1984「纒向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第６号 吉川弘文館
　寺沢薫 2000「王権誕生」『日本の歴史』02 講談社

5）徳田誠志・清喜裕二 2000「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）個所の調査」『書陵部紀要』51 号

6）前掲註３）

7）寺沢薫 1995「桜井市箸墓古墳（纒向遺跡第 81 次）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所

8）橋本輝彦 1998「纒向遺跡第 109 次発掘調査概要報告」『平成 10 年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

9）橋本輝彦 2001「纒向遺跡第 118 次発掘調査概要報告」『平成 12 年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

10）笠野毅・土生田純之 1996「大市墓の墳丘調査」『陵墓関係論文集Ⅲ』 学生社

11）寺沢薫 2002『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第 89 集 奈良県立橿原考古学研究所

12）前掲註９）

13）前掲註 10）

14）前掲註２）

15）苅谷俊介 2016「共立された卑弥呼」『桜井市纒向学研究センター東京フォーラムⅤ　当日資料集』 桜井市纒向学研究センター　他

16）前掲註３）

【参考文献】

紙幅の都合で引用するまで至らなかったが、参考論文・資料名を挙げて各氏に御礼申し上げます。

石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一 1979「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』第 89 号 古代学研究会

椚國男 1975『古墳の設計』 築地書館

古賀登 1980『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』 雄山閣

呉洛 1970「中国歴代尺之長度標準變遷」『中国度量衡史』台湾商務印書中華民国

西藤清秀・藤井紀綱 2012『箸墓・西殿塚赤色立体地図の作成』奈良県立橿原考古学研究所・アジア航測株式会社

白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集

福辻淳 2014『ＨＡＳＨＩＨＡＫＡ－始まりの前方後円墳－』桜井市立埋蔵文化財センター

森岡秀人 2013「箸墓古墳の内部から見た纒向遺跡」『纒向学研究』第１号 桜井市纒向学研究センター

【図の出典】

図１　桜井市教育委員会 2014『纒向遺跡第 180 次調査現地説明会資料』に苅谷加筆

図２　奈良県立橿原考古学研究所 2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果 第 10 冊 に苅谷加筆

図３　松宮昌樹 2008「纒向遺跡第 146 次調査」『平成 18 年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 30 集 桜井市教育委員会 に苅谷加筆

図４～８　苅谷俊介 2015「箸墓古墳にみる倭国の変革」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』

図９　箸墓古墳写真:『日本歴史』第 745 号 吉川弘文館（2010）を改変
　苅谷俊介 2015「箸墓古墳にみる倭国の変革」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』

箸墓古墳研究の現在地

－ 2012 年以降の研究成果から－

塚　本　和　人

Ⅰ．はじめに

奈良県桜井市箸中に位置する箸墓古墳は、ヤマト王権の政治中枢だった可能性が高い纒向遺跡を構成する重要な遺跡である。定型化した最初の大型前方後円墳とされ、古代国家成立の鍵を握っているとみられる。その一方で、宮内庁が第七代孝霊天皇の皇女・倭迹迹日百襲姫命（やまととととひももそひめのみこと）の墓として管理する陵墓（倭迹迹日百襲姫命　大市墓）でもある。自由な立ち入りが禁じられるなど研究上の制約もある中で、これまでにも厖大な研究が積み重ねられてきた。とくに今世紀に入ってからは、最先端の科学技術を駆使するなど多様な手法によるアプローチも進んでいる。新聞記者である筆者は、ちょうど桜井市纒向学研究センターが発足した 2012 年４月から桜井市に隣接する橿原市に赴任し、本格的に文化財の取材を始めることになり、以来、箸墓古墳の研究動向に大きな関心を寄せてきた。纒向学研究センター発足 10 年の節目にあたり、この 10 年間の箸墓古墳の研究を整理し、その現在地を明確にした上で、箸墓古墳の誕生の意義やヤマト王権の成立過程についても検討する。

図１　箸墓古墳等高線図
［西藤清秀「箸墓古墳･西殿塚古墳の墳丘の段構成について」より転載］

Ⅱ．３次元航空レーザー計測による墳丘調査

奈良県立橿原考古学研究所の西藤清秀氏らは 2012 年４月、３次元航空レーザー計測システムを活用し、上空から箸墓古墳を測量し､赤色立体地図や等高線図（図１）を作成した[1)]。その規模が、全長 274.33 m、後円部径 153.9 m、後円部高約 26.5 m、前方部前面幅 124.98 m、前方部高約 17 mとなることが明らかになった。墳丘構造をめぐっては、後円部、前方部とも研究者によって見解が分かれていたが、従来の測量図と比べてより詳細な情報が得られたことで、後円部４段（墳頂の円丘部は含めない)、前方部は前面、側面とも３段であることが分かった。後円部の標高は最上部の円丘が 101.8 m、４段目が 96 m、３段目が 89 m、２段目が 82 m、１段目が 77 m、基底部が約 74 m。後円部の各段の高さは６m前後で設計されていた。

一方、前方部側面の段は平坦ではなく、前方部頂部から後円部への傾斜に合わすように段が造られていた。標高は３段目平坦面が 87.8 m、２段目平坦面が 82 m、１段目平坦面が 79 ～ 77 mで、基底部が約 71 ～ 69 m。前

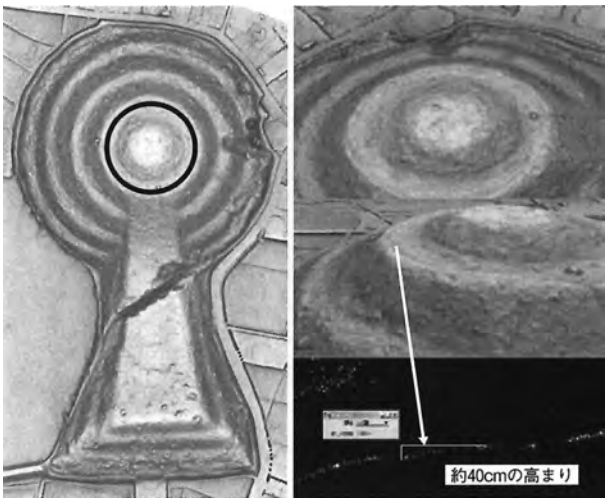


図２　箸墓古墳の後円部最上段の環状施設
［西藤清秀「箸墓古墳・西殿塚古墳の後円部墳丘上施設」より転載］

方部の各段の高さも６ｍ前後で設計されていたことが確認できた。このほか、箸墓古墳に続く古墳時代前期前葉の大型前方後円墳、西殿塚古墳（奈良県天理市、全長約230 m）に対しても、３次元航空レーザー計測が行われた。これまでも前方部と後円部の墳頂部に方形壇を有することは知られていたが、この方形壇を含めなければ、いずれも３段構造だったことが確認できた。

さらに、箸墓古墳後円部の最上段（４段目）の平坦面に、円丘面を囲むような環状の高まりの存在が赤色立体地図化で明らかになった[2)]。最上段の平坦面上に径 39. 08 m、高さ 4. 68 mの円丘があり、円丘を囲むように平坦面の端から約３mのところに径 53. 98 m、約 0. 41 mの高まりが存在していた（図２）。西殿塚古墳の後円部最上段（３段目）平坦面でも、その上の方形壇を囲む高さ 0. 3 mの環状の高まりの一部が確認された。

西殿塚古墳よりも造営年代が降るとみられる桜井茶臼山古墳（桜井市）でも、過去の発掘調査で後円部墳頂部に方形壇を有し、その周りに丸太垣で視界を遮るような施設が設けられていたことが分かっている。桜井茶臼山古墳の後に造られたとされるメスリ山古墳（桜井市）も、後円部最上段に方形壇を有し、それを囲むように埴輪列が存在することも分かっている。西藤氏は、箸墓古墳と西殿塚古墳の赤色立体地図で確認された後円部最上段の施設が、桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳にも受け継がれたとみている。

Ⅲ . 15 学協会による立ち入り観察

歴史学や考古学など陵墓関係 15 学協会による箸墓古墳と西殿塚古墳への立ち入り観察が宮内庁から許可され、2013 年２月 20 日に実施された。研究者たちは前方部西北隅から前方部北側面を東に向かって歩き、後円部を経て時計回りに一周した。参加した岸本直文氏の報告[3)]によれば、箸墓古墳への立ち入り観察で明らかになった点は、前方部側面のテラスの存在と、後円部４段、前方部４段である可能性が高まったことである。

箸墓古墳の立地地盤は緩やかに西南に下る傾斜地で、後円部側の裾部と前方部側の裾部では約４～５ｍの高低差がある。後円部側は比較的本来の姿をとどめるが、前方部は北側面と前面、南側面の前面寄りが削られて崖面となり、本来の古墳の端は陵墓地外にはみだしている。前方部南側面については赤色立体地図を見ると、中段上面テラスの下はひと続きの斜面のようだが、現地を観察した岸本氏は「下段上面テラスに相当する微妙な稜線が通ることが視認できた。幅のあるテラス面はないが、肩部に相当すると思われる張り出しが観察できる」と指摘し、南側面でも上段と中段は識別可能とみている。一方、最下段上面のテラスは傷みが進み、ほとんど実態がわからないという。前方部前面も墳丘斜面の改変があるとみられるが、前方部の削り込まれた大きな崖面の肩部を歩いたところ、崖下の周囲の地盤は低く、下段上面テラスから下位について長い一つの斜面と考えるのが難しいとみて、後円部の段築構造も考慮した上で前方部も４段に築成されていると考えるのが妥当としている。

Ⅳ．宮内庁の未公表資料の確認

筆者は 2012 年の夏、宮内庁が昭和 40 年代に実施した箸墓古墳の墳丘調査の資料を、同庁に対する情報開示請求を通じて入手した。宮内庁は昭和 40 年代に計３回、後円部と前方部の墳頂付近を発掘調査していた。1968 年（昭和 43）に行われた後円部墳頂付近の発掘調査の際に撮影された写真などの記録から、墳頂部の円丘が大量の石で覆われた状態だったことが分かった。筆者は 2012 年９月に朝日新聞紙面[4)]で紹介し、2020 年３月には『古代学研究』[5)]で詳細を発表した。

図３　「後円部頂石積　裾部」［宮内庁撮影］

図４　図３の裾部の拡大［宮内庁撮影］

開示された 68 年の調査資料はＡ４版便箋に記された手書きの文字資料（計５枚）と、Ａ４版の写真資料（計 14 枚）。宮内庁は 68 年 11 月 30 日～ 12 月１日の２日間、箸墓古墳の前方部と後円部の墳頂付近で発掘調査を行った。宮内庁書陵部に勤務していた福尾正彦氏によれば、調査前年の 67 年に近藤義郎氏と春成秀爾氏が論文「埴輪の起源」を著したことなどをきっかけに、箸墓古墳の墳丘内に立ち入ったり、中には掘ったりしている人もいるなどの噂が宮内庁に伝わり、墳丘の遺構の状態を確認し、保護するために調査が行われたという[6)]。

開示された後円部の写真と写真説明によれば、墳頂の上部や斜面は葉土などが除去されて表土が現れ、表土の下に大量の石が散乱していた。写真説明には「後円部積石（マウンド）斜面」「石積丘」「積石丘」と記され、宮内庁の調査担当者は後円部の頂上付近は大量の石が積まれた状態であると表現していた。墳頂からその裾部にかけて発掘調査が実施された模様で、「後円部頂石積 裾部（後円部の背部に当たる）」との説明がある写真（図３）からは、裾部から頂上に向けて大量の石が「積石丘」のように見え、裾部からは３枚の板石の一部がのぞいているのが見える。裾部を拡大した写真（図４）もあり、裾部から最上段の斜面が立ち上がる部分の構造に対し、宮内庁の担当者も注目していたことが分かる。

この板石については、古くから墳丘内や周辺に散在していることが知られており、板石が前期古墳の中心的な埋葬施設である竪穴式石室を構成する石材として使われるケースが多いこともあって、箸墓古墳の埋葬施設を竪穴式石室と想定した上で、盗掘された際に破壊されるなどで石室の石材が表面に露出したとみる研究者も少なくなかった。今回開示された宮内庁の写真にも円丘の裾部にはっきりと板石が写っており、後世に埋葬施設が破壊され、円丘がその石を積んで補修された可能性も指摘されていた。

その後、筆者は江戸時代末期に箸墓古墳を描いた絵図が存在することを知った。箸墓古墳は天皇陵ではないため幕末の修陵の際の『文久山陵図』に含まれなかったのであるが、下書きにあたる『文久山陵図草稿』には描かれていた。『草稿』は宮内庁宮内公文書館で保管され、

図５　箸ノ陵遠望　［『文久山陵図草稿之写』より］

図６　箸ノ陵　［『文久山陵図草稿之写』より］

図７　図６の後円部最上段付近の拡大（部分）

図８　1876 年に撮影された箸墓古墳［『大和御陵写真帖』より］

筆者は 2014 年７月、許可を得てその写しを閲覧することができた。

箸墓古墳を描いた絵図は、後円部を中心に前方部の一部が描かれた「箸ノ陵遠望」（図５）と、後円部頂上付近を描いた「箸ノ陵」（図６）の２枚。後円部頂上の円丘を囲むように柵列が造られ、柵列内の円丘の裾部や斜面に多数の板石が並べられているかのように描かれている（図７）。円丘の下のテラスの端にも板石が並んでいる。この幕末に描かれた後円部の頂上の多数の板石は、従来考えられていたような盗掘された埋葬施設の石材が散乱したものではなく、築造当時からも丸石や板石で構築された積石丘のような姿だった可能性を示唆している。

また、1876 年（明治９）に撮影された最古の古墳の写真とみられる『大和御陵写真帖』が宮内庁に保存され、その中に箸墓古墳の最古の写真が含まれていることも知った。筆者は 2014 年夏、宮内庁に開示請求して写真のコピー（図８）を入手した。福尾氏によれば、明治８年から奈良・東大寺で奈良博覧会が開かれ、翌年の明治９年に奈良博覧会社が奈良県内の陵墓を撮影した。その原板にあたるガラス湿板が宮内庁に残されており、デジタル化されて画像が復元されたという[7]。写真は墳丘南側から耕作地を挟んで撮影され、前方部と後円部が側面から写されている。後円部には頂上部に向かう「参道」があり、側面も５段の段築が残されていることが分かる。前方部もわずかな段築とみられる痕跡が見える。現在の箸墓古墳は樹木で覆われているが、墳丘の本来の姿を記録した貴重な資料である。

Ⅴ．特殊器台と埴輪の砂礫分析

68 年の調査では、後円部墳頂付近から特殊器台形埴輪片と特殊壺形埴輪破片が、前方部墳頂付近から壺形土師器破片が出土していた。宮内庁は 76 年に『書陵部紀要』[8] で報告したが、後円部で出土した特殊壺形埴輪は「岡山県芋岡山・立坂・向木見などの遺跡から出土している特殊壺の系譜をひく土器の形象化した埴輪」とし、特殊器台形埴輪についてもその文様構成などから「岡山県都月１号墳出土の例品に酷似している」とし、箸墓の出土品を「岡山県あたりとの強い交渉関係を抜きにしては、また理解することも不可能である」と指摘していた。

このの ち、宮内庁は98年9月の台風7号による倒木被害を受け、同年9月末から倒木が墳丘に与えた影響を確認するための調査などを実施し、後円部と前方部で遺物を採集した[9]。後円部墳頂付近で「宮山型特殊器台」を確認し、前方部の墳頂付近では二重口縁壺形埴輪のほかに瀬戸内海沿岸地域に系譜をたどれる複数の土器を確認した。後円部には特殊壺・特殊器台・特殊器台形埴輪が、前方部には二重口縁壺形埴輪が配列されたことがより明確になり、出土地点も後円部墳頂平坦面と前方部墳頂平坦面最高地点付近に集中することが分かった。

奥田尚氏は68年と98年に箸墓古墳でみつかった特殊器台形埴輪・特殊器台・特殊壺などの表面にみられる砂礫を観察し、砂礫構成を突き止め、製作地の推定を試みた[10]。表面にみられる砂礫について裸眼と、倍率20倍の実体顕微鏡による観察を通じて石種を同定し、個々の石種の粒形・粒径・量について目測した。その結果、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を中心とするⅠ類型、閃緑岩質岩起源とされるⅡ類型、斑糲岩質岩起源とされるⅢ類型、流紋岩質岩起源とされるⅣ類型に区分し、前方部出土の壺形土器・壺形埴輪はⅢ類型に、後円部出土の特殊器台形埴輪と特殊器台、特殊壺はⅠ類型、Ⅱ類型、Ⅳ類型に属することが分かった。Ⅰ類型とⅡ類型、Ⅳ類型の砂礫は奈良盆地東南部付近ではみられない砂礫構成で、Ⅰ類型とⅡ類型の一部の砂礫は岡山県総社平野の東部にある足守川流域の加茂付近の砂礫と酷似し、Ⅰ類型とⅡ類型の一部とⅣ類型の砂礫は総社平野のいずれかの地域の砂礫と推定された。一方、前方部出土の壺形土器のⅢ類型の砂礫は、箸墓古墳に近い桜井市茅原付近の段丘堆積層に含まれる砂礫に斑糲岩を砕いた砂礫と推定されている。

さらに、吉備地方を中心に出土した特殊器台と特殊壺の表面の砂礫を観察した結果、Ⅰ類型とⅡ類型、Ⅳ類型に区分され、少なくとも5カ所の砂礫の砂礫採取地が総社平野付近とみられることが分かった。箸墓古墳の後円部出土の特殊器台と特殊壺は、吉備地方で出土した特殊器台と特殊壺の砂礫構成と似ていることから、総社平野の砂礫を使って生産された可能性が高いとみられ、奥田氏は箸墓古墳前方部の壺形土器と壺形埴輪が桜井市茅原付近で、後円部出土の特殊器台と特殊壺は総社平野付近で生産された可能性が高いと指摘する。

Ⅵ．特殊器台と埴輪の型式学的分析

1967年に論文「埴輪の起源」を執筆した春成秀爾氏は、論文発表から50年を経た後、岡山県と奈良県でみつかった資料を再検討し、特殊器台の諸「型」を細分し、編年の再構築と援用を試みる作業を進めてきた。吉備と近畿との関係を論じるには特殊器台の型式変遷の十分な理解が必要とされるが、特殊器台の形態、とくに文様を重視した分析がないために型式細分が進まず、この問題の追究を難しくしていると考えたためだった。

春成氏は、岡山県総社市の宮山墳墓群で出土した「宮山型特殊器台」について詳細な型式学的検討を加えた。その結果、宮山型の内容が1型式内に収まらないため、細分化して、宮山墳墓群の特殊器台を「宮山式」と呼びかえ、その前後の諸型式を合わせて「宮山系」に含めることとし、諸型式の変遷の順を明らかにし、宮山系の中心が総社市の高梁川東岸の総社東部地域にあったとの考えを示した[11]。

さらに、1947年に岡山県倉敷市の向木見（むこうぎみ）遺跡で発見された「向木見型特殊器台」についても再検討を重ねた。宮山型と同じように、「向木見系」と改称した上で、倉敷市の足守川地域を中心に変遷したとする考えを発表した[12]。春成氏は、円筒埴輪の成立の道筋について、「埴輪の起源」以来の向木見型→宮山型→都月型埴輪とする学説を廃棄し、向木見系と宮山系とは系列は異なるが、備中南部の東と西の別々の地域で同時に併存していた関係にあるとし、都月系円筒埴輪は向木見系の延長線上に位置するとの見方を示した。

一方、総社東部地域を拠点とした宮山系については、円筒埴輪成立の道筋からは外れたが、宮山系の最後にあたる「弁天塚式」は大和の巨大古墳にのみ立てられていたという新たな仮説を立てた。宮山系特殊器台の最終型式と都月系円筒埴輪の初期型式は、いずれも大和の箸墓古墳と西殿塚古墳からもみつかっている。春成氏は「特殊器台と初期埴輪が内包する問題は、（箸墓、西殿塚）両古墳の被葬者と備中・備前との関係、ひいては初期倭政権の成立過程で吉備勢力が果たした役割を解明していくうえで重要な位置を占めている」と指摘した[13]。

箸墓古墳の被葬者の葬送儀礼が行われた際、遺体が埋葬される後円部頂では備中南部に起源をもつ高さ約

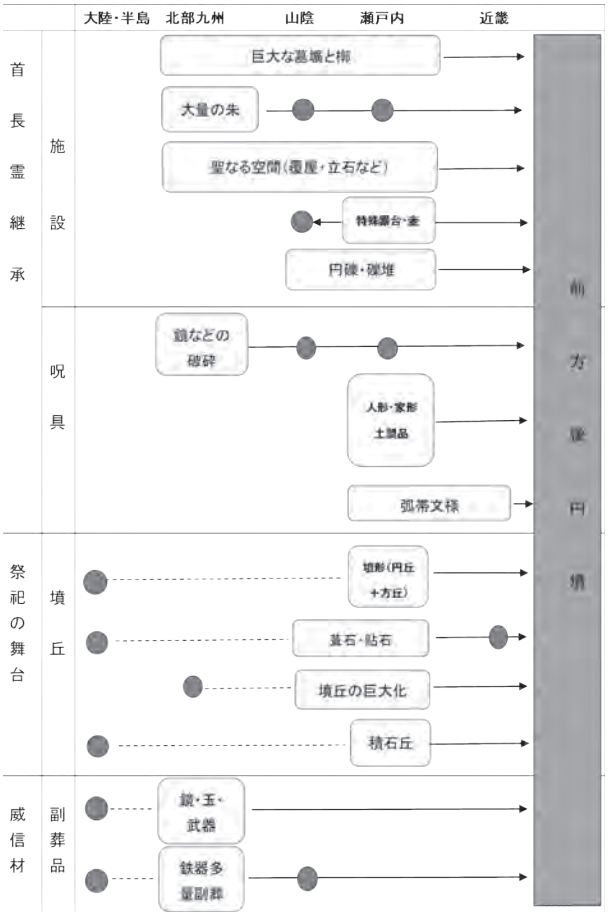


図９　前方後円墳への過程
［寺沢薫『王権誕生』に掲載の図を一部改作］

108 ㎝の真っ赤な特殊器台と、高さ約 126 ㎝の円筒埴輪がそれぞれの上に大きな特殊壺を乗せて並び立ち、一方の前方部頂では大和、備中、讃岐系の可能性もある大型壺形土器が並べられていたとみられる。春成氏は、特殊器台と円筒埴輪は、被葬者のアイデンティティにかかわる最も視覚に訴えるものと指摘した上で、「倉敷市楯築墳丘墓と墳丘上の弧帯石に代表される備中勢力との系譜的なつながりの存在と吉備南部の動きを抜きにして、箸墓古墳の研究を発展させることは難しいだろう」と論じている[14]。

Ⅶ．宇宙線ミューオンによる墳丘内部の調査

県立橿原考古学研究所の西藤清秀氏らは、宇宙線として空から大地に向かって降り注いでいるミューオンラジオグラフィーという素粒子物理学を応用し、箸墓古墳に立ち入らずに墳丘内部の透視画像を得ることを試みている[15]。西藤氏によれば、ミューオンラジオグラフィーは医療現場で使われている人体の内部を非破壊で外部から検出するレントゲン（X線）写真と原理は同じとされ、透過力が高いため、１キロ程度の大きさのものまで内部透視ができるとされる。2018 年 12 月から、フィルムを箸墓古墳の後円部に３カ所、前方部に１カ所設置し、フィルムを交換しながら計測を続けている。回収したフィルムはスキャニングと解析を進め、画像化を目指す。

Ⅷ．まとめ

箸墓古墳に対するこの 10 年の研究で明らかになった主な知見をまとめると、以下の５点が挙げられる。

（１）後円部４段、前方部３段（４段の可能性も）
（２）後円部最上段に円丘を囲む環状の高まりの存在
（３）後円部墳頂部の円丘は「積石丘」の可能性
（４）後円部出土の特殊器台形埴輪と特殊器台、特殊壺が、岡山県の総社平野の砂礫を使用して製作された可能性
（５）特殊器台と円筒埴輪の型式学的分析から、箸墓古墳を含めた前方後円墳の成立にあたって吉備勢力の象徴とそれを祠る人々を取り込んでいた可能性

寺沢薫氏は著書『王権誕生』でヤマト王権を誕生させた勢力の系譜をたどるなかで、前方後円墳を構成する諸要素をまとめ、その重要な部分が吉備や讃岐、播磨など中・東部瀬戸内海地域の要素で占められることを指摘した[16]。図９は寺沢氏が作成した「前方後円墳への過程」をベースに筆者が一部を追加・削除して改作したものだが、山陰と瀬戸内の要素の多いことが明瞭である。春成氏の指摘するように、箸墓古墳を造営した際、瀬戸内地域の中でも墳丘の形や特殊器台・壺などの共通性から吉備が強く関わったことは確実だろう。寺沢氏も『王権誕生』の中で、ヤマト王権の権力母体について「『築、備、播、讃』などの西日本各地の部族的国家連合による連合政権」とする見方を示した上で、「前方後円墳の原型が楯築墳丘墓に求められる以上、そのキャスティングボートを握ったのは『キビ』国だった。イニシアティブはキビ国連合とその息のかかった中・東部の瀬戸内地域が握っていた」と記し、吉備勢力の強い関与を指摘している。

宮内庁の開示資料からうかがえる箸墓古墳の後円部最上段の「積石丘」にみられる多量の石を積み上げる墓葬

スタイルは、古くから東アジア各地に広まっていた。一般的に、積石塚とは、盛土で墳丘を形成する古墳に対し、盛土のかわりに石材を用いる構造である。土生田純之氏によれば、積石塚が構築される事例は、地勢的な理由で石材を用いる以外に古墳の構築が難しい場合とみられ、主に北方の凍土や海岸、砂漠などの荒地で確認されることが多い。ただ、ある集団が何代にもわたって積石塚を造り続けた場合、意図的に積石塚を造る意識が形成されるようになり、たとえ盛土による古墳造営が可能な地域に移住しても、あえて積石塚を積極的に選ぶことがあるという[17]。

北東アジアでの積石塚の歴史は古く、中国東北部の遼河流域で発達した新石器時代の紅山文化の一つ、牛河梁遺跡で、前3650～前3150年の積石塚や積石の祭壇が発見されている[18]。その後も中国東北地域の墳墓は積石を特徴としていたが、秦漢交替期以降は高句麗で大きく発展し、さらに百済や新羅でも造られるようになる。

日本列島に目を向けると、西日本では阿波・讃岐・播磨などで積石塚がみつかっている。香川県東かがわ市の弥生時代の集落遺跡・成重遺跡では、37基の弥生時代中期と後期の集石遺構が出土している。発掘調査報告書によれば､そのうち墳墓とみられる遺構は５基とみられ、報告書は、上部の墳丘を多数の礫で覆う墳墓がのちの古墳時代前期に香川県の特徴となる積石塚古墳のルーツとなる可能性についても言及している[19]。類似例として香川県善通寺市の稲木遺跡、徳島県の桜ノ岡遺跡、足代東原遺跡などが挙げられる。さらに、吉備の楯築弥生墳丘墓では、埋葬施設の上部に円礫の集積（円礫堆）がみつかっている。この多量の円礫については、埋葬施設が埋め戻された後にその上部に積み上げ、その円礫の上に複雑な文様で飾られた「弧帯石」が被葬者の霊をとどめておくように置かれたとする見方もある[20]。

纒向遺跡では外来系土器が多く出土することが知られるが、その外来系のうち吉備の土器は全体の７％、播磨は３％を占める[21]。『日本書紀』崇神紀には、箸墓の造営事情が記され、「日（ひる）は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る」など、多量の石が使われていたことが象徴的に語られている。阿波・讃岐・播磨に広まっていた積石丘が、箸墓古墳でも最重要とされる後円部最上段に築かれたとすれば、箸墓古墳の造営主体や被葬者を考える上で、吉備とともに阿波・讃岐・播磨の勢力が果たした役割を積極的に評価すべきだと考えている。

弥生時代末期、吉備の勢力と阿波・讃岐・播磨の勢力との間には何らかの政治的な関係があったのか。そもそも、阿波・讃岐・播磨の３地域に政治的な連合があったのか。ヤマト王権成立の実像を探るためにも、列島各地の地域史研究の重要性をあらためて心に刻みたい。

【註記】

1） 西藤清秀 2013「箸墓古墳・西殿塚古墳の墳丘の段構成について」『橿原考古学研究所研究論集』第16 八木書店 pp41～51

2） 西藤清秀 2019「箸墓古墳･西殿塚古墳の後円部墳丘上施設」『古墳と国家形成期の諸問題 白石太一郎先生傘寿記念論文集』 山川出版社 pp15～21

3） 岸本直文 2013「箸墓古墳・西殿塚古墳への立入り」『ヒストリア』第237号 大阪歴史学会 pp137～146

4） 塚本和人 2012「箸墓 石積みの威容」朝日新聞大阪本社発行朝刊１面 2012年９月９日､塚本和人 2012「石積み頂上、高まる関心 奈良・箸墓古墳の宮内庁調査資料」朝日新聞大阪本社発行夕刊文化面 2012年９月12日

5） 塚本和人 2020「昭和40年代の宮内庁による箸墓古墳の調査資料について」『古代学研究』第224号 古代学研究会 pp21～32

6） 福尾正彦 2015「箸墓古墳像の再構築に向けて」『箸墓古墳』学生社 pp112～114

7） 註記６）の pp121～123

8） 中村一郎・笠野毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号（『書陵部紀要所収 陵墓関係論文集』学生社 1980年 pp200～208）

9） 徳田誠志・清喜裕二 2000「倭迹迹日百襲姫命 大市墓被害木処理事業（復旧）箇所の調査」『書陵部紀要』第51号 宮内庁書陵部 pp26～40

10） 奥田尚 2018「倭迹迹日百襲姫命 大市墓出土の祭祀に関係する土製品の砂礫構成と砂礫の産地」『書陵部紀要』第69号［陵墓篇］宮内庁書陵部 pp7～24

11） 春成秀爾 2017「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第37号 pp1～26

12） 春成秀爾 2018「向木見系特殊器台の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第212集 pp183～234

13） 註記12）の pp224～227

14） 春成秀爾 2018「箸墓古墳の特殊器台と埴輪」『季刊考古学』第142号 pp105～106

15） 西藤清秀 2020「宇宙線ミューオンと箸墓古墳」『日本書紀成立1300年 特別展 出雲と大和』東京国立博物館、島根県、奈良県 pp176～177

16）寺沢薫 2008『日本の歴史 02　王権誕生』講談社学術文庫 pp266 ～ 270
17）土生田純之 2017「日本列島における積石塚の諸相」『積石塚大全』 雄山閣 pp312 ～ 313
18）劉莉、陳星燦 2017『中国考古学』生活・読書・新知　三聯書店 pp183 ～ 191
19）香川県埋蔵文化財センター編 2005『成重遺跡Ⅱ』（第二分冊）香川県教育委員会、日本道路公団発行 pp48 ～ 49
20）岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2016『吉備の弥生時代』 吉備人出版 pp43 ～ 53
21）石野博信 2008『シリーズ「遺跡を学ぶ」 邪馬台国の候補地・纒向遺跡』 新泉社 pp20 ～ 24

太 鼓 考

橋 本 裕 行

Ⅰ．はじめに

弥生時代は、稲作農耕文化と考えられ、銅鐸などの青銅器やその模倣品および弥生絵画などからさまざまな農耕祭祀が執り行われていたと考えられている。

『魏志』「韓伝　馬韓条」には、「以五月下種訖祭鬼神、群聚歌舞飲食晝夜無休、其舞数十人俱起相随踏地低昂手足相應、節奏有似鐸舞、十月農功畢亦復如之」とあり、５月の播種の頃に鬼神の祭が行われていたという。この祭では､そこに集った群衆が昼夜休むことなく歌い踊り、または酒を飲み食事を共にした。数十人の舞手は、手足の動作を揃え、地面を踏みならしながら踊りに興じたようだ。『三国志』の編者である陳寿は、このような祭の節回しが鐸舞に似ていると記している。また、秋 10 月の収穫の時期にも同様の祭が行われたという。

５月の祭は、豊作を祈願する予祝行事、10 月の祭は豊作を祝う収穫祭（新嘗祭）であり、『魏志』「韓伝　馬韓条」に記されたこのような祭（以下、馬韓の祭と記述する）が、同時代の倭国においても執り行われていたであろうことは、金関恕を初めとする多くの先学によって指摘されている。

この祭の所作は、集団が手足の動作を揃えて舞うものであり、中国新石器時代後期馬家窯文化期の彩陶舞踏紋盆に描かれた手を繋ぐ５人の人物の表現が、馬韓の祭の情景を彷彿とさせる。また、現在の中国雲南省に居住する少数民族の祭の舞が、馬韓の祭に通じるという指摘もある。

ところで、祭には太鼓・笛・鉦などの鳴り物（楽器）がつきものである。1912（明治 45）年に刊行された「尋常小学校唱歌」の一つである『村祭』の歌詞のなかにも「村の鎮守の神様の／今日はめでたい御祭日／ドンドンヒャララ／ドンヒャララ／ドンドンヒャララ／ドンヒャララ／朝から聞こえる笛太鼓」とある。

そこで、弥生時代の祭に使われた鳴り物（楽器）について考えてみたい。

Ⅱ．纒向遺跡の仮面舞踏

2007（平成 19）年に実施された纒向遺跡第 149 次調査で検出された土坑（井戸）内から土器や多数の木器とともに広鍬の身を加工した木製仮面が出土した。木製仮面は、長さ 26 ㎝、幅 21.5 ㎝、厚さ 0.6 ㎝を測り、目･眉･鼻・口の表現があり、実用の仮面と考えられている（桜井市教育委員会・(財）桜井市文化財協会　2007)。この仮面には、耳の表現はなく、また、顔面に装着するための紐などを通す穿孔もないことから手持ちの仮面と考えられる。石野博信は、この仮面について「民俗例では仮面には顔に付けたままのものと手持ちの面とがある。手持ちの面は、踊りながら、ある時はヒトになり、あるときはカミになるのだという。そのような舞踏が三世紀の纒向でおこなわれていたのだろうか。」と述べている[1)]。

また、この土坑からは、長さ約 47.5 ㎝の鎌柄、赤と黒の彩色が施されたモミ製の盾の小片が出土している。仮面を付けた舞手の存在と、鎌の柄、盾の３点セットを想定することで、弥生土器や土製品および銅鐸に描かれた盾と戈を持つ人物画との共通性が注目されている。また、春成秀爾や設楽博己は、弥生絵画に表現された盾と戈を持つ人物を中国古代の方相氏ではないかと推測している（春成 2004・設楽 2014 など)。

Ⅲ．シャーマン（司祭）について

方相氏については、設楽が整理しているように、鬼やらいの際に魔や鬼を祓うために登場する神、あるいはそ

の神に扮装する役目を担った人物を指す。弥生絵画に描かれた盾と戈を持つ人物は後者に当たり、この人物には仮面が必携であるという（設楽 2014）。

ところで、邪悪な者を寄せ付けない、または邪悪な者の侵入を阻むというような観念（＝辟邪）は、かつて北方ユーラシアに広く存在したシャーマンに通じるものがある。そこで、明治時代後半から昭和時代初期にかけて朝鮮半島・中国東北部・蒙古・シベリアを踏査し、当時大陸に実在していたシャーマンについての実地調査を行った鳥居龍藏の研究を通して、シャーマンについて整理をしておこう[2)]。

鳥居は、「私はこれまで既に発表した事もあり、また本書ですでに記した如く、日本の我々祖先が信じて居った宗教はシャーマン教（Shamanism）であったであろう。少なくともシャーマン教の一種であったであろうと思う」と言う。そして、「人類学上・文化史上から東北アジア民族の Asiatic religion あるいは Asiatic culture といえばシャーマン教がそれを代表して居る。日本に於いても、古い祖先の宗教はこの色彩が濃厚であるから、まず比較としてこのシャーマンを研究せねばならない」と主張している。

続いてロシア人のバンザロフ（Banzaroff）のシャーマンに関する研究を紹介している。

まず、シャーマンには、①宗教の奉持者、②医巫、③預言者という三つの職分があるという。

①宗教の奉持者＝司祭：

シャーマンは、神の意志を知り、供物を捧げ、祭礼・儀式を営み、この祭礼・儀式（＝祭式）によって神の意志を人に伝達する。この場合の祭式には、ａ公の祭式とｂ私の祭式があり、それぞれの内容は以下の通りである。

ａ公の祭式＝氏族全体の祭り・氏と氏との関係の祭り。

ｂ私の祭式＝一家族内の祭り。

②医巫：

祭式を行って供物を捧げ、祈りをなし、悪神・悪霊を退散させる。

③預言者：

未来の吉凶を預言する。その際に占いを行うが、その方法は、羊の肩の骨を焼いて、そこに現れた罅隙（カゲキ＝亀裂）の形によって様々なことを判断するらしく、鳥居は日本の上代に行われた太占（フトマニ）と同じ性質であると指摘する。また、矢の飛び方によって判断する場合もあったらしい[3)]。

続いてシャーマンの変質について、以下のように述べている。

「……公の祭式に於いて供物を奉るというような場合には、時にはなお専門の男又は女の巫（ミコ）・覡（カンナギ）があって、これを司って居る。併し一般の俗人も、ブリヤート（バイカル湖周辺に居住するモンゴル系民族）の中では、祭式を勤めることになって居る。公又は私の祭式の時に、氏の長（ヲサ）、又は家の長（ヲサ）が勤めることがある。巫・覡にたのまないで、氏（ウジ）の長者又は家長が祭式を行うようになったのは、シャーマンの制度がよほど低下して喇嘛（ラマ）教の入り来った関係でそうなったのであろうと思う。」

そのうえで、シャーマンとは、如何なるものか、また、実際の行動などについて、以下のように述べている。

「シャーマンを比較宗教学からいうと、Magico-religious dualism（魔術的宗教の二重性）である。すなわち神秘的な祈りや祭式を行い、霊又は神に善・悪の二類を立てて、神とすれば善神・悪神であり、霊とすれば、人に幸を与える霊・悪い禍津見（禍津日・マガツヒ＝悪霊）とである。かように二元論の形をなしているが、ウラルアルタイ民族の内で最も面白いところは Yakut（トルコ人）である。」

「このシャーマンはどういうことをするかというと、跳祭であって、すなわち太鼓・鈴などで囃し立てて踊り狂い、そして神憑りするのである。なお、結婚式などに臨み、総て食物の豊かに実ることを祈るし、病気を療す祈りもする。シャーマンの考え方では、人が病に罹るのを生理的のこととは考えないで、悪霊があってその人に憑いて、いわゆる物の怪（モノノケ）をなすのであると思って居る。故に病を療すには、この悪い霊を体内から引き出し、退散させる必要がある。すべてかようにシャーマンの行われて居る国では、病気を生理的に解釈せず、悪霊・悪神の仕業と考えて居るのである。難産であったり、食物がよく穫れなかったりするのは、皆悪霊がその原因となって居ると信じられて居る。」

シャーマンの言葉の意味については、「すなわち Saman は満州語であって、興奮する所のもの―挑発する者・刺戟する・動く者・引き起こす者の意味である。ツ

ングース語の Samman（Shaman と発音する）Hamman は等しい意味を有つ。」そして、「以上の理由からシャーマンの本質は神経質狂喜や失神等の性質を有する。婦人は男子よりも頗る甚だしい感情・発動・感愛・昏迷等の癖がある。」とし、「ツロシュチャンスキー氏の如き結論を採用して考えると、婦女は男子よりも自然に多くのシャーマン化することが出来るのである。」という。

さらに、鍛冶とシャーマンの関係について、「女性シャーマンの上衣・外套の装飾品を作る鍛冶（カヌチ）はあるシャーマン的な力を得られる。すなわち彼は Magic に必要大切なる鉄と接触する事によって力が得られるのである（中略）。シャーマンと鍛冶との神命の職業の間の類似はよく似て居る。特別に鍛冶の神よりの招呼は等しい家族の多くの子孫を通して伝来する。鍛冶はシャーマンの兄である、而して彼らの間の相違は遂に無くなって鍛冶はシャーマンとなった。然るに女子は鍛冶ではなかった故に、遂にその位置を男子に取らるる事となったのである。」とし、シャーマンの職能が女性から男性に移った理由を述べている。また、「日本の上代には鍛冶は祭祀と附き物であって、これに必要なる鏡・剣・鉄鐸（サナギ）・鈴等を作って居る。又、彼らの祖神もある。これは併せて考えねばならぬ。」と示唆する。

上記長々と鳥居の文章を引用してきたが、鳥居が紹介したバンザロフ（Banzaroff）によるシャーマンの三つの職分のなかで、方相氏は医巫（祭式を行って供物を捧げ、祈りをなし、悪神・悪霊を退散させる）に該当するのであろう。

Ⅳ．盾と戈を持つ人物画

盾と戈を持つ人物画については、古くは模擬戦を描いたものと解釈されてきた[4)]。

中村徹也は、広島県宮ヶ久保遺跡から出土した多数の木製武器形祭器を紹介する中で、「戦斗の相手、戦斗の目的そして戦斗の規模が新たになるに応じて、戦斗儀礼は、ある種の華やかさとその頻度を増し、その都度新たなる武器形際器が儀器として登場し、その需要は木製儀器を生み出したのではないだろうか。」と述べ[5)]、弥生時代に木製武器形祭器が模擬戦に使用されたことを示唆した。また、中村友博も「祭祀で執行される戦闘は、模擬戦である。」と明快に述べている[6)]。

図１　中国雲南省滄源崖壁画の盾と長柄の武器を持つ人物画

盾と武器を持つ人物画は、中国雲南省臨滄市の滄源佤族自治県内に所在する滄源崖壁画のなかにも見ることができる。滄源崖壁画の制作年代は、今から約 3000 年前と推定されており、赤色顔料を用いて、当時の人々のさまざまな生活の情景が描かれている。滄源崖壁画第６地点第６区には、向かって左側の手に盾を持ち、右側の手に長柄の武器（矛）を持つ人物が描かれている（図１）[7)]。陳兆复は、この人物画について、「古代の文献では、この種の舞踏を武舞と称する。『周礼・楽師』が記すところの「執干戚而舞」がすなわちこれで、一種の模擬戦の祝賀顕彰の舞いといえよう。」と指摘している[8)]。干戚とは盾と鉞（斧）であり、「執干戚而舞」は盾と鉞（斧）を持って行う舞である[9)]。このように中国の岩画にみられる盾と武器を持つ人物画も、模擬戦を描いたものと解釈されている。

一方、小林青樹は『礼記』上の文章を引いて、別の解釈を試みている[10)]。

その文章とは、「仲夏の月、（中略）是の月や、楽師に命じて鞉鞞（しょうへい）の鼓を脩め、琴瑟（きんしつ）・管簫を均しくし、干戚・戈羽を執り、竽笙（うしょう）・篪簧（ちこう）を調べ、鍾磬・柷敔（しゅくご）を飭（ととの）へしむ。有司に命じて民の為に山川・百源を祈祀し、大いに帝に雩（う）するに盛楽を用ふ。乃ち百縣に命じて、百辟・卿士の民に益有る者を雩祀し、以て穀実を祈らしむ。」[11)]である。

鞉鞞の鼓は、鞉と鞞の鼓を指す。鞉鼓は振り鼓、鞞鼓は雷鼓である。琴瑟の琴は五絃の手琴、瑟は長大な二十七弦の琴である。管簫の管は特殊な笛、簫は管楽器である。戈羽の戈は戈（ほこ）、羽は舞人の指揮者の持ち物である。竽笙は同類で管楽器。篪簧の篪は笛の一種、簧は笛の舌である。柷敔の柷は打楽器、敔は木を磨り合わせて音を出す楽器である。

この文章の意訳は、「五月、（中略）この月、楽師に命じ、

楽器や舞楽の器具の手入れをさせる。天子はまた役人に命じて、人民の生活のために山や川の、すべての流れの本源の神を祭り、大いに、天に対して雩（雨乞い）を行い、賑やかに音楽を奏する。そして畿内百県に命令を発して、古来の、人民の生活に利益を与えた諸侯や卿大夫や士の霊を祭り、これにも雨を乞い、穀物の実りを祈らせる。」である[12]。

小林青樹は、この文章をもとに「先の絵画と古代中国の事例の検討から、「盾と戈をもつ人」は春から夏頃に自然界のよくないこと（旱魃や洪水など）を封じることを祈願する舞を伴なう儀礼で役割をもつとまとめることができる。」と指摘する[13]。弥生時代の盾と戈を持つ人物画の解釈として傾聴に値する。

Ⅴ．弥生時代の楽器

冒頭で、祭りには鳴り物がつきものと述べた。小林が指摘した『礼記』上の山川の祭にも、鞉鞞の鼓、琴瑟、管簫、竽笙、笹簧、柷敔などの楽器が登場する。これらは、弦楽器・打楽器・管楽器である。

翻って、弥生時代の楽器には如何なるものがあるであろうか。弥生時代の遺跡から出土した楽器として思い当たるのは、陶塤（土笛）・琴・銅鐸である。

陶塤（土笛）は、西日本の日本海側の遺跡から点々と出土しているが、いずれも弥生時代前期の所産である。横笛状の木器は、奈良県天理市星塚１号墳周濠出土のものが知られている[14]。星塚１号墳は６世紀代の築造と考えられ、それを遡る笛状木器は確認されていない。弥生時代に木製の笛（縦笛･横笛）は存在したのだろうか。

弥生時代の琴は、日本列島の比較的広い範囲から出土している。2012 年段階のデータであるが、弥生時代から古墳時代初頭の所産と考えられる琴の出土例は、14 府県 21 遺跡 37 例である[15]。その内訳は、以下の通りである。

千葉県１遺跡１例（国府関連遺跡・箱形・弥生後期～古墳初頭）、神奈川県１遺跡１例（三ツ俣遺跡・琴状・弥生後期～古墳初頭）、富山県２遺跡２例（下村加茂遺跡１例・箱形・弥生後期～古墳初頭、江上Ａ遺跡１例・箱形・弥生後期～古墳初頭）、石川県２遺跡２例（八日市地方遺跡１例・箱状・弥生中期、西念・南新保遺跡１例・箱形・弥生後期～古墳初頭）、福井県２遺跡２例（小稲津遺跡１例・箱形・弥生後期～古墳初頭、糞置遺跡１例・板状・弥生後期～古墳前期）、静岡県２遺跡５例（角江遺跡４例・板状２例・弥生中期・板状ミニチュア１例・弥生中期・箱形１例・弥生後期～古墳初頭、登呂遺跡１例・板状・弥生後期～古墳初頭）、三重県１遺跡１例（六大Ａ遺跡・箱形・弥生後期～古墳初頭）、滋賀県３遺跡４例（松原内湖遺跡１例・箱形・弥生～古墳、赤野井湾遺跡２例･箱形･弥生後期～古墳中期、柳遺跡１例･箱状･弥生後期～古墳前期）、大阪府１遺跡１例（瓜生堂遺跡･箱形・弥生中期）、奈良県２遺跡２例（四分遺跡１例・櫛状弦楽器・弥生後期～古墳初頭、谷遺跡１例・箱形・弥生後期～古墳後期）、鳥取県１遺跡４例（青谷上寺地遺跡・箱形・弥生前期～中期１例・弥生中期２例・弥生後期～古墳初頭１例）､岡山県１遺跡４例（南方（済生会）遺跡・板状・弥生中期）、香川県１遺跡１例（井手東Ⅰ遺跡・板状・弥生中期）、福岡県１遺跡３例（辻田遺跡・箱形・弥生後期～古墳初頭）である。

鳥取県青谷上寺地遺跡で、弥生前期～中期１例・弥生中期２例・弥生後期～古墳初頭１例が出土しており、琴は弥生前期から存在していた可能性があるが、多くの出土例は弥生後期～古墳初頭の所産である。

琴については『古事記』『日本書紀』『風土記』などの古代文献記載からさまざまな研究が行われており、ここでは紙幅の都合で割愛するが、総じて祭の際に神を降ろすために用いられた楽器と理解したい[16]。

銅鐸についても、菱環紐式から突線鈕Ⅰ式のいわゆる「聞く銅鐸」は、やはり天上に住まう神を降臨させるための祭の鐘であったと考えられる。

そのように考えてみると、琴や「聞く銅鐸」は、馬韓の祭のような賑やかな祭の楽器としては相応しくないように思われる。百歩譲って、祭の開始や終了の際に、厳かに琴が弾かれ、銅鐸が打ち鳴らされたのであろう。であるならば、馬韓の祭の光景に相応しい楽器は、賑やかに打ち鳴らされリズムをとる打楽器、つまり太鼓が相応しいように思われる。果たして、弥生時代に太鼓は存在したのであろうか。

写真１　群馬県天神山古墳出土太鼓を打つ男子埴輪

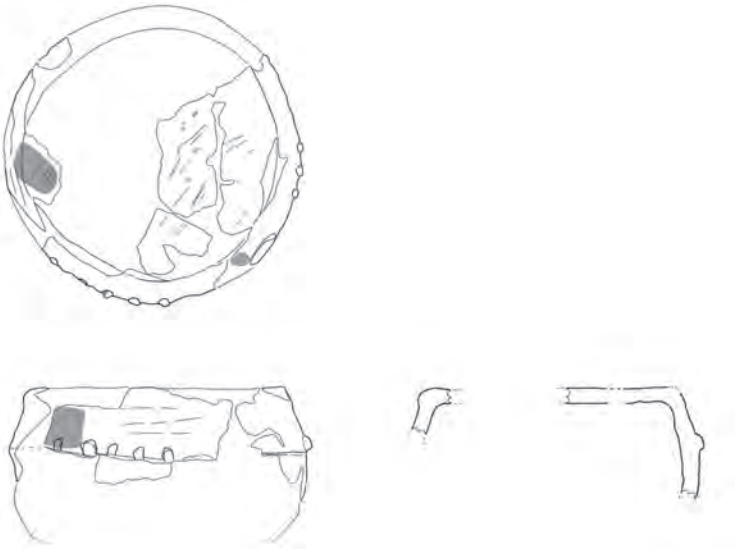


図２　宮崎県百足塚古墳出土太鼓形埴輪

Ⅵ. 太鼓の出土例

『木の考古学　出土木製品用材データーベース』を用いて､遺跡出土の太鼓を検索したが､該当例は皆無であった。木器としての太鼓の出土例は、未だ知られていないことになる。

しかし、古墳時代の太鼓の例は、埴輪に象られている。一つは、群馬県天神山古墳（佐波郡堺町上武士）出土の埴輪（「太鼓をたたく男子」・東京国立博物館所蔵・写真１）、もう一つは、宮崎県百足塚古墳出土の太鼓形埴輪（図２）で、いずれも古墳時代後期の所産である[17]。したがって、遅くとも６世紀代には、太鼓が存在したことは確実であるが、それを遡る類例は今のところ知られていない[18]。

果たして、弥生時代に太鼓は存在したのであろうか？

Ⅶ. 太鼓の代用品を考える

仮に弥生時代に太鼓が存在しなかった場合、それに代わる楽器は存在するのか。ヒントになるのは、『古事記』『日本書紀』に記された天照大神の天の岩戸隠れの場面である。

『古事記』では、「是を以ちて八百萬の神、天安の河原に神集いて、高御産巣日神の子、思金神に思わしめ、…」で始まる件りである。

思金神の計略は、①常世の長鳴き鳥を集め→鳴かせる、②天安河の河上で天の堅石（かたしわ）・天の金山（まがね）で鉄を取る→鍛人天津麻羅（かぬちあまつら）を呼び寄せ、伊斯許理度売命（いしこりどめのみこと）に鏡を作らせる、③玉祖命（たまのおやのみこと）に八尺の勾璁の五百津の御須麻流の珠を作らせる、④天児屋命と布刀玉命を招く→天の香山の真男鹿の肩を内抜き・天の香山の波波迦（朱桜）を取って占う、⑤天の香山の五百津真賢木を掘り、上枝に八尺の勾璁・中枝に八尺鏡・下枝に白と青の丹寸手（にぎて）を懸け祈祷、⑥布刀玉命→布刀御幣（ふとみてぐら）を取り持ち、⑦天児屋命→布刀詔戸言（ふとのりごと）を寿ぐ、⑧天手力男神→（天の岩屋）戸の掖に隠れ立たせる。

そして、天の岩戸の前で、天宇受売命（あめのうずめのみこと）が神懸りする。その光景は、「天の香山の天の日影（蘿・さがりごけ）を手次（たすき）に繋け、天の真拆（まさき）を縵とし、天の香山の小竹葉を手草に結い、天の岩屋戸に汗気（ウケ＝空笥（槽））を伏せ、踏み登杼呂許志（とどろこし）、神懸りして、胸乳を掛き出し、裳緒（もひも）を番登（ほと）に忍し垂れる。」というものであった。

一方、『日本書紀』では、

「時に、八十萬神、天安河辺に会ひて、其の祷るべき方を計ふ。」という件りで始まる。

思兼神の謀は、①常世の長鳴き鳥→長鳴き、②手力雄神→磐戸の側に立つ、③天児屋命（中臣連遠祖）・太玉命（忌部遠祖）→天香山の五百箇真坂樹を掘り、上枝に八坂瓊の五百箇御統（珠）・中枝に八咫鏡・下枝に青と白の和幣を懸け祈祷、④天鈿女命（猿女君祖）→茅巻の矟（矛）を持ち、天石窟戸の前で巧みに作俳優（わざおぎ）する。

天鈿女命の「作俳優」は、「天香山の真坂樹を鬘、蘿

（ヒカゲ・さがりごけ）を手繦（襷）とし、火處（ほところ）を焼き、覆槽を置（うけふ）せ、顕神明之憑談（かみがかり）す」る所作である。

『古事記』『日本書紀』に共通するのは、アメノウズメが槽（オケ）を踏みならしながら、踊っている姿である。この記述から、弥生時代の遺跡から出土した桶・槽・樽が太鼓の代用品であった可能性があるのではないだろうか。

Ⅷ. 桶・槽・樽の出土例

2012 年段階のデータで、弥生時代から古墳時代初頭の桶・槽・樽の出土例は、下記の通りである[19]。

①桶の出土例（14 県 42 遺跡 85 例）

千葉：１遺跡２例、神奈川：１遺跡３例、富山：３遺跡６例、石川：11 遺跡 22 例、福井：２遺跡２例、静岡：１遺跡２例、滋賀：１遺跡２例、兵庫：４遺跡 11 例、鳥取：４遺跡 12 例、島根：６遺跡 14 例、岡山：３遺跡３例、香川：１遺跡１例、高知：１遺跡１例、福岡：３遺跡４例。

②槽の出土例（25 府県 128 遺跡 519 例）

群馬：２遺跡 11 例、千葉：２遺跡 34 例、神奈川：３遺跡 13 例、富山：２遺跡３例、石川：13 遺跡 20 例、福井：４遺跡６例、長野：１遺跡１例、岐阜：１遺跡１例、静岡：23 遺跡 163 例、愛知：９遺跡 21 例、三重：２遺跡２例、滋賀：13 遺跡 86 例、大阪：12 遺跡 35 例、兵庫：３遺跡８例、奈良：８遺跡 20 例、和歌山：１遺跡１例、鳥取：３遺跡 19 例、岡山：４遺跡５例、香川：２遺跡５例、愛媛：２遺跡３例、高知：１遺跡１例、福岡：10 遺跡 46 例、佐賀：４遺跡８例、熊本：１遺跡５例、大分：２遺跡２例。

③樽の出土例（１県１遺跡１例）

福岡：１遺跡１例。

上記のように、弥生時代から古墳時代初頭の桶・槽・樽の類例資料は、関東から九州の各地に及び、桶・槽の出土数は非常に多い。弥生時代の桶・槽は日常の容器であり、その用途は貯水や「フネ」としての運搬具であったであろう。しかし、それ以外にも別の用途があった可能性を求めてみたい。

アメノウズメを前述の鳥居龍藏の文章と照らし合わすと、太鼓・鈴などで囃し立てて踊り狂い、そして神憑りするシャーマンに該当する。アメノウズメは、天の岩戸の前で、槽（オケ）を踏みならしながらリズムを取り、踊りに狂う。それを見た八百万の神々は、手を叩きながら笑いに興じる。まさに、賑やかな祭の一場面である。その喧噪に導かれて天の岩戸から天照大神が顔を覗かせ、タジカラオノカミによって引き出される。まさしく、神の降臨である。

アメノウズメが踏みならした槽（オケ）からは、トントコ／トントコと軽妙な響きが発せられていたことであろう。つまり、桶・槽・樽は、祭の場にあって太鼓の代用品として使用された可能性が考えられるのである。

Ⅸ. おわりに

纒向遺跡出土の木製仮面を起点にして、祭の音色について考えてみた。

弥生時代の音響具（楽器）の出土例は、銅鐸や琴を除くと以外に少ない。しかし、『魏志』「韓伝　馬韓条」の記述や絵画土器などを通じて、弥生時代に祭が行われていたことは間違いない。そして、馬韓の祭と同様の祭を弥生時代の人々が行っていたならば、必ずや鳴り物（楽器）が必要となる。声を合わせながら手拍子・足拍子だけでもよいかもしれないが、やはり鳴り物が欲しい。

弥生人にとって桶や槽は日常品であったと考えられ、それを叩けば音がする。太鼓の代用品としてはもってこいである、と考えた次第。

しかし、それを証明するためには、桶・槽の敲打痕跡を確認する必要がある。残念ながら新型コロナ感染症下で、資料調査もままならない昨今。願わくば、各地の研究者が、それぞれの地域で出土した弥生時代の桶・槽の敲打痕の有無を観察して下されば幸いである。

本稿は、2018 年８月４日に大阪府立弥生文化博物館で開催された講演会（「絵画から読み解く弥生の祭祀」）での発表内容の一部を再構成したものである。

【註記】

１）石野博信 2008、p. 48。

２）以下シャーマンについては、鳥居 1925、pp. 77-88 からの引用である。引用文中の（　）内、および下線などは筆者が加えたものである。

3）蛇足ではあるが、修験道では、屋外で護摩を焚く際に山伏が四方に立って矢を放つという儀式がある。これなども、ユーラシア大陸東縁のシャーマンの儀式に淵源をたどることができるのかもしれない。
4）金関恕・小野山節 1978 p. 176。
5）中村徹也 1977 p. 75。
6）中村友博 1987 p. 23。
7）汪寧生 1985 p. 53 図 50・p. 75 図 86、陳兆復 1991 p. 297 図 68-1。図 1 は、汪 1985 p. 53 図 50 より引用。
8）陳 1991 p. 297。なお、『周礼』「春官宗伯第三　楽師」には、「有干舞」とのみあり、その注が「執干戚而舞」である。陳の文章の訳は、筆者による。
9）滄源崖壁画の人物は、盾と長柄の武器（矛）を持っており、鉞ではない。おそらく陳は、鉞も矛も武器であるので、盾と武器の組み合わせを「干戚の舞」と理解したのであろう。ちなみに、矛と戈は、訓読みではどちらも「ほこ」である。矛は戈に通じる。
10）小林青樹 2008。
11）竹内照夫 1971 pp. 242-244。下線は筆者が加えた。
12）意訳は、註 11）文献による。
13）註 10）文献 p. 39。
14）泉武 1990。ただし、笛状木製品については、それを疑う意見もある。
15）伊東隆夫・山田昌久編　2012 をもとに集計した。その際、琴柱は除外した。
16）琴については、西本香子 1991 を参照されたい。
17）写真 1 は、国立文化財機構所蔵品統合検索システム（ColBase）J-20706 を加工して作成。図 2 は、新富町教育委員会 2015 p. 56 図版 37 から引用。
18）最近、大阪府今城塚古墳から太鼓形埴輪が 3 個体分出土し、最古の太鼓形埴輪として報道されている。
19）伊東隆夫・山田昌久編　2012 をもとに集計した。

【参考文献】

〈日本〉
石野博信 2008「邪馬台国の候補地　纒向遺跡」『シリーズ「遺跡を学ぶ」051』 新泉社
泉武 1990「星塚・小路遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財調査報告』4 天理市教育委員会
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学　出土木製品用材データーベース』 海青社
金関恕・小野山節　1978「武器装身具」『日本原始美術大系』第 5 巻 講談社
小林青樹 2006「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』20 p. 176
小林青樹 2007「弥生人の心象風景―絵画から見た景観・集落・祭場―」『栃木史学』第 21 号 國學院大學栃木短期大学史学会 pp. 23-63
小林青樹 2008「②盾と戈をもちいた儀礼」『弥生時代の考古学　7　儀礼と権力』 同成社 pp. 32-45
桜井市教育委員会・(財) 桜井市文化財協会 2007「纒向遺跡（第 149 次調査）出土の木製仮面」（記者発表資料）
設楽博己 2010「弥生絵画と方相氏」『史学雑誌』119-9
設楽博己 2014「日本列島における方相氏の起源をめぐって」『中華文明の考古学』同成社 pp. 324-353
新富町教育委員会 2015「百足塚古墳（新田原 58 号墳）新田原 62・63・209 号墳」『新富町文化財調査報告書』第 70 集
竹内照夫 1971『礼記』上（『新釈漢文体系』第 27 巻） 明治書院
鳥居龍藏 1925「薩滿教について（人類学上より見たる我が上代の文化）」『鳥居龍藏全集』第一巻 朝日新聞社
中村徹也 1977「宮ヶ久保遺跡出土の木製武器形祭器」『考古学雑誌』第 63 巻第 2 号 pp. 70-75
中村友博 1987「武器形祭器」『弥生文化の研究』8 雄山閣 pp. 23-30
西本香子 1991「「琴（キン）」と「琴（こと）」」『明治大学文学部紀要』28 pp. 273-288
春成秀爾 2004「日本の青銅器文化と東アジア」『国立歴史民俗博物館研究報告』119 pp. 31-49
春成秀爾 2007「日本の先史仮面」『儀礼と習俗の考古学』塙書房 pp. 55-101
横田憲一 1986「武事には金鐸を舞う：古代中国尾場合」『阡陵』13 関西大学考古学資料室 pp. 2-3
〈中国〉
陳兆復 1991『岩画発現史』（中国文化史叢書）上海人民出版社
汪寧生 1985『雲南滄源崖画的発現与研究』 文物出版社

それは「方相氏」か

－纒向「木面」評価の前提－

寺　沢　　薫

Ⅰ．はじめに－問題の所在－

弥生時代の土器や青銅器に描かれた人物像のなかに、右手に戈を持ち、左手には盾を持った人物がいる。なかには左右が逆とも戈以外の武器を思わせる図像もあり定かではないが、戈と盾の組み合わせが原則のようである。人物の頭に羽根飾りが付けられた例も多く、これも原則のようだ。

土器絵画ではこの像は、鳥らしき仮面と羽根飾りを付け、袂（たもと）や背には羽根や領巾（ひれ）（褖）のような布を靡（なび）かせて両手を高々と挙げる人物とともに現れる。マツリで演じられる二様のシャーマンの姿を描いたとの考えが一般的である。

私は、前者が稲魂に取り付く悪霊を退散させるために戦う男性シャーマン、後者は稲魂を鼓舞し霊気を増幅するために舞う女性シャーマンと位置づけた。それぞれが「農功」の始めと終わりの年二度のマツリに供じられたか、いずれでも演じられたかの重要な儀式の姿である[1)]。

この図像は、九州や東日本などでは古墳時代初期にもわずかに残存するようだが、古墳時代には原則、影を潜め、農耕儀礼は明らかに様変わりした。農耕儀礼が王権祭祀に取り入れられることはあっても、祭儀が単独で共同体＝国家をあげて政治的に執り行われることはなく、基礎的な小共同体や村落内での民衆レヴェルでの基層祭祀として存続していくことになる。

問題の第一は、この弥生時代の「戦うシャーマン」の系譜が中国古代の「方相氏」の実像や儀軌に辿ることができ、その思想や様態がそのまま弥生時代に入り込んでいたとする解釈が提起されたことである[2)]。その後、こうした理解は纒向遺跡出土の木製仮面（以下、「木面」と呼ぶ）の性格をも巻き込んで流布、喧伝され[3)]、とりたてて反論もなく定説化しつつある現状がある[4)]。

問題の第二は、この提言よりも先に、古墳時代の「盾持人」埴輪の原像が方相氏だとする説が存在したことである[5)]。研究史的にみれば、第一の解釈は第二の提案によって誘導された遡行的解釈と言うこともできる。古墳時代の埴輪の「盾持人」＝方相氏→「戦うシャーマン」→ 纒向遺跡の木製仮面という思考回路ができあがってきたと言ってもよい。

小論はそれぞれの問題点を整理してその可能性を模索し、ひいては纒向遺跡出土の木面をも方相氏関連の資料とする見解への再検討とするものである。

Ⅱ．「方相氏」とはなにか

（1）中国古代の方相氏

「方相氏」について記された初見は、秦漢初期の成立とされる『周礼』夏官・司馬・方相氏条である。「方相氏掌。蒙熊皮、黄金四目。玄衣朱裳、執戈揚盾。帥百隷、而時儺、以索室殴疫。大喪先柩、及墓入壙。以戈撃四隅。殴方良。」。方相氏とは、熊皮を蒙り 黄金四目を持ち、玄衣と朱裳を服して戈を執り、盾を揚げ、百隷を帥いて時に儺し、掌として室を索め疫を殴つ。喪儀では柩を先導して墓壙の四隅を戈で撃ち「方良」（悪鬼）を殴疫する呪師（巫者）である。

こうした喪儀での方相氏の動態については、後漢の張衡『東京賦』ですでに葬列も「巫覡操苅。倀子万童、丹首玄製。桃弧棘矢、所発無臬。」と変化し、7世紀の『隋書』礼儀志（北斉の令）では四品以上が四目の方相、以下は二目の魌頭の対応が規定されている。さらに唐初期の『朝野僉載』巻四には、「長大而黒」の方相が「衛霊公」と称して霊柩を防護、先導したとある。

また、10世紀の『太平御覧』巻五五二所引の宋・劉義慶撰の『幽明録』（5世紀前半）には、喪儀の葬列に

あって仮面を付けて方相に扮装した者や方相車の存在が知られる。西晋の司馬彪撰の『続漢書』礼儀志には「方相氏、黄金四目、蒙熊皮、玄衣朱裳、執戈揚楯、立乗四馬先駆」とあり、同書所引の『漢儀』には、陰太后が崩じた明帝永平七（64）年の記事として、方相車と鳳凰車の二車が葬列を先導したとされる。８世紀の『大唐開元礼』喪の器行序にも葬列での方相車の序列が示される。

一方、方相氏に対する同様の理解や表現は、むしろ後漢代以降に見える禁中での「大儺」儀礼に明確である。前出『続漢書』礼儀志や『後漢書』礼儀志、『論語疏』でも大儺には方相氏についての容姿や扮装には同様の記述があり、『隋書』礼儀志や『大唐開元礼』軍礼に見える「大儺」なども『周礼』の容姿や扮装、次第を忠実かつ精確に伝えている。後世の中国や日本で施行される「大儺」の説明根拠はいずれもこうした記事を典拠としていることが知られる。

また『周礼』帥百隷は、後漢の衛宏『漢旧儀』補遺巻下では「常以正歳十二月命時儺。以桃弧、葦矢且射之。赤丸五穀播灑之。以除疾殃。」「方相帥百隷及童女。以桃弧、棘矢、土鼓、鼓且射之。」へと展開している。晋の司馬彪『続漢書』礼儀志では赤頭巾に黒皮衣を付け大<ruby>鼗<rt>つつみ</rt></ruby>をもつ百二十人の侲子が付加される。

それとともに方相の形制じたいにも変化が見られる。『東京賦』では早くも方相の武器は戈から「秉鉞」となり、南朝（梁）の宗凜による６世紀前葉～中頃の『荊楚歳時記』には「胡公頭」[6]とともに金剛力士が「逐疫」を行ったとされるが、方相の面は黄金四目ではない。しかし、聶崇義撰『三礼図』（北宋・建隆二（961）年）に掲載される方相氏は、黄金四目、左執武器（戈ではなく棒状のもの）、右揚盾が表現されている。

ところで、『礼記』月令には季春之月（３月）に「命国儺九門、以春気。」、仲秋之月（８月）に「天子乃儺、以達秋気。」、そして季冬之月（12月）には「命有司大儺、旁（四方の門）磔。出土牛、以送寒気。征鳥厲疾、乃畢山川之祀及帝之大臣天神祇。」とあり、『呂氏春秋』「季冬紀」巻十二にも、「命有司大儺、旁磔。出土牛、以送寒気。」とあるように、国ごとの季春、季秋の陰陽のバランスが崩れるのを正し、国難を避けることが「儺」の本源的な意味であったと考えられる。

丁武軍に拠れば[7]、漢代になるとこの「三時儺」のうち、季春と仲秋の二つの国儺は軽視され、季冬の<ruby>臘<rt>ろう</rt></ruby>月に宮中で執り行う「卒歳大儺」がもっぱら中心となり、「歳終事畢、駆逐疫鬼、因以送陳迎新」の意味が大きくなるという。このことは、もともと各地（国ごと）で行われていた農功の狭間で行われていた本源的な「儺」が、少なくとも漢代には新年の境を以て国家的な「儺」として集約されたことを物語る。「方相氏」という役職や任官はこうした背景も契機として生まれた可能性は高い。

４世紀前半に東晋の干宝が著した志怪小説、『捜神記』巻十六では、方相氏の職責は疫鬼の駆逐であるとし、同じく巻九や『捜神後記』巻七には、怪神たる「両眼尽赤」、「身有光耀」、「目赤如火」、「磋牙吐舌」を「如方相」と記す。さらに、東晋から南朝代には民間にも広く拡大し、儺儀の世俗化は一層顕著となった。

宋代には、漢代の儀軌は踏襲するものの、道教的色彩が尊ばれ、道教の神々である鍾馗、神茶、鬱塁、竈神、儺翁、儺母などが方相氏と十二の神獣に取って代わって疫鬼駆除の主役となり、宮廷儺祭も強い世俗性を帯びていたことがうかがえるという。邪鬼を追う方相の役は貧窮者の職業と化し、方相氏は時に（ふたたび）追儺される立場ともなったという。

また山口建治は、<ruby>傀儡<rt>くぐつ</rt></ruby>・郭禿・鍾馗は語源的に同一の連綿語で、後二者は方相氏あるいはその後裔が「打鬼」する槌の先端が突起した桃杖・桃梗の形状に注目した呼称であり、傀儡は侵入する悪鬼を威嚇するために顔を大きく見せ、方相氏が被る仮頭・仮面の中空の形状に由来するという[8]。

（２）方相氏の図像

以上のように文献上の「方相氏」の様態は、古代にもいくばくかの変異はあるものの、その原型は『周礼』の①黄金四目、②被熊皮（熊や虎などの猛獣や怪獣の面体も含む）、③武器の佩用（盾、戈、矛戟、刀剣、鉞、弩など）、④玄衣朱裳、⑤大きく異形、<ruby>凶捍<rt>きょうかん</rt></ruby>な面体（竪眉露歯、竪大耳、怒目、頭上の突起や角、蹲踞体勢など）に求められる。

これらの多くを満足して明記された「方相氏」の図像は、先に挙げた『三礼図』（北宋・建隆二（961）年）に掲載された黄金四目、左執武器（戈ではなく棒状のもの）、右揚盾で表現された例が最古であろう。明代の『三

教源流捜神大全』巻七の方相氏の扮装もほぼこれを踏襲する。

極めて稀な、両面に顔をもつ漢代の明器俑（仏・セルヌーシ美術館蔵）の表裏の目数を合わせて①に見立てる考えもあるけれど、前面四目を表現した図像で溯行する例を知らない。しかし、②〜⑤の特徴をあえて抽出し、方相氏に関わる図像であるとの見解を示す事例は論者によって多数指摘され、明らかに漢代に遡る。

確かに「黄金四目」を不問に帰せば、こうした風体の鬼神とも呪者とも、また魑魅魍魎ともつかぬ疫鬼・怪人の類は画像石や画像甎、人物俑などに多数登場する。山東省大邑県董場郷の三国代の画像石（以下図１参照。ａ）は③と④の、後漢後期の山東省済寧市嘉祥県武氏祠後石室第三画像石三段目の怪人（獣）（ｂ）は②・③・⑤の条件を具えていて、後者は子の足を喰らう方良に立ち向かう姿のあることから方相氏を描いた画像である可能性は無視できない。しかし林巳奈夫や小南一郎は、副葬品の分析や祖霊観念の検討から、「天帝使者」「黄帝」「黄神北斗」を想定している[9)]。

だから設楽博己のように、ｂと同様の頭に弩を頂く②獣面体で、③・⑤を具える蹲踞姿勢の図像（ｃ）をも方相氏に限定するのにはさらに違和感がある。それは類似した題材や姿を表現したとされる図像にも通底する属性だからである。

河南省の画像石[10)]には、脚で弩を引く射手（蹶張）図がある。ｄは新莽天鳳五年、唐河県新店郁平大尹墓に熊首の十二神獣と並んで描かれた図像で、墓の保護と鎮鬼辟邪の意味とされる。南陽県や方城県城頭鎮一号後漢墓の同じポーズをとった蹶張図のなかには口銜矢、突目、露歯で凶捍（きょうかん）な形相の人物を表現したものが存在する。それは密県の後漢墓画像甎（ｆ・ｇ）でも散見されるのだが[11)]、はたしてすべてが方相氏なのだろうか。

南陽県阮堂後漢墓では「舞楽百劇」図に、蹲踞姿勢で武器（杖か棒）を腰に据え、両手を挙げた熊面を被った獣神が描かれる（ｅ）。豹と戦う「仙倡（せんしょう）」を表したのだという。大爪を立てた竪耳、露歯の熊が虎と戦う図、兕（じ）（一角獣・犀）と戦う図、牛や竜と戦う図は後漢墓にまま見られる。虎が牛や一角獣と戦う図もある。いずれも鎮鬼辟邪という共通観念の表現であるが、方相氏とは限定されない。

鎮鬼辟邪の異形の怪人や怪獣ということであれば、②・⑤を具える鎮墓獣も相当する。両手を高く挙げ、有角、怒目、露歯で威嚇する。二角のものもあるが、臥龍崗後漢墓例（ｈ）の頭の杈角は鹿角にも見える。方相氏とされるａの頭の鹿角に通底し、ａに尻尾が付くことを重視するのであれば、逆にａも鎮墓獣と考えられなくもない。ちなみに、楚墓の鎮墓獣には鳥の体に鹿角の取り付く例があり[12)]、後述する門扉の除災辟邪に朱雀・仙鶴が絡むことからも興味深い。

①・⑤の武器を執る異形の人物ともなれば枚挙にいとまない。前出した天鳳五年の大尹墓で竪眉露歯の形相で左手握剣、右手執盾の剽悍（ひょうかん）な人物は、官吏の拝謁図に描かれた「侍衛」である（ｉ）。南陽県英庄後漢墓の「神人」像（ｊ）は、高髻（たぶさ）で長袴、右手持棒、左手執盾で、面具のようにも見える形相は呲牙咧嘴（しがれっし）する（歯をむき出しにして不敵に笑う）。「門吏」や「執戟小吏」、「執棒武士」などとされる類似例もある。南陽県草店の後漢墓ではこうした門吏とともに、爪を立てた両手を挙げ、瞋目吐舌の半蹲の鎮墓獣が描かれた例もある。

鎮墓獣や神人・門吏らの画像は門扉の門神とも深く関わる。門神とは百鬼を支配するとされる兄弟二柱の神（「神荼（しんと）」と「郁塁（うつるい）」）で、墓門の左側で③戟、鉞、刀剣などの武器を執って、⑤竪眉露歯、怒目、高髻（たぶさ）、半蹲体勢をとるのは兄の神荼（ｋ）、右側で武器を持たずに玄衣を着る穏やかな姿が郁塁とされる。しかし、南陽県後漢墓の郁塁は高髻（たぶさ）で鉞を執り大声を張り上げるさまを描く（ｌ）。

また、門扉を描く画像石には、中央に鋪首銜環（怪獣や怪神の頭部を象った魔除けのノッカー）、上部に鳥（朱雀や仙鶴）、下部に門神（神荼）や猛獣の三者が描かれる。猛獣には牛・一角獣・虎・熊と、方相氏説ではおなじみの猛獣が神荼にオーバーラップして描かれている。

こうした南陽両漢墓画像石の図像の様相や理解は決して特殊事例ではなく、例えば河南省新鄭の漢代の画像甎でも、先の方相氏の属性として掲げた①を除く②・③・⑤などの様相を呈した異形の怪人や獣神は、『晏氏春秋』、『史記』の伝記や故事を描いた「高祖斬蛇」、「二桃殺三士」、「荊軻刺秦王」といった場面に度々登場する。

さらに、戟を持つ侍吏や門吏のほか、痩面大目、頭上の一角、有翼、双耳竪立で長身の異形の怪人が鉞を担ぐ

姿は「神荼ないし郁垘」(ｍ)、頭髪を立て有髭、鋭歯、双目円睜で両手に剣を持って立ちはだかる怪人には「大山上」の文字を付す(ｎ)[13]。東嶽太山で「閲」(裁き)を執る伝説上の神人「太山府君」である。そうとなれば、方相氏だとされてきた河南省鄭州市二里崗遺跡の前漢末～後漢初の空心甎墓の陽線刻の怪人(ｏ)[14]にも疑いがかかり、密県の画像甎に描かれた「武士」とされる怪人(ｐ)もこれに順じる。

鐘玲が「方相俑」として掲げた四川博物院蔵の後漢代資料も[15]、③･⑤の属性のみで、瞪(とう)目、高鼻、大耳直立、長舌で、武器は戈ではなく腰に佩した小刀で、右手は腰まで伸びた長舌に添え、左手は蛇を掴む。こうした俑の容貌は人身怪獣、有鹿角、大耳、鼓眼、獠牙外撇、吐舌などが特徴であると言い、鎮墓神や鎮墓俑、神仙巫術との関係は説くが、今ひとつ方相氏であることの説明根拠を欠く。

上田早苗は前の鄭州二里崗例のほか、方相氏とされる南陽市趙寨前漢墓の画像石(ｓ)も紹介する。右から白虎に乗る仙人、怪獣、朱雀、仙人、左から龍、朱雀、その間に描かれる凶捍な獣首人身像である。除夜の夕に挙行される駆逐疫鬼の「大儺(たいだ)」の儀式を描く稀少な事例だという[16]。神仙思想の流布によって、方相氏も神仙術を会得して尸解(羽化)し「昇仙瑞祥」するからである。そうであれば、天空を疾走する凶捍な獣首人身の河南省洛陽市の北魏孝昌二(526)年侯剛墓誌蓋刻画(ｔ)も方相氏だとする上田の理解には一理はある。

しかし、かといって獣面・獣身の疾走する姿のみで、河南省密県打虎亭漢墓の画像石(ｑ)や江蘇省鎮江の東晋隆安二(398)年画像甎、藤ノ木古墳の馬具後輪把手の透彫りの方鬼神像(ｒ)、香川県観音寺市母神山古墳の鉄刀柄頭に彫られた鬼面、高句麗三室塚の墓室壁画の怪人像までを服装の類似などから、方相氏とするには大いに疑義がある。

古く姚鑒は、遼寧省大連市営城子２号墓の主室南門内･外壁の門上に描かれた二通りの「怪獣(神像)」(u)を方相氏と考えた[17]。方相氏とされる武氏祠後石室第三画像石の怪人(ｂ)や明器俑、河南省濬(しゅん)県辛村衛国西周墓出土の青銅面(以下図２参照。ⓒ)との②･③･⑤での共通性や、文献上から読み取れる方相氏への観念との関係を駆使した論述には説得力があり、③の武器には時代、地域による変化を考慮するのであれば異論はない。

しかし、饕餮文や邪視文などを方相氏像からの転化・退化とするのは本末転倒ではないか。水野清一は邪視文は饕餮文からの退化とし、営城子２号墓の「怪獣」「怪人」を、呪術的に陰陽を順えて不詳を避け、凶邪の侵入を禦ぐための獣鐶(鋪首銜環)との共通性を強調しつつ、『山海経』の「帝江」や「形天」の可能性を論じている[18]。

こうしてみると、文献上の方相氏が時代や社会背景、演出する場によってその容姿や扮装、佩用する武具や道具を変え、取捨選択がなされていくすがたを図像上で追い限定していくことの難しさを改めて痛感する。

この点で早くに、そもそも「魌頭」とは、方相氏の様態と扮装を表したものであり、「魌」＝「頫」＝「倛」＝「其(箕)」＝「簸」の字義から、竹荊の頭部への被り物を指したもので、「この種のものを被って逐鬼などにあたった役職を方相氏の名で呼ぶようになった」(傍点は寺沢)とする伊藤清司の指摘[19]はこの問題の核心を突いている。

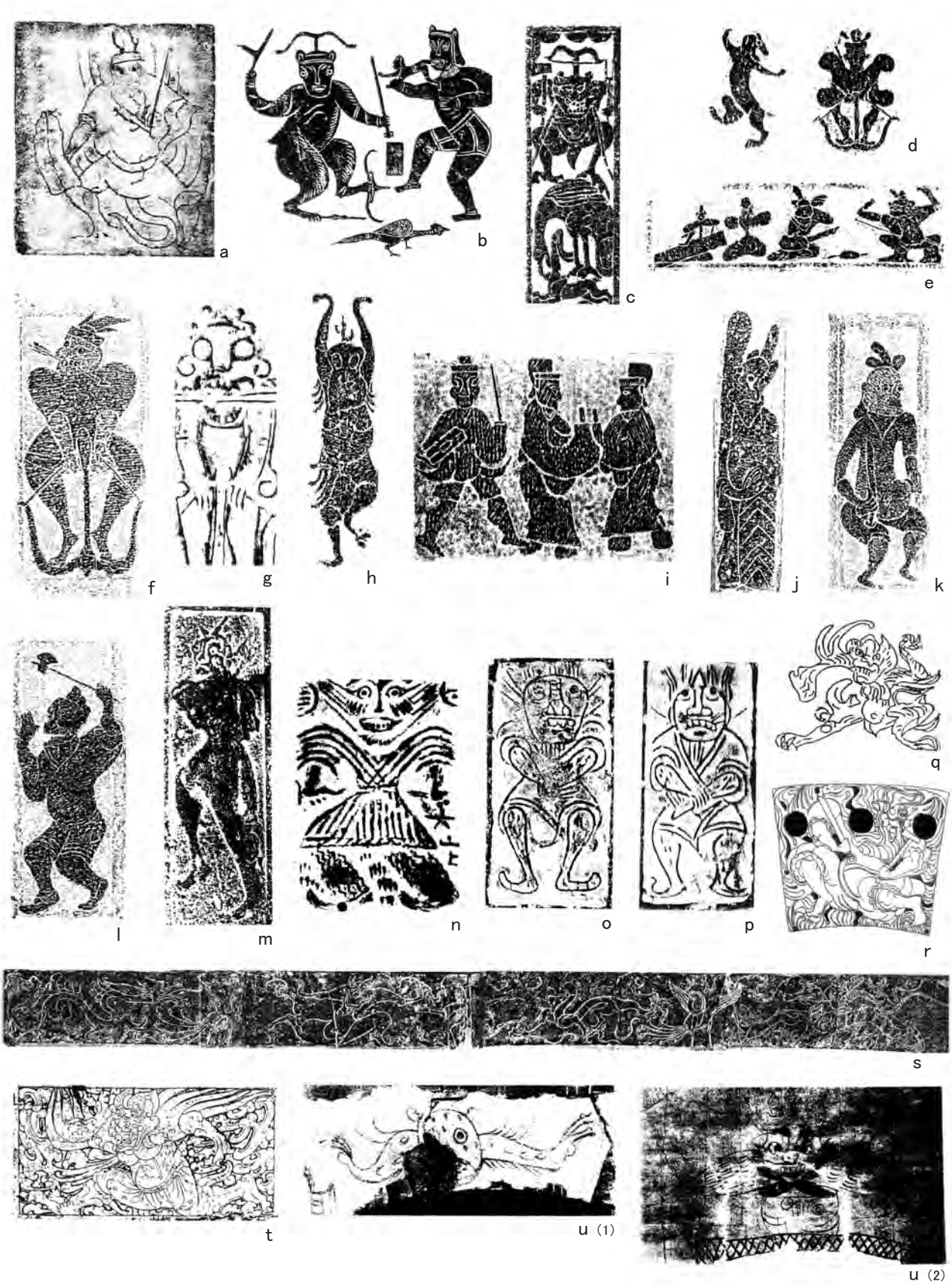
それは「方相氏」が、人類史の根底にある一貫した哲理の通時的象徴物として誕生したものではなく、一貫した哲理のある整備された儀軌を担う歴史上の一形態(役職)が「方相氏」であり、そのためにその後の変化もじつに多様性を帯びていたことを示している。当然のことながら、その原像については多様であるはずである。

(３) 日本古代の方相氏

中国における「方相氏」の実態がこのようであるから、近隣諸国とりわけ日本列島への方相氏の実像や儺の儀軌の実態が「混然としたかたちでもたらされた」[20]のが実情であろう。しかし、そうであればなおさら何をもって方相氏と見るかは厳密でなければならない。除災僻邪を役目とする呪師(官)や神(怪人・怪獣)であれば「方相氏」という認識には慎重であらねばならない。

日本での方相に関する最古の記述は、飛鳥寺塔心礎への仏舎利埋納に際しての蘇我馬子邸宅からの葬列を描いた『元興寺縁起』推古元(593)年正月の「第四輅載引導方相也」「奇燁之麗、不可具陳、荘厳之不能尽言、爰衆庶会集、不可勝計。」とされる[21]。

また、９世紀の『令集解』の養老喪葬令には親王一品



a. 山東省董場郷／b. 山東省武氏祠／c. 山東省嘉祥県／d. 河南省郁平大尹墓／e. 河南省阮堂／f. g. 河南省密県／h. 河南省臥龍崗／i. 河南省郁平大尹墓／j. 河南省英庄／k. l. 河南省南陽県／m. n. 河南省新鄭県／o. 河南省二里崗遺跡／p. 河南省密県／q. 河南省打虎亭漢墓／r. 奈良県藤ノ木古墳馬具透彫／s. 河南省趙寨前漢墓／t. 河南省侯剛墓誌蓋／u. 遼寧省営城子古墳／（a・b・cは設楽 2014、q・tは上田 1988 による。縮尺不同。）

図１　中国の画像石・画像甎などにみられる異形の獣神・怪神

条に轜車の先導としての方相氏の記載があり、所引の古記に「方相、謂蒙熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈揚楯、所以導轜車也。此間俗、対人方也。」とあることから、方相氏の実像と供奉する大儺はこの喪葬を嚆矢とし、さらに遡って８世紀初めの『大宝令』に依拠したとする考えもある[22]。

しかし前者の『元興寺縁起』には二書があり、醍醐寺所蔵本には『日本書紀』と同様、埋納の前段儀礼の記載はない。飛鳥寺系縁起の逸文は、伝説的な太子像を強調する『聖徳太子伝略』（延喜十七：917年）の注釈書である15世紀の『太子伝玉林抄』や『上宮太子拾遺集』から復元したもので、その時代性には慎重を期さねばならない。後者も９世紀の律令注釈であり、矢野建一説も背景に『日本書紀』仁徳天皇六十五年条の飛騨の「両面宿儺」の説話を方相氏と重ねて理解しようという伏線があり、直ちには首肯し難い[23]。

『周礼』のいう方相氏像の直接的な記載は、『弘仁式』の一部として弘仁十一（820）年正月に撰進された『内裏式』下の「方相一人。取大舎人長大者、為之者。著仮面黄金四目、玄衣朱裳。右執戈、左執楯」が初見であろう。内容の同一性と時代性からすれば、唐令を典拠とした可能性が高い。

また、長保四（1002）年完成の『政事要略』巻二九には、頭上に一角をもつ四目で執戈揚盾、蒙黒布姿の方相氏が疫鬼を追儺するようすが描かれ（ⓐ）、前の中国での図像表現からの影響が見て取れる。法隆寺に伝世する平安時代とされる行道面も四目で表現されている（ⓑ）。しかし中国の図像資料と同様に、今のところ明らかに遡行するこうした方相氏の画像を知らない。

朝鮮半島でも、大儺受容を物語る初見は『三国史記』巻三二　楽志で編纂された、新羅末期の「郷楽雑詠五首」　大面詩の「黄金面色是其人、手抱珠鞭投鬼神」の光景とされる説がある。しかし方相氏像の直接的記載は、李氏朝鮮の15世紀に刊行された『高麗史』巻六十四　礼志と『傭斎叢話』が初見であると言い[24]、昌徳宮に遺される四目の面も李朝のものとされる。

ところで、「大儺」に関わる記述はこれより前の『続日本紀』文武天皇慶雲三（706）年是年条の「是年、天下諸国疫疾、百姓多死。始作土牛大儺。」と、光仁天皇宝亀三（772）年十二月乙亥条の「有狂馬、喫破的門土牛偶人、及弁官曹司南門限。」に見える。こうした諸国疫疾の国難を殄（う）つための土牛偶人が、前出の『礼記』月令や『呂氏春秋』季冬条の「土牛」の観念や用法であることは間違いない。

問題は、宮城十二門への内匠寮による土牛、偶人象の設置は『延喜式』の陰陽寮式、内匠式、木工式にも見られるが、これらが毎年十二月大晦に行われる大儺とは区別される避寒迎春の「儺」として行われることである。当然そこには方相氏の記載も参加もない[25]。すでに中国の画像石で見たように、もともと牛や一角獣などは方相氏とは直接関わりなく、排除すべき悪鬼の象徴であった。

日本古代の宮廷での儺祭に取り入れられた儺の儀軌の源流が中国漢代に改変された儀軌にあることは文献上間違いないであろう。さらに三宅和朗は、日本の大儺は中国の部分的受容と言うよりも、主目的であるケガレ＝疫鬼の追放（ハラエ）という独自の観念のなかに取り込んだものと理解している。正しい理解であろう。

だから問題は、『周礼』の方相氏による疫鬼行為が、漢代以前の墓中や宮室などでの僻邪の思想とどのように関わるのか、さらには農耕儀礼的色彩が濃厚な中国新石器時代や弥生時代の僻邪の行為とどのように繋がるのかである。前者の答えはすでに見えてきた。少なくとも漢代に遡って、疫鬼・僻邪行為のすべてが「方相氏」としては特定･象徴化できないということである。となると、後者については一層その可能性は希薄となってくる。

Ⅲ.「方相氏」説の再検討

（1）弥生時代の「戦うシャーマン」

そこで漸う第一の問題、中国古代の「方相氏」の思想や儀礼・風習が弥生時代に入り込んでいたとする解釈の可否である。弥生時代の「戦うシャーマン」の図像（ⓓ）が農功への僻邪行為であるとする考えは大方認められるところであろう。それは穀霊に取り付くあらゆる邪気（鬼）を排除するための模擬戦として実体化される。

戦うシャーマンと「方相氏」との共通点は、唯一、③の「執戈揚盾」の一点である。四目なく、熊（獣）相や凶捍たる気配も一切ない。むしろ頭部に羽根飾りを付けることから鳥と親和的である。それは、「戦うシャーマ

ン」が「鳥装のシャーマン」と対峙し一体としてマツリを演出したように、穀霊を鼓舞し強化する穀霊の象徴としての鳥は戦う主体でもあったからである。

弥生時代の「戦うシャーマン」はその出土状態や遺構から見れば、基本的には喪儀とも大儺とも無縁である。一方で『礼記』に謳う、春と秋の農功の節に行われていた除災辟邪の行為が「儺」の本源的な姿であったことは「戦うシャーマン」の行為や背景と重なってくる。

戦うシャーマン＝方相氏説では、山東省蒼山県層山出土の殷後期の青銅器に酷似した「執戈揚盾」像（ⓔ）があり、河南省安陽市殷墟で「其（箕）」＝「倛」の初文とされる甲骨文（ⓕ）が箕形の面（倛面）を被った人物の形象と考えられることから、方相氏の魌頭との関係を主張する。

そこで春成秀爾は、商周代のおもに墓や祭祀坑から出土する異形で凶悍な人面、獣面、鬼面の類を掲げて、縄文～弥生時代の仮面や人面付土器などとの「異形」性とを関連づけ、観念界での共通項を暗に想定する。しかし、両者の歴史的系譜や因果関係、機能の同一性はまったく未証明の事柄である。

そもそも、商周代の青銅製礼器に描かれた獣神面（いわゆる饕餮文）や青銅製の面具の辟邪観念が「方相氏」と同じ役割であったか、また「方相氏」の原型であるかもまったく未証明の事案であり、ましてやこうした面具と「魌頭」との系譜、魌頭の初源と「方相（氏）」との先後関係も不分明である。むしろ、方相氏図像の存在が取りざたされる漢代以降へと継続する例がほとんど知られないこと、とくにその間を繋ぐべき東周代（春秋末～戦国期）にこうした事例が欠落することは、その可能性の薄さを思わせる。

商代の山東省蒼山県層山の「執戈揚盾」像や、殷墟の「倛面」文ともなるとその時間差はさらに大きいし、「戦うシャーマン」の類似遡行画像だとされる層山の「執戈揚盾」像も、單＝盾、戈＝戈を表した「戦」の字義の象形にすぎない。加えて、「方相」の字義や原義が「放想」にあるという小論での解釈（Ⅴ．結語 の冒頭を参照）を排して、「方形の面を被った相」だとする解釈も牽強付会にしか見えない。

また、戦国～前漢代の墓に副葬される青銅製容器や銅鼓に鋳出された一連の「執戈揚盾」図や、船上などでの「鳥装の執戈揚盾人」図も「戦うシャーマン」に擬えられるが、前者は異民族に対する呪詛儀礼、農功儀礼として山川のカミに饗される辟邪・戦闘の舞楽であり、後者もそうした儀礼と根源を同じくする船上での辟邪・競演儀礼との解釈が一般的であろう。いずれも弥生時代の模擬戦との本源的、系譜的脈絡はあっても、「方相氏」の存在を遡上させる根拠にはとうていならない。

一方、前５世紀末の湖北省随県の曽侯乙墓の木棺に描かれた「神人神獣武人」の漆画の三種の武人像（「羽人」「方相氏」「百隷」）（ⓖ）に着目した解釈もある[26]。塚本和人は、「方相氏」とされる像が「方相氏」の諸特徴を備えているとは言い難いが、この地域が方相氏の起源地である黄河中・下流域ではなく、楚地に近いことから羽人などの南方的要素も加わり、鳥装のイメージとともに方相氏を構成するセットとしてその思想が列島に到来したと見る[27]。

これら楚墓の神人が墓の疫鬼退散、辟邪の機能を果たしたことは間違いないだろう。しかしそうした図像をおしなべて「方相氏」とすることも、特定図像を限定することも無謀である。ましてやそれらが、弥生時代の「戦うシャーマン」の原型だと言うのであれば、時系列を追った来歴のすがたを明らかにする必要がある。そもそも、「戦うシャーマン」の出現が中期中頃を溯らないこと自体が方相氏説には有利には働かない。

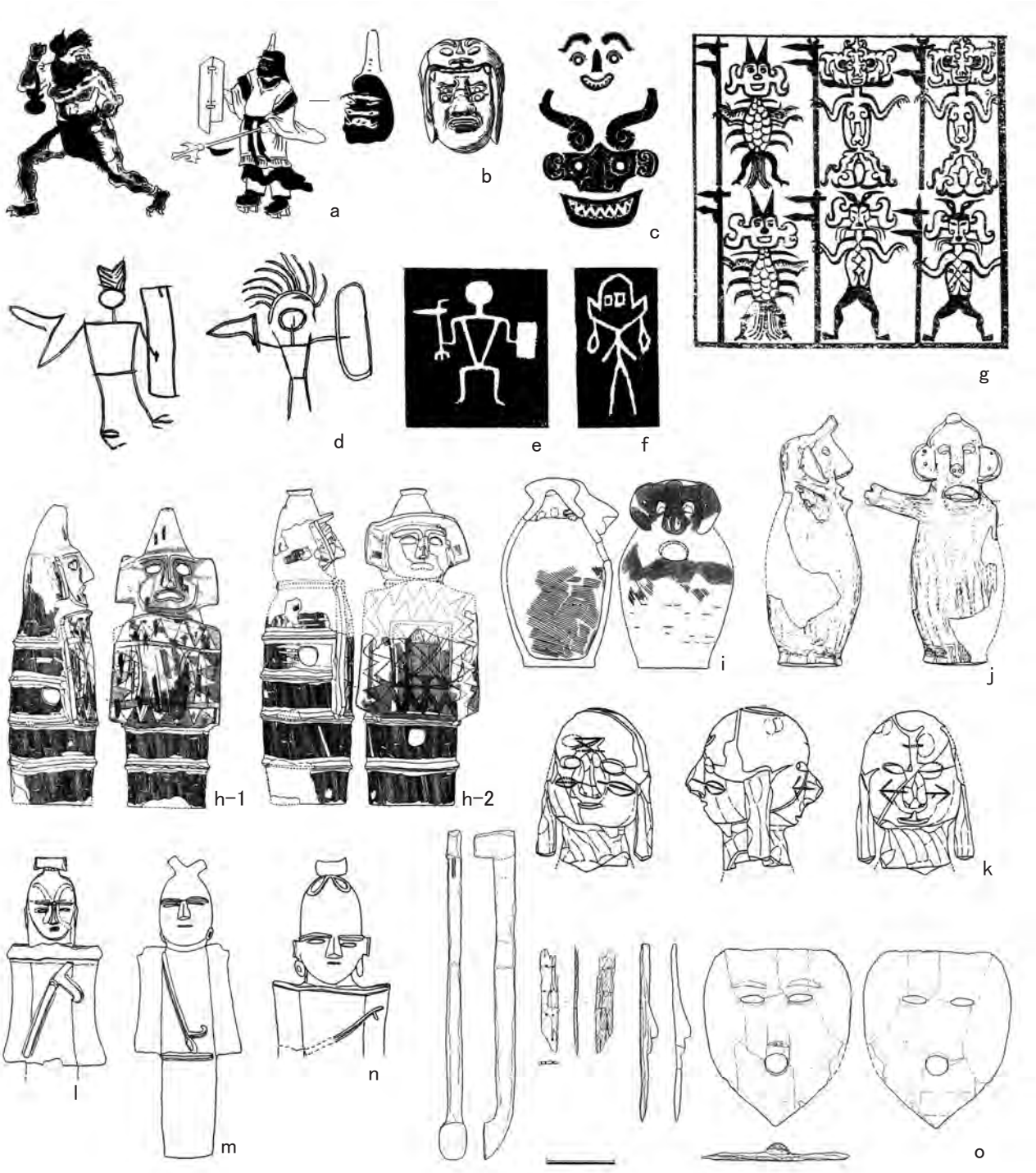
（２）古墳時代の「盾持人」

第二の盾持人埴輪との関係は、「戦うシャーマン」論に比べると属性⑤の大きく異形でな面体が加えられ、墓（域）境界への樹立から辟邪、疫鬼駆逐に関わる機能が主張される。

盾持人が盾という器財のもつ防御機能を引き継ぎ、かつ墓主の関わる生前の数々の重要な儀礼の行為や役割の表徴としての多様な人物像に先駆けて出現した独自性の強い形象埴輪であることは論を待たない。

だから、墓での辟邪、疫鬼駆逐の観念が盾から方相氏へ展開したとする論理には、盾と異形の顔面のみがクローズアップされる特殊な形状や盾に付けられた各種の辟邪文の存在からも一理はある。

しかし、方相氏が６世紀に遡って中国・朝鮮半島から受容されていたという根拠が、いぜん文献上の『元興寺



a.『政事要略』の方相氏／b.法隆寺伝世行道面／c.河南省辛村西周墓／d.奈良県清水風遺跡／e.山東省層山／f.河南省殷墟／g.湖北省曽侯乙墓／h.群馬県保渡田八幡塚古墳／i.群馬県小八木志志貝戸遺跡／j.群馬県有馬遺跡／k.和歌山県大日山51号墳／l.埼玉県権現坂遺跡／m.千葉県東深井9号墳／n.埼玉県十条／o.奈良県纒向遺跡／（a～c・e・f・l～nは春成2007による。縮尺不同。）

図２　「方相氏」とされた諸例

縁起』の記述や、藤ノ木古墳副葬馬具の透彫りの鬼神像や韓国慶州壺杅塚出土の木心漆塗面を方相仮面とする解釈[28]によるのであれば、すでに見てきたとおり簡単に認めるわけにはいかない。

むしろ、「盾持人」じたいの特性から方相氏を表現した俑だとする位置づけがどのようになされるのかであろうか。「盾持人」には、①黄金四目、②被熊（獣）皮を彷彿するような表現は一切ない。④玄衣朱裳も体部はほぼ盾に隠され、かつ円筒化しているので不明である。

②武器の佩用では、当然防具の盾は持つ。しかし攻撃武器を表現した例は前の塩谷修論文によれば６例ほどで全体の６％にも満たない。また戈ではなく戟とされるが、

埼玉県熊谷市権現坂埴輪製作址出土例（①）の形状は先端が大きく湾曲していて刺突性はなく、後述するように長さから見てもむしろ鎌に近い。ならば、千葉県流山市東深井９号墳（ⓜ）や埼玉県児玉郡美里町十条出土例（ⓝ）なども鎌と見るべきかもしれない。この点で、群馬県甘楽（かんら）郡甘楽町三ツ俣遺跡 73 号竪穴住居出土の青銅製戈形祭器の関から胡の部位を転用した鎌の存在は重要である[29]。

一方、⑤大きく異形・凶捍（きょうかん）な面体（魑頭、竪眉露歯、竪大耳、怒目、不気味な笑い、頭上の角状・烏帽子状の突起や、蹲踞体勢など）は積極的に主張される点である。

確かにその異形な形相は、他の人物埴輪一般とは異質であることは確かであるが、盾や辟邪文という必須の属性から考えても、それが墓へ侵入する疫鬼や辟気の忌避を目的とした盾形埴輪からの人物埴輪への転化であるとすれば、あえて「方相氏」とする必要もあるまい。

中国古代に結実した辟邪観念に纏（まつ）わる神話上、制度上の神人像の多様で複合的なあり方や、「盾持人」の具備する属性の不完全性を見るとき、いかにその受容が「まずは辟邪の観念が優先された」、「仮想の姿」であったとしても[30]、その観念を「方相氏」そのものの受容として捉えるべきかは大いに躊躇する。

また、設楽博己は弥生時代中期後半から後期に群馬・長野・埼玉県域に分布する人面付土器Ｃ（ⓘ・ⓙ）が、大きく異様な耳・鼻・口、烏帽子状の頭頂部表現、埋葬施設の周囲から出土する点などに共通点を見い出し、盾持人埴輪との関係を主張する[31]。確かに、埼玉県本庄市前の山古墳や群馬県前橋市保渡田八幡塚古墳出土の盾持人（ⓗ）などは人面付土器Ｃと酷似する。

しかし、盾持人埴輪の最古例は４世紀後葉ないし末の奈良県桜井市茅原大墓古墳で、その位置からも盾形埴輪との関連性が強く、畿内ヤマトで出現した可能性が高いから、時空上の系譜関係はまったく得られない。異形の大耳・大口・大鼻・頭頂部突起などを「方相氏」に特徴的な姿態の受容とするのであれば、なぜそれが北関東であらねばならなかったのかも説明を要するであろう。

仮に、大耳表現の「盾持人」が２世紀以上も離れた人面付土器Ｃの形相と何らかの形態的系譜を有していたとしても、それが方相氏であり、しかも弥生時代に遡る根拠とはならない。

私は、人面付土器Ｃはやはり人面付土器Ａ・Ｂ（ただし設楽分類には私が穀霊と考える顔が混在している）と系譜的にも機能的にも無関係ではなく、設楽が土偶に含める西日本の頭部に突起を持ち上方を仰ぐ姿態の人物像とも共通の意図を有しているものと理解している。

弥生時代以来の祖霊観念は、墓の地域性、階層性によって多様な祖霊像を生み出してきた[32]。それらはあえて「方相氏」を持ち出さずとも、葬り祀るべき始祖霊を祖霊表現した姿と見て大過ない。

首長霊観念が創出されてからの古墳での辟邪観念や祖霊観念が一層強化されるなか、「方相氏」の観念の受容と付加をまったく否定するつもりはないが、むしろ地域性豊かな祖霊像＝盾持人を誕生させていった結果と考えることもできる。北関東地域での人面付土器Ｃと「盾持人」の酷似性などは、まさにそうした地域系統性の発現の様相なのであろう。

Ⅳ．纒向遺跡出土「木面」の評価

このように見ると、纒向遺跡の第 149 次調査の素掘り井戸の転用と考えられる「祭祀土坑」から、庄内式古段階（庄内１～２式）の土器や鎌柄、木製盾、網籠、多数の棒状、板状の木製品などとともに出土した「木面」（ⓞ）[33] が、弥生時代の方相氏の系譜を継ぎ、日本古代の大儺に繋がる資料と見る説[34] についても慎重であらねばならない。

方相説では、①鎌柄ではなく戈柄である（小林青 前掲註２）論文）、②漢代に盾と鎌を持つ振子の俑があることから、鎌が戈として認識された（設楽 前掲註31）書）とする。完形の弥生時代出土の戈柄はすべて短戈で、石戈を装着した鬼虎川遺跡例が 67.0 ㎝、下之郷遺跡例は 61.7 ㎝を測る。

また八日市地方遺跡例は 68.0 ㎝だが、さらに取手部が接着するようであり、55.5 ㎝の青谷上寺地遺跡例や 45.0 ㎝の朝日遺跡例もその可能性が高い。南方遺跡例の 57.2 ㎝、朝日遺跡例の 45 ㎝、恩智遺跡例の 34.2 ㎝、青谷上寺地遺跡の 30.0 ㎝などはいずれも下部が欠損しているから、短戈の長さは大方 60 ㎝代と見るべきであろう。纒向遺跡の鎌柄は長さ 48.2 ㎝であるから 10 ㎝以上も短い。

一方、弥生～古代の刈鎌柄はおよそ 32.0 ～ 41.2 ㎝の範囲に分布する[35]。民具例でも稲刈鎌は 30.6 ～ 42.0 ㎝に収まり[36]、纒向遺跡例はわずかに長い。しかし、柴草・残桿刈りの薙鎌を含めると、一部 70 ㎝を超える例もあり、新旧例ともに 30 ㎝代から 54.0 ㎝の間に集中するから纒向例も包括される。出土品のほとんどが柄尻が肥厚して内側に鈎手状に突起することも、纒向例を鎌柄と見ることを妥当とする。

また、戈の柄であれば「内」を挿入する柄(ほぞ)部は幅厚でほぼ同じ長さだが、鉄鎌の場合は基部を一方へ折り返すために、柄の孔は幅薄で外方に向かって幅長となる。纒向遺跡例は明らかに後者である。

こうした農具を含む遺物組成は、木面を除けば弥生～古墳時代の「祭祀土坑」には通有の遺物群であり、従来から考えられてきた「農耕儀礼」の後のとりまとめと考えられてきた性格との異和感はない[37]。供献品を入れる網籠や種籾を収めたであろう被籠壺の存在、被火した炭化材の存在も、こうした火と水を駆使した陰陽に基づく「農耕祭祀」の儀礼環境を彷彿させる。

木面がカシ材を使った鍬の未製品の転用品であること、纒向遺跡での鍬の使用が実用品ではなく儀礼用の可能性が高いことなどもこの考えを補強する。その出土地や遺構の環境から見ても、墓に樹立された盾持人埴輪とは異質であり、むしろ弥生時代の「戦うシャーマン」との方が親和的なのである。

地域を問わなければ、「戦うシャーマン」像や鳥装のシャーマン像は、纒向木面の時期までは散見されるが[38]、「盾持人」が出現する 4 世紀後葉の茅原大墓古墳までには 1 世紀半以上にもわたる空白がある。前者との系譜は辿れても、後者との系譜は途切れている。

従って纒向遺跡の木面はすでに主張してきたように、王権誕生前夜にイト倭国、キビ、イヅモの王のなかの王墓の首長霊継承儀礼で創生された首長霊の顔と見るべきである[39]。それは弥生時代の農耕のマツリの核である穀霊に、首長権力の表徴でもあった祖霊の合和した姿であり、その直接的系譜は岡山県倉敷市楯築墳丘墓の大形弧帯石の顔に求めることが適当であろう。

つまり纒向木面は、それまで各地で執行されていた農耕のマツリでの鳥装や鳥面に変わって、それらを吸い上げて新たに誕生した王権大王の年ごとの国家的農耕儀礼において、「辟邪舞」とでもいうべき重要な次第として演じられた首長霊＝人格的な神のすがたである。それがのちに「方相氏」という概念のなかに吸収されていったか、あるいはその逆に「方相氏」の観念を取り込んでいったかであろう。しかし少なくとも、この時点での演者を「方相氏」と呼んで限定視することは明らかな誤用であろう。

私は、纒向木面はむしろのちの能の「翁面」との間に本質的な因果関係があると考えている。しかしもはや紙幅は尽きた。纒向木面の性格をのちの翁面との関係で追究するという作業は稿を改めざるをえない。

Ⅴ．結語

「方相氏」とは何か、古代中国のおそらくは春秋・戦国期には誕生していたであろう「方相」のメタフィジカルな原像や源流が、はるか新石器時代にまで到達することは否定できないだろう。

そもそも『周礼』の注釈では、「方相」を「放想」が原義と解していたとされ[40]、『説文』にも「放」は「逐也。从攴。」、「想」は「冀思也。从相聲。」とあって、「放想」は邪霊を追放することとされる。「方」と「相」の本義もまた「呪禁」、「予祝」、「厭勝」、「振作」に通じるのだと言う[41]。

そこで、人類史におけるありとあらゆる「辟邪」、「駆邪降福」の行為を「方相」という詞に集約すれば、それを履行する巫祝や童乩(どうけい)、方術士、仙人（尸解(しかい)、道士）等々の呪師は悉(ことごと)く「方相氏」と言うことになってしまう。

しかし、それらをすべからく「方相（氏）」として語ることは、論理・実証科学としての歴史学が個別歴史事象として考究すべき問題を、自ら形而上の意識下に漂う中位の観念界一般として矮小化し放棄することになりかねない。人間の形而上の意識直下に漂う、神話や伝説に垣間見える観念の世界から、具体的な「方相氏」の実像を抽出し整理していくことこそ歴史学の使命と言わなければならないだろう。

つまり、「方相氏」という場合、『淮南子』などの古代中国の哲学書一般に見える「方術」（巫風や霊界との交渉を持つ術）・「方士」（方術を駆使して神秘的で宗教

的な雰囲気を醸し、実人生の福利を図る呪師[42]などの一般像とは一線を画して議論しなければならないのではないか。

この点でも、方相と魌頭の原像が、死者の魂を止め置くための「尸」(「魄」と理解すべきだと考える)として作成され、鬼の⊕部が『説文』では「鬼頭也」とあり、契文(甲骨文)では「☒」部に作成されるように、被髪で奇怪・醜悪な面相の畏怖・忌避されるべき様相に起源したと考えられ、方相じたいも逐(お)う以前には駆逐されるべき鬼と同質のものであったと解した伊藤清司の理解は傾聴すべき点が多い[43]。

確かに、そうした人類共通の観念の上に古代中国の文明社会で完成された哲理や儀軌が、大海を渡ってこの国の弥生時代に及んだ可能性は否定できるものではない。実際に私自身も、弥生時代の最高位の青銅のマツリを突き動かす思惟のなかに、そうした事実をいくつも確認し指摘してきたからである[44]。つまりあくまでそれは、観念と物証の脈絡が時間的な関係で辿れ、複数の視点からの因果関係が追えての話である。

しかし、弥生時代の「戦うシャーマン」が「方相氏」であるとか、古墳時代の纒向遺跡の木面や盾持人が「方相氏」そのものだとなると話は別である。文献的にも考古学的にも「方相氏」の儀軌や様相がストレートに弥生時代や古墳時代に持ち込まれ、のちの大儺の原型として実在したことは極めて困難な仮説だと言わざるを得ない。

人類は自然界・人間界のあらゆる邪気(鬼)を信仰や呪(まじな)い、祭祀などによって排除する行動を履行してきた。このコロナ禍のもとでも多様な疫病退散の行動が試みられ、アマビエなる辟邪神を歴史から再発掘もしてきた。こうしたあらゆる辟邪観念を遡行すれば、それが人類の共有する相似た行為や手法、拠るべき神のすがたに集約されていくことは必至であろう。しかし、それをおしなべて個別歴史上の「方相氏」と呼んで一体化させ、概念化と系列化にまで及ばせようと言うのであれば、それはおそらく大きな誤解に違いない。

方相氏もまた特定の歴史の過程が生んだ観念の個別一形態に過ぎない。そうであれば、「方相氏」との類似点の強調以上に相違点の原因と理由も正しく説明されねばならない。背景と因果関係が解消されない限り、安易なイメージ作りは排除すべきであろう。

私は、弥生時代の「戦うシャーマン」と纒向木面との間には、この国の歴史上の極めて重大な画期があると考えているが、反面、古代中国の「方相氏」とは直接的系譜を辿らない農耕社会一般の辟邪観念の線上では繋がるものと考えている。また、「方相氏」と盾持人埴輪との直接的な系譜関係にも現状では積極的にはなれない。

はたして「方相氏」の観念や図像が漠然、曖昧ながらもストレートに到来し受容したのがいつどのようなかたちでなされたのか、小論では明らかにできなかったこの課題は、変容されながらも儀軌として完成されたかたちで受容された6世紀末から9世紀の「方相氏」の実態と「盾持人」の祭儀のなかでの変化の究明によって検証を重ねるしかなさそうである。

また、あえて副題とした纒向木面についてはむしろ、3世紀のこの国の「王権」の誕生という国家形態上の大いなる画期が、神仙、昇天と言った新たな中国からの思想体系を導入しつつ、弥生時代以来の辟邪観念を自らの手で大きく変容させていった姿として評価したい。

資料個々の出典(原報告書など)については、紙幅の関係でそのほとんどを割愛し、引用・参考文献についても最小限にとどめざるを得なかった。了解いただきたい。

【註記】

1) 寺沢薫 2010『青銅器のマツリと政治社会』(弥生時代政治史研究)吉川弘文館 第1部第1章

2) 小林青樹 2006「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』第20号

3) 春成秀爾 2007『儀礼と習俗の考古学』塙書房、設楽博巳 2014「日本列島における方相氏の起源をめぐって」『中華文明の考古学』 同成社

4) 設楽博己 2019『弥生時代－邪馬台国への道－』(ヒスカルセレクション3敬文舎、設楽博己 2021『顔の考古学』(歴史文化ライブラリー514) 吉川弘文館

5) 塩谷修 2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『日本考古学の基礎研究』(茨城大学考古学研究室20周年記念論文集)茨城大学人文学部考古学研究室

6) 小林太市郎 1947『漢唐古俗と明器土偶』一條書房 によれば、『隋書』礼儀志の「魌頭」の誤用とされる。醜悪な面(物)を付けた方相氏という理解である。

7) 丁武軍 2005「古儺文化の起源・変遷・現状－中国南豊と京都を事例として－」『DYNAMIS』vol. 9

8) 山口建治 2008「方相・傀儡・郭禿・鍾馗－「天籟」もう

一つの身体技法－」『非文字資料から人類文化へ－研究参画者論文集－』神奈川大学 21 世紀ＣＯＥプログラム研究推進会議

9）林巳奈夫 1989『漢代の神神』臨川書店、小南一郎 1994「漢代の祖霊観念」『東方学報』第 66 冊

10）王建中・閃修山 1990『南陽両漢画像石』文物出版社

11）河南省考古学会古代芸術研究会（周到・崔耕・呂品・殿臣）編 1982『密県漢画像磚』中州書画社

12）寺沢薫 1995「狩る・採る・立てるのイデアー銅鐸の図像考（Ⅱ）－」『弥生の食』展示図録 川崎市民ミュージアム

13）薛文燦・劉松根編 1993『河南新鄭漢代画像磚』上海書画出版社

14）周到・呂品・湯文興編 1985『河南漢代画像磚』上海人民美術出版社

15）鐘玲 2016「四川漢代考古資料中方相氏図像」『四川文物』2016 年第１期（総第 185 期）

16）上田早苗 1988「方相氏の諸相」『橿原考古学研究所論集』第十 吉川弘文館

17）姚鑒 1939「営城子古墳の壁画について」『考古学雑誌』第 29 巻第６号

18）水野清一 1934「営城子古墳の壁画について」『営城子－前牧城駅付近の漢代壁画甎墓－』（東方考古学叢刊甲種第四冊）関東庁博物館

19）伊藤清司 1957「古代中国の祭儀と仮装」『史学』第 30 巻第１号

20）矢野建一 2018『日本古代の宗教と社会』塙書房

21）松本裕美 1975「二種類の元興寺縁起」『日本歴史』第 325 号

22）矢野建一 前掲註 20）書

23）方相氏の四目が、宿儺の両面で四目、セルヌーシ美術館蔵漢代明器俑の両面で四目例（前出）、江西省新淦県大洋洲出土の殷代の青銅製双面神人頭像、和歌山市大日山 51 号墳出土の両面人物埴輪（ⓚ）と関連し、儀礼の整備過程で一面四目となったという解釈はすでに、＜奥西俊介 2011「双面の者」『日本語・日本文化』第７号＞でも論じられている。

奥西は「後世の令などで定義される方相とは別に、それに類似したものが存在した」、「方相氏が登場する儀礼は、後世、確かに唐制に従って制度として制定されたが、それは既存の類似した儀礼を整理したに過ぎなかった」という。ならば、なおのこと「類似したもの」をおしなべて方相氏とは言うべきではない。春成秀爾の熊皮を被ったために四目となったという説明も、奥西が言うように、「蒙熊皮、黄金四目」は並列で書かれるから熊の二目は四目には加えない。

私は両面宿儺や両面人物埴輪の本義は二元的観念（陰陽）にこそあり、方相氏の四目との関係はないと考えている。この点については纒向木面とともに改めて論じる機会を得たい。いずれにせよ「方相」に関する文献的な初見は仮に溯ったとしても６世紀末である。

24）矢野建一 前掲註 20）書

25）矢野建一 前掲註 20）書

26）湖北省博物館編 1989『曽侯乙墓』文物出版社

27）塚本和人 2019「纒向遺跡の仮面から考察した日本の基層文化」『歴史・民族・考古学論攷（Ⅲ）』（郵政考古紀要 71・通巻 80 冊）

28）大日方克己 1993『古代国家と年中行事』吉川弘文館

29）小安和順 1995「甘楽町三ツ俣遺跡出土の銅戈」『群馬考古学手帳』５

30）塩谷修 前掲註５）論文

31）設楽博己 2011「盾持人埴輪の遡源」『東国の地域考古学』六一書房

32）寺沢薫 前掲註１）書

33）福辻淳 2013「纒向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纒向学研究』第１号

34）設楽博己 2014『縄文社会と弥生社会』（日本歴史 私の最新講義）敬文舎 など。

35）奈良国立文化財研究所編 1985『木器集成図録』近畿古代編（奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊）奈良国立文化財研究所、同編 1993『木器集成図録』近畿原始編（奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊）奈良国立文化財研究所

36）（社）大日本農会編 1979『日本の鎌・鍬・犂』（財）農政調査委員会

37）寺沢薫 2011『王権と都市の形成史論』（弥生時代政治史研究）吉川弘文館 第２部第２章

38）熊本市神水遺跡、佐賀県神埼郡東背振村瀬ノ尾遺跡、新潟県豊栄市葛塚遺跡の土器線刻画、北九州市城野遺跡の方形周溝墓箱形石棺内面に描かれた線刻画などであるが、いずれも王権中枢の畿内からは大きく離れた地域からの出土である。

39）寺沢薫 前掲註 37）書

40）濱田耕作 1925「古銀銅面考」『史林』第 10 巻第１号

41）白川静 1996『字通』平凡社、同 2004『新訂 字統』平凡社

42）金谷治 1992『淮南子の思想－老荘的世界－』（講談社学術文庫 1014）講談社

43）伊藤清司 前掲註 19）論文

44）寺沢薫 前掲註１）書

【補記】

本稿の脱稿後に３篇の中文論考（①陳昊雯「再論東漢吐舌鎮墓獣」『中原文物』2020 年第１期、②書正・釗繹一「中古北方地区鎮墓神物的文化構成和変化機制」『考古与文物』2020 年第３期、③釗妹妹「徐州漢画像石中的蘭錡図一兼論東漢兵器使用情況」『中原文物』2021 年第５期）に接した。①は後漢代の吐舌鎮墓獣や本稿でも紹介した吐舌・瞠目・張口・円腹の神怪と方相氏との類似を指摘するが、あえて、「方相氏」とは限定しない。②も中原北方の唐代中期までの壁画の鎮墓獣、鎮墓武士、天王俑にまで広げ、その役割を方相氏の打鬼的様相との関連を説くが、「方相氏」とは呼ばない。③も武士祠後石室第３画像石の怪人など武器を持つ異形の怪人（獣）にもふれるが、『管子』や『世本』に見える「蚩（蒙昧な）龍」とする。いずれも、図像モチーフの特定や呼称においてはきわめて慎重である。

古墳時代初頭の水辺祭祀

－纒向遺跡の祭祀土坑・纒向型祭祀を題材として－

山　﨑　孝　盛

Ⅰ．はじめに

古墳時代の井戸や水辺祭祀に関する研究は今日までに多くの蓄積がある。私自身も16年ほど前に「古墳時代の井戸祭祀に関する一考察」として奈良県の古墳時代の井戸を題材に、井戸と井戸祭祀の検討を行った。拙稿では、井戸から出土した土器の層位や組成、時間的な傾向を分析し、井戸底に観察される「完形土器」に着目し、その傾向と祭祀的特性の検討を行っている（山﨑2005）。

分析結果としては、壷等を主体とする多器種を織り交ぜた弥生時代以来の井戸祭祀＝「伝統的系統」、弥生時代末～古墳時代初頭・前期にかけての大規模な井戸・湧水土坑に見られるような甕等を主体とした多量の土器投棄を伴う祭祀＝「古墳時代的系統」、古墳時代の前期後半から中期にかけては、そうした一連の祭祀が形骸化し小規模化・簡略化される過程、後期にかけては須恵器や木製祭祀具に見られる新しい井戸祭祀の様相「先律令的祭祀とも言える井戸祭祀」が外来文化の影響を受けて発現している点を指摘した。加えて、井戸底における完形土器について、それまで漠然とされていた祭祀の位置付けを明確にした。

拙稿を示すにあたっては、奈良県、京都府、大阪府等の近畿一円の古墳時代井戸に一通り目を通しており、結果として奈良県での傾向以上の結論は導き出せなかったが、近畿一帯の古墳時代の井戸と井戸祭祀の一定の傾向は示せていたのではないかと思う。

そうした、拙稿においては幾つかの課題と反省点がある。一つには石野博信氏の指摘する「纒向遺跡の祭祀土坑群」について井戸・水辺祭祀の範疇に含めつつも、その性格や具体的な検証に至らなかった点である。

また、井戸における祭祀の判断（正否）を厳格化したばかりに、井戸底の完形土器の検討に特化しすぎた点がある。そうした分析は、井戸底に残された完形土器の持つ祭祀的側面を明確にした点では良かったが、今にして思えば、井戸の埋没過程において、最上層等の破砕土器や混入土器は祭祀検証の困難さを伴うが、井戸という形状を留めた状態での「埋める」もしくは「埋まる」過程には、埋める人の井戸に対する意識が働いていたと考えられる。

つまりは、井戸の終了・終焉時において、そこでの割り切った単なる廃棄が行われることは考え難く、遺物の出土状況にもよるが井戸内の堆積の中層（場合によっては上層）くらいまでは祭祀行為とみなす余地があるのではないか…と現状では思っている。

命をつなぐ水を得る水辺や井戸は、科学の発達した現代でも井戸埋めの儀式や水神祭などが行われている点からしても、それは特別な場であり、扱いを誤れば“障り”や“祟り”の危惧される場でもあり、今に残るそうした風習からは、水辺を特別な場とする古代の人々の意識は、現代よりもさらに鮮明であったと想像される。

Ⅱ．纒向遺跡と纒向土坑での祭祀

奈良県桜井市の三輪山の麓に位置する纒向遺跡は、調査当初から石野博信氏や関川尚功氏が重視し、その後の寺澤薫氏を始めとする多くの研究者が着目するように、周辺の纒向石塚古墳や勝山古墳・矢塚古墳の周辺調査、箸墓古墳外堤調査やホケノ山古墳等々の調査及び纒向遺跡162次・166次・168次・170次での大型建物の発見や纒向家ツラ地区での導水施設、弧文円板の出土などに示されるように、古墳時代社会を見ていく上でも鍵となるような重要な遺跡である点は多くの方々が認めるところである。

そうした纒向遺跡における発掘調査成果の中に、河川に挟まれた微高地上で確認された纒向遺跡の辻・東田地区等での土坑群（以下､纒向土坑と記す）の存在がある。

石野博信氏は報告書『纒向』（第５版）および『大和・纒向遺跡』学生社 のなかで、纒向土坑について「集落に土坑を付設することは（中略）顕著に見られる現象である（中略）…が「貯蔵」だけでは理解しがたいものを含んでいる」「集落縁辺部に掘られている土坑の機能は必ずしも明らかではない」「祭祀的性格を検討し始めたのは（辻地区）土坑４の豊かな遺物を検出しはじめてから」としている。

そして、土坑の①出土木製品に見られる豊かな祭祀具の存在、②建物跡との共存関係、③木製品類に見られる焼け焦げた痕、④湧水層まで掘り込まれた土坑等に着目し、土坑と建物は祭祀的性格を持つものと捉え、農耕祭祀を基本とした（例えば岡田精司氏（岡田 1992）の示すところのニイナメオクスニ儀礼に相当するような)“水と火のまつり”である土坑群での祭祀（拙稿ではこの石野の示す祭祀を「纒向型祭祀」として紹介した）を論じている。

豊富な土器組成を有した井戸祭祀は、藤田三郎氏が唐古・鍵遺跡の井戸で以前から指摘するように弥生時代集落の井戸にも良く見られる祭祀形態である。

しかしながら、纒向遺跡の辻地区・土坑１ないしは土坑４のような、①大規模な掘削を伴う大型土坑で、②湧水を伴い、③多器種の土器と豊富な祭祀的木製品の双方を有したような類例は、拙稿（山﨑 2005）の集成段階においても他地域の井戸祭祀には殆どなかったように記憶している。そうした事例は一般的ないしは普遍的に存在する遺構ではなく、全国的にみても特殊で且つ稀な遺構という認識は現状でも変わりはない。

Ⅲ．纒向土坑の諸例

では次に、纒向遺跡やその周辺で確認されている纒向土坑についての事例を見ていきたい。

※ 纒向土坑の詳細は、文末の一覧表（表１）を、（ ）内の各土器編年の対応については、図 10 を参照願いたい。下記の（ ）内については『纒向』第５版での再整理により年代観が改まっているものは豊岡編年を記した。他には寺澤編年（寺澤 1986）や報告にある編年表記を示した。なお、本文中にある「投棄」とは坑内に投げ入れる･置くの意味で使用した。

１．報告書『纒向』にある纒向土坑の事例

①辻地区･土坑１（纒向２類･庄内０～１式）〔図１参照〕

辻土坑１（以下、辻地区土坑を辻土坑と略記）は、第 166 次調査等で大型建物が確認された太田北微高地の、北側流路に接する位置にある土坑で､平面形は 4.3～5.0 ｍの不整形、深さは 0.9 ｍを測る。断面形は不整形な段掘りで、掘削は砂層の湧水層に達している。

辻土坑１の特徴は石積み（報告では石組）を有する点で、土坑内には杭や板材が打ち込まれた跡があり、全面ではないが人工的な石の護岸が構築されていたと考えられる。同時期の石積みを有したような同様の施設は、管見の限りでは例が無く先進的な構造物と理解される。また､『纒向』の報告では復原された河道（東西）と大溝（南北方向）の交わるコーナー部分に辻土坑１は位置しており、形状も歪で単独の土坑と言うよりは、流路に面した護岸を有したような水場であった可能性が考えられる。堆積土からは甕、壷、小形壷、二重口縁壷、有孔鉢、小形丸底鉢、赤彩高杯、小形器台等が出土し、なかには完形土器も含まれ、木製の板や棒材等も出土している。

②辻地区・土坑２（纒向２式・庄内１～２式）

辻土坑２は、辻土坑１からみて約 60 ｍ南東に位置する土坑で直径は 3.2 ～ 4.0 ｍ、掘削深度は 0.8 ｍ、灰色砂層（湧水層）掘り抜いている。断面形は幅広の逆台形。

上層の黒褐色土層に多くの土器を含み､その下に炭層、黒色粘質砂層が堆積する。坑底からは穿孔を有した壷と円頭形状の木製品、自然木、土器片が出土している。下層の土器量は少ない。坑底の土器は機能時の投棄、上層の土器は廃絶時の投棄と考えられる。出土土器は、甕、壷（赤彩含む)、二重口縁壷、甕、小形丸底鉢、高杯、小形器台等が出土し､外来系土器（東海系）も含まれる。炭層と上層の土器群は終焉時の投棄と考えられる。

辻土坑２の西側には掘立柱建物・建物１が確認されている。建物跡は出土土器が少なく時期認定が難しい。土坑内の堆積土と周辺遺構埋土との比較から纒向５類（豊岡編年）・布留１式（寺澤編年）よりはさらに古い時期の遺構とされている。建物１に隣接する土坑としては辻土坑２と辻土坑７があるが後者は纒向５類であるため候

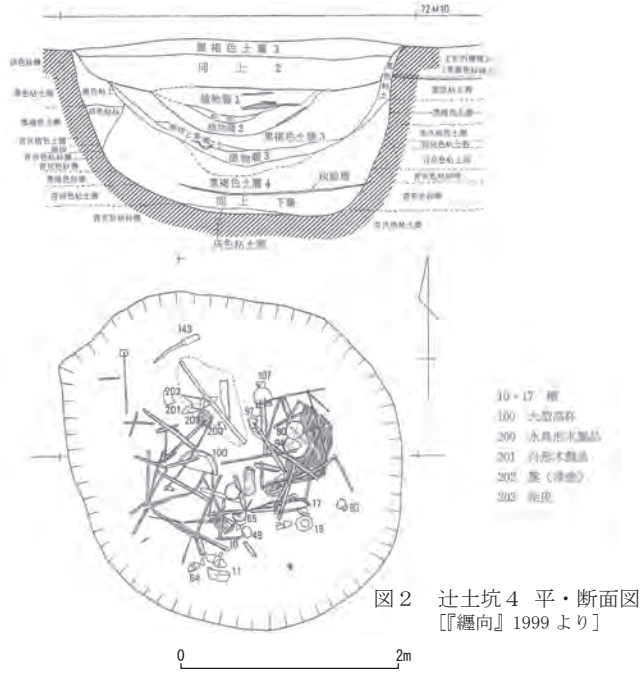


図２　辻土坑４　平・断面図
［『纒向』1999 より］

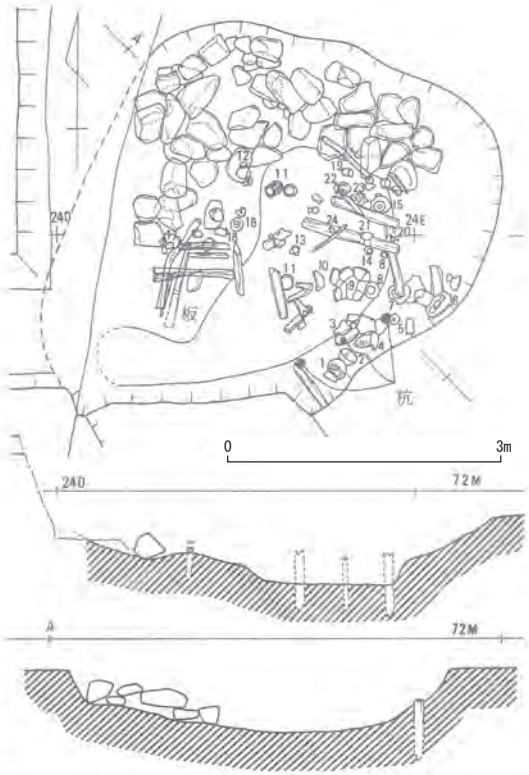


図１　辻土坑１　平・断面図
［『纒向』1999 より］

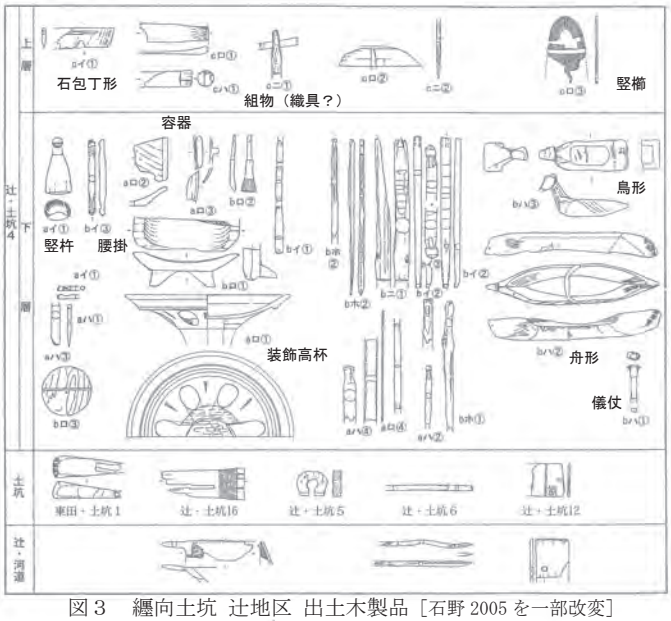


図３　纒向土坑 辻地区 出土木製品［石野 2005 を一部改変］

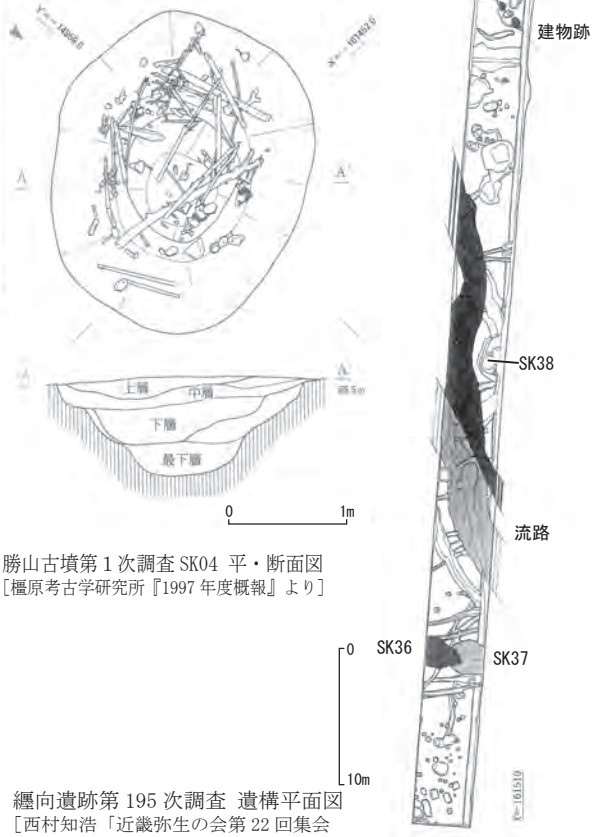


図５　勝山古墳第１次調査 SK04　平・断面図
［橿原考古学研究所『1997 年度概報』より］

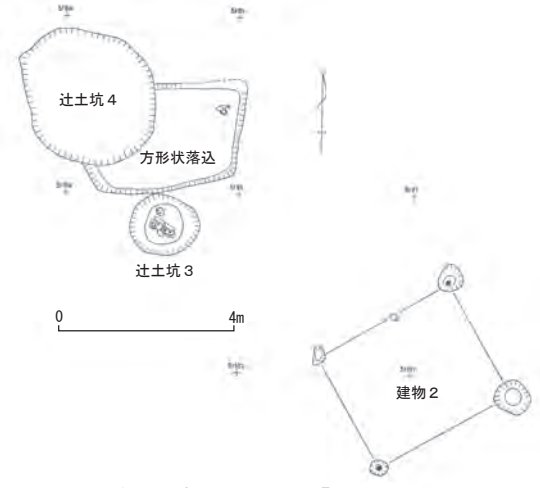


図４　辻土坑４と建物の平面図［『纒向』1999 を一部改変］

図６　纒向遺跡第 195 次調査 遺構平面図
［西村知浩「近畿弥生の会第 22 回集会
・纒向遺跡の発掘調査」を一部改変］

補からは外れ、辻土坑２が対応とされる。

建物１は一辺が約 2.8 mの一間四方の建物で、北西面には中間をやや西にずらすように小柱穴が伴う。建替えの痕跡は認められない。各柱穴は直径 0.4 m・深さ 0.2 m程度で、土坑２と共存する建物であれば興味深い。

③辻地区・土坑８（纒向２式・庄内１～２式）

辻土坑８は、辻土坑１から流路を挟んでさらに北側に位置する土坑で、直径３mの不整円形、掘削深度は 1.5 m、湧水層に達している。断面形は段掘り状。中層からは高杯の杯部と小形鉢が下層の青黒色粘土層からは、骨片とともに完形に近い壷や鉢の破片が出土している。

④東田地区・土坑６A（纒向３類・庄内１～２式）

東田土坑６A は東田地区の纒向大溝の合流点より南に約 100 mの位置にある土坑で 2.0 × 2.5 mの方形に近い不整形で、掘削深度は 1.3 m、青灰色砂層（湧水層）を掘り抜く。断面形は逆台形状。下層の黒色粘土層からは、壷、小形壷（穿孔含む）、ミニチュア土器、甕、鉢、小形丸底鉢、高杯、小形器台、外来系土器（瀬戸内系・東海系）などが出土している。出土土器は完形に近いものが下層に纏まる。

⑤辻地区・土坑 13（纒向３式・庄内３式～布留０式）

辻土坑 13 は辻土坑４の南東方向にある土坑で、直径は 2.0 ～ 2.3 mの不整形で、掘削深度は 0.8 mで青色微砂層・湧水層を掘り抜く。断面形状は逆Ｌ字型。上層からは若干の土器と拳大の自然石、下層からは小形壷や甕、高杯などが板材と共に出土している。

⑥辻地区・土坑４（上層：纒向５類・布留１式、下層：纒向４類・庄内２式～布留０式）〔図２参照〕

辻土坑４は辻土坑１から二条の溝を挟んで南西約 50 mの地点に位置する土坑で、平面形は３m前後の歪な円形で、掘削深度は 1.5 mを測る。断面形は椀形。青灰色砂層と青灰色粘土層を相互に掘り込み湧水量は多いと報告にある。

土坑内は上層、中層、下層に分かれ、上層は主に黒褐色土層、中層は植物層（籾殻等）を含むレンズ状堆積、下層は黒褐色土を主とし、薄い籾殻層が確認されたと報告されている。下層（最下層）から中層（中層底面）にかけての植物層とされる有機質の層は一定期間の土坑の開口を示すものと思われ、上層と下層の土器型式に一定の時期差が認められることからも（わざわざ古い土器を選んで下層に投棄したとは考え難いので…）、土坑は掘って直ちに埋められたものではないと理解される。出土土器に時期差の無い中層から上層にかけては早い過程の埋没と思われる。中層に多種・多量の木製祭祀具を含むことからも、最下層土器の投棄後しばらくの時間的な経過を経て、下層が埋まり、中層～上層では一括投棄された（埋められた）と見るのが自然に思える。

出土土器としては、下層や中層からは、甕、壷、二重口縁壷、小形丸底壷（赤彩品含む）、鉢、小形丸底鉢（赤彩品含む）、高杯、小形器台等。上層からは、甕、壷、二重口縁壷、小形丸底壷、小形丸底鉢、小形器台、土製支脚等が出土している。出土土器の中には完形品もみられるが、甕および壷は口縁部および体部上面から上を残したものが多い。また、外来系土器（山陰系の鼓形器台や東海系のパレス壷、台付甕など）が見られる。

木製品は下層上面及び中層から纏まって出土しており、下層に近い黒色粘質土から黒漆塗丸木弓、竪杵、柄、装飾（大型）高杯、盤、把手付鉢、箸状品、有頭細木、棒材など。中層の植物層からは、巻具（経巻具と報告）、棒材、有頭棒、尖頭有頭棒、腰掛、杓子、蓋、儀仗、舟形木製品、鳥形木製品、杭など。上層に近い黒褐色土層からは、石包丁形木製品、盆、蓋、竪櫛、尖頭棒、棒材、建築部材、組物（織具か？）など。その他、自然木、割木、焼木が多量に出土している。また、種子類の桃核なども出土している。

一連の出土木製品にはバラツキや破損があり同土坑が貯蔵穴とは考え難い。木製の装飾高杯は、秀逸な造形品であり、容器としての供献的性格も有した貴重な品と言える。時期は少し異なるが、類例は千代・能美遺跡（石川県）などがあり、当高杯の製作地は不明だが、遠隔地を結ぶ技術伝播と見ることもできる。

その他、辻土坑４の南東約５mの位置には対応関係にあるとされる掘立柱建物跡・建物２（纒向３式：布留０式併行か）が確認されている。建物２は一辺が２m程度で北西面には中間を外した位置に小柱穴が伴う。この小柱穴の存在は、辻土坑２に伴う建物１に共通している点で興味深い〔図４参照〕。

２．他の報告にある纒向土坑の事例

次に石野・関川氏の『纒向』の報告書の以降に発見さ

れた纒向土坑について見ていく。

⑦纒向遺跡 140 次・土坑１（纒向１式・庄内０式）

土坑１は太田池の西約 50 ｍの地点で確認された土坑で、直径は 2.3 ～ 2.7 ｍ、平面形は不整円形、深さは 1.2 ｍで湧水層を掘り抜く。断面形は椀形。最上層・上層からは土器片が多数確認されており、最上層より上層の方が、上層より中下層の方が土器の残存率が高いと報告されている。中層から下層にかけては最も遺物が集中しており、完形に近い土器や木製盾、曲柄鋤、耕起具、棒状木製品、焼木、籠状製品３点と編物１点などが出土している。土器は、二重口縁壺、壺、直口壺、甕（穿孔品含む）、鉢、小形鉢、有孔鉢、高杯などが出土している。

⑧纒向遺跡 145 次・土坑２（庄内式新相）、**土坑４**（纒向３～４式・布留０式）

土坑２・４は東田大塚古墳の東約 100 ｍの地点に位置している。土坑２は溝（幅約 80 ㎝×深さ約 20 ㎝）が付設し、土坑の径は 1.1 ～ 1.4 ｍの不整形で、深さは約 1.0 ｍ、湧水層を掘り抜く。断面形は逆台形。出土遺物は下層に纏まり、完形に近い甕（穿孔品含む）や高杯、壺、砥石、土製支脚、外来系土器（東海系、山陰系）、木片、貝殻片などが出土している。付設する溝は土坑機能時の湧水量を示すものと理解できる。

土坑４は、直径 2.1 ｍの円形で、深さは 1.2 ｍ、湧水層を掘り抜く。断面形は椀形。下層から最下層にかけて遺物が纏まり、完形に近い壺や甕（穿孔品含む）、鉢、小形丸底鉢、外来系土器（東海系）、土製支脚６点、貝殻片（巻貝）などが出土している。

⑨纒向遺跡 117 次・SK01（纒向３～４類・庄内１～布留０式）、**SK02**（纒向４類・庄内２式～布留０式）

SK01・02 ともに箸墓古墳の南東約 200 ｍの地点に位置している。SK01 は、径が 2.7 ～ 3.7 ｍの不整形で、西側に溝が付設する。深さは 1.06 ｍで湧水層を掘り抜く。断面は逆台形。上層からは圭頭形の鉄鏃が１点、中層では完形に近い土器が複数出土し、下層では管玉１点が出土している。

SK02 は SK01 の南に近接しており、径は 2.9 ～ 3.2 ｍの不整円形で、深さは 1.6 ｍ、湧水層を掘り抜いている。断面は逆台形で、刳抜きの井戸枠が残存している。SK02 の内部には直径１ｍ程度の先行して掘られた土坑が確認されている。

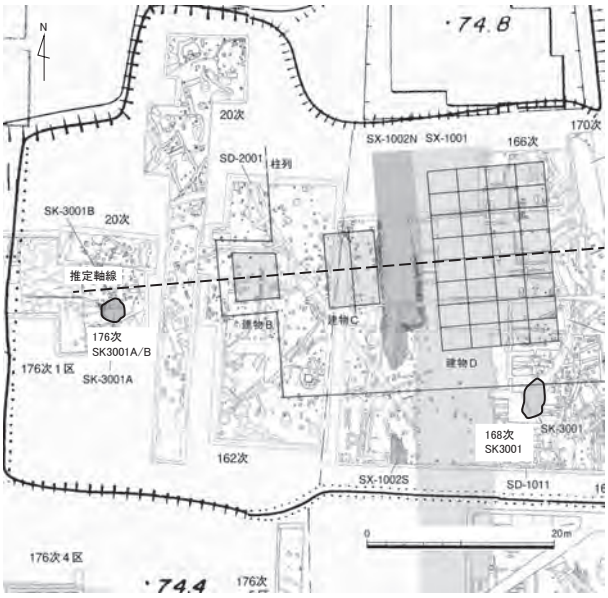


図７　纒向遺跡の大型建物と土坑

上層からは多量の土器片や柳葉形鉄鏃２点、石製紡錘車１点、ガラス製小玉１点。中層から下層にかけては、完形品に近い壺や甕、小形丸底壺、鉢、小形丸底鉢、高杯、小形器台などが出土し、鉄鏃６点（圭頭・柳葉形）、イノシシ型土製品、外来系土器（山陰系）、ガラス製小玉、管玉（緑色凝灰岩）ほか種子類が確認されている。

種子類は、ウメ、スモモ、モモ、イネ、アワ、ヒエ、アサ、マメ類、エゴマ、メロン類、ヒョウタン類、オニグルミ、イチイガシ、カジノキ属、マタタビ属、サクラ属、サンショウ、ブドウ属、ニワトコなどが確認され、中には炭化したものも見られた。何れも廃絶時の投棄とされる。

⑩纒向遺跡 168 次・SK3001（庄内３式新相）〔図７参照〕

SK3001 は大型建物の南面柵列の下（一番大きな建物の南、南北の建物中軸をずらしたやや東）に位置し、大型建物の廃絶時期が庄内３式以前とされており、SK3001 は建物の廃絶直後の土坑と報告されている。SK3001 には北東方向に取り付くような溝が確認されている。

SK3001 は南北約 4.3 ｍ、東西約 2.2 ｍの長楕円形の土坑で検出面からの深さは 0.8 ｍで湧水層に達する、断面形は椀形で上部は削平を受けている。出土土器は、線刻を施した短頸直口壺、底部穿孔を施した小形直口壺、てづくね土器、甕、ミニチュア甕、壺、高杯、器台などが出土。木製品としては、黒漆塗弓１点、剣形木製品１点、ヘラ状木製品４点、槽１点、筒形容器１点、竹製籠６点、敷居材１点、垂木１点が出土している。他にはガラス製棗玉２点。

動物遺存体は、イワシ類、タイ科（マダイ・ヘダイ）、アジ科、サバ科、淡水魚、ツチガエル、ニホンアカガエル、カモ科、ニホンジカ、イノシシ属などが出土している。

植物遺存体は、ヤマモモ 36 点、カヤ１点、クリ２点、シイ属５点、コナラ属 145 点、アカガシ亜属９点、ムクノキ 14 点、ヒメコウゾ 480 点他の野生種に加えて、栽培種であるモモ 2,769 点、スモモ 52 点、イネ 938 点、ヒエ２点、アワ 74 点、アサ 535 点、ササゲ属３点、エゴマ 24 点、ウリ類 2,076 点、ヒョウタン 213 点が検出されており、その量は圧巻である。今後の本報告を待ちたい。

また、176 次調査（図７）では大型建物の西、東西軸線をやや南にずらした位置で重複した２基の井戸状土坑（SK3001A/B 布留０式以前）が確認されている。目立った出土遺物はないが、その位置関係は注目される。

⑪勝山古墳１次・SK04（布留１式最古相）〔図５参照〕

SK04 は勝山古墳の北西面に隣接して位置する土坑で、径が 2.2 ～ 2.6 ｍの楕円形の土坑で、深さは 0.8 ｍで湧水層を掘り抜く。断面は逆台形ないしは緩やかな段をなす段掘り状。上層は灰色粗砂・シルト、中層はオリーブ黒色土、下層は黒色の砂・シルト混粘土の有機層で中下層は酷似した土質であり、遺物の多くは中・下層に纏まる。最下層は灰色粗砂礫の混じる粘質土で有機物を含むと報告されている。上層出土の土器が中層や下層の土器と接合関係にあると報告されており一括性の高い土器群（堆積）と理解される。

最下層の堆積土は他と質が異なる点から、最下層は別としても下層から上層は一気に埋められたと理解できる。出土土器は、壷、小形丸底壷、甕、小形丸底鉢、高杯、小形器台、外来系土器（東海系）などが出土している。

なかでも注目されるのが、磨石、砥石（被熱痕跡があり鋳型転用か？）、鞴羽口（中・下層）、錐状鉄製品、鉄鏃状鉄製品、不明棒状製品、鉄片・不明鉄片（鉄器製作の際に産出か？破損品やタガネ切断痕あり）、鉄滓（炉壁および椀型滓の一部）などの生産関係の出土品である。木製品は、手斧の柄、鋤の柄、籠、棒状・板状木製品、加工木ほか、小枝、葉、自然木、桃核等の種子類が出土している。

⑫纒向遺跡 195 次・SK12、SK13、SK36、SK37、SK38（庄内古相～布留０式、布留式新相）〔図６参照〕

SK12・13・36・37・38 は太田池の西面に位置している。

SK12（布留式新相）は径が 0.94 ～ 1.3 ｍの不整形、深さは 0.94 ｍで湧水層を掘り抜く。未報告のため詳細は不明だが、埋土中からは土器片と共に炭化物が出土している。

SK13（布留０式）は、径 1.2 ～ 1.7 ｍの不整形、深さが 0.68 ｍで湧水層を掘り抜く。埋土からは小形鉢や木製盾、横槌、木鏃、柄などが出土している。SK13 は切り合いの関係から SK12 に先行して掘られた土坑で、両土坑は端を少し引っ掛けるように掘削されている点が特徴的である。SK12・13 の南東隣接地には柱列（布留１式以前）が並ぶことから、建物との共存であれば興味深い。

SK36（布留０式）は径が 2.1 ～ 2.5 ｍの楕円形、深さが 1.76 ｍで湧水層を掘り抜く。埋土からは完形に近い甕や鼓形器台（いずれも山陰系）や小形器台、鋤、竪杵、網籠、貝殻などが出土している。

SK37（庄内式古相）は、径 2.5 ｍ前後の不整形、深さは 1.82 ｍで湧水層を掘り抜く。埋土からは土器の他、木製盾、鋤、卜骨、鹿角の未製品、焼木が出土している。卜骨については纒向遺跡では２例目。SK37 は切り合いの関係から SK36 に先行する土坑で、両土坑は端を少し引っ掛けるように掘削され、先の SK12・13 の状況と類似している。

SK38（布留１式最古相）は、未報告のため詳細は不明だが、径３ｍ前後、深さが 1.34 ｍで湧水層を掘り抜く。埋土の中層からほぼ完形の甕が出土し、高杯や外来形土器（東海系、近江系）、舟形木製品、ガラス玉、木鏃などが出土。

上記の各土坑はいずれも湧水層を掘り抜くことから井戸の可能性もあると報告されている。

⑬纒向遺跡 134 次・土坑３（布留１式）

土坑３は、辻地区の土坑群の確認された地点から南に約 100 ｍの場所に位置する。径は 1.1 ～ 1.6 ｍ、深さは 0.95 ｍで湧水層に達している。断面形は上部を削平されているが段掘り状。坑底付近には礫を伴い、その上の中層付近で二重口縁壷、壷、小形丸底壷、甕（口縁部片が多い）、小形鉢などの破片が纏まって出土している。

完形に近い土器も僅かに含まれる。出土土器の中には外来系土器が見られ、出土した９点の内、吉備系が２点、東海系が２点、阿波系が５点となる。

その他には、石製臼の破片が１点出土している。石製臼は砂岩製で辻地区の河道跡で見つかった石製臼と材質・形状が類似することから朱の精製に使用した臼ではないかと報告されている。徳島県阿南市に位置する若杉山採掘遺跡（国史跡）は朱の原料になる辰砂の産地として知られるが、外来系土器の中に阿波系が含まれている点は興味深い。

Ⅳ．纒向土坑の検討

以上、①～⑬まで報告書『纒向』に示された土坑を中心に近年までの調査事例を見てきた。次に、そうした纒向土坑の性質について考えてみたい。

纒向土坑の特色の一つは掘削が湧水層に及ぶ点にある。祭祀に使用した土器の廃棄、もしくは埋めることで祭祀の目的を達するならば湧水層までの掘削は不要に思える。

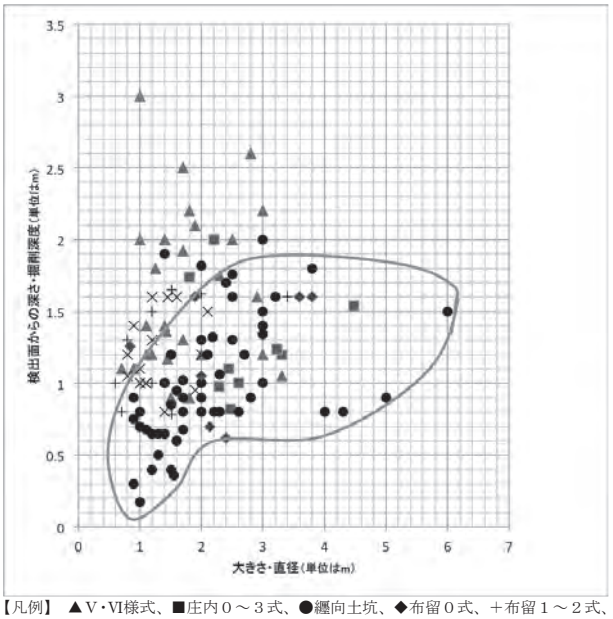
また、湧水のある状態では、土を被せた時に安定せず、埋めるにも不利な状況となるため、単に埋めることを目的とした穴ではなかったと理解される。つまりは土坑掘削の第一義は「水の獲得」にあったと考えたい。

そして、纒向土坑が祭祀だけのために終始一貫して掘られた土坑かどうかは検討の余地がある。

既に示してきたように辻土坑１は、流路の合流点に位置し、木杭や石積みでの加工が施される点からも機能的な水場・護岸として一定期間は使用された可能性が考えられ、祭祀に応じた短期の施設としては考え難い。

豊富な祭祀系遺物を伴う辻土坑４に関しては、『纒向』の当初報告でも下層と上層の土器に時期差があることが示されていたが、豊岡卓之氏の再整理においても、最下層（纒向４類）と下層～上層（纒向５類）の土器に確実な時期差があり、間に有機質の層を挟む点からも、土坑は一定期間に渡って開口し、その後に埋められたと理解される。

さらに、上節で示した辻土坑２や土坑４、土坑８、土坑 13、東田土坑６A などのように、下層～上層と最下層（最下層に近い下層を含む）の土器や遺物の様相が異なる場合、例えば、最下層に少量ではあるが纏まった土器、完形土器、穿孔土器などが見られ、下層～上層に多器種の土器や破片、木製品等が多く伴うような事例などは、ある一定期間は機能し（最下層は機能時の祭祀）、その後に埋められた（中～上層は終焉時の祭祀）と理解するのが自然に思える。



【凡例】 ▲Ⅴ・Ⅵ様式、■庄内０～３式、●纒向土坑、◆布留０式、＋布留１～２式、×布留３～４式。●は今回分析対象とした纒向土坑、その他は拙稿（山﨑 2005）集成による井戸・湧水土坑。枠線内は纒向土坑の纏まりを表す。

図８　井戸・湧水土坑の法量分析

なかには勝山古墳１次調査の SK04 のように、上層と下層の土器片が接合関係にあるなど短期間に一気に埋まった事例もあるが、にしても土器一型式分（最小でも 10 ～ 20 年間程度）の時間幅はそこに存在するのであり、やはりそれは一定の期間、水辺として機能的に存在して、ある段階に祭祀が行われたと見る事は可能に思える。

ここでは詳細を示さなかったが、木製仮面や盾の出土した纒向遺跡第 149 次調査の出土事例などは、土坑の構造は湧水層を掘り抜いた段掘り状の井戸であり、仮面は下層からの出土となるが、井戸としての機能性とその後の祭祀の可能性が示される好例と言えよう。

また、そうした纒向土坑の機能性の一面を示すもう一つの視点として、土坑の掘削規模・労力に関する視点がある。

拙稿（山﨑 2005）で集成した古墳時代の井戸に今回の纒向土坑の分析を加え、弥生時代末～古墳時代前期頃までの、井戸や湧水土坑の規模（大きさ）と掘削深度（深さ）との関係を図８に示してみた。

弥生時代後期から古墳時代にかけての一般的な井戸は、概ね直径２ｍ前後ないしは未満であるが、弥生時代末～古墳時代初頭（庄内０～３式・布留０式頃）にかけては直径が２ｍを越えるような大形井戸・湧水土坑が見られるようになる。拙稿ではこの種の湧水土坑について生産活動等を背景にもつ水の需要の増加や労働力の集中と理解し、飲料水の確保を目的とした通常の井戸とは異なった使用の可能性について言及した。

纒向土坑も全てではないが半数近くが当該期の大形化する湧水土坑の傾向にあてはまり、単純に祭祀のために掘削された土坑、ないしは祭祀後の廃棄用の穴とは考え難い。廃棄用とするには出土遺物の量に比して掘削規模は大きく非効率に思える。

また、仮に祭祀の過程で湧水を得ることのみが目的なら、全て垂直に掘り下げれば、手早く湧水を得ることは可能であり、なぜ幅広く椀形状に掘り下げたのかは、もう少し考えてみないといけない。

さらに、文末の一覧表（表１）に示されるように一連の纒向土坑の中で断面形が椀形以外の土坑では段掘りや逆台形が見られ、その多くは井戸の断面形状に酷似している。

その他には、上節で示した纒向遺跡 195 次調査のような土坑を隣接して掘削する、端を引っ掛けて（重ねて）掘削された事例がある（図６参照）。SK12（布留式新相）と SK13（布留０式）、SK36（布留０式）と SK37（庄内式古相）は同程度の土坑を、深さを合わせて、少し端を引っ掛けるように掘削している。いずれも井戸の可能性が高く、確実に水を得るために、掘削場所は選択され、連続して掘られたと考えられる。同様の事例は、纒向遺跡 176 次調査の大型建物の西面で確認された SK3001A、SK3001B（共に布留０式以前）の土坑が重複する事例や、纒向遺跡 117 次調査の SK02（庄内２～布留０式）では土坑内に深さが同じ程度の径の小さい土坑が先行して掘られている事例にも窺うことができる。

そうした諸例からは、水を得る場所は吟味・選択され、ある程度の時間幅を保って、継承されるように掘削されたものと理解される。

その他には、土坑に溝が付設するケースがある。纒向遺跡 145 次調査の土坑２、117 次調査の SK01、48 次調査の土坑１などは土坑の湧水量の豊富さ（機能性）を示したものと言える。

上記の各視点から、纒向土坑の水場や井戸としての実用性について示してみた。これらは湧水層を掘り抜いた纒向土坑の多くが祭祀に終始しない可能性、つまりは、纒向土坑が井戸などのような機能的な水辺としての役割を有す一方で儀礼や祭祀にも対応した可能性を示したものである。

Ⅴ．纒向型祭祀の実相

１．纒向型祭祀の特色

上節では纒向土坑の実用的側面について考えてみた。ここで、少し井戸について考えてみると、井戸とは「濁らない水を得る目的から湧口を広げて水を溜める装置」であり「井」とは１つには井戸枠（井桁）の囲む形状を象形文字により「井」戸としたもので井戸枠を必ずしも持たない幅広な素掘井戸に関しては、古代の人々の印象としては「井戸」とするよりも、人工的な「泉」とイメージする方が適当なのかもしれない。

纒向土坑に見られる、広く円形に近い水辺の形状は、自然の水の広がり、泉・“湧泉”を彷彿とさせる形状ともいえる。そうした、広い水面の確保は、水を汲んだり、そこでの作業を行う際にも機能的で傾斜の緩やかな掘形は崩落が起きにくい安定した形状でもあり、泉としての印象（象徴性）や機能性から、そうした形が選択されたのかもしれない。つまりは、人工的な湧泉とも言えるような水辺が存在し、実用性を有しつつ、それは時として水や水辺を介した祭祀の場や神聖な装置として機能した姿をイメージするのである。

そうした纒向土坑での祭祀については、出土土器の精製度や装飾性、穿孔、赤彩の有無、残存度（完形度）、小形丸底壷、小形丸底鉢、小形器台などは、祭祀の諸特徴を示す視点といえる。そうしたなかでも辻土坑４に見られるような土器以外の豊富な木製品等からは祭祀の実像を解明していく上での有効な指標が得られている。

辻土坑４や勝山古墳１次 SK04 等から出土した木製品などの祭祀系遺物等を性格や印象別に見てみると（※は辻土坑４以外からの出土）、①＜武器・武威系＞黒漆塗丸木弓、尖頭棒、有頭棒、銅・鉄鏃※、剣形※（圭頭状木製品）、盾形木製品など、②＜容器・供献系＞装飾高杯・

槽・盤・杓子・箸状木製品など、③＜形象・意匠系＞儀仗、鳥形、舟形木製品、腰掛、竪櫛、巻具等（織物）、籠（編物）、木製仮面※など、④＜農耕・土木系＞竪杵、鋤、鍬※、柄※、石包丁形木製品など、⑤＜生産・技術系＞鉄器等の製作片※、砥石※、鉄滓※など、⑥＜栽培・環境系＞種子類（自然種・栽培種）※、籾殻など、⑦＜その他＞焼木、動物遺体※などが示される。

それらの出土品から纒向土坑群全体での祭祀を俯瞰的に捉えると、上記の各系統が示すように、纒向土坑での祭祀には農耕儀礼の一面的な要素には収まらない、武威、信仰、農耕、技術、食などの多様な性質とそこに関係した多彩な集団や人々の繋がりが背景として窺われ、出土した外来系土器（東海系・山陰系・北陸系・吉備系・近江系・阿波系など）からは、地域を越えた人々との交流のなかで、新たな思想が育まれ、通底する弥生時代以来の水辺の祭祀（作法）と融合することで他地域には例のない、水と火、多種の土器と豊富な木製祭祀具等が織り成す「纒向型祭祀」が創出し醸成されていった可能性が示される。

また、弓や盾、剣形などの武器形木製品の存在や、儀仗・鳥・舟形木製品などの葬送にも繋がる要素、鋤や鍬に見られる農耕や土木・造成の素養、鉄鏃や鍛冶関係の生産や技術に関するような出土品は、その後の古墳造営や古墳祭祀、集落祭祀に繋がる素地を多く含んでいる。

２．纒向土坑の空間的位置とその意義

では次に、纒向型祭祀が行われた纒向土坑群の立地に着目してみる。辻地区の土坑群は、東西を流れる北と南の幅十数メートルの大規模な古代（平安期）の河川に挟まれた微高地上（太田北微高地）にある。この河川は古代の流れなので一定の注意が必要だが、水の流れは地形に一定の制約を受けるので、これらの古代河川が古墳時代以前の川の流れを踏襲したものとみなせなくもない。ここではそう仮定して話を進めていく（図９参照）。

辻土坑１の西側には南北方向の２本の溝（南北溝）が『纒向』で報告されている。また辻土坑１から約 80 m南東に位置する辻土坑２のすぐ東側にも大小２本の南北溝が確認されており、後者の南北溝を挟んだ東面では大型建物（居館）が確認されている。つまりは大型建物の西面の空間には、東西に流れる南北の河川と、南北に流れる西と東の二重溝により囲まれた約 80 ～ 100 m四方の東向きの台形状の空間（区画）を想定する事が出来る。そして区画内には纒向土坑群があり、区画（区画１）の北西隅には辻土坑１が位置している。その区画の西面にさらに同様の区画があったかは不明だが、辻土坑４を始めとする土坑群はその西の区域にも存在している点からして別区画（区画２）があった可能性も考えられる。

そしてそのさらに西には、纒向石塚・勝山古墳等の古墳が存在する場所にあたり、纒向土坑の時期によってはそれらの古墳は造営中、造営後となろうが、そこには纒向大溝もあり、そうした周辺環境から見ても、纒向土坑群の位置する場所は特別な立地にあったと理解できる。

西の纒向大溝では、『纒向』第５版での豊岡卓之氏の再整理の成果に依るところが大きいが、完形土器を含む土器群が層位的に連綿と確認されており水辺での祭祀が継続して行われていたと理解される。纒向大溝の存在とそこで祭祀が行われた背景の一つは、水の制御（治水）にあったと思われ、そうした祭祀と纒向土坑での祭祀がどのような関係にあるのかは今後の課題としたい。

また、既に示した辻土坑１は、流路に面した水場で、その位置は流路の合流点、区画の北西隅に位置することから境界に位置する特別な水場であったと想像される。

辻土坑２や辻土坑４では共存する建物跡が確認されておりそれは水辺の一定の継続や機能性を示したものと思われる。辻土坑４の下には方形状の浅い掘込み（辻土坑４の時期を考えると纒向２式古相頃）が確認されており、その南面には土坑３（纒向１～２式）が隣接して確認されている。この土坑３は方形状の浅い掘込み（方形状落込/竪穴遺構？）に関係したものと考えられる（図５参照）。それらは建物等と共存した特別な井戸であったと推測され、その「場」は辻土坑４にも受継がれる。

この辻地区一帯は、河川や溝に囲まれた場所で、湧水層に達する深いものでは井戸（湧水土坑）や水場、浅いものでは土坑があり、いずれにも祭祀的な行為が認められることから、一定期間に渡って祭祀が行われた空間であったと理解される。そうした祭祀の契機は、石野博信氏の示すように共同体の祈年行事的なものに加えて、特別な水辺を介した個々の祭礼や祈り、祭祀にまつわる禊や祓など、さまざまな状況があったと想像される。

そして、纒向辻土坑群の位置する空間には建物遺構は

殆ど確認されておらず、そうした空間が居住域や水田、耕作地にあたらないとすれば、広場か、祭祀区画か、人々が交流するような場か、纒向遺跡 168 次調査の大型土坑（SK3001）からはモモやウリなどの多量の栽培植物が見つかっており、そうした植物を栽培した小鳥の囀りが聞こえるような苑や庭のような空間であろうか、さまざまな可能性が考えられるが現状では仮説の域を越えない。

ちなみに纒向遺跡の性格については、寺澤薫氏が農耕を主体としない集落とし、政治や祭祀の治定する日本的都市の形成を論じており（寺澤 2011 等）、古くには酒井龍一氏が古墳造営キャンプとした見解を示している（酒井 1977）。そして、纒向遺跡の中枢をなすであろう大型建物（図 7 参照）については、現段階では未調査部分が多く王宮クラスの遺構とするには時期尚早とする関川尚功氏（関川 2020）の見解もあるが、建物群の中心軸が東西の同一軸線上に並ぶ、対称形とも言える建物配置は極めて特徴的であり、軸線を基に左右対称形を指向する構造物としてまず思いあたるのは前方後円墳である。

纒向遺跡の大型建物の位置は、東から西に下がる緩斜面のやや高い位置（標高 74.3 m）にあたり、建物から望む西のやや低い地点には纒向土坑群（標高 72 m、辻土坑 1・4）の存在した区画が、そのさらに西には墓域となる神聖な場が広がっていたと想定される。

そうした一連の空間は、周囲を河川に囲まれた水上に浮かぶような独立した狭隘な地形をなし、大型建物から纒向土坑群の位置する西の区画を望む様は、古墳（前方後円墳）の墳丘上［墳頂（後円部）→前方部］にも似たような独特の空間を形成していたと言えるのではないだろうか（図 9 参照）。

Ⅵ. まとめ

以上、石野博信氏らの先学諸氏の研究に導かれながら、さらに新視点を加えることは出来ないかと思い本論を記してきた。その内容を以下に纏める。

まず一つ目に、纒向土坑については、湧水を持たない土坑祭祀が存在する一方で、他の纒向土坑は水辺・水場としての機能性を有していた可能性（纒向土坑が祭祀に終始しない可能性）について論じた。またそうした水辺は、ある段階において祭祀的役割を担ったと解釈した。

二つ目には、石野博信氏は纒向土坑での祭祀の性格として「水と火のマツリ」「ニイナメオスクニ儀礼（後の新嘗祭）」「農耕祭祀の一面」を示している。水と火は湧水や焼木の存在に窺う事ができる。纒向土坑からの出土品については、祭祀的な土器群に加え、木製祭祀具等に「武威・信仰・農耕・技術・食」などの祭祀に関係した幾つもの要素が見られることから、石野氏の示すところの農耕祭祀を基本としつつ、そこにはさらなる祭祀の広

図 9　纒向土坑群の位置と周辺の諸相
［桜井市纒向学研究センター編 2020『史跡纒向遺跡 第 1 期整備事業報告書』・図 56 を筆者が改変作図］

がり（多様な性質）と多彩な集団が介在した可能性を示した。

三つ目には、外来系土器に見られる他地域の人々との交流のなかで、祭祀に扱われる水と火、豊富な祭祀系遺物、そこに介在する人々の多様性が織りなす他地域には例のない「纒向型祭祀」が創出・醸成された可能性を指摘した。そこには、弓・盾などの武器形木製品や槽・盤などの容器類、紡織具、鳥形・舟形木製品など、古墳祭祀（葬送）や後の集落祭祀に繋がる点があり、古墳時代祭祀の基層になるような素養が多分に看取される点を示した。今回取り上げた纒向土坑の祭祀とは、時として、水や水辺を対象とした作法であり、時として、水をあわせ介した、集団や共同体的な祭礼であったと推測される。

最後に、辻地区の纒向土坑群の位置と大型建物（居館）や周辺地形との関係から、土坑群の存在した四方を水辺に囲繞された空間を、広場、祭祀区画、苑域、庭等と仮定し、そこでの祭祀としては祈年的祭礼や個々の祈り、祭祀にまつわる禊や祓などを想定した。

そして、周囲を河川・溝等の水辺に囲まれた狭隘な地形と大型建物から西に向かって傾斜する地形、大型建物の東西軸線を軸とする設計と前方後円墳の持つ左右対象性への指向との連想から、王宮域・大型建物（≒古墳の後円部と仮定）とその前方に広がる祭祀区画・広場（≒古墳の前方部と仮定）の存在した立地は、古墳墳丘上の相似形とも言えるような空間を形成していたのではないか、換言すれば、古墳の形に影響を与えるような「原初的な景観」がそこには存在した可能性について言及した（図９参照）。以上を纏めとし本論を終えたい。

謝辞

本論の作成にあたっては事実関係等の確認を含め、関川尚功氏、今尾文昭氏、小池香津江氏、堀大介氏、福辻淳氏、飯塚健太氏の諸氏にご教示いただいた。深く感謝申し上げたい。

【引用参考文献】

石野博信・関川尚功・豊岡卓之『纒向』奈良県立橿原考古学研究所 初版 1976、第５版 1999

石野博信編 2005『大和・纒向遺跡』 学生社

今尾文昭 2009『古墳文化の成立と社会』 青木書店

岡田精司 1992『古代祭祀の史的研究』 塙書房

酒井龍一 1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』第 24 巻２号

清水眞一 2007『最初の巨大古墳・箸墓古墳』シリーズ遺跡を学ぶ 35 新泉社

関川尚功 2020『考古学から見た邪馬台国大和説』梓書院

寺澤薫 2000『日本の歴史 02 王権誕生』 講談社

寺澤薫 2011『王権と都市の形成史論』 吉川弘文館

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 2005『水と祭祀の考古学』 学生社

新納泉 2018「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 211 集

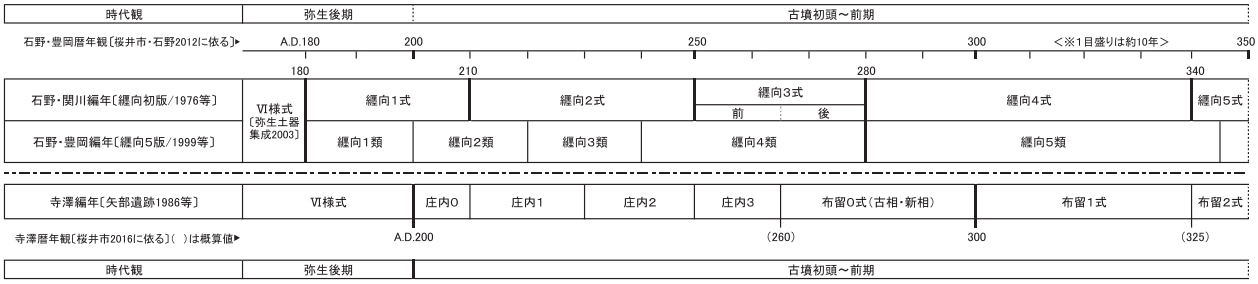
橋本輝彦 2021「纒向遺跡研究の今」『季刊考古学』156 号 雄山閣

坂靖 2020『ヤマト王権の古代学』 新泉社

福辻淳 2013「纒向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纒向学研究』第１号 桜井市纒向学研究センター

藤田三郎 2011「奈良盆地の弥生環濠集落の解体」『大和王権はいかにして始まったか』唐古・鍵ミュージアム / 桜井市立埋蔵文化財センター編

山﨑孝盛 2005「古墳時代の井戸祭祀に関する一考察」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』20 巻 岡山大学大学院文化科学研究科編



【註】纒向遺跡に関わる土器編年の対応関係を上図に示した、目安程度に参照願いたい。便宜的に区分した図表であり、実態は重複する箇所も存在する。また石野編年に寺澤編年を対応させたため寺澤編年の時間的表記・横幅が歪となった点は容赦願いたい。

【図作成に際して参考とした文献】石野・関川・豊岡『纒向』初版1976/第5版1999橿原考古学研究所、寺澤薫『矢部遺跡』1986橿考研、桜井市教育委員会編『史跡纒向遺跡―保存活用計画書―』2016、桜井市教委編・石野博信『纒向石塚古墳』2012/p.372、橿原考古学研究所編『奈良県の弥生土器集成 本文編・資料編』2003、唐古・鍵考古学ミュージアム・桜井市立埋蔵文化財センター編『ヤマト王権はいかにして始まったか』2011学生社、財団法人大阪府文化財センター編『古式土師器の年代学』2006/p531。

図10　纒向遺跡に関係する土器編年の対照表

表１－１　弥生時代末から古墳時代前期にかけての纒向土坑の一覧表①

出典：報告書 / 掲載図書	遺跡名 / 地区名等	遺構番号	弥生・纒向編年：石野・関川（豊岡編年）〈時代〉	寺澤編年 ※は読替え	法量		湧水層の有無	平面形	断面形	構造・特徴	出土遺物概要		備考
					径（m）	深さ（m）					土器等	木製品・石製品・種子類ほか	
桜井市教育委員会編『纒向遺跡発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 28 集』2007	纒向遺跡第 42 次（巻野内坂田地区）	土坑１	Ⅵ-2 様式	—	3.8	1.8	○	不整円形	逆台形	素掘り	壷、甕、鉢、高、器、礫など	—	土器は中層にまとまる。外来系土器（東海系）含む
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	東田地区	土坑４	纒向１式（纒向１類）	庄内０式※	1.3 ～ 1.4	0.65	○	不整形	逆台形	素掘り	壷、甕、片口鉢、高、手焙	坑底付近から板材（水平に出土）	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑 17	纒向１式	庄内０式※	1m 前後	0.17	△	不整形（底付近残存）	不整形	素掘り	甕、小型壷、小形鉢	木端 20 数片、割木、自然木など	
桜井市教育委員会編『桜井市平成 16 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告第 26 集』2005	纒向遺跡第 140 次	土坑１	纒向１式	庄内０式※	2.3 ～ 2.7	1.2	○	不整円形	椀形	素掘り	壷、二重壷、甕、鉢（小形鉢、有孔鉢含む）、高、小器	盾形木製品、鍬、耕起具、棒材、板材、加工木、焼木（木製品は中・下層を中心に出土）、籠状木製品３点（中・下層）など	最上層から上・中層にかけて多量の土器。穿孔された土器を含む
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報 1983 年度（第一分冊）』1996	纒向遺跡第 38 次	第６ピット SK01	纒向１式	—	0.8 ～ 1.5	1.2	○	不整形	U 字形	素掘り	壷、甕、高の各１点	—	下層付近から完形に近い土器
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑１	纒向１式（纒向２類）	庄内０～１式※	4.3 ～ 5.0	0.9	○	不整形	不整形な段掘り	石組、杭・板材あり	壷、二重壷、甕、鉢、甑、高、器、小器	杭、部材、板材、多量の自然木など	赤彩含む
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	東田地区	土坑３	纒向２式（纒向２類）	庄内０～１式※	1.0 ～ 1.3	0.65	○	不整形	逆台形？	素掘り	壷、甕、鉢、高、器	—	坑底付近で倒立した（伏せた状態の）土器壷。他には、煤の付着した壷・甕、朱の付着した鉢や高杯
福辻淳「纒向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纒向学研究　第１号』桜井市纒向学研究センター 2013	纒向遺跡第 149 次	（太田池底土坑）	—	庄内式古相	1.4 ～ 1.7	1.5	○	不整円形	段掘り	素掘り	壷、甕、高、二重壷、ミニチュア土器	木製仮面、木製盾、木製鎌柄、棒状木製品、上層から多量の木製品・加工木など	木製の仮面は鍬身を転用。盾には赤彩あり。
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第 195 次	SK37	—	庄内式古相	2m 前後か？	1.82	○	不整形	段掘り	素掘り	土器類（詳細不明）	鋤、木製盾、卜骨、鹿角未製品、焼木など	SK36、37 は隣接（少し重複）。SK37 が先行
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑３	纒向１～２式	庄内０～２式※	1.3 ～ 1.6	0.6	○	円形	椀形	素掘り	壷、二重壷、甕	板材	壷は坑底に据え置き
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑２	纒向２式	庄内１～２式※	3.2 ～ 4.0	0.8	○	不整円形	逆台形	素掘り	壷（穿孔品含む）、二重壷、甕、鉢、小形鉢、甑、高、小器	鋤先先端片、柄の破片、割木、自然木など	外来系土器（播磨）、赤彩含む、壷に穿孔あり。掘立柱建物（建物１）に隣接
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑８	纒向２式	庄内１～２式※	3	1.4	○	不整円形	段掘り	素掘り	壷、二重壷、鉢、高、土製支脚	—	下層に完形に近い壷、骨片含む、外来系土器（播磨）、赤彩含む
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑 15	纒向２式	庄内１～２式※	1.7	0.8	○	円形	椀形	素掘り	壷、片口鉢（各完形に近い）	—	
桜井市教育委員会編『桜井市平成 17 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告第 27 集』2006	纒向遺跡第 145 次	土坑２	—	庄内式新相	1.1 ～ 1.4	1	○	不整形	逆台形	素掘り	最下層：甕、鉢、高、砥石、貝殻片。下層：甕（台付）、高。中層：甕、籠状製品（140 次のものと編み方が似ている）。上層：甕（完形・穿孔品）、高、小器、土製支脚など	木片（中層）	外来系土器（山陰系・東海系）含む。土坑には溝（幅 60 ～ 80、深さ 20 cm）が取り付く。東田大塚古墳に近い場所
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑５	纒向２式（纒向３類）	庄内式新相	2.3 ～ 2.5	1.6	○	不整形	逆台形	素掘り	壷、鉢、小丸鉢、高、小器	下層から板材、棒材？、自然木、環状木製品	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	東田地区	土坑６A	纒向２式（纒向３類）	庄内１～２式※	2.0 ～ 2.5	1.3	○	不整形	逆台形	素掘り	壷、小形壷（穿孔含む）、ミニチュア土器、甕、鉢、小丸鉢、小器など	—	上層と下層の間には、砂層のレンズ状堆積。下層に完形土器を含む土器群。外来系土器（瀬戸内系・東海系）含む
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第５版）	東田地区	土坑６B	纒向２式（纒向３類）	庄内１～２式※	1	0.7	○	円形	逆台形？	素掘り	壷、甕、鉢、高、器	—	土坑６Ａを切って掘削。土器は坑底に集中。外来系土器（東海系）含む
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報 1999 年度（第三分冊）』2000	纒向遺跡第 117 次	SK01	纒向２～３式（纒向３～４類）	庄内１～布留０式	2.1 ～ 2.3 ＋α	1.06	○	不整形	逆台形？	素掘り	上層：鉄鏃（圭頭形）、中層：完形土器複数含む（器種は不明）、下層：管玉１点	—	溝が付設
桜井市教育委員会編『桜井市平成 19 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 31 集』2009	纒向遺跡第 153 次	土坑２	—	庄内式古相	1.0 ～ 1.2	0.65	○	円形	逆台形	素掘り	中層：甕（完形に近い）	—	東田大塚古墳に隣接
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報 1999 年度（第三分冊）』2000	纒向遺跡第 117 次	SK02	纒向２式新相～３式（纒向４類）	庄内２～布留０式※	2.9 ～ 3.2	1.6	○	不整円形	逆台形	素掘り＋井戸枠（オニグルミ材）残	上層：多量の土器、鉄鏃（圭頭形、柳葉形）、イノシシ型土製品、中層：甕（山陰系含む）、下層：川原石４点。土器は、壷、小丸壷、二重壷、甕、鉢、小丸鉢、高、小器など。他に石製紡錘車（緑色）、管玉（緑色凝灰岩）、ガラス小玉（青色）は井戸枠裏込土から出土	種子類：ウメ、スモモ、モモ、イネ、アワ、ヒエ、アサ、マメ類、エゴマ、メロン類、ヒョウタン類、オニグルミ、イチイガシ、カジノキ属、マタタビ属、サクラ属、サンショウ、ブドウ属、ニワトコなど	土坑内に先行する土坑の痕跡

表１－２　弥生時代末から古墳時代前期にかけての纒向土坑の一覧表②

出典：報告書 / 掲載図書	遺跡名 / 地区名等	遺構番号	弥生・纒向編年：石野・関川（豊岡編年）〈時代〉	寺澤編年 ※は読替え	法量		湧水層の有無	平面形	断面形	構造・特徴	出土遺物概要		備考
					径（m）	深さ（m）					土器等	木製品・石製品・種子類ほか	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第5版）	辻地区	土坑４	下層：纒向２式新相～３式（纒向４類）、上層：纒向４式（纒向５類）	下層：庄内２～布留０式、上層：布留０～１式※	3	2	○	不整円形	椀形	素掘り	壷、二重壷、小形壷、小丸壷、甕、鉢、小丸鉢、器、小器、支脚	①黒色粘質土（中下層）：黒漆丸木弓、竪杵、柄、装飾高杯、盤、把手付鉢、箸状品、有頭細木、円形棒、板材、割木、焼木。②植物層（中下層）：筵、経巻具、布巻具、腰掛、杓子、蓋、儀仗、舟形木製品（線刻表現「梶あり」）、水鳥形木製品、杭、有頭棒、尖頭有頭棒、柄状品、割木、自然木、瓢箪（皮）、藤蔓、籠・箕（編物）、櫂状木製品。③黒褐色土層（上層）：石包丁形木製品、盆、蓋、竪櫛、横架材、柄組の木製品（組材）、尖頭棒、半円形状板、割板、焼木、自然木	外来系土器（山陰・北陸・東海／伊勢）、赤彩含む。その他、桃核、種子類。掘立柱建物（建物２）が隣接
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第5版）	東田地区	土坑５	纒向３式（纒向４類）	庄内２～布留０式	1.9～2.0	1.3	○	不整形	逆台形	素掘り	壷、甕、鉢、器、蓋	—	上層と下層の間に炭層。下層は土器片少量
桜井市教育委員会編『桜井市平成 22 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告第 37 集』2012	纒向遺跡第 169 次	SK1002	—	庄内３式	1.8～2.2	0.8	○	不整形	段掘り	素掘り	壷、甕（完形品含む）、高、小器	棒材（30 cm前後）など	遺物は上層と下層に分かれる
桜井市纒向学研究センター・桜井市教育委員会編『奈良県桜井市纒向遺跡発掘調査概要報告−トリノイ前地区における発掘調査−、桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 40 集』2013	纒向遺跡第 168 次	SK3001	—	庄内３式新相	2.2×4.3	0.35～0.8	○	長楕円形	椀形	素掘り	壷（短頸壷:線刻あり、小形壷:穿孔あり）、甕、高、器、ミニチュア土器、手捏ね土器、ガラス製棗玉など	ヘラ状木製品（4）、黒漆塗弓、槽、筒形容器、横槌（2）、剣形木製品、竹製籠（6）、敷居財、垂木など。種子類・栽培種:モモ（2,769）、スモモ（52）、イネ（938）、ヒエ（2）、アワ（74）、アサ（535）、ササゲ属（3）、エゴマ（24）、ウリ類（2,076）、ヒョウタン（213）、その他にも野生種が多種分析確認。動物遺存体:イワシ類、タイ科（マダイ・ヘダイ）、アジ科、サバ科、淡水魚、ツチカエル、ニホンアカガエル、カモ科、ニホンジカ、イノシシ属ほか	大型建物の廃絶後の土坑と報告
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第5版）	辻地区	土坑 10	纒向３式	庄内３～布留０式※	1	0.8	○	不整円形	一	素掘り	甕	織物（筒状の編物製品）	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第5版）	辻地区	土坑 12	纒向３式	庄内３～布留０式※	1.2～1.5	0.4	○	台形に近い不整形	逆台形？	素掘り	坑底に大形鉢	先端の尖った板材（30.3×9.4×1.1 cm）、斧状の工具で整形された板材（41.0×41.0×2.4 cm）、枠材か	自然石
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1976（初版）・1999（第5版）	辻地区	土坑 13	纒向３式	庄内３～布留０式※	2.0～2.3	0.8	○	不整円形	段掘り（逆Ｌ字状）	素掘り	壷、小形壷、甕、高	板材（35.4×2.8×0.5 cm）、割木、自然木	獣骨（頭部）
桜井市教育委員会編『桜井市平成 15 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 25 集』2004	纒向遺跡第 138 次	土坑３	—	布留０式	1.2～1.7	1.02	○	不整形	逆台形？	素掘り	壷（穿孔品含む）、甕、鉢、小形鉢、高	—	
（財）桜井市文化財協会編『奈良県桜井市東田大塚古墳−奈良盆地南東部における纒向型前方後円墳の調査−、桜井市内埋蔵文化財 1998 年度発掘調査報告書１』2006	纒向遺跡第 113 次	SE2001	—	布留０式	1.4	1.9	○	不整形	U 字形	素掘り	壷、甕、小形鉢（有孔鉢含む）、高、小器	板状木製品、加工木	外来系土器（山陰系）含む。最下層から完形品の山陰系甕（頸部に憂）、小形鉢（東海系）。東田大塚古墳に隣接
桜井市教育委員会編『桜井市平成 19 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 31 集』2009	纒向遺跡第 153 次	土坑１	—	布留０式	1.6	0.9	○	不整形	逆台形	素掘り	甕、壷、高、小丸鉢、小器	—	東田大塚古墳に隣接
桜井市纒向学研究センター・桜井市教育委員会編『奈良県桜井市纒向遺跡発掘調査概要報告−トリノイ前地区における発掘調査−、桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 40 集』2013	纒向遺跡第 176 次	SK3001A	—	布留０式	2	0.9	○	円形	逆台形	素掘り＋井戸枠一部残	ミニチュア土器、土器片	—	
桜井市纒向学研究センター編『纒向考古学通信 vol.5』	纒向遺跡第 176 次	SK1001	—	布留０式	2～3	1m以上	○	不整形	段掘り	素掘り	壷、甕など	—	
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第 195 次	SK13	—	布留０式	1.2～1.7	0.68	○	不整形	—	素掘り	小形鉢など	木製盾、横槌、木鏃、加工木など	SK12、13 は隣接（少し重複）。SK12 が先行
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第 195 次	SK36	—	布留０式	2.1～2.5	1.76	○	不整形	段掘り	素掘り	甕（山陰系、完形に近い）、器台（山陰系）、小器など	鋤、竪杵、網籠、貝殻など	外来系土器（山陰系）含む
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第 195 次	SK38	—	布留０式	2～3	1.34	○	不整形	椀形か？	素掘り	壷、甕（完形に近いものを多く含む）、中層付近に集中、高、ミニチュア土器、銅鏃、ガラス玉	舟形木製品など	外来系土器（東海系、近江系）含む
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第 195 次	SE67	—	布留０式	3m前後？	2m前後？	○	不整円形	逆台形	素掘り＋井戸枠、周辺に石敷？	下層から甕等（一部欠損？）が出土	—	
桜井市纒向学研究センター・桜井市教育委員会編『奈良県桜井市纒向遺跡発掘調査概要報告−トリノイ前地区における発掘調査−、桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 40 集』2013	纒向遺跡第 176 次	SK3001B	—	布留０式以前か？	2m前後か？	1m？	○	不整円形	逆台形	素掘り	詳細不明	—	3001A に先行する。※3001A・B は隣接し部分的に重複
桜井市教育委員会編『桜井市平成 17 年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 27 集』2006	纒向遺跡第 145 次	土坑４	—	布留式古相（布留０式）	2.1	1.2	○	不整円形	椀形	素掘り	最下層～下層：二重壷、甕（穿孔品含む）、小丸鉢、高、土製支脚９点、貝殻片（巻貝）など	棒材？など	外来系土器か？東田大塚古墳に近い場所

表１－３　弥生時代末から古墳時代前期にかけての纒向土坑の一覧表③

出典：報告書／掲載図書	遺跡名／地区名等	遺構番号	弥生・纒向編年：石野・関川（豊岡編年）〈時代〉	寺澤編年 ※は読替え	法量		湧水層の有無	平面形	断面形	構造・特徴	出土遺物概要		備考
					径（m）	深さ（m）					土器等	木製品・石製品・種子類ほか	
桜井市教育委員会編「纒向遺跡・纒向小学校跡地区第六次発掘調査資料」1987	纒向遺跡第48次	土坑１	纒向３～４式？	—	5.0～6.0	1.5	○	不整形	—	素掘り	土器多量に出土	盤、杖、籠など	溝が付設
（財）桜井市文化財協会編『桜井市埋蔵文化財　2002年度発掘調査報告３』2003	纒向遺跡第132次	SE3001	—	布留０～１式	1.0×1.2	0.4	○	方形	逆台形？	素掘り	壷、甕（完形品含む）、漆付着あり	棒材、板材、焼木	上部は大きく削平。溝が付設。外来系土器（吉備系、東海系）含む
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報1989年度（第二分冊）』1990	三輪松之本遺跡第１次	SK02	布留式古相	—	1.5	1.2	△	不整円形	逆台形	素掘り	小丸鉢、高、小器	—	
桜井市教育委員会編『桜井市平成20年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33集』2010	纒向遺跡第158次	井戸１	—	布留１式	1.2～1.7	0.9	○	不整形	段掘り？	素掘り＋井戸枠	底付近・下層から壷、小形壷（穿孔あり）、小丸壷、小丸鉢、甕、高など。掘形から土玉など	籠、加工木	外来系土器（東海系、阿波系、山陰系、近江系）含む。
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報告1997年度（第二分冊）』1998	勝山古墳（第１次）	SK04	纒向４式（纒向５類）	布留１式最古相	2.2～2.6	0.8	○	楕円に近い不整形	段掘り	素掘り	壷、小丸壷、甕、高、小丸鉢、小器、羽口、鉄鏃、錐状鉄製品、鉄片、鉄滓、砥石、金床石	柄（手斧・鋤）、籠、棒材、板材、杭、加工木、自然木、焼木、種子類など	陶質土器含む。外来系土器（東海系）含む。勝山古墳に北西に隣接
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑７	纒向４式（纒向５類）	布留１式※	1.4～1.6	0.6	○	円形	椀形に近い段掘り	素掘り	壷、小丸壷、甕、鉢（内面に朱の付着）、手焙	—	外来系土器（吉備）、赤彩含む、自然石、抗底に小形丸底壷
桜井市教育委員会編『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書24集』2003	纒向遺跡第134次	土坑３	—	布留１式	1.1～1.6	0.95	○	不整形	段掘り（上部大幅削平）	素掘り	壷、二重壷、小丸壷、甕、小丸鉢など。甕は口縁部片が多く見られる	板状木製品、石製臼	外来系土器（東海系、吉備系、阿波系）含む。石製臼（朱の精製に使用か？）。土坑内に礫を複数確認
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報1983年度（第一分冊）』1984	纒向遺跡第38次	第４ピット井戸	—	布留１式	1.86～2.18	1.32	○	不整形	段掘り	素掘り＋井戸枠下端残	多量の土器（器種の詳細は不明）	木片	井筒の周囲を８枚の板が取り巻く
（財）桜井市文化財協会編『桜井市内埋蔵文化財1995年度　発掘調査報告書１』1996	大福遺跡第12次	SK01	—	布留２式	1.55	0.36	○	円形	逆台形	素掘り	甕、小丸壷２点、高２点	—	上部は大幅に削平
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑６	＜古墳初頭～前期＞	—	2.3～2.8	0.9	○	不整形	不整形な椀形	素掘り	壷・甕片など	複数の割材（加工木片）	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑16	＜古墳初頭～前期＞	—	1.3～1.4	1	○	不整形	逆台形？	素掘り	甕など	板材、棒材、割木	
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑11	纒向５式	布留２式※	0.75～0.9	0.9	○	楕円形	逆台形	素掘り	壷、甕（中層に完形に復元できる２個体）	—	上層に平石
橿原考古学研究所編『纒向』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1976（初版）・1999（第５版）	辻地区	土坑14	纒向５式	布留２式※	0.9m（内に１辺0.6mの板枠）	0.3	○	不整形	不整形な椀形	素掘り	小丸壷、甕、小器（縁を打ち欠く）	板材（枠材）	上層に小石。現在の大照御魂神社側に位置
公益財団法人桜井市文化財協会『桜井市内遺跡発掘調査報告書2013年度』2016	纒向遺跡第181次	SK105	—	布留式新相	1.7～2.0	0.8	○	不整形	逆台形	素掘り	最下層付近で甕（完形品）、高杯の受部	—	
西村知浩「桜井市纒向遺跡の発掘調査−太田微高地上の調査−」『近畿弥生の会第22回集会奈良場所発表要旨集』2019	纒向遺跡第195次	SK12	—	布留式新相	0.94～1.3	0.5	○	不整形	—	素掘り	土器出土だが詳細不明	—	埋土中に炭化物
橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概要報2002年（第二分冊）』2003	纒向遺跡第128次	井戸	—	布留式併行	2.4	1.7	○	不整円形	逆台形？	素掘り	壷、小丸壷、甕、鉢、高、器	加工木、種子類	下層付近からも出土。完形に近い土器含む

【凡例】土器編年に関しては報告にある表記・内容に準じた。石野・関川・豊岡編年は必要に応じて寺澤編年（※）に読み替えている。平面形や断面形については拙稿（山﨑2005）の内容に準じた。表中の土器の器種ついては、壷、二重壷（二重口縁壷）、小丸壷（小形丸底壷）、甕、鉢、小丸鉢（小形丸底鉢）、高（高杯）、器（器台）、小器（小形器台）、手焙（手焙形土器）などと一部略記してある。

「導水施設」研究の軌跡と展望

－その「浄水化」性を問う－

穂　積　裕　昌

Ⅰ．纒向遺跡の導水施設

昭和62（1987）年、桜井市教育委員会によって実施された纒向遺跡第50次調査（巻野内家ツラ地区）の発掘調査において、庄内期の水路を埋めて設営された、木槽を転用した集水枡と木樋、石敷き遺構から構成された「導水施設」が発見された[1)]。導水施設の構造は、北側（木樋）と東側（構造物が残存しないため詳細不明）から取り込まれた水が木槽に導かれ、オーバーフローした水が西側へ排出される構造として捉えられた。南側についても、施設群の南側を流れる溝１から取水した水が木樋を通じて板材で四周を囲った石敷内に引き込まれ、そこで濾過された水が溝と木樋を通じて木槽へ引き込まれるとともに、余剰の水は石敷き遺構から木樋を通して施設外へ排出されたとみられている。

平成８（1996）年には、第50次調査の東側隣接地で纒向遺跡第90次調査が行われた[2)]。第50次調査で確認された導水施設の関連遺構が出ることが期待されたが、直接関係するものは出土しなかった。しかし、導水施設の給水源のひとつと想定されている溝１の下層に存在した溝２の東側延長部とみられる第２トレンチSD－2001・2002が確認され、その最上層の土器群が布留０式でも新相と判断された。これにより、導水施設は、下層遺構（第50次調査SD２・３や第90次調査SD－2001・2002）が布留１式の早い段階までに埋没・整地された後、構築されたと考えられるに至った[3)]。

さて、この導水施設は、水を用いた祭儀の場と考えられることが多いが、第50次調査の調査者であった萩原儀征（以下、敬称略）は、本遺構について、祭祀に関わる遺物の出土がなく祭祀遺構とはいえず、実用的な機能をもった浄水施設だったとの見方を提出している[4)]。

以下、導水施設の機能に関して検討する。

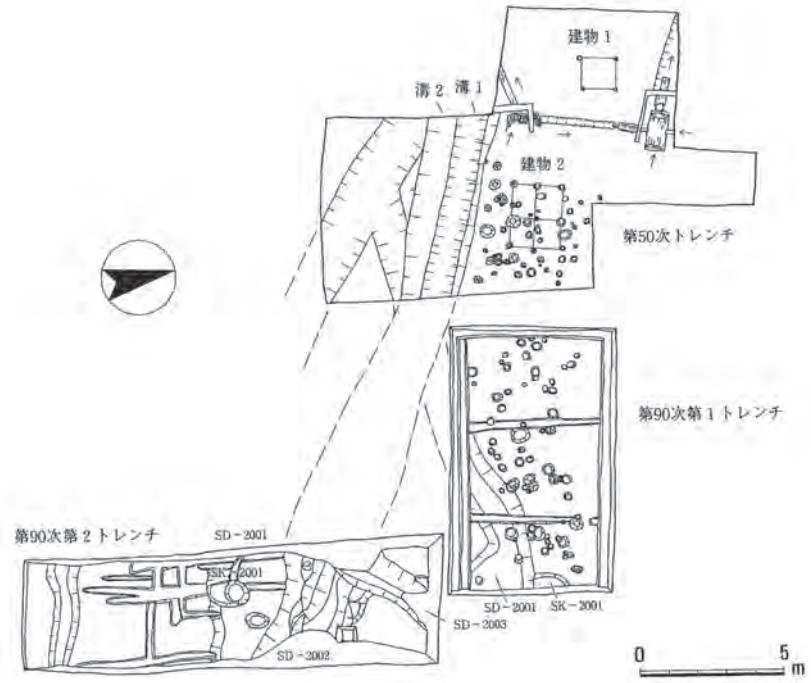


図１　纒向遺跡の導水施設

Ⅱ．多様な「導水」形態と「導水施設」

「導水施設」という用語は、纒向遺跡第 50 次調査で初めて用いられたものではなく、すでに 1979 年の滋賀県服部遺跡の調査概報で用いられ[5]、1991 年に類例を検討した石野博信によって、祭祀のための「導水施設」としてまとめられた遺構である[6]。

しかし、「水を引いてくる」ということに対して用いる一般的な用語である「導水」を、纒向遺跡第 50 次調査や服部遺跡、それに奈良県御所市南郷大東遺跡[7]などで確認された、木槽や木樋、槽付き木槽（＝木槽樋）、覆屋などで構成された特定の遺構群に対して「導水施設」として用いることは、一部に若干の混乱をもたらした。用語が覆う意味の範囲が広いにも関わらず、その意味を特定の限定した狭い対象に対してのみ適応させたことの弊害である。

そもそも、水田耕作をはじめとする農耕のための灌漑用水や、生活上不可欠な飲料水、それに金属器の生産に必要となる用水の確保には、井水のほか、多かれ少なかれ何らかの導水（＝引水）の施設を設置して、その供給に努めたであろうことは想像に難くない。これら施設では、必要性に応じて導水の形態が様々に選択され、目的地まで引水される。この場合、「導水」という行為は、目的ではなく、プロセスである。

例えば、纒向遺跡の最初の調査で確認された東田地区の北溝と南溝（両溝は最終的に合流）で構成される纒向大溝は、護岸のため法面に打設された矢板や井堰、砂泥沈澱用とみられる集水マスなどの施設が伴う[8]。北構は辻地区の古墳時代前期河道から、南溝は国津神社付近の現纒向川蛇行地点付近から取水したと推定され[9]、水源となる河道から引水される状況は、まさに巨大な「導水」のための施設ということが可能である。報告書『纒向』では、纒向大溝について、物資運搬のための機能（＝運河）を兼ね備えた灌漑用水路とされているが、付設された矢板や集水マスなども含め、全体として纒向大溝は物資運搬と農業用灌漑のための「導水施設」を構成するものといえる。

同様に、水道施設が整備される以前の山村では、しばしば飲料水を含む生活用水を、人間の生活空間よりも上部にある湧水や小河川（＝山水・谷水）を水源として、

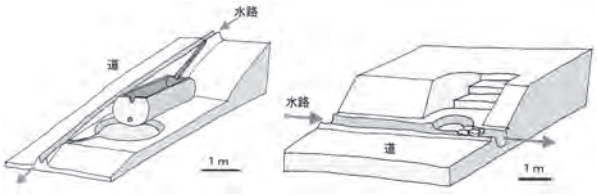


図２　岐阜県飛騨市宮川町の水利用システム

溝や管で家の内外まで引水し、利用してきた。

例えば、筆者も調査に参加した岐阜県飛騨市宮川町（調査当時は宮川村）種蔵の民俗調査[10]では、集落（2001 年時点で全 13 軒）で井戸のある家は１軒のみで、簡易水道敷設以前は飲料水を含む生活用水のすべてが、山際や段丘崖から湧き出す「シミズ」（自然湧出の水源、以下鉤括弧内は地元での呼び名）を集落まで導水し、賄われた。とりわけ、集落北東部の「ツベタ谷」から湧き出た湧水「シミズ」は、「イスイ」（シミズから導水するための水路）によって集落まで引き込まれ、そこから「トヨ」（木樋）を通じて各家ないしは数家単位で設けたれた水利用施設「ミズヤ」に分水された。ミズヤには「ミズフネ」（＝槽）が据えられ、トヨから常に水が流れ込む構造となっていた。各家の飲料水は、各家がイスイの水を利用できる最上流部、すなわちトヨから引いた水がミズフネに落ちる部分で採水され、家の中の甕で保管された。ミズフネは、食物や食器などを洗うなど生活全般に用いられ、そこから流れ出た下流部にはさらに「イケ」（流れを堰き止めて幅を広げた場所）が設けられ、水浸けの作業や農具の洗浄などに利用された。イスイの最下流部には、特別な汚れ物（赤ちゃんのオシメ等）を洗う「シメシ洗い場」があり、これより下流は「シリ」ないしは「シテミズ」（捨て水）と呼ばれ、排出されていった。

このように、種蔵の水利用は、上流部より、シミズ（湧水点）⇒イスイ（集落への導水部＝引き込み溝、上水）⇒トヨ（イスイから各戸への分水用の木樋）⇒ミズフネ（木槽、水利用の中心施設、きれいな水を必要とする利用）⇒イケ（比較的汚れても良い利用）⇒シメシ洗い場（汚水となっても可能なものの利用）と順次利用された。種蔵の事例では、これら施設の総体が、飲料水を含む生活用水利用のための、実用的な「導水施設」（＝導水システム）ということができる。もちろん、この「導水」を、「引水」に置き換えてもよい。

宮川町では、種蔵以外の西忍、牧戸の集落でも種蔵と

写真１　西忍のミズヤ　トヨからミズフネへ

写真２　西忍のミズヤ　トヨからミズフネへ

写真３　西忍に残るクリ製のミズフネ

写真４　西忍の二槽式のミズフネ

同等の水利用システムが報告されている[11]。これら集落では、ミズフネは蕨や麻などの水晒しの場としても利用されたという。木製だったミズフネがコンクリート製やステンレス製に変ったところも多いが、なかにはミズフネを２槽式としている事例もあり、水利用形態の多様性が窺われる。

宮川町のような傾斜地とは異なるものの、琵琶湖北西部の滋賀県高島市に残る湧水を各家に引き込む施設である「カバタ」[12]も、湧水豊富な平野部での水利用のあり方として、種蔵と共通する構造と意識の存在をみてとれる。水道敷設以前の前近代には、水源や湧水から引いてくるこのような水利用のあり方が、一般的なものであったとみられる。

一方、これらに対して、前述の纒向遺跡第 50 次調査や、奈良県御所市南郷大東遺跡、滋賀県守山市服部遺跡などの「導水施設」は、こうした目的地までの過程に生じたプロセスとしての「導水」をいうのでなく、木樋に引き入れた水を槽付き木樋（＝木槽樋）に通し、それを覆屋や遮蔽施設などで覆うという鋪設や仕様そのものに一定のルールをもち、共通した意識のもので構築された施設群に対して適応している。奈良県南郷大東遺跡では、施設の中心とみられる槽付き木槽を２間×２間の小さな建物（覆屋）で覆い、さらにそれを垣（遮蔽施設）で取り囲むという状況も明らかとなっている。この場合、「導水施設」とは、この部分で何らかの行為を行うことに施設構築の主たる目的があった遺構と推定されるのである。「導水」というプロセスでなく、ここで何が行われたのかが問題である。

Ⅲ.「導水施設」の定義

「導水」が示す意味の射程範囲が広い以上、特定用途をもつ施設だけに「導水施設」の術語を充てることは本来的には適切ではない。しかし、「導水施設」に関するこれまでの研究の経緯と、用語として定着している状況も踏まえ、筆者自身もこれまで記した自身の論考等[13]のなかで「導水施設」という用語を用いている。ここで筆者が用いる導水施設の定義を下記に示しておく。

導水施設；溝や木樋で導水した水を、遮蔽施設や覆屋などで構成された特定区域内に引き込み、その中に据えた木槽や槽付き木樋に水を通して何らかの行為を行うための施設

以上のように「導水施設」を規定し、灌漑や生活用水確保のために水源からの導水を図ってくる施設とは差別化を図ることとする。

なお、青柳泰介は、導水施設のなかで、ダム状の貯水池の存在も重視するが[14]、槽付き木樋などが据えられる遮蔽施設内への導水は、必ずしも貯水池を伴うとは限らず、溝から枝溝を引いて直接引水する場合もある。従って、筆者は貯水池を導水施設の要件とは認めていない(もちろん貯水池が存在してもよい)。ちなみに、導水施設への引水形態の諸相について筆者は、かつて下記のように整理した[15]。

- ●主流路⇒引込溝⇒貯水池⇒覆屋＋導水施設；神並・西ノ辻遺跡（５世紀後半）
- ●主流路⇒貯水池⇒覆屋＋導水施設；南郷大東遺跡（５世紀）
- ●（導水 or 自噴）⇒貯水池⇒露天の導水施設；服部遺跡（４世紀）
- ●主流路⇒引込溝⇒露天の導水施設；纒向遺跡（３世紀後半～４世紀）、大柳生宮ノ前遺跡（５世紀後半）[16]
- ●主流路⇒露天の導水施設；浅後谷南遺跡（４世紀）[17]・瓦谷遺跡（４世紀）[18]

Ⅳ. 導水施設の範囲

筆者は、導水施設を前節で示した自身の規定に従い議論しているが、論者によっては「導水」という状況と、「導水施設」の機能に関して一部論者から提出された仮説である「浄水化」というタームに照応させて、筆者の理解では「導水施設」の範疇には入らないと思われる遺構に対しても、「導水施設」として論を進めようとする事例がしばしばみられる。

例えば、滋賀県下鈎遺跡の「「導水施設」状遺構」は、自然河道から取水した水を、溝を通じて土坑に引き入れて「浄水」化し、その水を２本の溝に分水して下流部へ流す遺構とされる[19]。確かに、「浄水」機能をもつとされる土坑には、１間×１間の簡素な建物が伴い、導水施設の覆屋的なものにもみえる。しかし、土坑は深く、筆者には南郷大東遺跡や服部遺跡などの導水施設との共通性よりも、纒向大溝にあった砂泥沈澱用とみられる集水マスとの親和性をより強く感じさせる。そして、この下鈎遺跡と、南郷大東遺跡らを繋げるものが、「浄水化」というワードである。

導水施設における「浄水化」という考え方は、後述のように、主に導水施設を「水の祭祀のための場」と考える研究者によって提唱、強調されてきた。

導水施設として現状で最も充実した内容をもつ南郷大東遺跡の調査を担当した青柳泰介は、「このような謎の多い施設には付き物の解釈論が流行した」とその後の導水施設（及びそれを原形とした囲形埴輪）研究の経過を批判的に捉えたうえで、近年新たな出土例が相次いだ導水施設の槽付き木樋について詳細な検討を行っている[20]。その検討自体は、まことに有益な仕事で、筆者にも資するところが大きいが、「浄水化」という機能に関わる仮説は、主として青柳も含めた調査関係者から提出されてきたものであり、それゆえ導水施設と囲形埴輪に関わって論を組み立てようとする研究者へ波及する影響も大きかった。このため、導水施設の用途に関しては、導水施設内での祭祀という考え方を採らない研究者も、導水部の機能については「浄水化」を前提に、自身の論を組み立てている事例がある。

例えば、導水施設を祭祀の場とする「水の祭儀」論を否定する笹生衛は、一方で導水施設の「浄水化」機能を前提として、導水施設を「神や祖へ供える「御膳つ水」を汲む施設」という説を提起している[21]。

このように、導水施設をどのような用途に用いたのかを考えること以前に、その用途推定の前提となる機能について、改めて検証を行う必要がある。

Ⅴ．導水施設の機能に関する諸説

前述のように、導水施設は、1978 年に滋賀県服部遺跡ではじめて確認されたのを嚆矢に、大阪府神並・西ノ辻遺跡[22]や奈良県纒向遺跡で類例が発見された。それを最初に報じた服部遺跡の概報には「浄水を得る導水施設の機能を果たしていたのではないかと考えられる」との指摘[23]がある。すでにこの段階から、「導水施設」という用語の提示と、浄水を得るためという機能についての推定がなされ、その後の研究の流れを規定したのである。

そして、1991 年、石野博信は「上流から導かれた水が、ここで浄水され、祭場？（石敷部分）へと送られたのであろうか」と指摘[24]するとともに、巻頭の図版説明（９導水施設）では「神に捧げる浄水か」と記して、神マツリに伴う「導水施設」という考え方が定着する契機となった。

ただし、その後石野は、導水施設の典型例とされる南郷大東遺跡や、纒向遺跡の導水施設から採取された土壌に寄生虫卵が発見されたことを受け、導水施設の機能推定を糞尿を撒く祭祀施設説に転じている[25]。

ここで、改めて導水施設の機能に関する諸説を整理しておこう。これでまで提起された導水施設の用途に関する代表的な説として、

Ａ；水に関わる祭祀場説
Ｂ；神ないしは死者（祖）に奉げる特別な水の採取場説
Ｃ；禊場説
Ｄ；殯所説
Ｅ；水洗トイレ（＝川屋）説
Ｆ；産屋説
Ｇ；糞尿を撒く祭祀施設説

がある。このうちＦの産屋説は、Ｅのトイレ説から派生した考え方で、トイレ機能を前提とした立論であるため、大きくはトイレ説に包含することも可能である。Ｇの糞尿を撒く祭祀施設説も合わせ、いずれも導水施設もしくはその下流部より人糞に由来する寄生虫卵が出土したことから提唱されたものである。しかし、この見解に対しては、寄生虫卵は導水施設としての機能停止後に入ったものとして、調査関係者を中心に強い反論がある。

以下、それぞれの説の内容を、木樋及び槽付き木槽の機能推定とともに、確認していこう。

Ａ　水に関わる祭祀場

導水施設をカミに従う祭祀施設、具体的には古墳時代首長が水のマツリを実修した場とする考え方で、南郷大東遺跡の調査に関わった青柳泰介[26]や坂靖[27]のほか、今尾文昭[28]、滝斎[29]、若狭徹[30]、辰巳和弘[31]、白石太一郎[32]など多くの論者がこの説を提唱または支持している。現時点における導水施設の用途に関する通説的位置にあるといってよい。ここで推定された木樋や槽付き木樋の機能は、「ダム・木樋など大規模な構造物を用いて、河の水の不純物を沈澱させ、さらに濾過を行って、きれいな水の生成を行う施設」であり、「木樋で水を流し、沈澱と濾過を繰り返すことによってきれいな水をとることを目的として作られ」、これら行為は「治水の英知を象徴しているかのように思える。治水を行い、上水道ともいえる美しい水をとり、その水で生産を祈念したのではないだろうか」と結んだ坂の指摘[33]で代表することができる。

同様に、大阪府八尾市の心合山古墳で出土した導水施設を具現化した囲形埴輪を「水の祭祀場を表した埴輪」として報告した滝も、導水施設を「河川や溝、水源地から水を引き、貯留や堰によって濾過し、堰と槽と樋から成る浄水装置によって浄水を得るための一連の遺構」であると指摘し、主たる機能は浄水化のための濾過機能にあると考えた。そのうえで、導水施設は「祭祀を執り行う場」でもあって、その祭祀とは「首長と各共同体との結びつきの確認を中心としたもの」で、「河川の治水工事の縮小版とでもいうべき導水施設によって得られた、浄らかな水＝治水、を用いて共同体の紐帯を確認しあう祭祀」と指摘した[34]。

一方、青柳は、導水施設を「水辺の祭祀」を行った施設と捉えたうえで、「有力者と渡来人の統率者などのごく限られた人々により、連帯意識を高めるための儀礼を、土地開発の象徴ともいえる貯水池とその水を汲むための槽付きの木樋を構築して行った」と指摘するものの[35]、あまり祭祀の具体的な内容には踏み込まず、慎重な態度に終始されている。ただし、木樋や槽付き木樋の用途については、上澄みを流して濾過を繰り返すための施設として、機能については坂や滝と同様の理解を示している。

B　神もしくは死者（祖）に捧げる特別な水の採取場

導水施設を神や死者（祖）に捧げる水（＝御膳つ水）を採取したとみる論者が笹生衛である[36]。導水施設における「浄水」機能を前提とした立論で、導水施設はあくまで祭祀に用いる特別な水の採取場であり、祭祀の場そのものは導水施設ではなく、別の場所に想定されているところにA説との差異がある。最終的にそこで採取した水を用いて祭祀を執行するとすることから、A説と親和性があるともいえるが、笹生はその祭祀を「水の祭儀」ではなく、大嘗祭などの原形としての祖を祀る祭祀とし、その御饌に用いる飲料水や調理水としての御膳つ水を導水施設で得るとするところに氏の独自性がある。

C　禊場

導水施設を禊場と考える説は、導水施設を原形として成立した囲形埴輪の前方後円墳における出土位置と、その性格についての議論と連動しながら進んできた。そのうえで、禊の具体相について、下記のふたつの考えが提起されている。

a　古墳へ葬られる死者（被葬者）が、埋葬前にミソギを行った場とする説

b　古墳に被葬者を埋葬した後の次代の王が、古墳から退出するにあたって禊ぎを行った場とする説

このうち、a説は和田晴吾[37]、b説は宮本繁雄[38]が提唱したものである。ともに木樋などを通じて流れてくる水を導水施設内に引き込んでの禊が想定されており、この説では「流水」そのものに意味があり、木樋や槽付き木樋の機能として浄水化は想定されていない。

ただし、「禊」という行為が、果たして導水施設の覆屋内、つまり閉ざされた室内空間で行われるのかというてんに、筆者は若干の躊躇をもっている。

D　殯所

筆者[39]と米田敏幸[40]が提唱した説である。導水施設における木樋と槽付き木樋での上澄み・沈澱・濾過という一連の行為に疑問を呈して「浄水」機能を認めず、遮蔽施設や覆屋といった閉ざされた空間に水を流し、そこで何らかの行為を行ったとの考えのもと、その具体的な行為として、殯所における遺体洗浄を想定した。

E　トイレ（厠・川屋）

纒向遺跡及び南郷大東遺跡の導水施設の下流部から寄生虫卵が発見されたことを受け[41]、導水施設を水洗トイレと考える説である。当然この説では、導水施設における浄水機能を全く認めずに、湧水に排泄物を流すことを想定する。環境考古学の松井章が提起した[42]。

この説に対しては、寄生虫卵が入ったのは導水施設の機能時よりも廃絶後であるとする調査関係者からの強い反論がある[43]。また、導水施設の多くが、生活の場から離れた場所に設けられた事例が多いことも、トイレとみるには不便であり、具合が悪い。

F　産屋

出産のための仮小屋である産屋に、水洗トイレを設置したとする説で、黒崎直により提唱された[44]。前述のように、トイレ説を前提としているため、トイレ説に包含することも可能だが、複雑な施設の仕様や、生活の場から離れた場所にあるという施設の存在形態から、たんなるトイレでなく、トイレを備えた産屋とするところに本説の独自性がある。木樋や槽付き木樋についても、そこに浄水化機能を認めない。

ただし、なぜ産屋に水洗トイレが引き込まれたのかという問いに対して黒崎は、セヤダタラ姫を気に入った三輪のオホモノヌシ命が、姫が大便をする時に丹塗りの矢と化して溝を流れ下り、姫の陰部を突き刺して受胎させたという『古事記』神武段に記された説話を引いて傍証とするにとどまり、しかも丹塗り矢が流れ下った溝を、原文にはない「カワヤの溝」と記す。民俗例でも、水洗便所を備えた産屋は知られておらず、南郷大東遺跡など槽付き木樋が据えられた覆屋内のスペースは狭小で、湿気の多い流水脇に妊婦が籠もるてんでも疑問を感じる。

G　糞尿を撒く祭祀施設

導水施設研究の初期に、導水施設における浄化機能や、神マツリに伴う祭祀施設という考え方を提起した石野博信が、纒向遺跡と南郷大東遺跡の導水施設下流部での生虫卵発見を受けて提起した説である[45]。石野はここで、導水施設が居住地から離れていることや祭祀遺物の出土、それに水洗トイレと考えると規模が大き過ぎるてんを指摘したうえで、日本神話上で、アマテラスを訪れたスサノヲが、大嘗の御殿に糞尿を書き散らしたとする説話を引いて、糞尿を撒き散らす祭祀が行われたと考えた。ただし、その場合、遮蔽施設や覆屋内に据えられた木樋や槽付き木樋の存在と、その機能的意味が宙に浮いてくる。

このことについて、国文学者の山崎かおりは、糞便が肥料として用いられ、神話的には豊饒性をもって語られていることを踏まえ、導水施設は水田をイメージした祭祀施設であり、水田をイメージした水路における農耕儀礼の一環との見解を提出されている[46]。

つまり、導水施設を、水田に引水する水路としてイメージし、そこに豊饒の象徴たる糞尿を撒いたとするのである。しかし、スサノヲが糞尿を撒く行為は、文脈的にも祭祀とは程遠い「天つ罪」として認識されているものであり、覆屋や堅牢な木槽が伴う導水施設の諸施設も水田に分水する水路とはかけ離れた存在感がある。

Ⅵ. 導水施設の機能は浄水が本義か

以上のAからGの諸説のうち、木樋と槽付き木樋の機能を浄水化とするものは、A・Bの２説である。E～Gの３説は、寄生虫卵の出土を重視し、トイレないしは糞尿を撒く祭祀とするので、当然導水施設における浄水化機能とは相容れない。残りの２説、Cの禊場説とEの殯所説も、流水による身体の清めや洗浄を想定する。禊については、祭祀の前段階として行うものであることから、A説やB説との親和性も認められるが、流水に実用的な機能を認めるところはE説と共通する。もちろん、考え方の方向性は異なるものの、Eのトイレ説とFの産屋説も、流水による実用的機能を想定するてんではC・E説と同じ地平にあるともいえる。

問題は、溝や貯水池から引いてきた水を、木樋や槽付き木樋からなる導水施設に、浄水化するという目的や機能が果たして存在したのか、という問いである。

筆者は、かつて導水施設の木樋や槽付き木樋の機能に関して、遮蔽施設内もしくは覆屋内の木槽部は、小規模とはいえ流れがあり、流れのなかで濾過機能を木槽で実現しているとは考えられず、木槽部には濾過機能ではなく流水を一旦受けて溜めるための機能をこそ重視すべきと指摘した。そして、素掘溝ではなく、わざわざ木樋と木槽をしつらえたのは、ある程度の期間導水することを必要としたため、水の安定供給と長期間水を通しても導水部の肩が崩れないようにする堅牢性を簡便に実現するためであったと推定し、貯水池についても、浄水化するための濾過機能よりも木樋への給水を一定に行うための水量調整が第一義であったと指摘した[47]。

この水量調節については、青柳泰介も南郷大東遺跡では調査区外となる貯水池よりも上流側で何らかの水量調節が行われた可能性に言及している[48]。また、纒向遺跡の導水施設における交叉する溝の存在も、余剰の水を排出し、一定量の水を安定して確保するための仕事と評価されている[49]。

導水施設の機能に関する筆者と同様の見解は、杉本宏からも提出されている[50]。杉本説は、導水施設を水利に関わる祭祀体系を具現化した装置のパーツ（一部）と考えるもので、その全体を「木槽樋祭祀システム」と呼称した。「木槽樋祭祀システム」とは、氏の言葉を借りれば「地下水が湧出し流れる様に神を具象化した神観念を前提とした水利に関わる祭祀であり、神と司祭者が互酬関係を木槽樋で取り結ぶ儀式を核として、水源祭祀と農耕祭祀が連結付けられた祭祀システム」と規定されるもので、その限りにおいては、氏の説はA；水に関わる祭祀場説ということになる。

しかし、杉本は、導水施設に引かれる水は、そもそも浄化を必要としない「きれいな水」であり、それが濁るのは降雨による泥水が流入した場合に限られるが、導水施設は流水を受ける以上、泥水を受けながらの沈澱除去などありえようもないと指摘し、導水施設における沈澱・濾過という考え方を根本的に否定した。

導水施設の用途を「木槽樋祭祀システム」とする氏の考え方を筆者は採らないが、木樋・槽付き木樋・貯水池などの一連の施設に浄化機能を認めないことは同意見である。

そもそも、流水をあえて堰やダムなどの施設を用いて一旦止めることは、本来清流であったものが滞水により淀んでいく原因とみるのが一般的な考えである。杉本が指摘したように、泥水の場合は止水すれば土砂の沈澱も多少期待できるが、浄水化するには相当の時間が必要で、流水のなかでは無理である。工事現場では、泥水を沈殿槽に入れてその「上澄み」を排出していくが、多少泥水が薄まるとはいえ、泥水であることは変わらない。砂や礫による「濾過」も、導水施設に通す程度ではとても浄化は期待できない。高温の湧水である温泉では、湧き出してすぐの「足元湧出（＝足元自噴）泉」が最も澄んだ状態にあり、次いで空気に触れずに源泉からパイプを通

して直接浴槽に注がれる温泉が続き、掛け流しであってもタンクに一旦貯め湯する温泉は源泉が劣化すると看做される。

湧水も基本的に同じであり、流れるきれいな水を堰やダム状施設で止め受けることは、水を淀ませて清冽さをなくさせる要因となる。上澄み･濾過という考え方自体、その水が清冽（清水）でない、ということと同義である。さらに加えると、卑近な例だが、堰などで貯水すると、高確率で沢蟹や水生昆虫の棲家ともなりうる。

このように考えると、貯水施設も含めた導水施設における「浄水化」機能とは、完全に観念上の産物であり、もしそこに「浄化」機能がいくらかでも働くとすれば、元の水が降雨や工事による泥水である場合だけとなる。

果たして、このような水が、祭祀に用いる「聖水」や、大嘗祭の原形となるような「祖」に捧げる「御膳つ水」として相応しいのであろうか。

空気に触れることなく地中から湧き出てくる湧き水や、それを湧き出させた泉や井泉、井戸などが祭祀においても重視されたことは、「記紀」や万葉集、風土記などの文献にも多くの事例を認めることができる。地中から絶え間なく清水が湧き上がる井泉のある地が神を迎える場となり、また様々な儀礼執行の場ともなったことは、山御井の脇に諸神を迎え幣帛を奉げたとする天智天皇９年３月の「天智紀」の記事など多くの事例がある。しかし、導水施設の場合、産屋説を提唱した黒崎直が想定したような、複雑かつ相当の読み込みが必要である。

Ⅶ. 導水施設は実用機能

導水施設に「浄水化」の機能が想定できないとなると、それを前提に立論されてきたＡ説の多くや、Ｂ説は根拠を失うこととなる。

特に、Ａ説の水に関わる祭祀場とする場合、これまでも指摘してきたとおり、遮蔽性の強い施設内に流水を引き込み、簡素な建物内での「首長による祭祀」を想定するなど、なぜそこに木樋や槽付き木樋が据えられているのかの意義が明確ではなくなる。浄水化を想定する以外のＡ説には、前述の杉本説のような灌漑へ向けた「水利に関わる祭祀体系を具現化した装置のパーツ」とする考え方があるが、この杉本説も含め、Ａ説で提起されてきた祭祀の具体相は祭祀にかかる「所作儀礼」[51]を行う場としての導水施設である。

所作儀礼そのものは、神宮祭祀の山口祭や木本祭などでマツリに用いる用材を伐り出す際にミニチュア斧を用いて山向物忌（童子）などが木を伐る所作をするなど実際の祭祀にでも実施されるが、そのために大がかりな施設を造作して行うような所作儀礼は確認できず、ミニチュアの斧や鋤など遺物レベルの準備にとどまる[52]。

先に提示した、岐阜県旧宮川村の水利用システムにかかる民俗調査では、水源から引いてきた水（飲用にもなりうるきれいな水）を、溝からトヨ（木樋）で分水させてミズフネ（槽、かつてはクリ材）で受けるもので、そこで行われる基本的な行為は、トヨからミズフネに引き込む部分では飲用水の確保であり、次いでミズフネでは食材や食器などの洗浄と根菜類などの水晒しを行う、優れて実用的な場であった。そして、なかにはミズフネを２槽式とした事例もあり、そこでは上流側の槽でより清水を必要とする洗浄等を、下流側の槽で若干汚れたものの洗浄等を行うように使い分けが行われていたとみられる。この旧宮川村の水利用システムは、古墳時代の導水施設を考えるうえでも非常に示唆に富むものといえよう。

古墳時代の導水施設は、遮蔽施設や覆屋に流水を引き込むなど極めて閉鎖性が高い造作を伴い、「祭祀遺物」の出土や集落から離れた立地に存在するなど、旧宮川村の水利用システムにみるような日常の生活用水を得るために行われたものではない。しかし、木樋から槽付き木樋・木槽などの機能は、「所作儀礼」のような観念的な行為でなく、極めて実用性の高い「洗浄」行為であったことを導く。

残された問題は、わざわざ厳重な閉鎖空間まで準備して、そこで何が洗われたのか、ということに尽きる。

このことについて筆者は、前述のようにいくつかの論拠を示しながら、導水施設を殯所における遺体洗浄のための施設と考えることが、古墳築造から埋葬諸儀礼、埴輪樹立に至るまで古墳時代の死生観全般を極めて整合的に説明できるという認識をもっている。

大化前代の列島に広く殯の習俗が存在したであろうことは倭人伝の記載「始め死するや停喪十余日」[53]を嚆矢に、記紀や万葉集などの記載から窺われ、王族による

殯宮から、殯所（首長層）、喪屋（＝殯屋）のみ（一般層）という階層構成をなしていたと推定される[54]。『日本書紀』用明天皇即位前紀には敏達殯宮には「宮門」があり、厳重に囲繞されていたことが窺えるが[55]、これは導水施設や導水施設形囲形埴輪の遮蔽構造とも照応し[56]、また養老喪葬令殯斂之事の「浴於中霤」の文言は、殯には遺体洗浄が伴うことが示され、これは導水施設の覆屋内に引き込まれた槽付き木樋に照応する[57]と考えている。

Ⅷ. まとめ

纒向遺跡でも発見されている導水施設について、その遺構認定の問題や遺構の存在形態を再確認するとともに、現在多くの論者に受容されている導水施設の木樋・槽付き木樋の機能を、沈澱・濾過を繰り返して浄水を得るためと考えることについて､批判的に再検討を加えた。

その結果、流水のなかでは導水施設の木樋等を用いて浄水を得るという機能はほとんど期待できず、そのように考えることは極めて観念的なものであること、また導水施設内で想定されてきた祭祀的行為についても、所作儀礼を中心とした極めて観念性の高いものであることを指摘した。そのうえで、民俗事例との比較なども踏まえて、導水施設で考えられる機能とは、極めて実用性の高い「洗浄」にあることを改めて提起した。ここで洗浄の対象となるものについては、いくつかの説が提起されているが、筆者自身は殯所における「遺体洗浄」がもっとも整合性の高い仮説と認識している。

現在、導水施設における「浄水化」機能を前提に、いくつかの仮説が提起されているが、筆者の理解ではそれらは立論の論拠に誤りがあり、論成立の根拠を失うものと認識している。以上について、大方のご批判・ご叱正を期すところである。

【註記】

1）萩原儀征 1987『纒向遺跡発掘調査概報』桜井市教育委員会

2）橋本輝彦・村上薫史 1998「纒向遺跡巻野内地区遺構群の特殊性と韓式系土器」『古代学研究』141 pp. 55-59

3）橋本輝彦 2021「纒向遺跡巻野内家ツラ地区における土器様相」『纒向学研究センター研究紀要 纒向学研究』第９号 pp. 57-66 桜井市纒向学研究センター

4）萩原儀征 1996「纒向遺跡」『日本考古学協会 1996 三重大会シンポジウム１ 水辺の祭祀』pp. 22-26 日本考古学協会三重実行委員会

5）谷口徹ほか 1979『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

6）石野博信 1991「総論」『古墳時代の研究』３ pp. 3-26

7）青柳泰介ほか 2004『南郷遺跡群Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所

8）石野博信・関川尚功 1976『纒向』桜井市教育委員会

9）石野博信 1976「纒向大溝の意義」前掲註 8）pp. 501-505

10）丸山俊輔・向山めぐみ・村上由美子 2002「宮川村種蔵、牧戸集落の水利用」『人類史集報 2002』pp. 220-240 東京都立大学人類史調査グループ

11）丸山俊輔・山藤正敏 2001「岐阜県吉城郡宮川村西忍集落の水利用」『人類史集報 2001』pp. 114-154 東京都立大学人類史調査グループ

12）今森光彦 2008『カラー版 里山を歩こう Part2 わき水の里から琵琶湖へ』（岩波ジュニア新書）岩波書店

13）穂積裕昌 2004 a「いわゆる導水施設の性格について―殯所としての可能性の提起―」『古代学研究』166 pp. 1-20 古代学研究会、2004b「水にかかわる祭儀―井泉と導水施設―」寺沢薫編『考古資料大観 10 弥生・古墳時代遺跡・遺構』pp. 155-168 小学館、2011「古墳時代の殯所にかかる予察」松藤和人編『考古学は何を語れるか』pp. 239-250 同志社大学考古学シリーズⅩ、2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣

14）青柳泰介 2003「導水施設考」『古代学研究』160 pp. 15-35 古代学研究会

15）前掲註 13）2004b 文献 p. 159、2012 文献 pp. 171-172

16）林部均ほか 2001「大柳生遺跡群第 12 次（大柳生宮ノ前・大柳生コビロ遺跡）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（2000 年度）』奈良県立橿原考古学研究所

17）石崎善久・黒坪一樹ほか 2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 93 冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

18）伊賀高弘 1991「瓦谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 46 冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

19）辻川哲郎 2001「下鉤遺跡における「導水施設」状遺構について」『紀要』第 14 号 pp. 28-38 財団法人滋賀県文化財保護協会、高野陽子 2010「導水祭祀の原形 近江南部にみる弥生時代の導水遺構」『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』pp. 389-399 『遠古登攀』刊行会

20）青柳泰介 2019「古墳時代の導水施設に使用された槽付き木樋について」『古代学研究』222 pp. 28-35 古代学研究会

21）いくつか文献があるが、下記文献で代表する。笹生衛 2019「「中臣寿詞」の「天つ水」再考―「水の祭儀」論の

再検討―」『國學院雑誌』第 120 巻 11 号　pp. 20-42

22）松田順一郎・中西克宏　2002『神並遺跡第４次、西ノ辻遺跡第 10・16 次発掘調査報告書（遺構編）』財団法人東大阪市文化財協会

23）前掲註５）口絵「９　導水施設」の解説文

24）前掲註６）p. 7

25）石野博信　1999「三～五世紀の導水施設と糞尿」『東アジアの古代文化』100　pp. 110-114　大和書房

26）前掲註 14）

27）坂靖　1996「古墳時代の導水施設と祭祀－南郷大東遺跡の流水祭祀－」『考古学ジャーナル』№. 398　pp. 16-20

28）今尾文昭編　2004『カミによる水のまつり』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

29）滔斎　2001「「水の祭祀場を表した埴輪」についての覚書」『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』pp. 94-110　八尾市教育委員会

30）若狭徹　2007「首長居館と水の祭祀」『古墳時代の水利社会研究』pp. 175-216　学生社

31）辰巳和弘　2001「発掘される水の祭儀場」『古墳の思想―象徴のアルケオロジー―』pp. 15-21　白水社

32）白石太一郎　2012「王と首長の神まつり―古墳時代の祭祀と信仰―」『王と首長の神まつり』（大阪府立近つ飛鳥博物館図録 57）pp. 8-20　大阪府立近つ飛鳥博物館

33）前掲註 27）pp. 18-19 より抜粋

34）前掲註 29）p. 101 及び p. 107 より抜粋

35）前掲註 14）p. 32 より抜粋

36）前掲註 21）

37）和田晴吾　2019「埴輪とは何か―埴輪から古墳を、古墳から埴輪を読みとく―」『埴輪の世界―埴輪から古墳を読みとく―』pp. 1-9　兵庫県立考古博物館

38）宮本繁雄　2009「葺石からみる導水施設と導水施設形埴輪」『古代学研究』184　pp. 58-65　古代学研究会

39）前掲註 13）穂積 2004 a 文献

40）米田敏幸　2012「古墳時代のおくりびとたち」『菟原Ⅱ―森岡秀人さん還暦記念論文集―』PP. 401-436　菟原刊行会

41）金原正明・金原正子　1994「堆積物中の情報の可視化」『可視化情報』Vol. 14　No. 53　pp. 9-14　可視化情報学会

42）いくつかの著作があるが、下記書籍で代表する。松井章 2005『環境考古学への招待―発掘からわかる食・トイレ・戦争―』岩波書店

43）前掲註４）、14）、25）など

44）黒崎直　1999「古墳時代のカワヤとウブヤ―木槽樋の遺構をめぐって」『考古学研究』第 45 巻第４号　pp. 53-69　考古学研究会

45）前掲註 25）

46）山崎かおり　2013「伊須気余理比売の誕生―神武記丹塗矢伝承の背景―」『日本文学』62 巻 2 号 pp. 1-11　日本文学協会

47）前掲註 13）穂積 2004 a 及び 2004 b 文献

48）前掲註 14）p. 16

49）前掲註２）p. 56 など

50）杉本宏　2005「神と豊饒の水―木槽樋遺構について考える―」『龍谷大學考古学論集』Ⅰ　pp. 67-81　龍谷大学考古学論集刊行会

51）所作儀礼については下記文献参照。寺沢知子　1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第四　pp. 347-373　吉川弘文館

52）穂積裕昌　2016「伊勢神宮「御田種蒔下始」の考古学的検討～儀具としての農工具～」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文編―』pp. 463-472　豆谷和之さん追悼事業会

53）石原道博編訳　1951『新訂魏志倭人伝他三篇－中国正史日本伝（１）－』岩波書店

54）穂積裕昌　2021「古墳時代喪葬遺跡再考」『滋賀県立大学考古学研究室論集Ⅰ　考古学研究室開設 25 周年・中井均先生退職記念』pp. 81-90　滋賀県立大学考古学研究室

55）森田克行　2003「今城塚古墳と埴輪祭祀」「東アジアの古代文化」117 号　pp. 57-82　大和書房など

56）前掲註 13）穂積 2004 年 a 文献

57）前掲註 13）穂積 2011 年文献

【図版出典】

図１；前掲註３）文献図２を転載

図２；前掲註 11）文献図５を転載

写真１～４；東京都立大学の山田昌久氏より写真の提供を受けました。記して感謝の意を表します。